姦～霊能三姉妹の怪奇事件簿～

鬼之子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
姦～霊能三姉妹の怪奇事件簿～

【Ｎコード】
Ｎ０２２１Ｒ

【作者名】
鬼之子

【あらすじ】
奇怪な事件の裏側に潜む人間の業。そして狂気染みた殺人。それは時として『人ならぬもの』がそのものの体を蝕んでの所業であった。
そんな『人』では対処出来ない事件を解決するは、ある神社に住まいし三姉妹であった。
彼女ら『人ならぬもの』を罰するものなり。

＊ＨＰで連載している本作をさらに推敲編集したものです。物語は

基本連作短編集。話自体はその話中で終わりますので、どこから読んでも大丈夫です。（多分）ですが、作品全体は続けて読まないとわからないものが多いです。

壱：宵の口　（前書き）

＊この物語はどうせ作り物です。実際の人物・風景・場所等は何ら一切の関係はございません。また、作中差別的な表現が含まれております事を予め（あらかじ）ご了承下さい。＊

壱：宵の口

妙に肌寒い五月の初め。林道を歩いていた、中学生くらいの少女が空を見上げると、ゆっくりと入道雲が南側の位置から、東の方角へと流れていく。

その雲の厚さから、一雨来そうなほどであった。

それに気づいた少女が林道を急ぎ足で抜けようとした、その時だった。

――ピンと糸を弾(はじ)いたような音がするや、その場で跪(ひざまず)き、前のめりになるかのように倒れた。

少女が倒れるよりも先に、ゴロゴロと何かが転がる音を小さく響かせ、次第に道幅の段差に引っかかり止まった。

それが少女の頭部であることを表すかのように、首の切り口から間欠泉のように血が吹き出し、少女の遺体の前には、一真っ赤に染まった血溜まりと、色鮮やかな水の轍(わだち)が出来上がっていた。

少女の変死体が発見されたのは、それからニ、三時間ほど経(た)ってからだった。

発見が遅れたのは、少女が殺されてすぐに雨が降り始めたため、誰も林道を通らなかったからだ。

少女の死体を発見したのは、一人の老人である。ちょうど、犬の散歩中に発見したと、警官に説明する。

現場捜索の最中(さなか)、何人かの警官が林から出て来た。

小一時間ほど捜索していたが、何もないと云った感じに、各々が納得のいかない表情を浮かべながら、首を傾げている。

そんな中、少女の死体を、懸命に見ていた警官が違和感を感じて

いた。

無残なまでに綺麗な切り口は、相当鋭利な刃物で切り落とされたと推測できる。――が、その痕跡が死体以外、強いては切られた首と体の切断箇所以外からは見当たらなかった。

襲われたのならば、少なからずとも抵抗していたはずであり、背後から襲ったのならば、服に土や埃、砂利などが付着していたはずである。

そして抵抗のさい、犯人の皮膚が爪に挟まっていたのなら、それが事件解決の手掛かりになることが多々ある。

だが、それら全てがなかった。少女は、まったく抵抗せずに殺されているのだ。

少女の切り口には皮、無数の血管、骨、骨髄、全てがねじられたかのように切られている。

鋸で切り落とした場合、どこかに引っ掻き部分があるのだが、検死結果には、そのようなものはなかった。

何より、血溜まりの跡が、死体の前にしか残されていない。鋸で切ったのなら、刃に血がつき、どこかに垂れ落ちているはずだからだ。

――警官はなおも首を傾げた。ふと、自分のオカルト知識が頭に過った。

――首なしライダー。

バイクに乗っている最中、悪戯で向かい合った電柱に結び張られたワイヤーに猛スピードのまま引っ掛かり、首が切られ、殺されたドライバーの怨念が、夜な夜な殺された場所で走っているという都市伝説がある。

考えてみれば、この死体の殺され方と類似していたからだ。しかし、だからといってこの考えを上に報告するべきではないだろう。飽くまで都市伝説。噂に過ぎないからだ。

もし、彼が考えている様に、ワイヤーか何かで首が引っ掛けられ、殺されているのなら、その対象、つまり少女の歩くスピードにもよるだろう。

しかし人間の、ましてや中学生ほどの少女が走ったところで、引っ掛かる程度だったはずだ。

それなのに切断されているという事は、どれだけの速さで彼女は走っていたのか？　もしくは自転車で走っていたのか？

その自転車は見つからないどころか、木を一つ一つ調べても、ワイヤーを巻いたような痕跡すら見つかっていなかった。

遅れて、一台のパトカーが林道の中に入って来た。数十米（メートル）ほど離れた場所に停まると、後部座席のドアが開いた。全員がそのパトカーに向かって、敬礼をしている。

「ああ、いいよいいよ。ご苦労だった」

降りて来たのは、麦藁帽子を深々（ふかぶか）と被（かぶ）った一人の男性だった。

見た目からして、四、五十歳をいったところか。

「――で、被害者は？」

初老の警官が、近くにいた若い警官に尋ねた。

「あちらです。阿弥陀（あみだ）警部」

そう言うや、若い警官が阿弥陀警部を案内する。

阿弥陀警部は死体を見るや、手を合わせ、拝んだ。

「で、ガイシャの身元は？」

「近くに学校指定の鞄が落ちてました。その中に生徒手帳が入ってまして、ガイシャの名前は【対馬怜菜（つしまれいな）】中学二年生。家はこの林道を抜けてすぐの住宅地のようですね。殺されてから、まだ間もないみたいですが、先程の夕立で血は流れてしまっているみたいです」

若い警官の報告を聞きながら、阿弥陀警部は少し考え、「つまり、その痕跡も？」と尋ねる。

「その可能性は有り得ますね。ワイヤーか何か首を絞められたにしても、ここまで綺麗に切られる事はまずないでしょう。つまり、被

害者は大きな鋏(はさみ)か何かで切られた……と考えますか？」

途端、阿弥陀警部は、ジッと少女の遺体を見つめている警官に目を遣った。

それはさきほど、奇怪なことを考えていた警官である。

「……それなら、ガイシャは逃げるでしょう。しかし、その様な痕跡どころか、強姦(ごうかん)された形跡(けいせき)もない。ましてや、うしろから襲われれば、死体は仰向(あおむ)けではなく、うつ伏(ぶ)せになって倒れているはずです」

そう言うと、阿弥陀警部は頷いた。

彼自身、これが人間による犯行なのかが疑問だった。途端ポツポツと雨が振り出し、それが次第に強い暴雨となった。

その場にいた全員が、突然の暴雨に慌てだす。

「水に流れましたな？」

阿弥陀警部がそう呟(つぶや)くと、苦虫を噛んだ様な表情を浮かべた。

壱：宵の口　（後書き）

文章訂正しました。指摘ありがとうございます。

弐・稲妻神社

あれから一両日、てんで捜査に進展はなかった。あの林道を通る人はごまんといるのだが、対馬怜菜が通った時には、偶然にも誰もいなかったからだ。

つまり、犯人はその場にいたのか、もしくはワイヤーをどこかに仕込んでいたのか……

ただし、それは人間が犯人として考えればの話だ。

しかし、その痕跡が見つからない以上、隠れて殺すどころか、ワイヤーを木と木の間に張り巡らして殺したとは考え難い。強いては被害者だけを殺す事は天文学的に近い。

対馬怜菜が一人で現場となった林道を通る事はわかっていたとしても、殺害された時間、彼女一人だけが林道から雨が降り出す事で焦り、走り出す事を誰が予想できようか？　たとえ天気予報で雨が降る事を知っていたとしても、いつから降り始めるのかというのは、天気予報士でさえ、ハッキリとした時間を言い当てるのは難しいものである。

その事を考えると、人間が出来ることではないかもしれないという警官が後を絶たず、強いてはオカルト的犯行だと述べる者まで現れる始末だった。

そんな中、阿弥陀警部と若い警官は町外れにある小さな神社に立ち寄っていた。

「大宮くん？　ちょっと御神籤でも引きますか？」

「警部？　遊びに来たんじゃないんですよ？　警部がどうしてもと言うから……」

若い警官――大宮巡査は不服そうにそう言うと、

「まぁまぁ、神社に来たら、お参りと御神籤でしょ？　これは常識

です」
「――誰が決めたんですか？」
「私ですけど？」
そうお道化（どけ）てみせる阿弥陀警部に大宮巡査は溜め息を吐く。

「せいっ！」
怒声にも近い、張りのある声が本堂の方から聞こえてきた。
勢いのあるその声は、遠くにいた二人に戦慄を走らせるほどである。
本堂の中を覗いた阿弥陀警部と大宮巡査は、ほうっと声を出した。
少女の見た目は殺された被害者と然程変わらなかった。
袴を着てはいるが、防具は付けておらず、右手には長刀、左手には小刀を、それぞれ一本ずつ持ち、構えては振り下ろしている。
うしろに束ねた黒髪がまるで時間が止まったかの様に静かに宙に漂っている。
その動きは剣道の稽古をしているというよりかは、むしろ舞に近いものがあった。

それを見ていた大宮巡査が首を傾げた。
「警部、彼女はどうして竹刀を二つも？　普通、反則になるのでは？」
少女の持つ二本の竹刀に疑問を持つや、大宮巡査は阿弥陀警部に訊ねる。
「いや、反則ではないみたいですよ。まぁ、一本でも難しいんですけどね？　彼女、実力だったら、有段者なんですけどね」
阿弥陀警部が含み笑いを浮かべていると……

「そんなところにいらっしゃらなくても、こちらに来て見てくれてもいいんじゃないんですか？　阿弥陀警部」
本堂の方から少女が阿弥陀警部らに声をかけて来た。

「おや？　皐月ちゃん？　今日もまた一段と汗をかいてませんな？」
「遣り始めてまだ2時間ですよ？　ちょうど体が暖まったところなんです。どうですか、一勝負……」
そう言うと、少女……皐月は持っていた長刀の竹刀を阿弥陀警部に放り投げ、自分はそのまま、靴を履かずに足袋のまま境内へと降りた。

「け、警部？」
「大宮くん？　少し離れた方がいいですよ？」
そう云われ、大宮巡査がキョトンとした時だった――――
竹刀同士がぶつかりあう音が境内に響き渡り、激しい攻め合いを繰り返す。両者一歩も譲ろうとしない。
阿弥陀警部が持っているのは平均的な長さ（三尺七寸＝百十二糎）の竹刀であるにも拘らず、皐月は小刀である。傍目から見れば、皐月の方が不利に感じるが、全く引けを取っていない。
「へぇ？　全然衰えてませんね？」
皐月は攻め合いながらも、まるで楽しんでいるような声を出す。
「がははっ！　青二才にまだまだ負けるほど、落ちてませんよ！！」
阿弥陀警部が大きく笑みを浮かべる。
「それじゃ、私も……」
そう言うと、皐月はうしろへと飛び下がり、阿弥陀警部との間合いを大きく広げた。その刹那、まるで彼女が意図するかのように風がやんだ。
3人の周りにただならぬ空気が流れる。阿弥陀警部が一際険しい表情を皐月に向けた。
皐月は左手に持った竹刀を逆手に持ち変え、腰を低く構えた。右手を手前に出し、まるで忍者のように見える。

「閃ッ！！」

皐月が叫んだ時には既に、阿弥陀警部との間合いは縮まっていた。
阿弥陀警部が小さくうめき声を挙げるが、皐月の竹刀は阿弥陀警部の竹刀に当たっていた。
その刹那――――
「はぁあああああああああっ！！」
皐月の鬼気迫るその覇気は、まるでそうなる事を予想していたかのように、受け止めている阿弥陀警部の表情はより一層険しくさせていた。

ふと、大宮巡査は皐月の竹刀に疑問視していた。さっきから右手から左手へ、左手から右手へと交互に持ち変えられている。それどころか、さっきだって、逆手に持っていたはずの竹刀が何時の間にかきちんと持ち変えられている。

「皐月っ！」
途端、社務所の方から女性の声が聞こえてきた。その言葉が合図になったのか、皐月と阿弥陀警部はピタリと動きを止めた。
「や、弥生姉さん？」
皐月はゆっくりと声をかけた女性を見遣った。表情は先程見せた、夜叉の様な鬼気迫る雰囲気は皆無に等しく、まるで叱られている小犬のようだった。
「阿弥陀警部も……　すみません。この子また出鱈目な竹刀の使い方で……　ほらっ！　竹刀は一本を両手で持つものだって言われたでしょうが」
「がははっ！　いやいや！　弥生さん？　皐月さんの物怖じしない姿勢は、優位に値しますからね？」
「そうでしょうか？　私から見たら、ただ振り回しているとしか？」
女性――弥生は、見た目からして高校生くらいか、それも3年生くらいだろう。丁度大人の女性というとそれまでだが、どこか少女の様な雰囲気もあった。

着ている服が巫女装束で、持っているものは――――矢である。

「――警部、彼女は？」

大宮巡査が阿弥陀警部に耳打ちをするように訊ねた。

「ああ、彼女はこの稲妻（いなずま）神社の長女ですよ。名前は弥生さん。で、私に勝負を挑んで来たのはその妹さんで、次女の皐月さん」

阿弥陀警部がそう説明し、大宮巡査は二人を見た。弥生と皐月は軽く会釈する。

「――ところで？　弥生さんの持っているあの矢は？」

「破魔矢（はまや）ですよ？　よく正月に買いに行くでしょ？」

そう言われたが、今の今までそんなものを買った記憶のない大宮巡査は首を傾げた。

「まぁたっ！　足袋の侭（まま）で降りたみたいね？　裏が泥塗（どろまみ）れになるのわかってるの？　それで足袋だけ別に洗わなきゃいけないから水道代が……」

愚痴々々（ぐちぐち）と弥生から小言を言われ、皐月はその場に正座させられていた。

「弥生さん？　神主は御在宅かな？」

阿弥陀警部が尋ねると、弥生は小さく頷く。そして、少し嫌そうな表情を浮かべ、

「――何か事件でも？」

「まぁ、ちょっと……」

歯切れの悪い返答に、弥生と皐月は互いを見遣った。

弥生が神主を呼びに行っている間、皐月に本道へと案内された阿弥陀警部と大宮巡査は、丁度中央のあたりに座った。

大宮巡査は物珍しいのか、キョロキョロと本堂の中を見渡している。

ふと天井を見上げると、黄金色（こがねいろ）に輝く稲穂が描かれていた。

「警部？　不思議に思っていたのですが、どうしてここは【稲妻神社】っていうんですか？」
「稲妻はその言葉通り、『稲の妻』を意味しています。古く稲妻によって、稲が実ると信じられていたからだそうです」
そう聞くと、再び大宮巡査は天井を仰いだ。
「この【稲妻神社】は稲荷神社でもあって、五穀の神【倉稲魂神】を祭っているんですよ」
稲荷という言葉を聞くや、大宮巡査はお腹を鳴らした。恐らく、稲荷寿司を連想したのだろう。
「ははははっ。丁度夕餉前ですからな？　どうですかな警部」
本堂へと入って来た老人が、酒を飲む仕草を見せる。
「おっ、いいですな？　話がてら」
「け、警部？」
大笑いしながら本堂を後にする二人に、呆れながらも、大宮巡査は後を追った。

参・三姉妹

本堂の裏側に庭園が見える。そこからほんの数米先に母屋があり、そこが神主と姉妹が暮らしている一軒家となっている。

阿弥陀警部と大宮巡査は、皐月と神主に案内され、部屋の障子襖を開けるや、美味しそうな匂いが漂って来た。

和室には長方形の卓袱台があり、その上には色取々の野菜や“肉”などで作られた料理が配列されていた。

――肉？と大宮巡査は首を傾げる。確か、神主とかは肉を食べてはいけないんじゃ？とそれを近くにいた皐月に訊いてみると、

「あっ！　それお寺の住職だけの話。別に神社は仏様を扱ってるんじゃなくて、あくまで神様を祭ってるだけだから……　それに爺様は大の酒豪で、阿弥陀警部と飲み比べするくらいだから」

そう云うと、皐月は視線を阿弥陀警部と神主に向けた。何時の間にはじめたのだろうか、既に一升瓶（約1．8立）を軽々と飲み終えている。

「がはは！　今日はまた度数が低いですな？　これくらいじゃいくら飲んでも酔いませんよっ！」

「弥生っ！　まだ酒倉においてあったじゃろうっ！」

厨房から酒の肴を持って来た弥生は、騒ぎ立てる二人に呆れた顔で見やった。

「――それ、今度御神酒に使おうと思ってた清酒なんだけど？」

「構わん構わんっ！　少しアルコールを入れた水で十分じゃ！　どうせ三三九度とか！　ちびちびとしか飲まんじゃろうからなぁっ！」

「そうだっ！　そうだっ！　酒は一気に飲むのが一番うまいっ！　ほれっ！　神主も一気に……」

阿弥陀警部が酒をコップに注ぎ、神主に薦めた。

「あ、阿弥陀警部！　それって強要罪じゃなかったですかね？」

「大宮くん？　これは同意の上で遣ってるんですよ！」
ニヤッと不敵な笑みを浮かべる阿弥陀警部が大宮巡査を一瞥した。
「はぁ……」
呆れ返った大宮巡査の足元をスッと小さな影が横切った。
「あら？　葉月、おかえり」
「皐月お姉様……　この人は？」
そう言うや、ランドセルを背負った小さな少女は、気怠そうに大宮巡査を指差した。
「ああ、この人は、阿弥陀警部が連れて来た警察の人……」
そう言いながらも、皐月も大宮巡査を翼々と見つめた。

「あ、紹介がまだでしたね？　彼は大宮忠治巡査。まぁ今日皆さんに訊こうと思っている事を、私と一緒に捜査してくれている青年です」
阿弥陀警部がそう言うや、大宮巡査はさっきまで明るかった場の空気が途端に静まるのを、肌で感じた。
「まぁ、話は食事の最中にでも……　ささっ！　警部も巡査殿も……」
神主にそう言われ、大宮巡査は皐月の隣に坐った。

「――――で、私達に訊きたい事とは？」
神主が酒を飲みながら、阿弥陀警部と大宮巡査を交互に見遣った。
「実は先日、近くの林道で、皐月さんと同じくらいの少女が、死体となって発見されました。その殺し方が――　どうも人間がした事とは考え難いのです」
そう言うや、阿弥陀警部は懐から一枚の写真を神主の前に差し出した。
その写真は有ろう事か、少女の首が断裁されたものだった。
「け、警部っ！？」
大宮巡査が小さく腰を上げると、

「ああ、大丈夫！　たぶん、皆さんはそれ以上のものを見てるでしょうから」
阿弥陀警部の言葉に大宮巡査は首を傾げた。
「葉月、何か感じるか？」
先程から葉月がジッと写真を凝視していた。神主が葉月に写真を渡そうとすると、
「な、こんな小さな子供に！　そんな残酷な写真を！」
大宮巡査が止めようとするが、既に写真は葉月の手元にある。大宮巡査は「何時の間に？」と驚いた表情で葉月を見遣った。
葉月は写真を卓袱台の上に起き、手を翳すや、何かを探る様に写真を摩りはじめた。
「……」
「何かわかった？」
隣に座っていた弥生がそう訊くと――
「――――音……」という、葉月の小さな呟きに、全員が息を飲んだ。
「――――ピンって音が聞こえた。……それから、首が落ちて……」
「つまり、鋏じゃないってことですか？」
そう阿弥陀警部が問い掛けると、葉月は答えるように頷いた。
「ピンって――　糸や弦を弾いたような音が聞こえたの？」
弥生がそう訊くと、葉月は少し考えながら頷いた。
「音が聞こえて、首が落ちた――　それから血が一杯吹き出していて……　でも、すぐに雨が降ってきて……」
「――――私達が現場に駆けつけた時は、既に死後ニ、三時間は経っていたようです」
「それくらいなら、すでに雨で血は流れてしまってますな？」
「――――それって、何時くらいですか？」
「通報を受けたのは、夕方の6時くらいでしたな」
「それじゃ、逆算して、被害者が下校していたのは午後2時から3

時前後の間……　でも、その時間だったら、学校はまだやってるはずじゃ……　皐月、ここ最近、学校が早く終わるって事はあった？」
「テスト勉強期間だったら、部活が休みになるから、早めに帰れるけど？」
「葉月さん？　被害者が殺された後、すぐに雨が降り出したんですね？　大宮くん、発見時に周りに水溜まりが出来てましたね？」
　阿弥陀警部にそう言われ、大宮巡査は頷いた。

　途端、葉月が仰向けになって、倒れた。
「大丈夫、葉月？」
「大丈夫。でも、その死体以外にも誰かいた」
　それを聞いた大宮巡査は写真を手に取り、凝視したが、写っているのは被害者だけで、他は何も写っていない。
「け、警部？　彼女は何を……」
　大宮巡査は顔を引き攣ったまま、阿弥陀警部に問い掛けた。
「――神主、あの林道には何が？」
「別に何もないよ？　あそこが昔火葬場で、死体をそのまま野焼きにしていた事以外は……」
　それを聞くや、大宮巡査は吐き気を催した。サラリと凄い事を言い放った神主の神経はどうかしている。と思ったのと、自分が勝手に想像したのが悪いのだが。

「でも爺様？　だからといって、その野焼きされた人達がこれをしたとは考え難いのですが？　第一、ピアノ線の様な固い糸でなければ骨を切る事も侭ならないはず……」
「確かにわしの言った事はもう６０年以上前の話じゃし、その時に彼らにピアノ線を知る事は侭ならないじゃろうな？　第一、ピアノなんぞ敵対国の物じゃし……」
　若い大宮巡査は首を傾げた。「――敵対国？」
「ピアノは元を辿れば、イタリアの楽器じゃからな。他にも禁止さ

れた野球も言う間でもなくアメリカの競技じゃろ？」
「でも、それなら琴の糸とか使わない？」
皐月がそう言うや、神主は首を横に振った。
「林道の長さは人が横に並んで五、六人通れる幅じゃったから……最低でも、２０メートルはあるじゃろうな？　そんな長い糸を作るくらいなら、軍事に当ててたじゃろう。――警部？　木にそのような痕跡は？」
神主がそう訊くが、阿弥陀警部は首を横に振った。
「ちょ、ちょっと待って下さい？　それじゃ……　勝手に首が落ちたって事ですか？」
大宮巡査が誰彼構わずに尋ねる。
「……」
「弥生姉さん？」
弥生が考え込んでいるのに気付いた皐月が声をかける。
「あの、大宮巡査でしたっけ？　その写真には頭が写ってませんでしたが、首はありましたか？」
「えっ？　あ、頭はありましたよ？　首ですか？」
答えようとした矢先、大宮巡査の首元を阿弥陀警部が触れた。
「頭と胴を繋いでいるのが首ですよ？」
それを聞くや、大宮巡査が……
「あっ！　確か、鑑識の話だと首だけがなくなっていると報告が！」
「どうしてそういう大事な事を！」
「いやっ！　だって！　首がなくなっているって事は！　どう考えても“二回切断された”って事になるんじゃないんですか？」
「葉月、音は一回だけだったの？」
弥生の膝を枕にし、天井を見上げている葉月は、答えるように小さく頷いた。
「突然、首がなくなった死体。強いては殺された時に首だけを切られた……」
神主が考え込んだ時だった。

「首なし？」

皐月がそう呟くと、大宮巡査は「首なし？　首なしライダーの事ですか？」と尋ねた。

「巡査の言っている首なしライダーは、頭がないやつでしょ？　私の言っている首なしは、首だけがないの」

そう言われ、大宮巡査は首を捻る。

「それから林道で被害はこれだけですか？」

「そうです。あれから皆さんには廻り道をしてもらってます。まぁ、警察も隅無く木の一つ一つを調べてますからね」

「多分……　見つからないと思います。皐月の考えた通りなら、音は恐らく風の音。殺された被害者は知らない内に首だけを盗まれた」

弥生が静かに述べた。

「く、首だけを？」

「爺様？　今夜あたり行きたいんだけど？」

皐月がそう神主に願い出ると「良いですかな？　阿弥陀警部？」

先程の酔いかけた老人ではなく、険しい表情を浮かべた神主が訊ねるや、阿弥陀警部はコクリと小さく頷いた。

「け、警部！　仮にもまだ……」

「大丈夫ですよ。で、皐月さん？　何か考えでも？」

「別に考えはないですけど？　でも、葉月の言っているもう一人っていうのが気になって……　野焼きにされた人達がした事なら、一人じゃなく、一杯っていうだろうし……　それに、もうお払いしてあそこには霊はいないはず」

「れ、霊？　それじゃ、これは霊がした事だって言うんですか？　馬鹿々しい！　それが本当だったらどうやって捕まえるんですか？　これは人間がした事ですよ？　人間がしないで！　誰が人間を殺せるんですか？」

大宮巡査の言葉は尤もであるが、誰一人反論しなかった。

「皐月？　霊の見えない貴女がどうやって退治する訳？」
「見えなくても……　感じる事は出来るから……　それに、まだ妖がしたとは限らないでしょ？」
二人の会話に大宮巡査はてんでついていけていない。それどころか、世迷言（よまいごと）をと考える始末だった。
しかし、皐月と弥生のまるで何かに気付いたような、愁（うれ）いのある表情は神主の柏手（かしわて）一つで普段の表情へと変わっていた。

参・三姉妹　（後書き）

【追記：１１／０５／２３】文章直しました。
一応補足として、「琴の弦でもいいんじゃ？」と皐月が訊ねていますが、弦の長さは切られていない場合、百八十糎（センチ）ほどしかないようです。また、弦は長いと邪魔になりますから必然的に切られますので、それ以上に短くなります。

肆・二つ目の死体

丁度、阿弥陀警部と大宮巡査が稲妻神社で談話していた頃だった。
「よしっ！　今日はこれで引き上げるぞ！　また明日、近辺を捜索だ」
『鑑識』と書かれた腕章を着けた男がそう言うと、周りにいた数名が了解の声を挙げる。
「湖西主任？　一日中調べて、ワイヤー痕なんかありませんでしたが？」
「しかし、鋏で殺すにしては相当な腕力がいりますからな？　それくらいの事が出来る大柄な男は目撃されてないでしょ？」
湖西鑑識長がそう言うや、訊ねられた若い鑑識員が頷いた。
「それに切った時に出る返り血を浴びたまま、徘徊する訳でもあるまいに……」
「ところで、首がないという報告がありましたけど？」
「あ、はい！　被害者の顎の骨と胴体の付根部分に至って、一切合財なかったそうです」
「2度切った訳ですかね？」
「否、それだったら、被害者の服に血がこびりついているはずですけど？　発見当時、被害者の服は雨で濡れていて、血の痕は見つからなかったんですよね？」
「殺されたときはまだ、血が出ていなかったと言う事でしょうか？」
「うーん、そう考えるのが妥当でしょうな？　胴体が倒れて来た時に吹き出した――――と言う事もあるでしょうから……」
「そんな事が有り得るんですか？」
「胴体の傷口に何かが塞がっていれば、そうなるでしょうけど……そんな形跡はなかったですし……　あーっ！　もう！　頭の中が混乱して来ましたよ！」
湖西鑑識長が頭をもみくちゃにしている時だった。

突然、車に取り付けられた無線から音が聞こえて来た。
『――――こちら、本部っ！！　――――こちら、本部っ！！　湖西鑑識長、湖西鑑識長』
「こちら！　鑑識班っ！　どうぞ！」
『先程、そちらから5キロ程離れた川で、変死体を発見したとの通報が』
「こ、湖西主任！」
「あーっ！　聞こえてますよ？　それで？　被害者の身元は？」
『通報があったのは先程ですから、まだ……　ただ、一連の殺人と関係性がある可能性が……』
「わかりました。皆さん！　聞いての通り、このままその現場にいきます！」
湖西鑑識長がそう言うや、全員が急いで後片付けをし、車に乗り込んだ。

阿弥陀警部に連絡が入ったのも、丁度同じくらいだった。
「さぁ！　パァーッといきましょうか？　パァーッと」
神主が阿弥陀警部のコップにビールを注ぎ入れている。
「じっ！　爺様？　警部はまだ仕事中じゃ？」
弥生が止めようとするが、「ああっ！　良いんですよ！　もう5時も回ってますしね？」
神主は元より、阿弥陀警部も既に出来上がっている。
葉月は先程の霊視の疲れが出ているのか、ジュースを少し口にしたくらいで、今は部屋の隅っこで寝息を立てていた。

そんな中、大宮巡査はジッと三姉妹をを見ていた。
「どうかしましたか？」
皐月がそう尋ねると、「否、どうもさっきの事が気になってしまって……」

「首なしの事ですか？」
「それもあるんだけど、君達が一体何者なのかっていう事だ」
「別に、普通だと思いますよ？　一つを除けば……」
弥生が自分のコップにお茶を注ぎながら言った。
「元々、私達姉妹は、生まれつき霊や妖(あやかし)が見えるだけです。先程葉月がしたのは霊視。所謂(いわゆる)心霊検査みたいなやつですね。心霊写真は本来、現像中に起きる事故が殆どですが、極偶(ごくまれ)に力の強い霊が写っている場合があるんです。昔、写真は人を閉じ込めると言われていましたから」
「あっ！　聞いた事があります。確か、三人で撮った時、真ん中の人が消えているとかってやつですかね？」
大宮巡査がそう言うと弥生は首を傾げながら、
「少し違うと思いますが、まぁ、写真が日本に伝来して来た江戸時代末期、殆どの人達は、写真を忌み嫌っていたそうです。自分の姿が紙に写し出されている訳ですから……」
弥生の説明は写真のみならず、ラジオやテレビの説明としても値(あたい)する。
ラジオや電話なら誰もいないのに人の声が聞こえ、テレビなら箱の中に人がいることをどう説明出来るかである。これらは電気信号によるものという説明が出来る。
「自分の魂を吸い込まれたんじゃないかって勘違いしていた。まぁ、有り得ないことじゃないんだけど……　それが本当の心霊写真の謂(いわ)れとされています」
「つまり、葉月ちゃんはその霊を見たと？」
「見たっていうより、声を聞いたって感じですね？　自分で死ぬとわかっている霊は何も言わないらしいけど……」
大宮巡査は首を傾げながら、続きを聞いていた。
「思いの強い霊は成仏されない以上、その場に居座り続けます。一般的に云われている地縛霊(じばくれい)とかがそうですね」
「それじゃ、糸を弾くような音が聞こえたのは？」

「恐らく殺された少女が最後に聞いた音かと？」
「しかし、あそこに糸は張られていませんでしたよ？」
大宮巡査がそう言った時だった。突然彼の携帯が鳴った。

「はいっ！　大宮ですが？　はい……　えっ！」
大宮巡査の驚いた声に、全員の動きが止まった。
「場所は？　はいっ！　ここからなら近くに……」
「大宮くん、事件ですか？」
阿弥陀警部はお尻を滑らせながら、大宮巡査の横へと移動する。
「はいっ！　川で変死体が発見されたみたいです。ただ、今度は頭も……」
大宮巡査がそう言うや、「警部っ！　先に殺された人と今回殺された人の共通点は！」
神主がそう訊ねるが、阿弥陀警部は首を横に振った。
「否、それはまだわかりませんが……」
「すみません？　被害者の身元は？」
『被害者は【大石誠二】　中学三年生。警部達が捜査している被害者と同じ学校に通っています』
「殺された人間が同じ学校に？」
「でも、それだけじゃ共通点は――」
「もしや？　共通点じゃなくて……」
皐月がそう云うや、阿弥陀警部も同じ考えを述べた。
「最初に殺された遺体には首はなかった。でも、今報告された遺体には頭がなかった」
「身元がわかるものがあるかないかということですね？　確かに、最初殺された、対馬怜菜の遺体には首がなかった。葉月さんの話だと、音は一度だけ。つまり、最初の音とは違う何か――」
二人の会話に大宮巡査はついていけなくなっていた。
「でも、それがどうふたりに共通点がないって言うんですか？」
「仮に犯人が被害者の首を隠すために切ったのなら、二回も切りま

すか？」

皐月にそう云われ、大宮巡査は目を大きく開いた。――首を切るという行為自体は、一回でも十分だからである。

「少女が殺されるようなことは？」

そう訊ねられると、阿弥陀警部は首を横に振った。

「いや、特に恨みを買っていたわけではないようですよ」

「何か事件に巻き込まれるとか……」

そう訊くが、答えるように阿弥陀警部は再び首を横に振る。

「そういえば、あの近くで強盗がありませんでした？」

「それを被害者が目撃していた――と？　また突拍子もない話ですね」

それで殺されるどころか、現実では強盗事件は速やかに行うものであり、ドラマやアニメ等々の描写で見られる、豪快なものではないと阿弥陀警部は鼻で笑った。

「だいたい、強盗をする人間が、顔を隠さないとは思えませんし、見られたとしても、殺すとまではいかないでしょ？　頭隠してなんとやらじゃないんですから」

そう云われ、大宮巡査は落ち込んだ。

「さてと――、ちょっと部屋で休んでるわ」

そう云うや、皐月は立ち上がり、居間を出ていった。

それを見ていた大宮巡査の携帯から、声が漏れていたのに気づいた弥生が、応対しないのかと尋ねる。

「あ、阿弥陀警部、早く合流しろと言ってます」

そう云われ、阿弥陀警部は少しばかり、顔を歪めると、「神主。私たちはこれで失礼します」

阿弥陀警部と大宮巡査は神主に頭を下げ、神社を出るや、急ぎ現場へと車を走らせた。

「皐月のやつ……出ていったみたいじゃな？」
「何か気になることでもあるんじゃない？」
拓蔵の言葉に、弥生は答えながら、阿弥陀警部と大宮巡査が飲んでいたコップを片付けていた。

肆・二つ目の死体（後書き）

【追記：１１／０５／２３】
文章直ししました。

伍・霊道（前書き）

【聾（つんぼ）】耳が聞こえないこと。また、その人。よく唖（おし）（口がしゃべれない人）と一緒の意味と取られそうですが、聾の人は多少なりとも喋れますし、唖の人は音に反応します。

伍・霊道

丁度、西の方角から月が見えて来た時だった。病院から悲鳴のような声が聞こえたが、周りはしんとしている。

それもそのはずで、その病院は殆ど機能しておらず、第一、声がする事自体が有り得ない事だった。

それを知っている皐月は静かに何かを待っていた。

「逢魔刻には、もう遅いんじゃないの？」

林道の方に向かって、そう告げると、周りから「ピンッ」という糸を弾くような音が聞こえた。

――これが、少女の聞いた音？と思った刹那、皐月は手に持っていた竹刀を、自分の顔付近に上げた途端、キリキリと糸で擦る音が耳元でこだましだす。

「これを使って、少女と男性を殺した……　違う？」

皐月はまるでこうなる事を予想していたように、余裕ある声を挙げた。

「一瞬だからね？　それに交差していれば、簡単に鋏を使わないで斬り殺す事も出来る」

バナナの皮を向くと既に輪切りされているという手品がある。

あれは皮の角の部分から糸をつけた針を入れ、隣の角から針を出し、また同じところから針を入れて隣の角へ通していく。

これを繰り返してバナナのまわりを一周したところで糸の両端を持って引き抜くと、中のバナナが輪切りになっているという手品である。

つまり、物理的に両方の力が働き、絞める事によって力が集中される。そうすれば、例え人間の骨でも、ワイヤーのような固いものなら簡単に切れる可能性があるという事だ。

「木にワイヤーの痕が見つからなかったのは、もとから使ってなん

かいなかったから！　被害者が来る時間帯を計算して、大きな輪っかを林道の中心で作る。そして、その上に被害者が来るのを見計らって、一気にワイヤーを両方から引っ張る。そうすれば、骨諸共（もろとも）、首を切り落とす事が出来る。多分、首が落ちてしまったのは、ワイヤーを両方とも振り上げた時に、丁度首の位置に来たからでしょうね？」

皐月がそう言うと、一層締め付ける力が強くなっていく。

「少女と同様、私も絞め殺そうっていうの？　でも、お生憎様（あいにくさま）？」

皐月はそう言うや、クスリと嗤（わら）った。その刹那、竹刀を降り下ろすと、両方から人が倒れる音が聞こえた。――月に照らされた細いワイヤーがゆらりと宙に漂っている。

「同じ方法で殺すって事は、糸は結局は一本だけ。切ってしまえば、輪っかにはならなくなる！」

皐月が視線を暗闇に向けると、「さぁ？　相手が人間じゃなかったら、どうしようかと思ったけど？」

ゆっくりと犯人の方へと近づくと、

「もう一人を忘れてもらっちゃ、困るぜ？」

その声が発せられた刹那だった。二人分の男性のうめき声が挙がった。

「人間相手じゃ本気出す気もしないって事……　今日の午後3時前後……　近くの川で男性を同じ方法で殺さなかった？」

皐月は竹刀を向けながら、倒れている二人の男に問い質す。

「いや！　俺達が殺したのは女だけだ！　それに、俺達はこの病院から一歩も出てないんだぜ？」

「一歩も？」

「ああっ！　一歩もだ！　警察が林道から出て行ってくれないからな？　それに、此処は余り人が来ようとしていなかったからな！」

皐月は男二人の話を聞きながら、

「ふーんっ。まぁ、別にどこに隠れていようがいまいがいいんだけどね？　それじゃ、本当にここから一歩も出ていなかったって事？」
『ああっ！』と二人の男がそう告げた。

「兄貴ぃ？　だから止めようって言ったんですよ？」
「はぁ？　仕様がねぇだろ？　あの小娘に俺達が宝石店に強盗に入ったのを目撃されたんだからよ？」
「――――それが殺人の動機？」
「まぁな？　しかし、完璧な俺様のトリックをいとも簡単に解いちまうとはな？」
少し大柄の男が声を挙げて笑うと、
「糸だけにね？」
小太りな男がそうボケると、大柄の男が「るっさい！」と声を荒げながら、小太りの男を小突いた。
皐月は二人の会話に、若干呆れながら、「それじゃ、私は川の方に行くから……」とその場を立ち去ろうとする。
「おいっ！　俺達を見逃すのか？」
「――――別に見逃さないわよ？」
その言葉に二人の男は首を傾げた。
「でもよ？　そんじゃ、誰が俺達を？　嬢ちゃんじゃなけりゃ、一体？」
大柄の男がそう訊くと、病院の方から小さな悲鳴が聞こえた。

「あ、兄貴？」
小太りの男が身震いを起こす。
「お、おい？　あああああっ！　あんたっ！　何かやばいんじゃないか？　さっさと警察を呼んだ方が？」
動揺している二人組の男に対して、皐月は妙にあっけらかんとしている。
「――――呼んだら、自分達も捕まるわよ？」

「か、かかかっ！　かまわねぇ！」
「そう？」
そう言うや、皐月は二人を見捨てるように、川の方へと歩き出した。
「おっ！　おいっ！　どこに行くんだよ？」
「どこって？　川の方……　って、あんたたち聾（つんぼ）とか、耳が悪いわけじゃないんだから、さっきと同じ事訊かないでよ？」
「いや、それよりも！　病院の方に！」
「だって、あそこに人なんて入れないし……」
「で、でもよ！　現に今も悲鳴が――――」
大柄の男が言葉を止めた。

「ここって確か……」
大柄の男が何かに気付き、その場にへたりこんだ。
「覚悟もなしに心霊スポットに入るとね？　怒った霊に取り憑かれ易くなるのよ？」
皐月は振り向かずに小さくそう告げた。――病院の敷地から出ると、うしろから二人組の悲鳴が聞こえた。

言わずもかな、あの病院は現在使われておらず、使われている病院は別の場所に移されている。昔この病院で死んだ人の霊がそこに住み着いている事を皐月は知っていたからだ。
霊感の強い彼女が殺される思いをここでしたのは、恐らくその霊による仕業だろうが、彼女の守護神である大黒天がそれを鎮めた。
ただし、その大黒天は【田の神】でなければ【厨（くりや）の神】でもないが……

――――数分後、皐月の連絡により、二人組は身柄を確保された。
その際、大柄の男は譫言（うわごと）のように「いたいよぉっ！　いたいよぉっ！　いたいよぉっ！」と、発していたが、外傷と思われる場所は

何処にもなかった。

伍・霊道（後書き）

【追記；１１／０５／２３】

少し文章を直しました。

うめき声『呻き声』になるのですが、平仮名なのは変換ミス（読み間違え）によるものですが（ー―ー；）　平仮名のままにしたほうがいいかなと思いそのままにしました。

また、皐月が男二人に対して『聾（つんぼ）』と云っていますが、それに対してはそのままにしています。

陸・大黒天（前書き）

【乾（いぬい）】十二支による方位で示した場合の北西を意味する。

陸・大黒天

「どう、姉さん。何か感じる？」
川に入っている皐月が、川岸でただ静かに座っている弥生に声を掛けた。しかし、何か集中している弥生は、反応しなかった。
「け、警部？　彼女達は何を？」
周りには阿弥陀警部と大宮巡査、その他の警官諸々が、皐月と弥生をただただ見ているだけだ。
「まぁ、見てればわかりますよ」
阿弥陀警部があっけらかんと言う。いや、わからないから大宮巡査は訊いたのだが――
途端、水飛沫が一線を牽くように皐月へと向かっていく。周りの警察官（一人を除いて）は何が起きたのかまるでわかっていない。
刹那、高々と飛沫が上がり、真っ白なカーテンとかした。

「さっ！」
大宮巡査が駆け寄ろうとしたさい、弥生を一瞥した。こんな状況でも、何かを呟いている。
「彼女達の邪魔をしない方がいいですよ？」
阿弥陀警部がそう大宮巡査に言った瞬間、先ほどよりも高々と上がった水飛沫が、自分達に掛かっていた。
「皐月！　乾の方角！」
さっきまで静かだった弥生が俯いたままそう叫んだ刹那、大宮巡査の頬を何かが掠り、彼は頬が熱くなっていくのを感じた。
そっと頬を手で触れると、ツッと痛みが走った。まるで剃刀で切ったかのような痕が出来、そこから血が垂れてきている。

それは周りの警官たちも同様だった。
「あー、もう！　君達！　ここは彼女達に任せていいですから！

私達は早く此処から立ち去りますよ！」

それが合図になったのかどうかは定かではないが、殆どの警察官が川から一目散に離れていった。

ただ一人、大宮巡査だけがその場に立っていた。

それを見逃す訳がないと言わんばかりに、大宮巡査の目の前で旋風が起きた。

砂埃が目に入り、大宮巡査は眸を瞑った。

――――自分は死んだのか？　だが、先刻傷を付けられた意外、何も痛みがなかった。

大宮巡査はゆっくりと目を開くと……

「――――ったく？　阿弥陀警部と同じ事しないでくれません？」

眼前には皐月が竹刀を十字にし、何かを止めている。

「ここは警部に言われた通り！　私達に任せたほうが得策なんですよ？」

「し、しかし！　市民の平和を守るのが私達警察の役目！　君達を守るのも……」

大宮巡査がそう啖呵を切ると、皐月はクスリと笑った。

「それじゃ、そこで大人しくしていてください。――死にたくなかったら！」

そう言うや否や、皐月は組み合っていた竹刀を弾いた。途端、向こう側の雑木林で何かがぶつかる音が聞こえた。

「吾神殿に祭られし大黒の業よ！　今ばかり我に剛の許しを！」

皐月がそう天に叫ぶと……　両手に持っていた二本の竹刀が次第に刀へと変わっていく。

――――はて？と大宮巡査が首を傾げたのも無理はない。

普通だったら、大黒天と聞いて、思い浮かぶ武器、もとい、道具といえば小槌だろう。

しかし、皐月が両手に持っているのはどう見ても刀である。

実は大黒天、もとい七福神は、日本の神ではない。実際日本の神なのは恵比寿だけであり、ようは寄せ集めである。

大黒天・毘沙門天・弁天は印度（インド）の神。布袋・福禄寿・寿老人は中国の神である。さらに言えば、優しいイメージの福の神とは到底考えられない力を持っている。

印度で恐れられていたヒンドゥー教三神の一つ破壊神（シヴァ）の別名、摩訶迦羅（マハーカーラ）こそ、他ならぬ大黒である。その力は破壊神という名の如く、凄まじい戦闘鬼神といわれている。

さらに云うと、毘沙門の新の姿である多聞天（ヴァイシュラヴァナ）、弁天の新の姿であるサラスヴァディーは元は一つの神と言われている。

「閃ッ！！」

横一文字に切り放った刀の先に砂煙とその間に水飛沫が起きた。

再度、向こう側の雑木林から、何かがぶつかる音が聞こえたかと思えば、皐月は韋駄天（いだてん）の如き速さで、そちらへと駆け出した。

この常識外れな状況に、大宮巡査は困惑していた。むしろ、夢を見ているのか？と思ってしまうが、己の頬に切り刻まれた痕の痛みが現実である事を物語っていた。

途端、皐月が何かから弾き飛ばされるのを見た。

「――――皐月ちゃん？」

「くっ！」

皐月は翻筋斗（もんどりう）打ちながら体勢を整えようとした刹那、それを見計らったように、旋風（つむじかぜ）が皐月を襲った。

体勢を崩された皐月は、背中から木にぶつかり、ズルズルと凭（もた）れ崩れた。よく見ると、右腕が見るも無残に切り刻まれている。

「くぅきゃはははははっ！」

何所からともなく、気味の悪い嗤い声が聞こえてくる。
「首無し？」
大宮巡査がそう呟くが
「少し違いますね？　首無しと言うのは、体と頭があっても首がない妖（あやかし）。でも、今目の前にいるのは……」
弥生がそう言った時だった。
周りが真っ暗になり、薄らと青白い光が形をなしていく。それが徐々に人の顔へと変貌していった。

それを見るや、大宮巡査は腰を抜かした。
「そんな？　あれは殺された……」
阿弥陀警部がそう叫んだ。
妖（あやかし）の正体は他でもない。殺された男性【大石誠二】そのものだったのだ。
阿弥陀警部と大宮巡査は被害者の資料を見ていた為、すぐに正体がわかった。
「しかし？　どうして殺された【大石誠二】がこんな姿に？」
「川で発見された死体は、本当に【大石誠二】本人だったんですか？」
弥生がそう訊くと、大宮巡査は首を傾げた。
「確かに【大石誠二】本人でしたよ？　その証拠に、学校の制服だったし、鞄だって【大石誠二】本人のもの……」
そう言うが、当の本人も釈然としていなかった。
考えてみたら、それだけで【大石誠二】本人だという証拠にはならない。頭が見つかっていないのだ。
徹底的証拠である【大石誠二】の頭が――――

「よほど、死にたくなかったんでしょうね？」
皐月がふらふらと立ち上がる。
「皐月ちゃん？」

大宮巡査がそう叫ぶと、
「くぅきゃはははははっ！　先刻は外したが、お前もオレと同じにしてやるぜ！」
【大石誠二】の頭がそう叫び嗤うと……皐月は小さく笑みを浮かべた。
「さっきも何も？　あんたの速さじゃ、一生私から雁頸を取る事なんで無理でしょうね？」
その言葉に【大石誠二】の頭はまるで傾げるような仕草を見せた。
どう見ても虚言としか感じない。だからと言って、皐月の眸が嘘を吐いているようにも見えないでいた。
どこからそんな自身が出てくるんだろうか？と大宮巡査は思った。

「冗談言ってんじゃねぇぞ！　このアマァッ！！　片腕しか使えねぇんじゃ？　その自慢の二刀流も意味ねぇんじゃねぇか？」
「だったら――――試してみる？」
そう言うや、無事だった左手に持たれている刀の先を【大石誠二】の頭に向けた。
「っざけんじゃねぇえええええええええっ！」
怒り狂った【大石誠二】の頭が皐月目掛けて突進してきた。

「我流一刀……　羅刹っ！」
皐月が縦一文字に刀を振り下ろすと、【大石誠二】の頭が宙に止まった。
「くぅぎゃああっ！？」
【大石誠二】の頭はまるで何が起きたのかわからない表情を浮かべた。
逆に皐月の顔は、まるで何事もなかったかのように綺麗なままだった。
半分に切られた【大石誠二】の頭部が徐々にズルズルとずれていき、地面へと落ちていく。その切り口からは脳髄やら、何やら、見

ただけで吐き気がするものが零れ落ちていた。

しかし、【大石誠二】の頭は何かを言おうとしていた。

「なぜぁ？　何故だぁ？　二刀流っていうのは？　二刀流っていうのは、二刀だから強いんじゃ？」

「根本的なところを勘違いしてるようだけど？　元々は【片手でも刀が使えるようにする為】に生み出された流儀よ？」

そう言うや、皐月は刀を片手で振り回している。その動きに一切の無駄はなかった。

「それに、どっちかって言うと私は左利きだからね？」

皐月はそう言いながら、小さく舌を出した。

「それじゃ、あの死体はいったい誰なのか？　それだけ教えてもらいましょうか？　どうせ、阿弥陀警部も上にどう報告すればいいのか、わからないでしょうけど」

皐月はそう言いながら、向こう側で呆然としている阿弥陀警部と大宮巡査を一瞥した。

「あいつは、あいつはな？　オレの兄貴だよ？　容姿が似ているから、わからねぇと思ったんだよ？」

「殺した理由は？　ついでに、あんたがどうしてそんな姿になったのかもね？」

「兄貴を殺した理由は、オレが受けようと思っていた高校に兄貴が通っていたんだ。でも、成績が悪い俺はどんだけ頑張っても到底そこには入れそうになかった。でも、よく考えたら、オレと対して変わらないくせに兄貴は入学出来たんだ。それで、兄貴に聞いてみたら『知り合いに頼んで、入学テストの答えを少しだけ教えてもらった』ってさ？　それを聞いて、オレは兄貴と同じ事をしないって思って、我武者羅（がむしゃら）に頑張ったんだよ。学校の先生からは推薦ももらった。後は受験まで頑張れば兄貴と同じ学校にいけると思ったんだ。でも、兄貴はそれが気に食わなかったんだろうな？　オレの部屋に

勝手に入って、俺の教科書やノートを捨てやがったんだ！」

【大石誠二】の崩れた頭が泣き叫んでいるようだった。

「――それが殺した理由？」

「そうさ！　おれは兄貴とは違う！　おれは兄貴と違って自分の実力で」

「殺さなくても！　見返してやればいいでしょうがっ！」

皐月がそう怒声を放すと

「それじゃ！　あんたがどうして舞首になったのか教えてくれない？」

「これになったのはつい最近さ？　オレがずっとどうやって兄貴を殺そうかって思っててさ……」

そう言うや、【大石誠二】の頭は言葉を止めた。

「自分がどうしてそんな姿になったのかわからないって言いたいんでしょ？　答え教えてあげようか？　――――自分が知らないうちに自分を殺してたのよ？　じゃなければ、こんな醜い姿にはならなかったでしょうけど」

静かにそう言うと【大石誠二】の顔が次第に淡い水色に変わっていく。

「……」

弥生が小さく経文を呟いていた。その周りには薄らと後光が輝いていた。

「露世に迷いし魑魅魍魎よ。汝が場所は此処になし――――　罪を償い、地蔵菩薩の下す罰を速やかに受けよ！」

そう言うと、手前におかれていたお札が一直線に【大石誠二】のところへと飛んでいった。

「閻獄第一条七項において、自分の見勝手な行動で人を殺めた者は『等活地獄・極苦処』へと連行する」

弥生がそう言うと、お札は消えていく【大石誠二】の額に附けら

れた。

「あっちでお兄さんに逢ったら、自分の言いたいことを言うことね？　言わないと……　すっきりしないでしょ？」

皐月はそう言うが、消えていく【大石誠二】の姿を見ようとはしなかった。

陸・大黒天（後書き）

【追記；１１／０５／２３】
少しばかり文章を直しました。
【大石誠二】の首がではなく、～頭が正しので修正しました。

事件解決から三日後、神社の本堂では、皐月の気合の入った声がこだましていた。

「精がでますな？」

阿弥陀警部が土産に買って来たタイヤキの入った紙袋を持って、本堂へと入ってきた。

「しかし、あれだけ傷ついていた右腕がたった数日で治るとは……いやはや、大黒天の力は伊達じゃないですね？」

「別にあっちが勘違いしてくれたからですよ？」

その言葉に阿弥陀警部は首を傾げた。

「あっちが、二天一刀の意味を知っていたら、どうなっていたか……」

そう言うと皐月は、完治した右手に持っていた竹刀を大黒の力で刀に変え、用意された巻き藁を切り落とした。ぼとぼとと崩れ落とされていく藁の塊の切り口は、研ぎ澄まされた真剣で斬ったようで、刃先には刃毀れはおろか、藁の引っ掛かりも何もなかった。

「――うんっ！　完治している」

そう言うや、皐月は阿弥陀警部を一瞥した。

「――おや？　私、今日は皆さんに事件協力の礼に来ただけなんですけど？」

そうは言うが、阿弥陀警部は足の指先で床を踏みしめていた。

「――本物の刀は駄目ですよ？　銃刀法違反ですから……」

阿弥陀警部はそう言うと、壁に掛けられた竹刀を一本取り、構えた刹那……竹刀の乾いた音が本堂に響いた。

「それで？　【大石誠二】の死体は？」

「皐月さんの推理通りでしたよ？　【大石誠二】本人の死体はご本人の部屋にありました。それも綺麗な姿でね？」
「舞首は生霊の類ですからね？　自分がその人を憎悪していたら、意思とは関係無しに変貌しますから……」
「【大石誠二】の死因は心臓発作……　もともと体が弱かったようです」
「それじゃ……　無理が集ったって事ですか？」
「そうでしょうね？　皐月さんが聞いた理由を考えると……」
そう会話していくうちに、二人の竹刀の音が小さくなっていく。

「何が考え事でも？」
阿弥陀警部がそう訊ねると、
「伝えたいなら、自分の口で言えばいいのになって思って」
そう言いながら皐月は複雑な表情を浮かべた。
その後、弥生に呼ばれた二人は、居間で土産のタイヤキを、ものの数分で平らげてしまった。

周りから水が落ちる音が聞こえてくる。その中を手枷をはめた一人の囚人が、獄卒に引き摺りまわされていた。
「御苦労」
天まで届くほどの高い扉で立っている番の鬼がそう言うと
「弥生殿と皐月殿からの伝令だ……」
そう言うと大きな扉はゆっくりと開いていく。
「兄弟二人で同じ罪を与えてほしいとな？」
大石誠二は動揺を隠せないでいた。扉の先には自らが殺した兄――誠の姿があったからだ。

「――兄貴？」
「誠二――か？」

静かに誠がそう言うと、誠二はその場に跪いた。
「ごめんなさい……　ごめんなさい……」
誠二が大粒の涙を赫々に染まった地面へと落としていく。
「謝らなければいけないのはオレの方なのにな。お前は自分の実力で受けようとしていたのに……」
誠は静かに天を仰いだ。

「あんなに頑張ったのに、無駄にしてしまって……」
「兄貴……」
兄弟の会話に二人の獄卒が小さく微笑んだ。

「彼女達に感謝するんだな？　本当だったら巡り逢う事など出来ないのだから……」
獄卒がそう言うと兄弟は頷いた。

兄弟がその後互いの罪を償い、露世に転生したのかは定かではない。

漆・神獄（後書き）

＊はい。第一話終了です。＊

壱・十ヶ月

ちょうど太陽が西へと沈みかけようとした午後七時頃。
眩暈がするほどに長い坂道を、見るからに重たく膨らんだお腹を抱えた女性が、ゆっくりと坂を下っている。
女性の身丈は百六十と小柄である。

彼女は坂の上にある、子安神社へと参りに行った帰りであった。
ふと女性は周りを見渡した。道端には杜若が咲いている。
女性がそっと杜若に触れた瞬間、突然胃液が逆流するような感覚に陥り、吐き気を催した。
その悲惨とさえみえる嘔吐は、五、六分ほど続いた。
咳が治まるや、女性はその場にガクリと倒れ込んだ時である。
女性の股から赤い液体が、ダラりと流れだした。
――殺した？と、女性がそう思ったのも無理はなかった。
女性が妊婦なのは言うまでもないが、その胎児が普通とは一際違っていた。

彼女が身籠ったのは今から十ヶ月ほど前だった。
普通だったら、すでに生まれてきて、女性の胸で抱かれながらも、荒々しい泣き声を挙げているはずであった。
女性の胎内にいるという事は、出産が予定日よりも遅くなっているとか、色々と考えられるが、すでに十ヶ月目を迎えている。
その事を踏まえて、女性は少しばかりこの胎児を気味悪がっていた。

――ああ、これで……と、女性がいき絶えたのはそう思った時だった。
女性の膨らんだ腹部に一本の赤い線がひかれていくと、膣口から

鳩尾（みぞおち）へ、まるで柘榴（ザクロ）のようにお腹が半分に割れた。
そこにはすでに姿形（すがたかたち）が整い、自分の親指をいとおしく口に咥（くわ）えている嬰児（みどりこ）が寝息をたてていた。

『おいで――私の可愛い子』

誰かがそう云う。が、周りにはいき絶えた女性しかいない。
嬰児はまだ座っていない首を右往左往させながら、声を探していた。
あまり見えないその眼に、薄らと影が見えるや、嬰児は両手を天に伸ばした。
――嬰児はゆっくりと自分が抱き上げられていくのがわかった。

「さぁ、逝きましょう？　――私の坊や……」

姿の見えない声がそう言うと――周りには灰色の羽根と、女性の死体が転がっているだけだった。

阿弥陀警部、並びに大宮巡査が現場に到着したのは、それから一日経ってからだった。
元々、人が通らなかった山道だっただけに、通報が遅かったのだ。
「警部、どう思いますか？」
大宮巡査はなるべく死体を見ないようにしながら、阿弥陀警部に問い掛けた。
「帝王切開……ですかね？」
阿弥陀警部が開かれた腹部を見ながら言う。

――帝王切開とは、子供を出産するさい、余りにも胎児が大きく成長していると膣口が裂けてしまい、それが大量出血によるものや、痛みによるショック死などに繋がる。そうならない為に、苦肉の策として用（もち）いられるのが帝王切開である。

――しかし、普通それをする際、女性の今後のことを考慮に入れて、あまり目立たないように、お腹の脹らみにそって下のほうを切るのだが、女性の死体は【膣口から鳩尾まで】を切られている。

「ガイシャの女性は妊娠十ヶ月目で、この山に建っている子安神社までお宮参りに行った帰りに殺されたとみられているみたいです」

「――お宮参り？」

阿弥陀警部が納得いかない表情で聞き返した。別にお宮参りに対してではない。

現に、この眩暈坂（めまいさか）を越えると『玉依姫神（たまよりひめのかみ）』という子安神が祭られている神社が建てられているからだ。

「ガイシャの女性は十ヶ月目といいましたよね？　でも死体はまるで帝王切開されているし、よく見たら嬰児がいないじゃないですか？」

その言葉に若い大宮巡査は首を傾げた。

「警部？　ミドリゴと云うのは？」

「産まれてから3歳までの赤ん坊の事を云うんですよ」

そう言われ、大宮巡査は漸（ようや）く阿弥陀警部の納得のいかない表情を浮かべていたのかが理解出来た。

「そう言えば、その赤ん坊が未（いま）だに発見されていないそうです」

「――――でしょうね？」

そう言いながら、阿弥陀警部は周りに落ちていた灰色の羽根を手に取った。

「ここを通った人はさほどいないという報告でしたけど……　本当に誰も通っていないんですか？」

そう言うと一緒に来ていた鑑識課の湖西主任に問い掛けると……

「さぁなぁ？　それはあんたら刑事部の仕事だろうが？」

その口調から好い加減さっさと行ってくれと言われている感じだと、阿弥陀警部は思った。

「それじゃ……　この羽根を調べといてください」
そう言われ、阿弥陀警部から渡された灰色の羽根を湖西主任は訝(いぶか)しく見ていた。

壱・十ヶ月　（後書き）

文章直ししました（１１－０９－２７）

弐・腹痛

稲妻神社の境内に、観光客用にと設けられたトイレがある。
広さはそれほどではないが、男女其々に3つの個室が備えられている。。
「――はぁ……」
女性用の方から小さな溜息が漏れた。その声の主は――皐月であった。
彼女はこの稲妻神社に住む三姉妹の次女で、もちろん家にもトイレはある。
――が、何故彼女が態々境内の方を使っているのかというと――
事の発端は、家のトイレの水漏れが酷く、三日ほど使えなくなったせいである。
男である神主は立ちションで小を済ませられるが、女性である三姉妹はそうは云ってられなかった。
元々このトイレ、特に女子トイレの方はあまり使いたくなかったのが、三姉妹の言い分である。その理由は――
『出ませんように……　出ませんように……』
まるで祈るように用を足すと、皐月は急いで下ろしていたショーツとジーンズを上げた。
水を流し、ドアノブに手を掛けた時だった。うしろから何かが動く気配を感じるや、皐月は声のない悲鳴を挙げた。
彼女は大黒天の力、いや破壊神の化身である摩訶迦羅の力が使える。
しかし、それは妖怪に対しての力であって、霊には何の意味もなかった。

もとい、このトイレに住み着いているのも、妖怪と云えば妖怪なのだが、皐月は小さい頃からこの正体の見えない音が怖かった。

皐月は逃げるように個室から出て行く。

――音を鳴らしていた妖の正体は、【屋鳴(やなり)】という悪戯(いたずら)好きの小鬼であった。

慌てて出てきたせいで手を洗っていない事に気付くと、少し考えながらも、家で洗えばいいかと好い加減な自問自答をした直後だ。

皐月はお腹に違和感を感じ、お腹を摩った。

【女性特有】と云えばそうなのだが、それが来たのはつい先日の事だった。

普通だったら、少なくとも一ヶ月くらい後の話で、それが妙に不快感を与えている。

痛みがある訳でもなく、吐き気を催している訳でもなかった。

ただ、妙に腹回りを押されているような感触がする。

――それも、中から……

再びトイレに入ろうか悩んだが、別に催(もよお)している訳でもなく、少し休めばどうにかなるだろうと、皐月はあっけらかんと結論を出した。

その後、夕食を済ませ、二天一流の稽古も終え、深い眠りに落ちていた時だった。

水が落ちる音が耳元からこだましている。

部屋の窓側に頭を向けて寝ているので、外で雨が降っていると最初は思った。

――が、普通だったら、耳元ではなく、枕元から音がしてくるはずである。

皐月は寝返りを打って、横を向いている訳でもなく、少し眼を開

けると天井が見える。
仰向けになって寝ていると云う事の証拠である。そもそも皐月は耳が悪く、本来ならば雨の音自体が聞こえない。
それなら、この音は？と思いながら、皐月は起き上がろうとしたが、金縛りにあったかのように、身動きが取れなくなっていた。
声を出そうにも、首を絞められているかのように出せなかったが、幸い眼だけは動かせた。
ゆっくりと音がする方を見ると……
――身が焼け爛れた嬰児を抱いた女性がじっと皐月を見下ろしていた。
が、皐月はなぜか彼女が殺意を持っているようには感じられなかった。
スーッと女性が消えると、首を絞めていた苦しみも消えたと同時に、皐月を抑えつけていた何かも消えていた。
皐月は一、二度ほど深呼吸すると、机の上においてある時計を見た。
時間は午前二時四三分……丑三つ時である。
――さきほどの事ですっかり目が覚めてしまった皐月は本堂へと行き、静かに座禅を組んでいたが、あの女性がどうも気になってしまい、坐禅に集中できなかった。

参・帝王切開

阿弥陀(あみだ)警部と大宮巡査が稲妻神社に来たのは、事件が発生してから一両日過ぎた頃である。出迎えた弥生に居間へと案内された二人は、すぐに神主と三姉妹に事の件(くだり)を説明した。

「――と云う事件なんです」

「目撃者はなし……　あの坂で妊婦は殺されたという事でよいかな？」

神主はワンカップ酒を口にしながら、阿弥陀警部の説明を聞いていた。卓袱台(ちゃぶだい)の上には、既に2本空(あ)けられていた。

言葉からして、場所の詳細を知っている口調である。

「――被害者に怨みを持っている人はいなかったんですか？」

弥生がそう尋ねると、阿弥陀警部は頷いた。

「襲われたガイシャは人付き合いが良かったそうです。――ただ……」

その歯切れの悪い言葉に、弥生と皐月は首を傾げた。

「――好(よ)かったのは奥さんだけで、夫は悪かったみたいですね。特に女性関係では……」

阿弥陀警部の代わりに、大宮巡査が警察手帳を見ながら言う。

「殺された女性は【間宮理恵(まみやりえ)】。死因は恐らく帝王切開の際に起きた大量出血によるショック死ではないかと……」

「ただ、湖西主任の見解は少し違うんですよね？」

「――と言いますと？」

「帝王切開した際、血は切られた場所に残るはずですよね？」

そうは云われても、そんな事をされた事がない弥生と皐月は想像くらいしか出来ない。しかも、まだ九歳(ここのつ)の葉月に至っては、キョトンとした顔で何の事だか解かっていなかった。

「ただ、出血は腹部あたりよりも、膣あたりが酷かったそうです」
「それじゃ、転んで？」
「――可能性はありますが、ただ臨場した後、すぐ総出で行方を探しているんですよ」
「犯人をですかな？　目星がついているとでも？」
「いいえ、犯人は目星すらついていません。見つからないのは、子宮にいるはずの胎児が未だに見つからないということなんです」
その言葉に周りの空気が固まるのを誰もがわかった。

「見つからないって……　どういう事ですか？　それじゃ、犯人はその【間宮理恵】さんを殺害した後、お腹の子供を誘拐したって事？」
弥生がそう言うと阿弥陀警部が
「警察は二通り考えています。……ひとつは今、弥生さんが云った通り、『【間宮理恵】さんを殺害した後、お腹の子供を連れ去った』事……」
「――もう一つは？」
弥生が聞き返すと「嬰児自らが子宮を割き、出て来たか――」と、阿弥陀警部が言い切った時だった。

「――――どうしたの？　皐月お姉さま？」
葉月がそういうや、全員が皐月を見た。さきほどから皐月はお腹を摩っている。
「どうしたの？　――お腹痛い？」
弥生がそう訊くが、皐月は首を横に振った。
「いや、一昨日くらいからね、どうも調子が悪いのよ？　別に変な物を食った訳でも、増してや月役って訳でもなさそうだし――」
それを聞いて、大宮巡査は不思議そうな顔を浮かべた。

「失礼ですけど、月役って？」
「大宮君？　それを彼女達に訊きますか？　君、携帯持ってるんだから、それで調べなさいよ！　辞書サイトかどこかで」
阿弥陀警部が訝(いぶか)しく言った。云われた本人は何の事だかさっぱりわからず、言われた通りに携帯で調べてみるや、――2分後には皐月に土下座をしていた。
月役は月経(げっけい)。云うなれば生理の事である。

「――しかし、皐月……　前にきていたのはつい一週間くらい前だろう？　そんな早くくるものでもなかろうて？」
神主がそう言うと皐月は頷いた。
「確かに生理は一ヶ月周期で必ず来るはずだけど」
皐月は言葉を濁らせた。生理はその日に必ず来る訳ではなく、その周期に来るシステムになっている。
これは女性が子供を産む為の準備をしている為で、どうする事も出来ない。むしろ喜ばしい事である。

「ただ、生理が来ている時は激しい運動出来ないのよね？　体育の日とか特に」
弥生がそう言う。彼女も経験者である。
「――しかし、男の僕が言うのもなんですけど……　生理ってそんなに苦しいんですか？」
大宮巡査の言葉に皐月と弥生は目を点にした。

「まぁ個人差はありますけど――　腹痛・頭痛がする人もいれば、立つ事すら侭成らない人。症状は人其々ですし、平気な人もいるって云いますよ」
弥生が淡々と説明する。
「まぁ、男性には一生味わう事はないですけどね？」
「――私は男性特有の痛みの方がわかりませんけど？」

売り言葉に買い言葉か、阿弥陀警部の言葉に皐月は直様反論した。

――――途端、柏手が一、二度鳴らされた。

「――して、阿弥陀警部？　どうして嬰児がお腹を割いて出て来たと？」

神主が鋭い眼光で阿弥陀警部に問い掛ける。

「――先程も言ったとおり、被害者である【間宮理恵】のお腹は鳩尾からではなく、膣から割かれたものなんです。普通だったら、そんなところから切らないでしょ？」

「まぁ、異常者だったら解かりませんけど――」

神主も今回ばかりはお手上げに近かった。

「――それで写真は？」

葉月がごく当たり前に尋ねたが、阿弥陀警部と大宮巡査は互いを見遣った。

「それが今回ばかりは――　写真を持ってきてはいるんですけど、お腹が切られていると説明しましたよね？　そのせいで実は私たちも見るのが少しばかり億劫って感じなんですよ」

そう阿弥陀警部が説明するや、神主が笑い出した。

「なぁあにいっ！　写真を裏返しにしてくれればいいですよ。――葉月？　出来るか？」

神主にそう云われ、葉月は頷いた。

大宮巡査は躊躇いながらも写真を裏返しにしたまま、葉月の目の前に差し出した。

葉月は小さな手を写真に乗せ、ゆっくりと摩っていく。

葉月の能力は写真に写った被害者が最後に聞いた音を聞く事が出来る。

サイコメトリーに近いものがあるが、そうではない。

あれは【物の記憶を読み取る】力であり、葉月の能力は写真に写った被害者の声を聞く力だ。

「――――かきつばた……」

「そう言えば、あそこには結構杜若が咲いてましたね？」

「――――」

しかし、それ以外見つからないのか、葉月は不服そうな表情を浮かべた。

「葉月？　杜若しか見えなかったのか？」

「――――うん、その人が触った途端、お腹が痛くなったみたい――」

「それじゃ、その時に殺されたと言う事でしょうか？」

「しかし、お腹が痛くなるというのは如何せん可笑しいですな？」

「――といいますと？」

「いや、その時殺されたという事は、犯人と一緒だったって事になるでしょ？　しかし、犯人の指紋も何も、被害者の持ち物から検出されなかった。近くを散策しても、殺害に使われたと思わしきものは何一つ見つかってません。湖西主任の話だと、切り傷はまるでメスのようなもので綺麗に切られていたと――」

阿弥陀警部が説明している間も、葉月は必死に写真を摩っていた。

――途端、その手を止めた。

「どうしたの？」

弥生が葉月に声を掛けた途端、葉月は弥生に抱きついた。身を震わせ、力強く弥生にしがみついて離れようとしない。

「――――何か聞いたの？」

弥生がそう尋ねると、葉月は激しく拒絶する。

「――――ねぇ？　お腹の子供って勝手に出てくるの？」

その不可解な言葉に全員が絶句した。

葉月の説明によると、被害者が倒れた後、お腹が割き、そこには既に形の出来ている嬰児が何者かに連れていかれた――との事だった。

阿弥陀警部の一つの仮説が有ろう事が成立していた。

肆・懐胎

――――それから三日後、特別悪い訳でもなく、気にはしていなかったものの、さすがに気分が優れない為、皐月は神主の知り合いである田原医師に相談をするため病院へと訪れていた。

田原医師は産婦人科医であり、神主の娘であり三姉妹の母親である【遼子】が三姉妹を出産した際、主治医として、その出産に携わっている。

「――――で、覚えとらんと？」

のほほんとした口調で田原医師は訊いた。

「ですから、する相手はいないんですって！　大体、月役が来たのはここ1週間前でしたし……　そもそも！　男性と付き合った事なんて一回もないんですから！」

「知らない内になったって事かい？」

そう言われ、皐月は少し考えるや頷いた。

診察室のベットに寝かせられ、お腹を晒している皐月に、田原医師は手で摩りながら、色々と質問をしていた。

田原医師は齢８０を疾うに超えており、長年の経験からか最新技術を使わなくとも、触診だけで、腹の違和感を調べることが出来る。

「別に可笑しな部分はないのよね？」

老婆特有ののほほんとした口調では有るが、田原医師は真剣な表情で少しばかり考えていた。

「どうかしたんですか？」

「うーん、月役が来ないって事は可能性としては、生理不順になっているか、出来ているかのどちらかなんだけど――――」

「取り敢えず一週間前に来てますから、前者の方だと思いますよ」

「あっ……皐月ちゃんはどちらでもないわよ。薬を飲めば『三日』くらいでよくなると思うけど……」

要するにどちらにも当てはまらないということなのだが、何やら物言いそうな表情で田原医師は机の引出しを見ていた。

「最近ね？　妙な事があったのよ。今日の皐月ちゃんと同じ感じの患者さんなんだけど」

「同じくらいって？　私と同い年って事ですか？」

「いいえ。年は２５で、月役が三ヶ月ほど来るのが遅いからって、うちに相談しに来たのよ」

「それくらいだったら、出来てるって可能性が有ったって事じゃないんですか？」

皐月がそう尋ねると、田原医師は答えるように首を横に振った。

「彼女の診断結果はただの生理不順。恐らく彼女は出来たと勘違いして、生理周期をつけなかったんでしょうね？　もちろん、医師としてはそれ以上患者の情報を言えないけど」

「それをその女性には言ったんですか？」

「ええ、でも彼女は聞き入れなかったわ」

「どういう……」

皐月がそう訊くと、田原医師は少しばかり俯くや、

「皐月ちゃん？　想像妊娠って言葉聞いた事ある？　実際は妊娠していないのに、恰もしているように錯覚してしまう事。もちろん、これはストレスや思い込みでなるものだし、第一個人々々に生理の周期があるから……」

「でも、その人は妊娠してなかったんですよね？」

「ええ、精神安定剤を処方して、患者には気分が優れない時に飲むようにって伝えて……　そしたらね、それから一週間もしないうちに、女性が病院に怒鳴り込んできたの……　私の子を返してっ！！ってーーーー」

私の子を返してっ！！ってーーーー」

田原医師が話をしていると、診察室のドアが開いた。

「田原先生。警察の方が……」

若い女性の看護士がそう言うと、田原医師は一言二言返事をした。その直後にその警察官が診察室へと入ってきた。

「おや、皐月さん？」

案の定、その警官は阿弥陀警部だった。そのうしろでは大宮巡査が看護士達に聞き込みをしている。

皐月は上げていたシャツを元に戻すと、小さく会釈した。

「それで、何か進展はあったんですか？」

皐月がそう訊くと、阿弥陀警部は苦笑いを浮かべる。

「いやいや、面目ない。何せ、殺された間宮理恵の交友関係を調べていると、殺されるとは到底思えないんですよね……　あ、田原先生？　お願いしていた事わかりましたか？」

そう言われ、田原医師は部屋を出て行った。

「……でっ？　どうしてここに？　もしかして……」

「そんな訳ないですよ！　いたって健康。三日くらい休めば“治る”って云ってました」

「そうでしたか？　イヤイヤ、失敬、失敬」

釈然としない阿弥陀警部の言い回しに、皐月は怪訝な表情を浮かべながら、阿弥陀警部を睨みつけた。それから数十秒して、田原医師が診察室に戻ってきた。

「女性の腹部になかったものを見ると、やはり臍帯がなかった事になりますね？」

それを聞いて、皐月と阿弥陀警部は互いの顔を見やった。因みに臍帯とは、『臍の緒』を医学的にいった言葉なのだが、それに関してではなかった。

「なかった？　なかったって、どうして？」
皐月が驚くのも当然である。被害者である間宮理恵が殺された大本の原因は、奇怪な帝王切開のさいに起きた大量出血によるショック死だと、皐月と同じく阿弥陀警部も思っていた。
臍の緒というのは、母親と胎内にいる子供を繋げるもので、それから母親が採取した栄養を子に行き渡らせて育てる。
出産の際、子についた臍の緒を切るのだが、本来自然に切れるものではない。
哺乳類特有ともいえるこの臍の緒は、人間でなら出産直後に鋏（はさみ）で切られ、猫や犬だと噛み切る事が殆どである。

「その女性を診察していたのがうちですから。そもそも先月には既に生まれているはずなんですよ」
「確か、女性が妊娠していた時期って……十ヶ月？」
「十月十日（とつきとうか）という言葉がありますが、如何せん私の見聞では……」
そう言うと、田原医師は皐月を見ていた。その視線に皐月は首を傾げた。

「妖怪の仕業って事ですか？」
阿弥陀警部がそう尋ねると、「そう考えると納得するんだけどね？」
田原医師はそう言いながらも、何か釈然としていなかった。
「子を奪う妖怪……　そんなのもいるんですか？」
「そもそも、妖怪は悪戯をする方が多いですけど……　子を奪う妖怪は――」
途端、皐月の表情が曇った。

あの晩、自分の部屋で見た女性の胸に抱えられた嬰児はどんな風だった？
身か爛れていて、骨と筋肉が剥き出しになっていた。

そして、その女性には異様な何かがあった。

「――――姑獲鳥（うぶめ）？」

そう口走ると、阿弥陀警部がどういう妖怪なのだと訊いてきた。

「姑獲鳥は難産で子を産んだものの、死んでしまった女性の妖（あやかし）なんです。一説によると、子を奪い、自分の子供にしてしまうとか……旅人に百キロはあると言われている赤ん坊を抱かせたまま殺したりとあるんですけど……　ただ、悪い妖怪とは思えないんです……」

「といいますと？」

阿弥陀警部の質問に、田原医師が代わりに答えた。

「子を思う余り、そのような事をしている。だから悪い妖怪とは思えないといいたいんですね？」

そう言われ、皐月は頷いた。

「私達姉妹は、母と父のことを知りませんから……　逆に子の面影を探している姑獲鳥がどうしても悪い妖怪だなんて思えないし、思いたくないんです。それに、八百万の中に鬼子母神という似たような神様もいますから――――」

皐月が漏らした言葉を聞くや、田原医師は二人から視線を逸らす。

「で、どういった姿で？」

「上半身裸で、両腕がまるで鳥のような……」

それを聞いた途端、阿弥陀警部は立ち上がった。

「と、鳥ですか？」

詰め寄ってきた阿弥陀警部に圧倒された皐月は、頷くのが精一杯だった。

「殺された女性の近くに、鳥の羽根らしきものがあったんですけど……　どの鳥類にも当てはまらない羽根だったので、まさかとは思いましたが……」

「で、でも！　その女性が発見された場所の近くには『玉依姫神（たまよりひめのかみ）』が祭られていて、姑獲鳥は彼処を嫌ってるんです……」

「と言いますと？」
「どうしてなのかはわかりませんけど……　多分、『玉依姫神（たまよりひめのかみ）』……　つまり、子安神（こやすがみ）だからじゃないでしょうか？　子を抱く事すら出来なかった姑獲鳥には、それが耐えられなかった」
皐月は俯きながら言った。

途端、診察室に大宮巡査が入ってきた。
「け、けけけ警部？」
「どうしたんですか？　そんなに慌てて……」
「さ、さっき、無線で連絡があって……　そ、そそそそその！」
狼狽するように、呂律が回っていない大宮巡査に阿弥陀警部は
「いや、だから落ち着きなさいって！　ほら、ゆっくり深呼吸」
そう促（うなが）され、大宮巡査は一二度ほど深呼吸した。
「で、どうしたんですか？」
阿弥陀警部が呆れた表情でそう言うと、
「こ、殺されたんです……　【間宮理恵】の夫である、【間宮雄太】が変死体で……」
それを聞いて、阿弥陀警部は唖然としていた。

ふと、皐月は窓の方を見遣った。それは小さく羽音が耳に入ったからだ。
窓を開け、外を覗いだが、そこには何もなかった。

伍・水子

阿弥陀警部らが血相を変え、病院を出て行った後、皐月は院内の新生児室をガラス越しに眺めていた。

自分の隣りには夫婦と思われる、何組かの男女が自分の子供を幸せそうに眺めていた。

そんな中、皐月は寂しそうな表情を浮かべた。

自分もそうだが、弥生や葉月も父と母の“記憶”がない。自分よりも幼い葉月ならまだしも、葉月を小さい頃から見ている皐月が覚えていないどころか、それよりも姉である弥生ですら記憶にないのが不思議でしようがなかった。

一度、両親の事を祖父である神主に尋ねた事があるのだが、やんわりと返され、その事は禁句（タブー）となっている。

故（ゆえ）に祖父が彼女たちにとっては父親代わりであり、弥生が自然と母親代わりとなっている。

（玉依姫の近くで姑獲鳥が出て来ることはまずない。だけど、被害者はその参拝に行っていた）

犯人はその後を追い、人目のない場所で――殺した。と推測出来る。

（だけど、それじゃ、腹を割（さ）いてまで子供を奪った理由がわからない）

方法よりも、どうして帝王切開紛（まが）いな事をしてまで、嬰児を奪ったのかということが気になっていた。被害者、間宮理恵を殺す事よりも、むしろ、その胎内にいた嬰児を奪う事が目的だという事になる。

それから数十分後、皐月は被害者が殺された子安神社への山道を歩いていた。周りでは横に捌けてはいるが、事件を解決しようとしている警官たちが何かないか探していた。

「おや、あんた稲妻んとこの娘さんやないかぁ？」

声をかけて来たのは、袴姿の老人だった。

「いつも祖父がお世話になってます。咲川のおじいちゃん」

皐月がそう云いながら、頭を深々と下げると、老人はケラケラと笑った。

咲川源蔵。先にある玉依姫命を祭っている小安神社の神主であり、皐月たちの祖父である稲妻神社の神主とは飲み仲間である。皐月は小さい頃からよく遊んでもらっていた。

「皐月ちゃんが此処にきたということは、阿弥陀警部が何か頼りに来たということかいな？」

「あ、いや……」

確かに阿弥陀警部が事件に関して頼りにきたのは確かなのだが、此処に来たのはあくまで皐月個人の理由だった。

「ねぇ、咲川のおじいちゃん？　妖怪が神様に恐れない……　何てことあるの？」

「何か引っ掛かることがあるみたいだねぇ？」

「うん。被害者の近くにどの鳥にも見られない羽根が落ちていたって……」

「それで皐月ちゃんは姑獲鳥の仕業ではないかと思った――――」

そう云われ、皐月はギョッとしたが、隠すわけでもないため頷いた。

「それはわからん。妖怪も人間と同様に、欲望によって作られた権化じゃからなぁ。姑獲鳥も“産女（うぶめ）”という俗称故に、子を思う余りに人ならぬ事をする場合がある」

つまり殺した犯人は女性を殺すよりも、その嬰児を奪い取ることが目的だったのではないかと咲川は告げる。自分の考えだった推理が、他の人も同感だと感じ、皐月は複雑な表情を浮かべた。

――――皐月の心情……自分の考えを、出来れば否定して欲しかったのだ。

「人間の出産は大凡（おおよそ）九ヶ月といわれているが、被害者はそれを疾うに過ぎていた」

「それは周りの人も知ってるんじゃ……」

途端、皐月の携帯が鳴り響く。

「もしもし――――」『あ、皐月？』

声の主は弥生だった。

「弥生姉さん？　どうしたの？」『あんた、今何処にいるの？』

「何処にって、子安神社に」『って事は咲川のおじいさまのところにいってるって事？』

皐月は行ってるというよりも、途中の坂で偶々《たまたま》会ったと説明する。

『あんた、田原先生のとこにも行ってるわよね？　先生から家に電話が来てるのよ？』

「へっ？　なんで家に？　私の携帯番号、受付の時に書いてたはずだけど？」

元々弥生が生まれた時どころか、母親である【遼子】が生まれた時から利用しているため、家の電話を知っていたとしても不思議で

はない。
　携帯番号は頻繁に変わったとしても、固定である家の電話番号がそんなに変わることはない。

「それで田原先生はなんて……」『阿弥陀警部が後から来て、その後に何かあったって――――』
「それじゃ、その後連絡はあったのかってこと？」
　そう訊くと、弥生はそうだと答える。――――もちろんその後に連絡は来ていない。

　その後いくつか会話をし、最終的には帰りに牛乳とニンジンを買ってきてほしいと催促された。

「それじゃ、失礼します。咲川のおじいちゃん」
「おう、元気でなぁ……　あ、そうじゃ」
　帰ろうとした時、ふと咲川が何かを思い出し、皐月を呼び止めた。

「皐月ちゃん。あんたのお母さんとお父さんに関して、拓蔵に何が聞いておらんのか？」
　拓蔵というのは、皐月たちの祖父の事だ。
「いや、爺様からは何も」
　そう答えると、咲川は少しばかり苦虫を噛むような仕草をし、
「そうか……　ならええんじゃ。いつか話すじゃろうし、わしが関与することでもないじゃろ。すまんな、弥生ちゃんや葉月ちゃんにもよろしくいっておいてくれ」
　そう云いながら、咲川はクルリと踵を返し、先にある子安神社の方へと歩いていった。

　皐月は咲川が何を云いたかったのかが気になりながらも、頼まれた買い物を済ませ、家路に着いた頃には雨が降り始め、何時しか土

砂降りへとかわっていった。

陸・執念

現場検証をしている最中、ポツポツと雨が降り始め、小一時間後には暴雨と化していた。

そんな中、阿弥陀警部は口を押さえながら、遺体を見下ろしていた。

長年の経験と死体を見続けているという職業病からか、死体を見たとしても吐き気を催すことはまずない。

しかし、それでも口だけは抑えさせてくれと懇願したくもなっていた。

――それもそうだろう。遺体の形状は見るに無残の他ないのだから。

「――――っ」

阿弥陀警部は人目を憚らずに舌打ちをし、何もここまでしなくてもという憤りを感じていた。

遺体が身につけていた上着から見つかった財布から、先の被害者である間宮理恵の夫、間宮雄太と判明したが、身元が判明するものがなければ、病院で報告を受けたさいに被害者の名前は出てこなかっただろう。

被害者の左肩近くの首下から腰までを赤い線がひかれ、その切り口から内臓が食み出ている。さらに胃の中も切られており、中のものを取り除かれていた。

被害者の死亡推定時刻を推測するさい、胃の中にある食べ物の消化傾向により死亡推定時刻を割り出すことが出来る。もちろんこれは被害者が何時食事をしたのかということを知る必要があるが、基本的に三時間もあれば胃の中の食べ物は消化されると言われている。

よく三時のおやつというものがあるが、それが言い得て妙なのだから面白い。

譬えにその事を知っていたとしても、これほどまでに非人間的な事が出来るのだろうか……

間宮理恵の件もそうだが、犯人は何故このような殺害をしたのだろうか――と阿弥陀警部は考えていた。

「大宮くん？　被害者が最後に連絡を取り合っていたのは何時頃かわかりますかね？」

阿弥陀警部はそう云いながら、大宮巡査を見遣るが、大宮巡査は期待を裏切るように首を横に振った。

間宮雄太の携帯が見つかっていたのだが、キーロックされており、すぐには解明出来ない。

無論、そのパスワードを知っている人間はもういない。

「被害者が今日何をしていたのか、その聞き込み。ならびに勤めている会社と女性関係も」

「――――はっ！」

阿弥陀警部の号令とともに、警官たちが敬礼をした。

場所を変えて、稲妻神社。皐月が弥生に頼まれた買い物が牛乳とニンジンだったことから、夕食はシチューだった。買い物に頼んだ

材料は足りないものであった。
その食事を済ませるや、弥生は夕食の後片付け、葉月は卓袱台の上で宿題、神主である拓蔵は社務所で事務の整理をしている。
そんな中、遅く帰ってきた皐月は湯船に浸(つ)かりながら、湯気で曇った天井を眺めていた。

皐月はどうして被害者が子安神社への山道で杜若に触れたのかを確認したかった。杜若は野草なので屈(かが)まなければ触れる事は出来ない。屈むということは必然的にお腹を背中で覆い隠す形になる。
つまり、帝王切開紛いな事をして殺したのなら、被害者を仰向けにする以外に方法はない。
どう殺したかはさておき、想像したくないものを想像したものだから、皐月は顔半分をお湯の中に沈めた。

阿弥陀警部の話だと、女性は膣から鳩尾までを一線に切られていたと云っていた。そして、中にいた胎児を連れ去っている。その胎児と被害者をつないでいたはずの臍の緒もどこかへと消えてしまっている。

姑獲鳥は確かに子を奪う妖怪と云われている。しかし、子宮を裂いてまで子を奪うのだろうか……
違和感を感じたお腹を診てもらうために病院へと行っていた丁度、阿弥陀警部が田原医師に被害者の事を訪ねに来ていた。
その時、皐月は自分の口から“鬼子母神”の話をしている。

元々鬼女である鬼子母神が、どうして安産の神となりえたのか、それは彼女が人間の子をさらっていた理由として、自分の子に食べさせていた事にある。
その戒(いまし)めとして釈迦(しゃか)が鬼子母神の子供一人をさらうと、彼女は慟哭し、血眼になって子を捜したという。

そのことから、子をさらわれていた母親たちの気持ちが、今の自分と同様だった事を知り、彼女は改心したといわれている。

予断であるが、釈迦が二度と彼女に子をさらわせない様に与えたものが柘榴（ざくろ）と云われており、一説によると人肉に似た味とされている。

考えてみたら都合のいい話ではあるが、姑獲鳥も難産のために子を抱けなかった悲しさを権化としたものだといわれている。

そう考えながら、皐月は姑獲鳥が母親と父親の面影を知らない自分と重なっていた。

どちらも“母子（おやこ）”というものを知らないのだから――――

「皐月ぃっ！　携帯鳴ってるわよ？」

脱衣所の方から弥生の“大きな声”が聞こえ、皐月は返事をしながら、浴室を出た。

脱衣所を見るや、すでに弥生の姿はなく、どうやら通り過ぎようとした時に電話が鳴ったようだ。

脱いだ衣服の下敷きになった携帯が騒がしく鳴り響いている。

「はい。もしもし……」

『あ、皐月ちゃん？』

声の主は田原医師だった。

「先生？　あ、そう云えば家に電話したって、弥生姉さんから」

そう伝えると、田原医師がまるで躊躇（ためら）うような口調で話し始めた。

『皐月ちゃんがどうしてあの時、姑獲鳥を疑わなかったのか――――憎悪によって妖怪となった人間を罰する事があなたたち姉妹の役目だって事は知ってるけど、でも皐月ちゃんは姑獲鳥自体を疑っていなかった。その理由を訊きたいの』

そう云われても、皐月自身どうしてそう思ったのかという確信が

出来ていない。

ただあの夜、爛れた赤子を抱いた女性が“姑獲鳥”のように見えたことと、診療室にいた時、外で鳥が羽ばたくような音が聞こえたことを説明しようと思ったが、皐月はそのことを話さなかった。

『――――それじゃ、薬はちゃんと飲むこと。体はちゃんと休ませること』

「はい。わかりました」

そう云うや、電話は切れた。

皐月は音のしない携帯に耳を傾けながら、違和感を感じるお腹を摩っていた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

短い針が午後十時をまわった警視庁捜査本部。その部屋に設けられている長テーブルの上には、大量の書類が乗せられていた。

それら全てが、殺された間宮雄太の女性関係によるものなのだから、正直呆れる。

女性関係がよくなかったのは前々からわかっていたのだが、これほどだったとはと警官たちは口々に出していく。

間宮雄太が女性と付き合っていた時期なんて変わり変わりの入れ替えで、とても結婚していたとは思えない。

二股ならまだしも、五股なんてのはざらで、酷いものなら孕めた子をおろさせるなんてこともあった。

これでは女性関係で考えたとして、誰に殺されても可笑しくはない。

「これ全部のアリバイを調べるんですか？」
少なくとも２０人以上の関係を持っている間宮雄太を殺したのは一人だとしても、それら全員のアリバイを調べるのは苦難である。
しかも間宮雄太が殺された時間帯は今日の午後２時前後として、その周期でのアリバイがないことを確定しないと任意同行すらできない。
「打つ手はないですかねぇ？」
そう云いながらも、阿弥陀警部は若い警官たちに発破をかける。

容疑者が２０人もいるとしたら、捌ける方法としては、その時間以前に被害者が殺された周辺にいたのかということにある。
いくらなんでも全員が同じ町にいるとは限らない。

「２０人全員の勤め先、ならびに学生でしたら学校も……」
そう云うと警官たちは翌日明朝から、各自のアリバイを調べる事にした。

その中で間宮雄太が殺された時間帯で同じ町にいた女性が二人ほど上がったが、彼女たちにはそれぞれのホテルに泊まっており、チェックアウトをしなければホテルに出られないため、アリバイがあった。

漆・鳴き声

夜中の土砂降りがすっかり晴れた朝方、薄暗い本堂にふたつの影があった。

そのひとつは皐月であり、彼女は座禅を組んでいる。そしてもうひとつの影は拓蔵であり、警策（きょうさく）を持ったまま、皐月のうしろをゆっくりと左右に歩いていた。

『神社』なので本来お寺の修行をイメージさせる座禅をするのはいかんせん可笑しいと思うが、精神を集中させるという意味では、別にどこだろうと構わないというのが拓蔵の考えてあった。

皐月が少しばかり体を動かすと、拓蔵はその警策を皐月の肩に当て、そして力強く叩き付けた。

ビシンという、耳を劈（つんざ）く音が本堂にこだまする。

「っつぅぅっ」

何回もされている事とはいえ、やはりこの痛みは慣れるものではない。

「どうした皐月、昨夜から気が乱れておるぞ？」

拓蔵にそう云われるが、心当たりが多過ぎる。

昨夜寝る前、阿弥陀警部から連絡が入り、先の被害者である間宮理恵の夫、間宮雄太が変死体で発見された事と、殺人の疑いがある女性二人は、間宮雄太が殺された時間にはホテルにおり、出て行った形跡がない。つまりその二人には徹底的なアリバイがあった。

もう一つ、間宮理恵の遺体の傍には、姑獲鳥のものと思われる羽

根が見付かっている。だが、田原医師の病院周辺を探してみたが、似たような羽根は見付かっていない。

そして、皐月が一番気にしていたのは、田原医師から訊かれた、自分たちの両親に関することだった。

「今日の昼過ぎに阿弥陀君たちが来るかもしれんから、無駄な迷いは捨てた方がいいぞ」

拓蔵はそう云うや、襟元を整えながら、本堂を出ようとしたところを皐月は呼び止めた。

「ねぇ、爺様？　私たちのお父さんとお母さんは……」

言葉を言い切るよりも先に、警策を床に叩き付ける音がけたたましく本堂に響き渡った。

その音に驚き、少しばかり顔を俯けた皐月は、恐る恐る顔を上げ、拓蔵を見遣るや、ゾクッと背筋に悪寒が走ったのを感じた。

拓蔵の表情はいつも飄々《ひょうひょう》としたものとは思えず、譬えるなら阿修羅のように、恐ろしい形相と化していた。

「何度云えばわかる？　お前たちの両親は事故で亡くなったといったはずだ」

「だ、だけど、それじゃぁっ！　それじゃ、どうして私たち姉妹は、お母さんやお父さんのことをひとつも……」

まるで聞く耳を持たないといった感じに、拓蔵はふたたび警策を床に叩き付けた。

「何度も言わすなぁっ！　お前たちはショックで二人のことを思いだせんだけだ」

「何、それ？　理由になって――――」

皐月が叫ぶよりも先に、拓蔵は皐月の眼前に顔を覗かせていた。

その余りの速さに皐月の目は追いつく事が出来ず、それどころか何時の間にといった感じだった。

そして、皐月の頬に衝撃が走り、気がついた時には本堂にある大黒像の下に転がっていた。

本堂には皐月しかおらず、打ち付けた背中の痛みを感じながら、ふらふらと本堂を出た。

阿弥陀警部と大宮巡査が稲妻神社にやって来るや、すぐに葉月に写真を見せた。葉月の能力によって、殺された間宮雄太の近くには一人の女性しかおらず、そのものが犯人だと特定出来た。

そして、そのまま女性は犯行を認め、任意同行した。

間宮雄太を殺した凶器はホテルの部屋で見つかり、女性がホテルのチェックインで偽名を使っていたことも明らかにされた。

あまりのテンポよさに姉妹たちはもちろん、拓蔵と阿弥陀警部はまるで仕組まれている感がして否めなかった。

「ど、どうしたんですか、皆さん？　事件は無事に解決したんですよ？」

大宮巡査があたふたとそう云う。

「大宮君？　可笑しいとは思わんかね？　確かに任意同行していった女性は間宮雄太の犯行に関しての供述（きょうじゅつ）をしてはいるが、最初に殺された妻の間宮理恵に関しては何も云ってないんでしょ？」

阿弥陀警部が云うように、連行された女性の供述には不自然な点が多い。

夫婦殺害を目的にしていたとしたら、その妻を殺したのも同一人

物という可能性がある。
しかし、先日葉月が感じたものは腹の中の胎児が自ら出て行ったようなものだった。
ましてやその時間帯に対して、女性は実家にいたと供述しているし、それを裏付けるように第3者の他人が女性を見ていると云っているため、アリバイが成立している。

「それで、その女性はどう云ってるんかな?」
「確かに間宮雄太を殺したのは自分だと――――」
阿弥陀警部の言葉を待たず、スッと皐月は立ち上がる。

「どうした?」
「えっと……　ちょっとトイレ……」
そう言いながら、皐月はお腹を摩っていた。

「そうか……」
――と一言云うや、拓蔵は阿弥陀警部と話を進めていた。

皐月が腹部に違和感を感じはじめたのは、間宮理恵が殺された頃からだ。
そしてどういうわけか、間宮理恵の話を聞くと、まるで反応するようにお腹の中から違和感を感じていた。

「それでは、私たちはこれで――――」
居間のほうで阿弥陀警部が別れの挨拶しているのが聞こえる。
「今回も捜査のご協力、ありがとうございましまた」
そう云うや、玄関の方へと去っていく。

途端、皐月は腹部に今まで感じたことがないほどの激痛が走った。
その痛みで皐月は何かに気付く――――

（――間宮理恵は確かに誰かに殺された。だけど、それはどうやって？　刺殺だったとしたら、中の子供は？　刺した場所が運悪く、子宮を貫いていたら？　――――子供はさらわれたんじゃなくて、もとからいなかったんじゃ？）

「阿弥陀警部っ！　間宮理恵が殺された現場は隈なく探したんですか？」

「えっ？　えっと、はい。鑑識の話だと……　それがどうかしましたか？」

「杜若というのは野草なんです。つまり、間宮理恵は殺された時、屈まないと触れる事なんて出来ないんです。妊婦が屈むってのそれだけでもは相当疲れるみたいで、その場に杜若があるからって、いくらなんでも触らない」

「つまり、間宮理恵は殺された後、帝王切開されたというのか？」

「それに……間宮理恵の胎内に子供はもう――」

皐月がその先を言おうとした時だった。

捌・世迷言

突然神社の大鈴が鳴る音がした。耳の悪い皐月でもその音が聞こえるほどの大きな音だ。
「誰か参拝客でも来たのかしら？」
弥生がそそくさと様子を疑いに出た。

一ニ分ほどして、弥生が戻ってくるや、
「皐月。あんたにお客様……　なんか返してほしいって」
その言葉に皐月は首を傾げた。

云われたまま、皐月は境内に出るや、その客人を探すが、夕暮れになっていくにつれ、周りは薄暗くなっていく。

「弥生姉さん？　客なんて何処にも――――」
そう弥生を呼ぼうとした時だった。

皐月の上空だけが異様なほどに真っ暗になるや、途端に腹部に痛みが走った。その痛みに耐え切れず、皐月は跪いた。

皐月はゆっくりと上空を見上げるや、そこにいたのは“人”だった。その形状は両腕が羽根のようで、鳥といってもいい。

「皐月っ！」
異常を感じたのか、外に飛び出してきた弥生を見るや、鳥人間は片腕を振るうと羽根は投げ付けられ、弥生を衣服もろとも壁に貼り付けにされた。
「な、なによ？　これぇ？」
じたばたと足掻(あが)くが、羽根に強力な妖気が纏われており、身動き

が取れないでいる。

「弥生姉さん！」

皐月が弥生に近付こうとした時だった。

「かえして――――」

鳥人間が皐月にそう告げた。

「かえして？　なにを？　私はあんたなんかにものを借りた覚えは――」

「くぅかぁえぇしぃてぇえええええええええええっ！！」

怒声を挙げるや、鳥人間は皐月に襲い掛かった。

「だからぁっ！　あんたなんかにものを借りた覚えは」

皐月は痛みが走る腹部を庇いながら、襲い掛かる羽根の群れを避け続ける。

「――――っ」

その痛みが激しくなり、皐月は転倒し、その衝撃で嘔吐する。

「かえして……　私の子供……　わたしの……」

鳥人間はふらふらと飛びながら、皐月に近付いていく。

「皐月っ！　あんた、この人に恨みでも買ってるんじゃないの？」

「買ってるわけないでしょ？　でも、なに？　子供って……」

皐月がそういった時だった。

腹部に走っていた痛みが和らぎ、間一髪、皐月は体勢を整え、鳥人間から間合いを離した。

しかし、再び痛みが走り、耐え切れずに屈むや、羽根の群れはまるで避けるように逸れていった。

まるでお腹に感じる違和感が自分を守っている事に気付き、皐月は腹部の痛みが何を意味していたのかを知る。

「皐月お姉さま！　これっ！」
本堂の方からは葉月が大声で叫ぶや、二本の竹刀を空へと放り投げた。
鳥人間の狙いが皐月から葉月へと移り、羽根の大群を葉月へと仕向けた。
その群れに隙間はなく避けきれないとわかるや、葉月は思わず目を瞑った。

「吾神殿に祭られし大黒の業よ！　今ばかり我に剛の許しを！　護形・護光の袋」
葉月の眼前には二本の刀を×字に構えた皐月が立っており、ふたりの周りには柔らかな光が、まるで袋のように二人を降り注ぐ羽根から護っていた。

「――皐月お姉さま」
「葉月！　危ないから爺様のところに逃げて」
葉月はそう云われるや、素直に拓蔵の下へと逃げていく。

それを見るや、皐月は鳥人間を睨みつけ、
「あんたは私があんたの子供を奪った。そう思ってるだろうけど……　そもそも！　あんたの子供なんてしらない！」
ゆっくりと剣先を鳥人間に向け、言い放った。――その言葉に鳥人間は怒号を挙げた。

「間宮理恵が殺された時、彼女は杜若に触れようとした。だけど、今さっきまでその痛みを体験した私なら理解できる！　殺された間宮理恵は死ぬ間際に杜若に触れている」
そう云うや、鳥人間は含み笑いを浮かべる。

「人間が子を孕み、産むまでの期間は精々九ヶ月前後。十ヶ月なんて掛かっていなかった」
「ちょっと待ってください。確か、田原医師から間宮理恵の妊娠期間は十ヶ月だと。そのことはその場にいた皐月さんだって――」
「通院した形跡は？」
「――――え？」
「間宮理恵が妊娠十ヶ月の間、田原先生のところに通院したのかって訊いてるんです。幾らなんでも十ヶ月も子を孕んでいたら、田原先生はおろか、当の本人だって違和感を感じる――――　この子は生きてるのかって……」
　皐月はあの晩に見た赤く爛れた赤ん坊を思い出していた。

「間宮理恵は中にいた子供が“死んでいた事”に気付いていた……だから子安神社に行って子安神にお参りに行っていた」
「うそよ……　理恵のお腹をかっ裂いて！　中を見た！　その子は元気に動いてたわ」
　鳥人間は目の視点をあわせずに話す。

「間宮雄太がどれだけ酷い男だったとしても、それはあんた達が決める事でしょ？」
「あんたになにがわかるのよ？　捨てられた女の！」
「ええ！　全然っわかんないわよぉ！　そんなことをしてまで子供を得ようとする気持ちなんてっ！」
　皐月は怒号を挙げ、鳥人間を睨みつけた。

「あんたのその歪（いびつ）な形状は“姑獲鳥”といって、他人の赤子を奪う妖怪。でも、それは生まれてきた子供に対してで、決して胎児を奪う事はない！　あんたのやっている事は難産で子を抱けなかった姑獲鳥への、そして間宮理恵に対しての冒涜なのよ！」
　皐月はうっすらと涙を流しながら、咆哮した。

死んだ妊婦をそのまま埋葬すると“姑獲鳥”へと変貌してしまうため、呪(まじな)いとして、帝王切開をし、まだ“人間としてなっていない”胎児を取り出す。そしてその胎児を抱かせ、埋葬する。

「それがなぁに？　私の恋人をうばおうとする女狐どもが、雄太の子を孕めば、殺すのが当たり前でしょ？　だって、彼はわたしのもの！　私のものなんだからぁ！」

鳥人間はそう叫ぶや、羽根を大きく広げ、皐月を覆い隠す。

「ぎがぁ？」

途端、姑獲鳥の表情が崩れる。

「私はまだ、他人(ひと)を好きになった事がないから深くは考えられないけど、あんたの気持ちがわからないわけじゃない。……でもね――」

皐月は血に染まった二本の刀を振るい、血払いをする。

「大切な人を“もの”だと云ってる時点で、あんたはその人に必要とされてない」

「な、何を？」

鳥人間の骸(むくろ)はふたつに分かれ、左右に倒れ落ちた。

「閻獄第二条三項において、人のものを奪い、あまつさえ苦しめ殺したものは『黒縄地獄(こくじょう)・畏鷲処(いじゅうしょ)』へと連行する」

そう皐月が言うや、何処からともなくお札が落ちてきては鳥人間の額についた。

「待って、ねぇ？　待って！」

鳥人間が赦しを請うが、皐月は見向きもしなかった。

玖・僥倖

数日後、阿弥陀警部から連絡が入った。

最初に任意同行していた女性は確かに間宮雄太を殺した事には素直に供述したが、間宮理恵に関しては全く以て接点すらなかったのだ。

逆にもう一人、皐月によって罰せられた女性《姑獲鳥》には、間宮雄太と間宮理恵それぞれともに接点があり、間宮理恵が妊娠していた事も知っていた。そして、それが間宮雄太の子である事も……

「だけど奇妙な話ですよね？」

弥生がそう云うと、大宮巡査は首を傾げた。

「だってもし間宮理恵の胎児が死んでいた事を知っていたら、彼女は殺されなかったってことにはなるんじゃないんですか？」

「それに関してはまだ事情聴取中ですが、いやはや、精神が壊れたのか、全然此方の話をきいてくれないんですよね」

阿弥陀警部が団扇で体を扇ぎながら言う。

「しかし、ビックリしましたよ。てっきり妖怪と化した人は地獄に送られるとばかり」

「彼女は死んでませんからすぐに送られませんよ。でも当然、死ねば地獄に堕ちます。人を殺してるんですから。そもそも生き物が地獄に堕ちないなんて事はないんです」

「――どうしてですか？」

皐月の説明に大宮巡査が首を傾げる。

「例えば夏場に蚊がいるとしますよね？　誰だって刺されたら嫌だから、叩き殺してしまう。だけど、蚊だって生きてるんですから、殺した事になるんです」

「一寸の虫にも五分の魂。生きている以上、それぞれに必ず生きている理由があるんですよ。それに血を吸う蚊は雌で、子供に栄養を与えるためなんです」

そう話されても、やっぱり刺されるのはつらいと大宮巡査は言った。

それに関しては弥生と皐月、そして阿弥陀警部も同意だった。

「それで逮捕された二人は」

「ああ、一人は死刑。もう一人は懲役２０年くらいでしょうね」

それを聴くや、皐月はゆっくりと立ち上がった。

「人間は必ず地獄に落ちる。すぐに天国にいけるなんて無理なのよ。それが何千年、何万年、いや何兆年もの間、死んでは生まれ変わり、死んでは生まれ変わりの繰り返し。それに天国で誰かと再会するなんて無理な話。現世での記憶なんてないんだから――――」

皐月は既に違和感がなくなったお腹を、まるで愛おしく摩っていた。

確かに間宮雄太には、女性を騙したという罪状があるため、地獄に落ちる。

そして間宮理恵とその子供には二度と会う事はない。

皐月はあの晩、自分の目の前に現れた女性は、間宮理恵が姑獲鳥へと成り果てた姿で、爛れた赤ん坊はその胎児だったのではないだろうか……　そして、水の音だと思ったのは、彼女の涙だったのではないだろうか……

皐月はやはりあの姑獲鳥（間宮理恵）が、自分たちと同じに思えて仕方がなかった。

後日談だが、この事件解決以降、皐月の腹部の違和感は日に日に

柔らいていった。ただ、本元の原因は便秘であり、生理は予定通りの周期で来ていた。

玖・僥倖（後書き）

第二話終了です。

壱・通り魔

「うん、そうそう。スカートを二重にしたら、裾にフリルを縫い付けて……」

弥生は重たそうな学生鞄を背負いながら、駅の改札口を通り抜けていた。

「でさ、カチューシャはどうする？　ボトムスと合わせて、縞にするとか」

「うーん。色柄にもよるんじゃない？　合わなかったら、もともこうもないでしょ？」

――――という話をしながら、弥生は友人二人と一緒に帰っていた。

一人は『片桐千夏』といい、背格好は百六十あるかというくらいである。

もう一人は『横山麻実』といい、ボブカットである。

「あ、弥生。今度の土曜、わかってるわよね？」

片桐千夏がそう云うと、弥生は頷いた。今日が火曜日なので、四日後となる。

「弥生は巫女さんやってるから、和装のイメージかな。今度、カタログ持ってくるよ」

「あ、前とうしろの写真だけでいいよ。後は自分でやれるから」

弥生がそう云うと、友人二人は「おー」と声を出して感心した。

弥生もそうだが、皐月、葉月の三姉妹には母親がいない。云ってしまえば弥生が母親代わりとなっている。炊事洗濯もさることながら、裁縫もやっているので、自然とそういうことが得意になっていた。

自分の寸法と、写真に写った服のデザインを見れば、大抵は出来るのだが、さすがにキャラクターや文字がプリントされた服は作れない。

ちなみに神社で着ている巫女服だが、あれは弥生の手製である。

「それじゃ、また明日ね」

そう云いながら、友人二人は手を振りながら、去っていった。

「うわ、寒い」

肩を震わせ、弥生は路地裏を見た。神社までの道程（みちのり）には何故か街灯が設置されていない。

神社近くまで行けば、街灯はあるのだが、それまでがまた長い。

しかもここ最近、この近辺で女性を襲う通り魔事件が多発しており、住民の多くが、その道に街灯を設置しろという働きを持ち掛けているが、どういうわけか、町は行動を示そうとしない。

少しうしろを見れば、駅の周辺という事もあってか、灯（あか）りが点々と輝いている。

弥生は携帯を手に取り、電話をしようとする。が、数分もしないうちに携帯を閉じた。

その表情は何とも云い難（がた）いものだった。そして液晶の時間表記を一瞥するや溜め息を吐（つ）いた。

時間は午後6時。電話しようとした相手は皐月で、この時間、皐月は本堂で座禅を組んでいるか、二刀流の訓練をしていて、集中するがために携帯の電源を切っている。

そもそも耳が若干聞こえないので、期待は余りしていなかった。

少しどころか、だいぶ嫌な顔を浮かべながら、弥生は闇路へと消えた。

今日に限って月が雲に隠れているため、家の灯りが何よりの道標となっていた。

真っ直ぐ歩けば神社なのだが、その距離が嫌になるほど長い。

一粁（キロメートル）ほど離れているため、自転車で行きたかったのだが、先日工事現場の近くを通りかかった時、古釘を踏んだのか、空気が抜け、タイヤのチューブに穴を開けてしまった。

なおせるものがおらず、また修理に出すのも、それはそれで勿体無い気がするというわけで、歩きになっている。

駅を出てから既に三十分が過ぎたころだった。

突然ピューという冷たい風の音が寂しく鳴るや、弥生は周りを警戒した。

――――その時だった。

『っ？』

突然、脹脛（ふくらはぎ）に痛みが走り、弥生はその場で崩れるように転倒した。

「っつぅぅっ」

弥生はちらりと脹脛の方を見やるが、真っ暗でよく見えない。

鞄から携帯を取り出し、液晶の光でそこを照らすや、ゾッとした。

左足の脹脛をざっくりとななめ一線に、まるで鎌か何かの刃物で切りつけたような傷痕があった。

だが、弥生が驚いたのはその事ではなく、一体何時切りつけられたのかという事にあった。

自分は周りを警戒しながら歩いていた。だから普通は誰かが通り抜けていくことに気付いていたはずだ。

それなのに、全くもってそんな“気配”はなかった。

前の方から車のクラクションが鳴ったと思いきや、そのまま弥生の隣りに停った。

そして、窓がゆっくりと開けられると、見知った顔が覗きこんできた。

「あれまぁ、弥生さん？　どうしたんですかなぁ？」

「あ、阿弥陀警部？」

弥生は阿弥陀警部を見やるや、

「そうだ！　あの、さっき変な人が通っていきませんでしたか？」

「んっ？　いや、別にそんな人はいませんでしたよ。ねぇ？　岡崎くん」

阿弥陀警部が隣りで運転席にいる岡崎巡査に尋ねるや、彼は頷いていた。

「それで、一体どうしたんですかな？」

阿弥陀警部は既に弥生の怪我に気付いていたが、その理由がわからない。

「とにかく手当てしましょう。岡崎君、手伝ってください」

そう云うや、阿弥陀警部と岡崎巡査はパトカーから降りると、阿弥陀警部が弥生に肩をかし、車に乗せた。

岡崎巡査は落ちていた弥生の鞄を拾っている。

「そう云えば、阿弥陀警部はどうして？」

「いやね。最近通り魔事件が多発してるでしょ？　それで神主からちょっとばっかしお願いされたんですよ」

いくら阿弥陀警部が知り合いとはいえ、高（たか）が神社の神主にそんな事が出来るのかと弥生は思った。

「それで、切りつけた犯人は見てないんですね？」
見ていないというよりも、そもそも“気配”がなく、それどころか足音すらしなかった――――
いくらなんでも人間なら気配の一つはするものだ。
「そうそう。これも通り魔事件に関する事なんですけどね。どうも、襲われた人たちに共通するのが、脹脛を鋭利な刃物でやられている事なんですよ。　弥生さんと同様に――――」
阿弥陀警部が助手席から話す。
「ちょっと気になるんでね、神主に相談しに行ってたんですよ」
なるほど、と弥生は頭の中にあった疑問が解決した。つまり帰る途中、自分に会ったら、送ってくれと頼んだのだろうと弥生は思った――実際、車は稲妻神社近くへときていた。
「一回家に戻ってから、病院に行きますか？」
「はい、そうします。遅くなって、心配させるのもあれですし」
もちろんこれから病院に行くのだから、心配させてしまう事には変わりない。
車は稲妻神社の鳥居前で停まった、
阿弥陀警部の肩をかりながら、弥生が家に戻ると、皐月が出迎えていた。
「ど、どうしたの？」
「皐月？　あんたご飯作れたっけ？」
帰ってきて、開口一番がこれである。
「うん。まぁ、簡単なのしか作れないけど……　ってか、そんなこと言ってる場合じゃないでしょ？」

「ちょっとやられちゃってね。これから病院に行って治療してもらうから、大丈夫すぐに戻ってくるから」
そう云うと、弥生は家に上がり、阿弥陀警部に自分の部屋の前まで送ってもらう。そして5分くらいで戻ってきた。

「傷は大丈夫か？」
拓蔵が玄関先で弥生に傷の具合を尋ねた。
「はい。最初は結構血が出てたんだけど、今は大丈夫。でも、大事をとって診てもらってきます」
弥生は左足の脹脛を一瞥する。

傷痕からは既に血が止まっており、赤い線がひいてあるだけとなっている。
三姉妹は神仏の力で護られており、多少の傷くらいなら一日くらいで治る。
切り傷ならどんなに深い傷でも、ものの数分で治るのだが、痛みがまだあった。

念のために診てもらうと、脹脛の傷とは別に、捻挫を患っていた。
どうやら痛みが走ったときに、無理な体勢で体を崩してしまったためらしい。
捻挫は全治一週間だが、脹脛を傷つけられた事もあり、大事をとって半日の入院と担当医に云われた。

壱・通り魔（後書き）

弥生の友人名を入れてみました。というかちょい役なので、そんなに深くは考えてません。

弐・顔無

阿弥陀警部や大宮巡査を含んだ、警視庁捜査一課に連絡が入ったのは、現場に着く五分ほど前だった。

一応大事をとって半日入院となった事を稲妻神社に報告しようとした矢先の事だ。

無線から連絡が入り、内容は駅近辺で変死体が発見されたとの事だった。

阿弥陀警部は電話に出た拓蔵に要件だけを云い済ませると、急ぎ現場へと駆けつけたのだった。

――――そして、死体を見るや、否応なしに目を背(そむ)けた。

被害者は見た目からして、４０から６０くらいの、少しぽっちゃりとしたな中年女性だった。――が、その顔面は無残な事に切り刻まれており、顔の判別は先ず不可能に近かった。

「被害者の身元判明は？」

「はい。被害者は沢口(さわぐち)一希(のぞみ)、５２歳の専業主婦、パートの帰りに襲われたようですね」

「――襲われたで済みますかね？」

その問い掛けに、大宮巡査は少し考え込み、

「済まないでしょうね？　被害者に対して加害者がどれほどの怨みを持っていたのかわかりませんが」

大宮巡査の言うとおり、阿弥陀警部も同様の答えだった。

「被害者の勤め先は？」

「駅前にあるスーパーマーケットのようですね。勤務時間は朝８時から夕方５時までで、仕事が終わった後、いつも夕飯の買い物をし

ていたようです」
　まぁ、パートも兼ねた専業主婦なら妥当な時間だろうと、阿弥陀警部は思った。

「最後に見たのは？」
「見た人はいませんでしたが、防犯カメラに彼女が店を出て行くのが映っていたそうです」
「つまり、被害者が襲われる以前のものは見ていないということですね」
　阿弥陀警部はそう云うや、少しばかり考え込んだ。

　夕方くらいだったら、ちょうど弥生が駅を出ていた頃だ。
　スーパーマーケットの入口はちょうど駅の出入口と向かい合わせになっている。
　つまり、弥生が被害者を見ていた可能性があるが、訊こうにも顔がこれではどうしようもない。

「阿弥陀警部。同店員に訊きましたところ、被害者の沢口希はうわさですと、夫が多額の借金を抱えていたようです」
「つまり、そのお金を夫婦でかえしてるってわけですか？」
「いえ、それが――　主な理由が被害者にあるそうなんです。借金の主な理由が宝石関係にあるそうなんですよ。まぁ、夫が小さな町工場をやっていたみたいですね」
「社長婦人というわけですか。大きく見せたいという気持ちはわからないわけでもないですが……　ところで、やっていたということは、今はやっていないということですかな？」
「借金と今の不況が重なって、差し押さえをくらったようです」
「町工場って、今結構注目されてますけどね。人工衛星を作った大阪の町工場とか、痛くない注射針を作ったところとか……」
「でもそれってかなりの技術が必要じゃないですかね？　それに当

たり外れがあるそうですし、被害者の会社はそういう波にのれなかったようです」

大宮巡査の話を聞きながら、阿弥陀警部は被害者の顔を見ていた。

「ここ最近起きている通り魔事件とは……　もしかすると関係ないのかもしれませんね」

阿弥陀警部の言葉に大宮巡査は首を傾げた。

「どうしてですか？　発見されたのは通り魔事件が起きている近辺なんですよ？」

「今まで起きた事件に共通したものは覚えてますかな？」

「えっと、被害者の殆どは脹脛を鎌か何かで切られている」

「稲妻神社の弥生さんもつい先ほど被害にあってましてね。彼女も脹脛に傷をつけられてましたよ」

阿弥陀警部の言いたい事がわかったのか、大宮巡査は被害者の顔を一瞥した。

そして、運び行く鑑識官を呼び止め、遺体を降ろさせた。

「阿弥陀警部、傷がありますが、今までと違いますね」

大宮巡査が確認したのは、被害者の脹脛に傷痕があることだったのだが、それは脹脛の上内側から下外側にかけてだった。しかも、片方には傷が入っていない。

今まで通り魔にあった被害者に共通するものは、多少なりともう片方の脹脛に傷痕があった。それは共通して冷たい風の音が聞こえ、立ち止まった事にある。

人間立ち止まれば、足は少なからずとも揃えてしまう。

「殺した後につけたんでしょうかね？　通り魔事件の犯人がしたとみせかけて」

「だったとしても、こんな事はしないでしょうね？」

阿弥陀警部は被害者の潰れた顔を見る。

「詳しい事は検死結果を待ちましょう」

「検死でわからなかったら……　彼女たちに訊くんですか？」

「そうなりますね。ただ、もう遅いですし、検死結果が出てからにしましょう」

阿弥陀警部にそう云われ、大宮巡査は頷いた。

参・凪

病室の一角（いっかく）にベッドがあり、それを囲むようにカーテンが締められている。時間は既に夜の十時を過ぎており、消灯時間である九時を疾うに過ぎていた。

弥生はベッドに腰をかけた状態で、ガラッと音を立てるように窓を開けると、月の光が暗い部屋の中に入ってきた。

「遊火（あそびび）、入ってきなさい」

弥生がそう云うと、スッと小さく風が吹いた。するとカーテンが少し靡（なび）くどころか、拳大くらいの大きさにへこんだ。

「弥生さま、お呼びでしょうか？」

ボゥと無数の火の玉が現れ、それらが一箇所に集まるや、人の形へと成っていく。

その姿は１０から１２くらいの少女で、髪型はストレート。いわゆる一抹人形などに見られる純和風を思わせる髪形だった。少しばかり違うのは服装が洋風で、頭と腰にフリルのついた大きなリボンを着けている。

少女……遊火は鬼火の一種といわれており、高知や三谷山で城下や海上に見られる鬼火である。鬼火といっても人に害がない大人しい妖怪である。

「弥生さまに云われ、調べましたところ、襲われた道に妖気もその残り香さえ漂っていませんでした」

「あの時、私は警戒してたのよ？　それなのに人の気配は感じられ

なかった」

遊火の言葉が信じられないわけではない。が、現に弥生は警戒していた上で脹脛に傷をつけられている。

「あの道には何かあるわけ？」

「いえ、特には……」

そう遊火が云うと、ハッとした表情で、

「そう云えば、確かあの近くの家で惨殺事件があったとか」

「それ、五年以上も前の事件でしょ？」

弥生がそう云いながら、嫌そうな顔を浮かべた。

「で、それと私が襲われたのに何の関係があるのよ？」

「それが……　あの家には珍しい生き物を飼っていたようで」

「珍しい生き物？」

そう聞き返すと、遊火はスッと左手の人差し指を虚空に突き刺した。

すると何もないところから点々と火の粉が集まり、それらが形を成していく。

遊火自体がひとつではなく、無数の火の玉が集まったものと云われているため、こういった芸当が出来る。

平たく云えば、小魚が群れを成して大きな魚に見せていることと同様と思っていただければいい。

集まり形を成していく火の玉はなにやらひょろ長い動物の形になった。

「――――いたち？」

「“フェレット”というものみたいですね。弥生さまの云うとおり、鼬（いたち）の一種です」

確かに珍しいといえば珍しいが、今の時代を考えるとフェレットを飼っている家はそう珍しいものではない。

「５年前に起きた惨殺事件の被害者は“沢口（さわぐち）　修造（しゅうぞう）”４５歳の男性。死因は体中を切り刻まれた出血死によるものといわれています。犯人は未だに見つかっていません」

「当時は強盗事件とかって云われてなかった？　死体が見つかった部屋の中は荒らされていたって――――」

「ですが……　金目のものはひとつも盗まれていません。それどころか切り刻まれていたようです」

強盗目的による殺人だったら、当の目的である金目のものをそんな風にするとは思えない。

「それと調べていた時、警察の方々が何か集まっていましたが？」

「あそこは最近通り魔事件が起きてるから、パトロールじゃない？」

今の時間だったら、まだ人が通っている可能性がある。

「いえ、それだったら周辺を巡回するんじゃないでしょうか？」

そう云われ、弥生は阿弥陀警部が呼び出されていたことを思い出す。

「何か事件が起きたって事？　警察が集まるほどの――」

「それはわかりませんが」

「わからないって？　あなた鬼火の一種なんだから、霊感がある人にしか見えないでしょ？」

そう怒鳴るように云われ、遊火は泣き出しそうな表情を浮かべた。

「ひゃって、ちぃかずこぉうとしぃたときぃ、かぜぇが急に止まったぁんでぇすよぉ？　怖いじゃないですかぁ？　いきなりかぜぇが止まったりなんかしたらぁ」

愚図（ぐず）り出し、ワンワンと泣き喚き始める。

「ちょ、泣かなくてもいいでしょ？　あなた一応妖怪なんだから」
「でもぉ、わぁたし妖怪ですけど、皐月しゃまにはふぇんふぇんきぃずぅいてもらふぇまふぇんしぃ～～っ」
「それは――――　ほら皐月は幽霊が見えないでしょ？　それに力の弱い妖怪も見えないって云うし」
「ほぉらぁ、わぁたし妖怪じゃないんだぁ」
そりゃまぁ、鬼火とはいえ、人に害をなさない遊火である。力が弱いといわれても否定出来ない。
先ほどもカーテンが拳大にへこんだ時も、本来なら燃えていたはずである。が、実際は燃えるどころか焦げさえもない。

「それにしても、急に風が止まったって事は、少なくともそこに何かがいたって事よね？」
弥生は出来る限り穏便に話を元に戻していく。
「でも、何も見えませんでしたよ？」
「何かがいたって云うのはそう云う意味じゃないの。遊火が近付こうとした時に凪になったということよね？」
“凪”というのは風を意味する几に“止”まるという字が入っている事から、風が止まった状態の事を指す。

「今日の天気予報は北東の風で、夜になると強さを増すって云っていたから、少なくとも風が止まるということは考え難いでしょ」
「――ということは私が見えていた……という事でしょうか？」
「それはわからないけど……　妖怪である遊火が感知出来なかった妖気……　もしかすると妖怪じゃないのかも――――」
弥生が深く考え始めると、遊火がポンッと手を鳴らした。

「そう云えば、あの道って六年前までは狭かったんですよね」
恐らく遊火は特に何も考えないで云ったのだろう。
「狭かったって……　二車線道路だから、そんなに狭くないでしょ

？」

弥生はそう云うが、何故か六年以上前の記憶が曖昧だった。

「違いますよ。昔、あそこは車一台に歩行者がやっと通れる道だったんですよ。道が狭いから車の行き来も出来ないし、何より歩行者に事故の危険性があった。本来あの道は弥生さまや皐月さま、葉月さまが学校に行き来する時間帯は車が通れないようにしていたのに、近道だからって車が無断で通っていたんです。道を広げる際、立ち退きとかもしていたそうですよ。私、拓蔵さまの手助けをしている時から、この近所の事知ってますし」

遊火は七年前に拓蔵が助けた妖怪で、その恩をかえしている。

「そう云えば、あそこって祠があったような……」

「祠？　初めて聞いたけど――――」

遊火の言葉に聞き返すと、

「そりゃそうですよ。だって以前事件があった公園の林にある祠がそれですから」

そう遊火が云うや、何かを思い出した。

「確かあそこって、昔は鼬が住んでたんですよね」

「いたちかぁ……　それだったら“かまいたち”が出てくるんだけど」

「でも“かまいたち”は妖怪ですよ？」

弥生が遊火と会話しているなか、ふとコツコツと机を叩いたような音が聞こえてきた。

「ちょいとあんた……　独り言にしちゃ、でか過ぎるんでねぇかえぇ？」

隣りで寝ていた老婆にそう云われ、二人は互いを見遣った。

「す、すみません。ちょっと演劇の練習をしていたもので」

「ほうかい、たいへんだぁねぇ。あんまり根気詰めると体に悪いからねぇ」
「はい。すみませんでした」
弥生はそう云いながらも、視線は遊火の方に向けていた。

「一度爺様にお話して、もう一度あの周辺を調べてみて」
そう云われ、遊火は嫌そうな顔を浮かべるや、
「そのストレートの髪を両側のみつあみかウェーブをかけて……」
弥生がそう云うと、遊火は髪を抑えながらたじろぐ。

遊火の奇妙な服装は弥生の手製であり、云ってしまえば着せ替え人形と成っている。
弥生のゴスロリ趣味は家族と趣味仲間くらいしか知らず、新作を作る際も先ずは遊火のサイズで作ってみている。

遊火が嫌そうな顔をしているのは、本来日本の妖怪である遊火がそんな中世ヨーロッパ調の服装を好んで着ている訳ではないし、弥生以外の目の前では先に述べたとおり、一抹人形のような服装で現れている。
その最後の砦である長くスラッとした綺麗な長髪を訳もわからないへんな髪型に弄られては、と考えるとやはり命令を聞くしかなかった。

「わかりました。でも危険だと感じたら逃げますからね」
「わかってる。何も危険な目にあわせる訳じゃないでしょ？　あくまで偵察なんだから」
弥生にそう云われ、遊火は一つ溜め息を吐くや、パァと、まるで蒲公英（タンポポ）の綿毛に息を吹きかけたかのような無数の小さな火の玉となって、開けられたままの窓から出ていった。

参・凪（後書き）

遊火の振り仮名がしつこいくらいあったので、最初のところだけを残して、後は削除しました。

肆・未遂

「皐月ぃっ！　ちょっと霊視してくれない？」
昼休み前の給食の時間、友人の『飯塚萌寝（いいづかもね）』に突然そう言われた皐月は、口に含んでいたお茶を吹き出してしまう。

「ちょ、変な事云わないでよ！」
皐月はあたふたと汚れた机の上を拭いたり、何事かと思って皐月の方を見る他の生徒たちに謝りを言ったりしている。

「いやね？　昨日さぁ、ちょっと怪我しちゃって、脹脛を何かで引っ掻いちゃったみたいでさ？」
「――――脹脛？」
皐月は飯塚萌音の脹脛を一瞥するが、何ともなっておらず、疑うように萌音の目を見た。

「いや、本当だって、気付いたときには血がドバドバッて」
「ご飯食べてるときにする話じゃないでしょ？」
他の生徒にそう云われ、萌音は話をやめた。

「昼休みに話すから、教室に残ってて」
そう云われ、皐月は頷いた。

それから昼休みに入るチャイムが鳴り、教室に残っているもの、校庭や他のところへ出て行くものと教室内は疎（まば）らになっていった。

「それで話って？」
「だから脹脛に何か取り憑いてないかなって」
そういわれても、皐月は霊視が出来る訳ではない。

以前の話で説明しているため細かいところは割愛するが、皐月は霊というものが見えない。そもそも萌音の脹脛からは妖気すら感じられないでいた。

「何処で怪我したの？」

「えっと、確か駅前の――――」

皐月が通り魔が起きている場所と言うや、萌音はそうそうと相槌を打った。

「それって昨日の話よね？」

「うん。学校に帰ってから、駅前のスーパーに買い物に行ったその帰り」

「それで誰か近くにいた？」

その問いに答えるように、萌音は首を横に振る。

「近くに花壇があったりとか」

そう尋ねるが、否定するように萌音は手を振った。

「でさぁ？　実際のところどうなのかなって」

「怪我をしたのは確かなのよね？　それなのに起きたときには既に治っていた」

皐月は何かを考えながら、マジマジと萌音の脹脛を見ていた。

「まさかねぇ……」

「え？　何？　なんかわかったの？」

「白昼夢とか？」「っなわけないでしょ？」

皐月がボケるや、萌音はツッコミを入れる。

「ごめんごめん。大体うちは神社だから、霊とか見えないのよ」

「そうなの？　それじゃ無駄骨だったかなぁ……　あっ！」

萌音が自分の席に戻ろうとした時、何かを思い出したのか、慌ててこちらを見遣る。

「昨日の夜さぁ、あそこで殺人事件が起きたって……　恐いよねぇ？　全く町の役人は何してるんだか……」

そう云うや、萌音は自分の席に戻っていった。

その姿を見ながら、皐月は確定してはいないがあるひとつの考えが浮かんでいた。

それは“かまいたち”の存在である。

しかしそれは弥生も感じていた疑問であり、弥生が襲われたのも“かまいたち”というのなら、萌音を襲ったのも“かまいたち”という事になる。

かまいたちは“鎌鼬”とかかれる事から鎌を持った鼬と考えられている。

科学的に云えば“旋風（つむじかぜ）による負圧が人の肌を裂く現象”とも云われている。

余談だが、某有名医者漫画に森の中でロケットを発射する施設があり、その発射による風圧によって一時的に科学証明でのかまいたちが引き起こされるという描写がある。

またかまいたちの伝承が東北地方に多い事から、皹（あかぎれ）（急激な寒さによって皮膚が裂ける事）ではないかという説もある。

が、皐月がそんな小難しく面倒な考えがある訳ではなく、もうひとつの方を考えていた。

それは一匹でのかまいたちではなく、三匹でのかまいたちだった。

一匹目が獲物の足取りを止め、二匹目が皮膚を鎌で切り裂く。

が、三匹目が持っている傷薬によって、その傷はなかった事にさ

れるという。
皐月は今さっきまで相談していた萌音の話を聞く限りではそう考えてしまっていた。
だがそれなら昨日の夕方、弥生を襲ったのは一体なんだったのだろうか……
そう考えていると何時の間にか昼休みは終わりを迎えようとしていた。

肆・未遂　（後書き）

皐月の友人に名前を入れてみました。

伍・立ち退き

「リストラですか？」

阿弥陀警部が大宮巡査とともに、殺された沢口希の近辺を調べていると、町工場自体も結構な借金を抱えていた事がわかり、夫である芳信（よしのぶ）は二重の苦しみを受けていたようだ。

社員を養うにも、工場を運営するにも金は必要になってくる。増してや工場というのは作るのは大前提に、研究費も必要になる場合がある。

「その事を妻である沢口希は知らなかったんでしょうかね？」

「どうやら夫は物作り以外はてんで興味がなかったみたいなんですよ。会社と言ったって、父親がやっていたのをそのままもらったらしいですしね」

そう二人が話している間、工場の前に来ていた。

「それで……　こうなっちゃってるわけですか？」

沢口希が住んでいるところを探してみると、なんともまぁ見事にぼろく、月とスッポンといった感じである。

借金がだいぶあったらしく、その返済に工場全体や、住まいである一軒家とその土地、家具やら金目になるものは全て差し押さえられたらしいが、それでも足りなかったようだ。

「自分の持ってる宝石でも売ればいいのにねぇ」

阿弥陀警部が呆れ顔で大宮巡査を見る。考えてみれば、沢口希が作った借金は、自分を大きく見せようとしたことで招いてしまっている。

「それにしても、工場に一軒家、家具やら何やら……　売っても足りないって、どれだけ借りてたんでしょうかね？」

「確か１０億とか何とか」
それを聞くや、阿弥陀警部は飲み始めていた缶コーヒーを吹き出してしまい、車内のインストアッパートレイの上がコーヒー塗れになった。

「１０億って……　まぁ足りないといえば足りないでしょうね」
「いや、それがまともなところなら、幾らか話がつくんでしょうけど」
その言葉に阿弥陀警部は首を傾げた。が、即座に借金が闇金だったことに気付く。

「利息は？」
「まぁ、オーソドックスにトイチみたいですね」
借金していた金融会社に連絡をするが、まぁ当然と言えば当然ですでに使われてはいなかった。

「皆さんもお金を借りる時は先ずフリーダイヤルかどうかを確認してからかけましょう」
「警部、何処に向かって云ってるんですか？」
大宮警部にツッコまれ、阿弥陀警部は咳払いをする。
「ほら、ちゃんとしたところは大抵フリーダイヤルじゃないですか、でもヤミ金は携帯ですからねぇ」
「逃げれる可能性があるって事ですか？　携帯だから捨てればいいですしね」
そう云うこと――と話しながら、車は工場があった更地に着いた時だった。

阿弥陀警部は「あれ？」と思い、窓を開けると気配を消した。
「警部、どうしました？」
大宮巡査が声をかけるが、阿弥陀警部は人差し指を唇に添え、言

葉を遮った。
そして視線でそれを示した。
「なんですかね？　あれ……」
「いたちみたいですねぇ？」
「何でこんなところにいたちが？」
それはこっちが聞きたいと、阿弥陀警部は目で訴えた。

目の前には薄茶色のいたちが一匹、更地に現れては、ぽつんと立ち尽くしている。
都会とまでは云わないが、それでもいたちが出てくることは珍しい。
遠目だったせいか、確認は出来ないが、どうやら首輪は付けられていないようだった。

「あっ！」
大宮巡査が声を出す。その声に吃驚してではなかったが、いたちは何処かへと去っていった。
二人は車から降り、先程までいたちがいたところを探していると……

「なるほど、こんなところから出てきてたんですね」
それはコンクリートの壁に小さな穴がポッカリと空いており、いたちや子猫くらいの細長かったり、小さい動物なら簡単に出入りできる大きさだったが、成長した猫では入れない大きさでもあった。

「このうしろに家がありますけど、そこで飼ってるんですかね？」
そう大宮巡査が尋ねるが、阿弥陀警部はその答えに気付いていた。
「いや、飼えないはずですよ。だってあそこ、5年前に事件があってから、誰も住んでいないはずですから」

そう話す阿弥陀警部の表情は険しかった。
5年前に起きた惨殺事件の被害者である沢口修造は、殺された沢口希の夫、芳信の兄である。

一つ溜め息を吐くや、阿弥陀警部は大宮巡査とともに車でそちらに回り込む。
そして、玄関前に来て、嫌な物を見た。

「借金返せっ！　この泥棒っ！」
阿弥陀警部は壁一面に書かれている文字を読んでいるだけだった。
「ヤミ金業者はこんな事もしていたんですかね？」
壁の文字はペンキで書かれており、簡単には落ちそうにない。

「おや？　見ない顔だねぇ」
隣りの家から声がし、二人はそちらを見る。
「これはこんにちわ。あの、ひとつ訊いてもいいですかな？」
「ああ、ええよ、ええよ。何でも訊きなされ」
物腰の低い好々爺だなぁと考えながら、阿弥陀警部は質問内容を考えていた。

「実は裏側にある町工場があった更地を見てましたら、いたちが出てきましてね。で、こっちの方に逃げていったんで、確認しに来てたんですよ」
「ほうかい。お前さんたちもあん子らに化かされたんかねぇ」
何か話がずれている気がするが、その事を確認すると、老人はクスクスと笑った。
「昔はなぁ、いたちは狐や狸と一緒で、人を化かすって云われておったんじゃよ」
そう話しながら、老人は沢口修造宅を眺めていた。

「あん子らとは？」
「あそこに住んちょったいたちじゃよ。主人が殺されて、野生に戻る事も出来んかったからなぁ……　わしが育ててておったんじゃよ」
　そう云えば、事件当時どういう訳か沢口修造が飼っているフェレットが見つからなかったと昔聞いたことがあったことを阿弥陀警部は思い出す。

「そのフェレットは今も貴方が？」
「うんにゃ、ネズミ捕りにはいいんじゃがなぁ、やっぱりもといた場所が恋しんじゃろうな」
　老人の家から電話が鳴る音がし、老人は慌てて家に入っていった。

「そう云えば、あの事件も今回と似てるんですよね」
「どう云った事件だったんですか？」と大宮巡査が尋ねるが、阿弥陀警部の話しを聞いた後には、どんよりとした表情で、聞かなかった方がよかったと口にした。

陸・三匹

その晩の事だった。何時ものように阿弥陀警部と大宮巡査が稲妻神社に訪れ、葉月に写真の霊視をお願いしていたのだが――　葉月は目を瞑り難しそうな表情を浮かべていた。

「大丈夫？　葉月」

皐月が声をかけるが、葉月にはその言葉が聞こえていないかのように反応しない。――数分以上、費(つい)やしたが何も聞こえなかったと皆に伝えた。

神主である拓蔵が殺された沢口希の遺体写真を翼々眺めている。

「殺されたのは何時なんじゃ？」

「はい。殺されたのは昨夜の夕方6時半から7時となっていますね」

「えっと、ちょっと待って下さい。確かその時間って」

弥生が驚いた声を上げる。

「ええ。ちょうど弥生さんが道端で血を流していたところを発見した時間帯なんですよ」

「つまりその時に殺されたという事でしょうか？」

そう皐月が尋ねると、大宮巡査はなにやら黒いものを取り出した。

それを拓蔵が受け取り、電灯に翳(かざ)した。

「レントゲンですかな？」

「本当は持ち出し禁止なんですけどね。何枚も撮ってますし、一枚くすねて来ました」

「くすねてどうするんですか、くすねて」

大宮巡査が阿弥陀警部に文句を言っている中、拓蔵はそんなことはお構い無しにジッとレントゲンを見ていた。

「爺様、何かわかったの？」
「こりゃ灯台下暗しじゃなぁ……　実際の死因は脳挫傷（のうざしょう）による出血多量じゃろ？」
　遺体の写真を見る限りでは無残に刻まれた顔が死因だと思われたが、阿弥陀警部もレントゲンを見て初めて本当の死因を知ったようだった。

「脳挫傷って、よくわかりましたね？」
「頭蓋骨と脳の間が変に空洞になっておるじゃろ？　これは脳の血管が切れて、頭蓋骨に血が溜まって脳を圧縮してるからなんじゃよ。脳挫傷の原因は頭部の強打じゃからな」
「どうやら顔を切り刻んでいたのは、身元を判明させないためでしょうね」
「でも、財布の中にスーパーの社員証が入っていたって」
　犯人が見落としたのかと考えていたらしいがそうではなかったらしい。

「触れてなかったって、それじゃ強盗殺人じゃないって事ですか？」
「怨みを持った人間の犯行と考えた方がいいでしょうな」
　まぁ元々顔をここまでしている以上、そう考えられなくもなかったが……

「似てますよね？　あの事件と」
　阿弥陀警部が拓蔵に尋ねる。拓蔵は険しい顔を浮かべながら、弥生を見た。
「遊火（あそびび）を呼んでくれんか？」
　そう云われ、弥生は重い腰を上げると、顔を歪める。

　襖をスッと開けると、ポツポツと小さな火の玉が集まり、形を成していく。

「お呼びでしょうか？　弥生さま」
少女の姿をした遊火が、弥生や拓蔵たちに軽く頭を下げる。
「遊火、昨日云ってたことやってくれた？」
「弥生さまが襲われた近辺はやはり霊力も妖気も感じられませんでした」
「それって、今回の事件は妖怪の仕業ではないと言うことですかな？」
阿弥陀警部がそう云うが、大宮巡査はキョトンとした表情で首を傾げていた。

「あの、阿弥陀警部？　一体誰と話してるんですか？」
大宮巡査の眼前には、三姉妹と拓蔵、そして阿弥陀警部“しか”いない。
「まぁ、霊感のない人には遊火（あそびび）は見えんじゃろうなぁ？」
そう云いながら、拓蔵は皐月を見遣った。その皐月は阿弥陀警部の視線を追ってそちらを見ていたが、実際のところ見えてはいなかった。
ただそこに何かがいると言う微々たるものは感じていた。

「それと事件が起きてから、通り魔事件が起きなくなっているのも妙ですね」
遊火の報告を聞き、阿弥陀警部が少しばかり考えながら、
「確かに今日は、通り魔があったという報告は聞きませんね。事件があったのは大抵夕方5時から夜の8時くらいでしたから」
「遊火？　あんた昨日病室で風が止まったって云ってたけど、今日はどうだったの？」
弥生の問いに答えるように、遊火は首を横に振った。

「被害者の殆どが夕方から夜にかけての時間帯に襲われている。今

回の殺人事件もその時間帯に当たりますから」
「最初は通り魔事件に見せかけた殺人。だけど、その通り魔事件の犯人も、未(いま)だ特定されていない」
皐月が阿弥陀警部を見ながら、葉月の容態を窺っていた。

「皐月、どうかした？」
「いや、今日友達から云われたんだけど、その友達も昨日通り魔に襲われたって」
「どうしてそんな大事なことを言わなかったんですか？」
皐月の言葉を待たずに、阿弥陀警部が寄りかかってきた。
「いや、その友達の脹脛を見ましたけど、何処も怪我してなかったんですよ」
嘘を吐いてるという可能性は？と訊かれたが、皐月は首を横に振った。

「だから通り魔事件の犯人は“かまいたち”じゃないかって」
「それは襲われた私も思って、遊火に調べてもらったけど、何も感じなかったって」
「そこなのよ。かまいたちなら妖怪だから、同じ妖怪である遊火が気付かない訳がない」
そう云われ、遊火は困ったような、申し訳ないような複雑な表情を浮かべた。皐月は見えてはいないが、自分が発した言葉が彼女を傷付けていたことに気付く。
「別に遊火が悪いわけじゃないわよ」
が、抉(えぐ)られた傷が簡単に治るわけもなく、遊火は無言で部屋の片隅に座った。

「かまいたちであって、かまいたちではない……」
拓蔵がスッと立ち上がり、部屋を出て行ったが、数分ほどして戻ってきた。

「それはこれではないか？」
持ってきた一冊の古い書物をテーブルの上に乗せ、その頁を捲った。

『窮奇』と書かれたその妖怪の絵には、いたちではなく、牛のような姿をしている。
「これは中国の妖怪で、名を窮奇というんじゃがな。別の読み方で“かまいたち”とも云われているんじゃ。妖怪図で有名な鳥山石燕の画図百鬼夜行でもそう書かれておるしな」
「こんなに違うのに？」
「昔、日本の知識人は中国にいるものは日本にもいると考えておったらしくてな、窮奇とかまいたちを同一視しておったらしんじゃが……」
拓蔵は遊火を一瞥する。その視線に気付いたのか、遊火もそちらを見遣った。

「窮奇は風神であったことから、同じ風の妖怪であるかまいたちと重ねておったそうじゃよ」
「つまり遊火が何も感じなかったって事は、妖怪以上の力があったって事？」
恐らくそうであろうと拓蔵は皆に告げた。

「じゃが、今回の事件に窮奇は関係ないじゃろう。問題は脹脛に傷を付けられていた事じゃ。かまいたちは地上五十糎までしか飛べなかったと云われておってな、襲われた婦女子の殆どが脹脛に傷を付けられていたことにも納得がいくじゃろ。そして、皐月の友人が襲われたにも拘らず、傷が治っていたことにも説明がつく」
「３匹でのかまいたちなら……という結論って事ですか？」
阿弥陀警部と拓蔵は納得いくようないかないようなといった感じ

だ。

「そう云えば、今日妙なことがありましたね」

大宮巡査が思い出したように言う。

「いや殺された沢口希の近辺を調べて、夫が運営していた町工場に行ってきたんですけど、そこに一匹のいたちがいたんですよ。で、そのいたちが壁の穴を潜って裏の家。――沢口修造の家に行ったんですけど、その家の隣に老人が住んでましてね。沢口修造の家にいたちが住んでいることを云ってたんですが」

「何か納得いってないって感じですね」

そう皐月に言われ、大宮巡査は頷いた。

「私たちは“いたち”を見たと云っただけで、その老人は『あん子“ら”』と云ったんですよ。つまり何匹かがその家に住み着いてる事を知っている」

「まぁ、いたちはねずみとかを食べるから、食べ物に困ることはないでしょうけど」

「でも、可笑しくないですか？　その老人、自分が飼っているような言い回しもしてましたし」

そう聞かされ、拓蔵は阿弥陀警部を見遣った。

「その老人。少しばかり調べてくれんかのう。後5年前の事件も徹底的に洗い直しておいてくれ」

そう告げられ、阿弥陀警部は頷いた。

そんな阿弥陀警部と拓蔵の遣り取りを横で見ていた弥生が、

「そう云えばさぁ、どうして爺様って、阿弥陀警部にああも命令が出来るのかしら？　昨日、私が襲われた時も阿弥陀警部を私の迎えによこしていたらしいし」

弥生の問い掛けに皐月も奇妙に思っていたが、何もわからず首を傾げていた。

漆・終選る

阿弥陀警部が老人の家に行ってから、皐月は弥生と遊火を連れ、通り魔事件が起きている場所へと来ていた。
目を瞑り、神経を集中して、警戒しているが、何も感じない。

「やっぱり妙よね？」
皐月は弥生を一瞥する。両手には既に刀へと変化した竹刀を持っており、既に戦闘態勢だった。

「やっぱり遊火の云うとおり、もうかまいたちはいなくなってるのかしら？」
弥生は隣にいる遊火を見る。
「わかりませんけど……」
そう遊火が云った時だった。

ゾクッとするような冷たい風が地面から吹き荒(すさ)んだ途端、皐月の袴は奇妙なまでに切り刻まれ、ボロボロになった。
体勢を整え、見えない何かとの間合いを保(たも)ちながらも、皐月は防戦一方だった。

「護形(ごけい)・護光(ごこう)の袋っ！」
刀を×印に構えると、周りには光の布が現れ、皐月を護るように包み込むが――――
「えっ？」
光の布は切り刻まれ、その名の通り布切れとなり、消滅した。
そして、零(こぼ)れ弾(だま)に当たったかのように、皐月は吹き飛ばされ、コンクリートの壁に背中を打った。
「皐月ぃ！」

弥生が呼びかけるが、皐月の意識は朦朧としていた。

冷たい風が皐月の周りに吹き荒れ、彼女を殺そうとした時だった。皐月が死力を尽くして上げた一本の刀の刃が、何か別の刃とぶつかる音がした。そして、その先を見るや、小さな動物のようなものが見えた。

「いたち……」

「それじゃ、やっぱり通り魔事件の犯人って……」

かまいたちだったと3人は思ったが、妙だった。

「でもそれならどうして何も感じなかったんですか？」

「若しかして、妖怪になりかけていた？　そしてその力のコントロールが出来なかった」

皐月と弥生、そして遊火の話を待たず、いたちはその爪で皐月の脹脛に切り刻んだ。

痛みが走り、崩れるように倒れた皐月は、さすがにヤバイと思ったが、妙だった。

いたちは皐月から離れていく。そして何処から出てきたのか、もう一匹が姿を見せていた。そして何かを探しているようにも見えた。

「若しかして……　もう一匹を探してる？」

それは言い得て妙だった。二匹のいたちは耳を澄まさないと聞こえないほどの可細い鳴き声が聞こえた。

しかし耳が悪い皐月でさえ聞こえるほどの音にも拘らず、弥生と遊火は耳を塞いでいないため、騒がしくはない。

途端、弥生の携帯がけたたましく鳴り響いた。その音に吃驚したのか、二匹のいたちはそそくさと逃げていく。

「まっ……！」

皐月は追いかけようとしたが、足に痛みが走り、思うように立て

ない。
その後、大宮巡査が車でやって来て、二人を乗せた。その先は沢口修造の家だった。

そして開けられた部屋の中には奇妙なものがあった。
「ゲージ？」
それは動物を入れる籠が3匹分あり、ご丁寧に名前までつけられている。
「何もかも腐ってますね」
近付けば近付くほど、鼻を曲げるほどの異臭を放っている。
そして動物と思われる白骨死体がそこにあった。
「これをあの子達は探していたってこと？」
それを答えるように何処から入ってきたのか、スーと2匹のいたちが現れ、その死体に寄り添う。

「かまいたちは一匹でもあり、三匹でもある。でも、それじゃどうして皐月の友達は怪我をしたのに怪我が治ってたのかしら？」
弥生の言葉がわかったのか、一匹のいたちが弥生の足元に寄り付く。弥生は驚いて除けようとするが、
「大丈夫。その子たち、元々から敵意はなかったみたい。ううん、私が敵意を見せていたのが駄目だったみたいね」
大宮巡査に肩を貸してもらっている皐月がそう云う。

「だって、若しその子達に敵意があったなら、あの時私の顔を切り刻んでいたはずだから」
その問いに答えるように、いたちは何時の間に開けられたのか、違う部屋へと案内する。

その部屋は壁一面が切られており、おかれている家具や衣服も同様だった。

「これが5年前に起きた事件の現場って事ですか？」
大宮巡査が入ってきた阿弥陀警部を一瞥し、問い掛ける。

「大宮くん。急いで鑑識班を、ちょっと嫌な事になりましてね。自殺してるんですよ。隣に住んでいた老人が……」
「自殺って、一体どういう？」
弥生にそう訊かれ、阿弥陀警部は煙草を咥えるや、一服する。

「首吊り自殺。遺書には沢口希を通り魔事件に見せかけて、背後から金槌で頭を強打した」
「それじゃ、顔を切り刻んだことは？」
そう尋ねるが、阿弥陀警部は首を横に振った。
つまり顔を切り刻んだのは別にいるという事だ。が、それが何なのかはすぐにわかった。

「若しかして、この子たちが？」
大宮巡査がそう云うが、信じられなかった。
「それと調べてみて、妙な事があってですね。死体が少しばかり変色してたんです。私たちが老人と会ったのは今日の午後5時くらい。死体は変色していた事から死後一日以上は経っていたという事になるんです」
「ちょ、ちょっと待って下さいよ？　一日？　だって僕と阿弥陀警部がそのおじいさんにあったのって」
大宮巡査の言うとおり、計算が合うはずもない。

「沢口希を殺した後に自殺したものと考えたら……、ご丁寧に遺書の横には、血がついた金槌がありましたからね。老人が殺したと考えてもいいでしょう」
しかし昨日死んでいたとしたら、阿弥陀警部と大宮巡査が今日の昼頃、老人を見る事は不可能になる。

「そう云えば、老人が妙な事を言ってましたなぁ。いや、そう考えてもいいですかね？」
それはあの時老人が言った言葉だった。

『いたちは狐や狸と一緒で、人を化かすって云われている』
それが妙に当たっていた。するとあの老人はいたちが見せていた幻だろうか……

「皐月、どうする？　今回に限っては罰するのも」
弥生がそう尋ねると、皐月は2匹のいたちがどうして、自分を殺さなかったのかが気になっていた。気配を消し、あまつさえ皐月を倒しており、少なくとも皐月よりかは強い。
「あなたたちは老人が沢口希を殺す事に気付いていたって事？」
二匹のいたちは白骨死体に寄り添い、皐月と弥生を見ていた。
それを見て、皐月は最初から覚悟しての事だったと悟る。

「閻獄第五条十一項において、己が力で人を騙した罪により、そのものら“3名”を大叫喚へと連行し」
皐月は振り上げた刀を2匹のいたちに振り下ろした。
「その前に閻魔さまにお願いして、あなたたちの大好きな飼い主に逢いなさい」
皐月が少しばかり微笑み、そして横一文字に切った。がいたちの影はそこにはなかった。

「また大雑把な連行ね？　十六小地獄の何処なのかも云わないで」
弥生が呆れたように云う。大叫喚地獄に限らず、全ての地獄には16の小さな地獄を纏めたものである。
罪状によって、その深さは異なり、また条件によっても連行される場所も変わっていく。

皐月は本心ならば、それよりも罪の軽い地獄にしようとしたが、少なくとも人を傷つけている以上、そうは出来なかった。

「でも瑠璃さんがどうにかするかでしょ？　運良く逢えればいいけど」

そう云いながら皐月は気を失うようにその場に倒れた。

捌・家族

事件解決の報告が来てから一週間後だった。稲妻神社の境内には、見るからに重そうな胸を持っているにも拘らず、華奢な体系をした女性が、なにやら拓蔵と楽しそうに話し込んでいる。

「あれ？　おばあさん来てたんだ？」

皐月と葉月がその女性を老婆と云った雰囲気で声をかけた。が、女性の見た目はどう見繕(みつくろ)っても２０代にしか見えない。

その女性が二人に気付くや、皐月に対して少しばかり睨みつけた。

「皐月？　あんた闇魔さまが呆(あき)れてたわよ？　よくもまぁとんでもない罪状を叩き付けたわねって」

「いや、だって、結局あの子達は阿弥陀警部にヒントを与えていたし、そもそも通り魔事件だって、沢口芳信を騙していた妻の希を、飼い主の沢口芳信が殺す前に切り離そうとしていたんでしょ？」

老人が住んでいたあの家は沢口夫妻の家で、売り払われてはいたが、隣の家が殺人事件があったことから、買うものがいなかった。

そしてあのいたちたちは、５年前に沢口修造が亡くなった後、弟の芳信が引き取っていた。

「私を負かすほどの力を持っていたにも拘らず、“誰も殺してない”んだから、少しは大目に見なさいよ」

皐月の云うとおり、かまいたちは最終的には誰も殺してなどいない。通り魔事件もそうだし、沢口希の顔を切り刻んだ時も既に息絶えた後にやっている。

「そうは云ってもねぇ？　こっちは小さな罪でも罰しないといけないのよ」

女性は呆れながら云う。

「それはおばあちゃんの仕事でもあるんじゃないの？　脱衣婆（だつえば）なんだし」

葉月にそう云われるや、女性、脱衣婆は溜め息を吐く。

「最近は死ぬ人間が昔より多くて、天手古舞（てんてこま）いなんだから、余計な仕事増やさないでよね？」

「愚痴らない愚痴らない。それであのいたちと飼い主は逢えたんかな？」

拓蔵がそう訊くと、脱衣婆は頷いた。

「幸せそうだったわよ。先に死んでいたいたちも……　そして沢口芳信も」

結局は離されるが、それでも一時の安らぎではあった。

「それと妻の沢口希にはあわせていないわ。そもそもの元凶はあの女だからね」

「それはあのいたちたちが一番わかってるんじゃないかしら。微かにあの家には誰かに対しての怨みの念があったから」

飼い主である沢口修造はもちろん、弟である芳信に向けられたものではない。ならば消去法で残った希に対してのものだったのだろう。

「浄玻璃鏡（じょうはりのかがみ）に映った沢口希がいたちをいじめ殺していたのが映ってね、それがあの子達の怨みの原因だった。でも、動物である自分たちではどうする事も出来なかった。だから“かまいたち”の力で婦女子を襲っていた」

「それじゃ、あの子達はもとから妖怪だったって事？」

道理で強いはずだと、皐月は納得した。

「何かに傷を付けられていた時に沢口修造に看病してもらっていたらしいわね」

それは恐らく5年前に起きた事件よりも前の事だろう。

「遊火が妖気を感じられなかったのは、妖怪としてではなく、普段はただのいたちとして生きていたからだと閻魔さまは云ってたわ」
それがもし本当だったとしたら、敵にまわさなくてよかったと皐月は心から思った。

「話が長くなったし、お暇（いとま）するわ。“こっち”に長くいると閻魔さまに怒られるしね」
そう云って、脱衣婆はスッと立ち上がり、何処から出したのか、死神が持つような大きな鎌で虚空を切った。そこには裂け目が出来ており、その先に赤い川が見える。それが俗に言う三途の川である。

「少しお茶をしていけばいいのに」
弥生が誘うが、脱衣婆は首を横に振って苦笑いを浮かべる。
「今日は報告だけ。それに仕事しないと恐いからね、うちの“旦那”は」
脱衣婆は閻魔大王の妻だという説がある。脱衣婆はその裂け目に入るや、裂け目はスーッと消えていった。

事件以降、あの場所での通り魔事件は起きなくなり、加えて前々から望まれていた街灯設置の工事が始まった。
ただ皐月と弥生には、その場を通る度に聞こえる、小さくて可細い風の音が、人に助けてもらい、そしてその人の怨みを晴らしたかまいたちの鳴き声のように聞こえていた。

捌・家族（後書き）

第3話終了です。

壱・聖夜

雪が深々と降り頻っている夜の街中で、いくつものカップルが肩を寄せ合いながら歩いている。

そんな中を「はぁ」と溜め息交じりに白い息を吐きながら、大宮巡査は人込みの中を歩いていた。

取り敢えず彼の名誉のためにも云っておくが、全くもてないというわけでもない。

高校時代に彼女はいたが、まぁ自然消滅と云った感じに別れており、規則が厳しい警察学校では、そんな余裕すらなかった。

さらに云えば、現在の職業である警察は主に不規則な生活のため、出会いが余りないといわれている。

頭や肩に積もった雪が何とも物悲しく思えてしまう。

そんな彼に追い討ちをかけるように、街中では“ジングルベル”の音色が鳴り響いていた。

「くぅっそー、なぁにがクリスマスだよ？　日本はいつからキリスト教の国になったんだぁ？」

と愚痴を零すが、彼自身、惨めになるのは目に見えており、さらには叫んだ事で、周りのカップルが面白がって囁きあっている。

その声は街中の騒音に掻き消され、大宮巡査の耳には入らなかったが、場の空気で感じ取り、先程コンビニで買ってきたおでんを片手に、急ぎ足で警視庁へと戻っていった。

十二月中旬。年末ということもあってか、どこの警察も遽しかった。

道路の凍結による車の事故や、宴会などの酔っ払い。

それに便乗した痴漢に置き引きなど、あまりの多さに猫の手も借

りたいほどに忙しいのである。

「おー、やっと戻ってきましたか？」

阿弥陀警部とその同僚たちが警視庁刑事部に戻ってきた大宮巡査に声をかけた。

「雪の中大変でしたでしょ？」

阿弥陀警部が侘びを入れてはいるが、視線は既にテーブルの上においたおでんに向けられている。

「あれ、卵は？」「売り切れてました」

「餅巾着は？」「同じく売り切れてました」

この時期になると、暖かい料理はすぐに売り切れる。

「おはぎは？」

「パックでならありましたけど、どうしておでんを買ってくるのに、おはぎなんですか？」

と大宮巡査がツッコミを入れるが、そう発した西戸崎（さいとざき）刑事は指を振りながら、

「甘いな坊主、おいの地元じゃおでんと一緒に買ってくるってのが常識ったい」

「いや、それ貴方の地元だけだと思いますよ」

阿弥陀警部がそう云うや、西戸崎刑事は分が悪い表情を浮かべた。

因みに西戸崎刑事の地元は福岡の小倉（こくら）である。

「さぁ、腹拵（はらごしら）え。これからもっと忙しくなりますよ」

阿弥陀警部の号令を聞いた時だった。課内の電話機がけたたましく鳴り響いた。

「はい。警視庁捜査一課……」

阿弥陀警部を含む刑事部の人間たちがその電話に耳を傾けた。

「場所は……」

そして電話は終え、すぐさま対応していた女性警官が皆に件を伝えた。

「浅葱橋の近くで男女の変死体が発見されたとの通報です。両遺体の左小指には赤い糸が付けられていたとの模様。恐らく心中による飛び降り自殺ではないかと」

そう告げられ、阿弥陀警部や西戸崎刑事は口に含んでいたものを喉に無理矢理通した。

「心中――ですかな？」

西戸崎刑事は阿弥陀警部の問いに「うーむ、どうかなぁ？」と答える。

「ただどこで死んだかだな。橋の上から落ちたっていう報告じゃねぇんだろ？」

電話の対応をしていた女刑事にそう尋ねると、彼女は頷いた。

「つまり、運良く浅葱橋の近くで見つかったんだ。運が悪けりゃ東京湾でどざえもんだろうよ？」

確かにと、阿弥陀警部はコートを羽織り、警視庁を出た。

現場に到着すると、既に野次馬が死体の周りを囲んでいた。

「あぁ、すみませんねぇ。ちょっと通りますよ。大宮くん、ちょっとこの人たち退かしてくれませんかね？」

大宮巡査が野次馬の整理をしている間、阿弥陀警部と西戸崎刑事は既に水死体の様子を窺っていた。

「やっぱり心中ですかね？」

「報告だと、左手の小指に赤い糸が結ばれていたようだな」

なんともまぁ、時代劇にありそうな心中だ。と阿弥陀警部は思った。

「しかし問題は本当に飛び降り自殺なのかだが……」

西戸崎刑事は浅葱橋を見上げた。橋にも野次馬が集まっている。

「全く見世物じゃないんじゃぞ？」
「まぁ仕方ないでしょ？　他人の命なんて知ったこっちゃないんでしょうから」
「ＴＰＯを弁えんか……　時代の流れというのは、便利であって残酷じゃな」
西戸崎刑事には、煌々と輝く繁華街の中で、さらに携帯のフラッシュが死んだ二人を嘲っているように感じていた。
職業柄、命というものを感じているからこそ、その光景が理解出来ない。
カメラを撮っている彼らからすれば“珍しいから”という理由だけで片付けられるだろう。

それは橋の上からではなく、周りを囲んでいる興味本位の野次馬たちもちらほらとだが遣っている。整理をしている警官が止めに入ってはいるが効果はないに等しかった。

「髪に血がついておるから、やはり転落死かのう？」
「いや、それだったら他の部分にもついているはずですから、撲殺した後に流したんじゃないですかね？」
「上流からか？　それじゃったら、どっかで引っ掛かっておるじゃろうよ？」
阿弥陀警部は西戸崎刑事の言葉を耳に入れながら、ふたつの死体を調べていた。
両方の死体にはご丁寧に財布があり、身元は直ぐにわかった。

ふと左手をみると、両者の薬指には指輪が付けられている。
「結婚指輪でしょうかね？」
阿弥陀警部はそう考えながらも、財布の中身を確認する。
男性の名前は『堂本　鋼』、２４歳　ＯＸ社社員と判明した。

女性の名前は『梨元　美亜（みあ）』、２２歳　ＯＸ社社員と判明した。

確認を取ると、梨元美亜は今年入ったばかりの新入社員だったことがわかった。男の方、堂本鋼はその梨元美亜と同じ大学の先輩に当たるようだ。

「えっと……」

自分の考えはお門違（かどちが）いだったのかと自問する。

「若しかしたら、結婚じゃのうて、婚約かもしれんな」

西戸崎刑事がそう呟く、それに対して、阿弥陀警部は尋ねた。

「まぁ後は確認じゃが、仏さんは携帯を持ってはおらんな……　犯人もそこまで馬鹿ではないという事か」

「そうなると、やはり転落ではなく、撲殺。殺した後に両者の左手小指に赤い糸を結んで流した」

死体は冷水に晒されていたせいか、既に硬直状態が始まっていた。

「川に投げ捨てたのも、死亡推定を紛（まぎ）らわすためでしょうかね？」

「まぁ発見が早かったのが、何よりの救いじゃろうなぁ」

そう呟きながら、西戸崎刑事は女性、梨元美亜を見た。

皮膚はふにゃけてはいたが、その美貌は少なからずとも保たれていた。

もしこのまま海の藻屑（もくず）となっていれば、時間が経つにつれ、腐敗によって変わり果てていただろう。

深々と降り頻る雪がふたつの死体に降り積もっていく。

それはまるで、何かを隠しているかのように……

壱・聖夜（後書き）

第四話開始です。今回は少し毛色が違います。

弐・虚飾

「真っ赤なお鼻のトナカイさんはぁ～、いつもみんなぁのわぁらいもの」

と、鼻歌交じりに歌っているのは葉月だった。

三姉妹の中では一番小さく、ドライな雰囲気がする彼女ではあるが、やはり年相応にクリスマスは楽しみにしている。

神社の娘なので、一応場違いではないし、そもそも12月は祭っている倉稲魂神への感謝の気持ちを込めての催しも行(おこな)っている。五穀の神へのお供え物も用意し、ケーキは弥生が毎年手作りしている。

小麦や作物は農家の人たちが感謝の形として、この時期に無料でくれるので、経済的にも助かっている。

稲妻神社の稲妻の語源は雷光が稲を実らせるという意味もあるし、もう一つ祭っている大黒天も田の神として信仰されている。

――ただ、その大黒天は違う形でだが……

「くぅらいよぉみぃちぃはぁ～」

葉月は楽しそうにクリスマスツリーの飾り付けをする。そんな葉月を見ながら、風呂上がりの皐月は長い髪を櫛(くし)で梳(と)かしていた。

「皐月ぃ？　爺様見なかった？」

廊下から弥生の声が聞こえ、皐月は出かけたと答える。

「何か、用があるからって……　なにそれ？」

皐月は半ば諦めたような感じに尋ねた。

弥生は片手に紙袋を持っており、ニコニコ顔でこちらを見ている。

「葉月ぃっ！　ちょっとおいでぇ」

弥生は葉月を手招きした。葉月は作業を止め、なんだろうと思いながら、弥生の元へと駆け寄っていった。

「さっき、やっと葉月のが出来たからね」
弥生は紙袋を下ろすや、ゴソゴソと中身を出した。
「はい。クリスマスはやっぱりこれでしょう？」
そう言いながら、パッと広げた服はサンタクロースのコスチュームだった。
「年に一度のクリスマスなんだし、羽目を外さないと」
弥生は葉月に服の上からでいいからと、サンタのコスプレをさせる。
女の子用という事もあってか、下はスカートになっている。
綿が入っている事もあってか暖かく、首元を縛る紐の先には綿帽子が着けられている。
「ありがとう。弥生お姉様」
笑顔でそう言いながら、葉月はツリーの飾り付けに戻った。

「うん。やっぱり子供はああじゃないとねぇ」
「んぐぅ……　な、なに？」
皐月は弥生のただならぬ視線にピクッとした。

それから少しばかり経っての事だった。
「うん。私の目分量に間違いはない」
そうキッパリと言いながら、弥生は皐月を見やった。が、その皐月は、今にも湯気が出そうなほどに顔を真っ赤にしている。

「なぁんで、私のまで作ってるの？　しかも、スカート短いし……」
皐月は座り込み、両手でスカートの裾を押さえている。
彼女も弥生が作ったサンタのコスプレを半ば強引にさせられていた。
葉月と少し違うところを云えば、葉月のスカートは悠々と足元まであるにも拘らず、皐月はミニスカートである。

「それはただ単にあんたの足が長いからでしょうが」
「狙ってやったでしょ？　絶対狙ってやったでしょ？」
皐月は立ち上がる事が出来ないでいる。というのも、スカートの裾は彼女の膝上十糎（じゅっセンチ）までしかなく、立った状態だと油断すればショーツが見えるほどだった。
「だったら、スパッツかズボン履いてきなさいよ」
弥生は呆れながら言うが、本心はしてやったりである。
風呂上がりということもあってか、皐月はズボンを履いていなかった。
弥生はそのタイミングを見計らって持ってきていたのを、皐月は後で気付いた。

そんな二人の遣り取りを知ってか知らずか、葉月は楽しそうにクリスマスの歌を口遊（くちずさ）びながら、飾り付けをしていた。

「おう、今戻ったぞ」
玄関先から神主である拓蔵の声が聞こえ、皐月はドキッと肩を震わせた。

「ちょ、何か上にかけるやつない？」
「なに慌ててんのよ？　別に見られたって減るもんじゃないでしょ？」
「減るわよ！　何か色々！」
皐月は頭が混乱していて、何を云っているのか自分でもわからなくなっている。

「ほら、そこに爺様の丹前（たんぜん）があるから、それ着たら？」
皐月はそう云われて、壁にかけてあった拓蔵の丹前を取り、それを羽織ったちょうど、拓蔵が居間の障子を開けた。

「なぁにをやっとんじゃ？　皐月ぃ。人の丹前なんぞ着よってからに」
「あ？　えっと……　お帰りなさい……」
首を傾げる拓蔵に対して、皐月は引き攣った笑みを浮かべる以外に選択肢がなかった。

◇◆◇◆◇

「あれ？　誰か来たみたい」
玄関のチャイムが鳴り、それに気付いた弥生がスッと立ち上がった。
時間は既に夜8時を過ぎており、皐月と葉月は夫々《それぞれ》の自室に、拓蔵は社務所で整理をしている。
皐月は耳が少しばかり不便で、微かなチャイムの音は聞こえていないし、葉月は帰ってくるなり学校の宿題を終わらせてから遊びに行ったりしているので、今は部屋で明日の予習をしている。
拓蔵に関しては、まぁ人任せに近い感じで、無視を決め込んでいた。

ガラッと玄関の引き戸を開けると、そこには笠を被った少女が立っていた。
――こんな時間に？と弥生は思ったが、そのうしろには脱衣婆（だつえば）（＊窮奇（かまいたち）参照）の姿があった。

「おこんばんわ」
陽気な声で挨拶をしてくる脱衣婆に対して、少女は挨拶もせずに家の中へと入ってくるや、「拓蔵！　拓蔵はおるかえ！」と叫んだ。

「おやまぁ？　珍しい客人じゃな？」
拓蔵が社務所から玄関にやって来るなり、少女を見るや顎を摩っ

た。
「その癖はわたしに逢うてから四十年あまり経っても、まったく変わりませんね。自分に都合が悪くなるといつもそうでしたから」
拓蔵と少女の遣り取りを聞きながら、弥生は脱衣婆の方を見やった。

「にしても、あなたほどの人が直々にこちらに来られるとは、いやはら何を考えているのやら」
「久し振りに逢うたので無駄話もしたいところですが、わたしも五七日の地獄裁判を控えておりますし、脱衣婆も年末特有の事故などで亡くなった死人の整理をしないといけませんしね」
年末特有というのは、宴会などで羽目を外した結果の飲酒運転や、凍死などが多い。
「ですから余りない時間を割いてあなたたちのところに来ました。そう云うことですから時間もないので早速本題に入ります。あなたたち、浅葱橋は知っているでしょ？」
少女がそう尋ねると、神主は少しばかり考える。
「浅葱橋って云ったら、ここより少し離れた繁華街と民宿街で挟まれた川に掛かってる橋の事ですかな？」
拓蔵がそう尋ねると、少女はコクリと頷き、話を続けようとしたが、
「にしても、極寒地獄じゃあるまいし、何時までも客人をこんなところにいさせないで、中に案内しなさいよ」
脱衣婆の一言で、弥生と拓蔵は少女と脱衣婆を居間のほうへと案内した。

少女の話だと、先ほど奇妙な話を橋の両端に建てられた地蔵を通して知ったという。
「奇妙な話って？」
何時の間にか、居間に入ってきていた皐月と葉月が少女にそう尋

ねる。
　そんな二人を見ながら、少女は目の前に出されたお茶を飲み干した。

「ええ。わたしはそこらに建てられた地蔵を通して、露世のありとあらゆる出来事を見てきています。さすがにそのことは知っているでしょ？」
　そう云われ、皐月たちは頷く。
「ですが？　先日から浅葱橋にいるはずの橋姫の姿が見えないのです」
　橋姫とはその名の通り、橋に纏わる守護神である。元々は橋から進入してくる外敵から護るため、橋に祭られた神とされているが、
「まぁ、この時期だからね？　あの生娘が、あの日を思い出していなくなったんじゃないのかって、最初は思ってたんだけどね……」
　脱衣婆が呆れながら云う。

「それなら別に二人が来る理由にならないんじゃない？　時期が過ぎれば勝手に帰って来るでしょ？」
「浅葱橋で殺人事件が起きたから、余計に気に掛けてるのよ？」
　脱衣婆の言葉にその場の空気は凍りついた。

弐・虚飾（後書き）

瑠璃（この時は少女ですが）の口調を変えました。後々凄い丁寧な感じに描いているので、統一させました。

参・原因不明

ふたつの死体の検死結果が出たのが事件から一両日経ってからだった。

死因は阿弥陀警部と西戸崎刑事の見分通り、撲殺と判明されているが、どうも男性“堂本鋼”のほうは違うようだった。

「絞殺痕？」

阿弥陀警部が鑑識の湖西主任にそう訊くと、

「あんたらが発見した時はわからんかったのか？」と逆に聞き返された。

「縄の痕（あと）じゃよな？　でも浅葱橋で見た時はそんなのなかったぞ」

西戸崎刑事の言葉に阿弥陀警部と大宮巡査は頷いた。

「つまり後から出たとでもいいたそうじゃな？」

「堂本鋼の死亡原因は絞殺による窒息死なんですか？」

「いや、一緒に発見された梨元美亜と同様、脳髄まで達したさいの出血多量が致命傷じゃが、彼女には絞殺痕がなかった」

つまり犯人は二人を絞め殺そうとしたが、予定をかえて撲殺しようとした事になる。が、それなら梨元美亜の方にも絞殺痕が出来ているはずである。

「睡眠薬などによる可能性は？」

「そう思って血液検査もしたがな、薬物反応はなかったよ。あと、奇妙な事もわかった」

「奇妙な……こと？」

湖西主任はホワイトボードに二本の棒を描き、その間に“浅葱橋”と書いた。次にその上下に川の簡略図を描いた。

「発見された場所は繁華街側の川岸じゃったな。で、死亡推定時刻から見て、その時間橋の上は賑わっておる」

死亡推定時刻は、二人とも同時に殺されたものと考えて、夕方5時から6時前後と見られている。その時間だと繁華街と民宿街を挟んだ浅葱橋の上は否応なしに賑わっている。

「じゃから“橋の上から落とす”なんて事は出来んなぁ？」

「えっと？　湖西のじいさんよぉ？　全然話が見えんちゃけど？」

西戸崎刑事が湖西主任に訊ねるや、

「女性の方の仏さん……　指と指の間が膠着しておらんかったんじゃよ」

膠着とは物と物がくっつく事を指す。つまり、湖西主任の話では、浅葱橋より上から流れ着いたのなら、その間に体が固まり、さらに言えば冷水と化した川だと体が凍りついたりという現象が起きても不思議ではない。

しかし、梨元美亜に関してもそうだが、堂本鋼にもそのようなものが見られなかった。

「ようするに湖西主任の話だと、通報された時にはまだ生きていたということですか？」

大宮巡査がとんでもない発言をした。

――撲殺された死体が岸に這い上がったとでもいうのか？と阿弥陀警部と西戸崎刑事は思った。

「いや、それはありえんじゃろう。何せ撲殺された人間が生き返るということは先ずない。じゃが、ありえん事ではないじゃろうな」

そう云うと、湖西主任は4枚の写真をホワイトボードに貼った。

写真は殺された二人の全身写真が前後二枚ずつである。二人とも裸で撮られているが、違和感はすぐにわかった。

「――――擦り傷がない？」
川の水が1米前後の深さがあるため、川底には上からでは見えない岩などがあっても不思議ではない。つまり本来なら流されている間に打つかって出来た痕があるはずなのだ。
しかし4枚の写真からでは、その痕が見つからなかった。それどころか、橋から落としたのならばそれに伴って出来る大きな傷痕すら見当たらなかった。

「解剖して骨やら内臓破裂等々も確認したが、その様な痕もなかった」
「つまり犯人は発見された場所に死体を置いたと？」
「現実的に考えればそうなるな」
現実的に……と湖西主任は口走った。

「現実的じゃないとすれば？」
西戸崎刑事がそう云うや、湖西主任は分が悪そうな顔を浮かべた。
「現実的でないとすれば、流れている間に岩にぶつからなかったということじゃよ。ありえんじゃろ？　死んだ人間が“意図的に避ける”なんてこと」
確かに意識のない人間にそんな芸当は出来ない。

「人間は死ぬ死なない関係なしに水に入れば浮かぶもんなんじゃよ。それは体内の空気が浮き袋となっておるからな」
そう話す湖西主任の口調が、いかんせん納得していないようだった。

「どうかしたんですか？」と阿弥陀警部が訊くや、
「あの川は水深一mもないんじゃよ？」
「それがどうし……」
西戸崎刑事が言葉を止め、阿弥陀警部を見やった。阿弥陀警部も

西戸崎刑事が何を感じたのか、直ぐにとはいわなかったが、理解出来た。

「発見された浅葱橋の両側は昼夜問わず人で賑わっている。水深1m（メートル）もない川で、死体が流れてなんてしたら、気付かない訳がない。必ず誰かが気付くはず！　それなのに、通報が来たのは、死体が浅葱橋の川岸に打ち上げられてから……」

「それじゃ、死体は川に流されたのではなく、矢張り運び込まれ……」

西戸崎刑事が机を力強く叩き、大きな音を出した。

「それはないだろ！　人で溢れてる中、どうやって大人二人もの死体を運び込む？　誰にも見付からずにだ！」

云われてみれば確かにそうだ。さっきも云った通り、浅葱橋は人で賑わっているため、台風などで天候が悪くなるか、余程の事がない限りは周辺に人がいなくなる事はない。

「水に浮かんでもばれない方法……　若しかして、浮かばなかったというのは？」

「足に錘（おもり）か何かを付けてか……　無理じゃろ？　川が氾濫（はんらん）でもしない以上、人が流れることはない」

「それじゃ、どうやって……」

西戸崎警部と阿弥陀警部が途方に暮れていると、湖西主任は少し溜め息を吐くや、椅子から立ち上がった。

そして、壁にかけられていたコートの内ポケットから手帳らしきものを取り出した。

「あんたら……　稲妻神社って知っとるか？」

そう云われ、二人は少しばかり考えてから頷いた。

「――名前くらいなら……」

「其処の神主に頼るといいじゃろ？」

「なっ？　一般市民に頼るってのか？　それは幾らなんでも駄目だろ？」

西戸崎刑事が狼狽するのも無理はない。警察が“自分たちではわかりませんから答えを教えてください”と自ら白旗を上げているようなものだ。

本来殺人事件ともなれば、先ず目撃情報が必要になり、次に犯人の特定と繋がっていく。

目撃情報がなければ、周辺に事件と関わりのあるものがないかを探し出す。それがなければ被害者周辺の聞き込みから犯人の特定へと繋がる場合もあるが……

そもそも、被害者が殺されてから発見されるまで……僅か半日もない。

しかも、その間に人がいなくなる事が、先ずありえない時間帯でもあった。

「行ってみますかね？」

「おい？　本気かよ？」

否定する西戸崎刑事とは違い、阿弥陀警部はまるで藁をも掴む思いだった。

肆・愛姫

「殺された男女は既に結婚していました」
二杯目のお茶を飲みながら話しをしている少女の言葉に、三姉妹はキョトンとした表情を浮かべながら聞いていた。
少女の発言が何とも脈絡のない言葉だったからだ。
「――ですが、どちらの両親にも賛成されておらず、結果的に駆け落ちという形になりました。それがばれないように、あえて夫婦別姓にしていたようです」
（話が見えてこないんだけど？）と皐月と弥生は脱衣婆を見遣った。

「つまり今日の夕方、浅葱橋が掛かっている川岸で男女の変死体が発見されたの。左手の薬指には指輪がはめられていて、それが両者に見られた」
「でも、閻魔……　あ、いや……　瑠璃（るり）さんは駆け落ちって云ってるから、別に可笑しな点はないんじゃ？」
「どうして婚約や結婚の際、薬指に指輪をするか知っていますか？」
そう聞き返され、弥生は返事に戸惑った。

「これは古代ギリシャで「左手薬指の血管は心臓と直接結ばれている」という説があるからです。指輪にしたのは、千切れないからという理由でもありますけどね。結婚は左手に、その前提である婚約は右手にするものとされている」
「でも、結婚しているってのは……」
途中まで云うが、皐月は言葉を濁らせた。今の時代を考えると、そんな事まで考えているとは云い難かったからだ。

>i248825―3248<

しかし、少女……瑠璃は闇魔王である。
闇魔王は別名“地蔵菩薩”と云われており、道で見かける地蔵を通して現世を監視している。
だからこそ、嘘を付ける相手ではないし、真実のみしか知らない。

「ついでに言うと、二人は心中ではなく、他殺です。しかし、その方法が奇怪なものでした」
「――確かあの橋には奇怪な伝承があったのう」
拓蔵がそう云うと、瑠璃は頷いた。
どんな話？と皐月が尋ねる。
「あの橋に橋姫が祭られておるのは知っておろう。そこで男女が別れる話や、別の橋の話をすると祟りが起きる……というのが一般的な橋姫の話なんじゃよ」
「それとどう違うの？」
葉月がキョトンとした表情で訊くや、
「あの橋に祭られている橋姫は昔……　江戸時代、遊郭におった娘なんです」
「実在してたってこと？」
皐月がそう訊くと、瑠璃は答えるように頷いた。

「名を浅葱と云って。それはまことに美しい女子でした。禿の頃から楼主や姉女郎らに可愛がられていたんです。十四の頃に新造……
つまり、遊女になる一つ前の頃に、彼女にとっては幸せの、またあるものにとっては不幸な出来事が起きたんです」
話の内容を知っている拓蔵の表情に曇りが掛かった。

「その時に民宿街と繁華街を繋げる橋が作られようとしておったんじゃよ――――」

拓蔵は思い出しながら云う。
「今は考えられないけど、橋を掛ける際にはどうしても避けられないものがあった」
「――今は考えられないって……　確か橋姫って……」
「橋姫の語源“愛姫（あしひめ）”は人柱として橋に縛り付けられ橋姫となった。それは橋に災いが起きないようにという意味がありますが、浅葱橋を建てるさい、浅葱が人柱になった理由には別の意味がありました。それは『外の人間と交わり、災いを孕んだ』という理由からなんです」
それを知っている瑠璃だからこそ断言出来た言葉だった。
「災いって？」と、葉月が脱衣婆を見ながら尋ねた。脱衣婆は少しばかり躊躇う。
葉月の年を考えての事だが、瑠璃は「性病」と淡々と言い放った。
「性病って、でも新造は確かまだ遊女として見世（みせ）に出される前の位（くらい）でしょ？　性行為なんて禁止されてるはずじゃ？」
「新造が遊女の代わりとして客に酌（しゃく）をすることはあっても、それに手を出す事はご法度じゃ……　じゃが、その禁句を破る者もおった」
それに関しては鳥居清長（とりゐきよなが）の春画絵に“振袖新造と客”という作品がある。
また新造が見世に出される前には、水揚（みずあ）げという儀式があり、それはその新造がいる店の常連である年をとった男がするものと定められている。
「じゃが、浅葱はそれを破ったんじゃ……　民宿街で小さな宿の若頭をしておった“喜平（きへい）”になぁ……」
「それじゃ……　今回殺された二人と同様だったってこと？」
「結果は違っていても、大体は一緒ですね」
「何か曖昧な言い方ね？」
皐月にそう云われ、瑠璃は溜め息を吐いた。

「喜平は浅葱が遊女だということを知らなかったんです……　そもそも、二人が出会った頃はまだ橋は掛けられていませんでしたからね」
「つまり喜平は遊女がこんなところにいるはずがないと思っていた。と――」
「芸能人がこんな田舎にいるはずがないとか、そんなのと一緒なのかしら」
「それはただ単にオーラがないからでしょ？」
脱衣婆がそう云うや、弥生と皐月は納得したように手を叩いた。

「だからこそ二人は本当に相思相愛だったんでしょうね」
「もし喜平が、浅葱が遊女であると知っておったら、違った結末になっておったかもしれぬし、そもそも先に好きになったのは――浅葱の方じゃった」
「――何かすごい事になってない？」
「両方とも相思相愛だと知ったからこそ、わたしはそのことに関しては何も云いませんし、関与もしません……　ですが、それが浅葱を殺すことになったんです」
瑠璃の話す声のトーンが段々と落ちていく。

「爺様？　浅葱は一体……」
葉月がそう云うと、拓蔵は少しばかり瑠璃を見やった。
「さっき閻魔さまが申した通り、浅葱は殺された。それも何人にも」
「それってどういう事？」
「遊女になる前の新造が水揚げ以外で処女膜を破ることは禁止されている。それを破った浅葱が待っている結末は云わなくてもわかるでしょ？」
「わからないわよ……」
皐月はそう答えたが、頭の中では既に最悪の結末しか思い浮かば

なかった。

何ら変わりない。陶芸家が自分の納得がいかない作品が焼きあがった時に、迷う事なく地面に叩き割るのと同様だ。

自分が手塩に掛けた禿（かむろ）が知らない男に、何処の馬の骨かもわからない人間に少女から女にされたのだ……　店の評判に傷がついてしまうと桜主は思ったのだろう。と皐月は考えていた。

「それじゃ人柱になったのは、浅葱の意思じゃないってこと？」

皐月は瑠璃に尋ねるが、瑠璃は答えるように首を横に振った。

「それは浅葱の意思です。むしろ浅葱だったからかもしれません」

「浅葱だったから……」

「橋が出来れば何が便利になるかしら？」

「人の行き来が楽になる」

脱衣婆の問い掛けに葉月が答える。

「それもあるんだけど、浅葱が人柱になった理由は……　民宿街と繁華街を繋がることにあったからなのよ」

脱衣婆はそう言いながら、瑠璃を見た。

「閻魔様。そろそろお暇（いとま）しましょう」

そう促され、瑠璃は少しばかり表情を暗くするが、スッと立ち上がり、障子を開け、そして去り際に皐月たちを見やった。

「わたしは確かに地蔵を通して露世を監視していますーーですが、人の心までは関与できません」

ーーと、言い残していった。

その言葉を発していた瑠璃の表情が、まるで悲しんでいたり、申し訳なさそうな感じだったのを三姉妹は気になっていた。

肆・愛姫（後書き）

挿絵入れてみた。もっと絵の勉強します。（´；ω；`）

伍・同様

阿弥陀警部と西戸崎刑事が稲妻神社に来たのは、湖西主任から紹介された翌日の午後だった。１２月という事もあってか、境内はところどころ雪が積もっている。

その景色を見てかどうかは定かではないが、「寒いなぁ」と西戸崎刑事は愚痴を零していた。

阿弥陀警部は湖西主任が何故此処を教えたのかが気になっていた。

「確か黒川拓蔵という方でしたね」

「ああ……　その人に相談してみろと云っていたが、あのじいさんが人を紹介するとなると、よほどの人物なんだろうな」

そう話しながら二人は神社の境内を歩いていた。

――もちろん、目的があっての事なのだが、社務所が何処なのかわかっていなかった。

そもそも、この稲妻神社で祭られているのは倉稲魂神と大黒天なのだが、学問やら安産やらのお守りや破魔矢が売っているわけではない。どちらも人に対してではなく、自然、特に稲穂に対しての神だからである。

売店なら人はいるかもしれないが、それがない以上、誰かに遭遇するしかない。

が、今は平日の午後であり、三姉妹はもちろん学校に行っており、拓蔵に関しては町内会に出ている。

しかもこの時期では田を耕すことや土の状態を調べることはあっても、神の御加護を受けに来る百姓はあまりいない。

そのことに気付いたのは、少しばかり日が沈んできた時だった。

「――あれ？」
突然少女の声が聞こえ、阿弥陀警部はそちらに振り向いた。
少女……皐月は二人を訝しく見遣っている。

「失礼ですが、此方の方で？」
そう訊かれ、皐月は頷いた。が、不審そうに見かえした。
「これは失礼。実は私たちこういうものでして……」
阿弥陀警部は胸の内ポケットから警察手帳を出し、それを見せた。

「こちらに黒川拓蔵さんという方がいらっしゃるとお聞きしたのですが？」
「黒川拓蔵は私の祖父ですが？　その……何か御用ですか？」
そう聞き返され、阿弥陀警部は西戸崎刑事を見た。

「実はある事件の調査をしていてね。うちの鑑識課の人間が、黒川拓蔵に会ってみてはと紹介されてねぇ」
「そう……なんですか？　でも、祖父に警察の知り合いがいたなんて」
皐月の言葉に阿弥陀警部と西戸崎刑事は互いを見やった。

警察の人間が人を紹介するとなると、少なからずともそれに関係している人間になる。
あの湖西主任が紹介したのだから、そうなのだろうと二人は思っていた。

「祖父ならもうそろそろで帰ってくると思います」
「そうですか？　では待たせてもらっても結構ですかな？」
「いいですけど……」
そう皐月が言った時だった。

突然、周りの空気が著しく淀み、木々がまるで強風に煽られているかのようにざわめきだした。

その光景に阿弥陀警部と西戸崎刑事は何も言えず、ただただ立ち尽くすしかなかった。

少しずつその空気が元に戻っていくや、皐月は既に本堂の方へと入ろうとしていた。

「――えっ？」

阿弥陀警部は言葉が出なかった。

自分が立っている場所から、本堂まで少なくとも五十米以上はある。

更に言えば、自分は皐月を見ていたはずにも拘らず、彼女が動いたことすら気付いていなかった。

それは西戸崎刑事も同様で、彼もまた阿弥陀警部と同様に、まるで狐につままれたような表情を浮かべていた。

そんな二人を見ながら、皐月は小さく笑みを浮かべていた。

◇◆◇◆◇◆◇

拓蔵が帰ってきたのは既に6時を過ぎた頃だった。

「爺様？　お客さん」

玄関で出迎えた葉月がそう伝えると、拓蔵は首を傾げた。

居間の方へと入ると、阿弥陀警部と西戸崎刑事が炬燵で寛いでいる。

その二人を見ながら、「知らんなぁ……」と拓蔵は三姉妹を見渡

しながら言った。

「黒川拓蔵さんですね。私たち、警視庁のものですが」

そう言われ、拓蔵は少しばかり驚くかと思えば、平然としていた。

が、それは最初に二人に会った皐月でも同じことだった。

警察が突然家にやってきて、自分の知っている人間が何か事件を起こしたのかと心配するか、動揺するものである。

しかし、皐月はもちろん、弥生と葉月に関しても同じような反応だった。

「実は湖西主任からの紹介でして」

「あの死に損ないか？　主任と云っておるが、出世しよったみたいじゃな？」

その言動から、知り合いであることには間違いないようだ。

「知り合いだったんですか？」

「なんじゃ、知らんでここに来たのか？　また酔狂なお人じゃな」

その言葉に阿弥陀警部は笑うしかなかった。

「弥生、確か麦焼酎があったはずじゃが？」

「爺様、確か今日は町内会に行ってたと思うんだけど……」

弥生は拓蔵の顔を見ながら言う。拓蔵の顔は少しばかり赤くなっていた。

「あんなのはまだまだ序の口じゃ。一升瓶一本くらいで根を上げよってからに」

「また飲み比べ？　少しは手加減してあげたら？　爺様みたいに蟒蛇（うわばみ）じゃないんだから」

蟒蛇とは大蛇のことを指すが、大蛇は物をたくさん飲み込むとこ

ろから、酒豪も意味している。
弥生が説教したところで、意味の無いことなのは分かっているが、愚痴の一つは言いたくなるものである。
「わかったわよ……　もう今日はそれだけだからね」
呆れた表情を浮かべながら、弥生は冷蔵庫からワンカップ酒を取り出した。

「それであんたらはわしに何を訊きに来たんじゃ？」
拓蔵にそういわれ、阿弥陀警部と西戸崎刑事は背筋を伸ばした。
いや、伸ばさすにはいられなかったのだ。
さっきまでの明るい空気が突然、まるで上司が目の前にいるような空気が漂いはじめたからである。

「じ、実は、せ、先日、あ、浅葱橋で殺人事件が起きまして……」
「少しは落ち着きなさい。被害者は確か、堂本鋼と梨元美亜じゃったかな？」
「え、ええ……　よ、よくご存知で」
存じるも何も、先日、瑠璃から聞いていただけである。

「それで湖西主任があなたに聞いてみてはと」
「被害者に関しては何か調べましたかな？」
「ええ。二人は別姓であるが結婚していた……」
「それも普通にではなく、駆け落ちという形でなぁ」
自分たちの質問はもちろん、自分たち警察しか知り得ないことである。
――が、拓蔵はその上を言っている。
その後、彼らが聞いた質問の全ては、瑠璃から聞いた話と同様だった。

「被害者が殺されるような条件は？」

「条件ですか？　いえ、特にどちらも友人関係に問題はなかったようですし、借金や人に怨みを買うような行為はしていないようでした」

「ならば、どうして死体を川なんぞに遺棄したんじゃろうな？」

その言葉に西戸崎刑事は何かを考えるや、

「どうして……遺棄と言い切れるんですか？」

「確か湖西君の検視結果を聞く限りでは、死体が凍りついておらんかったということじゃろ？　こんな寒い季節に川なんぞ入ってみろ。凍えて体が凍りつくじゃろうよ」

つまり犯人は川に流していないということになる。

「で、でも待ってください！　被害者の死亡推定時刻は夕方5時から6時の間なんですよ？　いくらなんでも賑わっているあの場所で、死体を遺棄するなんてこと」

「被害者が生きておったら？」

「――えっ？」

「川上の岸で殺されたと推測して、被害者のどちらかが生きておったらどうする？　あの川の流れは普段穏やかじゃからな。立つことくらいできろう」

なんとも滑稽な話だが……

「そんな事出来るんですか？」

「人間は気を失っている状態だと、息自体をしとらんよ。ただしタイムリミットは十分もないがな……」

「つまり……　被害者はそのタイムリミットの間に目を覚まして、川岸に上がったと？」

可能性としてはあるだろうが、そんな事本当に出来るのだろうかと、阿弥陀警部はもちろん、西戸崎刑事も思った。

「あの橋が出来てからは一度も水難事故は起きておらんのじゃよ」

そう拓蔵が言うや、阿弥陀警部はハッとする。
「そう言えば、あの橋って……　橋姫が祭られていましたね？」
「おいおい、正気か？　神様が人を助けるなんてこと」
西戸崎刑事が呆れた口調でそう言った。

「質問はこれで終わりかな？」
「え、ええ……　大体のところは――」
阿弥陀警部の声がしどろもどろになる。自分のポケットには被害者の死体写真が入っている。
これは湖西主任が持って行けと言われたのだが、どうしてこんなものをと内心疑っていた。

「へぇ～、結構綺麗な死体じゃない。女性なんて陶磁器みたいに白いし……」
うしろから声が聞こえ、阿弥陀警部と西戸崎刑事は振り向くと、そこには皐月と弥生が立っており、二人は一枚の写真を見ていた。
それを見るや、阿弥陀警部は自分のポケットを探ると、入れていたはずの写真が入っていないことに気付いた。

「……」
声が出るはずがなかった。
それどころか、いつ自分のうしろにいたのかと、逆に訊きたくなっていた。
「おいおい、嬢ちゃんたち？　それはちょっと刺激が強すぎるんじゃないのかぁ？」
西戸崎刑事がそう言いながら、写真を取り上げようとすると、
「まぁまぁ、少し待ってくれんかのぉ？　葉月……」
拓蔵に呼ばれ、葉月は食事の手を止めた。
「――――出来るか？」
そう言われ、葉月は小さく頷いた。

「お、おい待てよ！　いくらなんでもそれは！」
西戸崎刑事が怒鳴り声を挙げた。
確かに綺麗な状態とはいえ、人の死体が写った写真である。幼い葉月に見せるのを止めるのが道理であろう。
しかし、まるでそれを遮るかのように、阿弥陀警部は西戸崎警部を宥めた。
その意外な行動に、西戸崎警部は訝しい表情を浮かべていた。

陸・愛憎

葉月の目の前には一枚の写真がある。言わずもかな、浅葱橋で見つかった男女の死体が写っている写真だ。

葉月は目を瞑り、一二度深呼吸をすると、写真の上に手を置き、そっと撫で始めた。

「女の人の悲鳴……」

葉月がそう口走った。

「なっ？　い、今なんて？」

阿弥陀警部と西戸崎刑事の驚いた声が偶然にも重なった。

「でも……　写真に写ってる人の声じゃない……　もっと違う人……」

「――――違う人？　それは一体……」

西戸崎刑事がそう訊ねようとしたが、阿弥陀警部がそれを制止した。

「おい？　どうしたんだよ？」

「まだ続きがありそうなんで……」

阿弥陀警部の言葉通り、葉月の力が終わったわけではなかかった。

「美亜さん……　すごく嬉しそう……　大好きな人と一緒になれて……」

「――――え？」

さっきまで少しばかり難しそうな顔をしていた葉月の表情が綻んでいる。

まるで……　写真を通して、死者と話しているのかと思ってしまうような光景だった。

「それで葉月や？　美亜さんと鋼さんは何と云っておったんじゃ？」
そう拓蔵に訊かれ、葉月は少しばかり申し訳ないような表情を浮かべた。
「彼女を恨んでなんていない……」
「ちょ、ちょっと待ってくれよ？　殺されたんだぞ？　殺されたのに、怨んでねぇって、いうのかよ？」
西戸崎刑事が声を張り上げ、葉月に詰め寄る。
「好い加減にしろよ！　さっきから変なことばっかり言いやがって……　これはなぁ、捜査を混乱させたことによる公務執行妨害になるんだぞ？」
西戸崎刑事を拓蔵と弥生が宥めようとする。が、それとは裏腹に阿弥陀警部は神妙な面持ちで何かを考えていた。

「どうかしたんですか？」
「いや、君に最初あった時も感じたんだが、君たちは一体何ものなんだ？　まるで私たちとは一線をひいたような……」
そう訊かれ、皐月は少しばかり考えると……

「わかりません。でも葉月の力は霊の声を聞くことが出来るんです」
「霊の声？」
「私たち姉妹は、生まれた時から人には見えないものが見えたり、感じたりすることがあるんです。特に葉月はまだ幼いから、その力が強くて、よく何かを憑(つ)れて帰ってきたりするんですが、その殆どが、自分の声を聞いてほしいと願っている霊や妖(あやかし)なんですよ」
そう聞かされるが、阿弥陀警部は信じられないと言わんばかりの表情を浮かべた。

「別に信じて欲しいなんて思ってませんよ」
皐月は笑みを浮かべながら云ったが、阿弥陀警部はそう話す皐月

の表情が、まるで無理して笑みを浮かべているように感じていた。

「それに女性の恨み……　特に男女関係において、本来どちらに矛先が向けられているか……」

そう言われ、阿弥陀警部は何かに気付いた。

「西戸崎刑事。一度本部に戻って、被害者の友人関係……　特に堂本鋼の女性関係を洗い直しましょう」

「はぁ？　お前なにいっとーと？」

西戸崎刑事がそう言うが、有無を言わさずに阿弥陀警部は神社を出ようとした。が、居間を出ようとした時、こちらを振り向くや、

「貴重な情報提供をしていただき、ありがとうございます」と敬礼し、去っていった。

「面白いお人じゃな？」

「――――阿弥陀警部だっけ？　五道転輪王（ごどうてんりんおう）と同じ名前みたいだけど」

そう弥生は皐月を見ながら云った。

「あの人、いの一番に私がうしろにいたことに気付いてた」

それは境内で初めて会った時の事である。

皐月は元々から二人が神社に来ていたことも、人がいないことに困っていたことも見ていた。

皐月は気配を消していたのだ。声を出しても気付かれないほどに……

そして試しに声をかけてみるや、阿弥陀警部のみが振り向いたのだ。

いやその仕草は何度もあったが、皐月だと気付いたのは自分が声をかけた時が初めてだと、皐月は話した。

「それにしても……　加害者を恨んでない……か」
確かに奇妙な話である。西戸崎刑事の言うとおり、殺されたのだから、怨むのが道理というものだ。
「でも、美亜さんはすごく嬉しそうな声してたよ」
「それ……　梨元美亜さんだけ……よね？」
そう皐月に訊かれ、葉月は首を傾げたが、すぐさま頷いた。
「どういうこと？　梨元美亜は加害者を怨んでいないけど、堂本鋼は怨んでいるってこと？」
「わからないけど、でも堂本鋼が梨元美亜さんを岸まで上げた可能性が……」
皐月は拓蔵を見やった。
「浅葱なら出来るかもしれんな」
「でも、浅葱は被害者が殺される以前からいなくなってるし」
つまり拓蔵が話したとおり、川に流れている間に気がつき、梨元美亜を岸まで運んだということになる。可能性としては天文学的に低いが、断じて不可能とは言い難い。
「皐月、今日の晩、浅葱橋に行ってみてはくれんかの？　弥生、共を頼めるか？」
拓蔵がそう訊くや、皐月と弥生は頷いた。
「よし、ならば腹拵えじゃ！」
そう言うや、拓蔵は柏手をひとつ鳴らした。

漆・後妻打ち

「阿弥陀警部、堂本鋼の女性関係を調べましたら、二年前まで付き合っていた女性がいたようです」

稲妻神社から警視庁へと戻る前、阿弥陀警部は携帯で、大宮巡査に被害者二人の――特に堂本鋼について、調べ直してくれと頼んでいた。

「すみませんね、大宮くん。折角の非番だったのに、呼んでしまって」

阿弥陀警部がそういうや、大宮巡査は笑って済ませた。

「堂本鋼はどうやら、大学時代にとある女性と付き合っていましたが、卒業と同時に別れたようです。その後会社で梨元美亜と出会い、結婚……」

「駆け落ちという形でですけどね。その両親はどうなんですかね？」

阿弥陀警部と西戸崎刑事が稲妻神社に来ていた頃、遺体を引き取りに来ていたことを大宮巡査は説明した。

「その時、妙なことがあったんですよ。ほら、被害者の二人は互いの両親から結婚を反対された末での駆け落ちになっていたじゃないですか？　でも、その両親とも喧嘩にならなかったんですよ」

「そりゃ遺体を前に喧嘩なんて出来ないでしょうね？」

「そうじゃなくて、例えば堂本鋼側の母親が泣き崩れるじゃないですか？　するとその夫が寄り添うのが普通ですよね？　でも、今日見ていたんですが、梨元美亜の両親が泣き崩れていた時、堂本鋼の両親が二人を宥めていたんですよ。どちらかに罪を擦(なす)り付けるみたいなこともせずに」

確かに結婚を反対していたのなら妙な話である。

「……なぁ、もしかしたら結婚が赦された直後に殺されたってことじゃないのか？　殺された時間を考えると、二人は役場に婚姻届を出して、本当の夫婦になれた直後に殺された」

「確かに、殺された時間が夕方5時から6時の間だとすれば、役場は大概夕方5時前に閉めますからね。そうなると、犯人は二人を何処かに呼び出した」

それが浅葱橋の上流だということになるが、二人のケータイの着信データにその時間帯電話は入っていなかった。

「親御さんに訪ねに行くのは駄目ですかね？」

「ああ。そうしたほうがいいじゃろうな。どうして被害者は殺されたのか、それも教えんといかんじゃろうし……」

ドアの方から声が聞こえ、部屋にいた全員が其方へと見やった。

「湖西主任……　そうしたほうがいいとはどういう？」

「さっき拓蔵から電話があってのぉ。阿弥陀くんと西戸崎くんに、被害者の両親を浅葱橋まで連れてきて欲しいと云われたんじゃよ」

そう言われたが、その理由を訪ねようとすると、行ってみればわかると云われた。

◇◆◇◆◇◆◇

「あの、一体何が？」

堂本鋼の母親が阿弥陀警部に尋ねる。

――が、訊かれた本人も、答えを知らない以上、応える事が出来ない。

「ここであの子達は殺されたんですね。くそぉっ！　いったい……いったいどうして……」

梨元美亜の父親が浅葱橋の上から川を眺めながら、慟哭する。

それを見ていた阿弥陀警部は何故か違和感を感じた。

「あれ？　阿弥陀警部に……　西戸崎刑事？」
民宿街の方から声が聞こえ、阿弥陀警部はそちらを見ると、
「さ、皐月さん？　それと弥生さんも……」
そう言うや、阿弥陀警部は首を傾げた。

「あの神主は？」
「爺様は来ませんよ。家で晩酌してます」
弥生が呆れた顔で言う。

「では、いったいどうして私たちをここに？」
――と、阿弥陀警部がそう言った時だった。
ふと周りを見渡してみると、皐月と弥生、被害者二人の両親４人、西戸崎警部、そして自分を含めた計８人……以外の姿が見えない。
時間は既に夜９時を過ぎているのだが、この時間でも橋の上は賑わっている。それがまるで伽藍堂（がらんどう）と言わんばかりに人の気配がないのだ。

「さてと……　出てきていいわよ！　浅葱！」
皐月がそういうや、繁華街の方から少女が姿を表した。
見た目の背格好は皐月と何ら変わらない。ただ違うところをいえば、頭は禿（かむろ）、白粉（おしろい）を塗ったように肌は白く、下唇にのみ紅を塗っている。そして服は赤い布を着物に拵えたようなものだった。
浅葱と呼ばれた少女は全員に小さく会釈した。その仕草一つ一つが綺麗と云えた。

「えっと……　皐月さん？　今なんと……」
阿弥陀警部がそう尋ねた。
「彼女がこの浅葱橋に祀られている橋姫です」

そう言われても、信じられるものではない。

「お、おい？　何を言ってるんだ？」

「そ、そうよ！　ここにくれば息子がどうして殺されたのかがわかるって聞いて来たのよ？」

堂本鋼の両親が声を張り上げる。

すると皐月はそちらにではなく、もう一人の方に目をやった。

「何も言わないんですか？　突然こんな訳のわからないことをされて」

声をやった先にいたのは……梨元美亜の父親だった。

「い、いや、吃驚はしているよ」

梨元美亜の父親は冷静を保とうとしているが、口調に落ち着きがない。

「あなた！　夫が何かしたというのですか？」

梨元美亜の母親が皐月に詰め寄ろうとしたが、足取りを止めた。

「私が見守る橋の上で……つまらん喧嘩をするでないわ」

そう口走ったのは――――浅葱だった。

周りには、さきほどまでの落ち着いた空気とは一変し、誰もが凍りつくほどに冷たい空気が漂っている。

「浅葱、無理に脅さなくてもいいわよ？　そもそもあんたそういう性格じゃないでしょ？」

皐月がそう言うと、冷たい空気が穏やかになっていく。

「そもそも、被害者の二人が殺されたのがこの橋の上でもなければ、上流でもない――」

そう浅葱が言うや、阿弥陀警部が食い下がった。

「被害者の二人が殺された場所が此処でなければ、上流でもない？　それじゃ、何処で殺されたと言うんですか？」
　それに答えるように、浅葱は“橋の下”を指差した。
「おい、もしかして犯人は橋の下で殺したのかよ？　そんな事出来るわけなかろうも？　だって、殺された時間、人はごまんといたとぞ？」
　西戸崎警部はそう言うが、阿弥陀警部は何かに気付いた。
「確か……　橋が出来る前、この両側に渡し船があったと……」
「それは今もあります。川の掃除をするために」
「掃除船ですか？」
　阿弥陀警部がそう言うと、浅葱は頷いた。
「でもよ、この中でそんな事が出来る人間なんて――」
「そうよ？　掃除船なんて乗れるわけないでしょ？　あれは区が掃除をするために……」
　西戸崎刑事と阿弥陀警部はある一人を見やった。
「梨元宗一さんでしたっけ？　確かあなた……　この町の役場で働いてましたよね？」
「そ、そうだ。だが！　掃除船が使えるのは生活環境課で、許可が下りなければ使うことはできない。それに私が務めている部署は企画課だ」
　そう梨元宗一は云うが、浅葱と皐月は疑いの目を止めなかった。
「なんだ？　なんだその目は？」
「企画課ってことは、色んな催しを考えるのよね？」
「あ、ああ……　そうだ！」
「たとえば……　『みなさんで川の掃除をしませんか？』みたいな

企画を考えたりとか、掃除船に乗って、どのように掃除されるのかを間近で見られますみたいなことを考えたりとか……」

そう云うと、梨元宗一は皐月の口を塞ぎ、言葉を遮った。

「あ、あなた？」

「この餓鬼、さっきから訳のわからないことを……」

梨元宗一は皐月の口を抑えている……はずだった。

「掃除船は機械ではなく、手漕ぎによって進む昔のもの。だからこそ、誰にも気付かれなかった。誰も好き好んで橋の下なんて見ないからね」

梨元宗一が声の方に振り返るや、腰をぬかした。

「さ、皐月さん？　い、何時の間に？」

「そんなに驚くことじゃないでしょ？　一回見てるんだから」

皐月はさぞ当たり前のように言うが、阿弥陀警部にとっては当たり前ではない。

さきほど梨元宗一に口を抑えられていた皐月が、今自分の目の前にいるのだ。これで驚くなと言われる方が難しい。

「さて……　人の橋で殺人を犯し、剰え（あまつさ）、私に罪を擦りづけようとした罪を――」

浅葱の言葉を待たずに、皐月が頭を小突いた。

「な、なにするのぉ？　あんたねぇ、仮にも神様よ？　神様にそんな態度とっていいわけぇ？」

そう浅葱は涙目で訴えるが、皐月の目を見るや先が言えなかった。

「そもそも、あんたが祠を抜け出して、喜平のところに行ってたのが悪いんでしょうが？　そりゃ、あんたの大好きな人だから、行くなとはいえないけど」

「皐月？　浅葱も反省してるんだし、そのへんにしたら？」
そう弥生に云われ、皐月は視線を梨元宗一に向き直した。

「西戸崎警部？　上流から流れたにも拘らず、どうして死体は二つとも凍っていなかったのか……　その理由が分かりました？」
「な、なんとなくな。やけど、それでも遺体が発見されなかったことに関する説明にはなっちょらんよ？」
確かに遺体を運んでいる時、当然だが川を渡る。その間、人に見られても可笑しくはない。

「だからこその掃除船なんですよ。掃除をしているということは、ビニールが必要ですよね？　それに風が強くなるかもしれないから、それを抑える何かも必要……」
「まさか？　死体をビニールの下に隠して？　阿弥陀！　大宮たちに連絡だ！　至急役場に連絡を取って、掃除船で使ったビニールはないかの確認だ。もしかしたら、ビニールに被害者二人の血痕が残ってるかもしれねぇ」
西戸崎刑事がそう叫ぶや、ガクリと跪いた。

「――なっ？」
とたん、他の人間も倒れている。が、唯一倒れていないのは皐月と弥生、浅葱……　そして阿弥陀警部だった。

「返さぬぅ……　返さぬぅ……」
梨元宗一の口からまるで女性のような声が聞こえる。

「時代遅れも甚だしいな……　六条御息所よ……」
浅葱がそう目の前の何かに告げる。
「いや……　“父親”に取り憑き、二人を殺したことには……　賛美を与えよう」

浅葱は一瞬笑みを浮かべ、人差し指で星を一筆書きした。

「じゃがなぁ？　私はただ、人柱として生贄に捧げられた。誰かを恨んでいるわけでも、男女の別れ話や、他の橋に対して妬みなんぞ、ひとつももっておらんよ？」

そう喋りながら、虚空にいくつかの星を描いた。

「――っが？」

途端、梨元宗一が小さな悲鳴を挙げた。両腕はまるで吊るされているように、天へと挙げられていく。

そして次第に悲痛な表情へと変わっていく。

「西戸崎警部と云うたなぁ？　主の考え、面白いが――少し捻ってみよ？」

「――考えを捻る？」

「そうじゃ。被害者は絞殺に見せかけた撲殺である。そして、薬物によるものではない。これは睡眠薬も薬同様であるため、眠らせて殺すことは不可能」

そう浅葱が言うと、西戸崎警部は……

「いや、まてよ？　可笑しいだろ？　そんなの出来る訳が――」

何かに気付き、唖然とする。

「おい、もしそれが本当だったとしたら、どうして梨元美亜は殺されたんだ？」

「どうしたんですか？　一体何に気づいたんですか？」

阿弥陀警部がそう訪ねると――

「犯人は梨元美亜本人だってのかよ？」

その言葉に阿弥陀警部はもちろん、堂本鋼の両親、そして梨元美亜の母親は絶句した。

「そ、そんな……　どうして？　結婚が決まっている相手を、どうして殺す必要があるんですか？」
確かにそのとおりだ。と西戸崎刑事は思った。
――が、今日の晩、遺体の写真を摩っていた葉月の言葉が引っかかっていたのだ。

『女の人の悲鳴……』
だが、それは被害者とは違う人間だと云っていた。だから殺人を犯したのは別の女性になる。
がどうだろう？　堂本鋼にあって、梨元美亜にはなかったもの……

「絞殺痕……　絞殺痕が何よりの証拠だ！　梨元美亜は堂本鋼を絞殺した」
「でも、それじゃ梨元美亜は誰に殺されたんですか？」
確かにそうだ……　しかし、浅葱がいった言葉がそれを裏付ける。

「六条御息所……　確か葵上に出てくる悪霊」
「正しくいえば恨みや妬みから生まれた生き霊なんじゃが、まぁ正解としておこうかの？」
浅葱はそう言うと、梨元宗一を見やった。

「しかし奇妙じゃな？　自分で自分を殺めるとは――」
その時、ふと浮かべた浅葱の表情がもの悲しく見えた。

「夫が何をしたと言うんですか？」
「いや……　この者も、もう生きとらんじゃろ？　何せ無意識のうちに取り憑かれ、知らぬうちに殺されたんじゃからな。さて、人ならぬものを罰するのがお前たちの仕事じゃったな？」
浅葱がそう言うや、皐月は長さの異なる二本の竹刀を両手に持っ

た。

「吾神殿に祭られし大黒の業よ！　今ばかり我に剛の許しを！」

そう天に叫ぶや、竹刀は刀へと変貌していく。

（み、宮本武蔵？）

そう阿弥陀警部が感じた一瞬だった。

「閻獄第八条において、父に取り憑き殺し、剰え自分の罪を被せたものは『阿鼻地獄』へと連行する」

そう云うや、皐月は梨元宗一を切り付けようとしたが……

「邪魔ですから、退いてくれませんか？」

「君は一体何をしているんだ？」

阿弥陀警部が皐月を止めようとする。

その行動に、まるで呆れたように小さく溜息を吐くや、皐月は有無を言わずに、阿弥陀警部もろとも梨元宗一を切りつけた。

「うっ……」

阿弥陀警部はその場に跪いた。が、何か違和感があった。

そう感じた時だった。

「あああああああああああああああああああっ」

まるで断末魔のような悲鳴がうしろから聞こえ、そちらに振り向くと、梨元宗一が悲鳴を挙げていた。

「弥生姉さん！」

皐月がそう言うと、弥生は御札を梨元宗一目掛けて投げつけた。

御札は梨元宗一の額に付くや、青白い炎を発した。

そして梨元宗一と一緒に消滅した。

「い、一体何が起きて？　――――！」

阿弥陀警部が見上げた時だった。突然皐月が刀で切り付けたのだ……

が、何ともない。それどころか、まるで竹刀で叩かれているような痛みしかなかった。

「い、いったいどういう？　あでぇ？」

「あ、やっぱり何ともないや？　まぁこれが“刀”に見えてるってことは、少しばかり霊感があるって事なのかな？」

皐月は首を傾げながら、また二三度、刀で切り付けた。

「い、痛いですって……」

阿弥陀警部はそう言いながら、皐月の手を止めた。

「お、おい？　阿弥陀……　一体、何やってるんだ？」

西戸崎刑事の声が聞こえ、阿弥陀警部はそちらを見やった。

「西戸崎刑事？　ご無事でしたか？」

「無事？　何を……　っていうかここは何処だ？」

その言葉に阿弥陀警部は首を傾げた。

「普通の人間に私の姿は見えんよ」

そう浅葱が言うや、トコトコと西戸崎刑事のところへと歩み寄り、思いっきり足元を蹴った。

――――が、西戸崎刑事はまるで何もなかったかのように、阿弥陀警部へと歩み寄っていた。

「おい、なんだ？　変な顔して」

「い、いや……　何でもないですよ。なんでも……」

阿弥陀警部は何がなんだかさっぱりわからなくなり、ただ笑うこ

としかできなかった。

漆・後妻打ち（後書き）

＊指摘された部分を訂正しました。
×～ビニールに被害者二人の結婚が残ってるかもしれねぇ」
○～ビニールに被害者二人の血痕が残ってるかもしれねぇ」

捌・理由

「ごめんください」
稲妻神社の社務所の入口から声が聞こえ、弥生が出ると、
「これは阿弥陀警部に大宮巡査。また事件か何かですか？」
と若干諦めたような口調で言った。

「いえ、ちょっと近くを通ったんでね。それに今日は二人とも珍しく非番なんですよ」
阿弥陀警部は暑そうに団扇で扇ぎながら言った。
「だったら、中へどうぞ。阿弥陀警部とは長い付き合いですから」
「そうですか？　それじゃお言葉に甘えて……」
そう言いながら、阿弥陀警部と大宮巡査は居間へと案内された。

「それにしても、暑いですね？　弥生さんも大変でしょ？　日中巫女服を着てないといけないんですから？」
「そうでもないですよ？　それに好きで着ているようなものですし」
そう言いながら、クルリとその場で一回転した。
「あはは、似合ってますよ」
大宮巡査がそう言うと、弥生は笑みを浮かべた。

「おやおや？　阿弥陀警部じゃないか？」
拓蔵が居間に入ってくると、阿弥陀警部と大宮巡査に気付く。
「お邪魔してます」と阿弥陀警部と大宮巡査は頭を下げた。

「弥生？　酒はないのか？」
そう尋ねると、厨房にいた弥生はちょうど魚を下ろしている時だった。

そして振り向かず、刺身包丁をまな板に突き刺した。
「あのね？　今家計は勿論、神社自体も火の車なんだから……　今度の結婚式で御神酒として使う清酒しかないの……」
振り向いてはいないが、その口調から、誰がどう見ても怒っているとしか感じられなかった。

「くくく……」
突然阿弥陀警部が含み笑いをした。
「ふ、不謹慎ですよ、警部」
「いや、前も同じ事があったなぁと……」
そう言いながら、阿弥陀警部は拓蔵を見やった。

「大宮くんが来た時じゃったかな？」
「ええ。それもありますが、私が初めてこの神社に来たときも、似たようなものでしたよ」
そう……　あの時もそうだった。
酒の催促をしようとした拓蔵を弥生が渋々ながらも了承していた。

が、今回ばかりは本当に辛いようだ……
舞頸（まいくび）で拓蔵は御神酒につかう清酒を水で薄めればいいという暴挙を提案している。が、酒が薄くなれば違和感を感じる。要するにそれに対しての苦情が来たのだ。その時に行なった夫婦から。

それ以降、御神酒に使う清酒は弥生の部屋に重々保管されることになった。

「もうあれから半年以上も経ってるんですかね？」
そう言いながら、阿弥陀警部は麦茶を飲み干した。
「もうそんなに経つのか……」

拓蔵は自分で買ってきたワンカップ酒をちびちびと飲んでいる。

「それで梨元宗一の死体は供養されたのか？」

「ええ。浅葱さん……　いや、橋姫さまの云う通り、死体が発見された場所で、被害者二人とは全く別のレミノール反応がありました」

つまりその場で殺されたという事だ。そしてもう一つの反応とは、他ならぬ梨元宗一のものだった。

「父親に取り憑いて、自分を殺した……　生き霊だったからこそ出来た荒業じゃろうな――」

「ですが……　あの晩、葉月さんが云った言葉、『大好きな人と一緒になれた』というのが今でも気になるんですよ」

「恐らくそのままの意味じゃろうな……　葵上は能舞台の話じゃが、決して題名の葵上が、妖怪ではないんじゃよ」

そう言うや、酒を飲み、口を潤すや、話を続けた。

「『葵上』は光源氏の正妻の名でな、それに取り憑いた六条御息所が葵上を苦しめるが、最後には法力によって退治される話なんじゃよ」

そう話しながら、再び酒を飲むと、

「まぁあの事件、自分が堂本鋼に愛されていると信じなかった本人が一番悪いじゃろうな……」

梨元美亜は確かに愛するものと一緒に死ねて幸せだろう。

だが、それは独り善がりの幸せでしかない。

『葵上』での六条御息所は、葵上が光源氏の正妻であることから、恋慕と妬みによって鬼と化し、呪い殺そうとした。

もし、彼女に新しい恋なり何かをしていれば、鬼にはならなかっただろう。

たとえ葵上を呪い殺し、光源氏を手に入れたとしても、それは結

局、梨元美亜同様、独り善がりの幸せでしかないのだ。

あの晩、葉月が霊の声を聞いた時、二人は全く別の事を云っている。

そして何より、梨元美亜が犯人を怨んでいないと云っている。

それもそうだろう。殺人を犯したのは梨元美亜本人なのだから……

「しかし、今でも不思議なんですよね。あの時どうして、皐月さんに切られたにも拘らず、ただ竹刀で叩かれたような痛みしか感じなかったのか」

「そりゃそうですよ？　だって、私の刀は生きている人や幽霊を切ることなんて出来ませんから」

何時の間にいたのか、皐月が阿弥陀警部にそう云った。それが本当なら、道理で血が出ていないはずだ。と阿弥陀警部は思った。

「あれ？　お客さんですかな？」

皐月のうしろに誰かがいることに阿弥陀警部は気付く。

その姿は大宮巡査にも見えていた。

「久しぶりですね。阿弥陀警部」

小さく頭を下げ、浅葱は阿弥陀警部と大宮巡査に挨拶をした。

（あれ？　そう云えば、確か大宮くんって、遊火さんが見えませんから、霊感はないと思ってたんですけど？）

阿弥陀警部が小声で浅葱に尋ねる。

（ああ、あんな未熟者と一緒にしないでください、そもそも私は神ですから、自分の姿が人の目に見えるようにするのは容易いことです）

要するに権化（ごんげ）というものだ。あの晩も霊感の有無を問わず、全員に彼女が見えたのは、それが理由だった。

（それじゃ西戸崎刑事が推理したのも？）

（あれは当の本人じゃよ？　まぁ少しばかり違うがな……　あの父親も悔やんでおったんじゃろうな）

それはつまり……　西戸崎刑事に一瞬だけ、梨元宗一の霊が乗り移っていたということになる。

「そう言えば、今日浅葱橋の近くでお祭りがあるそうですよ？　花火とか」

「あ、生活安全課が警備を担当するそうなんで、今晩みなさんでどうですかね？」

大宮巡査と阿弥陀警部がそう言うと、皐月は弥生を見た。

「あ、お金は私が出しますよ。いつもお世話になってますからね」

阿弥陀警部がそう皐月や弥生に言った。

「いいんですか？」

「人の更衣は甘えるに越したことはないぞ、皐月。私が禿の時、姉女郎たちがようしよったわ」

浅葱がそう言うや、全員が笑った。

浅葱がどうして自ら人柱になったのか……

それは喜平を好きになった自分と同様、遊郭の中でしか生きられない遊女に、特に自分と同様、幼い禿や新造が見世に来る客とは違う。

金ではない、本当に自分を好きでいてくれる人を見つけて欲しいがために、人柱になったのだ。

本来、遊郭には大門というものがあり、それが開かない以上入る

ことはもちろん出ることもできない。
だが浅葱橋が掛かっている繁華街と民宿街は川を隔てて別れていたのだ。
そしてそれは渡し船でしか行き来できなかった。
つまり繁華街はひとつの小さな孤島でもあった。
ただ、今は埋め立てなどがされており、その面影は全くない。

浅葱が橋姫となった理由は、自分は叶わなかった夢を、橋を行き交う恋人たちに委ねた事にあった。
他の橋姫と違うところは、他の橋を褒めたり、女の嫉妬をテーマとした『葵上』や『野宮』などをうたっても、てんで気にしない。
それは生まれて死ぬまで、一途の恋だけをした橋姫だったから。
あの日、浅葱が橋を離れたのは、その日が喜平と初めて逢った日であり、彼の子孫を見ていたからである。

その晩、皐月たちは全員で浅葱橋の上で花火を見上げた。
その時、ふと見せた浅葱のいや……橋姫の綻(ほころ)んだ笑みは、自分の周りで同じように花火を見ている恋人たちへの笑みだった。

捌・理由（後書き）

第４話終了です。今回は過去の話でしたが、浅葱はまた出す予定です。

壱・通夜

「それじゃ、帰りは遅くなる。わしがいないからといって、夜ふかしはしないよう。後、戸締まりはしっかりとな」
そう拓蔵が言うや、三姉妹は頷いた。

時間はちょうど夕方5時になろうとしている。が、初夏の時期ということもあり、未だに空は青々としている。

拓蔵は重苦しい表情を浮かべながら、黒のスーツを着用し、髪を整えている。
小一時間前、知り合いの訃報を電話で知り、その御通夜に出席するためだった。

「まったく……　あの人も歳には勝てんか……」
そう呟くと、顎を摩った。
「爺様、そろそろ行かないと電車に間に合わないんじゃない？　その人の家、この町からだとだいぶ離れてるんでしょ？」
弥生にそう言われ、拓蔵は慌てる。

いつもなら飄々としていても、しっかりしている拓蔵が慌てるなどということは本当にないことである。
それを見ながら、三姉妹は余程の知り合いなのだろうと感じた。

◇◆◇◆◇◆◇◆

大きな一軒家の外壁には鯨幕が貼られており、玄関前には長テーブルが置かれ、そこか受付となっていた。

「このたびの訃報、まことに残念でなりません」
「自分は京本警視長にはよくしてもらって」
という涙声が受付で聞こえてくる。

「黒川さん……　来てくださったんですね？」
パイプ椅子に座り、受付をしている初老の女性がそう拓蔵に呼びかけた。
「りつさんから連絡を受けた時は驚きしましたよ。先輩が亡くなるなんて……」
拓蔵はしんみりとした表情で云う。

「死因は？　あ、いや……　すみません」
拓蔵は極々当たり前の仕草で尋ねようとしたが、言葉を止めた。
「いえ、いいんです。黒川さんは夫と同じ職場にいたんですもの。よく夫も、ＴＶで流れる殺人事件の死因はとか――」
女性……京本りつは思い出したのか、うっすらと涙を浮かべ、それを指で拭った。

「これ、少ないですが」
そう云うや、拓蔵は香典を差し出した。
「――神社の方、大変でしょうに……」
「いやいや、孫が何も言わずに渡してくれたんですよ。いつもは財布の紐が硬いくせに……」
無理に笑い話に持っていこうとしているのが目に見える。拓蔵にとって、この空気は嫌でしようがなかった。

仏である京本福介は警視庁捜査一課に長年勤めていた。長年ということもあってか、新人指導もやっていたため、人望があつかった人間である。
そして、拓蔵もまた刑事として警視庁に努めていた。

会場は客間で、広さは大凡十畳ほどの広さだ。
部屋の壁にも外と同様に鯨幕が貼られており、大小様々な弔花が飾られている。
ここでも別れを惜しんでいる人たちの啜り泣く声が所々から聞こえていた。

拓蔵は棺の前にやってくるや、手を合わせ拝んだ。
そして棺に付けられている小窓を開け、仏の死に化粧を見た。

『まったく……　どうしてそんな……』
仏は想像していたものよりも、透き通るほどに綺麗な肌色だった。
拓蔵と同様に、歳をとった皺くちゃな老人のわりには、本当に綺麗な顔をしている。拓蔵は何も云わず、小窓を閉めた。

連絡を受けた弔問客はこれで終わりだろうと、拓蔵は仕事関係者のところに座った。

御通夜での座り場所を説明すると、棺を中心として、その前にお経を読む僧侶が座り、そのうしろには焼香台が置かれる。
そしてその三つを前にして左側から世話役・葬儀委員長が座り、人が通る間を空けて喪主・遺族と座る。そのうしろに知人・友人、間を空けて親族が座る。
そしてそのうしろに仕事関係者、間を空けて近親者が座っていく。

僧侶が入ってきたことで、いよいよ通夜が始まると、拓蔵は数珠を片手に握った。

僧侶がお経を読んでいる間に焼香が行われていく。

そして拓蔵の番になると、焼香台の前に立ち、喪主である京本りつに軽く頭を下げた。

そして、再び焼香台に体を向け、右手の親指・人指し指・中指、の三本の指で抹香（まっこう）を抓（つま）み、、頭を垂れるようにしたまま、目を閉じながら額のあたりの高さまで捧げた。

『先輩……　先輩はどうして急に亡くなったんですか？　この前会った時は、全然元気そうだったじゃないですか？』

そう頭の中で云いながら、拓蔵は焼香を終えた。

自分の座っている場所に戻ろうとしていた時だった。

「でも、本当急でしたよね？」

若い警官らがぼそりと私語をしている。

京本福介が最後に世話をしていた警官で、彼もまた、この急な訃報に違和感を感じていた。

それは仕事関係者の殆どが思っていることだった。

京本福介は定年退職し、警視庁を去った後も、心配なのか自分が世話をしていた警官によく会っていた。

拓蔵は警察を辞めた6年前までしか知らないため、来ている警官達の顔を知らなかった。

お経が終わり、僧侶が立ち上がり退場していく。

その時、ふと京本りつと何か一言二言会話を交わしていた。

僧侶が部屋からいなくなるや、京本りつがスッと立ち上がり、涙を浮かべた。

「本日は大変お忙しい中、夫のために来てくださり……　本当にありがとうございます。夫も大変嬉しく思ってくださっていることでしょう」

その言葉が引き金となったのかはさて置き、周りから再び啜り泣く声がこだまする。

「それで皆さんにひとつずつ弔花を渡し、夫の棺に入れようと思います」

その言葉に拓蔵は違和感を感じた。

本来別れ花は通夜の次に行われる告別式にするものであるが、最近では一緒にすることも多いらしい。

娘である京本雨音（あまね）が弔花の入った籠を持ち、それを弔問客に渡していく。

拓蔵もそうだが、老兵たちは違和感を感じていた。――が年代もそうだが、経験の違いだろう、若い警官たちは首を傾げる素振りすらしなかった。

「皆さん、花は行き渡りましたね。それでは……」

京本りつがそう言った時だった。

突然家の中が真っ暗になり、また何処から風が入ってきたのか、蝋燭の炎が消え、部屋の中は闇へと化した。

「みなさん落ち着いてください。雨音、ブレーカーの場所わかるわね？」

そう云うが、視界は闇の中だ。

「わしが行こう。りつさん？　ブレーカーの場所は何処じゃ？」

拓蔵は横に座っていた警官からライターを借り、火を灯すや、ぼんやりとその周りだけが照らされた。

「お風呂場の近くです。雨音、案内して差し上げて」

そう云われ、雨音は頷く素振りを見せた。

「こっち……」
袴の裾を引っ張る雨音に案内されながら、拓蔵はブレーカーの下へとやってくる。
ライターでその辺りを照らし、場所を確認するや、落ちたブレーカーのスイッチを上げた。
すると家の中の電気は点けられていき、明るさを取り戻していった。

「あっつ……」
親指で擦り火を点けるタイプのライターだったため、頭の方は熱で熱くなっていた。
「大丈夫……？」
「んっ？　ああ、大丈夫じゃよ。さぁ、みんなのところに戻ろう……」
拓蔵と雨音が客間に戻ろうとした時だった。

突然女性の悲鳴が聞こえ、二人は急いで戻るや、客間の中は騒然としていた。
「ないっ！　ないっ！　ないっ！」
京本りつが棺の中を半狂乱になりながら、何かを探している。

「い、一体何が？」
拓蔵は近くにいた弔問客に訪ねた。
「わ、わかりませんけど……　電気が点いたから、別れ花を入れようと棺の蓋を開けたら……　そ、その……」
弔問客はガクガクと震え、声がしどろもどろになっている。

拓蔵は意を決して、棺の前へとやってくるや、その光景に唖然とした。

本来、棺の中には何がある？
十中八九、死体が入っているはずだ。だが、その死体が綺麗になくなっていた。

拓蔵は振り返り、弔問客を見渡した。
通夜の最中、棺を扱った人間はいない。寧ろそんな罰当たりなことをする人間などいないだろう。
だが一瞬停電が起き、人の目に隠れるようになった状態がある。
が、誰が特をする？　死体を盗み出して……何の特が？

拓蔵はただならぬ空気にただただ呆然としていた。

壱・通夜（後書き）

使用した単語についての説明／鯨幕（けいまく）：葬儀に使用される白と黒が交互になっている幕のこと。

弐・嘯く

「警察に連絡はせんのか？」
そう拓蔵が云った時だった。横にいた雨音がキョトンとした表情というべきか、不思議そうな目をして首を傾げている。
この家に来ている人間の何人かが警察の人間である。だからこそ不思議に思ったのだろう。

「この中に鑑識班はおるか？」
拓蔵がそう言うと、疎らであるが、一人、二人と手を挙げていく。
「よし。君たちは厨房から片栗粉を取ってきてくれ。雨音ちゃん、筆とセロハンテープはあるか？」
云われた三人はそれぞれ云われたものを取りに客間を出た。
ただ警官二人は場所が分からないため、雨音と一緒に行動することにした。

「誰かあの二人と雨音ちゃん以外、勿論わしがブレーカーを上げに行っている時と今の人数は合っているか確認出来るか？」
「ここに弔問客の帳簿があります」
そう云って、帳簿を手渡したのは世話役の人間だ。
「僧侶にも連絡を……　彼にも疑いがあるからな。鑑識の手伝いをする者以外は他の弔問客への聞き込みと出入口の警備。並びに不審な人物がいなかったのかを外で訊きに行ってくれ！」
拓蔵は帳簿に書かれている弔問客の名を呼びながら、確認を取った。

「……何なんですか？　一般人が……」
一人の若い警官が拓蔵に食ってかかった。先ほど福介の死に違和

感を持っていた青年だ。
「あなた、一般人ですよね？　それなのに、どうしてそんなに冷静でいられるんですか？　それに私たちはあなたに命令される筋合いはありません！」
確かにそうだと、他の若い警官たちが頻りに言い出す。
「――やめんかぁっ！」
そう声を張り上げ、若い警官たちを制止したのは、ライターを貸してくれた老刑事だった。
彼と同じくらいか、少し歳が低い警官も、若い警官たちをジッと睨んでいた。
「で、ですが……」
「お前たちは目の前のことしか頭に入っておらんのか？　この人はわしらと一緒の場所に座っておったじゃろ？」
云われてみれば確かに……　しかし若い警官が通夜の座り場所に詳しいわけではない。
「それに、いの一番で行動しなければいかんお前たちが、まるで独活の大木と言わんばかりに動かんとは、これでは京本警視長に示しがつかんじゃろ！」
老刑事がそう言うと、若い警官たちは口を閉ざした。
「さぁ彼に云われたことをせんかぁっ！」
そう言われ、各々が行動をし始めた。
「助かりました」
拓蔵はそう言いながら、敬礼した。
「いやいや、お止めください。私目には勿体ない」
先ほどとは打って変わって老刑事は腰の低い返事をした。
「しかし、さすが黒川警視どの。プランクを感じさせない指示でし

た」

老刑事は拓蔵に対して敬礼をする。他の初老とまではいかないか、それくらいの警官たちも同様だった。

「もう辞めて6年以上経つんじゃがな……　それと、ひとつ調べて欲しいことがあるんじゃが、良いかな？」

そう訊かれ、老刑事や周りの何人かが頷いた。

「先輩の死因を調べてくれんか？　先輩とはつい先日に会うとるんじゃ、その時の先輩を思い出しても、まったく死ぬとは思わんかったよ」

「黒川警視どのの仰るとおり、警視長の死について、私達も不審に思っていたんです。ですが……」

「分かっておる。わしはこれ以上首を突っ込まんよ」

拓蔵が諦めた声でそう云う。いくら元同僚とはいえ、辞めた人間にこれ以上事件に関わってほしくないのだ。

――が、老刑事は出来れば参加して欲しいと思っていた。

本来ならば自分たちが指示をしなければいけないのだが、いの一番に拓蔵がしてくれている。それも的確に……

先ほど片栗粉と筆を持ってくるようにいったのも、指紋を取るためである。

指紋検出には、主にアルミニウム粉末を刷毛で塗布して検出する粉末法や、エチルアルコールにニイヒドリンを微量に混ぜて噴霧し、それをドライヤーやアイロンなどで加熱させて反応を出す液体法などがある。

弔問に来ている何人かが警察だと知っていた拓蔵は、指紋検出に使うため、取りに行かせたのだ。

「持ってきました」

「佐々木刑事。阿弥陀警部や湖西主任が来る前に……」

拓蔵にそう云われ、老刑事……佐々木刑事は頷いた。

持ってきた片栗粉を筆に少量つけ、棺の蓋の裏上下それぞれに付ける。

手に持つ場所がちょうどその部分になるからである。

棺を開ける際、その部分に指紋は強く残ることを拓蔵は知っていた。

勿論、徹底的にするために、他の部分にも付けるのだが、この方法では強く指紋を押した部分しか検出されない。

それから数分後、通報を受けた阿弥陀警部ら捜査一課は現場状況に呆然としていた。

「こりゃ、私たちの出番はないでしょうねぇ？」

阿弥陀警部が唖然としているのも無理はない。

拓蔵の指示によって、聞き込みや実況見聞などは既に済ませていたからだ。

喪主である京本りつと遺族である娘の雨音。

葬儀実行委員長と世話役の女性が２名の３人。

親族は弟である京本萩助と妻、その子供の兄妹のみで４人。

知人、友人が５人来ており、近親者は従姉弟（いとこ）の京本亘輝１人の計１５人。

そして残った仕事関係者。つまり警官となっている。

「湖西は来ておらんみたいじゃな？」

周りを見渡しながら、拓蔵が阿弥陀警部に尋ねる。

「あれ？　神主さん……？」

阿弥陀警部と大宮巡査が首を傾げた。ここにいるとは思っていなかったのだろう。

「阿弥陀警部。今回の事件……　もしかするとあの子らの力が必要かもしれんぞ？」

拓蔵にそう言われ、阿弥陀警部は訝しげな表情を浮かべた。

「どういうことですかな？」

「棺の中に入っていたはずの京本福介の死体が無くなっていた。しかも全員が見ている通夜の中でじゃ。一回だけ部屋の中が停電で真っ暗になったが、その間5分となない」

「さらに言えば、その間、黒川元刑事が京本警視長の娘さんである雨音さんと一緒に行っていた間、全員その場を動かないようにしていたし、家から出たものはおらんかったよ」

佐々木刑事が付け加えるようにそう言った。

「つまり……　全員が全員のアリバイを証言しているというわけですかな？」

「一瞬の空きがあったとしても、まぁそうなるわな……」

阿弥陀警部はそう聞きながらも、どうして拓蔵が皐月たちの力が必要なのかが気になっていた。

「何か……　妖に関するものがあったんですね？」

そう言われ、拓蔵は阿弥陀警部と大宮巡査を棺の前まで連れてきた。

そしてある場所を指さした。

「こ、これは……　爪痕？」

そこには本来あるはずがない爪痕があった。

「りつさん？　確か京本福介は猫アレルギーじゃありませんでしたか？」

「えっ？　え、ええ……　夫は猫に触ると蕁麻疹や吐き気を催すんです。それでなくても近くに来ただけで追い払いますから」

「つまり……　この家に猫はいないということでしょうか？」

阿弥陀警部はそう云いながら、拓蔵を見やった。

「それじゃ、わしは失礼するよ。明日もあるのでな……」

「送っていきましょうか？　もう電車もないでしょ？」

佐々木刑事にそう云われ、拓蔵は頷いた。

それを見ながら、阿弥陀警部は首を傾げていた。

「どうしたんですか？」

「いや……　佐々木刑事の言葉がすこし気になりましてね……」

そう呟きながら、阿弥陀警部は考えていた。

『――黒川……　元刑事？』と……

参・寫眞

「よかったのですか？」
闇夜を走る車の中、佐々木刑事が拓蔵に尋ねた。
「何かじゃ？」
「……阿弥陀警部にはまだ話してないんですよね？　先輩が警察を辞められた理由を……」
そう云われ、拓蔵は顔を歪めた。

「わしが警察を辞めたのは、わし自身の問題じゃ。あんたら組織が責任を負わんでもよい」
「ですが……　あの事故、６年前に起きた転落事故は健介さんの運転ミスでは……」
「もうその話はするな……　わしだけが覚えておればいいんじゃよ」
佐々木刑事は云われたとおり、それ以上その話をせず、逆に新しく入ってきた警官や、京本福介が最後に世話をしていた警官達の話をした。
――そんなことを話しながら１時間ほど経つと、車は稲妻神社の鳥居前で停った。

「それでは失礼します。私はまだやるべきことがありますので」
「わかっておる。済まんな、忙しいのに」
「いえ、恐らくあの時あそこを離れなければ、阿弥陀は余計なことも訊いていたでしょうからね」
佐々木刑事はそう云いながら、車をＵターンさせ、事件現場へと戻っていった。

ふと拓蔵が神社の方へと見やると、ぼんやりと明かりが灯っているのが見えた。それを見るや首を傾げた。時刻はとっくに午前様だ。

ガラッと玄関の引き戸を開けると、廊下の中は暗い。が、居間の方はどうしてか灯りが点いていた。

「誰か起きておるのか？」

小さくそう云いながら、拓蔵は居間の障子を開けた。

卓袱台（ちゃぶだい）の上には一人分の食事一式が用意されており、その近くでは弥生と皐月、そして葉月がうたた寝をしていた。

今日は遅くなるので、気にせずに寝ておけとは云っておいたのだが、何ともまぁずっと待っててくれていたのだろう。

それを見渡しながら、拓蔵は「土産くらい買ってきてやればよかったな」と肩を落としながら呟いた。

◇◆◇◆◇◆◇◆

「爺様……　なにそれ？」

翌朝、三姉妹は拓蔵が居間に持ってきた一冊の本に目を遣っていた。

「これか？　これはな、昨日行ってきた人の写真じゃよ」

拓蔵がそう言って説明しているが、三姉妹は頻りに肩を震わせている。

――それもそうだろう。昨夜はずっと拓蔵を待っていたため、微熱を患っていた。

「亡くなった人って、警察の人？」

葉月が一枚の写真を指さしながら言う。セピア色の古びた写真だ。

それに写っている男性二人は同じ警察官の制服を着ている。

「あれ？　ねぇ、隣に写ってるのって……」

そう云いながら、皐月は拓蔵を見やった。どうやら弥生もそれに違和感を感じたのか、拓蔵を見ている。

「ははははっ！　そうじゃよ！　わしじゃ！　これでもなぁ、神社の経営をする前は警察官をしておったんじゃよ」

と、豪快に言うや、三姉妹は驚かず、ただただ呆然としていた。

どうにも無理に明るく話している気がしたからだ。

「それじゃ、昨日行ってきた人って」

「わしの先輩じゃよ。本当に世話になった」

「――どんな人だったの？」

葉月にそう訊かれ、拓蔵は一度深呼吸した。

「京本福介警視長……　今から４０年ほど前じゃったかな。わしがまだ新人の頃じゃ、右も左もわからず、ただ我武者羅（がむしゃら）に責務を真っ当した。田舎の小さな交番勤務から頑張っておった時にな、警視庁刑事部にわしが異動されると聞かされたときはビックリしたよ。警視庁なんて上のまた上じゃからな……　そこで、京本福介刑事と会（お）うたんじゃ。まだ警部の時じゃったけどな」

拓蔵は写真を見ながら話す。

三姉妹たちはその話よりも、拓蔵が昔話を話してくれることが不思議だった。いつも曖昧に返されたり、話をまるで捏造されているのが、若干ではあるがそう感じていたのだ。

しかし、今話している拓蔵の目に嘘がないことが痛いほどわかっていた。と同時に、拓蔵にとって、京本福介はそれほどまでの人物なのだろうと……

「先輩にはこっ酷く叱られたよ。警察は犯人を徹底的に調べること。そしてその証拠があったとしても、犯行を実証できなければ意味がないということも……　色々と教えてもらったよ」

「でも、どうして爺様は警察官を辞めたの？」

確かに拓蔵の年齢が５４歳だと考えると、まだ現役でやっていても可笑しくはない年齢である。
警察の定年は基本的には６０歳なので、拓蔵の歳ならばまだやっている。
が、曖昧なのは三姉妹がその実の年齢を聞いていないからである。

「わしはな、ある事件で警察を辞めたんじゃよ」
「――ある事件？」
そう聞き返したが、拓蔵はしんみりしてきたのか、話を途中で切り上げ、アルバムを手に取った時だった。

ヒラリとまるで意図的に落ちたかのように、一枚の写真が本の間から卓袱台の上に落ち、それを葉月が拾い取った。

「……」
何も言わず、ただただジッとその写真を見つめている。
「どうしたの？　何か写って……」
弥生が覗き込むや、声を失う。皐月もそんな二人を見て、首を傾げながらも、写真を覗くや……

「なっ……　なんで？」
「こ、これ……　私たちだよね？」
皐月と弥生が驚いたのも無理はない。その写真に写っていたのは、幼い自分たちだったからだ。

が、三姉妹が驚いたのはそこではなく、一緒に写っている大人二人だった。
まるで夫婦のような……　そんな気にすらしている。

「爺様……　この二人って、もしかして――」

「遠い親戚じゃよ……」
拓蔵はそう云うや、目を合わせようとはしない。
「どうして、どうしてそんな嘘が云えるの？　どう見ても！　どう見たって……」
皐月は『私たちのお父さんとお母さんなんじゃ』と喉の奥まで出かけた言葉をグっと堪えた。
確証がないし、自分たちの思い込みかもしれないと感じたからだ。だが、その蟠り（わだかま）が解消される訳がない。
弥生と葉月も皐月と同じ考えなのだろう。ジッと拓蔵を睨みつけている。

「もう良いじゃろ……　弥生、わしは少し出かけるからな」
そう言って、拓蔵は葉月の手から写真を半ば強引に取り上げ、アルバムに挟むや、居間を出ていった。

「全部処分したと思ってたんじゃが……　わし自身が吹っ切れておらんのじゃろうな？　のう、遼子（りょうこ）や……」
そうだとしても、三姉妹（あの子達）に真実を話すことはないだろうと、拓蔵は写真を胸ポケットに仕舞った。

肆・鼓膜

まだ日が昇ろうとしていた頃だった。

「……」

阿弥陀警部が訝しい表情で、それを見ている。

お寺の梵鐘（ぼんしょう）の下で横たわっている遺体が発見され、それがその寺で住職をしている人間だということがわかった。

――が、阿弥陀警部が気になったのはそこではなく、遺体の両耳から血が垂れ流れていることにあった。

「阿弥陀警部。ガイシャの身元がわかりました。被害者の名は金成知信、６２歳。この寺に戻ってから、発見されるまで誰も見ていないようです」

「寺に戻ったという証言が出来る方は？」

そう訊かれ、大宮巡査は視線を小坊主たちの方へと向けた。

「彼らはまだ修業の身だそうで、ガイシャの世話役をやっていたそうです」

阿弥陀警部は翼々（よくよく）と小坊主たちを見やった。

全員が頭を剃っているとはいえ、顔付きがキリリと整ったものがいれば、少し幼い感じのするものもおり、坊主と言うよりかはホストと云ってもいいほどの美男子ばかりである。

「――稚児（ちご）とは限りませんが、一応あなた達が昨晩から今朝にかけての行動を聞かせてくれませんかね？」

そう訊ねるが、全員が全員、住職が戻ってきた後に寝たと口を揃えて云った。

「昨晩、住職は何処へ？」

「京本福介警視長の御通夜に参加しておったよ。お経が終わった後、退場しなんだ」
佐々木刑事がそう阿弥陀警部に告げる。
「そうなんですか？　それじゃやっぱり……」
そう云いながら、阿弥陀警部は小坊主たちを見やった。

「ちょっと待ってください。私たちがそんなことをする訳がないでしょ？」
しかしアリバイがないのだ。全員が全員同じ事を云っている。アリバイ証言で最も大事なのは第三者、つまり赤の他人からの証言である。
小坊主たちはどう見繕っても赤の他人とは云えない。ひとつ屋根の下で共に修行に励んでいる。だからこそ、アリバイは成立しない。

「取り敢えず、あなた達は大人しくしててください……　湖西主任、どう思います？」
阿弥陀警部は遺体の状況を調べている湖西主任に声をかけた。
「ああ。こりゃ……　脳がやられておるな」
「――脳？　鼓膜が破れてるんじゃないんですか？」
「鼓膜が破れているだけなら、こんなに血はでらんよ。今も流れておるということは、鼓膜を突き破って脳を損傷しておるからじゃろうな。詳しいことは検死せんとわからんがな」
そう云うや、湖西主任は梵鐘を見上げた。

「間接的な方法ではないかもしれんが……」
湖西主任は遺体の写真を一枚撮り、それを阿弥陀警部に渡した。
「どうせ、稲妻神社に行くんじゃろ？　少しは自分たちで動いたらどうじゃ？」
「できれば、そうしたいんですけどね……」

阿弥陀警部は苦笑いを浮かべた。

◇◆◇◆◇◆◇◆

「それにしても、今日はやけに写真を見る機会が多いよね？」
皐月が弥生と葉月に言う。
「アルバムか何か見てたんですかな？」
阿弥陀警部にそう尋ねられ、皐月は咄嗟に苦笑いを浮かべた。

「それで、この写真を霊視すればいいんですね？」
葉月がそう訊ねるや、阿弥陀警部と大宮巡査は頷いた。
「ところで神主は？」
「今朝出掛けたっきり帰ってきてないんです。多分どこかで飲んでるんだと」
何ともまぁ自由奔放な神主だと、阿弥陀警部は呆れたような表情を浮かべた。

葉月は目を瞑り、一二度ほど深呼吸をし、ゆっくりと写真の上に手を置いた。
何かを感じたのか、徐々に顔を歪めていく。
――が、それが苦痛ともいえるほどの表情を浮かべた時だった。

ガタッと体全身を倒し、空いている手で耳を抑えた。
「――葉月っ！」
皐月が止めようとするが、葉月はまるでそれを拒むように必死に写真から手を放そうとはしない。
それがどれだけ苦しいのか、歪んだ顔と大量の冷や汗を見れば、誰もが嫌というほどわかった。

写真から手を離すや、まるで長時間潜水していたかのように、ゼ

ェゼェと葉月は荒い息継ぎをする。そして、近くにいた大宮巡査の膝下に凭れかかるようにして倒れた。
「だ、大丈夫かい？」
大丈夫じゃないのは訊かなくても目に見えている。

「それで何か聞こえたの？」
弥生がそう尋ねると、葉月はまるで拒むように両耳を手で塞いだ。
「――聞こえなかった……」
「えっ？」
「周りの音がうるさくって、その人の声全然聞こえなかった……」
葉月の能力は死者の声を聞くことだ。だがそれは死者が死ぬ直前の音が混ざっている場合もある。

「周りがうるさいって……　でも発見された現場はお寺の梵鐘の下ですよ？」
「まさか……　被害者は梵鐘の中で殺された？」
梵鐘の平均的な大きさを考えれば、人を吊るして殺すくらい訳がない。
「でも、どうしてそんな七面倒なことするわけ？」
云われてみれば確かにと、皐月は葉月の容態を窺っていた。
「葉月、ちょっと待ってて、今冷やすの持ってくるから」
そう云うや、皐月は居間を出ていった。

「葉月ちゃん、どうして無茶なんてしたんだい？　耳を塞ぐということは、それだけ君の聞こえている音が大音量だということだろ？」
大宮巡査は責めているわけではないが、それでも葉月に訊きたかった。下手をすれば、難聴になりかねないからだ。
それをぼんやりとした表情で、葉月はジッと大宮巡査を見つめた。
「これしかできないから……」

「これしか……　できない？」
葉月は可細いというよりも、まるでかすれた声で口を動かした。
「皐月お姉ちゃんみたいに、黒天さまの力を使って、妖怪を退治する力があるわけでも――　弥生お姉ちゃんみたいに御札を使って霊を成仏させてあげられない……」
大宮巡査はできる限り気付かないふりをしていた。
葉月が話すたびに涙を溢れ出していることが、まるで悔しいと云っているのが痛いほど感じていたからだ。
「だから私には霊の声を聞いてあげることしかできない。それに、私に助けてもらおうと思って、取り憑いてくる人もいるけど、結局私一人じゃ助けてあげられない――」
「立派じゃないか……」
大宮巡査がそう云うや、葉月はキョトンとする。
「僕たち警察は証言がなければ、犯人逮捕はおろか、もしかしたら永久に事件が解決できなくなるかもしれない。でも、君の力は被害者の声を聞いてあげられることだろ？　それはどの証言にも上回ることだ。だって、被害者の声なんだから――」
大宮巡査はそう思ったから云ったまでで、深くは考えていない。
確かに被害者自身の声が聞けたのならば、それはどの証言よりもハッキリとした証言とも言える。
しかし、殺人事件においては、死んだ人間の証言など夢のまた夢である。
「だから……　君の力は僕たちに、強いてはお姉ちゃんたちに十分役に立っているんだよ」
「ほんと？」
それは今まで感じたことないほどに幼い声だった。

「ああ。君に声を聞いて欲しいという霊は、君だから取り憑いたのかもしれないし、君が必死になって声を聞いてあげたから、被害者は鐘の中で殺されたということがわかったんだから」

「――よかった……」

そう云うや、葉月は気を失うように目を閉じた。

「一度耳鼻科に行って診せたほうがいいかもしれませんね。さっきの様子だと余程の大音量だったでしょうから、鼓膜が破れている可能性も」

大宮巡査にそう云われ、弥生は翌日学校を早退し、葉月を耳鼻科へと連れていった。

診察結果はなんともなく、それを電話で聞いた大宮巡査は安堵な声を上げた。

伍・猫

「あれ？」と一人の警官が言った。警官の手には一欠片（ひとかけら）の何かが乗っている。

それを周りで鑑識をしていた同僚たちも気付き、ワラワラと集まり出した。

「おっかしいな……　確か猫は飼ってないと云っていたはずなんだけど」

それを持っている警官が不思議そうに云う。別に誰かに尋ねているわけではなく、自問していると云った感じだ。

しかし彼が疑問に持ったのは、彼自身が未だ実家暮らしをしていた頃に猫を飼っていたからである。

だからこそ、それが何なのかが一目で理解出来た。

「すみません？　どうしてキャットフードが落ちてるんですか？」

そう訊ねられ、りつと雨音は何も言わず、声の方へと目をやった。

「――キャットフードですか？」

りつが警官の方へと近付き、それを見た。

「確かに……　キャットフードのようなものでしょうが、如何せん夫がアレルギーですから――」

確かにアレルギーのある人間が家にいる以上、猫を飼うことは出来ない。

「一応鑑識に回して……」

そう言って、キャットフードの欠片を、小さな袋に入れた。

「雨音？　何か隠してないかい？」

りつにそう訊かれ、雨音は少しばかり顔を歪めたが、首を横に振

った。
「それじゃ一体どうしてこんなのが家にあるんだろうね？」
独り言のようにりつは呟いた。

「ごめんなさい……」
ばつが悪そうに雨音は小さくそう云うや、深々と頭を下げた。
「一週間くらい前から、隠れて飼ってたの。凄く小さくて、弱々しくてほっとけなかった。でも、キャットフードとかミルクとかは自分のお小遣いから……」
言い訳にも近い説明をしている間、りつは溜息を吐いた。

「それで……　その猫は今何処にいるの？」
「えっ？　っと……　家の近くに空き地があるでしょ？　そこで見つけたの」
そう聞くや、警官の一人が確認するようにと、他の警官に視線を送った。

「その猫が家に上がり込んだことは？」
「ううん。お父さんがアレルギーだから、絶対入れられない」
しかし、あの棺に付けられている爪痕はどう説明がつくだろうか？と何人かの警官が思っていた。

棺から採取された指紋はひとつしかなかった。
そのひとつはほかでもない、喪主である京本りつのものだ。
葬儀実行委員長や世話役は手袋をしているため、指紋が検出されない。
しかしあの状況で棺を開けるということは、余程の空間認識が必要になってくる。
増（ま）してや死体を運び込んでいるのだ。暗闇とかしていた短時間に……

「雨音ちゃん？　本当に猫を空き地の方で飼っていたのかい？」
戻ってきた警官がそう訊ねると、雨音は少しばかり驚いた表情で頷いた。
「可笑しいな。いやね？　小父さんが見てきたんだけど、ダンボールにはキャットフード、水が入っている小皿以外、何も入ってなかったよ？」
「――えっ？」
雨音はそう云うや、一目散に外へと出た。それを警官二人が追った。

それを見ながら、りつは少しばかり笑みを浮かべた。

◇◆◇◆◇◆◇◆

「みぃーちゃん！　みぃーちゃんっ！」
雨音が大声で呼び掛けるが、一向（いっこう）に反応がない。
「雨音ちゃんの言っていることは嘘じゃないですね？　飼っていたという証拠があります」
「だが、肝心の猫がいないのではなぁ……　確か飼っていたのは一週間ほど前からと、猫の方はまだ弱々しいということは、小猫ということになる」
そうなると、それほど遠くまで行っていないということになる。

「雨音ちゃん、そのみぃーちゃんの世話をしたのが最後なのは何時頃だい？」
「えっと……　今日の朝です」
つまり昨夜の時点ではまだ生きていたということになる。
「本当に家に持ってきてはないんだね？」
雨音は激しく首を横に振った。

「だけど鑑識で直にわかるけど、棺についていたあの爪痕は猫のものに間違いないんだ」

「でも……」

雨音が嘘を吐いているとは思えないし、警官の二人も小一時間一緒になって子猫の探索にあたった。

――が、それでも発見されず、雨音と警官二人は何も言わず、家へと戻っていった。

陸・小窓

「おっきぃーっ」
遊火が唖然とした表情で見上げている。
「確かに大きいわね。一体何坪くらいあるのかしら？」
弥生が遊火の言葉に相槌を打った。

京本福介の家は大凡７０坪だと拓蔵が説明する。
「確か被害者って、三人家族だったはずだよね？　どうしてこんな大きな家に住んでるんだろ？」
葉月の云う通り、別に大きな家じゃなくてもいいのではと言いたくなってくる。

「すみません。阿弥陀ですが、開けてもらえますかね？」
インターホンでそう伝えるや、門が自動的に開いた。
「これって、中から開けてるんだよね？」
「当たり前でしょ？　そうじゃなかったら……」
葉月の何気ない質問が、皐月と弥生に何かヒントを与えたようだ。が、当の本人はそれに気付いていなかった。

「中からってことは……　犯人は中の人間。しかも逃げることは出来ない」
「云われてみれば確かに……　でも、どうやって犯人は死体を？」
拓蔵は蓋をされた棺の小窓から京本福介を見ている。

いや――　それが可《，》笑《，》し《，》い《，》のだ。
普通、棺に蓋をする時は告別式で別れ花を入れてから、火葬場へ投函するまでは“蓋をされない”。
御通夜の晩、“夜伽”という、棺を寝ずの番で監視するというも

のがある。
しかし昨晩、そのようなことをせず、そのまま別れ花をしようと、りつは云っている。そして突然の停電である。

「さすがにそれはないじゃろ？　りつさん……　あんた、確か仏門の家柄じゃったはずじゃろ？」
「どうかしたの？」
皐月がそう云うや、拓蔵は一二度咳をした。

家に入るや、外からでも大きいのに、中を見るや三姉妹と遊火は再び唖然とする。
「これって、うちの本堂より大きくない？」
客間を見て皐月がそう云う。それほど大きな広さだった。
「現場はそのままみたいじゃが、何かわかったことは？」
そう拓蔵が云うや、阿弥陀警部と大宮巡査がそれぞれ状況を訊きに行った。
一二分ほどして戻ってくると、雨音が猫を飼っていたが、その猫が行方不明になっていると説明した。

「猫かぁ……　うちにも一匹くらい欲しいわね？」
弥生は皐月の方を見ながら云う。
「あ、あのね？　私が飼ってるのってハムスターなんだけど？　それに鼠（ネズミ）は大黒天の神使（しんし）だから……」
「はいはい。でも見張っときなさいよ。あの子達、偶（たま）に他の部屋に入ってくることあるから」
そう云われ、皐月は気をつけると一言言った時だった。

「あれ？　猫……？」
葉月がキョロキョロと辺（あた）りを見渡した。
「どうかした？」

皐月がそう尋ねると、葉月は猫の鳴き声がしたと説明する。
「聞こえませんでしたけど、ねぇ大宮くん？」
「ええ。葉月ちゃん、聞き間違いじゃないのかい？」
大宮巡査がそう尋ねるが、葉月は首を横に振った。
「私は耳が悪いから、聞こえないかもしれないけど、それでも、他のみんなが聞こえてないんじゃ、やっぱり」
「でも、猫の声聞こえた。まだ凄く小さい……」
そう葉月が云った時だった。
近くにいた警官が近付いてきて、どんな感じだったのかと葉月に尋ねる。
「えっと、まだ小さくって、なんか脆弱（ぜいじゃく）してて……」
「雨音ちゃん？　確か君が隠れて飼っていた猫も最初はそんな感じだったって言ってたね？」
雨音は答えるように頷いた。
「それじゃみぃーちゃんは家の中にいるの？」
「……」
葉月は小さく首を横に振った。
「いないってこと？　それじゃ葉月が聞いた声って……」
いないということは、この世にということになる。

「弥生姉さん、何か感じる？」
「さっきから遊火と一緒にやってるんだけどね、全然……」
「むしろ、もういないといった感じですね。部屋の中には残り香すら残ってません。ただ、棺に付けられていた爪痕から僅（わず）かにですが妖気のようなものを感じました」
皐月には遊火の声が聞こえない。かわりに葉月が説明していた。
「死体を持ち出す妖怪……　もしかして火車（かしゃ）？」
「御通夜を狙っての犯行と棺に残った猫の爪痕……　間違いなく、火車じゃろうが……　先輩は盗まれるようなことはしておらんはずじゃぞ？」

火車は生前悪行を積み重ねた末に死んだ者の死体を盗むと言われいてる。――が、拓蔵は京本福介がそんなことをしないと考えていた。

「阿弥陀警部？　済まないが皆の作業を止めてもらえんかの？」
拓蔵がそう云うや、阿弥陀警部は少しばかり首を傾げた。
「一つ確認を取りたいんじゃ。お前たちもいいな？」
そう訊かれ、三姉妹も首を傾げた。

「えっと……　全員定位置に座りました」
警官の一人がそういう。
「それで何を始めるんですかな？」
「一応、昨晩の御通夜から引き続きこの家にいる警官諸君ならすでに気付いていると思うが、今座っているのは昨晩と同じ状況だ」
拓蔵はそう云いながら、座った位置を説明していく。

先ずは棺を前に座っている僧侶、金成知信を湖西主任が代役を務め、そのうしろには焼香台が置かれている。
そしてそれらを前にして、左から世話役と葬儀実行委員長が座る。
それを三姉妹が代役する。
人が通れる間を挟んで、喪主である京本りつを拓蔵。遺族である雨音を大宮巡査が代役を務める。
友人・知人が五人、親族が四人、近親者が一人、そして残りは仕事関係者、つまり警官である。

棺には遺体の代わりにボールが入れられている。それを全員が棺の小窓から確認を取った。

「僧侶である金成知信がお経を読んでいる間、わしらは焼香を行な

っていた。そして、僧侶はお経を読み終えた後、りつさんと一言会話をした後にこの家を出た。そして、りつさんが別れ花をしようと切り出し、籠に入った弔花を雨音ちゃんが皆に配った……　そして、みんなに行き渡り、棺を開けようとした時じゃった」

そう拓蔵が云うや、部屋の中は真っ暗になった。

「ちょっと？　何も見えないんだけど？」

「――っ？　ちょっと待って……　今なんか音がしなかった？」

弥生は警戒するように辺りの気配を探った。

「そして、わしが雨音ちゃんと一緒に落ちたブレーカーを上げに行った。その間は大凡一二分じゃろう。みんなが慌てておったからそれよりも少し間隔を広げて五分前後としよう。そして部屋の中に明かりが灯り始める」

拓蔵の云うとおり、それくらいの感覚で部屋に明かりが灯される。

全員が定位置とは言わないが、殆ど動いていない。

いや、動けないのだ。密集された間隔では容易に動くことは困難である。しかもお経を読んでいる間に全員が長時間正座しており、足を痺れさせるには十分なほどである。

だからこそ犯人は楽にことを運べた人間がいるということになる。

「あれ……　入ってない？」

葉月が確認するように小窓を開けるや、そこには何も入っていなかった。

「でも、棺には京本福介の死体が……」

いや、死体と云えば死体である。

「い、急いで葬儀を担当した会社に問い合わせてください。葬儀の前、死体を見てから蓋をしたのかと！」

阿弥陀警部がそう命令する。
「じ、爺様？　これって……」
皐月と弥生も気付いたのだろう。どうして全員に小窓からボールを確認させたのかという真意を――
「犯人は最初から遺体を盗んでおったんじゃよ。棺の蓋をしていたのは、それが中に入っていると錯覚させるためじゃろうな。じゃが、それでは説得力がない。だから全員に確認させたんじゃよ。首だけの遺体を小窓からのう」
その言葉に全員がゾッとする。
「そんなこと可能なんですか？」
「小窓からでは肩ほどまでしか見えん。しかも何も態々そこまで見る人はおらんじゃろ？　犯人はその盲点をついたんじゃよ」
云われてみれば確かにと大宮巡査は頷いた。
「でも、さっき蓋を開ける音がしたから、気付いてる人も……」
「みんなには事前に説明しておるから、弥生と同じく気付いたものもおったじゃろうが、突然真っ暗になって、冷静でおられるものはおったか？」
各々が互いの目を見やりながら、首を横に振った。
「つまり、犯人は最初から停電するように仕向けてたんじゃよ。全部の部屋のエアコンをタイマー予約して、お経が読み終わり、別れ花を配り終えるタイミングを見計らってのう」
拓蔵がそう云うや、隅っこで何かを抱えているりつを見やった。

漆・屍体

「お母さん？」
雨音がそう声を掛けながら、ゆっくりとりつへと近づいていく。
「雨音ちゃん……　ちょっと待って」
皐月は持ってきていた二本の竹刀の内、一本を片手に持つや、呪（まじない）を唱えた。
「吾神（わが）殿に祭られし大黒の業（ごう）よ！　今ばかり我に剛の許しを！」
そう云うや、竹刀は真剣へと変わっていき、皐月は身を構えた。

「……なぜじゃ？　どうしてこんなことを？」
拓蔵はトリックを説明しても、りつが犯人であることが信じられなかった。
「ちょっと待って！　小父さんはお母さんが犯人だって言うんですか？」
雨音が必死な表情でそういった時だった。

「――えっ？」
背中に痛みが走り、そちらを見やった。
そこにはりつが歪むほどの笑みを浮かべている。
「か、か……　あ、さ……？」
ドクドクと背中から血が流れ、雨音はドタッと倒れる。

「雨音ちゃん？」
警官の一人が駆け寄るや、りつはそれを切り裂いた。
雨音と警官が死屍累々と言わんばかりに折り重なった。

「かぁさん？　どうしてぇ？　どうして？」
雨音の息が残ってることに気付くや、拓蔵は二人に駆け寄った。

「雨音ちゃん？　ええいくそっ！　お前たち、ボーとしとらんで助けんか！」

そう怒鳴りながら、視線は皐月へと向けられていた。

りつが逃げるようにその場を立ち去っていく。

「まちなさいっ！」

皐月はりつを追い掛けた。

「遊火！　壁になって食い止めることとか出来ないわけ？」

「無理ですって、火の玉が集まる数や大きさにも限度がありますから。人間の姿でも結構ギリギリなんですよ？」

遊火はそうじゃなくても、塗壁じゃないんだからと駄々を捏ねた。

それを見て、弥生は溜息を吐いた。

◇◆◇◆◇◆◇◆

「あぁもう！　どんだけすばしっこいのよ？」

りつを追っている皐月が愚痴を零した。

追い掛け始めた頃から、韋駄天の力で動きを速くしているのだが、それでも追い付ける気配すらしない。

屋根から屋根へと飛び越えながら、追い掛けていく。

その動きは神速に近く、人が目を追いやることは不可能に近い。

「好い加減に止まりなさいよ！」

皐月は一気に加速し、りつへと切り掛った。

「へっ？」

りつはまるで紙のようにひらりと一閃をよけ、逆に皐月を切り付けた。

皐月は屋根の上から落ち、地面に体を打ち付ける。

「いったぁ……」
ボンヤリと意識を保ちながら、皐月はりつを見やった。
りつは皐月が追い掛けられないと確信したのか、一向に動こうとしない。
「なんか……　ムカついてきた」
――皐月がそういった時だった。

シャランという鈴が鳴る音がし、りつと皐月はそちらを見やった。
耳が悪い皐月でさえ、耳鳴りと言えるほどに大きな音だ。

「一刀・破魔理（はまのことわり）」
そう誰かが言った時だった。
りつの体が横一文字に切られ、ズルズルとズレるや、下半身はその場に倒れ、上半身は高い屋根の上から落ちるや、グチャグチャに潰れた。

影を見やるや、皐月は絶句する。
「あ、あんた……」
影が皐月の方を見やり、スッと消えた。

「皐月？　だいじょう……」
追い掛けてきた弥生と遊火が皐月に追い付くや、凄惨な状況に絶句した。
「い、いったい誰が？」
弥生は皐月に尋ねたが、皐月はワナワナと肩を震わしている。
「あぁの馬鹿……　一体何考えてるのよ？」
今の皐月には怒りが先駆けており、弥生の声が届いていない。

「私たちの仕事は、妖怪を退治することが目的じゃない。この世で犯した罪を償わせることでしょうが？　ねぇ……　信乃ぉおおおお

おおおおおっ！」
そう絶叫するや、皐月は崩れるように気を失った。

◇◆◇◆◇◆◇◆

「阿弥陀警部。葬儀担当の会社を調べましたところ、連絡先はまったくの出鱈目でした」
恐らく用意した3人はその場凌ぎのアルバイトだろう。しかし、それを知る人物はもういない。

「雨音ちゃん？　どうして君はあの晩、お母さんを止めなかったんじゃ？」
拓蔵が衰弱している雨音に尋ねた。
「お父さん……　悪いことといっぱいしたから……　お母さんが殺したの……」
「い、一体どういうことじゃ？」
佐々木刑事がそう雨音に問い掛ける。
「お父さん、警視庁に入ってから人が変わった。昔は正義感に溢れてて、みんなに慕われるカッコイイお父さんだった……　でも、犯人が捕(つか)まらなかったら、成績に影響するっていって……」
「まさか、冤罪をしていたというのか？」
「お父さん、犯人逮捕には限度があるって、ヤクザを使って、要らない組員を犯人にしたの。勿論抵抗はする。でもヤクザというだけで犯人にされていた」
雨音は弱々しく説明する。

「でもそんな事したら……　いや、先輩だから出来たんじゃ」
「私たちは組織という仕組みだからでしょうかね？　京本警視長だから出来たんでしょうな……」
「そんなにまでして、何を得たかったんじゃ？」

拓蔵は顔を歪めた。頭の中では今まであった京本福介との思い出が走馬灯のように蘇ってくる。
「雨音ちゃんは死体が棺の中に入っていたことを知らんかったのか？」
「停電した時、お母さんが動かないでっていって」
なんとも純粋な子だと、拓蔵と阿弥陀警部は苦味笑いを浮かべた。

「阿弥陀警部っ！」
一人の警官がそう言いながら客間へと入ってきた。ダンボールを抱えている。
「きょ、京本りつの部屋から、こ、こんなものが」
そう云うや、警官は雨音を見やった。その表情はまるで拒んでいるようにも見える。
「一体何が？」
阿弥陀警部が中を確認するや、顔を歪ませた。

「何が入って……」
「見るなぁあああああっ！　見ちゃダメだ！」
警官がそう云うや、雨音に中を見せない。
「こりゃ……　確かに見せれんなぁ」
拓蔵が中を見るや、手を合わせて拝んだ。
「どうして？　どうして見せてくれないの？　みぃーちゃんなんでしょ？」
その言葉に拓蔵はおろか、その場にいた全員が凍りついた。
「雨音ちゃん？」
葉月がそう雨音に問い掛ける。
誰一人、中に入っているのは猫だと云っていない。
が、まるで雨音は聞く耳を持たないようにダンボールの中を見た。
「なぁんだ……　ここにいた？　ほら……　ご飯だよ……」

そう云いながら、それを抱きかかえるや、ボロボロと屍体は毀れ落ちていく。

腐り崩れた顔、爪さえ残っていない足。折られた骨は皮を突き刺している。それは誰もが恐怖するには十分なほどだった。

「みぃーちゃん……　みぃーちゃん……」

雨音はまるでただ撫でているだけ。が、その眼はまるで暗く、精気を感じることは出来なかった。

――事件が解決してから、一両日経った後だった。

「拓蔵？」

縁側に座っている拓蔵に瑠璃が声を掛ける。が、拓蔵は何か考え込んでいるのか、それに気付いていない。

「深々と何を考えているんです？」

痺れを切らした瑠璃が上がり込み、うしろからそれを見るや、

「なるほど……　さすがにそれは捨てられませんね？」

そう云いながら、瑠璃は目を細めた。それはまるで、子供を見守る母親のような暖かい目だった。

「瑠璃さんや、二人は……　本当に死んだんじゃろうかね？」

拓蔵がそう尋ねたが、瑠璃はその返答に途惑っていた。

そして、物悲しそうに片腕を握り締める。

「地蔵菩薩であるわたしですらわからないんです……　健介と、あなたの娘である遼子が生きているのか、はたまた死んでいるのかが……」

瑠璃が申し訳ないように顔を歪ませた。

「あの事故は車に乗っていた全員が死んでいたと云われても、そうなのかと納得してしまうほどの大惨事だった。が、弥生たちはわしのもとに帰ってきた……　あなたの力で」

「あの子らを賽の河原で見掛けた時、どうして死んでいないのに、あそこにいたのかと思ったので。死んでいない人間を露世に戻すのは道理だと思いますが？」

「でも、あの子達が賽の河原にいたということは、親であるふたりが死んでいない何よりの証拠じゃないんですか？」

そう拓蔵が瑠璃に訊ねた。

賽の河原とは三途の川の川原を云う。
親より先に死んだ子供が石を積み上げ、その罪を償う場所。
そして瑠璃――閻魔王は、その場にいる子供を助けると伝えられている。

「そのことを皐月は覚えていないのでしょ？」
「覚えてないほうがいいでしょ。これはわしらだけが覚えておればいいんです」
ほんとうにそうなのだろうかと瑠璃は考えていた。
拓蔵の意思とは関係なしに、まるでそんな遠くない未来、皐月がすべての記憶を思い出す。
瑠璃はそんな気がしてならなかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆

それから一週間経ち、阿弥陀警部と大宮巡査が報告に来ていた。
「雨音ちゃんは？」
葉月がそう尋ねると、大宮巡査は入院後、施設に預けられると説明した。
母親と飼い猫であるみぃを一辺に失い、その精神状態は危険と判断してのことである。

「京本りつは金成知信と不倫していたようです」
「――不倫？」
「ええ。京本福介を殺したのも、恐らく彼が邪魔になったんでしょうね」
そう聞かされ、拓蔵は少しばかり顔を歪ませた。

「それと金成知信の死体の検死結果ですが、死因は毒殺。梵鐘の中

に死体を隠していたものと推測されます。その犯人は小坊主ら全員でした……　まぁ、彼らの気持ちを考えれば、わからないわけでもないですが」

　阿弥陀警部がそう云うや、大宮巡査を見やった。

「彼らは金成知信によく肢体（したい）を求められていたようです。拒んでも、拒んでも……」

「さすがに、三次元でそっちの趣味はないんだけど？」

　弥生がそう云う。

「“稚児”というのは武家や寺などにおいて、主の男色（だんしき）の相手として囲われる少年という意味もあるからのう」

「まったく、あれだけの美男子を揃えていたのもそれが理由でしょうな」

　阿弥陀警部も弥生と同じく、金成知信の心境には理解できなかった。

「ねぇ、爺様？　今回は何も出来なかったけど……」

　恐らくあの晩のことだろう。

「そう云えば、皐月さんの姿がないですね？」

　大宮巡査が居間を見渡しながら尋ねる。

「よほど歯痒いんでしょうね。どうしてあんなことをしたのかという理由を知ってる以上、口を出すことができない」

　弥生は今日に限ってはあまり皐月に話しかけないでほしいと、阿弥陀警部と大宮巡査に釘を刺した。

◇◆◇◆◇◆◇◆

　薄暗い本堂の中、皐月は袴姿のまま、大の字になって横たわっていた。

　天井には金色に輝く稲穂の絵があり、三姉妹たちはその絵が幼い

頃から好きだった。
皐月は何かを考えるとき、決まってジッと見つめながら、答えを探っていた。
出てくるはずのない答えを延々と……

「閻獄第三条六項において、自らの位(くらい)を悪用し、男色をしたものは『衆合地獄・多苦悩処(たくのうしょ)』へと連行し」
これは金成知信への罪状……
「閻獄第二条において、己が欲望で、夫を殺し、その死体を隠し盗んだものは『黒縄地獄』へと連行する」
これは京本りつへの罪状である。

本来ならば、あの晩するはずだったのだが、京本りつを切り殺した影のせいで出来なくなった。

「あんたが、どうして妖(あやかし)を怨んでいるのかを知ってるけど……　私たち執行人にとって、公私混同は御法度でしょ？」
皐月はそのものの思いに、ただただ歯痒さだけが残っていた。

捌・餓鬼（後書き）

第五話終了です。今回は色々と伏線を貼ってます。

【番外編】三姉妹の極当たり前の一日【前編】（前書き）

場繋ぎのおまけシナリオですw

【番外編】三姉妹の極当たり前の一日【前編】

朝顔の葉っぱの先に朝露がたまり、雨上がりの水溜まりに落ちる。
夏という事もあってか、朝の6時には既に日が昇っている。
そんな中、稲妻神社の本堂には、長襦袢姿の皐月が正座をしていた。

「掛巻も恐き稲荷大神の大前に――
恐み恐みも　白く――
朝に　夕に勤み務る家の産業を――
緩事無く　怠事無く　彌　奨め奨め賜ひ――
彌助に助）賜ひて　家門高く令吹興　賜ひ――
堅磐に　常磐に　命長く　子孫の八十連屬に至まで――
茂し八桑枝の如く　令立槃賜ひ――
家にも身にも枉神の枉事不令有――
過犯す事の有むをば――
神直日大直日に見直聞直座て――
夜の守日の守に守幸へ賜へと――
恐み　恐みも白す――」

稲妻神社に祭られている倉稲魂神、通称「稲荷神」の祝詞をうたいながら、皐月は精神を集中させていた。
皐月の護神は大黒天、といっても七福神で連想される温厚なものではなく、元々のインドの神としての摩訶迦羅である。

スッと立ち上がり、両手に竹刀を持ち、呪詛を謳う。
「吾神殿に祭られし大黒の業よ！　今ばかり我に剛の許しを！」
すると竹刀は何時の間にか、真剣へと変わっていき、皐月は巻き藁を×字に切り刻む。

「うん。今日も調子いいわ」
と満足気な表情を浮かべながら、その切り口を見た。
切り口の何と綺麗なものか、バラバラになった藁の切り口は修復出来るのではないかと云いたくなるほどに微塵もズレがなかった。

「今日は気持ちよく起きれたし、これで事件とかがなかったらもっといいんだけどね」
「皐月？　朝ご飯できたわよ？」
力を解き、背伸びをしている皐月に、裏口から弥生の声が聞こえた。

稲妻神社の朝は基本的に朝6時半だった。先に起きている皐月と弥生に比べて、葉月と神主である拓蔵が眠そうに目を擦っていた。
未だ八歳の葉月はまぁまだわかるとして、問題は拓蔵の方だった。
「爺様？　昨日は一体何時くらいまで飲んでたんですか？」
弥生が“笑顔”でそう問い質すと、拓蔵は軽く咳払いをした。
「さて、今日もこうやって、皆が揃って朝餉を食べられるのも、偏に稲荷神の御加護があっての賜物。弥生、皐月、葉月……」
拓蔵がそう云うや、三姉妹は少しばかり座る位置を後ろにずらすや、手を合わせ黙祷した。

『たなつもの　百の木草も天照す　日の大神の恵みえてこそ』

そう云うや、さっきまでの静けさは何処へやら、本来静かに食べるものなのだが、そんなの知った事かと云わんばかりに朝っぱらから喧しい。

『朝宵に物くふごとに豊受の　神の恵みを思へ世の人』
と食事を終える短歌を詠い、三姉妹はそれぞれの部屋へと戻っていく。

「それじゃ行ってくるねぇ！」
「おう、確り勉強してこい！」
拓蔵に見送られながら、三姉妹は神社を後にした。

駅前に差し掛かると、弥生と別れ、皐月が通っている中学と葉月が通っている小学校までは殆ど途中まで一緒のため、皐月の友人たちは弥生に会うことよりも、寧ろ葉月に会うことの方が多い。

「あ、葉月ちゃん、おはよぉ！」
皐月の友人である飯塚萌音が二人に気付き、近付いていく。
「おはようございます」
「いやぁ、もう、可愛い」
葉月は極々当たり前に挨拶しているだけなのだが、深々と頭を下げたのが可愛かったのだろう。萌音は悶えるように、顔を紅潮させる。

「ほんと、皐月とは大違いだわ」
「それ、どういう意味よ？」
と云いながらも、云ったところでどうにもならないので、それ以上は云わなかった。

葉月が通っている小学校が見えてくると、皐月と葉月はその近くで別れた。
そして皐月も自分の通っている中学の校門を潜っていった。

◆◇◆◇◆◇◆

「おはようございまーす」
時間が朝の8時くらいになると、次々と稲妻神社で働いている社員数名が社務所の方へと入っていく。
タイムカードにカードが押されていき、女性と男性別れて更衣室へ

と入っていく。
女性は基本的に巫女と事務職に分かれ、男性は拓蔵の手伝いに扮する。

本堂に全員が集まったのを確認して、神主である拓蔵が稲荷神への祝詞を謳う。
「それじゃ、今日も一日よろしくお願いします」
拓蔵が深々と頭を下げると、職員たちも頭を下げた。

平日の朝は決まって暇なのだが、台風の季節が近付くと、お参りに来る百姓が多い。
それもそうだろう。せっかく作った農作物をボロボロにされたんでは、たまったものじゃない。
この稲妻神社は五穀の神が祭られているため、そう云った願い事が殆どだった。
後はまぁ――巫女の写真を撮りにくるのが来るくらいだ。

――――丁度、お昼前のことだった。
「神主さんはご在宅かな？」
境内に落ちていたゴミを拾っている巫女に阿弥陀警部が拓蔵の所在を尋ねにきた。
「神主さまでしたら、社務所の方に」
巫女も阿弥陀警部が警察の人間だと知っており、何の躊躇いもなく教えた。
阿弥陀警部は帽子を脱ぎ、頭を下げた。そして、そのまま社務所の方へと歩こうとした時だった。

「あ、頭は下げて行ってくださいね。神様の通り道ですから」
ちょうど本堂と鳥居を繋ぐ道をを跨ぐ形で通ろうとしていた阿弥陀警部を巫女が止めた。

「あ、ははは っ！　そうですね」
笑いながら、阿弥陀警部は巫女に言われたとおり、頭を下げながら、社務所へと向かった。

【番外編】三姉妹の極当たり前の一日【後編】

社務所の応対室に案内された阿弥陀警部の正面に、拓蔵が座っている。阿弥陀警部の横には大宮巡査の姿があった。
大宮巡査は今まで居間の方に案内されていた為、社務所はおろか、応対室に入ったことは無い。
さっきから部屋の中をキョロキョロと落ち着きのない様子だった。

「で？　君が此処に来たということは、また事件かね？」
「ええ。梅原という男性が自室で死んでいるのが妻によって発見されましてね。死因は過労死なんですけどね。ただその梅原というのが為体（ていたらく）な男で、よく遅刻や仕事をサボったりしてたらしいんですよ」
阿弥陀警部の違和感は仕事を真面目にやっていない人間が、過労死をしたとは考え難いことだろう。

「それで、わしのところに来たと？」
「……はい。真面目でもない人間が、過労死で死ぬとは思えませんしね。それに妻の話ですと、熱中するほどの趣味も無かったそうです」
過労死とはその言葉どおり、長時間働いたり、不規則な勤務等々によって蓄積された疲れやストレスからなる、脳疾患や心臓疾患を起こし死亡することである。
本来働いている人間にさす言葉ではあるが、たとえにマラソンなどのスポーツでも無理を通して行っていたとしても、なる可能性がある。

「会社はその事に対して何を？」
「いえ、会社は特に強いることはしていないようでしたし、休憩も入れていたようです。ただ、その休憩時間の間ですら、梅原は働い

ていたようです」
「それを止める人間はいなかったのかね？」
「何人かは止めていたようですが、止めたと思った数秒後には忙しく動き回っていたようですよ」
「――――動き回る？」
「梅原が勤めているのが運搬会社なんですよ。作業2時間置きに30分の休憩を挟んでいたようです」
運搬会社ということは、荷物等を運んだりして疲れも余程のものだろう。それにも拘らず、梅原という男は休みなしに働いての死亡ということになる。

「犯人は……いないでしょうね？」
「どういう事ですか？」
「人間の犯人はいないと思いますよ。梅原という男性が過剰に働いていたことを止めている人間が数人いると阿弥陀君はいいましたよね？　つまり、止めている人間がいたことや会社自体が休憩時間を入れていたということは……」
拓蔵の言葉に阿弥陀警部は、少しばかり考え、
「そういう妖怪がいるという事ですか？」
「じゃから、君はわしのところに来たんじゃろ？」
何でもお見通しと言われたような気がし、阿弥陀警部は苦笑いを浮かべた。
「人を過労死させる妖怪なんているんですか？」
大宮巡査の問い掛けに、拓蔵は本棚から一冊の本を取り出した。

「いそがし……“人間がこの妖怪に憑依されると、やたらに落ち着きがなくなるとされる。しかし不快な気分ではなく、忙しく動き回ることで、なぜか安心感に浸ることができ、逆におとなしくしていると、何か悪さをしているような気持ちになってしまうという”。傍迷惑な妖怪じゃよ」

「つまり梅原はこの妖怪に表意されていたと？」
「可能性としてはおおいにあるじゃろうな。特に今はお中元の時期で、運搬会社は書き入れ時じゃろ？」
要するに忙しい時期という事だ。

「問題はいそがしを退治する事より、会社から労災保険が妻に入るかということじゃろうなぁ」
「えっと？　それってどういう事ですか？」
「いそがしの仕業だったとしても、人から見れば会社が起こした過労死じゃろう？」
云われてみれば確かに……と、阿弥陀警部と大宮巡査は思った。

「では退治はしてくれないと？」
「いや退治はするよ。君はそれをお願いに来たんじゃろう？　弥生たちが帰ってきたら、すぐに会社の方に行かせる。まぁ、そんな無理な仕事じゃないじゃろうな」
そう云われ、阿弥陀警部と大宮巡査は首を傾げた。

夕刻、帰ってきた三姉妹は阿弥陀警部の案内で、梅原が勤めている会社へとやってきた。
妖怪がいると聞かされたので、皐月は会社内、特に倉庫の方を警戒していた。
運搬会社で一番労を催すのは、云うまでもなく倉庫の方にある。

「何か感じる？」
弥生の問いに皐月は首を振った。実際には微(かす)かに感じてはいるのだが、余りにも幽(かす)かで、幽霊なのか、いそがしなのかという判断が誤りそうになっていた。
「消えかけてるといったほうがいいかしらね？」
そう云った時、皐月の視線は非常口の方へと向けられていた。

「吾神殿に祭られし大黒の業よ！　今ばかり我に剛の許しを！」
手に持っていた竹刀は真剣へと変わっていく。

「えっと……　一応過労死で殺してるから……　閻獄第3条、意図的に相手に労を強いたものは、等活地獄、衆病処（しゅうびょうしょ）へと連行する」
そう言い放ち、切っ先は微かにに揺れた布へと放たれた。すぐざま弥生はお札をその布に投げるつけるや、布は見る見るうちに燃え尽き、幽かに断末魔が聞こえた。

「はい。お仕事完了。さぁてと、さっさと帰ってご飯食べよう」
皐月は背伸びするや、阿弥陀警部の車に乗った。
「えっと？　私は彼女たちを送りますから、大宮君は後のことをお願いしますね」
後のこととは、会社や遺族に対しての説明だろう。

後日、いそがしの仕業だったとしても、結局は会社から労災保険が妻に渡された。

【番外編】三姉妹の極当たり前の一日【後編】（後書き）

元ネタは鬼太郎（たしか第５期）に出てきたいそがしです。

壱・恋文

「えっと……　和訳が『私たちはバレーボールをして楽しんだ』だから、“Ｗｅ　ｅｎｊｏｙｅｄ　（ｐｌａｙｉｎｇ）　ｖｏｌｌｅｙｂａｌｌ．？っと」

物静かな図書室の中で、ノートにシャーペンを書き走らせる音が小さく響きわたる。日曜日の昼下がり、皐月は友人たちと金曜に出ていた宿題を済ませている最中だった。

一人は飯塚萌音、もう一人は『大野まどか』という。

今神社では拓蔵の知り合いである百姓の娘夫婦が神前結婚式を行なっており、拓蔵は神への祝詞（のりと）を謳（うた）い、弥生は新郎新婦への御神酒（おみき）を捧げる巫女としてそれに参加している。葉月はその会場の隅っこで大人しくしていた。

普通ならば三、四十分くらいで式は終わるのだが、そこはやはり蟒蛇（うわばみ）である拓蔵の知り合いである。式が終わったら終わったで、他に予定もないしと、祝賀会を始めたらしいと、先ほど弥生からのメールで知った。

「それで弥生さんなんて？」

「結納（ゆいのう）を済ませた途端、新婦側の親族が持参してきた酒で宴会してるって」

皐月は呆れた表情で云う。

「弥生さんと葉月ちゃん大丈夫かしらね？」

「二人ともしっかりしてるから大丈夫でしょ？」

「皐月は……　宿題残ってたから参加しなかったんだっけ？」

それもあるのだが、結婚式を行なった娘の家が酒蔵であることを

三姉妹は知っていた。
そして拓蔵が二つ返事で神前結婚式を了承したのは、酒が飲みたいだけだと勘づいていた。

「まぁ、爺様も少しばかり手加減するでしょ？」
そう言いながら皐月は席を外した。
「どこ行くの？」
「ん？　ちょっとトイレ――」
そう伝えるや、皐月は図書室を出た。

ものの5分もしないうちに用を済ませ、皐月は友人のところへと戻ろうとした時だった。
ラウンジに髪の長い女性が立っており、ジッと電子掲示板を眺めている。

施設は図書室の他に、会議室や大小のホール。楽器の練習ブースなどといった総合貸スペースがあり、電子掲示板にはその部屋が使用中か否かと使用時間が掲示されている。
女性は手紙のようなものをジッと見つめると同時に、自分の腕時計と掲示板を交互に見やっている。

一二分ほど女性を観察していると、女性はその場を立ち去って行き、図書室の方へと入っていった。

少しばかり首を傾げながら、皐月は友人たちのもとへと戻っていった。

「おそいよ？」

遅いと言われても、十分も経っていない。
「んじゃ、続きしよ……　ってあれ？」
まどかが鞄の中を探りながら、不満そうな表情を浮かべた。

「どうかした？」
「いや、数学のノートはあるんだけど、教科書忘れてるみたいなのよ？」
まどかが鞄をひっくり返すかのように、中を探っている。「宿題どこだったっけ？」と尋ねながら、
「確か一次関数だったと思うけど――　あ、やっぱり私も忘れてるわ」と萌音も同様に鞄の中を探る。

友人二人がそう言っている間、皐月は席を外し、数学の解説書が置かれている本棚の方へと行った。つまり皐月も教科書を忘れていた。

そもそも急に勉強会を始めることにしたので、忘れ物が結構多い。まぁ図書館にしたのは、教科書が無くても解説書があるので大丈夫だろうという理由だった。

「あれ？」
解説書を取りに行く途中、ほかにも個別した机で勉強しているのがちらほらといるのだが、その中に先ほど見かけた女性が本を読んでいるのが見えた。
女性が呼んでいるのが一目（ひとめ）で恋愛小説だとわかるや、皐月は少しばかり嫌な表情を浮かべた。
別に小説自体が嫌いというわけではなく、甘ったるい話はあまり好きじゃないだけである。

気にしないで戻ろうとしたとき、ふと女性の手元に大量の手紙が

置いてあるのが目に見えた。
可愛らしいハートのシールで封を閉じられており、それらすべて開かれていない状態だった。

そうなると、自分にではなく相手に送るものなのだろうか？と皐月は少しばかり考えながらも、友人たちのもとへと戻っていった。

◇◆◇◆◇◆◇◆

「あ……　あの小説って」
勉強を再開しようとしたとき、皐月は何かを思い出すように呟いた。
「ん？　どうかした？」
「いや、なんでもない……」
皐月はそう友人二人に言った。

皐月は先程の女性が読んでいた本の内容を、うっすらとではあるがＴＶで話題になっていたのを思い出したのだ。

内容は現代の高校生がメールではなく、手紙だけで交際するというもので、まぁ在り来たりと言えば在り来たりなのだが、今はメールで告白をするという反発からか、そういうアナログなところが逆に小さなブームを与えているという。

皐月も一度だけだが、その小説を立ち読みとはいえ興味本位で、パラパラっと読んだことがあった。
そもそも皐月は異性を本気で好きになったことがないので、本当の恋愛というものは知らない。
だいたい恋愛というのは十人十色千差万別である。

物語の主人公である高校生の女の子が、顔も知らない男と手紙だけでやりとりをしている。
当然途中から直接会わないかという件になるのだが、男はそれを頑なに拒んだ。
痺れを切らした主人公は住所を頼りに男性のもとへと出向いた。
しかし男性は既に結婚しており、しかも自分の担任教師だったというオチである。

メールで連絡を取り合う昨今、相手の住所なんて覚えてないものであり、年賀の挨拶なんてメールひとつで十分といっている人間までいるものだ。

「うし、終わった」
皐月たちは宿題を終え、机の上に出していたノートなどを片付け始めた。
「んじゃ、解説書戻してくるわね」
皐月は本棚からとってきていた本を束ね、本棚へと持っていく。
その途中、先程の女性をもう一度一瞥する。あれから1時間ほど経っているのだが、女性はなんどもその小説を読んでいた。

それならいっそのこと借りればいいのにと、皐月はそう頭の中で呟いた。

弐・傍観者

「眠そうですね？　阿弥陀警部」
「んっ？　ふぁぁ、そりゃそうですよ。いきなり電話で起こされたんですから。君はまだ若いからいいですけど、年寄りは目覚めが遅いんですよ？」
阿弥陀警部はそう話しながらも頻(しき)りに欠伸(あくび)をしている。
今現在、時刻は午前2時を過ぎており、すっかり草木も眠る丑三つ時である。

阿弥陀警部、もとい大宮巡査が自分たち警察以外に人気がない駅のホームに来たのは、駅員が車内で眠っている乗客を確認し起こしていた最中、不審な乗客がおり、声をかけたところ、コロンと倒れたという。
最初は寝ているのだろうと思い、体を揺さぶったらしいが、それでも反応せず、あたりを見るや、乗客の腹部から血が溢れていたという通報があったのだ。

「被害者は笹川直介(ささかわなおすけ)、２１歳。職業は大学生ですね」
被害者の財布から学生証が出てくるや、物取りの犯行ではないとわかる。終電で最も多い犯罪が物取りだからである。
「車掌が点検をしていた最中のことみたいです」
「そりゃ、誰だって寝てると思いますよね。一見だけじゃ……」
阿弥陀警部はそう言いながら、被害者の腹部を見やった。

「鑑識で調べるしかないでしょうけど、凶器はナイフで間違いないでしょうね。それと容疑者は既にそれを処分している」
それはどうしてかと大宮巡査は尋ねる。
「降りた後、ゴミと一緒に捨てればいいでしょ？　始発から終電ま

での大凡２０時間のうちに、何人の人がゴミ箱に捨てたかわかりませんけど、逆に言えば、持って帰るより処分する方を私は選びますよ」

阿弥陀警部はそう云うや、辺りを調べていた警官を手招きし、ゴミ箱を調べるように伝えた。

ホーム内には3つのゴミ箱がある。

それこそ自動販売機のアキカン入れも徹底的に調べた。

燃えるゴミの蓋を開けると、鼻を曲げるほどの悪臭が漂ってきた。

どうやら酔っ払いがそこで吐いたようだ。

「これも調べるんですか？」

「私だって嫌ですけど――あぁ……　自分で言っといてなんですけど、言わなきゃよかったと後悔してますよ」

そう云いながら、阿弥陀警部は肩を落とした。

黒いビニールの上に、ホームにあったゴミ箱すべてをひっくり返し、その中から凶器をさがすわけだが、それよりも悪臭の方に気が散りそうになっている。

「っいって……」

探し始めて２０分頃、警官の一人が小さな悲鳴を挙げ、指先を咥えた。

「どうした？」

「いや、なんか指切ったみたいだ」

――ということは凶器が入っているということになる。

「皆さん気を付けてくださいよ。刃が剥き出し状態みたいですからね」

そう忠告し、警官らは再度調べ始めた。

小一時間ほど調べると、漸く血が付着したナイフが見つかった。
先ほど警官が怪我をしたが、咄嗟に離していたので付着はしていないようだ。

「鑑識に回しといて、それと監視カメラで不審な人物はいないかも確認しないといけませんね」
阿弥陀警部はそう云うや、少しばかり考え込んだ。
「どうかしたんですか？」
「いや、今回は彼女たちの力を借りなくてもいいんじゃないかと思いましてね。今んところ人間で出来ることですから」
大宮巡査はその言葉に首を傾げた。

「いや、今までだって人間でも出来た犯行なんですよ。ただ、それが狂気の沙汰と云えるものが多かったですからね」
帝王切開やら、首切りやらという事だろう。
確かに人間に出来ないことではないが、刺殺に比べるとなると、狂気の沙汰というのは理にかなっている。

「ただ……　証言する人間がいないでしょうね？」
「どうしてですか？　確か被害者が乗っていた車両には二三人ほど乗客がいたと思いますが？」
「終電だからですよ。真面目なサラリーマンがこんな午前様までいるとは思えませんし、大抵スナックやキャバクラで呑んだくれて帰ってくるパターンでしょ？　睡魔に負けて眠りこけるのがオチですよ？」
云われてみれば確かに。車掌も被害者を発見した時、眠っている乗客を起こし廻っていたとも言っている。

つまり駅に着いた際、車掌に会わずに降りた人物ということにな

る。
それも監視カメラでわかるものなのだが……
それから小一時間ほど監視カメラに映ったホールを隈なく、それこそ穴が空くほど見て調べたが、
「可笑しいですよね？」
阿弥陀警部がボソリと呟いた。
映像は終電がホームに着いてからを流しているのだが、被害者が乗っていた車両から人っ子一人出てきやしない。
「殺した後、ほかの車両から出てきたということじゃないですか？」
言われれば確かにそうなるのだが、それでも２０分以上見ても、その車両からは誰も出てこないことに違和感を感じる。
「阿弥陀警部、自分で言ってたじゃないですか。乗客が乗っていても眠っていて気付いていない可能性があるって」
つまり犯人は被害者を殺害した後、他の車両に移っていたとしても気付かれなかったということになる。
「逆にそこが怪しいんですよ。殺されようとしている人間が悲鳴のひとつも挙げないってのが」
被害者は俯(うつむ)いた状態で車掌に声を掛けられている。
「それに車両内に血溜まりがあったようですしね」
「そうなると、犯人は被害者を眠らせた状態で殺したということになりますかね？」
一応鑑識と検死の結果を見なければわからないが、一応明日、念のために葉月に霊視してもらおうと、阿弥陀警部は被害者の写真を一枚くすねた。

参・咳気（前書き）

がいき　【▼咳気】

〔「がいけ」とも〕せきをすること。また、せきの出る症状。風邪。

参・咳気

翌日、阿弥陀警部と大宮巡査は稲妻神社へと訪れていた。
用件は葉月に被害者の写真を霊視してもらうことである。

「えっと……　大丈夫ですか？」
大宮巡査が申し訳ないのと心配しているといった感じの複雑な表情を浮かべ、葉月に尋ねた。
「ぜぇ……　ぜぇ……」
葉月は夏も近いというのに丹前を着ており、眼はトローンとし、顔は紅潮していた。
息も荒く、額（ひたい）には冷却ジェルシートを貼っている。
――どこからどう見ても健康とは言い難い。

「すみません。葉月、昨夜（ゆうべ）からちょっと熱出してて、最初は三十七度四分だったんですけど、今朝になって急に熱が上がったんですよ」
弥生はそう云いながら、葉月の襟元から脇に挟んでいた体温計を取り出した。ちょうど電子音が鳴っていたからだ。
「失礼ですけど、いま熱は？」
「――三十九度七分ですね」
それを聞くや、阿弥陀警部と大宮巡査は冷や汗を垂らした。

「一応後で病院に行って診てもらいますけど、この子一度熱を出すと一週間くらい拗（こじ）らせるんですよ。多分インフルエンザではないと思いますけどね」
「あれ？　インフルエンザって冬になるんじゃないんですか？」
「多いのがその時期なだけで、インフルエンザウイルス自体に季節はないんですよ。風邪と違うのはウイルスや症状の違いみたいですね」

インフルエンザウイルスの活動条件は温度２０度前後、湿度２０％前後が最も生存に適した環境と言われている。つまりそれを適しているのが冬というだけである。

閉め切った大きな箱の中を湿度２０％、温度２０度に設定して、インフルエンザウイルスを吹き込み、六時間後に調べると７０％近くのウイルスが生き残っているが、温度は変えず、湿度を５０％以上に上げるや、３％のウイルスしか生き残らない。次に湿度は２０％にして温度を３２度にすると１７％に減っているという研究報告まである。

つまり大気中にいるインフルエンザウイルスにとって、冬の時期が一番活動しやすいということだ。

また風邪は熱が三十八度以上にはならないのと、インフルエンザは急激に高熱になるので、以外にも見分けが付けやすい。

「すまんな阿弥陀警部。見ての通り、葉月がこの状態じゃ、碌に霊視も出来まいて」

拓蔵にそう云われ、阿弥陀警部は苦笑いを浮かべ、肩を落とした。

「だけど、犯人は被害者を殺した後、堂々《どうどう》と車両から降りてるんですよね？」

弥生の云う通り、不審な人物がいない――つまり犯人はこれ見よがしに堂々と電車から降りたということになる。

「乗客の殆どが眠っていたので、覚えていないというのが大抵でしたね」

「そうなると、やっぱり犯人は被害者を眠らせたあとに殺したということに――」

大宮巡査がそう言うと、葉月が何処かに行こうと思い、立ち上が

ろうとしたのだろう。クラっと立ち眩みをし、その場に倒れた。

「葉月ちゃん？」

葉月は意識を保ちながら、大宮巡査の方を見やった。

「やっぱり……　可笑しいわね？」

そう云いながら、弥生は一度深く深呼吸をし、瞼を閉じた。

その行動に大宮巡査は首を傾げる。

「大丈夫よ……　怖くないからね……　あなたはもうここにいてはいけないの……　ね？　いい子だから妹を解放してくれる？」

まるで子供に言い聞かせているような口調で話し始める。

そしてどこからともなく御札を取り出し、葉月の喉元に付けた。

すると徐々にではあるが、先ほど辛そうだった息遣いが落ち着いていく。

「一体何を？」

「大宮巡査はこの子がよく幽霊に取り憑かれやすいことはご存知ですよね？」

そう云われ、大宮巡査は頷いた。

「この子昨日、神前結婚式に参加したあと、遊びに行ってて、多分その時に連れて来ちゃったんだと思います」

「つまり、その幽霊がインフルエンザで死んでいたということですか？」

「確証はないですけど、恐らくそうだと思います。葉月は死者の死ぬ前後の声や症状を自分の体に取り込まされることがありますから」

～こまされるということは、自分の意思と関係なしということになる。

「弥生さんたち三姉妹の中で辛い思いしてるのって、葉月ちゃんなのかな？」

「どうでしょうね？　だけど皐月の方が一番辛いと思いますよ」

その言葉に大宮巡査は小さく声を挙げた。

「皐月は幽霊や力の弱い妖怪に対して、それこそ何も見えませんし、何も感じないんです」

「――感じない？」

「私の式神である、遊火は鬼火の一種なんですけど、人に危害を与えない大人しい妖怪なんです。力もそんなにないし、私たちに敵意があるわけじゃない。だから皐月には見えないんです」

「えっと？　どういうことですか？」

「つまり、どんなに凶暴な妖怪でも力が霞罹（かすみかか）っていたら、気付くものも気付かないんですよ……」

弥生は自分にも妖怪を退治するほどの力があればと続けた。

「阿弥陀警部。今日は失礼しましょう」

「おや、どうかしたんですかな？」

「もう一度、ホームの防犯カメラに不審な人物が映っていないか調べるんですよ」

阿弥陀警部がどうしてと訊く前に、大宮巡査は居間を出た。阿弥陀警部も慌てて後を追った。

「お兄ちゃん、何か気が付いたのかな？」

葉月が意識を朦朧とさせながら、弥生に問いかける。

「わからないけど……　でも、今度来るときのために今日は早く休もうね」

「うん。あの男の子……　どうして死んだのかわからなかったみたい」

そう云いながら、葉月は安心したのか、弥生の膝を枕に深い眠りについた。

葉月に取り憑いていたのは、インフルエンザが原因で亡くなった少年だった。

一昔前に処方薬であるタミフルをのんだ副作用で少年が奇っ怪な行動をとり自殺したというニュースが話題になった。その事故で死んだ少年とは違うが、同様なことが何件かあり、そのうちの一人だったのだろう。

肄・戯（前書き）

そばえ　そばへ　【▽戯へ】
〔動詞「そばふ」の連用形から〕

（1）たわむれること。あまえること。
（2）〔「日照雨」とも書く〕ある所だけに降っている雨。かたしぐれ。
「嵐吹く時雨の雨の―にはせきの雄波の立つ空もなし／万代集」

肆・戯

翌々日。稲妻神社に阿弥陀警部と大宮巡査が顔を出した。
そして居間に通されるや、書類の入ったバックから2枚の写真を取り出した。

「これが先日被害者が乗った終電がホームに着いた直後の写真、もう一枚は着いてから10分ほど経って、車掌や駅員が寝ている乗客を起こし廻っていた時の写真です」
二枚の写真はどちらも乗客が疎らではあるが降りている。
「だけど、映像には被害者が乗っていた車両にだけ人は降りてこなかった。まだその車両だけ人が乗っていて、駅員に起こされた直後、被害者の死体が発見されています」
「――で、念のため被害者が乗っていた電車の出発から終着までの駅全部にある防犯カメラを隈なく見たら面白いことが分かったんですよ」
と云うと？と拓蔵は尋ねた。

「被害者が乗り出した駅が終電の三つ前だったんですよ。その間、一度だけ車両から降りた人間がいたんです」
そう云うや、阿弥陀警部は写真を一枚取り出した。

「媛坂円香、二十歳。職業は大学生……奇しくも被害者と同じ大学に通っています。調べてみたら、降りた駅の近くに住んでいるみたいですね。その日サークル仲間と呑んだくれていたようです」
「それを証言する人は？」
「一応サークルの人達に確認を取ったら、最後までいたようです。それと彼女が座席に座っていたのを目撃している人物もいますし、被害者からだいぶ離れた場所だったようです」

大宮巡査はそう云うや、もう一枚取り出した。

「もう一枚はその次の駅で降りた女性です」

「――彼女が何を？」

写真を見るや、弥生が阿弥陀警部に尋ねる。

「河瀬瞳美（かわせひとみ）、二十歳。職業大学生……彼女も被害者と同じ大学に通っているみたいなんですよ」

同じ大学の人間が同じ電車線に乗っていること自体には珍しいことではないが、同じ時間帯を走っており、それが終電ともなれば、偶然とはいえ珍しいことである。

「ただ彼女は終着駅の前で降りてますし、被害者が乗っていた車両とは違うところから出ていますから、一応容疑からは外していいという上の見解なんですけどね……」

なんとも不満そうな表情で阿弥陀警部は言った。

「彼女たちがどこから乗り出しのかというのがわからないんですよ。終電ということもあってか、乗り出す人が多かったというのもありましてね」

「つまり、その中に紛れていた可能性もあれば、それより前に乗っていたということですか？」

弥生の問いに、大宮巡査は答えるように頷いた。

「被害者が乗り出したのは終着駅の三つ前。当然同じ駅から乗り出した人間が犯人と言えるでしょ？」

「ただ二人はどちらともその前の駅で降りてるんです。媛坂円香に至っては被害者が乗り出してから次の駅で降りているんです」

つまりはこういうことになる。

先ず被害者が乗り出した場所を視点Ａとする。

そして終着駅までが三つなので、Ｂ・Ｃ・Ｄとなる。

Dが死体が発見された終着駅とする。
媛坂円香が降りた駅は被害者が乗り出して次の駅なのでB。
河瀬瞳美が降りた駅は終着駅より前になるのでCとなる。

被害者が乗っていた車両には二三人ほど乗客がいたが、その殆どは酔いや疲れで意識が朦朧としており、中の様子をはっきりと覚えていない。また違う車両にいた河瀬瞳美に対しても、同様の事が云えた。

つまりふたりがいつから乗っていたのかという根本的なものがわからないのだ。

「一応死亡推定時刻は午前1時前後。被害者が電車に乗り出してすぐみたいなんですよ……」

そうなると犯人は被害者がいつ乗ってくるのかということを最初から知っていたということになる。

「その日、被害者は何を？」

「飲み会に参加してたみたいですね。一応念の為に云っておきますが、媛坂円香とは違う店で飲んでいますし、それを証言する人もいましたよ」

そう話していると、剣道着を着た皐月が居間へと入ってくるや、阿弥陀警部と大宮巡査に会釈をし、厨房へと入っていく。冷蔵庫が開く音がし、コップに何かを注いでいる音がしだした。

「そういえば、被害者が殺された日って、雨降ってなかった？」

コップを持ったまま居間へと入ってきた皐月がそう云うや、

「でもそれ夜中のことだから……　云われてみれば外に干してたあんたの剣道着、取り込んでたとき濡れてたわね？」

二人がそう会話すると、阿弥陀警部は違和感を感じていた。

「雨合羽ですか？　それに被ってたら顔なんてわかりませんね」

「媛坂円香が乗り出したのは、飲み会をした場所の近くからというのは間違いないんじゃろうな？」
そう拓蔵に言われ、阿弥陀警部は頷いた。

「ええ。被害者が乗り始めた駅よりひとつ前……」
「若い女子が、それこそ酔いが回り始めている状態で、一人電車に乗るかのう？　それに降りたのは被害者が乗り始めた次の駅じゃろ？　事実、駅は二つしか乗り合わせておらん。距離からしてそんなに離れておらんじゃろよ？　わしじゃったら電車ではなく、安全を考えてタクシーに乗るがな」
拓蔵にそう言われ、阿弥陀警部はすぐさま携帯で他の警官に確認を取るようにと命じた。

「あれ？　この人何処かで……」
皐月が一枚の写真を手に取るや呟いた。その写真に写っているのは河瀬瞳美である。
「皐月ちゃん？　思い出せない？」
「いや、そんなに前のことじゃないんですけど……　えっと……昨日は学校だったから違うし、一昨日は残ってた宿題を家でやってたし……　その前……　あっ！」
何かを思い出し、皐月は声を荒らげた。

「この人、日曜日に図書館で見かけた人だ」
「そう言えば、あんた宿題があるとか言って友達と図書館に行ってたわね？」
弥生がそう言うと、何処の図書館ですか？と大宮巡査が皐月に訊ねた。
「この町の町民図書館というか、総合施設なんですけど、そのときその人電子掲示板の前でジッと何かを見てたんです。時計も見てたから何か待ち合わせをしていたんだと」

阿弥陀警部は再び携帯を取り出し、一応その日、施設で何が催されていたのかを調べさせた。

「そういえば、その人、妙なの持ってました――」

「妙なもの……ですか？」

「はい。封が切られていない手紙を何通か手元にもっていたんです」

手紙自体は珍しいものではないが、それが何通ともなり、それ全てが封を切られていないとなると、確かに妙である。

「手紙かぁ……　皐月、今度図書館でその人を見かけたら、少しばかり謎解きをしてみてはどうかの？」

拓蔵の提案に皐月は首を傾げた。

「なぁに、深くは考えんでいい。わしはどちらかというとそっちの方が嬉しいがの？」

皐月はどういうことなのかと疑問に思いながら、コップに入ったお茶を飲み干した。

伍・痴話

「大丈夫なんですか？　まだ病み上がりじゃ」
大宮巡査がそう云うが、葉月は小さく笑った。
そして、目を閉じ、一二度深呼吸するや、被害者の写った写真に手を乗せ、ゆっくりと摩った。

「喧嘩してる……」
その言葉に、阿弥陀警部と大宮巡査は驚いた声を挙げた。
「女の人が一方的に言ってて、男の人は何も言おうとしない。むしろ早く寝かせてくれって言ってる感じ」
「どういうことですかな？　だって喧嘩していたということは車両に乗っていたほかの乗客が気にしないわけが……」
言葉を止め、阿弥陀警部は苦々しい表情を浮かべた。
乗客の誰一人それに気にかけなかったのは、被害者と同様だったからである。他人事（ひとごと）はあくまで他人の事。自分のこと以外に関心はない。だからこそ誰一人気にも留めなかったということになる。

「それから……あれ？」
葉月は一二分ほど声を聞くことに集中したが、何も聞こえなくなったと皆に伝えた。
「――意識が途中でなくなった？」
皐月がそう訊くや、葉月は頷いた。死ぬより前に意識がなくなったということは、眠った状態で殺されたということになる。
人間たとえ生きていても、寝ているとなれば意識は闇の中である。たとえるなら、起きたり起こされたりというのは、その闇からこちらへと意識が連れ戻されるということである。

「それで媛坂円香、河瀬瞳美のどちらかわかりますか？」

そう訊かれ、葉月は頭を振った。声は聞こえても姿までは見えない。
「ただ女の人は声を嗄らしてた」
「余程大きな声で喧嘩してたんでしょうな」
そう頭で整理する阿弥陀警部を尻目に、葉月は薄れる意識の中、もう一度写真の霊視をする。

「どうかしたのかい？」
「さっき女の人がもう一人いたような気がしたから――」
そう云うや、葉月は写真の上に掌を乗せた。
――が、十秒もしないうちに卓袱台の上に凭れ倒れた。
大宮巡査が驚いて、葉月の様子を見やるが、葉月は寝息を立てていた。

「大宮くん？　さっき葉月さんが云ってた言葉……」
「もう一人いた……と云ってましたね」
「その、疑いがある女性二人と被害者は同じ大学という以外に接点はないんですか？」
弥生にそう訊ねられ、大宮巡査は特に接点というものはないと説明した。

◇◆◇◆◇◆◇◆

被害者である笹川直介の家を捜索していた時だった。
机の下にゴミ箱があり、その中に大量の封書が無造作に捨てられている。

一人暮らしということもあってか、携帯料金の他に、電気代・ガス代・水道代など、支払いを済ませ必要なくなった請求書が入れられている。

「おや？」と阿弥陀警部はゴミ箱を漁り、一通の封筒を取り出した。
「手紙……　みたいですね」
そう誰に聞いているわけでもなく言った。

「中身は確認しないんですか？」
「いや、したいのは山々なんですけど、人としてプライペートに関わることはあまりねぇ？　それに破れてますけど、結構可愛らしいシールで封を閉じてありますしね」
阿弥陀警部はそう云いながら、封筒の裏を見せた。確かに敗れてはいるが、可愛らしいクマやハートのシールが貼られている。

「えっと……　あれ？　媛坂円香？」
手紙の送り主を確認すると、疑いが掛けられている姫坂円香が被害者に送ったものだった。
「警部、こちらには河瀬瞳美が送った封書が――」
警官の一人がゴミ箱の中身を整理していた際に見つけたのだろう。
それらは消印が殆ど交互に一日おきとなっている。
「ラブレターですかね？」
「さぁ、中身はまだ確認してませんからまだなんとも……」
それにしても古風な方法だと阿弥陀警部は思った。

中身を確認してみると、予想通りラブレターのようだ。それこそ付き合ってくださいというものではなかったが、近況報告といった感じである。
「何か昔の人が恋人に送るような感じですね？」
しかし妙である。一応被害者や、疑いのある二人を知っている学生に訊ねたが、付き合っていたどころか接点すらない。
彼らが知らないだけのかというとそうでもない。

そもそもその三人は別々の学校から大学入学している。
つまりどこかで会っていたというわけでもない。

陸・千尋（前書き）

ちひろ　1　【千▽尋】

〔「尋」は、両手を左右に広げた長さ。中世には「ちいろ」〕非常な深さ・長さにいう語。

陸・千尋

阿弥陀警部と大宮巡査が三度(みたび)稲妻神社に訪ねにきた。
被害者の家に疑いのある二人から手紙が届いていたことや、皐月が河瀬瞳美を見掛けたとき、施設で何を催されていたのかという報告だった。

「その日、施設は会社説明会で小ホールを、調理室や会議室も貸していたそうですが、その殆どは予約参加だったようです」
「そうなると、皐月が見た河瀬瞳美は、参加するために掲示板を見ていたわけじゃないってことになるんじゃない？」
「それと念の為、図書館で彼女が読んでいた本ですが、図書館では貸出はしていないそうなんです」
大宮巡査にそう云われ、皐月は少しばかり驚く。

「ちょっと待って、態々図書館に持ってきて読んでたってことですか？」
「河瀬瞳美《本人》に確認を取ると、最近家の近くで行なっている工事の音が酷く、集中出来ないからだそうです」
用心のため河瀬瞳美の近辺を調べると、確かに家の近くで工事を行なっており、騒音の苦情が絶えないようだ。
「それに彼女が読んでいた本を見せてもらったんですけど、結構読んでるんでしょうね。ところどころ古くなってました」
それを聞いた皐月は首を傾げた。

自分はパラパラッとしかその本を読んではいないが、そんな何回も読むほどの名作だっただろうか、と疑問に思ったのだ。
甘ったるい恋愛小説というよりも、手紙を通じて互いを意識しあ

うという内容とベタではあるが、報われない恋愛なのだ。

一応改めて読んでみようと古本屋に行ってみると、なんともまぁ1年も経たない内に出版された本だったにも拘らず、ワゴンで売られていたのだ。ワゴンということは云ってしまえば売り捌いても利益がでないものである。要するに在庫処分だ。

ブームになったのは発売して一ヶ月の間だけ、火付け役は女子高生だったのだが、あきるのもまた早い。

アナログな手紙よりも近代的なメールの方が楽なのだろう。

「だけど、疑いのある二人が被害者に手紙を送ってたなんてね？」

「まぁもらうだけで返してはいなかったようです。それと何通か封を切っていないものもありましたし、真ん中で乱暴に破り捨ててるものさえありました」

送る側としては聞きたくない扱いだが、もらう側としてはそこまで執拗に届くと異常なほどである。

請求などの催促ならまだしも、他愛もない手紙である。嫌気がさして破り捨てたくもなろう。

「その事を二人には？」

「報告しました。が、そうですか……とあっけらかんに返されましてね。恐らく彼女たちもそのことに気付いていたんでしょうな」

それこそ最初の方は返事をもらっていたようだ。が、ここ最近は手紙の返事をもらっていないと云っていたという。

「それと手紙の内容ですが、おどろおどろしいものでしたよ」

そう云うや、大宮巡査が手紙を取り出し、卓袱台の上に置いた。

「うわっ……」

皐月と弥生が手紙を一瞥するやいなや、顔を歪め目を背けた。

手紙には赤い指紋がところどころに付着しており、さらには紙の端に血のようなものがついていた。
「紙で指を切るってのはよくあることだけど、こんなに血出ないでしょ？」
「――ってか、それより内容の方が……」
皐月は手紙の内容を目で追っていたが、途中から嫌気がさし始めていた。

『今日、直介さんを学内で見かけました。今日の昼食はカレーなんですね。いつも学食のカレーばかり食べてますが、体は大丈夫なんですか？　学食のカレーなんて美味しくないですよ？　もっと美味しくて、栄養のあるお弁当を毎日作りますよ。直介さんは唐揚げが好きでしたね？　胡瓜は嫌いかな？　好き嫌いしちゃダメですよ。それと部屋の掃除もしないと、勉強するのはいいですけど、一人暮らしなんですから、下着変えられたんですね。前はトランクスだったのに、ボクサーパンツを履いてらっしゃるなんて――』
弥生は手紙の内容に違和感を感じる。それは阿弥陀警部や大宮巡査も同様だった。皐月もうっすらとではあるがそれに気付いた。

「これ……　可笑しいですよね？　いつも学食でカレーを頼んでいるというのは、同じ大学だから知っていても可笑しくない。でも……　好き嫌いとか直接言われないとわからないし、なにしろ！　下着を変えたなんて第三者がわかるわけない！」
弥生がそう言うや、阿弥陀警部は小さく深呼吸した。

「弥生さんの云う通り、被害者の下着を彼女たちが知っている訳がない。いや、付き合ってもいない異性に下着の話なんてしないでしょ？」
「付き合っていてもしないと思いますけど？」
「そうじゃなくて、どちらにしても変えたなんて、見せていない以

上わからないでしょ？」
「ちょっと待って……　それじゃ二人って……」
皐月がそう云うや、大宮巡査が手帳を取り出し、皐月と弥生に挟んでいた写真を見せた。

それはマンションのベランダが写されており、制服を着た警官が手を振っている。
「これは外から被害者の部屋を写した写真なんですよ。で、最近不審な人物がいないか調べたらですね？　媛坂円香と河瀬瞳美が、一日交代でその場に立っていたんですよ。雨の日もずっとね……」
「しかもそれは朝早くから、一度大学に行き、大学が終わった後もその場にいたようです」
そう聞くや、拓蔵はボソリと呟いた。

「爺様、何？」
「ストーカーということか？」
「ええ。これだけ異常だと相当重症でしょうね？」
「でも、ストーカーって、相手を思うが余りに――」
「その人にトラウマを植え付けてまで振り向かせますかね？」
阿弥陀警部にそう言われ、皐月は黙り込んだ。

「確かに二人が被害者に対して、意識を向けさせていたのなら、それはそれで宜しいことでしょう？　ですが、それが狂気ともなれば、話は別ですよ？」
「でも、人の恋愛って……」
「先程も言いましたが、意識を向けさせることに関しては関与しません。だけど二人は……被害者を殺してるんです」
それを聞くや、拓蔵は湖西主任に聞いたのかと訊ねた。

「ええ。ナイフに二人の指紋が付けられていました」

「ちょっと待って、単独による犯行じゃないってことですか？」
そう云われ、大宮巡査は手帳を見せた。
そこには腹部の絵が描かれており、ふたつ線がつけられていた。
「どちらも致命傷となった切り口です」
「傷口が二つって、それじゃやっぱり……　でも、確か二人は終着より前の駅に降りてるって――」
いや被害者は寝ていたのだ。そして葉月が聞いたのは被害者に対してではない。
「――痴話喧嘩と見せるため？」
そもそも『痴話』とは愛しあう者どうしがたわむれてする話である。そこから内容が縺れ、『喧嘩』という助動詞に似た単語が付けられる。
「だから、被害者は何も言わなかった……　それとどの車両に乗るのかというのも分かっていたようです。被害者は座席に座るとすぐに眠っていたと乗客が証言しましたし、その目の前で女二人が揉めているのも見たそうですよ」
それでも殺したとは言い難い。が、次の言葉に拓蔵は目を背けた。
「殺した時の状況を見ていないということじゃな？」
「ええ。被害者は眠っていましたからね。必然的に俯いていたことになる。それから、いつも壁際に座っていたらしいですから、刺されたのを誰も気付かなかったようです」
悲鳴すら挙げていないのだから、誰一人気付く訳がない。そして服の上だったことで、血が大量に吹き出すことがなかったのだ。
「それと被害者の部屋にこんなのも出てきましたよ」
そう云うや、阿弥陀警部は消印の押されていない封筒を取り出し、その中身を出した。

手紙なのだから、音はしない。だが、金属が当たる音が嫌なほど響きわたった。

「これって……　剃刀？」

「もうひとつ、今度はカッターの折れた刃とか……」

それがいくつもあり、被害者は警察に通報しなかったのかと問うや、阿弥陀警部は首を横に降った。

「でも、犯罪でしょ？　本人たちはそれくらい好きだって言ってるんだろうけど、被害者にとっては脅迫じゃないですか？」

皐月がそう云うや、大宮巡査は首を傾げた。

「皐月？　あんたどうかした？」

弥生も皐月の表情に理解出来なかった。

「わからないよ……　でも、好きな人にそれだけのことをするって、一歩間違えれば、自分の人生犠牲にしてるってことじゃない？」

皐月もどうして泣いているのかわからなかった。

「似てるんじゃな？　姑獲鳥（うぶめ）の時と――」

云われてみれば、あれも男女の縺れから殺人を犯している。そして皐月は、その原因となった間宮理恵の胎児に取り憑かれていたのだ。

だからこそ杜若のこともわかったし、戦闘時に助けてもらった恩がある。

「しかし、今回は違いますよ？　どちらも付き合ってませんからね」

そう云った時、阿弥陀警部の携帯が鳴った。

「はい。――っえ？　そうですか？」

一言二言話すと、携帯を切り、周りを見渡した。

「さきほど二人が自首したそうです。まぁもともと深い事情聴取するつもりでしたしね」

阿弥陀警部がそう云うや、ポンッと手を鳴らした。

「これで事件は一件落着。みなさん嫌なことはすぐに忘れたないと身が持ちませんよ」

そう云うや、阿弥陀警部は拓蔵と三姉妹に一礼するや神社を出ていった。

取り残された大宮巡査は皐月の暗い表情が気になっていた。

「人を好きになるのって……　人を傷つけてまで成立させるものなのかな？」

「――っえ？」

「姑獲鳥となった間宮理恵が、どうして私のお腹（なか）に子供を入れたのか、今となってはわからない。でも、彼女がそうしたからこそ、私は田原先生のところで診てもらった。彼女が先生に診てもらったこともそこで分かった。だけど彼女はそれが怖かった」

間宮理恵は妊娠十ヶ月とされていたが、実際は既に胎児は亡くなっていた。しかし、その現実を医師の口から言われるのが怖かったのだ。

「確かに怖いかもしれない……　でも、怖いからこそ人を好きになるんじゃないかな？　確かに容疑者の二人がしたことは理解出来ないし、行き過ぎている。でも、人を好きになること自体を怖がっていたんじゃ、何も始まらない。一歩踏み出すだけでもそうとう勇気がいるんだよ」

大宮巡査がそう云うや、皐月の頭を撫でた。

「僕は最初君たちに会って、あの力を見たとき、正直怖かった。だけど、僕は君たちが人とは違う不思議な力をもっていようと、それは君たち個人の特徴だ。それを受け入れるし、これからも頼りにしている」

そう云われ、頭を押さえられている皐月は、上目遣いで大宮巡査

を睨んだ。――いや、睨みたくて睨んだのではない。どんな表情を浮かべればいいのかわからなかったのだ。

「怖くないんですか？」

「――怖いさ。でも……　僕なんかより君たちの方がもっと辛いことがわかったからね。相手の気持ちを知らないで、一方的な考えじゃ、相手に失礼だろ？」

大宮巡査が弥生の問いにそう答えた。

「ほんと不思議な人ですよね？　阿弥陀警部だって、今は普通に私たちに調査のお願いをしてきますけど、はじめのうちは遠避けてたんですよ？」

そう云われ、大宮巡査は首を傾げた。

「私たちの力が非現実すぎて、ついていけなかったんでしょうね。それと理解しようとしなかった。たぶん今も理解しようとしてませんよ」

「でも、警部は君たちの助けがあったから――」

「力を利用するのと、助けてもらうのは違いますよ？」

そう弥生が云うや、大宮巡査は悪寒を感じた。

「今日は遅いですし、早くいかないと警部が待ってるんじゃないんですか？」

「あ、そうですね。それじゃ失礼します」

そう告げるや、大宮巡査は神社を出ていった。

漆・手紙

「皐月？　あんたに手紙届いてるわよ？」
学校から帰ってきた皐月に弥生が大声でそう言った。
「弥生お姉さま？　ちょっと――」
うるさいと言おうとしたが、葉月は言葉を止めた。皐月は若干ではあるが耳が悪い。だからこそ居間の方から玄関に声をかける時、普通の声では聞こえないのだ。

「あ、手紙は部屋に置いてあるから」
そう云われ、皐月はそのまま自分の部屋へと入っていった。
机を見やるや、その上に封筒が置かれている。
それを手に取り、消印と送り主が書かれていないことに違和感を感じる。が、宛名が皐月となっている。
意を決して、皐月は封筒を開けようとした時だった。

「あれ？　このシールって……」
封を閉じる部分に、くまのシールが貼られている。皐月は少しばかり思い出すや、そして半ば乱暴に封を切った。

「そうか、ずっと待ってたんだ……　だけど、笹川直介は姿を現さなかった」
皐月は手紙を何度も読み直した。

手紙にはこう記されている。
『拝啓、黒川皐月様。
貴方のことは前々から存じておりました。いえ、この手紙を書いている本人はあなたの事を知りません。

ですが、閻魔様に私のような妖怪が悪いことをすれば罰するよう命をうけていることは知っております。

あの日、図書館であなたが私を見かけたとき、彼女はずっと手紙を送っていた笹川直介と初めて直接会える約束をしたんです。

ですが、笹川直介との待ち合わせである朝１１時をすぎても来ず、また緊張していたこともあり、頭を冷やそうと図書室に入りました。

そのとき、私はずっとあの本を読んでいました。他愛もない恋愛小説でしたが、文の妖（ふみのあやかし）である私としては、大変面白いものでした。

稚拙なものでしたが心温まるものでしたよ。

それと、この子が犯した罪は罰せられなければいけません。だけど、この子は自らの意思で人を殺しました。それは何用にも変えられないただ一つの真実です。だけど、自分がせっかく作ったものを目の前で捨てられたら……』

今まで丁寧だった字が、途端乱暴になっていく。

『彼女がせっかく一生懸命作ったバレンタインデーのチョコを、何の躊躇いもなくゴミ箱に捨てたのです。

いいえ、笹川直介は他にも色々な子からもらっておりましたが、彼女らのも同様でした。一緒に容疑にかけられておりました媛坂円香が送ったものも同様の扱い。

でも、彼女を絶望させたのはそれにございません。

笹川直介は彼女の目の前で、お弁当箱を溝（ドブ）に捨てたのです。

それが彼女の犯行理由。姫坂円香との共犯でなくとも、いつの日か彼女は笹川直介を殺していたでしょう』

手紙はそこで終わっていた。

「結局、聞けずじまいか――」

皐月はベッドの上に寝転がり、先日拓蔵に言われたことを思い出

した。

「でも、聞くまでもないか……　私だってメールでもらうより、遠回しでも手紙をもらったほうが嬉しいしね」

皐月は手紙の主が何なのかに気付いた。。

恐らく文車妖妃（ふぐるまようび）という妖であろう。

そして彼女に文車妖妃が取り憑いていたことも、手紙の内容を見れば納得が出来る。

江戸時代の怪談集に『諸国百物語（しょこくひゃくものがたり）』というものがある。

その中の話に、ある寺の稚児（ちご）が恋文を受け取り、それを捨てていたところ、恋文に込められた執念が鬼と化して人を襲ったという話があるが、同様に手紙の執念が妖怪化したものが文車妖妃ともいわれている。――手紙の内容がこれと似ているのだ。

事件解決後、一応分かったこととして、阿弥陀警部から告げられたが、剃刀やカッターの刃が入った手紙を送っていたのは殆ど姫坂円香で、河瀬瞳美だけはずっと丁寧に手紙を送っていたようだ。

だけど返事をもらえないことや、目の前で捨てられたことを根にもっていたことは確かで、殆ど食べ物の話になっていたようだ。

相手がどんなものが好きか、何が嫌いなのか、ただそれだけが聞きたかっただけらしい。

皐月は起き上がり、部屋を出ていった。が、一二分ほどで戻ってきた。手には長短二本の竹刀を持っている。

「いつのもの癖で竹刀持って来ちゃった――」

皐月は机の横に二本の竹刀を掛けかけた。

気を取り直して、皐月は手紙を床に置くや、

「閻獄第一条二項において、人に取り憑き、その身で他人を刺殺し

たものは『等活地獄・刀輪処（とうりんしょ）』へと連行する」
そう告げるや、どこかから御札が現れ、手紙に貼り付いた。
そして、青白い炎と共に消えた。

「本人にはこっちの世界で罪を償ってもらいましょ？　大丈夫よ。あなたが私に手紙を送ったんだから」
皐月はそう云うや、少しばかり背伸びをし、机へと向かった。

そして引き出しから便箋を取り出し、手紙を綴（つづ）った。
それは誰に当てたものなのかは決めていなかったが、少なくとも文車妖妃に対しての感謝の礼文であった。

漆・手紙（後書き）

第六話終了です。因みに手紙は脱衣婆にお願いして、渡してもらってます。

壱・土砂降り

『夜目遠目笠の中』という言葉がある。

本来、夜見るとき、遠くから見るとき、笠に隠れた顔の一部をのぞいて見るときは、はっきり見えないので実際より美しく見えるものである。という、専ら女性に向けられた言葉である。

しかしこの状況……土砂降りの中でも同様の事が云えた。

まるで緞帳のように雨は降り頻り、まったくと云っていいほど周りが見えない状態となっていた。

聞こえてくるのは荒々しい雨音。そんな中をひとりの少女が佇んでいる。少女は目を瞑り、神経を集中させ、『何か』を探していた。

そんな中、「ギギギ……」と奇っ怪な声が幽かに響いた。

それはひとつといわず、2、3と、まるで潜んでいたかのように、ジワジワと少女に歩み寄っていく。

「キシャアアアアアッ!!」

はっきりと聞こえるほどの咆哮を挙げるや、死霊たちはいっせいに少女へと襲いかかった。

――はずであった。

「ぐっ？　ぎぎ？　げぇがぁ？」

なぜ？　どうして、こうなった?と言わんばかりに、死霊たちは唖然とした表情を浮かべた。

その顔は爛れ腐って、もはやその表情は理解できないが、たとえるならそういう心情であろう。

「一刀・亡情噺（むじょうのさえずり）」

少女がそう呟くや、死霊たちの体はバラバラになっていく。そして赤黒い炎となって――消滅した。

ふと少女の背後（うしろ）から女性の溜息混じりの声が聞こえてきた。

「あんた……　どうして彼等に令状を言い渡さなかったの？」

女性……脱衣婆が鎌を担いだ状態でそう問い掛ける。が、少女はその問いに答えようとしない。

それを見るや、脱衣婆ははっきりとわかるほど顔を歪ませた。

「あんたねぇっ！　執行人が公私混同することはルール違反だってことくらいわかってるでしょ？」

「なら……　どうして妖怪なんかに、人間と同じことをする？」

「……っ！」

「人間は罪を償い、その償いによって後々（のちのち）に生きる権利を与えられる。だけど、生きてもいない妖怪にそんなことをする理由なんてないんじゃないの？」

そう訊かれ、脱衣婆はその問い掛けに戸惑った。

少女の言い分はもっともである。

裁判においての判決は被告人にとって、無罪、有罪、死刑と、どちらにしても今後の人生に大きくかかわってくる。

しかし妖怪に関しては、もともと“存在”すらしていないのだ。

そんな存在にどうして人間と同じようなことをするのか……というのが、少女の考えだった。

「私たち執行人に令状を伝えさせるのは……　ただ単にあなたたち地獄裁判官たちがめんどくさがっているからでしょ？」

少女の言葉に、脱衣婆は戸惑った。

「そりゃそうよね？　意味も無く死ぬ人間なんてごまんといるし、いったいどうして死んだのか、なんの罪もないのに自殺をする人間だっている。要するに……弱いだけでしょ？」

「そういう……　あなたはどうなの？」

「私も……　同じようなものよ……　結局守られた借りを返してないんだから」

少女はそう言うと、長刀を振り下ろした。

「まだ……　探してるの？」

「ええ……　あれを殺すまでは、私のやり方で妖怪を殺すっ！」

少女が二つ目の『殺す』という言葉を発した一瞬、まるでそのタイミングを見計らったかのように雷鳴が轟いた。

「……っ」と脱衣婆は舌打ちをする。雷鳴に紛れるように、少女は突然と姿を消したのだ。そして暴雨の中、はっきりと鈴の音だけは確かに響いていた。

「もちろん、あんたのやり方は間違っていない。そういう方法だってあるし、殺された被害者にとって、怨みを持っているでしょ……　でも、人間も妖怪も、元をたどればどっちも同じなのよ……　どっちも必ず罪を持ち、どちらもそれを償う権利を持ってるんだから」

脱衣婆は、どうしてここまで少女が妖怪を忌み嫌っているのか、その理由を知っている。

いや、知っているからこそ、令状を伝えてやって欲しいのだ。

三姉妹や少女といった、迷える魂を成仏させ、その罪を言い渡している執行人たちの令状は、その死者や亡霊に対する罪を伝えるという意味がある。

元々なら脱衣婆が三途の川で、死者の衣服を剥ぎ取り、それを傍らにある木の枝にかける。その撓り具合によって、罪の重さを測っている。

しかし戦国時代や、戦中、昨今の残虐非道な事件によって、罪のない死者が異常なほどに増えているのだ。

人間世界において、何百年もの間に、何千、何万、何億もの命がこの世を去っていったとしても、地獄からしてみれば一朝一夕の流れでしかない。

だからこそ、死者の数は多く、その重みは計り知れないものとなっている。

皐月たち三姉妹が死者や妖怪に対して令状を伝えることは、十王の長『五道転輪王』が作った方法であり、地獄裁判をスムーズに運べるというメリットがあるが、言い換えれば苦し紛れのものでもあった。

「一応閻魔さまに報告しておかないと……　まったく、変成王さまはどうして信乃を執行人にしたのかしら……　あの子がやっていることはただの憂さ晴らしにしか見えないわよ」

脱衣婆はそう呟きながら、鎌で景色を切り裂いた。

その切り目から赤い川が流れており、その隙間に入るや、スーと姿を消した。

弐・三悪道（前書き）

三悪道（さんまくどう）；仏教用語の１つ。六道のうち、地獄道、餓鬼道、畜生道の３つの世界のこと。三悪趣。三趣。悪行を重ねた人間が死後に行く世界だとされる。

弐・三悪道

「何も聞こえないんですか？」と大宮巡査が葉月に尋ねた。
葉月の手元には身元不明の白骨死体が写し出された写真がある。
何度か声を聞こうと葉月は試(こころ)みているのだが、まったくもって聞こえないという。

「湖西主任に遺体の状況は聞いておるんじゃろ？」
「ええ。遺体は恐らく4年前のものではないかという見解だそうです」
「行方不明者……という可能性は？」
「一応、その線でも調べていますが、行方不明届けがあったとしても……」
阿弥陀警部が言葉を止めた。
「別にいいじゃろ？　わしが警察におった時、それが一番の蟠(わだかま)りだったからのう」
拓蔵がカップ酒を一口飲むやそう云った。

遺族が警察に行方不明届けを出したからといって、すぐに見つかるものではない。
それどころか優先順位は、はっきり言って下(げ)の下(げ)である。
行方不明。強いては家出とほかならないからだ。
事件に巻き込まれての行方不明ならばまだしも、そういう雰囲気でなければ、やはり優先順位はないに等しいのだ。
届けを出した遺族にとっては、信じ難いものであるが、現実とはそういうものである。

写真に写っている白骨死体の身元がわからない以上、行方不明届

けを出されているのかすらわからないのだ。
そしてそれを判断するＤＮＡ鑑定の結果はまだ出ていなかった。

「発見者は？　見たところ山の中みたいですけど……」
皐月がそう大宮巡査に尋ねた。
「皐月ちゃんの言うとおり、遺体が発見されたのは山の中。近くでコテージを所有している人の飼い犬が見つけたそうだよ」
「……犬？」
皐月は小さくそう呟いた。

別に犬が骨の臭いに嗅ぎ付けて、地面を掘り起こしたのならば、別におかしなところではない。
しかしどうも犬という部分が引っかかっていた。

「でも可笑しなところがあるんだよね」
大宮巡査がそう言うと、「可笑しなところって？」と葉月が訪ねた。
葉月は霊視をした後、疲れてしまい眠りこけてしまうのだが、疲れを見せないところから見て、まったく力を使っていない。
霊視はあくまで霊魂を感じることなので、感じなければ、その力が消費されることがない。

「いやね？　その飼い犬は普段敷地内で放し飼いにしていてるんだけど……　発見される前、部分的な土砂降りがあったらしくて、足場は最悪だったそうなんだよ」
「確かに可笑しいですね。いくら人間よりも嗅覚が発達している犬だからって、ピンポイントに死体を発見できるなんて」
弥生がそう云いながら、皐月を見やった。
「ふたりとも、どうかしたのかい？」
大宮巡査はそんな弥生と皐月を見ながら声をかけた。――が、二

人はその問いに答えなかった。

「阿弥陀警部？　あんたら警察は現場に行っとるんじゃよな？」
「ええ。一応通報を受けましたからね、それが何か？」
「そのコテージに住んでいる人間の身元や近辺は調べておるんじゃろ？」
そう訊かれ、阿弥陀警部は頷いた。そして、３枚の写真を見せた。
「コテージのオーナーである瀧瀬晋平（たきのせしんぺい）、６５歳。その妻である瀧瀬愛美（まなみ）、６３歳。そして、その孫である瀧原希空（たきはらのあ）、１３歳の三人です」
「――それだけですか？」
弥生がそう聞き返した。オーナーである瀧瀬夫婦ならまだ分かるのだが、その孫である瀧原希空の両親がいないことに違和感があった。

「瀧原希空の両親ですが、長期の海外出張しているそうなんですよ……　愛娘を祖父のもとに置いてね」
「一体何の仕事を？」
皐月がそう訊くと、大宮巡査が「二人とも外資系の仕事をしている」と答えた。

「葉月さんの様子から見て、今回は貴方達の力を借りなくてもいいみたいですね。妖怪とかそういう類（たぐい）のものではないようですし」
阿弥陀警部がそう云うや、立ち上がると居間を出ていった。

それを葉月がジッと見つめているのを大宮巡査は気にかけるや、問いかけた。
「今日の阿弥陀警部、何か焦ってない？」
それに関しては弥生と皐月、拓蔵も薄々とだが感付いていた。

最初に割愛したが、阿弥陀警部と大宮巡査が稲妻神社に訪れ、葉月に霊視をお願いしてから、実は小一時間以上は経っている。

声が聞こえていたのならば、そのままのことを伝えるのが葉月の役目であるのだが、その声が聞こえないのではどうすることも出来ない。

だからこそ葉月は何度も声を聴こうとしていたのだ。

「確かに……　大宮くん。その瀧瀬夫婦は何をしておるのかは調べておるんじゃろ？」

「え、ええ。コテージ……強いていえば別荘のオーナー。どうやら大会社の社長だったそうですが、引退して後世を静かなところで満喫しているそうです」

大会社の社長ともなれば、別荘の一つや二つ持っていても可笑しくはないだろう。と拓蔵は言葉を続けた。

「だけど、その山自体もオーナーの所有物なんですよね？」

「――どういうことですか？」と弥生が尋ねる。

別に所有物であるのなら可笑しくはないのだが、大宮巡査はそれが納得いかない様子だったのだ。

「いやね？　自分の敷地の中で人間の白骨死体が発見されたとしたら、そりゃ驚くだろうし、警察に通報だってする」

「まぁ、それが普通だと思いますし、極当たり前だと思いますけど？」

「そうじゃなくて、自分の家に死体が……　ましてや人間の白骨死体が発見されたんじゃ、それを隠すのが道理じゃないかな？　世間体とかを気にしてさ？」

確かに云われてみれば、犬や猫といったペットの死体ではない。

ペットの死体ならば、埋めて埋葬することなどままあるため、可笑しな点ではないのだ。

日本の法律に『墓地埋葬法』というものがあり“墓地、納骨、または火葬場の管理及び埋葬などが、国民の宗教的感情に適合し、且つ公衆衛生その他公共の福祉の見地から、支障なく行われることを目的とする”というものである。

勿論この法律は死亡届を役所に届け、死体を火葬、埋葬などを済ませるものに適合される。

しかしそれはあくまで身元が分かっているものに限られる。

今回の件は『地中に埋められていた、人間の白骨死体が発見された』ことが発端なのだ。

「皐月ちゃんと弥生さん……　おふたりがよろしければ、コテージに来てみませんか？」

そう云われ、二人は目を丸くした。

「いや、皆さん納得できないご様子ですし、どうせだったら現場に来てもらったほうがいいんじゃないかなって」

大宮巡査はそう言うが、階級の低い巡査でしかない大宮巡査にそのような権限はないのだ。

「でも、何も声が聞こえなかった……」

葉月が申し訳なさそうに言う。が、大宮巡査はそうじゃないと説明する。

「葉月ちゃんの力は“霊の声を聞いてあげること”だよね？　その場で死んだ霊体ってのは成仏されない以上、その場に留まるものだって聞いたけど？」

そう云われ、葉月はハッとする。

成仏とは、仏がこの世に未練を亡くすことを意味する。

――が、果たして地中に埋められた白骨死体が、未練なくこの世を去るだろうか？

「――誰かが私たちより先に成仏させた？」

「それは僕にはわからない。だけど、君たちの力を信じているからこそ、弥生さんと皐月ちゃんのふたりに、現場で確認して欲しいんだ」

大宮巡査は拓蔵を見遣った。その表情は何か決意あるものだった。

参・経路

「皐月、どうかした？」
軽く着替えを見繕って入れたバックを背負いながら、弥生は皐月に声を掛けるが、皐月は反応しない。
もう一度、さっきよりも大きな声で呼び掛けるが、やはり反応しない。

「皐月さま、どうかしたんでしょうか？」
遊火がそう弥生に尋ねる。
「もしかして、今回の件……　信乃さんが絡んでるって考えてる？」
そう訊かれ、皐月は少しばかり反応する。
「信乃の先天的能力……　鳴狗家の異常なほどの嗅覚なら、犬が発見する前に白骨死体を見つけることが出来る」
「しかもあんたと違って霊が見える――」
皐月はその言葉に対して、特に何も言わなかった。

「でも、そうだとしたら、脱衣婆さんか、瑠璃さんかが報せに来るんじゃないんですか？」
阿弥陀警部と大宮巡査が稲妻神社に遺体の報告をしたのは、水曜日である。今は金曜日の夕方、皐月と弥生は大宮巡査に頼まれて、現場となったコテージへと向かっている最中である。
少なくとも今回のことは、閻魔王である瑠璃が知らないはずも無く、またそれに関して脱衣婆が何か言いに来ていたはずである。

「それがないからこうやって、実際に現場に向かってるんでしょ？」
弥生は皐月を見やる。
「あの子には、あの子のやり方がある。私たちが口出すことじゃないでしょ？」

その言葉に対して、皐月は「わかってる」と小さく云った。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

山の頂上に一軒のコテージがある。その周りには疎らではあるが警察の人間が何人かいた。

「大宮巡査は……　あ、いた！」

皐月が大宮巡査を見つけ、声を掛ける。大宮巡査は他の警官に一言声を交わすや、皐月たちのもとへと駆け寄ってきた。

「ごめんね。迎えに行こうと思ったんだけど、忙しくなっちゃって」

「別に気にしなくていいですよ。私も弥生姉さんもいい運動になりましたから」

「でも喉くらいは渇いてるだろ？　コテージのオーナーに話は通してあるし、二人の部屋も用意してもらってる……」

大宮巡査の話を聞いている最中、なにやら遊火がキョロキョロと辺りを見渡していた。

「どうかしたの？」

「――阿弥陀警部の姿が見えませんね？」

云われてみれば確かに……と、弥生も辺りを見渡した。が、阿弥陀警部の姿がどこにも見当たらない。

「大宮巡査？　阿弥陀警部は……」

「阿弥陀警部は他の事件を担当してますよ」

そう聞かされ、弥生と皐月、遊火は首を傾げた。

「今回の事件はあくまで、身元不明の白骨死体ですし、何よりそれを判断するものがひとつもない」

「ひとつもないって……　ＤＮＡ鑑定の結果は？」

そう訊かれ、大宮巡査は一枚の書類を二人に見せた。

遺体の名前は書いておらず、また死亡推定時刻は１０年以上前のものとなっていた。
「えっと……　確か湖西主任の見解では、白骨死体は４年前に埋められたモノだって云ってませんでした？」
「うん。だけど、骨随を調べたところ、まったくスカスカの状態だったんだ」
「――骨の中が？　そう言えば、写真を見たとき、変なところあったわね？」
弥生が何かを思い出そうとしている時だった。

「お～っ、そん子らかぁ？　あんたが呼んだってのは？」
軽快な声がし、其方を見やるとサングラスを掛けた老人が此方へとやってくる。
「オーナー、この二人がさきほど話した、黒川弥生さんとその妹さんの皐月さんです」
大宮巡査がそう紹介し、二人はコテージのオーナーである瀧瀬晋平に会釈した。

「険しい山道、ご苦労じゃったなぁ。ささ、立ち話もなんじゃから、コテージに入られてはどうじゃ？」
何ともまぁ、絵に描いたような好々爺（こうこうや）だと、弥生と皐月は思った。
二人は大宮巡査と瀧瀬晋平に案内されるようにコテージへと入ろうとした。
「――遊火、一応辺（あた）りを調べておいて」
そう弥生に命じられ、遊火は頷くや、無数の火の玉となって散った。

「そう言えば、弥生さん？　さっき遺体の写真に違和感があったっ

て言ってたけど？」
「普通……　屍体から白骨になるには、環境にもよりますけど、早くて夏場だったら一週間から十日。冬場は数ヶ月以上かかると言われているんです。だけど、それは地上に放置された屍体にいえること。今回の事件は地中に埋められた遺体でしたよね？」
　そう訊かれ、大宮巡査は頷いた。
「遺体は――男女関係なしに、大人だと七年から八年はかかると言われているんです」
　二人の話を聞きながら、皐月は弥生の違和感に気付いた。
「骨が――綺麗過ぎたってこと？」
「ええ。地中に埋められた死体が白骨化するのには相当な時間がかかる。しかも土に塗れていたはずなのに、ところどころ綺麗だった」
　弥生は大宮巡査に「遺体発見後、地上に上げ、埃を落としたのか」と尋ねる。
「一応身元確認のためにね。でも、云われてみれば、確かに泥がこびり付いてなかったなぁ……」
　地中に埋められていたのなら、泥やら何かが骨にこびり付いているはずである。
「もしかしたら、遺体は殺された後、どこかに隠してから埋めたんじゃ……」
　そういう考えに至るのだろうか……と、大宮巡査は少しばかり考え込んだ。

肆・明星

皐月と弥生が、大宮巡査と瀧瀬晋平に案内され、コテージの中を見渡していた時だった。

突然、犬の鳴き声が聞こえ、弥生と大宮巡査は其方を見やった。が、耳があまり聞こえない皐月は1テンポ遅れて反応する。

「あら、あなたは驚かないのかしら？」

犬を抱えている女性が奥の部屋から出てくる。

「ははは……　妻の愛美じゃ」と瀧瀬晋平が紹介するや、瀧瀬愛美は皐月と弥生に会釈する。二人も慌てて返した。

「あなたたちが大宮巡査の云っていた子達ね？」

そう瀧瀬愛美が話した時だった。抱えていた犬が突然暴れ出し、腕から飛び出してしまった。

そして皐月と弥生の周りをグルグルとまわりだす。

後々聞いたことだが、犬種は「トイ・マンチェスター・テリア」というもので、どうやら皐月と弥生がコテージの前に来てから、少々落ち着きがなかった。

「この子が遺体の第一発見者ってことになるんですか？」

皐月が中腰になり、犬を触ろうとした時だった。

「トーマッ！　トーマッ！」と外の方から女の子の声が聞こえるや、犬は皐月の手を素通りし、ドアの方へと駆けていった。

そして、ドアの前で吠えた。

「あ、家の中にいた。駄目だよ！　勝手に居なくなったら」

そうコテージの中に入ってきた女の子が犬を抱えながら、叱って

いるが、当の本人は尻尾を左右に振っており、どう見ても反省しているようには見えない。

「あれ、お客さん？」

女の子が皐月と弥生を見ながら、瀧瀬愛美に尋ねる。

「彼女がオーナーの孫である瀧原希空さん」

大宮巡査が弥生と皐月に耳打ちをする。

「トーマって云うんだ？」

「うん」

瀧原希空の様子に、皐月は首を傾げた。

（大宮巡査、この子……　もしかして……）

皐月はその違和感を隣にいた大宮巡査に尋ねた。

瀧原希空は確かに『皐月たちの方を見ている』。

（ああ、察しの通り……　彼女は目が見えてない）

そう大宮巡査は云った。

瀧原希空は確かに自分たちを見ているが、話している人間の方を見ていない。今でも声の主がどこにいるのか、首を動かして探している。

「でも、さっき……　トーマだっけ？　犬の方は見てたじゃないの？」

「声が聞こえてれば、そっちに振り向くでしょ？　さっきの弥生姉さんと大宮巡査みたいに」

云われてみれば確かに……と弥生と大宮巡査は納得する。見えていようがいまいが、耳が聞こえているのなら、声がする方に向くものである。

「希空、今は警察の人がいるんだから、部屋で大人しくしてなさい」

瀧瀬晋平にそう云われ、瀧原希空は犬を片手に抱え、壁に触れな

がら、階段を上っていく。
そんな希空を見ていた皐月がぼんやりしていたのを気になったのか、大宮巡査が声をかけた。

「いや……　多分気のせいだと思う」
「気のせいって、何かあの子から感じたの？」
弥生にもそう訊かれたが、皐月は答えなかった。

（あの子……　一瞬だったけど、段差を一つ抜かしてた）
目が悪いのならば、安全のために段差一つ一つ確認するのだが、瀧原希空はそれを一つ抜かして上がっていたことに、皐月は違和感を感じた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

コテージで働いている女性から、自分たちが泊まる部屋へと案内された皐月と弥生は、それぞれのバックをベッドの上に置いた。そして女性が居なくなったことを確認するやドアを閉め、窓を開けると、弥生は遊火を呼んだ。
窓に掛かっているカーテンが拳大（こぶしだい）ぐらいの大きさに凹（へこ）んだのを見て、皐月は遊火が入ってきたことを認識した。

「弥生さまと皐月さまが歩いていた山道以外にきちんとした道はありませんでした。また、遺体が発見された場所は竹林の中で、人が通れる道幅はありましたが、そちらは険しい獣道でした」
遊火は弥生に頼まれていた、コテージの周りを調べていたことの報告を弥生に伝え、それを遊火の声が聞こえない皐月に弥生が伝える。
皐月は遊火の気配は感じることは出来ても、声が聞こえなければ、姿を見ることも出来ない。

「それと、第一発見者となっているのは、瀧原希空だそうです」
そう云われ、弥生は皐月を見た。先ほど皐月が瀧原希空に関して違和感を持っていたことを思い出したのだ。
「弥生姉さん？　今回の事件……　瀧原希空（あの子）がひとつ絡んでるのかもしれない」
「どういうことですか？」と遊火が尋ねるが、訊いたところで皐月には声が聞こえていない。代わりに弥生が尋ねた。
「先ず第一に、遺体が発見された場所は竹林で、それこそ獣道だったのよね？　そんなところを目が見えないあの子が近付くと思う？」
「――言われてみれば確かにね……　ここに住んでいたのならうっすらと地形は覚えているだろうけど、危険な場所に自分から入るとは思えない」
「さっきも犬（トーマ）がドアの方に吠えてから、瀧原希空はドアを開けた。それからすぐに犬（トーマ）を抱えていた」
その言葉に、弥生は皐月が感じていた違和感がなんなのかに気付いた。
「可笑しいわよね？　目が見えてないなら、それに触れるまで手探りするはずじゃない？」
あの時、弥生も一緒にいたため覚えていた。瀧原希空はコテージに入ってくるや、吠えていた犬をすぐに抱きかかえていたのだ。
「ええ、声が聞こえたからといって、場所はわかっても、その位置まではわからないでしょ？」
「でも……　どうしてそんな嘘を？」と遊火の言葉を弥生が代弁する。
「もしかしたら……　もしかしたらだけど、何かを隠してるんじゃないかなって」

「――何かを？」と弥生と遊火は首を傾げた。

皐月がその次を言おうとした時、廊下側から部屋のドアを叩く音がした。

「二人とも……　ちょっといいかな？」

声の主は大宮巡査だった。

弥生がドアを開けると、ドアの隙間から黒い何かが入ってきた。

「っ！！」

遊火が驚き、それを見ないようにしている。

「あ、そういえば遊火って、犬が駄目なんだっけ？」

弥生が呆れてそういう。が、遊火はそれどころではない。

「ちょっと！　弥生さまぁっ！　助けてくだしゃいぃ……」

泣きじゃくりながら、遊火は助けを請う。

入ってきた犬……　トーマは“何もないところ”を向いており、舌をだらしなく出しながら、尻尾を振っている。

特別吠えるわけでもなく、ジッとその虚空を眺めているのだ。

（――もしかして、遊火が見えてる？）

本来妖怪である遊火はふつう見えるものではない。が、稀に人間が持たない不思議な力を、逆に動物が持っている場合がある。

皐月はトーマを背後から抱えた。特別暴れるわけでもないが、一瞬だけ舌を伸ばした。

「ひぃっ！」と遊火が小さく悲鳴を挙げる。が、実体がないため舌はそのまま頬を通り抜けた。

そのため、当てた感触がなかったのか、トーマは少しばかり不思議そうな声を挙げた。

伍・隠蔽

薄暗い部屋の中で、ボンヤリと頼りない明かりが灯っている。
「――どうして嘘を吐いてるんじゃ？　お前さんは……」
その人物を見やるや、警視庁鑑識課主任である湖西がひとつ溜息混じりに愚痴を零した。

「人が態々訪ねに来てやったというに、なんじゃ、そのモノの言い草は」
「部外者は入ってこれんはずなんじゃがな？　のう――拓蔵や……」
湖西主任がそう拓蔵に云う。
その拓蔵はいつもの飄々とした雰囲気とはまるで別人の、キリッとした面影を持ち、服装は黒のスーツを着ている。

「弥生ちゃんと皐月ちゃんは例のコテージか……　葉月ちゃんはどうした？」
「一階のロビーで待たせておるよ。そんなに遅くならないと云っておる」
というよりも、要件だけという意味だと湖西主任に伝えた。

「――で、遺体の形状はどんなんだったんじゃ？」
「それよりも先ず……　どうして警察を辞めたなんて嘘を吐いておるんじゃ？」
「嘘ではない。辞めたのは本当じゃ……　ただそれを上が処理しとらんだけじゃろ？」
その言葉に湖西主任は呆れた表情を浮かべた。

「田舎出のノンキャリアが警視庁にくるどころか、剰え警視にまで昇格しておきながら――　どうして自分から辞めたんじゃ？」

「その話はいいじゃろ？」と拓蔵は云うが、湖西主任の目を見るや、それは許されないと悟ったのだ。

「６年前に、三姉妹らが事故に遭うたことは覚えておるじゃろ？」

「ああ……　覚えておるよ。そん時のお前さんの慌てっぷりは、警視庁の中でも、鬼神とまで云われていた人間とは思えんかったがな」

拓蔵は警視庁にいた頃、公安部に属していた。

特に自身が神仏を扱っている家柄であることもあってか、宗教紛いの団体に厳しかった。

「神仏を信じる信じないは別として、それで人を騙し強請っておったのが赦せんかっただけじゃよ。結局決めるのは生きている人間じゃろ？」

「お前さんの考えもわからんわけじゃないがな？　人は何かに縋らんと生きていけんじゃろ？」

しかし、拓蔵が警視庁を辞めた理由はこれではない。

「――６年前の転落事故。運転しておったのは確か健介くんじゃったろ？」

「だから未だに信じられんのだ。一流のＦ１レーサーであった健介くんが、３０キロも出しておらん車で運転ミスを起こしたことがな」

転落事故があった現場は緩やかなカーブがあるくらいで、それほど険しい山道ではなかった。小石が散りばった道ではあったが、落ち着いて走れば、事故に遭うことはないほどの山である。

ワゴン車であったことと、葉月がまだ４つの幼子であったこと、キャンプの帰りだったためか、疲れて眠っている弥生と皐月に気を使っていたため、スピードを出していなかった。

「しかし……　お前さんが気にしておったのはそこじゃないじゃろ

？」

「あの転落事故で――　発見されたのは弥生たちだけだったんじゃよ……」

転落事故ならば、運転していた初瀬神（はせがみ）健介と、その妻であり、拓蔵の娘である遼子の姿がなければいけない。

しかし当時発見された車からは弥生ら三姉妹だけだった。

「じゃが、健介くんが車から抜け出し、助けを求めた可能性も――」

湖西主任がそう云うや、突然拓蔵は机を両手で叩き、耳を劈くほどの大きな音を部屋中に響かせた。

「車は３ｍ（メートル）以上の崖から転落しておるんじゃぞ？　しかも運転席のドアは地面に付いておって、出ることは先ず不可能。助手席の方もドアが壊れておった――　そんな状態で出られるわけがなかろうし、運が良くて気を失っておったじゃろうが、普通じゃったら全員が即死じゃろうが！」

だからこそ、拓蔵は三姉妹が賽の河原にいた事に違和感を感じている。そこは親より先に死んだ親不孝ものを罰するための場所であり、親と一緒に死んだのなら、そこに行くことはない。

「――それが信じられんのじゃろ？　閻魔王……瑠璃がその子らをあんたのところに連れてきたんじゃからな」

湖西主任はそう云いながら、部屋の奥を見やった。

「――いつから気付いてました？」

真っ暗な部屋の奥から凛とした声が響いた。そしてボンヤリと輪郭が見えるや、それが瑠璃であることに拓蔵は気付く。

湖西主任は瑠璃の問いに、拓蔵が机を叩いた時だと答えた。

「拓蔵……　確か火車（かしゃ）が出てきた時、佐々木刑事に自分だけが覚えておればいいと言っておったではないですか？　それを湖西主任に話すとはどういう風の吹き回しですか？」

瑠璃は浄玻璃の鏡を通して、車内での会話を聞いていたことを話した。

「今回の事件……　大宮くん個人があの子らをコテージに呼んだ。高々巡査が捜査に関係のない人間を呼んだんじゃ……　それなりの覚悟があると思っとったがな――」

拓蔵は湖西主任を見やった。

「大宮くんは警官を辞める覚悟じゃろうな……」

あの晩、大宮巡査が見せた表情を、拓蔵は同業者であったこともあり、直ぐに悟っていた。

「――昔のお前さんと似ておるからか？」

そう湖西主任が云うや、拓蔵は苦笑いをした。

「――湖西さん、私からもお願いします。あの白骨死体……　被害者の名前はもう分かっておられるんでしょ？」

瑠璃にそう云われ、湖西主任は机の引き出しを開け、書類を出すや、それを机の上に広げた。

「被害者は瀧原俊平、４０歳……　コテージのオーナー瀧瀬晋平の孫である瀧原希空の父親じゃよ」

「……どういうことじゃ？　確か海外出張をしておったと聞いておったが――」

拓蔵の問い掛けに、瑠璃が答える。

「海外出張自体が嘘だった――」

「結論から言ってそうじゃな？　白骨の進み具合から見て、死後４年は過ぎておる」

地中に埋まった死体が白骨化するまでの過程は、弥生が説明しているため省略するが、死後４年では完全な白骨化はしていない。つまり地中に埋められたのは白骨になってからということになる。

「――4年か……　骨になってから埋めたということになるんじゃな？」

「じゃが、それでは海外出張に行ってからの計算が合わん。いや、寧ろ行ってなかったというのがわしの考えなんじゃがな」

その言葉に瑠璃が聞き返した。

「経緯がないんじゃよ……　飛行機の乗客リストに瀧原俊平の名前はあったが、それを見た人間がおらん。しかも、あちらさんは瀧原俊平の顔すら知らんかったからな」

それを誰がしたのかは言わずとも拓蔵と瑠璃は理解できた。

「それをあなたたち警察は問い質さなかったんですか？」

「閻魔さまに言われると、ちっとばっかしキツいか、金で口を防ぐくらい動作もないじゃろ？　地獄の沙汰もなんとやらというしな？」

そう云われ、瑠璃は顔を歪めた。

死んだ人間は脱衣婆に衣服を剥ぎ取られ、その重みから罪の重さを計られる。――が、六文銭というものを棺の中に入れ、それをもって三途の川に来た死者は衣服を剥ぎ取られないと言われている。

――そのことから「地獄の沙汰も金次第」という言葉が出来たとされている。

今は火葬が主なため、金属を入れることが問題視されているので、六文銭を描いた札を棺に入れて、燃やしている。

「いや失敬。あれは死者を思ってしておることじゃが、こればかりは真実を隠蔽しておるからのう」

「それで阿弥陀警部を上が他の事件に回したということか？」

拓蔵の言葉に湖西主任は頷いた。

「あいつはへんなところに気がつくからのう、昔のお前さんと佐々木刑事みたいじゃと思っておるよ」

実を言うと、拓蔵が刑事部から公安部に異動させられたときも似

たような理由だった。

公安部は基本秘密裏に動く部署であるため、刑事部に所属している阿弥陀警部は会ったことがなかったのだ。

（今回の事件……　大宮巡査には荷が重過ぎたか）と拓蔵は申し訳ないといった複雑な表情を浮かべたが、瑠璃が大宮巡査が決めたこと、自分たちはただそれを見守るだけと悟らせた。

陸・価値

「うわっ……」

皐月がその場景に唖然とする。コテージの壁には暖炉が設置されており、そこから大凡2米（メートル）ほど離れて、背の低い長テーブルが置かれている。

それを挟むように大きなソファーがあり、そこに瀧原希空が座っている。その膝には、飼い犬のトーマがチョコンと陣取っていた。

しかし皐月が驚いているのはそこではなく、テーブルの上に置かれた色とりどりの料理にだった。

元々は現場を調べている警官たちに対しての賄（まかな）いである。

因みに料理は愛美本人が作るのだが、疎らとはいえ警官8人という大所帯である。そのため人手が足りないと判断し、先日手伝いを呼んだと云う。

つまり、その中に皐月と弥生が入ってきたところで、特に大差はないと滝瀬愛美から説明された。

「さ、遠慮なく食べてください」

そう滝瀬愛美に云われ、警官たちは我先にと料理をつまんでいった。テーブルの上に置かれた料理は、どれもバイキング形式のレストランのように大皿に盛られており、各々（おのおの）が自由に自分のお皿に盛れるというものだった。

そんな中、弥生はコテージの中を見渡していた。

「オーナーの姿がないわね？」

ちょうど横にいた大宮巡査も一緒になって周りを見渡した。

「奥さんにちょっと訊いてみようか？」

大宮巡査はキッチンの方にいる滝瀬愛美に尋ねに行った。そして

3分ほどで戻ってくる。

「オーナーは部屋で休まれているそうだよ」

そう云うが、大宮巡査は首を傾げている。

「コテージの一階って、このリビングと厨（くりや）、奥の方にある浴場と倉庫以外で人が入れる場所は？」

「いや、一応中を全部見せてもらっているけど、一階で人が寝床にするところといったら、このリビング以外はないよ」

つまりオーナーは2階で休んでいるということになるが――

「可笑しい……よね？　僕たちはオーナーを見ていない」

大宮巡査がそう云うや、弥生は頷いた。

弥生は大宮巡査が部屋に訪ねに来るまで、皐月と一緒にいた。

そして大宮巡査が部屋に来た時、トーマが部屋の中に紛れ込み、遊火をジッと眺めていた。その間、部屋のドアは開いたままになっており、その近くには大宮巡査が立っている。

その大宮巡査が気付いてないということは、耳が悪い皐月に尋ねる事自体、はっきり言って、お門違いである。

大宮巡査は二階に上がる時、廊下には誰もいなかったと説明した。

「大宮巡査たちはどこで休んでるんですか？」

いくら白骨死体が発見された現場だと言っても、すでに日は暮れている。それどころか調べたら、さっさと帰って欲しいのが、地主の本音である。

「一度部署に戻って、報告書を書いてるよ」

つまりこの食事会が終わると、警官たちは山から下（お）りているということになる。

弥生と大宮巡査が話している間、皐月は瀧原希空の隣で食事を取

っていた。皐月は左利きであるため、箸を持つ手がぶつからないよう、瀧原希空から５０糎ほど間を空けている。その間にはトーマが、文字通りおとなしく寝転んでいた。

瀧原希空の皿には、少量の料理が盛られている。目が見えない彼女を配慮してのことだろうが、ものの数分で平らげられるほどしかない。

そのため、彼女はお手伝いに「どの料理はどこにあるのか」を尋ねながら、迷い箸になりつつも、料理を啄んでいた。

そんな瀧原希空を見ながら、皐月は（私の思い違いかな？）と自問していた。

「あ、皐月さん。そこにある料理凄く美味しいんですよ。早く食べないと無くなりますよ」

瀧原希空が指先でそれを示す。そこにはマカロニサラダがあり、よほど美味しいのだろう。すでにボールのそこが見えようとしていた。

「へぇ……　そんなに美味しんだ――」

当たり前に話しかけられたためか、皐月は一瞬気が付かなかった。

「の、希空さん？　なんで私だってわかったの？」

料理は動かされていないため、どこに何があるのかはわかる。

しかし、隣にいる人間が自ら自己紹介してなければ、誰なのかはわからない。

目が見えない人は相手の口調や話し方から、それが誰なのかを判断しているものであるが、皐月は勿論、弥生すら瀧原希空と話していない。

――名前は大宮巡査が説明していたとしても、それが誰の事なのかわからないのだ。

だからこそ、コテージに入ってきた瀧原希空を見た時、皐月が感じた違和感が説明出来る。

あの時、瀧原希空は客人が来たのかと尋ねている。――景色が見えてもいない彼女にそんな質問自体が出来ないのだ。

「えっと……　あっ――」

瀧原希空は不味いと云わんばかりに表情を歪めた。皐月は瀧原希空を思ってか、彼女の手を掴み、少し場を外した。

――というよりも、耳が悪い皐月が内緒話が出来ないだけなのだが……　瀧原希空はそれに従った。

皐月は自分と弥生が泊まる部屋に入るや、ベッドに瀧原希空を座らせた。

瀧原希空は首を右往左往するように辺りを警戒している。

「大丈夫。この部屋には私とトーマしかいないから――」

皐月の言葉通り、部屋に入ってきたトーマが瀧原希空を見つけるや、その膝に座った。

よほど居心地がいいのだろう。食事会の時も、殆ど動かなかったし、吠えもしなかった。

「希空さん。正直に云って……　本当は目が見えてるんでしょ？」

皐月がそう尋ねたが、瀧原希空は首を横に振った。

「それじゃ、どうして私が皐月だってわかったの？　私はあなたと一度も話していない」

「そ、それは……　あなたたちがここに来ることを、大宮巡査がお祖父ちゃんたちと話してましたから――」

「ええ。それに関しては目が見えていようがいまいが、知ることができる。――だけど、それが誰なのか、当の本人が自ら言わない限り、知ることはできない」

瀧原希空は視線を逸した。その仕草こそ、瀧原希空は見えていることを自ら証明した。

「――やっぱり見えてる」

「み、見えてなんて……」と反論するが、瀧原希空の表情が徐々に曇っていく。

「まぁ、どうしてそんな嘘を言うのかに関しては追求はしないけど、発見された白骨死体に関しては聞かせてもらうわよ？」

皐月がそう云うや、瀧原希空はスッと立ち上がり、窓と扉を閉め切った。

「皐月さんの言うとおり、私は目が見えてます」

ジッと皐月の目を見ながら、瀧原希空は口を開けた。

「多分、何人かの人は気づいてると思います。――ダメですね、全然演技が出来てない」

「どうして盲者（もうしゃ）の真似事なんてしてたの？」

皐月がそう尋ねると、瀧原希空はトーマを撫でながら、「そのほうが便利だったからです……」と申し訳なさそうに言う。

「発見された白骨死体は……　４年前、祖父に殺された、私の父なんです」

「――えっ？」

「そもそも父が殺されたこと自体は知っていました。その犯人が誰なのかも……　だけど、その遺体が発見されなかった」

瀧原希空はずっと探していたのだ。祖父母に目が見えていないとバレバレの嘘を吐（つ）きながらも、泳がせられていることに気付いていながらも必死に探していた。

「腐っていない死体を地中に埋めた場合、白骨死体になるには７年から８年掛かってしまう。だけど地上ならば早くて一週間で済む。あなたの言ってることが本当だとすれば、瀧瀬晋平はあなたのお父

さんの遺体を白骨にしたあと、どこかに埋めた……」
そしてそれを発見したのは、最も発見して欲しくない人物である。

「それにしても妙よね？　どうしてそんなバレバレな嘘を、４年間もほったらかしにしてたのかしら？」
確かに妙である。瀧瀬夫妻にとって、瀧原希空は自分たちの首を絞めるほどの邪魔な存在にほかならない。

「それは恐らく……　私だけが知っている暗証番号を知りたいからだと思います」
「暗証番号？　もしかして遺産ってこと？」
そう尋ねたが、瀧原希空は首を横に振った。

「お金ではないです。ううん、お金と言えばお金ですが、私からしてみたらまったく価値のないもの」
「あなたからしたら、まったく価値のないもの？」
お金ならば誰にでも価値はある。が、暗証番号を娘に教えるほどに大切なものである。

「今はなんの役にも立っていないようで、紙切れ同然なんです」
「それって、もしかして――株券とか？」
皐月がそう尋ねると、瀧原希空は小さく頷いた。
確かに金と言えば金なのだが、お金よりも両親の方がいいと思っている彼女からしてみれば、まったく価値のないものである。

また二千九年一月五日から株券は完全電子化されているため、紙の株券は意味をなくしている。が、名義が本人であれば換金できる。
しかし元々の持ち主である瀧原俊平がすでに死んでいるため、やはり紙でしかない。

「どう弥生姉さん？　何か感じる？」
皐月は部屋に弥生と大宮巡査を呼び、弥生に瀧原希空を見せた。
「ええ。うっすらとだけど、彼女から人とは違う気配を感じる」
弥生はそう云いながら、少しばかり怯えている瀧原希空を見やった。
「大丈夫よ。四年間、稚拙な嘘ですら誰も気にしなかった理由が分かったから――」
そう云われ、瀧原希空は首を傾げた。
「彼女に取り憑いているのは『以津真天（いつまで）』という妖なんだけど、それが誰なのか、娘であるあなたならわかるはずよ？」
「――お、お父さん……ですか？」
そうなのかははっきり言えないが、そう思ってもいいだろう。と弥生は説明した。
「以津真天は死体遺棄によって発見されない亡者の成りの果て。『いつまで、いつまで』といって、亡骸を見つけて欲しいと願っている妖怪なの。だけど人々は恐れをなして、探そうとしないから、ずっと鳴いている」
「でも、白骨死体が希空さんの父親なら、発見された時点でもう成仏してもいいんじゃないかな？」
大宮巡査の言うとおり、未だに娘に取り付いている以津真天の説明が出来ない。
「葉月が写真から何も声が聞こえなかったって言っていたの覚えてます？」
皐月がそう大宮巡査に尋ねる。

「葉月の力は死んだ霊の声が聞けること。だけどそれは写真に写っていればの話なんです」
「それじゃ、希空さんや僕たちが発見したときには、既に成仏していたということかい？」
それを聞いて、瀧原希空がワナワナと震えながら、
「ちょっと待ってください！　トーマが最初に発見したとき、遺体が埋められた地面には草が生えていて、誰かが掘り起こしたのなら、その痕跡が残っているはずですよ？」
「希空さんの云う通りだ！　僕たち警察が来たときには、既に白骨は露にされていたけど、最後まで掘り起こしたのは僕たちが来てから！　それより前にそこに遺体があることを知っているのはそれを埋めた本人……　瀧瀬夫妻しかいないじゃないか？」
大宮巡査と瀧原希空の言葉をジッと聞いていた皐月が二人を見つめた。

大宮巡査と瀧原希空は言葉を止めた。その双眸が先ほどと雰囲気が違っていたからである。
「出来るのよ。あの馬鹿が持っている力なら、トーマと同じことが――」
「……トーマと？」
瀧原希空は膝下に座っているトーマを見やった。
「でも、トーマは骨の臭いで遺体がどこにあるのか知ったんだと思うんですが、そんなことが人間に出来るんですか？」
「あなたの言う通り、普通の人間には出来ない。犬の嗅覚は人間の数千倍だからね。――でもあいつには出来るのよ」
皐月は握り拳を作り、辺りを見渡した。

瀧原希空の膝で眠っていたトーマが突然起き上がり、喉を鳴らした。
「ど、どうしたの？」

瀧原希空の驚きからして、トーマがここまで歯を剥き出しにするほど警戒している姿を見るのははじめてのことだった。

「き、君は？　何時の間に？」

大宮巡査が窓を見やり、驚いた。

そこには窓縁に座る少女が部屋を見ている。だがそれではなく、窓は皐月が閉め切っていた。が、近くにいたはずの大宮巡査が気付かなかったのだ。

「皐月……　あなたのつまらない詭弁は終わったの？」

少女はジッと皐月を見ながら、平然とした表情で云った。

「信乃……！　もうあんたの役目は終わってるんでしょ？　もういいじゃないの、父親が妖怪になっても、娘を思ってやることがどうしてそんなに甚だしいのよ？」

皐月は憤りを露わにし、少女に食ってかかる。

――が、そんな皐月を見ながらも、少女……信乃はなおも平然としている。

「大宮巡査と言いましたね？　警察が犯人を捕まえるのに理由がいりますか？」

突然そう訊かれ、大宮巡査は言葉を返せなかった。

「殺人を犯せば殺人犯。盗みを働けば強盗。嘘を広めれば詐欺となり、人を脅せば恐喝……　なんにせよ、罪を冒した人間を罰すること自体に理由なんていらないんじゃないんですか？」

「それじゃぁ……　希空さんのお父さんを成仏させたことも理由なんてないって言いたいわけ？」

皐月がそう言うと、信乃は小さく頷いた。

「巫山戯ないでぇ！　あんた、葉月の力がなんなのか、本来の役割はなんなのかを知ってるでしょ？」

「知ってるわよ？　だからって……　居りゃしない人間（そんざい）に、惑わされるようじゃ、人間はそれこそ塵芥（ちりあくた）でしょ？」
「あんた……　お寺に住んでるくせに、仏を侮辱するわけ？」
皐月は傍らに持っていた竹刀を手に取り構えた。

「信乃ぉっ！　あんたがどうして妖怪を怨んでるのか知ってる！　でもね、もういいでしょ？　今回の事件の犯人は、希空さんのお父さんじゃない！　祖父である瀧瀬夫妻なのよ？」
「ええ。知ってるし……　もうそれは終わってる――」
その言葉を聞くや、皐月は唖然とする。
それとほぼ同時に風が靡（なび）くや、信乃は窓縁からおり、何かを通した。

「あ、遊火？」
「や、弥生さまぁ、大変です？　コテージの一階が……」
遊火と会話している弥生の表情が尋常じゃない。
「信乃……　あんた何したの？」
「すこし眠ってもらっているだけ……　大丈夫よ峰打ちだし、私が殺したいのは――妖怪だけだから……」
「だからって、無差別に退治することは執行人がすることじゃないでしょ？　あんたのやってることは、残酷卑劣な快楽殺人者と一緒じゃない！」
皐月は志乃を睨みつける。

「わかってないわね、皐月……　私をそんな気違いどもと一緒にしないで……　私が殺しているのは妖怪だけ、存在してはならないものだけ――」
そう云うや、信乃はどこから出したのか、一刀を振り下ろした。
――が、金属同士がぶつかる音だけが響きわたった。

「さ、皐月さま……」
遊火が呆然とする。
「あんた……　遊火が近づいてたの気付いて、態々窓から退いたでしょ？」
皐月は既に真剣へと変わった二本の刀を×印にし、信乃の刀を受け止めた。皐月のうしろには遊火がおり、突然のことにただただ怯えている。

「あなた、確か遊火が見えないんじゃなかったっけ？」
「ええ、気配はわかるけど、姿は見えないし、声も聞こえりゃしない……　でもね、あの子がどんな顔なのか、どんな声なのか……いつか見てあげたいって思うのが家族でしょ？」
皐月は信乃の刀を振り払い、横一文字に切りかかった。――が、スレスレのところでうしろに飛ばれ、切っ先は当たらなかった。

「変なことを言うわね？　家族……？　妖怪を――？」
「遊火はね、私たちと一緒に暮らしてるようなものなの。いつでも離れることができるのに、ずっと律儀に居てくれてる……　そんなあの子を家族だって思うのが悪い？」
その言葉を聞くや、遊火は弥生を見やった。少しばかり涙ぐんでいる彼女を見てか、弥生は小さく微笑んだ。

「理解出来ないわ……　どうしてこう滅ぼせばいいだけの存在に、そこまで優しく出来るのよ？」
「少なくとも全部に優しくなんてないわよ？　それに――妖怪も人間と一緒でしょ？」
「違う！　あいつらは心がない！　心が存在しない」
そう信乃が言った時だった。

「キャンキャン」とトーマが吠えるや、信乃の右足に噛み付いた。
「……っ！　こんのぉ」
信乃はトーマを振り払い、刀で切り殺そうとするが――
「……っ！」
一瞬寂しそうな表情を浮かべ、刀を鞘に戻した。

「興醒めよ……」と小さく呟くや、鈴の音を鳴らすと、信乃は姿を消した。
――開け放たれた窓は、ガタガタと寂しそうに音を鳴らしていた。

翌朝、応援の警官らがコテージに到着し、瀧瀬夫妻を死体遺棄、および会社の金を横領していたことについて問い質すため、任意同行が求めた。

後日、取り調べによって、滝瀬夫妻は発見された白骨死体を埋めたことを認めた。

犯行理由は瀧瀬晋平が会社の金を横領していたことや、金を使って犯罪をさせていたこと。自分の犯罪を金で隠蔽したことなどを、瀧原俊平が警察に密告していたためであった。

当然今まで通り、金でものをいわせればいいのだが、瀧原俊平が密告していた警官が他でもない、阿弥陀警部だったのだ。

だからこそ、今回の事件において、阿弥陀警部が捜査班から外されたのはそういう理由があり、阿弥陀警部が多少焦っていたのもこれがあったからである。

瀧瀬夫妻は彼らを見ている瀧原希空に対して、「こんのぉ裏切りもんめがぁ！」と喚き散らしたが、当の希空はまったく聞く耳を持っていなかった。

「希空さんはこれからどうなるんですか？」

「話を聞くと、父親側の両親が引き取ってくれるそうだ」

それを聞いて、皐月はホッと胸を撫で下ろした。

昨晩、信乃が去った後、皐月は瀧原希空にこれからどうするのかを尋ねると、殺された瀧原俊平の両親が、北海道で農業をやっているので、そこを訪ねようと云っていたのだ。

「それと今回の事件、やはり組織は秘密裏にするそうじゃよ？」
「――爺様、どうしてここに？」
パトカーの助手席から降りてきた拓蔵を見るや、皐月と弥生は呆然とする。
「ちょっと、知り合いを呼んだのでな。では和尚さん、よろしくお願いします」
拓蔵がそう云うや、後部座席から僧侶がおりてきた。

それを見るや皐月は複雑な表情を浮かべた。
「――信乃のお爺さん？」
「孫が大変迷惑をかけたようじゃな。まったく、あの子の思いを知っておると、戦いにくいじゃろ？　のう、皐月ちゃんや」
そう云われ、皐月は頭を垂れた。

鳴狗寺の和尚は瀧原希空を見やり、会釈する。
「瀧原希空さんじゃったな。あんたが望めば、そのままにしておくが、どうする？」
鳴狗寺の和尚は瀧原希空に取り憑いているのが、彼女の父親だということを、皐月たちから事前に聞かされている。

本来、守護霊が先祖であることが殆どのため、成仏はしないのである。しかし、それが妖怪ともなれば、たとえ父親でも成仏させなければいけない。

「いえ、父をこのまま天国まで成仏させてあげてください」
はっきりと瀧原希空は云った。
「ええんじゃな？」と鳴狗寺の和尚は確認を取ると、瀧原希空は迷いのない表情を浮かべ、頷いた。

――お祓いはほんの数分で終わった。瀧原希空には、特別なんの変貌もなく、体の異変もなかった。

「それにしても、どうしてあの時、あの人はトーマを切らなかったんでしょうか？」

昨晩、信乃に飛びかかったトーマを切り殺そうとしていた信乃が躊躇（ためら）っていたことが気になっていた希空が、皐月に尋ねる。

「――似てたからよ。あなたを守ろうと、無茶なことをしたトーマがね……」

そう云われ、瀧原希空は首を傾げた。

「さてと、事件も無事に終わったし、私たちは帰ろうかしらね？」

弥生がそう云うや、皐月は頷いた。

「なんじゃ？　もう帰るのか？　すこしばかりのんびりしてもいいんじゃないのか？」

拓蔵が不満そうに言う。

「爺様？　そもそも私たちは事件の手伝いに来てたのよ？　終わったら帰るのが道理ってものでしょ？」

皐月がそう言うと、弥生も同意見だった。田原医師のところにあずけている葉月のことも心配だった。

「いやなぁ、ここ最近、腰痛が酷くてのぉ……　調べてみたら、このコテージから少し離れたところに、それに効く秘湯があると聞いてな……　しかも女湯の方は、お肌が肌理（きめ）細かくなるとか――」

それを聞くや、皐月と弥生は互いを見やった。

「そんなところがあったの？」

「え、ええ……　温泉はありますけど――」

瀧原希空にそう説明され、弥生は地面においていたバックから着替え一式を取り出す。

「それ何処？　案内して！」
「や、弥生姉さん？」
皐月は弥生を見ながら、唖然とする。というよりも、むしろ引いている。
「皐月！　女の肌ってのはねぇ、いつ見窄らしくなるかわからないのよ？」
弥生は瀧原希空に温泉までの道順を教えてもらい、一目散に走っていった。

「皐月さまはどうするのかな？」
遊火が思っていたことを口にした時だった。
「そうね……　私は別にいいかな？　耳が聞こえるようになるっていう効能があるなら、話は……」
皐月がまるで聞こえていたかのように返答したため、遊火と皐月は一瞬その違和感に気付かなかった。

「い、今……　誰か私に話しかけなかった？」
皐月にそう訊ねられ、拓蔵と大宮巡査、そして瀧原希空は首を横に振った。
「それじゃ……　今のって――」
「遊火じゃろぉぅなぁ」と拓蔵は笑みを浮かべた。

（そっか……　あれが遊火の声だったんだ）
皐月は遊火の気配を探し、そちらを見やった。姿は見えず、声を聞くこともできない。遊火は色々と言葉を発しているが、皐月には微塵も聞こえてはいない。聞こえたのはほんの一瞬。それこそ無意識の内でだった。

だけど何時の日か、二人でいろんなことが話せるようになる事を

皐月は願っていた。

捌・蟠（後書き）

第七話終了です。

壱・賽の河原

「お嬢さん……　どうしたんだい？」

雨の中、おもちゃ屋の前で、男が女の子に声をかけている。

男は見た目からして、２０代から３０代くらいといったところか、スーツを着ており、髪型が七三分けという、典型的なサラリーマンに見える。

女の子は年端（としは）もいかないほどに幼く、どこかあどけない雰囲気がある。

可愛らしいうさぎの絵がプリントされた赤い靴を履いており、手には折り畳まれた傘を持っている。

「あのね？　お母さん待ってるの……」

女の子は男性の問いかけに、素直に答えた。

「そうかい。実はね――小父（おじ）さん、君のお母さんから頼まれてるんだ……」

そう云われ、女の子は首をひねる。それを見て、男性は少しばかり苦笑いを浮かべた。

「ははは、大丈夫だよ。小父さんは、君のお母さんと知り合いだからね。ちょっと遅くなるって云ってたから、よかったら小父さんの家で――」

男性が言い切る前に、女の子は駆け出した。

女の子は母親から強く言い聴かせられていたのだ。

『知らない人の言うことは絶対に信じてはいけない』と……

男性は女の子が自分から逃げる姿を見て、当然そう出るだろうと、余裕のある表情と同時に、歪んだ笑みを浮かべた。

「ダメだよ？　子供は大人の言うことをきかないと」
あくまで優しい口調で女の子を諭していく。
――しかし、女の子は母親との約束を頑なに守ろうと、男性から逃げようとする。
「駄目だよ……　子供が大人に勝てるわけがないんだからね？」
男性は一瞬にして、女の子に追いつき、背後から抱きかかえた。
当然のごとく、女の子は男の腕の中で、ジタバタと暴れだす。
「――た、たすけ……」
女の子が小さく悲鳴を挙げた。
「大人しくしてれば……」
男性がそう口にし、女の子の耳元で何かを囁いた。
「――――」
それを聞くや、女の子は言葉を発することが出来なかった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

しとしとと雨が降り頻り、商店街の人通りも疎らになっていた。
「結華っ！　結華っ！」
女性が雨の中だというのに、傘もささず、辺り構わずに叫んでいる。
「由梨香っ！　結華は見つかったか？」
路地裏の方から男性が女性に声を掛ける。
「あ、あなた……　いえ、まだ――」
女性――由梨香は、夫である輝昭に状況を説明する。
「あぁ……　あの子に！　あの子にもしものことがあったら」
由梨香は跪き、泣きじゃくる。
「バカっ！　変なことを言うな！　大丈夫だ、結華はきっと無事だ」
輝昭はそっと由梨香の肩を抱きしめる。
「これだけ探しても見つからないんだ。警察に連絡しよう」

「そ、それだけは……　まだ、誘拐と決まったわけでは――」
照明の言葉に、由梨香は拒絶するように云う。
「た、確かに――結華が家から出てから、まだ2時間しか経っていない。あの子の事だ、お前との約束を忘れて、どこかで遊び呆けているんだろう」
しかし、そんな考えは夢幻泡影（むげんほうよう）そのものである。

少女――結華が家を出てから、ボツボツと雨が降り始めていた。
由梨香は結華に「おもちゃ屋の前で待っているように」と言っていたのだ。その時に傘も持たせている。
結華の誕生日だったので、おもちゃ屋で何か買ってあげようと思っていたのだ。
先に行かせたのも、由梨香の仕事が滞っていたという理由だった。
由梨香はどうして、一人で行かせたのかと自分を呪う。

それから午前様になるまで、二人は衰弱してもなお、結華を探したが、とうとう見付からず、渋々と家へと戻った。

「あら？」
由梨香が何かに気付く。家の前にポストがあり、その中に封筒のようなものが入っていた。
ポストの蓋を開け、封筒を出す。異様な形に膨らんでおり、裏側が濡れている。

「――どうした？」と輝昭が尋ねる。
「あなた。これが郵便受けに」
由梨香は封筒を輝昭に見せた。
「差出人はなしか……っ！」
由梨香の手から、封筒を半ば強引に奪い取った輝昭は、封筒を破

った。
「ど、どうしたんですか？　あなた……」
輝昭の行動に、由梨香は目を疑った。
「由梨香……　警察に連絡だっ！」
「――い、一体なにが入って……」
由梨香は輝昭が手に持っているものを見やった。

「あ、ああ、あああああ……」
ガタガタと歯を震わせ、その場にへたれ込む。

輝昭が手に持っていたのは、泥で汚れた靴であった。
そして、汚れた部分には、うさぎの絵が隠れていた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

翌朝、通報を受けた警察官が、輝昭と由梨香から、何時頃から結華が居なくなったのかを尋ねていた。
「娘を最後に見たのは、昨日の昼です。あの子の誕生日でしたから、おもちゃを買ってあげようと……　ただ、その時、少しばかり仕事が滞(とどこお)っていまして、先に行くようにと……」
「失礼ですか、奥さんは何か仕事をしてるんですか？」
「妻は会計事務の仕事をしていてね。その締切があったんだ」
なるほど……と、警官はメモをしていく。確かに会計の仕事ならば、家でもできる。

「これが郵便受けに入っていた靴ですか？」
西戸崎刑事にそう訊かれ、由梨香と輝昭は頷いた。
「少しお借りできますかね？　これも大事な証拠品ですから」
「ええ。あの子が助かるのなら……」
西戸崎刑事はそれを聞くや、靴をビニールの中に入れた。

「一応鑑識に持っていって、泥の成分を調べといてくれ」
そう云われ、一緒に来ていた鑑識課の警官が、足早に渡された靴を持っていった。
泥の成分や性質から、どこの砂なのかを調べるためである。

「大丈夫ですよ。お子さんはきっと私たちが見つけます」
西戸崎刑事はそう由梨香と輝昭に云った。力強いその言葉に、夫婦は不安と安堵が混ざった、複雑な表情を浮かべた。

――だが、それが果たせぬ約束だったと西戸崎刑事が知るのに、そう時間は掛からなかった。

壱・賽の河原（後書き）

第八話スタートです。今回は少しばかり色合いが違いますよ。

弐・旧校舎

――誘拐事件が起きてから、一両日経った昼下がりである。

「葉月ちゃんっ！　そっち行ったよぉっ！」

学校の昼休み、黒川三姉妹の三女である葉月は、友人たちと校庭でミニサッカーをしていた。

「黒川っ！　こっちこっち！」

素通りする男の子――大山ににそう云われ、葉月は素直にパスをしようとした時だった。

「甘いぜぇ、大山っ！」

「くそぉっ！　前野っ……」

大山は、大柄な体型をした前野から、道を遮(さえぎ)られてしまう。そのせいで葉月はパスが出せないでいる。

「葉月ちゃん。こっち……」

うしろから声が聞こえ、葉月は踵(かかと)でボールを蹴った。

「ナイスパスっ！」

ボールを受け取った市宮(いちみや)は、加速するようにドリブルし、そのままシュートするや、ボールはゴールネットを貫いた。

「すっげぇっ！　さすが市宮」

男の子たちがボケ―とした表情で、先ほどゴールを決めた市宮を見ていた。

「ありがとう。よかったよ葉月ちゃん」

市宮にそう云われ、葉月は笑みを浮かべた。

そうこうしていく内に、昼休みの終わりを告げるチャイムが校舎に備えられているスピーカーから校庭へと鳴り響き、試合は市宮が決めたゴールだけとなった。

「今日の片付け！　最初はグゥ―っ！」
『じゃん・けん・ぽん！』
子供たちの声が響く。ボールを片付ける役を選ぶじゃんけんである。

「今日は葉月ちゃんかぁ……」
「黒川、急げよぉ！」
そう云いながら、友人たちは急いで教室へと戻っていく。
実を言うと葉月はじゃんけんが弱い。自分を置いていく友人たちが去っていくのを見ながら、ボールを片付けようと、ボールが置いてあるうしろを振り向いた時だった。

「あれ？」と、葉月は小首を傾げる。
ボーン、ボーンっと、ボールを弾く音が校庭に響きわたる。
そこには、おかっぱ頭で、黄色のカッターシャツに赤いもんぺを着た女の子が、ボールで遊んでいた。

葉月はその女の子を見たことがなく、また自分よりも小さく感じたことから、下の学年の子だと最初は思った。
「あ、あのね……　チャイムが鳴ったから、ボール片付けないと」
女の子にそう言いながら近付くや、葉月は違和感を感じた。
今は昼である。昼ということは、極々当たり前であるが日が出ている。――にも拘らず、女の子の足元には、本来伸びているはずのものがなかった。
「あ、あなた……誰なの？」
葉月がそう尋ねると、女の子はある方向を指差した。葉月はその指の先を一瞥する。

そこには古ぼけた校舎があり、今にも壊れそうなほどにボロい。
「――旧校舎？　あそこがどうかし……」

葉月が女の子に尋ねようと、もう一度振り向いた時だった。
ボールが落ちた音がし、そのままボールは転がっていく。
――そして、そこにいたはずの女の子の姿はなかった。

「黒川さん？」
ボールを手に取り、呆然としている葉月を、うしろから先生らしき女性が声を掛ける。メガネをかけてはいるが、少し幼い雰囲気がある。
「鶴見先生？　さっき女の子見なかった？」
「いいえ？　見てませんよ。さ、みんな心配してるから、早くボールを片付けて――」
葉月は鶴見先生にそう云われ、倉庫にボールを片付けに行く。

「先生、旧校舎って、誰も入れなかったよね？」
「ええ。もう入れなくなって結構経つのよ。でも、それがどうかしたの？」
そう聞き返され、葉月は女の子のことを素直に云った方がいいだろうかと考え直した。
「ううん。ちょっと気になったから――」と笑顔で云った。
鶴見先生はそれ以上何もきかなかった。

（あの女の子、どうして旧校舎なんか指差したんだろ……　それに、あの子もしかしたら）
葉月は女の子の足元に影《，》が《，》な《，》い《，》ことに気が付いていた。

葉月は三姉妹の中で、人には見えないものが一番濃く視える。
特に女の子が指差した旧校舎の方を見れば、白い靄や、赤黒い手、窓に映る人の顔……　それら全てが旧校舎に住み憑いている地縛霊であることを知っており、また、そこにいる霊たちも、自分たちが

葉月に見えていることを知っている。

――にも拘らず、校庭に現れたおかっぱ頭の女の子に関して、葉月は何も知らなかった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「葉月ちゃん。一緒に帰ろぉ？」

市宮が葉月を誘う。彼女は既にランドセルを背負っていた。

「うん。美耶（みや）ちゃん。一緒に帰ろ……」

葉月は帰り支度を早々（はやばや）と済ませ、市宮と一緒に帰ろうとした時だった。

『聞いた？　この前、近所で誘拐事件があったって……』

上級生の女子ふたりが、葉月のクラスの前を通りかかったさい、誘拐事件があったという噂話をしていたのが、葉月の耳に入った。

『聞いた聞いた、まだ女の子見つかってないんでしょ？』

他人事のようにそう話す。実際に他人事なのだが……

「怖いよねぇ。私たちも気を付けないとね？」

市宮にそう云われ、葉月は頷いた。

校庭に出ると、旧校舎の方で、大山と前野が何かをしているのが、葉月と市宮の目に入った。

「おい、止めようぜ？」

「ばぁか、幽霊なんているわけねぇだろ？」

「で、でもさぁ？　ここって出るって噂だぜ？」

「それを今から確かめるんだろうが？」

向う見ずなのは大山であり、見かけによらず、怯えているのは前野である。

「ちょっと、何やってるの？」
市宮がコソコソと話をしている大山と前野に声を掛けるや、二人はビクッと、硬直するように背筋を伸ばした。
「……って、なんだよ？　市宮と黒川かぁ？」
声をかけた相手がわかるや、大山は強がりを見せた。
「で？　何やってるの、こんなところで」
「へへ、それは言えねぇなぁ……　なんせ俺たちはこれから……」
「ちょ、ちょっと待って？　俺たちって、俺も入ってるわけ？」
大山のセリフに前野がツッコミを入れた。確かに『俺たち』だと複数系である。つまりは前野も含まれていると言うことだ。
「なんだよぉ？　怖気付いたのか？　お前、見かけによらず臆病だよな？」
「しょうがねぇだろ？　人間怖いものの一つや二つ――」
大山と前野の会話を見ながら、葉月はジッと旧校舎を見ていた。
入口の両側には窓があるのだが、サッシが錆びており、開けることが出来ない。使わなくなってから、何も手をつけていないからである。
その窓から子供がジッとこちらを見ている。
「どうかしたの？　葉月ちゃん」
「えっ？　ううん、何でもない……」
市宮に声をかけられ、葉月は大山たちの方に振り返った。
旧校舎に住み憑いている地縛霊たちが、特別悪い幽霊ではないことを葉月は知っている。
先ほどからこちらを見ている子供が葉月を見るや、ニコッと微笑んでいた。
「ダメだよ。あそこって怖いのいっぱいいるって、爺様が言ってた」
葉月の言葉に大山は目を輝かせる。予想していない反応だったため、葉月は首を傾げた。

「お前んとこって、たしか神社だったよなぁ？　ってことは、あそこに何がいるっていう証拠じゃないか？」
大山の頭の中では、神社とお寺が混同していた。

「よし、黒川！　お前リーダーなぁ！」
そう云われ、葉月は目を点にした。
「ちょっと、大山君？　どうして葉月ちゃんが一緒になるわけ？」
「なんだよぉ？　嫌なら来なきゃいいだろ？」
大山と市宮が口喧嘩をしはじめた時だった。

旧校舎の方から、何かが割れる音がし、全員がそちらを見やった。
「お、おい……　だ、誰かいるんじゃないのか？」
前野が怯えた声で云う。大山と市宮も少しばかり怯えた表情を浮かべた。
そんな中、一人葉月だけは、旧校舎の窓に映る子供の表情を見ていた。

窓に映る子供の霊も何が起きたのか、不思議そうな表情を浮かべている。それを見るや、葉月は首を傾げた。
旧校舎に住み憑いている地縛霊が自分たちを怖がらせ、帰らせようと、ポルターガイスト（勝手にものが動いたり、音がなる現象の事）を起こしたのではと、葉月は思っていた。
しかし、葉月の視野に映っている旧校舎の幽霊たちも不思議そうな顔をしていることから、それ以外の何かがしたということになる。

「よぉおおおし、こうなったら、何の音かみんなで確かめにいこうぜ？」
大山の一声に、前野と市宮が唖然とする。
「ちょっと、なんでそんな危険なことするわけ？」
そう市宮が止めたとしても、バカみたいに向う見ずな大山である。

人の話を聞かず、我先にと音がした方へと走っていった。
市宮と前野は慌ててその後を追っていく。

葉月は再び、窓に映る子供の霊や、周りで漂っている浮遊霊を見るが、やはり彼らの仕業ではないと察すると、先に行った三人の後を追った。

参・跫音

旧校舎の側面の壁両方に小さなドアがある。その横に窓があり、そこが割られていたため、先ほど葉月たちが聞いた音は窓が割れた音だと知る。

「ねぇ？　これって……足跡じゃない？」

市宮が地面を指差しながら、葉月たちに言った。

窓の下は先日の雨で泥濘（ぬかる）んだ跡があり、そこに足跡がつけられている。

「誰かが旧校舎に入っていったのかな？」

前野がそう言うが、葉月は何か可笑しいと泥濘を見ていた。

「黒川？　どうかしたのか？」

大山にそう言われ、葉月は大山の足元を指差した。

「俺の足がどうかしたのか？」

「ううん。雨が降ったのって、今日の朝までだったよね？　それだともう地面が乾いてて、泥濘なんて出来ないはずだよ？」

そう葉月が云うと、市宮が確認するように、泥濘に触れた。

「乾いてる……」

「ってことは、この足跡は雨が降っていた時に付いたってことか？」

しかしそうだとすれば、葉月たちが聞いた音はなんだったのかということになる。

「ま、まさか……幽霊の仕業？」

前野が青冷めた表情で云う。

「旧校舎の中だったりしてな？」

大山がそう云うが、火に油を注ぐようなものである。

前野が先程よりも酷い悲鳴を挙げた。

「大山君の云うとおりかもしれない」と葉月が云うや、
「ちょっとまてよ？　黒川までそんなこと言うのかよ？」
と前野にそう云われるが、葉月は首を横に振った。
「そうじゃないよ。靴の跡があるってことは、少なくとも、旧校舎に誰かが入ろうとしていた。それに、靴先が校舎の方を向いていて、その逆を向いたのがない」
葉月に云われ、三人は泥濘を見た。その言葉通り、自分たちの方を向いた足跡がなければ、周りに足跡すらない。
「それじゃ……　やっぱり誰かが校舎にいるってこと？」
市宮がそう云うや、葉月は小さく頷いた。
「窓を割って、鍵を開けたんだと思う」
「それじゃ、やっぱり誰かがいるってことか？」
大山は目を輝かせる。葉月と市宮はそれを見るや呆れた表情をする。

「ねぇ？　本当はどうなの？　旧校舎にいる幽霊の仕業とかじゃないの？」
そう市宮は葉月に耳打ちをする。
彼女は葉月が自分とは違う何かが視えていることを知っている。
「ううん。みんな不思議そうな顔してる。それに、もし彼らの仕業だったら、私たちを近付けないために、もっと怖いことしてるだろうし――」
葉月は一度、旧校舎にいる幽霊たちに悪戯をされたことがある。

幽霊たちは自分たちが見えていないと思ってのことであったが、葉月は最初から最後まで、視えていたことを黙ったまま、態とはまってやっていた。
その悪戯というのは、急に足元を掬(すく)われ転ばされたり、耳元で冷たい息を吐かれたり、後ろから押されたりなどである。

「おい二人とも、何話してるんだよ？」
前野に声をかけられ、葉月と市宮はそちらを見やるや、大山の姿がどこにも見当たらないことに気付く。
「あれ？　大山君は？」
葉月がそう尋ねると、前野は溜息を吐いた。
「あいつ……　旧校舎に入ってった」
葉月と市宮がその言葉を理解するのに、数秒ほど掛かった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「ただいま……」
皐月が学校から帰ってくるや、居間の方から阿弥陀警部と大宮巡査が出迎えるように出てくる。
「あれ、阿弥陀警部に大宮巡査？　なんか事件があったんですか？」
皐月がそう尋ねるや、大宮巡査が答えるように頷いた。

「ああ、皐月おかえり。葉月と一緒じゃないの？」
二階から降りてきた弥生にそう尋ねられたが、皐月は首を横に振った。
「ううん。一緒じゃないけど――　遊びに行ったんじゃないの？」
「それが……　爺様や、うちで働いている職員の人達にも訊いたんだけど、誰も葉月が家に帰ってきたのを見てないって」
皐月は手首に着けている腕時計を見た。――時刻は午後６時になろうとしている。
「葉月って、遊びに行く、行かない関係なしに、一回帰ってきて、宿題してから出かけるよね？」
「だから、こうやって心配してるんでしょ？　遊火にもお願いして探してもらってる」
そんな話を聞いているあいだ、皐月は玄関に葉月以外の靴がある

ことに気付いた。
「阿弥陀警部と大宮巡査以外に誰か来てるの？」
「ええ。ちょっと葉月さんに霊視してもらおうと思いましてね」
阿弥陀警部がそう言うと、皐月は首を傾げた。

（――西戸崎刑事？）
居間から出てきた西戸崎刑事に皐月は驚きを隠せないでいた。
（あれ？　でも、どうして西戸崎刑事が？　たしか浅葱の力で記憶を消去していたはずなんだけど――）
皐月は弥生に目をやったが、弥生もどうしてうちに来たのかという感じである。
「ここに不思議な力を持ってるってのがいるって聞いてなぁ。阿弥陀に紹介されたんだよ」
西戸崎刑事がそう説明する。それを聞くや、以前自分たちに会っていたことに関しての記憶は消えていることがわかるや、皐月と弥生は阿弥陀警部を睨んだ。

「あ、ははは……　まぁ、まだ死んだとは決まってないんですけどね？」
阿弥陀警部が不謹慎なことを云うや、西戸崎刑事が胸倉（むなぐら）を掴んだ。
「や、やめてください二人とも」
その二人を大宮巡査が止めに入った。

「誘拐事件？　それって、この前起きたやつですか？」
弥生が居間にお茶を持ってきて、全員に渡しながら、阿弥陀警部に尋ねた。
「察しの通り、先日起きたやつです。被害者は新村（みむら）結華さん、7歳。小学2年生……　母親とおもちゃを買う約束をし、おもちゃ屋の前で待っていたところを誘拐された」

阿弥陀警部が手にもっている手帳を読みながら、一件の詳細を伝える。
「でも、誘拐だと――」
皐月がそう言おうとするが、言葉を止めた。
「実は、誘拐された日の夜。被害者宅の郵便受けに泥が付いた靴が封筒に入れられた状態で投函されていたそうです。その靴が結華さんのものだと親御さんから証言があったようです」
実際は阿弥陀警部ではなく、西戸崎刑事が事件を担当しており、詳しい話はあまり聞いていない。
「土の成分は調べたのか？」
拓蔵がそう訊くと、大宮巡査がそれに答えた。

「靴に付着した泥を分析したところ、特殊な肥料と木片が付着していました」
「肥料と木片？」
皐月が鸚鵡返しするように聞き返す。
「肥料は特別なもので、オーダーメイドだそうです。製造しているところはまだわかりませんが、おそらく福祠北小学校で使用しているものだと――」
『ちょ、ちょっと待って？　それって……』
皐月と弥生が同時に同じことを言う。

「ええ。お二人が気付いた通り、福祠小は葉月さんが通っている学校です――」
「でも、そうだったとして、学校に犯人がいるとは……」
弥生は拓蔵を見遣った。
「そう言えば、爺様って、暇なときは庭いじりしてるよね？」
弥生はその後に（いつも暇そうだけど）とは云わず、心の中で呟いた。
「ああ。肥料と木片はよく使うが、木片はウッドチップといってな、

土壌に混ぜるときは、よく腐熟させてから使うんじゃよ」
「ええ。ですが、発見された靴に付着していた木片は腐ってはいなかった」
そうなると、肥料用と一緒に付着したか、その近くに細かい木片が散らばっていたかである。
「なぁ、阿弥陀。本当に大丈夫なのか？」
西戸崎刑事が阿弥陀警部に尋ねる。
「ええ。大丈夫ですよ。ただ、最悪な方も視野に入れといたほうがいいかもしれませんけどね」
阿弥陀警部が釘を刺すと、西戸崎刑事は皐月と弥生、拓蔵を見やった。
「阿弥陀警部、あんたの口調からして、電話は来てないということじゃな？」
拓蔵にそう言われ、阿弥陀警部は分が悪そうな表情を浮かべた。
「誘拐事件なら、身代金欲しさに電話するじゃろうが、犯人は突発的にやっている。誘拐はその連絡先を知っているということになるが……」
拓蔵も阿弥陀警部が考えている最悪の方を想像していた。
「もし誘拐だけなら――犯人は電話をするでしょ。非常用に連絡先を書いてますからね。名札の裏とかに……　ですが、誘拐されて三日ほど経ってもその連絡がない」
大宮巡査がそう言うと、拓蔵は少しばかり考え込んだ。
「泥は葉月が通っている学校が使用している肥料が混ざった土じゃったな……　仮にそうだったとして、どうして犯人は靴なんかを被害者宅の郵便受けに入れたんじゃ？」
確かに奇妙である。いくら誘拐したことを証明するものだったとしても、それを入れ、泥の成分等を調べられれば、自分の居場所や、少女を何処に連れ回しているのかがわかってしまう。

いうなれば、自分で自分の首を絞めているようなものだ。

「それがどうかしたんですか？」と西戸崎刑事が尋ねる。

「いや、ちょっとあの学校の七不思議を思い出したんでな」

それを聞くや、警官たちは首を傾げた。

「皐月、遊火が戻ってきたら、葉月を探しに行ってくれんかの？」

そう云われ、皐月は頷いた。――それと同時くらいに遊火が帰ってきた。

葉月の行きそうな場所全てを探したが、見付からなかったと、遊火は弥生と拓蔵に伝えた。

肆・七不思議

「ねぇ？　誰か懐中電灯持ってない？」
前野が窓から旧校舎へと先に入り、市宮と葉月を校舎へと入れ終わった後に市宮が云った。
外はまだ明るいのだが、旧校舎の窓は一部を除くと、殆どが壁うちされているため、光が入ってきていない。そのため、数米（メートル）先までしか見えなかった。
「それより大山を探そうぜ？」
「そうね、さっさと見つけて、こんなところ早く出ましょ？」
懐中電灯を諦めた市宮は、前野に同意し、ゆっくりと歩き出した。
（ねぇ？　あなたたちは知らないの？）
先に行く市宮と前野からはぐれないようにしながら、葉月は自分の周りで漂っている浮遊霊たちに尋ねた。

旧校舎は今から百年以上前、それこそ明治くらいからあったと言われている。
老朽化が進み、危険ということもあってか、既に使用されることはなくなっている。
利用価値がないにも拘らず、この校舎だけはどういうわけか、建て壊しを町役場に出していない。
葉月はそういうことを知っているわけではないが、浮遊霊の数はそれだけ、この校舎が彼らにとって居心地のいい場所だということを薄々と感じていた。
人が集まるところには霊気も集まりやすく、浮遊霊を呼びやすい。
また長年建ち続けられているため、いいことも悪いことも起きている。

「どうしたの？　葉月ちゃん」

市宮にそう云われ、葉月はそちらを見やった。
「だんだん暗くなってきたね？」
夏なので日暮れまでまだ時間はあるとしても、やはり旧校舎特有の怖さがあるせいか、窓から微かに洩れ込んでいる光がなんとも頼りない。
「さ、さっさと大山見つけようぜ――」
前野が突然立ち止まり、それに気づかなかった市宮と葉月は大山の背中にぶつかった。
「いった……　ちょっと、急に立ち止まらないでよ？」
市宮がぶつけた鼻を指で摩りながら、文句を言う。
「――ちょっと、前野君？」
何か一言言いなさい、と言おうとするが、市宮は前野の顔から血の気が引くのに気付いた。

「あ、あのさぁ？　ここってあれじゃないか？」
前野はそう云いながら、教室の部屋名が書かれた看板を指差した。
「えっと……　２－３って……　あれのこと？」
市宮も前野が震えている理由に気付いた。
「確か、この教室でいまだに勉強している子供がいるって噂があったわね？」
葉月はそうなの？と浮遊霊に尋ねる。すると浮遊霊はスーと締められたドアから中へと入っていった。
葉月はジッと教室のドアを見ていたが、自分の周りで漂っている浮遊霊（かれら）以外の霊気を感じなかったので、尋ねたのだ。
「――ち、違うところいこうぜ？」
そう言うや前野は足並み早く先へと進んでいった。

「ねぇ？　噂って他に何があるの？」
下駄箱で一度休憩しているとき、葉月が前野と市宮に尋ねた。

1階を一周してはみたが、教室などに入れるところがなく、これから2階に上がろうと考えていた時だった。
「そうね。さっきあった2－3の教室に出てくる居残り幽霊以外だと……　音楽室のピアノ弾きかな？」
（なんともまぁ、古典的な）と葉月は思った。
「夜中、誰もいない音楽室にあるピアノがひとりでに鳴るんだって……　で、それを聞いた人は夜な夜な苦しめられるとか」
「――他には？」
これだけ古い旧校舎であり、歴史も古い。怖い話が一つや二つとは言わないだろう。と葉月は考えていた。

「校長室の写真。歴代の校長先生が写された写真があるんだけど……」
「でも、それって今使っている校舎の方にあるんじゃないの？」
「それがね？　なぜか3代目のだけないんだって――　で、その校長先生は、学校の行事で防災訓練をした時、被災にあって亡くなったんだって……　写真も何も残ってないとかなんとか……」
葉月は先日、鶴見先生と一緒に校長室の掃除をしていたため、歴代の校長が写された写真を見ていた。
その中にひとつだけ間が空けられた額縁があったが、新しい校舎にもっていく際、紛失したという。

実はその写真に写っている校長が亡くなった際、葬式の遺影として使用された。
もともと写真に写るのを嫌っていた校長だったせいもあって、唯一写真が写っていたのがそれだけだったのだ。
当然、その遺影は校長先生縁（ゆかり）の人物が今も所有している。

「後、3階と4階の踊り場にいる女の子。階段で転倒死した女の子が夜な夜なそこで踊ってるんだって」

「お、俺もひとついいか？　理科室の人体模型と白骨模型。夜な夜な動き出して、学校中を徘徊するんだってさ」
前野も少し話したほうが気が紛れるのか、自分の知っている怖い話を語り始めた。
「それと図書室の女の子。夜な夜な誰もいない図書室で本を読んでるんだって」
これで市宮と前野が話した噂話は６つである。――それらを語り終えてから数秒ほど経った時だった。

「あれ？」と葉月は首を傾げた。
「どうかしたの？　葉月ちゃん」
何か腑に落ちていない葉月を見ながら、市宮は尋ねる。
「学校の噂って、だいたい７つだよね？」
葉月にそう言われ、市宮と前野は互いを見やった。
「ねぇ？　他に何か知らないの？」
「知らねぇよ？　俺も聞いたことある噂は全部言ったぜ？」
「でも、確かに学校の怖い噂って、だいたい７つなんだけど……」
「それになんか一つ忘れてない？」
葉月がそう云うや、市宮と前野が「どういうやつ？」と尋ねた。

「ほら、学校の怖い噂で、一番多い話――」
そう葉月が云うや、市宮が俯いた。その仕草に葉月と前野は首を傾げた。
「どうかしたのか？　市宮……」
前野がそう尋ねると、市宮は上目遣いで睨みつけた。
「あ、もしかして……」と葉月は途中まで言うと、
「でも、さっき一周したけど、入れる場所なかっただろ？」
前野も市宮がどうしたのか気が付いた。

「壊してでもする！」と市宮は物騒なことを呟いた。

「そこで出来ねぇのかよ？」
「――出来るかぁっ！」
前野の一言にツッコミを入れたせいか、市宮の表情はトイレを我慢しているせいか、強ばっている。
「美耶ちゃんの云うとおりにしよ。トイレを探して――」
そう葉月が云った時だった。葉月の目の前に女の子がスーと現れ、曲がり角の先を指差している。
その女の子が昼休みが終わる頃見た女の子だと葉月は気付く。
（むこうに何かあるの？）
そう尋ねようとしたが、視野に入っているはずである前野がそれに気付いていない。
つまり自分にしか見えていないことを直感的に葉月は理解した。

「美耶ちゃん。まだ見てないところがあるかもしれない。そこ行ってみよ？」
葉月はそう云いながら、先ほど女の子が指差した方へと、市宮と前野を案内した。

女の子が指差した方にドアがないトイレがある。
長年使用されていなかったせいもあり、異臭を放っている。
「うげぇ、すんげぇきもちわりぃ」
前野が鼻を抑える。葉月と市宮も同様だった。
「こんなところしかないんだね？」と市宮は葉月を見やるが、せっかく見つけてもらったこともあり、文句は言えない。
それどころか、そろそろ我慢の限界でもあった。
背に腹は変えられないと、市宮は葉月と一緒にトイレの中へと入り、個室の前で葉月を立たせ、市宮は用を足す。

「――葉月ちゃんいる？」

「いるよー」
「――前野君は？」
「いるぞー」
一人になった心細さもあるせいか、すぐ近くにいるというのに、市宮は五秒に一度は誰かいるかの確認を取っていた。
市宮が用を済ませ、下ろしていたショーツを上げようとした時だった。
「あれ？」と便器の中に何かが落ちているのに気づくや――――
――いぃやあああああああああああああああああっ！！
――
突然、甲高い声が聞こえ、近くにいた葉月は耳を塞ぐ。
「美耶ちゃん、どうしたの？」
葉月は個室のドアを開け、中を覗いた。
トイレの中には尻餅をついている市宮が、ガクガクと体を震わせ、視点を合わせようとしない。
「美耶ちゃん、どうしたの？」
もう一度声をかけると、市宮は葉月を見やった。
「は、ははは……　葉月……　ちゃ、葉月ちゃん？」
何か怖いものを見たのか、市宮は呂律が回っていない。
「どうした？　何かあったのか？」
廊下の方にいた前野が心配になって、葉月と市宮のところへと駆け寄ってくる。
「ま、まままま……　前野……　くぅんぅっ！」
市宮が前野を見やる。
そして……　市宮は便器の奥を指差した。それと同時にトイレの

電球が灯り始めた。
「ど、どういうこと？　だってここ使ってないんじゃ？」
葉月がそう市宮と前野に尋ねる。が、訊いたところで二人が知っているはずもない。
「それにしても、美耶ちゃんが見たのって……」
葉月はなおもそれを指差している市宮を一瞥し、そのまま指さした方を見た。

「――んぐぅっ！」
それを見るや、葉月は込み上げてきた胃液を押さえ込むように口を抑えた。
「んだよ？　黒川まで、一体何が……」
前野は何があるのかと便器の中を覗くや、
「うげぇえええええっ」
その場に跪き、胃液を吐き零した。

便器の中に放置されていたのは……髪の長い女の子の死体だった。
それが無造作に捨てられていて、便器の中に捨てるため、細かくしようとしたのだろう。関節がありえない方向に折り畳まれている。
髪が長いせいか、それがうじゃうじゃと顔にまとわりついており、しっかりと見えるわけではないが、顔がグチャグチャで血塗れになっていることだけは確認できた。

その周りには腐ったものを餌とする蝿が集っている。

葉月は冷静になって、死体を見るや、違和感を感じた。

（――白骨化してない？　それに……まだ殺されてそんなに経ってないんじゃ？）
もし使われなくなった時のものだったとすれば、すでに白骨死体

になっている。
しかし、生身の躰のままだとすると、そう昔ではないことになる。
「は、早く出ようぜ？」
前野がそう言うと、葉月は頷き、腰を抜かしている市宮を前野と二人で廊下へと運んだ。

伍・間引

死体から逃げるように、トイレから出た三人は、息を整えるのに必死だった。

「な、なんだよあれ？」

前野が涙目になって、葉月と市宮を一瞥する。

「わ、わからないわよ……　私に訊かれても――」

市宮は上げ忘れていたショーツを上げ直し、トイレの方を見やる。

「でもよぉ、なんであんなところに死体があるんだ？」

確かに、誰も入ることができない旧校舎に、真新しい死体があるのは、如何（いかん）せん可笑しい。

どこか別の入口があるのかというと、そうではない。

下駄箱の他には側面にある二つのドアだけで、そのふたつとも頑丈に閉めきられている。

唯一入れるとすれば、葉月たちが入ってきた窓からしかない。

「もしかして、あの足跡って……　犯人の……」

窓の下にあった足跡は、葉月たちよりも明らかに大きい靴跡だった。

「でもよ？　それだったら、どうして逃げようとしないんだ？　あの足跡のやつが、あの死体を捨てたんだろ？」

前野が云うとおり、死体を遺棄したのなら、さっさと逃げればいい。

「みんなが逃がそうとしないからじゃないかな……」

葉月はスッと立ち上がり、目を瞑った。

「おい、黒川、何やって――」

「しっ！　黙ってて！」

前野が尋ねようとしたのを市宮が止めた。

「2―3で意残りをしている女の子……
音楽室のピアノ弾き……
居なくなった校長先生……
踊り場の女の子……
理科室の動く人体と白骨模型……
図書室の女の子……

――7つ目の話を知ってる人は……」

葉月は呟くように誰かに尋ねた。
それは、自分の周りで漂っている浮遊霊の声を聞くため……
もし知っているのなら、教えて欲しいと考えていた。

「7つ目のお話は……　――っ、ない？　ないって――どういうこと？」

葉月はそう呟くや、ゆっくりと目を開いた。
「葉月ちゃん、どういうこと？」
市宮が尋ねると、前野は不思議なものを見たといった感じに、すこしばかり驚いている。
「二人が話した6つの内、いくつかは確証があるって――」
葉月は浮遊霊から聞いたことを説明した。

まず一つ目の『2―3で意残りをしている女の子』。
これは教室に女の子がいることに気付かず、用務員が校舎の入口を閉めたことが原因とされている。
しかも、その翌日から連休に入っていたため、学校にくるものは殆どいなかった。

二つ目の『音楽室のピアノ弾き』。

これに関しては、要するに浮遊霊（かれら）がいたずらに遊んでいたせいであった。云ってしまえば、ポルターガイストと大差ない。
そういうことであれば、５つ目の『理科室で動く人体と白骨模型』も同様である。

三つ目の『居なくなった校長先生』は既に説明しているので割愛する。

四つ目の『踊り場の女の子』。
階段から転落したさいに、頭を打ち付け、女の子は気を失い、そのまま亡くなった。
死者は成仏しなければ、死亡した場所をさまよい続ける。
踊り場で踊っているのは、その女の子が舞踊を習っていただけのことである。

六つ目の『図書室の女の子』。
こちらは一つ目の話と類似しているが、地震で崩れた本棚の下敷きになったことが死因となっている。

――以上が旧校舎に伝わる六つの話の真相であった。

「だけど、七つ目の話は誰も知らないって」
「なぁ、一体何云ってんだ？」
前野が葉月にそう尋ねるが、市宮はそれを無視する。
「知らないって……　でもこれだけ古いと、怖い話の七つくらい余裕で出来るんじゃないの？」
「七不思議は誰かが噂を作らなければ不思議にはならない」
「誰かが語り始めたから、それが俺たちの耳に入って、噂になっていくってことか？」

前野がそう言うと、葉月は頷いた。

極論ではあるが、結局は誰かに伝えない以上、噂話はなかったことになる。

だからこそ学校の七不思議に留まらず、すべての怖い話は、長年誰かが誰かに伝え、それが数珠繋ぎのように伝え続けられているからこそ、今に至るのだ。

「そうだ。大山君は？」

市宮が思い出したように言う。それを言われるまで、葉月たちは校舎に入った大山を探していたことを漸く思い出した。

先程トイレで見た、女の子の変死体が余りにも印象強かったため、薄れていたのだ。

「黒川？　お前のその訳わかんねぇので訊けねぇのか？」

そう云われ、葉月は再び目を瞑る。

「大山君、大丈夫みたい。今2階にいるって――　ご要望があれば、怖がらせて立ち止まらせるけどって云ってる」

そうしてもらえると探す手間が省(はぶ)けるね。と市宮が云った。

「でも、私たち自身も危険だって……」

そう言うと、市宮と前野は表情を強ばらせた。

そんな二人を見ながら、葉月は複雑な表情を浮かべた。

どうして校舎に入った犯人を逃がそうとしないのか、浮遊霊(かれら)にとっては葉月たちも含めて、さっさと帰って欲しいはずである。

そんな葉月の疑問に答えるように、三人の足元を冷たい風が通り抜けた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「なんだよ……」
教室の隅で、大山は肩を震わせている。
先程葉月にお願いされた浮遊霊たちが、大山をその場から動かさないようにしていた。
外側と廊下側の窓をガタガタと震わせたり、突然机が動いたりと、ポルターガイストを起こしている。

「南無阿弥陀仏……　南無阿弥陀仏……」と、大山が念仏を唱えたところで、浮遊霊たちは何ともない。
そもそも『南無阿弥陀仏』は、（阿弥陀如来に帰依します）という意味があり、阿弥陀如来が「自分の名前を唱える者はだれであっても、即座にその者のところへ行って、極楽浄土に導く」と云ったことから由来している。
自分の名前を『唱えたものは……』という意味では、浮遊霊自身が唱えているわけではないので、何の意味もなかった。

また成仏してほしいという意味合いでも使われるが、そんな簡単な方法だったら、浮遊霊もさっさと成仏したいものである。

ガタンッ！と、今までで一番大きな物音がした。
（ひっ！）と大山が小さな悲鳴を挙げる。
途端先程まで浮遊霊たちが行なっていたポルターガイストがピタリと止まった。

「な、なんだよ？　なんなんだよ？」
大山は顔を強ばらせ、音がした方を見やると、
「――――」
廊下の方に人影が見え、それに声をかけようとした。

「だめ……　ここから動いじゃだめ……」
小さな声が聞こえ、大山はそちらを見た。
「き、きみは？」
そこにはおかっぱ頭で、黄色のカッターシャツに赤いもんぺを着た女の子がジッと大山を見ていた。
大山はいつからいたのかと尋ねたかったが、今はこの女の子の言うとおりにしようと直感的に思った。
大山は廊下から見えないように、出来る限り死角になるよう、体を低くしながら、こちら側から見える位置まで移動する。
そしてゆっくりと廊下を見やった。
（――大人の人？）
廊下には知らない大人の男性が、何かを探すように、首を動かしている。
見た目は２０から３０くらいで、上着を脱いではいるが、スーツを着ている。
何かを喋っているようだが、ここからでは聞こえない。
（学校の先生じゃなさそうだし、どうしてこんなところに？）
大山は自分たちを探しているわけでもなさそうだと、子供ながらに直感する。
即座に危険だと察知したのだ。
「あぁ、くぅそぉ、いったい何処に行きやかったァ……」
そう男性が叫ぶと、ドアを蹴った。
「あンのくぅそがきぃゃあっ！　人の指噛みよってかんにぃ！　すぅげぇいってぇぇ……」
呻き声を挙げるように、男は何処かに行く。

大山はそっと廊下側の窓へと匍匐前進する。
廊下側の窓をそっと覗くと、男は居なくなっていた。

（くぅそぉ……　おれがこんなことしなきゃ……）
大山は自分がしたことに後悔していた。校舎に入らず、そのまま家に帰ればよかったんだと……

陸・言訳

「なぁ、どうして声出しちゃいけないんだよ？」
警戒しながら、ゆっくりと階段を上がっていく葉月に、前野が声をかける。
「ばかっ！　この校舎の中に、私たち以外の人がいるのよ……　もしかしたら、その人が女の子を殺した犯人かもしれないじゃない？」
市宮が声を殺しながら、前野に捲し立てる。
「それに、葉月ちゃんがこの校舎にいる幽霊に、大山君をどこにも行かせないようにしてもらってるから、安心だと思う」
信用できるのか？と前野は云った。市宮も葉月のことを信じているとはいえ、本当に幽霊なんかを信用していいのだろうかと考えていた。
「大丈夫。この校舎に悪い怨念は感じないから……」
「怨念？　怨念にも善し悪しがあるのか？」
前野が尋ねるよりも先に、前を歩いていた葉月が二階にさしかかった時だった。
何を思ったのか、突然、葉月が三階の踊り場へと駆け上がっていく。
それに驚いた前野と市宮は、慌てて後を追った。

葉月は、ちょうど二階から自分たちが見えないように隠れ、廊下を一瞥する。
前野と市宮も、葉月のマネをした。
「なぁ、どうした」
前野が声をかけると、葉月は普段見せない真剣な目で睨みつけた。
廊下の方から足音が聞こえ、葉月たちに近づいてくる。
「大山じゃないのか？」

前野がそう呟くが、葉月は違う意味で警戒していた。

「さっき、前野君が怨念に善し悪しがあるのかって訊いたよね？」

葉月にそう言われ、前野は頷いた。

「怨念っていうのは、この世に未練がある人や、誰かに怨みがある人がもっている想いなの。突然死んだ人は、当然やり残したことがあるから、この世に未練がある。だけど、それは人に対しての怨みじゃなくて、自分に対しての想い」

「それじゃ、それがいい方の怨念ってこと？」

市宮にそう言われ、葉月は頷く。

「それじゃ、悪い方は？」

「誰かに殺されたり、逆に誰かを殺そうとしたり……　言い換えれば、地獄すら恐ろしくないと思っている人がもつ想い……」

葉月は今まで色々な死者を見たり、その声を聴いたりしてきた。

その殆どは、誰かに忘れられている存在だった。

かれらが成仏できないのは、死んだ事をほったらかしにされているからである。

勿論、遺族はかれらの死に悔いている。どうして死んだのかと慟哭する。

しかし、そんなのは上辺だけの事である。

葬式や火葬などにかかる費用。

老人や金持ちならば、遺産相続など、泥沼なことが先立ってしまい、死者に対する哀れみなど、一瞬で消えてしまう。

それに結局は生き物は地獄に落ちるものだ。

天国にすぐに行けることはない。それを悔いり、懺悔すれば多少罪は軽くなる。

永(なが)い永い六道輪廻を繰り返し、初めて天国を意味する天道へと繋がっていく。

それは気が遠くなるほどの時間。云ってしまえば、終わることのない拷問そのものである。

それならばいっそのこと、成仏しないほうがいいんじゃないかと、葉月は感じていた。

「……でも、みんな本当は旅立ちたいんだよ」

『――えっ？』

葉月の言葉に、前野と市宮は目を疑った。

「どうして想いがそこにとどまるか……　ここには校舎にいる幽霊たちの思い出がいっぱい詰まってるから……　良いことも悪いことも全部ひっくるめて、思い出が詰まった場所だから――」

葉月が呟くようにそう言うと、先程聞こえた足音が一階へと降りていく。

「――行ったのか？」

「どうかな？　葉月ちゃん、お願いできない？」

市宮は葉月を通して、幽霊に確認をしてもらおうと考えていた。

「おれ、確かめるわ……」

前野はそう言うや、階段を見下ろした時だった。

「パァッ！」

突然男が前野の前に現れ、顔を掴まれる。

「こぉんなところでなぁにしてんだぁ？　がぁきぃどもぉおおおっ!?」

「んっ！　んぐぅっ！」

ジタバタと掴まれた手を解こうとするが、大人相手に子供である。まったく歯がたっていない。

「子供はもう帰る時間だろ？　だったら早く帰って、ママのおっぱいでもすってろぉっ！」

そう云うや、男は力任せに前野を投げた。背中を教室の壁にぶつけ、前野は気を失いかける。

「――前野君っ！」
市宮が前野に近づこうと、階段を駆け下りる。
「おっと、行かせねぇぞっ――！」
市宮の前に立ちふさがる男が突然悶絶する。
「こ、こんのくぅそがきゃ――――　げぇほぉっ！」
男は股間を抑えながら、崩れるように四つん這いになっていく。
葉月が男の股間を思いっきり蹴ったのだ。

「い、痛そうだね？」
「今はそんなこと言ってる場合じゃない！　前野君、大丈夫っ？」
葉月がそう声を掛けると、前野は頭をフラフラさせながらも意識を保っていた。
「くぅそぉ、首がいてぇ……」
（よかった……　前野君の守護霊が護ってくれたんだ）
葉月は前野のうしろに誰かがいるのが視えた。
それは兵隊姿の男性で、葉月たちより一回り大きい風格をしている。
葉月は、彼が前野の守護霊であると、感じていた。
「動ける？」
「な、なんとかなぁ……」
「大山君のところに早く行こう」
三人は未だに体を震わしている男に目もやらず、葉月の案内で大山がいる教室へと向かった。

「大山君っ！　大山君っ！」
市宮が教室のドアを叩きながら声を掛ける。
「い、市宮か？」
教室の方から知っている声が聞こえ、葉月と市宮、前野は安堵の表情を浮かべた。

「ちょ、ちょっと待っててくれ、今開けるから」
大山がそう言うと、窓のサッシに置いていたつっかえ棒を取り外した。
「ここからなら入れるだろ？　この窓、鍵が壊れてるみたいなんだ」
大山自身もその窓から、この教室に入ったと説明した。

「ごめん、みんな……　怖い思いさせて」
大山は深々と頭を下げ、葉月たちに謝った。
「ほんと、そうだよな？　こっちは色々と大変な目にあってるんだぜ？」
前野がそう言うと、大山は葉月と市宮を一瞥した。
「大山君、どうしてこの教室に？」
「それが、誰かにこの教室が一番安全だからって言われて――　だけど、突然窓がガタガタってなったり、ものが動いたりして、どこか安全だっての？」
それを聞くや、葉月は前野と市宮を見た。その二人も思いあたりがあった。
「な、なんだよ、みんなしてぇ……　なんか知ってるんだろ？」
大山にそう言われるが、
「い、いや……　お前も苦労したんだなぁと思ってさ」
「そ、そそ……　こうやってみんな再会できたんだから、ねっ？」
前野と市宮にそう云われ、大山は複雑な表情を浮かべた。

「それでどうやって帰る？　もう外が真っ暗になってきてるぞ？」
「それにさっきいた男の人がまだいるかもしれないし――」
危険なのはわかっているが、家に帰らない訳にもいかない。
「美耶ちゃん。今何時かわかる？」
葉月にそう言われ、市宮はポケットの中に入れていた時計を見た。
「えっと……　夜の7時になるくらい」
「み、みんな心配してるだろうな……」

前野がそう言った時だった。葉月は教室の隅で自分たちを見ている女の子に気づく。

「あなた……　確か昼間の……」

「んっ？　何か見えるのか？　――って、誰だよ、お前っ！」

前野が驚き、市宮は声を出さないように口を抑えている。どうやら全員に見ている。

「あなた……　誰なの？」

「……」

葉月の問いに、女の子は答える仕草をするが、何を言っているのかわからない。

「何言ってるんだ？」

大山がそう云う。前野と市宮も同じだった。

「もしかして、大山君をこの教室に連れてきたのって、あなたなの？」

市宮がそう女の子に尋ねると、女の子は頷いた。

「やっぱり……　っ！　ねぇ、わたしが校庭であなたの事を尋ねた時、旧校舎を指差したのって、一階のトイレに死体があることを教えたかったから？」

「し、死体？」

葉月の言葉に、大山は驚く。

「お、お前ら、そんなの見てるのかよ？」

「見たくて見たわけじゃないわよ？」

市宮が大山を睨みつける。

「その死体を見つけて、私たちを通じて、警察に知らせてほしかった。だから犯人が逃走しないように、この校舎から出そうとしなかった……ってこと？」

市宮がそう訊ねると、女の子は頷いた。

「んだよそれ？　だったらさっさと校舎から出せばいいじゃねぇか？」
「窓の泥濘にあった靴だけじゃ証拠にならないってことか？」
大山がそう云うと、女の子は答えるように頷いた時だった。

「あああああああああああああああああああああっ！！」
突然、前野が大声を挙げる。
「――な、なんだよ？」
「ちょっと、前野君、静かにして！　犯人に見つかったらどうするの？」
大山と市宮に睨まれ、前野は頭を下げる。
「それでどうかしたの？」
「今思い出したんだけど、あの窓って、この前、大山と野球やってて、割ったんじゃなかったっけ？」
そう云われ、大山は「あっ！」と声を挙げ、唖然とする。
「ちょっと、それどういう意味？」
市宮が大山と前野を睨みつける。
「つまり、窓は最初から割られていて、犯人はそこから窓を開けて中に入った」
そういうことなら説明がつく。しかし、自分たちが聞いたあの音はなんだったのか――

その答えに気付くや、葉月は吹き出した。
まだ理解できてない他の三人は首を傾げている。
「みんな……　演技うまいなぁって」
そう云われ、市宮と前野は理解した。どうやら、校舎に漂っている幽霊が、どこかの窓を割ったのだと、葉月は説明した。

その証拠に、3階の窓がひとつ割られていた。

「本当に大丈夫なの？」
市宮が、自分たちの頭上で漂っている女の子に訊く。
「俺たちをこの校舎に入れたのは、あの死体を発見して欲しかったのが理由だったしな」
大山がそう云う。前野も納得はいっていないが、女の子が悪いやつとは考えていなかった。
「さ、さっさと帰ろうぜ？」
前野がそう言うと、教室のドアがひとりでに開いた。ちょうど、廊下側を見ていた大山が先に気付き、少し声を挙げる。
「もう、そういうのはいいって……」
前野が女の子を睨みつける。当の本人は面白いのか、小さな笑みを浮かべている。
「誰もいないな……　よし、みんな……　犯人に見つからないよう、慎重に行こう」
大山を先頭にし、市宮、前野、葉月と並んでいく。

ちょうど階段の方に差し掛かり、４人の歩みはより慎重になっていく。
「もう、いないよな？」
前野がそう言うと、女の子が先へと行く。
「見に行ってくれたのかな？」
「俺たちを危険な目に合わせた責任でも感じてるんだろ？」
市宮と前野がそう言うと、女の子はすぐに戻ってきた。
「大丈夫なのか？」
大山の問いかけに、女の子は頷いた。
女の子の言葉通り、階段を見渡すと、男はおらず、４人はゆっく

りと1階へと降りていく。

それから何事も無く、女の子の案内によって、4人は自分たちが入ってきた窓へと辿り着いた。

「うわ、外真っ暗だぜ？」

前野が窓から外を眺め、声を挙げた。その言葉通り、外は既に真っ暗になっている。

「早く帰らねぇとな……」

大山と前野が先に外に出る。続いて、市宮が外に出た。

葉月は少し気になりながらも、校舎の外へと出ようとした時だった。

（――えっ？）

窓の外に手をやろうとすると、パシッと、何かが弾かれる音がする。

「えっ？　ど、どういうこと？　みんなぁ」

声を挙げ、呼び掛けるが、返事がない。

「まだ……　まだあなたは出ちゃダメ……」

女の子が、葉月に声をかける。

「私は駄目って……　どういうこと？」

葉月はそう訊ねるが、女の子はスッとどこかへと行ってしまう。

しかし、人がその場にいたことを証明する残り香があるように、女の子は気配を、まるで糸のように漂わせていた。

葉月はその気配を探りながら、女の子の後を追った。

その先は、死体があったトイレである。

その前で女の子は寂しそうな顔を葉月に向けた。

「あなた……　誰なの？　トイレで見つけた女の子とは違う」

トイレの中で見つけた死体の女の子は髪が長い。しかし、葉月の

目の前にいる女の子は、おかっぱである。
「私は……　この学校に来たかった……　みんなと遊びたかった」
「――えっと、この学校に来れなかったってこと？」
女の子はその問いに答えるように頷いた。
「学校に来れなかった……　あなた、もしかして別の場所で死んだの？」
それも自分よりも小さな時に……と葉月は続けた。
葉月の問い掛けに女の子は少し首を横に振った。その反応を見て、葉月は首を傾げた時だった。

「みぃつけぇたぁ……」
突然男の声が聞こえ、葉月がそちらを振り向くや、
「げぇほぉっ！」
男に顔を殴られ、ぶっ飛ばされる。
「さっぁきぃはいたかぁあぞぉっ！」
男は譫言のように云うや、痛みでフラフラしている葉月を蹴り上げた。
「がはぁっ！　げぇほぉっ！」
お腹を深々と蹴られ、込み上げてきた胃液をドバドバと床に撒き散らし、葉月は痛みと気持ち悪さで訳が分からなくなっていた。
「くぅそぉ、あのくそがきぃ……　おれが寝てる間に居なくなりやがって……」
よく見ると、男はフラフラと今にも倒れそうになっている。
「あ、あなたが殺したんじゃないの？」
葉月がそう訊ねると、男は睨みつけながら、葉月の髪の毛をつかみあげる。
顔を近づけられ、息がかかる。――若干ではあるがアルコールの臭いがした。
「ふぅさげたこといってんじゃねぇぞ、がきぃ？　おれがいつこど

もをころしたってぇ？」
男は葉月を床に叩きつけ、背中を踏みつけた。
「あがぁっ！」
「いいかぁ？　がきぃってのはなぁ？　大人の言うことを聞きゃあいいんだよ？　自己表見なんて必要ねぇんだ？」
男がそう云うや、葉月の横腹を思いっきり蹴った。

メキメキと、聞きたくもない音が葉月の耳元で大きく響いた。
「……っ！」
葉月は気を失いかける。が、男はそれを許そうとはしない……

「なぁ、俺の考えは間違ってるかぁ？　間違ってないよなぁ？　がきぃは大人の言うことを聞きゃいいんだよぉ？」
男が葉月の頭を蹴ろうとした時だった。

――パシィンと何かが当たる音が、廊下中に響きわたった。

「ってぇ……　なんだよ？　なぁんだってんだよぉ？　――って、てめぇっ！　一体どこから入ってきやがった……？」
男は狼狽するように声を挙げ、それを見た。
「さ、皐月……　おねえちゃん？」
葉月の目の前には皐月が立っており、静かに男を睨みつけている。
「大丈夫？　葉月」
皐月がそう尋ねるが、葉月は訊くまでもない重症である。
「――あいつがやったの？　あの女の子も……」
その言葉を聞き、葉月は皐月もトイレにいる女の子を見ていることを知る。
「わ、わからな……い、けど……　みんなが云ってる。『あの男が女の子を殺した』って」
葉月は虚ろな目をしながら、ゆっくりと男を指差した。

「さっきから呂律が回っていない……　おそらく、アルコール依存症による。記憶障害――　あの女の子を殺したこと自体、覚えていないってことね」

皐月は男の方へと振り返る。

「なんだよぉ？　おまぇもかぁ？　おまえもぉれぇのいうことをきかないってのかぁ？」

男はそう云うや、皐月に襲いかかるが、

「どぉおおおおおおおおおおおおっ！」

鬼気迫る咆哮を挙げるや、皐月は男の腹部に竹刀を入れる。

「げぇ、げぇほぉ？　がはぁっ」

男はお腹を抑えながら跪いた。

「なぁにぃしやが……　――がっ？」

男のお腹を竹刀の先が深く入り込み、男は胃液を吐き散らかした。

その後も皐月の一方的な責めで、男はフラフラになり、その場に倒れた。

「ゆ、許してくれぇ……　もうやめるから……　謝るからぁ……」

男は譫言を挙げた時だった。ガタガタと顔を震わせ、男を見下ろしている皐月に恐怖を覚えていた。

そこには普段見せることのない形相をし、それこそ『鬼』と云っていいほどの獰猛な目付きをした皐月がいた。

「――赦す？　赦すわけないでしょ？　自分の都合勝手に女の子を殺し……　剰え。私の妹をこんな目に遭わせておいて……　自分だけ助かろうなんて虫のいい考え……　捨てたほうがいいわよ？」

もはや怒りが先立っている皐月に、悲鳴を挙げた男の声など届く

はずがなかった。

皐月の折檻が終わり、校舎を出た数時間後。家に戻っていた大山たちが警察に通報し、警官たちが駆けつけたところ、ボロボロになった男の姿だけが廊下に残されていた。

捌・七つ目

「こんのぉばかぁっ！！」
月に照らされた旧校舎の入り口で、人目もはばからず、皐月は葉月を怒鳴りつけている。
「まぁ、無事だったんだから、いいじゃないか」
大宮巡査が皐月を宥める。が、皐月は大宮巡査を睨みつけた。
その目にはうっすらと涙が浮かんでいる。
「皆がどれだけ心配してたかわかってるの？　今回は無事だったからよかったけど、もし誰も助けに来なかったらどうするつもりだったの？」
「ご、ごめんなさい……」
葉月は譫言のように謝る。

皐月は葉月が重症を負っていることを重々わかっている。
しかし、生きていただけでも嬉しいのだ。もし、死んでいたら……と思うと、怒鳴らずにはいられなかった。
「でもよかった……　無事で……」
皐月はそっと葉月を抱き締める。その力は強く、葉月は「痛い」と言おうとしたが、どれだけ心配したのかを理解し、何も言えなかった。

「葉月……」
拓蔵が葉月に声を掛ける。
「みんなに迷惑をかけたんじゃ。謝りくらいは云わんとな」
「うん……　ごめんなさい」
葉月は深々と頭を下げ、謝りを述べる。弥生や周りの警官たちは安堵の表情を浮かべた。

「さてと……　西戸崎刑事、残念だけど――」
「んっ？　ああ……　まぁ、こうなることは頭の中に入れちょったけど、現実になると辛いな」
西戸崎刑事が頭を抱えた。
「親御さんたちにどう説明すればいいっちゃろ……」
トイレで発見された女の子の死体は、誘拐事件の被害者である新村結華と判明した。
死体の胸には名札が付いており、それから身元がわかったのだ。
「男は美作秀英（みまさかしゅうへい）、３２歳。サラリーマン……　昔子供を持っていたそうです」
「子供？　葉月や、その友達に怖い思いさせてたのが？」
皐月と葉月は驚きを隠せないでいた。
「ええ。まぁ、もう１０年ほど前の話でしてね。一度虐待で、児童相談所から通告を受けてたようです。――まったく、親に反抗したりもするでしょうに、それが許せなかったらしいですよ」
「そうだったんですか……」
葉月はそう云うや、旧校舎の方を見ると、「――あれ？」と小さく声を挙げた。
「あの子がいない……」
「あの子って……　葉月たちを助けてくれた幽霊のこと？」
葉月だけは助かったとは言い難いが、もし女の子が助けてくれなかったら、全員美作秀英に殺されていたのだ。
「それなんじゃがな……　やっと思い出したわい」
「爺様？　思い出したって――何を？」
「この旧校舎に伝わる、七つ目の話じゃよ」
そう云うや、拓蔵はベンチに座った。

「昔、昔……　今からもう60年以上前の話じゃ。
世の中は第二次世界大戦の渦中でな、日本は死ぬか生きるかの状況じゃった。子供たちは勉強もままならなかったんじゃ……
そんなある晴れた日に、ひとりの女の子がこの校舎に転入してきてな、すぐにみんなと仲良くなったんじゃ。
じゃが、ある日、その女の子は不治の病にかかってしもうてな、家が貧乏じゃったから、外に出ることを許されなかったんじゃ……
そんなある日、突然家から女の子が居なくなってしもうてな。みんなでいろいろなところを探したんじゃよ。

そしたらな……　見つかったんじゃよ。幸せそうな顔を浮かべたまま……　トイレで死んでおったのがな……

その後からじゃった。トイレで誰かが話をしていると、個室から楽しそうな笑い声が聞こえてくるようになったのは……
女の子の名前は『おはな』……　それから転じて『花さん』……
『花子さん』になったんじゃよ」
拓蔵がまるで見てきたかのように話す。

「それって、もしかして実話？」
「さぁ、どうじゃろな？」
弥生の問い掛けを、拓蔵は曖昧に答えた。

「おはなさん……　本当に学校に行きたかったんだね」
「おはなちゃんにとっては、学校に行くというより、みんなと遊びたかったと云ったほうがいいかもしれんな」
拓蔵は旧校舎を見上げ、目を瞑った。少しだけだがツーッと涙が溢れていた。

――それから数週間後のことであった。
旧校舎が学校の夏休み中に建て壊しが決定したのだ。事件が発生し、子供たちがまたいたずらに校舎へと入らないようにするためだったが、実際は違っていた。

「爺様？　どうして、おはなさん……　ううん、花子さんの話が七つ目のお話にならなかったの？」
葉月が拓蔵にそう尋ねる。
「お前は、おはなちゃんの話を聞いて、怖いと思ったか？」
そう聞き返され、葉月は首を横に振った。
「学校の七不思議は怖いから噂するじゃろ？　じゃが、おはなちゃんだけは誰も怖がらんかった。むしろ、色々な事をおはなちゃんに話してたんじゃよ……　それが新しい校舎が出来、徐々に誰も旧校舎の方に入らなくなるまでずっとな――」
「おはなさんにとっては、子供たちの話を聞いていたことが楽しかったってこと？」
皐月がそう訊くと、拓蔵は少し間をおいてから頷いた。
「旧校舎の建て壊しが決定したのも、おはなちゃんを知ってるわしからすれば、この世に未練がなくなったからじゃろうな」
拓蔵の言葉に三姉妹は首を傾げた。

後日、建て壊し前に除霊式が行われた。
それを見に来た老人たちの殆どは旧校舎で女の子……おはなと一緒に遊んだり、お話を聞いてもらったりしていた子供たちであった。
三姉妹は後で聞かされるが、旧校舎を壊さないようにと運動をしていたのは彼らで、どうやら、彼ら自身がおはなを束縛していた。
――が、拓蔵の一言で、全員考え直し、旧校舎の建て壊しを決心した。

二学期を迎えた頃には、旧校舎があった場所は更地となり、そこ

を小さな運動場として、利用されることになった。
その日から、その運動場に大勢で遊んでいると、『誰も知らない女の子が混ざっている』という怪奇現象が頻繁に起きるようになったが、子供たちの誰一人、それを怖がるものはいなかったという。

その女の子がなんなのかは、ご想像にお任せしたい。

壱・足枷

夕日が差し掛かってきた山中で、ガチャンッ！という、耳障りな音がこだました。

その音が発せられた場所には子狐が横たわっており、左後ろ足に罠が掛かっている。

その罠から逃れようと、子狐は悲鳴を挙げながら、じたばたと足掻(あが)いていた。

「こっちから音がしたが――」

茂みの方から人間の声が聞こえ、子狐はその場から離れようと、さらに体を激しくする。

まだ幼い子狐は、親狐と一緒に狩りの練習をしていたのだが、獲物を捕るのに夢中となってしまい、子狐は母狐と逸(はぐ)れてしまった。

子狐は足の痛みと、人間に殺されてしまのではないかという恐怖心にかられ、その場を逃げようと必死だった。

足掻けば足掻くほど、歯が足に食い込み、激痛が走る。

「よし、狩猟の許可は役所から出ているんだ。今夜はどんな鍋にする？」

男の一人が猟銃をギュッと握り、息を潜めながら言った。

先程声をかけた男性よりかは若干若い男性が云う。

「今の時期は猪だからな。牡丹鍋なんてどうだ？　ちょうどいい味噌が手に入ったんだ」

「しかし、樹里(いつき)、今夜は妙に寒いな……」

「まったくだ。早く獲物を狩って、暖かい飯でも食いたいもんだ」

そう話しながら、二人は獲物が見える距離まで、静かに近寄った。

茂みの中で樹里と昌平は気配を殺し、罠の方へと銃口を向けた。

その距離はおおよそ五十米(メートル)といったところか、子狐は罠から逃げ

ようと必死のため、男二人が近付いている事に気がついても、逃げることが出来ない。

「んっ？」と樹里が声を挙げた。

「――どうした？　見失ったか？」

「いや……　確か罠をかけたのは、猪が頻繁に通る道だったはずだが？　兄さんの予想は大幅に外れていたようだ」

樹里は銃に取り付けられた弾倉（マガジン）を取り外し、薬室に残った最後の一発を天に向けて発射した。

二人の勝手なルールとして、何も当たらない空発は、今日の猟はこれで終えるという、山に住む獣たちへの合図でもあった。

それがわかっている昌平は唖然とする。

「お、おい……　何やってるんだ？」

「――獣に効く傷薬はないか？」

「そ、そんなことしてどうするんだ？」

樹里の言葉に昌平は狼狽する。

「みてわからんか？　助けるんだよ」

そう言われても、全く理解できない。といった表情で昌平は首を傾げる。

そんな昌平を尻目に、樹里は迷うことなく子狐のところへと歩み寄っていく。

その足音が近付いてくるのを感じ、子狐は逃げようと必死だった。もはや足の痛みは麻痺して、感覚すらない。

「大丈夫……　俺たちは何もしない」

樹里はそう云いながら、罠の仕掛けを外していく。

その間、子狐は少しずつ暴れる体を落ち着かせていった。

彼が自分を殺すのではないと、野性的な本能で察し、子狐は「くぅん……」と、まるで犬のような声を発した。

「おお、痛かっただろ？　すぐにとってやるからな」
樹里は狐の足に食い込んでいた罠を取り外した。
外すやいなや、我にかえったかのように、子狐は樹里から逃げるように、フラフラと奥の茂みへと姿を消した。

山小屋に戻って分かったことだが、歯は子狐の足に深々と食い込んでおり、真っ赤に染まっていた。

「少し、この山の生態や、行動範囲を把握しておかないといかんな」
「ああ。まぁ、お前のやったことは仕方がない。――今日はきのこ鍋とするか」
昌平は樹里がしたことは、単純にあの子狐を助けることにほかないだろうと理解した。

――その晩のことである。
山小屋の中では庵（いおり）に火が灯されている。
外は視界が遮られるほどの猛吹雪と化しており、ガタガタと小屋の壁が歪む音をこだまさせる。
「さて、夕食にしよう……」
そう昌平が鍋を運んでいた時、小屋の扉を叩く音がしだした。
こんな時に誰だろう？と、樹里と昌平は互いの目を見やった。
「すみません、この山を下ったところまでいこうとしていたのですが、道に迷ってしまいまして……　日も落ちてしまい、出来れば一晩泊めていただけないでしょうか？」
女性の声が聞こえ、樹里は昌平を見やった。

「入れてやれ。家の前で変死体があったんじゃ、化けてでられてしまうわ」
そう云われ、樹里は小屋の扉を開けた。

戸を開けるやいなや、吹雪と見間違うほどの強風が、雪と一緒に小屋の中に入ってきた。

樹里は腕で顔を覆いながら外を見ると、そこには笠を被った女性と、その手に捕まえられた少女が立っていた。

笠に被った雪の量は相当なもので、だいぶ道に迷っていたのだろうと樹里は思った。

「これは大変だ。急いでお入りなさい」

そう云われ、母娘（おやこ）は云われた通り、小屋へと入った。薄暗くてわからなかったが、母娘は二人とも着物を着ている。

こんな山奥に着物か……と母娘に尋ねると、普段から着慣れているので大丈夫ですとかえされた。

庵を間に挟み、樹里と昌平を前に座った母と娘の二人は、被っていた笠を外した。

二人の素顔を見るや、樹里と昌平は「ほぉっ」と声を挙げた。

母親の顔立ちはキリッとしたもので、まるで雪のように白い肌をしている。

朱色の口紅を付けているが、それを思わせないほどにやんわりとし、艶があった。

娘も母親に負けず劣らず、美しい白い肌色だ。

母親と少し違うところをあげるとすれば、眼はくりりと大きく、幼い雰囲気がある。

「――しかし、どうしてこの山に？」

「実はきのこ狩りをしておりましたら、娘が夢中になってしまいまして、危険な場所に入ってしまったのです。母一人、子一人の状態だったため、助けるのに苦労しました」

母親は娘を見ながら話す。当の本人は反省しているのか、俯いている。

「しかも、その時に足を滑らせてしまいまして、娘は足を怪我して

しまったのです」
そう云われ、樹里と昌平は娘の足を見た。母親の云う通り、娘の左足には布が巻かれている。
「失礼ですが、包帯は？」
「襦袢を切れ端にし、それを巻きました」
母親はそう云うや、着物の襟元を緩め、肌着を見せた。
肌襦袢の襟元に切れ込みがあり、それを包帯にしたのだろうと、樹里と昌平は理解した。
「今日は冷えるからな、温まっていきなさい」
昌平にそう云われ、母娘は頭を深々と下げた。
ふと樹里は娘の方から視線を感じ、そちらを見ると、娘がジッと樹里を見つめていた。
「どうかしたのかい？」
「――い、いいえ……　なにも……」
娘は俯いてしまい、その晩は何もなかった。
――翌日の事だった。庵の火は完全に消沈しており、寒さだけが小屋に漂っている。
その寒さで起きたのか、昌平は小屋の中を見渡した。
そして、違和感を感じるように首を傾げたが、数秒後には慌てふためくのだった。
「おい、樹里……　起きろ！」
そう云われ、樹里は起きた。まだ眠気眼で意識は覚醒していない。
「どうした？　何かあったのか？」
「何かあったのかじゃない。いないんだ……　あの母娘が……」
樹里がそれを理解するのに、数秒ほどかかったが、昌平の云う通り、母娘が眠っていたはずの布団は敷かれたままで、その痕跡があ

るだけである。

「ま、まさか物取りか？」

そう言うやいなや、二人は小屋をひっくり返すと云わんばかりに、箪笥の中やらを手当り次第確認するが、盗られたものは何一つなかった。

「うーむ、物取りではないとすると、挨拶もなしに帰ってしまったということか？」

「別にいいじゃないか。特に期待していたわけでもないし……　少し惜しい気もするがな」

樹里がそう云うや、昌平は「違いない」と苦笑いを浮かべた。

壱・足枷（後書き）

大変長らくお待たせしました。第九話です。

弐・筥迫（前書き）

筥迫（はこせこ）：女性和装の正装、打掛を着る際の用いる小物入れ。胸元の合わせに差し込まれる箱状の装飾品で、金襴（きんらん）、緞子（どんす）、羅紗（らしゃ）などの華やかな刺繍を施し、飾り房がついている。

弐・筈迫

「ねぇ、弥生姉さん？　カラ、見かけなかった？」
皐月が慌てた表情で弥生に尋ねるや、質問に答えるように、弥生は首を横に振った。
「ちゃんと寝る前にゲージの中に入れといたの？」
「入れてたけど、あの子ズル賢いところがあるから、ゲージの扉開けて脱走してるのよ」
「秘密基地とかは確認したの？」
そう訊かれ、皐月は頷いた。

「急ぎなさいよ。今日は大事な用があるんだからね」
「わかってる。私はもう準備は出来てるし……　あぁ、もう！　どこ行ったかなぁっ？」
皐月は弥生の部屋を出て、自分の部屋の中を探し回った。因みにカラとは皐月が飼っているハムスターの名前である。

「あ、やっといた……」
5分後、皐月はそう云いながら、ハムスターの前に手を差し伸べ、掌（てのひら）に乗せた。
ハムスターは神経質な動物で、突然うしろから捕まえようものなら、鋭い歯で噛まれてしまうからである。
皐月はカラをゲージの中に入れ、今度は逃げないようにとゲージの入口を洗濯バサミで止めた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「んっ、どうかした？　葉月……」
居間で招待状を眺めていた皐月が葉月の視線に気付き、尋ねた。

その葉月は、皐月を凝視している。
「――皐月お姉さまカッコイイなって」
そう云われて嫌なものではないが、皐月は苦笑いを浮かべた。
皐月の服装はシックな黒のスーツでしめており、普段束ねている髪は解かれ、前髪をカチューシャで上げている。
「それで下がパンツじゃなくて、スカートだったらもっといいんだけどね？」
「あたしがスカート嫌いなの知ってるでしょ？　動きにくいったらありゃしないし」
皐月は弥生を見ながら、文句を言った。
執行人として巫女服を着る場合もあるが、普段は男女関係なしの服装を好んで着ているため、スカートを履かない。履くとすれば学校の制服くらいなものである。

「弥生お姉さまは可愛いかな？」
そんな二人を知ってか知らずか、葉月は弥生の服装の感想を言った。
「歳をわきまえなさいよ？　歳を……」
まるで違うことを皐月に言われたが、弥生は気にしていなかった。
弥生の服装は、趣味であるゴスロリをすこし抑えたと云ったところか、ドレスには変わりないが、スカートの裾にはフリルが付いており、腰にはリボンが付けられている。
胸元が少し開けられており、両腕には肘辺りから手の甲まで布の手袋をはめている。

「葉月も可愛いわよ」
そう云われ、葉月は笑みを浮かべる。
葉月は子供らしい服装で、赤と黒のチェック模様のドレスを着ている。

三姉妹が普段しないほどの豪華な服装をしているのかというと、今日は拓蔵の知り合いが結婚式を迎えるとのことで、三姉妹共々招待されていた。

「さて、三人とも準備は出来たか？」

拓蔵にそう云われ、三姉妹はそちらを見るや、首を傾げた。

三姉妹たちはおめかししているというのに、拓蔵の服装は普段と対してかわりないからだった。一応礼服を着てはいるが、どこか抜けたところがある。

「じ、爺様？　もう少しビシッとしたほうが……」

弥生はそう云いながら、拓蔵の襟元のボタンを止めた。

「うーむ、あっちに着いてからでもいいじゃろ？　あんまり首をしめられるのはなぁ」

文句を言いながらも、拓蔵は鏡の前で身形（みなり）を整えていた。

「さてと……　そろそろ本当にいかないと」

弥生がケータイの液晶を見ながら云った。時刻は午前１１時である。

「阿弥陀くんに連絡して、車を持ってきてもらうかのぅ？　そうすれば、渋滞してても道を通してもらえるぞ？」

「爺様？　それ、職権乱用。――ってか、そんな権利ないでしょ？」

既に拓蔵が元刑事であることを知っている皐月たちであるが、拓蔵が阿弥陀警部よりも階級が上だということは未だに知らない。

拓蔵はそんな彼女たちを見ながら、苦笑いを浮かべた。

――数分後、稲妻神社の鳥居前に一台の車が停った。

「こんにちわ。迎えにきました」

玄関先から声が聞こえ、弥生はそちらへと向かう。玄関にはスーツ姿の男性が立っており、手袋をはめている。

「三人とも迎えきたわよ！」
そう呼ばれ、皐月と葉月、拓蔵は戸締まりの確認をし、稲妻神社を後にした。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「――綺麗だ……」
その言葉を云うや、男は照れるように女性から目を背けた。頭の中で呟くのは簡単なことだが、いざ口にするとなると難しいものである。言葉をかけられた女性は綿帽子に隠れた顔で、静かに笑みを浮かべた。

「しかし、お前がこうやって結婚できるとはなぁ」
昌平がそう云うや、男……樹里は苦笑いを浮かべる。
「兄さんも早く出来るといいな」
「るっせぇ、この幸せもんが」
昌平はうしろから樹里の肩に手をかけ、頭を拳でグリグリとする。
そんな二人を見ながら、新婦は笑みを零した。

「さぁ、新郎と男たちは部屋を出ていってもらいましょうか？」
黒の留袖を着た歳をとった女性にそう云われ、樹里と昌平は控え室を出ていった。
「母様……」
新婦は不安な表情を浮かべながら、女性を見た。
「大丈夫ですよ。今日のあなたはとても素晴らしいほど美しいです」
そう云われ、新婦は天井を仰いだ。

「……このまま、樹里さんを騙してていいんでしょうか？」
その言葉に女性は目を細める。
「あなたがあの方を選んだのです。また樹里さんがあなたを選んだ

のも、彼が決めたこと……　私がとやかく口を出すことではありません」

女性は鏡に映る新婦の表情を見た。

「私たちが……　人間と交わることは本来許されないこと……　ですが、そのルールを破るのもまたあなたが決めること」

「母様は怒らないのですか？」

そう新婦が云うや、女性は静かに目を閉じた。

「先程も云いましたよね？　美咲……　誰かを好きになることに、誰かと付き合うことに、そしてその人と結婚することを決めるのはあなただと……　娘の結婚を許さない親がいますか？　それがたとえ赦されないことであっても――　あなたの運命を私が決められるわけがありません」

女性は新婦……美咲の肩を軽く叩いた。

「不安なのはわかります。ですがそれを見せないのもあなたの役目なのですよ」

そう云われ、美咲は深く深呼吸をした。

鏡に映る母娘の顔には、本来人間にはないものがあった……

参・嫁入

稲妻神社から車で３０分ほどかかる場所に結婚式場がある。
和洋どちらとも可能という式場で、最近は神前式を終えたのち、洋風の結婚式を行う新郎新婦も少なくない。どちらも神に誓うという意味では同じことに変わりないからだ。
また、どちらかというと、洋風はパーティーとして利用するという形でもある。

神前結婚式を新郎新婦それぞれの家族のみで行い、拓蔵や三姉妹はその後のパーティーまで時間があるため、式場の外をぐるり一周していた。

「やっぱり、ウエディングドレスは純白よね？」
弥生がそう云うや、皐月はキョトンとする。
「なんか文句ある？」
「いや、別にないけど……　姉さんのことだから、てっきりゴスロリに改造するやつと思って……　ねぇ？」
皐月に話をふられた葉月は咄嗟に外方（そっぽ）を向いた。

「そういう皐月はどうなのよ？」
「私は……　まだ考えたことないな……　そもそも結婚って、相手がいなけりゃしたくても出来ないでしょ？」
皐月がそう云うや、弥生は呆れた表情を浮かべた。それを見て、皐月は首を傾げる。
「あのね……　夢見るのも女の子の特権でしょ？　なに現実主義なコト云ってるのよ？」
（そう言われても、異性を好きになったことって、一回もないんだ

けどなぁ……）

皐月は弥生の言葉を記憶の片隅に置くことにした。

「爺様、何見てるの？」

葉月に声をかけられた拓蔵が見ていたのは、式場の屋根にある十字架だった。

「三人とも、十字架は何を意味しているか知っておるか？」

「たしか、イエス・キリストが磔刑（たくけい）に処されたときの刑具と伝えられていて、主要なキリスト教教派が、最も重要な宗教的象徴とするもの……だったっけ？」

弥生がそう説明する。

「まぁ、結婚するのに神様の許可なんぞ必要ないし、役所で婚姻届を処理されてしまえば、形式上夫婦になるからのう」

拓蔵がそう云うや、（それじゃ、なぜ訊いた？）と皐月と弥生は心の中でツッコミを入れた。

「――じゃが、神に誓いを立てて、自分たちを戒めるためにも必要じゃしな」

そう拓蔵が云うや、ボツボツと小雨が降り始め、四人は屋根のある方へと避難した。

そんな四人をひとりの男性がうしろから声をかけた。

「黒川さん、来てたんですね」

昌平が拓蔵に声を掛ける。

「これはこれは細川さん。弟さんが先に結婚とは……」

「なははは……　数分ほど前に同じことを言われましたよ」

二人はケラケラと大笑いする。

「おや、弥生ちゃんたちも来てくれたんだね？」

「お、小父さん……　その弥生『ちゃん』は止（や）めてくれないかな？」

弥生は照れながら言う。

「何を云ってるんだ？　小父さんは君たちを小さい時から知ってるんだ。それくらいの時から云ってるのに、今更変えるのは無理というものだ」

そう云われ、弥生は諦めたのか、それ以上文句を言わなかった。

それは皐月と葉月も同様であった。

「それで、新婦さんは一体どういう方なんですかな？」

「もう凄い可愛いい娘さんでね？　あのバカ弟には勿体ないくらいなんですよ」

へぇ……と三姉妹は感心する。

「弟がしつこく口説いて、漸く手に入れたのかというと、そうじゃないんです」

「というと？」

「新婦である孤祭（こまつ）美咲さんの方から、弟に付き合ってくださいって云ったらしくてね。いやはや、どう見ても月とスッポン、雲泥の差、美女と野獣ってな感じなんですよ……」

いくら兄弟とはいえ、少しばかり言い過ぎである。

話を聞くと、新婦である孤祭美咲は、新郎である細川樹里が働いている会社に去年新入社員として入社した。

入社するやいなや、愛嬌のある雰囲気と誰にでも優しいということから、男性陣から非常にモテた。

当然、そうなってくると女性陣から妬まれる……ということがなく、相談相手としても重視されていた。

誰もが新郎である細川樹里と孤祭美咲が結婚するとことに驚きを隠せないでいた。

――が、彼女が選んだという事を聞くや、掌を返したように祝福した。

「おっと、そろそろパーティーが始まりますね、案内しますからこちらへどうぞ」
昌平が腕時計を見ながら云うと、拓蔵と三姉妹を会場へと案内した。

ゾロゾロと案内されている中、皐月はふと視線を感じ、そちらを一瞥した。
物陰から小太りの男性がこちらを見ている……と言うよりかは睨んでいるといったほうが正しい。
「皐月？　早くっ！」
既に入口前で待っている弥生に呼ばれ、皐月は会場内へと入っていった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「火車」で通夜の座り順を説明したことがあったが、結婚式場でも同様に決められた席がある。
新郎の友人として招かれている拓蔵と三姉妹は新郎側から見て、一番うしろの方に席があり、近いところから時計回りに1・3・4・5・7・8・6・4・2と席がある。新婦側はその逆周りに1・3……となっている。
1番の席に拓蔵が座り、皐月は左利きということもあってか、2番の席に座る。葉月は皐月の隣である4番に座り、弥生はその正面である3番に座った。
弥生の横には葉月と同じくらいの少女が座っており、その隣には胸の谷間を強調したドレス姿の女性が座っている。

横のテーブルは新郎の親戚。前のテーブルは会社や恩師、斜め前のテーブルでは拓蔵たちと同様、同僚や友人らが座る席になっている。

会場にいる人間は、新郎新婦を今か今かと待ち構えている。結婚式場特有の空気とでもいったところである。

突然会場内が薄暗くなり、全員が息を潜めた。

結婚行進曲がゆっくりとフェードインしていき、会場の扉が開いた。

スポットライトと歓声が、会場へと入っていく二人を祝福する。

新婦である美咲が着ている純白なドレスは、誰もがうっとりするほどに美しく「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花」を描いたようなものだった。

新郎である樹里もぎこちないながらも、ゆっくりと新婦ともども足取り揃え、来客人に会釈していく。

そんな二人を三姉妹はボーと惚けたような表情で眺めており、それを拓蔵はつまらなさそうに見ていた。

「どうしたんですか？　拓蔵……　場に似合わぬ表情を浮かべて」

そう声をかけられ、拓蔵はそちらを見た。

「え、闇魔さま？　それと脱衣婆も……」

拓蔵に声をかけたのは、弥生の隣に座っている少女……瑠璃だった。

その隣に座っているのは脱衣婆である。

三姉妹も『何時の間に？』と云った感じに驚いている。

「えっと……　確か、私の隣に座ってた子って？」

「ええ、実は本来来るはずの家族は、今日が葬儀と重なったらしくて、急遽家族全員欠席してます。まぁ、少しばかり新郎の記憶をい

じりましたが……　式が終われば、私と脱衣婆の記憶は消えてると思いますよ」

「そ、そんな事するほどの理由があるの？」

皐月の質問を脱衣婆が答える。

「そうじゃなかったら、私と閻魔さまがこんなところにいないでしょ？」

そう云われたところで、三姉妹と拓蔵には理由が見当たらない。

「実は九尾から知り合いが結婚するからって、連絡を受けてね。自分は忙しいからいけないって……」

「九尾って……　白面金毛九尾（はくめんこんもうきゅうび）のこと？　また凄いところから――って、妖怪でしょそれ？」

「まぁね……　でも妖狐（ようこ）は人を騙し、自分たちの縄張りから追い出すのが主だから、罪にはならない。それに金毛九尾に力で適うやつは妖怪でもそうそういないわよ？」

そう云われ、漸く三姉妹は瑠璃と脱衣婆がここに来たことを理解した。

「新婦が化け狐ということ？　そうは見えないけど……」

「白狐（びゃっこ）ともなれば、力を抑え、人を化かす事くらい容易いこと。留袖を着ているのは、新婦の母親ですね。彼女も同様に白狐でしょう」

そうなると、新婦側の友人や親族は一部を除けば全て妖狐が化けていることになる。

「集中して見ないと全然気付かないや……」

皐月は目を細めながら云った。三姉妹と拓蔵が気付かないとなれば、普通の人間は誰一人気付くものはいない。

「それとさっき小雨が降ってたでしょ？」

脱衣婆にそう云われ、三姉妹は頷いた。

「晴れた日に突然雨が降るのを「狐の嫁入り」って言わない？」

そう云われ、なるほど……と納得した。

『狐の嫁入り』は日照り雨の事をさすが、山野で狐火が連なって、嫁入り行列の提灯のように見えるという意味もある。

意味が日照り雨と生じたのは、突然の天候の変化が怪奇と見られていたからと伝えられている。

肆・末広（前書き）

末広（すえひろ）：結納品や和装の際に使用する扇子。末の方が広がっていることから、こう呼ぶ。

肆・末広

「美味しいぃ」
葉月が直感的に感想を述べた。
「うん。鳥肉が柔らかいし、舌の上で溶けるから全然噛まなくてもいいわね」
「ポタージュもピュレで且つフロアだというのに、スーと喉を通っていきますし、パンとの相性もいいですね」
各々用意された料理を堪能している。

「皆さん、楽しんでおられるようで何よりです」
声をかけられ、皐月はそちらを見ると、樹里と美咲がキャンドルサービスとして、来客への挨拶回りをしていた最中で、ちょうど皐月たちの席へと来たところだった。
「ご結婚おめでとうございます」
皐月は美咲が妖怪であることを知っていたが、水を差すような言葉は言わなかった。
たとえ赦されないことだと知っていても、傷を抉るような事はしない。
それは拓蔵や弥生、葉月も同じく、瑠璃と脱衣婆も祝福の言葉を述べた。

「しかし、本当にお綺麗なお方ですな。樹里君には勿体ない」
拓蔵が笑いながら言う。
「ええ。本当に僕なんかでよかったのかなって」
「樹里さんは素晴らしい方です」
美咲がそう言うと、樹里は照れてしまった。

「それに……　私は樹里さんでよかったと思っています」

「……っ？」

ぼんやりとした蝋燭の灯りに照らされている美咲の表情が、幸せな時だというのに曇っていたのを皐月は不思議そうに眺めた。

「……どうかしたんですか？」

美咲に声をかけられ、皐月は目を点にする。

「いや、何か狐に抓まれたような目をしてらしたので」

「ははは……　美咲さんが余りにも綺麗だから見とれてただけでしょう」

拓蔵がそう言うと、美咲はクスっと笑を零した。

「――どうしたのよ？」

樹里と美咲が去った後、弥生がそう皐月に尋ねた。

「いや、いくら樹里さんを騙している……としても、白狐ほどの妖狐が自分自身で決めた人なのに――全然幸せそうな表情じゃなかったから」

「それなんですけどね……　美咲は一度、樹里と昌平に殺されかけていたことがあります」

瑠璃がそう話し出すと、拓蔵と三姉妹は瑠璃の方を向いた。

「今から4年ほど前の話ですが、樹里と昌平がある山で狩りをしていました。その時仕掛けていた罠に掛かったのが子狐の美咲でした。昌平は狐の美咲を撃ち殺そうとしましたが、あくまで猪狩りをしていた樹里は、美咲を罠から逃がしたんです」

「そしてその日の晩。母狐である花梅（あやめ）と共に樹里と昌平が寝床にしている山小屋へと訪れ……　怨みをもって樹里と昌平を殺そうとした」

脱衣婆はそう云うが、呆れたような表情を浮かべた。

「だけど、美咲は助けてもらった樹里だけは殺すことができなかった。花梅は殺せと命じたけど、頑なにそれだけは出来なかった――」

「それで幸せそうな顔じゃなかったってこと？」
弥生がそう云うと、瑠璃は少しばかり考えるが、返答に困っていた。

「私は地蔵菩薩として露世の事を見てきています。だけど、上辺だけのことしかわからないこともありますし、あの子がどういう気持ちなのかもわかりません――
だから、彼女が幸せかどうかは、これから彼女自身が知ることでしょう」
「今段階ではなんとも言えないということじゃろうが……　人間と妖怪、種族の違うものが幸せというのは難しいと思うぞ？」
「それこそ一昔前の異国同士の結婚みたいにね」
脱衣婆そう言うと、三姉妹は首を傾げた。

今ではさほど珍しいものではない違う国どうしの結婚であるが、一昔前だと結婚自体難しく、また言葉や風習の違いから、結婚どころではなかった。
結婚というのは自分たちだけの問題ではない。自分の周りで関係のある人間さえも巻き込んでしまう。

「だけど……　白面金毛九尾はそれを赦した……　美咲が樹里に白狐であることがバレない以上は幸せなんだということでね」
「ただひとつだけ、九尾は花梅と美咲に条件を出しています」
瑠璃の言葉を葉月が鸚鵡返しする。
「自分たちが白狐であることがバレてしまえば……消滅すること」
その言葉を聞くや、拓蔵と三姉妹は驚きを隠せないでいた。

「自分が妖狐であることを知られるというのは、それくらいのリスクを背負うということです」
「でも……　バレたとしても……　樹里さんから美咲さんの思い出

が……」

皐月がそう言うと、脱衣婆は視線を逸らした。

「消滅するというのは……　全てが亡くなるということです」

「記憶も何もかも消えてしまうってこと？」

瑠璃は俯きながら、小さく頷いた。

「それくらいのリスクを背負っていながらも、なお樹里を選んだ美咲を……　金毛九尾は結婚を赦した……」

瑠璃と脱衣婆の話を聴きながら、皐月は新郎側のキャンドルサービスを終え、新婦側へと移っている樹里と美咲を見るや、その光景にゾッとした。

人間である会社の同僚たちは樹里と美咲を心から祝福している。

しかし、人の姿に化けた妖狐たちは、まるで二人を嘲笑するかのように、眼を真っ赤にし、耳まで裂けた笑みを浮かべている。

霊感すらない人間から見れば、彼らも結婚を祝福しているように見えるが、皐月たちからすれば、嘲罵（ちょうば）、薄笑い、揶揄など……　樹里と美咲の結婚を心から祝福していないことが、その言葉通り『目に見えた』。

妖狐たちはおろか白面金毛九尾自身も二人の結婚に祝福などしていない。

彼らからすれば、この余興はただの馬鹿な子狐の遊び事であり、見世物でしかない。

人間よりも何十倍も生きる彼らからすれば、本当につまらない余興の一つでしかないのだ。

「人を騙すことは彼らからすれば極々当たり前のこと……　ましてや、人を好きになることなど烏滸（おこ）がましいことでしかありません」

瑠璃はスプーンを持つ手を震わせ、言葉を発した。

「だけど……　一時の……　ほんの刹那だけでも、幸せだと思ったって罰はないはずです」

怒りを押さえ込んでいる瑠璃を見ながら、皐月は本当に幸せそうな樹里と、幸せを望むことを赦されていない美咲の表情を見ていると、瑠璃の怒りが理解できた。

幸せだと思うことに罪はない。誰かに幸せだと思えと言われて、「はいそうですね」と同意するものでもない。

幸せとは自分が決めることである。

たとえそれが許されないことだとしても……

今その瞬間だけ幸せだと思ってもいいのだ。

伍・寿留女（前書き）

寿留女（するめ）：するめいかの干物。不時に備える保存食であり、長持ちするという事から、「花嫁が永く、その家に留まっていられますように」、「幾久しく幸せな家庭を築くように」という願いが込められています。結納時には、奇数枚を包みます。

伍・寿留女

披露宴も終わりに近付き、ゾロゾロと来客たちは会場の外へと出ていく。

拓蔵と三姉妹、瑠璃と脱衣婆は、外で待っている使用人から、一掴みの米が包まれた袋を渡さた。

それを手に取るや、瑠璃と脱衣婆は不思議そうに袋を見つめていた。

そんなふたりに弥生がライスシャワーにつかうものだと説明する。

ライスシャワーはその言葉通り、「お米」を新郎新婦に目掛けて上空から降らす演出である。

「お米には繁栄と豊穣の意味があり、ふたりが末永く豊かに暮らし、子宝にも恵まれるように……　という意味があるんじゃよ」

葉月が不思議そうに『ライスシャワー』の意味を訊くので、それを拓蔵が答える。

「まぁ、白狐は稲荷神とも言われていますからね。農業の神としての習わしでしょう」

瑠璃は白狐として説明したのだろうが、人間がそこまで深く考えているはずがない。

「――どうかしたんですか？」

弥生に声をかけられた瑠璃が振り返る。

「このまま……　何事もなければいいんですけどね」

その言葉に、三姉妹は首を傾げた。

「お、出てきた――」

誰かがそう言うや、全員が入口の方を見た。

出てきた樹里と美咲がゆっくりと皆のところへと歩いていく。

ふと見た二人の表情が幸せそうだったことから、（末永く幸せであって欲しい）と皐月は心から祝った。
何時の日か、自分たち姉妹にも好きな人が出来て、やがては結婚し、子供が出来る。
当たり前ではないが、それくらいちっぽけな夢を想像してもいい。
――にも拘らず、何故かそれが叶わないと脳裏をかすった。

「どうかしたのですか？」
隣にいた瑠璃にそう云われ、皐月はそちらを見た。
「――いいえ……　樹里さんと美咲さんには、たとえどんな形であっても、幸せでいて欲しいなって」
瑠璃もそれに関しては同意だった。

突然拓蔵のケータイが鳴り出した。
「爺様。マナーモードにしといてって……」
「ああ、すまんな――　阿弥陀くんから？」
ケータイの受信を見るや、拓蔵は首を傾げる。
「はいもしもし？　ああ……」
電話に出た拓蔵の表情は、徐々に強ばっていく。
「うむ、わかった……　そっちも細心の注意をはらっておいてくれ」
そう云うや、拓蔵は電話を終えた。

「阿弥陀警部が……　なんて？」
弥生がそう尋ねると、拓蔵は来客を見渡した。
「阿弥陀くんからの連絡では、一時間前にこの近くにある宝石店で、強盗殺人があったそうなんじゃよ。その犯人は現在逃亡中。近くに潜んでいる危険性もあるので重々注意するようにとのことじゃ」
「――殺害方法は？」と瑠璃が尋ねる。
「拳銃で一発、頭を……」

つまりは即死である。

「にしてはこういう場所って、結構入り込みやすいんじゃない？」

脱衣婆の言葉に瑠璃が真意を尋ねる。

「だって、気持ちが高ぶっている絶好の瞬間に『誰が増えている』なんて考えないでしょ？」

そう云われ、瑠璃と三姉妹は来客たちを見渡した。

「わっかんないや……」

葉月が愚痴をこぼす。

「あたしたちを入れて一応４０人ほどの来客らしいけど、増減の確認は難しいわね」

弥生も愚痴をこぼしたくてそう言った。薄暗い披露宴の中では、誰が誰なのかわからないし、何より今ここで水を差すようなことをするのは、樹里と美咲に失礼だと判断した。

「それじゃ、犯人が近くに潜んでいるかもしれないってのは、自分たちだけのことでいいですね」

瑠璃にそう言われ、三姉妹と拓蔵は頷いた。

「狐たちはさっさと終われって顔してるけどね」

「云われてみれば確かに……　飽きたみたいですね」

瑠璃と脱衣婆が言うように、人に化けた妖狐たちは頻りに欠伸をしている。

二人の門出を見送るのも、結婚式のしきたりと云えばそうなるのだが、もともと祝ってなどいない彼らからすれば、小一時間で十分飽きが来ていた。

そんなことを露知らずか、樹里と美咲は来客たちの間をゆっくりと通っていき、来客らはその時にライスシャワーをする。

態々袋に包んでいるのは、片付けやすくするためである。
二人の門出を祝う声が彼方此方から聞こえ、式を終えようとしていた時だった。

「お、お待ちくださいお客様っ！」
式場の方から声が聞こえ、何人かが其方へと視線を送った。
「ええい、あんの馬鹿息子は何処をほっつき歩いておるのだ？」
少しばかり歳をとった男性の苛立った声が聞こえてくる。
「今日は大切な結婚式だというに、花嫁を待たせるとは、何たる無礼だ」
気になった拓蔵が男性の方へと歩み寄り、内容を訪ねた。

「ああ、すみません。少しばかり倅が遅れておりまして」
話してみるや、案外人当たりのいい男性である。苛立ってはいるものの、周りに怒りを撒き散らそうとはしていない。
「息子さんがですか？　それはおめでたいことで」
「ええ。めでたいんですけどね？　倅が来ないものですから、式の開始が滞っているんですよ。他に結婚式をあげる方々もいらっしゃるだろうし、これ以上時間を遅らせることは出来ないんです」
拓蔵が式の開始時間はと尋ねるや、男性は午後1時からと答えた。
「午後1時からって――　もう遅刻とかで済まされるような時間じゃないんじゃ？」
皐月が腕時計を見ながら、そう云う。時刻は現在午後4時になろうとしている。

「ええ。だからこうやって電話で連絡を取ろうとしてるんですが、捕まらないんです」
「息子さんの特徴は？　知り合いに尋ねてみましょうか？」
拓蔵がそう言うと、男性はキョトンとする。
「じ、爺様……　別に事件に巻き込まれているとかはまだわからな

いんでしょ？」
「そうですよ。人探しとはいえ、私用で警察を使うのは御法度では？」
葉月と瑠璃にそう云われ、拓蔵は少しばかりケータイを睨みつけた。

「け、警察の方なんですか？」
「え？　ええ、元、ですけどね……」
男性が異様に焦った表情を浮かべたので、拓蔵は首を傾げた。
「警察に知られたくないことでもあるんですか？」
皐月がそう尋ねると、男性は頭を赤くする。
「こ、この子は一体何を聞いているんだ？　そ、そんなことはない……」
語尾が少しばかりトーンダウンしていたのを、拓蔵らが聞き逃す訳がない。
「知られたくないことがあるのなら、それで結構。ですが、これだけ来るのが遅れているとなると、遅刻どころの問題ではないのでは？」
拓蔵の云う通り、四季の開始予定時間を3時間も遅れている。準備等を視野に入れると、午後1時から少なくとも1、2時間前には式場に来ていなければいけない。

「すみません。倅を探してみてくれませんか？」
男性は説得に折れ、拓蔵にお願いをした。
「ええ。ちょっと待っててください。今かけてみますから」
そう云いながら、拓蔵はケータイで阿弥陀警部に連絡をした。

「ああ、もしもし、仕事中すまんな？　阿弥陀くん？　あんた今何処におるんじゃ？」
（先程連絡したとおり、襲われた宝石店の現場をみてますが？）

「そうか？　調べるのは若いモンに頼んで、少しばかり席外せんかのう？」
（いくら神主さんのお願いでも、公私混同は駄目だと思いますが？）
「まぁ、そこは少しばかり折れてくれんかの？」
拓蔵が少しばかり猫撫で声を挙げた。
（はぁ……　一応訪ねますが、一体何ですか？）
「実はな、人を探して欲しいんじゃよ？」
拓蔵はそう云うや、男性の方を見た。

「そういえば、息子さんの特徴を訊いておりませんでしたな？」
そう云われ、男性は、
「息子は２６歳でして、身長は百七十いってませんし、少しばかり太ってます。髪はさっぱりとしております。ただ、目が非常に悪く、眼鏡をかけてまして、左手に小さな痣があるんです」と説明した。

（――あれ？）
皐月は男性から聞いた話に思いあたりがあった。
「皐月お姉さま、どうかしたの？」
「いや、小太りの男性なら、式場に入る前に物陰でこっちを見てたのが……　でも、小太りなんて探せばいくらでもいるし、息子さんは眼鏡をかけているんですよね？」
そう尋ねられ、男性は頷いた。
「コンタクトレンズとかは？」
「その線もありますが、とんでもない。息子は先端恐怖症なんです」
そうなると、コンタクトレンズを入れるなど以ての外と言うことになる。

「弥生、遊火を呼んで、探してもらっては？」
瑠璃にそう云われ、弥生は遊火を呼び寄せた。
遣ってきた遊火を見るや、姿が見えない皐月と男性以外は、目を

点にした。

「や、弥生……　いくら自分の使い魔とはいえ、なんてものを着せとるんじゃ？」

拓蔵がそう弥生に尋ねる。

遊火の服装は巫女服の袖が離れており、腋が出ている。

裾の方にはフリルが付けられており、緋袴も足元までどころか、膝小僧が悠々見えているほどの長さである。

皆に凝視されているせいもあってか、遊火は俯いている。

「だって……　今日着る服、控えめにしなさいって爺様から言われたし、衝動的にもう一着デザインを思いついたから」

弥生が愚痴を零すように呟いた。

「だからって、豊宇気毘売からいただいた羽衣を、そのような衝動的なことに使うのは、どうにもいただけませんね。皐月やあなたたちを妖怪から身を守ってくれているものでもありますし、布一枚作るのにも相当神力を使うのですよ？」

瑠璃にそう云われ、弥生は頭を下げた。

「さて遊火、少しばかりお願いを聞いてくれませんか？」

その言葉に遊火は首を傾げた。来たばかりで状況を説明されていないからだ。

「実は人を探して欲しいのよ？　２６歳くらいの男性で、身長は低く小太り。眼鏡を掛けていて、手には痣がある」

弥生は説明しながら、男性に確認を取るや、男性はそれに頷くが、首を傾げる。

遊火が見えない彼からすれば、何もないところに向かって話をしている変人にしか見えない。

遊火は要件を聞くや、無数の火の玉となって、空へと消えた。

陸・子生婦（前書き）

子生婦（こんぶ）：昆布のこと。昆布は成長が早く繁殖力が強いことから、「子宝に恵まる」、「子孫繁栄」という願いが込められています。「よろこぶ」ということから、祝い事によく使用されています「子生夫」「幸運夫」とも言います。

陸・子生婦

拓蔵に連絡を受けた阿弥陀警部は溜息を吐いた。
「まったく、人使いの荒い神主だことで」
「神主さんはなんて云ってたんですか？」
大宮巡査がそう尋ねるや、阿弥陀警部は呆れた表情で電話の内容を伝えた。

「人探しですか？」
「ええ。今知り合いの結婚式に呼ばれていて、同じ会場で式を行うはずだった新郎が行方不明……とはいかないが、あまりにも遅すぎるため、席を外して捜索してくれないか」
大宮巡査は捜索人の特徴を尋ねた。
「――２６歳くらいの男性で、背丈は小さく、小太り。特徴といえば眼鏡と手に痣がある」
阿弥陀警部は少しばかり首を傾げながら言う。
「それでどうするんですか？」
「一応捜索にはあたってみますが、こちらとしては、こっちの方が優先したいんですけどね――」
言葉を発するや、阿弥陀警部の目が険しくなっていく。

「犯人は未だに逃走中。捜索を頼まれた人間は背丈が低くて小太り……　まさかとは思いますけどね」
阿弥陀警部は防犯カメラに写っていた犯人をビデオで確認していた。

ビデオに移された犯人と思われる人物は、背丈が小さく、また小太りであった。

しかも犯行を及んだ時間は、午後1時ほどであること。
「木を隠すなら森の中、人を隠すなら人込みの中……というわけですか？」
「たまにいるんですよね。結婚式の練習かそんなので、サクラになる人って」
つまりはそれに紛れ込んでいる可能性を否定できないというわけだ。

結局のところ、強盗犯の特徴と多少なりとも一致していることもあり、阿弥陀警部と大宮巡査を含んだ数名で捜索に乗り出した。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

――時同じく、遊火が戻ってきた頃だった。
だいぶ火の粉を散らばらせていたのか、少女の姿になった時にはへとへとになっていた。
「それで、見つかりましたか？」
瑠璃が訊ねるが、遊火は申し訳ない表情で首を横に振った。

「すでに町を出ている可能性もありますし、なにより情報が少なすぎるんですよ」
「息子さんが行きそうな場所はないんですか？」
拓蔵が男性にそう尋ねると、男性は少しばかり考え込み、
「いや、今日は結婚式ですからね。他に行くなんてことはないでしょ？」
しかし既に3時間も遅れていて、他に行くところがないというのは説得力がない。

「遊火っ？　阿弥陀警部が言っていた強盗意外に事件や……事故がなかったかわかる？」

皐月は見えている人間の視線の先に向かっていった。恐らくその先に遊火がいるのだと考えたからだ。

『……いえ、特には』

遊火の言葉を瑠璃が代弁する。結局皐月には遊火の姿と声が聞こえていないからだ。

（やっぱり、あの時の声って――　私の聞き間違いなのかな？）

皐月は寂しそうな表情を浮かべた。

あの時、コテージで聞こえた声は確かに遊火の声だと拓蔵が皐月に説明した。が、その一瞬を最後に、数日ほど経った今なお、皐月は遊火の声を聞いていない。

皆には見えているし声が聞こえている……にも拘らず、自分だけが見えていないということがなんとも歯痒かったからである。

「皐月、気にすることはないわよ。遊火は幽霊じゃなくて妖怪なんだから、いつか必ず見える日がくるわ」

脱衣婆がそう皐月に声をかける。

「それに、あんたの霊視は弱いものには通じないようになっている。より凶悪な妖怪に、心の隙間に入り込まれ、狂気と化した人間に対してのものでもあるんだから」

「それって、どういう意味？」

「要するに、弱い人間ほど妖怪に取り憑かれやすい。人を怨んでいるということは、それだけ心に余裕が出来なくなっている。そんな隙間に悠々入ることが出来るのは力が強い妖怪くらい。

弱い妖怪は人を化かすか、露世でただただのんびり暮らしているかくらいよ」

脱衣婆はそう云いながら、狐たちの群れを見た。

「見なさいな？　人間は樹里と美咲を祝福しているというのに、狐どもはケラケラ嗤ってる。

本当に強い妖怪ってのは、決して誰かを嗤わないのよ。

知ってる？　チャンピオンが最も恐れているのは自分よりも弱い選手だって……」

その言葉に皐月は首を傾げた。どこをどう考えたらそんなことになるのだろうかと……

「チャンピオンっていうのは、一番上でいなければいけない。その責任感もあるし、なにより下に落ちれば落ちるほど、誰かに貶される恐怖があるからなのよ。

某野球チームなんて、今じゃシーズンで言うAクラス（6チーム中上位3チーム内）の常連だけど、最初の頃は負ける度に生卵を移動バスに投げられたくらいに貶されていたんだからね。

期待されているほど、裏切られた感があるから、ファンはそういうことをする。

そうならないためにも、チャンピオンは上にいなければいけない、常勝でなければいけないという責任感ができてしまう」

脱衣婆は瑠璃を見やる。

「閻魔さまだって、ずっと十王で有り続けなければいけない。だけど、あなたたちと一緒に居る時の方が、地獄にいる時よりもよく喋るのよ」

意外な話に皐月はキョトンとした。瑠璃はイメージ的にキャリアウーマンのようなものと感じていたからだ。

「二人とも、何を話しているんですか？」

瑠璃に声をかけられ、皐月と脱衣婆はそちらへと振り向く。

「い、いや、特になにも……ねぇ？」

脱衣婆がそう云うや、皐月は少しばかり不思議そうな目をするが、表情から察し、頷いた。

瑠璃はそれ以上のことは訊こうとはしなかったが、

「脱衣婆……　人の心配をする前に自分の心配をしなさい」

そう告げられ、脱衣婆はキョトンとした。

「な、なんかあったの？」
脱衣婆は少しばかり考えるや、思い出したようにポンッと手を叩いた。
「あー、多分あれだ。以前、信乃が瀧原希空の父親を成仏しなかったことに対しての処罰を、本人に伝えてなかったからだろうなぁ」
皐月と信乃は執行人である以上、成仏という形で妖怪と化した人間に罪状を言い渡さなければいけない。
それが執行人の役目であり、義務であるので文句は言えない。

「ただ、信乃はきちんとした理由がある……それはあなたも知っているはずよ」
「まだそれを見つけてもいないの？」
「見つけていないし、退治したところで、あの子が変わるとは思っていないわ、むしろ今まで以上に見境なく妖怪を退治するでしょうね」
脱衣婆は少しばかり空を仰ぎ、一瞬だけ口を動かした。
その言葉は、耳があまり聞こえない皐月に聞こえることはなかった。

漆・優美和（前書き）

優美和（ゆびわ）：指輪のこと

「こんにちわ……　もう時間的にこんばんわですかね？」
式場に阿弥陀警部と大宮巡査が遣ってくるや、拓蔵らに挨拶をする。
「ああ、阿弥陀くん。こちらが捜索をお願いされた……幸宮甚平さんじゃ」
拓蔵が状況説明をする。
「あれ？　そういえば式は？」
弥生がそう云いながら、人込みの方を見る。自分たちは蚊帳の外だったため、すっかり終わっていたのか気付いていなかった。
「式が終わり、指輪交換も終えた。今は家族だけで団欒としてるみたいですね」
瑠璃がそう言うので、そちらを見ると、樹里と昌平にその両親、美咲と花梅が話をしていた。
友人や、人に化けた狐たちも何人か残って、式の余韻を楽しんでいる。
「お知り合いなんですか？」
「はい。爺様の親戚の方『らしくて』、私たちも小さいとき、よく遊んでもらって……」
皐月は大宮巡査に説明していくうちに、ふと可笑しな部分に引っかかった。
「小さいときに？　なんで――だって……　一昨日、爺様から初めて樹里さんのことを聞いたのに？」
皐月はまるで怯えた表情で、自分の記憶を辿っていく。
――だが、遊んでもらったという徹底的な記憶どころか、思い出

すら浮かんでこない。それがもどかしくなっていた。

「皐月？　樹里と美咲から目を離さないでいてください」

瑠璃にそう云われ、皐月は頷くが、

「瑠璃さん……　どうかしたんですか？」

「そろそろ、帰らなければいけないですしね。これ以上露世に滞在しておくときつくなってきますし」

その言葉に大宮巡査は首を傾げる。

「そう云えば、大宮巡査に会うのはこれが初めてでしたっけ？」

瑠璃からそう云われ、大宮巡査は頷く。

「まぁ、すぐに忘れるでしょうから、名乗りはしませんが、悪いことはしないほうがいいですよ。何時でも……」

瑠璃がクスッと幼い笑みを浮かべた時だった。

――何処からか悲鳴が聞こえたのだ。

全員がそちらを見ると、式場の方から、人が溢れ出し、窓の方から煙が出ている。

「か、火事？」

「いや、あの窓は……わしらがいた時に使っていた式場の近くじゃないか？」

拓蔵がそう云うや、弥生は遊火をそちらへと向かわせた。火の妖怪である遊火ならば、なんでもないからだ。

――数秒後、遊火が戻ってくるや、状況を説明した。

「火元は拓蔵さまや弥生さまたちが使われていた式場で、ところどころにビンに詰め込んだ紙に火が点けられています」

「点けられてるって……　もう使ってないでしょ？　スプリンクラーとかは？」

「恐らく、式が終わってから、そのままだと思います」

式をしている最中はスプリンクラーの運転を停止している。
そうしないと、折角の晴れ着は水に濡れて台無しになるし、式自体がお粗末なものになってしまうからである。

「犯人はそのことを知っていたのか？」
「いえ、それが……　火元はわかりましたが、それをした犯人までは……」
要するに式場にいないということになる。
「ビンに入れられてるってことは、ビンの中身はガソリンかな？」
「でも、まだ燃えてるから、灯油と考えてもいいでしょう」
「いや、それよりも先ず、火を消さないといけないでしょ？　まだ燃えていますし」
脱衣婆の言う通り、火元を消さない以上、元もこうもない。
「大宮くん。至急消防車と、会場の人たちを避難させてください」
阿弥陀警部の支持どおり、大宮巡査と一緒に来ていた警官たちが会場で慌てている来場客らを避難させていく。

「美咲さん。幸せそうで何よりですよ……」
誰かがそう云うや、拳銃の音がこだまする。耳を劈くほどの大音量は、耳が悪い皐月ですら、気づかせるほどである。
突然の拳銃の音と、家事が起きている状況が相重なって、避難している来場客らは混乱し、避難させている警官達の声に耳を傾けようとはしない。

「……雄平さん？」
美咲がそう云うや、拳銃を持った男は笑みを浮かべた。男――雄平は身長が低く、小太りである。
「今日は僕と結婚式を挙げる予定じゃなかったんですか？　それなのに、どうしてこんな男と――」
雄平は空に向けた銃を放った。

「さぁ、早くそんな男と離婚して、僕と結婚しましょう」
美咲は樹里に寄り添い、キッと鋭い眼光で雄平を睨んだ。

「どうしたんですか？　さぁ、そんな怖い目をしないで、ボクと結婚を……」
「巫山戯ないでください！　私は樹里さんと結婚すると――　夫婦になると決めたんです。大体、あなたと結婚すると誰が云ったのですか？　誰が決めたのですか？　少なくとも、私はあなたとは結婚する気は毛頭ありませんし、有り得ないことです！」
美咲がキッパリとそう云うや、雄平は顔を真っ赤にした。

「ゆ、雄平……　やめるんじゃ」
「幸宮さん……　もしかして、彼が？」
「こ、んの馬鹿息子がぁ！　なに人様に迷惑をかけおるんじゃ？」
幸宮甚平が怒号を挙げる。

「お、おやじぃ！　この人が俺の婚約者だァ！」
「なぁにが婚約者じゃぁ！　どうせお前がまた勝手に決めたんじゃろ？」
「いや、違うって、今度のは違う！　おれは確かに彼女から――美咲さんから告白されたんだ！」
その言葉に樹里は美咲を疑った。が、美咲は怯えるように首を横に振った。
「なぁ、どうしたら結婚してくれるんだァ？　どうしたら、そんな男と離婚してくれるんだァ？」
雄平はそう云いながら、ふと何か思いついたのか、にやりと嗤った。

「そうだ……　殺してしまえばいいんだ……　そうしたら、僕の奥さんになってくれるんだァ？」

言うが早く、雄平は拳銃を樹里に向けた。
「な、何を馬鹿なことをしてるんじゃ？」
幸宮甚平の言葉虚しく、雄平は引き金を引いた。

劈くほどの音が辺り一帯にこだまする。
「さぁ、早くその男から……」
雄平は言葉を止めた。
「ど、どうして？　どうして……　どうして美咲さんが撃たれているんだ？」
雄平は確かに樹里を狙い撃った。その声は人間のものではなかった。
にも拘らず、美咲は樹里に重なり、背中で弾に撃たれていた。
「み、美咲さん？」
樹里が美咲を抱えようとすると、スーッと手から美咲の体が抜けていく。
「こぉおんっ」
いや、美咲が本来の姿を表したからだった。
美咲が小さく悲鳴を挙げた。その距離は大凡２０米（メートル）もない。

――その姿は狐であった。が、打たれた場所は今もドクドクと血が流れ落ちているため、橙色の体毛は赤く濁っている。

「き、君は……　まさか……」
樹里がそう云うや、美咲は震えた体で、樹里を見上げた。
「ご、めん……　な、さい……」
はっきりと美咲はそう云うや、それを最後に美咲はぴくりとも動かなかった。

「あ、ああ、あああ……　美咲ぃ？　美咲ぃいいいいっ？」
花梅が美咲に寄り添い、慟哭する。

ただ呆然と立ち尽くしている樹里は何が何だかわからない表情である。

「な、なんだよ？　なんだってんだよ？　なんだぁ？　化けギツネだってのかよ？」

「化けギツネでもなんでも……　あなたは幸せな時間を壊した責任がありますよ？」

阿弥陀警部が険しい表情で雄平を睨みつけ、手首に重たい感触を与えた。

「銃刀法違反。並びに放火の容疑……　もう一つ――強盗の疑いもあるんで、一緒に来てもらいましょうか？」

阿弥陀警部はそう云うや、雄平を半ば強引にパトカーにぶち込んだ。

「何処へ行こうとしてるのですか？」

帰ろうとする狐たちを瑠璃が呼び止める。

「一体……　誰がこんなことをしたんでしょうかね？　少なくても……　一途な美咲がこんな自分を貶（おとし）めるようなことはしない。ならば誰かが美咲に化けてこの結婚式を滅茶苦茶にしようとした」

瑠璃の言葉を聞かず、狐たちは帰ろうとする。

「金毛九尾による差し向けですか？　それとも普通の結婚式じゃつまらないから、余興のひとつにでもしようとしたのですか？」

狐たちは立ち止まり、瑠璃を見るや、咄嗟に術を解いた。

――いや、術を解かざるおえない。そうしないと人の足では逃げられないと察したからだ。

「白面金毛九尾に伝えておきなさい。浄瑠璃の鏡であなたがしたことを全て見てから、厳しい処罰を言い渡すと！」

瑠璃は、少女と見間違うほどの容姿からは信じられないほどに恐ろしい形相を、狐たちだけに向けた。

ボツンと立っている樹里と昌平、その両親が不思議そうに首を傾げている。

その近くには既に狐に戻った美咲と花梅の姿はなかった。

「い、樹里さん？」

皐月がそう声を掛けると、

「ああ、皐月ちゃん？　君もここにいたのか？」

「ここにいたのかって？」

「いや、俺たちもどうしてこんなところにいるのかって思ってね？」

「どうしてって、だって樹里さんは結婚式を……」

皐月の言葉に樹里と昌平は笑った。

「この馬鹿が結婚？　皐月ちゃん、本気で云ってるのか？　ありえないだろ？」

昌平がそう言うと、樹里は苦笑いを浮かべた。

「そういうことだ、皐月ちゃん。おれが結婚できるとしたら、それこそ夢のまた夢なんだよ？」

「でも、今さっきまで美咲さんと……」

「美咲……　誰だい？　それは――」

皐月はその言葉に驚き、声を挙げることが出来なかった。

拓蔵、三姉妹、瑠璃と脱衣婆以外……　その場にいる誰一人、美咲と花梅の事を何一つ覚えているものはいなかった。

捌・友白髪（前書き）

友白髪（ともしらが）：結納品のひとつで、白い麻糸のこと。ともに白髪の生えるまで、末永く幸せにという願いがこめられている。

捌・友白髪

式が終わってから数日経ったある日。梅雨の時期だというのに、雲ひとつない晴れ晴れとした空が広がっている。

賽銭箱の方から、パンパンと手を叩く音が聞こえ、巫女の手伝いをしていた弥生がそちらを見やると、

「――閻魔さま？」

「仏がほかの神仏に頼るのは烏滸がましいことですかね？」

瑠璃は苦笑いを浮かべ、弥生を見つめた。

「拓蔵と他の子達はいますか？」

「えっと……　はい。いますけど」

そう聞くや、瑠璃は社務所の方へと歩いていった。

「弥生さん？　彼女は――」

社員である巫女にそう尋ねられ、弥生は咄嗟に葉月の友達と説明した。容姿からしてそれくらいが妥当だと判断したからである。

神社の人間で、瑠璃が閻魔王であることを知っているのは拓蔵と三姉妹だけであるし、正体を教えてはいけないことになっている。

居間でお茶を渡され、一服するや、瑠璃は険しい表情を浮かべた。

「先ず、幸宮雄平を騙した狐ですが、やはり金毛九尾による差し向けでした。結局、彼らはつまらなかったんでしょうね……　人間を好きになった美咲と、それを許した花梅が――」

その言葉はあまりに小さく、ハッキリとした口調ではなかった。

「それと……　樹里ですが――ただひとつだけ、美咲の面影が残っ

ていたことがわかりました」
「美咲さんの面影？」
葉月がそう尋ねると、瑠璃は写真のようなものを一枚、卓袱台の上に置いた。

その紙に写っているのは樹里である。
「煙々羅にお願いして、数日ほど監察してもらいました」
瑠璃はそう云いながら、樹里の手元を指さした。樹里の右手薬指には指輪のようなものがつけられている。
「だいぶ昔に、結婚指輪と婚約指輪に関する違いを言いましたよね？」
そう訊かれ、三姉妹は少しばかり思い出すと、答えるように頷いた。
結婚指輪は左手薬指にする。そして婚約指輪はその逆である。

「しかし、樹里くんが婚約とは……　そんな話聞いたことないんじゃがな？」
拓蔵が腕を組み、うーんと唸った。
「ええ。拓蔵の云うとおり、樹里に婚約者はいませんよ」
「でも、それじゃ、どうして右手薬指に指輪なんて？　樹里さんそんなに着飾る人じゃないし」
弥生がそう言うと、瑠璃は少しばかり写真を見た。
「それだけ、美咲のことが……　美咲との思い出が心の底から消えていないということでしょうね」
瑠璃は寂しそうで、それでいてどこかホッとしたような表情を浮かべた。

「訊き難いことなんだけど、美咲さんと花梅さんに対する処罰は？」
「――当然、二人は樹里や周りの人たちを騙した結果になりますからね。

閻獄第五条一項において、人を騙したものは【大叫喚地獄・叻々処(くくしょ)】へと連行しようと思ったんですけど、当人は深く反省していますし、人を殺したわけでもありませんから、多少なりとも罪は軽くなるでしょう」

地獄において、殺生は一番低く見られている。美咲は樹里を騙してはいたが、誰一人殺してはいない。

「以上で、私が現状で伝えられることをあなたたちに言いましたが、何か質問はありますか？」

そう尋ねられたが、拓蔵と三姉妹は何も訊かなかった。

「では、私はこれで……」

瑠璃はスッと立ち上がり、居間を出ていった。

そのまま玄関が開く音がするや、瑠璃は声を挙げた。

「どうかしたんですか？」

その声で駆けつけた拓蔵と三姉妹は、瑠璃を見た。

玄関から外を見るや、僅かだが、雨が降っている。

「先程まで晴れていたのに――」

ボツボツと降り始めた雨を見ながら、瑠璃は苦笑いを浮かべた。

「予定を変更します。弥生、久しぶりにあなたの手料理が食いたくなりました」

それを聞くや、弥生は少しばかり表情を強ばらせた。

「えっと、優しくお願いします」

「ええ。厳しくいきます」

瑠璃は楽しそうに、三姉妹たちと夕飯を共にした。

「ありがとうね……　美咲、花梅」

空に浮かんだ三つの影が稲妻神社を見下ろしている。
「これくらいのことでしたら、いつでも云ってください」
「でも、いいんですか？　地獄裁判で忙しいはずじゃ？」
花梅がそう尋ねると、脱衣婆は呆れたような表情を浮かべた。

「瑠璃は、あの場所にいる時が一番素直なのよ。この前の結婚式だって、どこかつまらなさそうだったし、本当は行く気なんてなかった……
でも、拓蔵や皐月たちが来るってわかった途端、急いで休暇届けを出して、着ていく服をあーでもない、こーでもないって、選んで……」
「楽しそうですね」
「ええ。偶にはこういうのがあってもいい。勿論他の十王に迷惑はかけてしまったけど、みんなそれを理解してくれてると思う」
脱衣婆はそう云うや、鎌で虚空を切った。

「さぁ、私たちは帰りましょ」
そう云われ、美咲と花梅は地獄へと帰っていく。
（大切な休暇を楽しんでください……　閻魔さま――）
脱衣婆が思ったとおり、その日瑠璃から笑顔が消えることはなかった。

捌・友白髪（後書き）

煙々羅【えんえんら】の部分がおかしくなっていたのを修正。

壱・秋桜（前書き）

秋桜（コスモス）：アキザクラ、あきざくら。メキシコ原産のキク科コスモス属の花「コスモス」（Ｃｏｓｍｏｓ）の和名。
日本には明治時代に渡来。「秋桜」は主に、秋に咲き花弁の形が桜に似ているところから名づけられたからだそうです。

「秋桜」と書いて「コスモス」と読ませるようになったのは、１９７７（昭和５２）年、山口百恵の「秋桜（コスモス）」（作詞・作曲：さだまさし）がヒットしてからのことである。

壱・秋桜

うっすらと橙色（だいだいいろ）に染まった空が広がっており、その中を赤トンボが飛び交っている。

夏の激しい猛暑から開放されたかのように、涼しい秋の夕暮れ時。

さほど大きくもない公園内で少女が焦った表情を浮かべながら何かを探していた。

「ユズッ？　どこ行ったの？　ユズゥッ！？」

張り裂けんばかりの大声を挙げながら、公園内を見渡しながら少女は飼っている犬の名前を叫んでいた。

数分前まで公園のポールに紐を結んでいたのだが、結び目が甘かったため、目を放した隙に外れてしまっていたのだ。

多動癖（たどうへき）があるその犬は、飼い主である少女の近くにおらずにどこかへ行ってしまっている。

一体どれくらい公園を周回しただろうか、少女は次第に疲れ、足取りを重たくしていた。

「くぅーんっ」と、遠くから犬の鳴き声が聞こえ、少女は俯いていた顔をあげ、そちらへと駆け寄ると、ダックスフンドくらいの小さな犬が尻尾を振っていた。

「あ、いた。もう……　ほら、ユズ……」

飼い犬である犬（ユズ）の首には、秋桜（コスモス）の花が描かれた首輪が着けられている。

似たような犬種など探せば多々いるわけで、この首輪が犬（ユズ）の目印になっていた。

少女は首輪につながった紐を手に取るや、腕時計を見た。――時間は夕方6時になろうとしている。

「もうこんな時間だ……　ほら、帰るよ」
そう云うや、少女は紐を引っ張り、帰るように促した。が、犬(ユズ)はピクリとも動こうとしない。
「ほら、帰るよっ！」
再度少女は紐を引っ張るが、犬(ユズ)はまったくきこうとせず、ジッと何かを見るような仕草をする。
――そして、次第にグルルと唸り声に近い鳴き声を発した。

「ど、どうしたの？」
少女は犬の様子に怯えた声を挙げる。
少女は普段、犬(ユズ)がこんな鳴き声をしないことを重々知っている。
知っているからこそ、この仕草に違和感があった。
人懐っこい犬(ユズ)が敵対心剥き出しの態度を取ることは、まったくもって今までなかったのだ。

――微(かす)かに悲鳴のような声が聞こえ、犬(ユズ)は少女の手を力強く引っ張った。
「いっ、痛い！　ユズッ！　落ち着い……」
輪っかになっている紐に手首を潜らせていなかったため、紐はスルリと手から抜けた。
勢いよく走っていく犬(ユズ)の後を少女は追いかけていった。

少女がちょうど、住宅地の路地裏に入ったところだった。
異様な空気を肌で感じるや、少女は足を止めた。
「ユズ……　そこにいるの？」
少女は曲がり角の先に犬(ユズ)がいると、鼻で感じていたが、その先を見たくなかった。
――が、その先に行かなければ犬(ユズ)がいることも確認できない。
意を決した少女は、曲がり角の先へと視界を移した。

少女の視界の先には、何かが無数に散らばっている。
それはまだ夕暮れ空だったせいもあり、目にはっきりと映し出されていた。
（なんかの本で読んだことがあったっけ？　あの長いのって……大腸？　それとも小腸？）
何かの周りには、長い縄のようなものが散乱している。
（それに……　あのまるいのって……　眼だよね？）
何かの周りには潰され、液体を出しているものと、きれいに取り除かれた丸いものが転がっている。
（人が倒れてる……　お腹の中、取り除かれて……）
倒れている遺体を呆然と見ている少女は、何かがうしろにいる気配を感じた。

少女はその気配が、目の前で殺されている遺体を殺した犯人ではないかと感じ取った。
そして、その死体を見た自分も、同様に殺されるのではないかという恐怖心にもかられる。
「ひっ……」
悲鳴を挙げようとしたが、声がでない。
「ぐぅるるるるっ――」
犬（ユズ）が唸り声を挙げながら、少女のうしろにいる気配に向かって咆哮を挙げた。
「ユ……ズ……　にぃげぇて……」
少女は息苦しくなり、意識を朦朧とさせながらも、犬（ユズ）に声をかけた。
犬（ユズ）は少女を助けようと、駆け出し、少女のうしろにいる気配に襲いかかる。
――キャンッ！――

小さな悲鳴が聞こえたのを最後に、少女の意識も遠のいていく。
――真っ赤に染まった夕暮れ時の空の下、気を失い倒れた少女のうしろで、バキボキと気持ちの悪い音を立てながら、何かを食べている音が住宅街の路地裏で響きわたっていた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「おい……　君……　大丈夫か？」
大人の男性が気を失っている少女に声を掛ける。
「おい……　しっかりしろ……」
その声で目を覚ました少女は、まだ意識を朦朧とさせながら男性を見た。
「よかった。おい、女の子は無事だ！」
警官の制服を着ている男性が少女を抱えながら、周りにいる警官らに報告する。
それを聞くや、警官らは安堵の表情を浮かべたが、少女は何のことかてんでわからず、キョトンとしている。

「くぅそぉ……　もうこれで8件目かぁ」
警官の一人が怒りを露に拳を強く握りしめる。
「これだけのことをしているというのに、まだ犯人像もままならないのかよ？」
「仕方ないだろ？　犯人の特徴がわからんのだ！　捜査のしようがない」
警官らは自分たちの非常なまでに弱い存在だと憤りを感じていた。

そんな中、少女は首を動かし、辺りを見渡していた。
「どうかしたのかい？」
少女を抱えている警官が尋ねると、
「ユズ……　ユズは？」

「ユズ？　ゆず……って、果物のユズかい？」
警官がそう尋ねるが、少女は首を激しく横に振った。
「ユズは？　ねぇ、ユズはどこに行ったの？」
半狂乱になりながら、少女は誰彼構わずに訊ねる。
「少し落ち着きなさい」と警官は少女を宥めたが、少女はそれを振り切るように訊ねた。

「くぅそぉ、重てぇなぁ……」
二人の警官が、黒い大きな袋を落とさないよう慎重に運んでいたのが少女の目に映った。
「ゆっくり運べよ……　大事なものだからな」
「わかってるけど、もう調べようがないだろ？　まるで獣に食われたようにボロボロになってるんだぜ？」
二人の警官の話を耳にした少女は、その袋を見せて欲しいと頼むが、警官らはそれを拒んだ。
「あれは君が見てはいけない。見ちゃいけないんだ」
その言葉がなにを意味するものなのか、少女は次第にわかってきた。

あれは……　死体が入った袋なのだと――
少女は半ば強引に警官の手を振り切り、運ばれていく袋を無理矢理破ろうとした。
「ばかぁっ！　お前ら、その子を止めろ！」
そう云われ、警官たちは少女を止めようとする。
――が、興奮し、ガムシャラになっている子供の力は想像出来ないものである。
言い換えれば『火事場のクソ力』とたとえるべきだろうか？
さらに警官たちは、相手が少女ということもあってか、力を無意識に押さえ込んでいたため、少女を止めることができなかった。

少女の爪が袋に引っかかり、その部分から次第に破れると、中身が零れ落ちていく。

「……っ」

それを見た警官たちは全員視線をそれから逸した。

――が一人、少女だけはジッとその何かから目を離さなかった。

いや、目が離せなかったと云った方がいい。

なぜならその中には知っている何かがあったからだ。

ボロボロに食い荒らされたかのように、肉片の中に混じっている骨には、明らかに人間のものではない骨格が混じっていた。

鋭い牙や、伸びた鼻先など、人間のものとは到底思えないものである。

「あ……　ああ……」

少女は引き攣った表情を浮かべ、譫言のように悲鳴を挙げている。

少女は頑なに違うものだと……　自分の知っているものとは違うのだと想いたかった。

「お前たち……　早くそれを片付けろ」

呆然とする警官たちは、主任警官にそう促されハッとするや、肉片を再び新しい袋に入れ始めた。

その時、チリンという鈴の音がし、全員がその音の先を見た。

袋に入れようとしたときに溢れ落ちた肉片の中から、真っ赤に染まった首輪のようなものが地面に落ちている。

少女はそれを見るや、ガクンと膝を落とし、目を大きくひらいた。

目の前に落ちているのは、秋桜（コスモス）の花が描かれた首輪で、間違いなく犬（ユズ）のものだと少女は理解する。

「はは……　ゆずぅ……　どこいったのぉ？　ねぇ？　どこ？　どこにいったのぉ？　ゆずぅうううううっ？」

まるで壊れたラジカセのように、少女は悲鳴に近い声で、犬（ユズ）を呼

び続けた。

――少女自身理解していた。あの肉片の中にあったのは犬（ユズ）なんだと……

だが、それで理解できるほど、当時の少女が持っている精神力は図太くない。

これは夢なんだと……　夢であるはずなんだと……そう願いたかった。

しかし、翌日、一週間後……　一ヶ月、そして4年以上経った今なお、少女はその失った気配を消した原因を探し求めていた。

姿が見えないその影を、それこそ盲滅法と言わんばかりに探している。

そして今日も……なんの罪も持たない妖怪を切り殺していた。

壱・秋桜（後書き）

第十話です。大変お待たせしてしまってすみませんでした。

弐・卑怯者

「一同、礼っ！」

皐月が通っている福祠（ふくし）中学のとある一角に、剣道や柔道、空手等々の部活動が使用している特別教室がある。

その教室の中央に赤で囲まれた四角形があり、中には五人一組の女生徒が向かい合っており、頭を下げ、自分たちの場へと戻っていく。

今から行われるのは、当校の剣道部と、学校から数百米（メートル）ほど離れている福祠北中学剣道部による練習試合であった。

「先鋒、前へ」

審判を務める剣道部所属の生徒がそう告げるや、両チームの先鋒が面を着け、それぞれ中心位置へと歩み寄った。

互いに礼をし、竹刀を手にとり構えた。

一人は平均的な長さの竹刀。

もう片方は規定ギリギリと云っていいほどに長い竹刀であった。

「ほらっ！　もう始まってるわよ」

そう云いながら、飯塚萌音は皐月の左手を引っ張りながら走っていた。

「ちょ、ちょっと……　急（せ）かさないでよ！　まだむこうが来てから１０分も経ってないでしょ？　防具とか、竹刀の手入れとか……」

皐月があーだこーだ云ったところで、友人の足取りが止まるわけがなく、剣道部が試合をしている部屋へと入った。

「あいたっ！」

ドアの縁に右手がぶつかり、皐月は顔を顰める。皐月の右手には

包帯が巻かれていた。

公開練習も兼ねた試合のため、ほかにも見学者が部屋の中に入っている。

「めぇえええええええええええええええんっ！！」

バシンッ！という劈く音が部屋の中に響きわたり、審判が「一本っ！」と宣告するや、歓声が挙がる。

負けた選手は面を脱ぐや、自分のチームへと帰っていく。

（えっと……　時間的にまだ先鋒か次鋒戦よね？）

皐月は壁に貼られた選手表を眺めた。

「――はぁっ？」

選手表には試合の勝敗が記されており、それを見るや、皐月は声を荒らげた。

以下がその経過表である。（先が福祠北中の選手。後が福祠中の剣道部）

先鋒　○　×　先鋒

×　次鋒

×　中堅

×　副将

――――という結果である。

本来、剣道におけるチーム戦では、それぞれに位置する選手同士が試合を行い、三勝以上した方の勝ちというルールである。

そのため、上記のような勝ち抜き戦という形にはならない。

皐月は福祠北側の方を見やるや、先鋒以外の選手たちは余裕綽々（よゆうしゃくしゃく）と云わんばかりにノンビリとしている。

誰一人、試合に見向きもしていなかった。

「ねぇ、一体どういうことなの？」

皐月は近くにいた剣道部部員に尋ねた。

「それがね？　先鋒の子が自分だけで十分だって云って……　それを聞いたみんな頭にきちゃって、その子の申し出を承諾しちゃったのよ」

部員は呆れた顔でそういう。が、その先鋒の腕前を間近に見て、実力はあると判断していた。

「それにしても、長い竹刀ね？　前にあんたの竹刀持たせてもらったことあるけど、長さが違うだけで、全然違うんでしょ？」

萌音がそう云うや、皐月は顔を歪める。それを見た萌音は、なにごとかと首を傾げた。

「――っ！　一本っ！」

審判がそう告げると、周りから歓声が挙がった。

「くぅそぉおおおっ！」

最後の砦である大将を務めた選手が悔しさを露にするように叫んだ。

「これにて、当校の全敗とします」

審判がそう云うや、福祠中の剣道部員全員が悔しさを露にしながら、中心へと歩み寄った。

「ちょっとまって……　あと一人いるんじゃない？」

全勝した福祠北中の先鋒がそう云うや、全員が目を点にした。

「な、何を云ってんの？　もう全員出たわよ？」

福祠中の剣道部大将がそう云うが、少女は視線を違う方へと向けていた。

「確か剣道部にスカウトされてるくせに、未だに入ろうとしてない馬鹿がいたわね」

少女は面を脱ぎながら、皐月に言った。
「言っとくけど、私は剣道の基本を教えてもらっただけで後は殆ど我流同然なのよ？」
皐月が嫌そうな顔を浮かべた。
福祠北中の先鋒が信乃だったからである。

「でも、これより全然強いでしょ？」
「ちょ、ちょっと？　これって何よ？」
信乃から罵声を受けた福祠中学の剣道部員達は声を荒らげる。
「――全員、秒殺されたくせに？」
事実を云われ、部員たちは口篭った。
「ちょっと待って。私、常に竹刀を持ってるわけじゃないのよ？」
「それじゃ、借りればいいでしょ？　私も防具脱ぐから――」
そう云うや、信乃は道着を脱ぎ、袴姿になった。

「ほら、条件は一緒――」
確かに防具を着けていない皐月に対しては条件は同じである。
「わかった……　でも、ルールも何もないわよ？」
皐月はそう云うや、中心へと歩み寄った。
「だ、大丈夫なの？　あなた」
福祠中の剣道部員が皐月に声を掛ける。
「みなさんもこのバカには早く帰って欲しいって思ってるでしょう？」
皐月は呆れながら、竹刀を左手にもち構えた。

「りょ、両者前へ！」
審判がそう告げると、皐月と信乃は中心の線へと歩み寄り、互いに礼をする。
信乃は竹刀を両手に持ち、上段に構え、皐月は左片手に竹刀を持ち、下段に構える。

「皐月？　今日は二刀じゃなくて、一刀よね？　まさか二刀しかやらないから、持ちかた忘れた？」

信乃がそう尋ねると、皐月は右手を見せ、巻かれていた包帯を解いた。

右手小指が真っ赤に腫れあがっている。

「昨日、寝ぼけてぶつけちゃってね……　全治三日って云われた」

そう云うや、包帯を巻き直し、竹刀を再び左手で持った。

「そう。それは災難だったわね」

信乃は申し訳なさそうな声で云った。

「それでは、両者――はじめっ！」

審判が宣告すると同時に、竹刀どうしがぶつかる音が大きく響いた。

「いきなり相手の弱味につけこむのはどうかと思うわよ？　信乃ぉっ……」

皐月は顔を少し歪め、信乃に言った。

「それを悠々と受け止めといて、よく言うわ――」

信乃の竹刀は皐月の右側に打ち込まれており、それを皐月は竹刀を一瞬のうちに逆手持ちにして受け止めていた。

「相手の弱味につけ込むのは――勝負としてもっとも必要なものでしょ？」

信乃は竹刀を構え直すや、皐月の顔面めがけて、竹刀を突いた。

皐月はそれを顔面ギリギリで避け、横一文字に切りかかる。

――が、皐月は顔を歪める。竹刀が掠っただけで、判定にはならなかった。

「あんたの規定ギリギリの竹刀……　反則じゃないの？」

皐月は竹刀を間合いを保ちながら、信乃に尋ねた。

中学生の場合、長刀の長さの多くは三尺七寸（百十二糎）とされている。

それよりも長くならないように調整されているものなのだが、規定では百十四糎以下までとなっており、信乃の長刀は規定ギリギリの長さであった。

規定ギリギリの長刀と信乃の足捌きによって、福祠中の剣道部員は全員負けたのだ。

卑怯と思われるが、長さは規定内のものなので文句が言えなかった。

因みに皐月の二刀流はルール上存在するもので、反則にはならない。

ただし、珍しいことには変わりないので、否応なしに注目されてしまうが――

「せぇえっぃ！」

信乃が皐月の頭目掛けて竹刀を降り下ろすが、紙一重のところで皐月は避けていく。

一方的に攻撃する信乃に対して、皐月は攻撃する姿勢を見せない。

「あっ」と皐月が声を挙げ、自分の踵を一瞥した。

踵は赤い線ギリギリのところまで踏み入れており、さらには角の隅であった。

要するに逃げ場がなくなったということである。

「もぉうらぁったっあああああああああっ！」

信乃は一気に勝負をつけようと、皐月目掛けて、竹刀を横一文字に振った。

逃げ場のない皐月が負けた――と、誰もがそう思った。

――――が……

信乃が放った竹刀の軌道は、ただただ虚空を切っただけだった。

「――えっ？」

信乃がそう小さく呆気に取られた声を挙げるや、自分の視界を疑った。

信乃の視線の先には赤いテープと床しか映っておらず、皐月の姿はどこにもない。
それに気付くと同時に、背中から腹へと貫いたような痛みと同時に、視界はグワンと天井へと動き、背中に衝撃が走った。
「っつぅ……っ！」
信乃は皐月が足払いで自分を転がしたのだと、瞬時に理解する。
「あんた……　本当だったら許されないわよ？」
「先に云ったでしょ。ルールなんてないって……」
信乃の眼前に竹刀を突きつけ、皐月は「はい、おしまい」と告げた。

「あ、試合は私の負けでいいから」
皐月は審判にそういうや、借りていた竹刀を元の持ち主に返した。
あまりに一瞬だった出来事に、呆気にとられている周りの生徒たちの視線を横目に、皐月は教室を出ていった。
「ちょ、ちょっと、皐月ぃ？」
ハッと気付くや、萌音は皐月の後を追うように出ていった。

「な、何よぉあのコおおおおおおおおっ！」
福祠北中の剣道部員が声を荒らげている。
「だ、大丈夫？　鳴狗さん」
「ひっどいことするわねぇ？」
皐月が部屋を出たあと、彼女に対して剣道部員はブーイングする。

「やめて……　結局負けたのは私だから」
「はぁっ？　何言ってるのよ？　あの子はズルしたのよ？　本来足払いなんて許されることじゃないでしょ？」
「先にルールはないって言ってたし、私もそれに了承した。――それで負けたんだから文句は言えない」
信乃はそう言うと、審判を務めた剣道部員と福祠中の剣道部員に

深々と頭を下げた。
「先生。私、バスに戻ってますね」
福詞北中剣道部の顧問にそう云うや、信乃は一人教室を出ていった。

（あの時、角に追い込んで、勝負は決まったと思った。でも、皐月の足が動く音も、気配もしなかった――）
信乃は自分でも、あの時が絶好の好機（チャンス）だと思っていた。だからこそ勝負に出たのだ。
横一文字ならば、逃げられないと思ったからである。
にも拘らず、皐月にうしろを取られ、剰え（あまつさえ）一刀を食らっている。
皐月は足払いをしたのではなく、信乃の背中を強く打って、足を宙に浮かせたのだ。
態と足払いしたように見せかけて――――
あまりに一瞬だったため、信乃以外、誰もそのことに気付かなかった。

「くぅそぉっ！」
ドンッ！と大きな音が誰もいない廊下に響きわたった。
信乃が廊下の壁を殴ったのだ。
信乃は勝負に勝ったとは夢にも思っていない。
かと言って負けたとも思っていない。
ハッキリとしない自分の中での勝敗が歯痒かった。

（今日は皐月が不利だからこそ、勝てたはずなのに……）
皐月が万全の状態だったらと思えば思うほど、余計に信乃は苛立ちを隠せないでいた。

先程叩かれた廊下の壁には、小さなヘコミが作られていた。

弐・卑怯者（後書き）

さて、皐月と信乃の関係上、どうしても入れたかった剣闘シーンです。なお、皐月は長刀よりもむしろ短刀の方が使い勝手がよかったりします。（第一話参照）

参・梗塞

――皐月と信乃が勝負をした三日後の朝である。
山奥にある小さな屋敷に、４台のパトカーが門前の前で停っていた。

「阿弥陀警部。被害者は『斎藤武（さいとういさむ）』７２歳の男性。この屋敷の主人のようです」
大宮巡査が遺族に確認を取り、それを門の前で煙草を吸っていた阿弥陀警部に報告した。
「――死体の第一発見者は？」
「この屋敷の使用人です。彼は昨晩主人と一緒に晩酌を交わし、その後、使用人は部屋を出ていき、自分の部屋で休んだそうです」
報告を聞くや、阿弥陀警部は携帯灰皿で煙草の火を押し消し、臭い消し用のガムを口に含んだ。

「んぅにぃしぃてぇもぉ……、めぇんどぉうでぇすねぇ、にぃちにぃちにぃおいをぉ消さないとうぃげぇなぁいのぁは」
グチャグチャとガムを噛みながら、阿弥陀警部は愚痴をこぼした。
「それだったら、煙草吸わなきゃいいじゃないですか？　年齢と後々のことを考えたら」
「まぁ、これでも昔に比べて本数減らしたんですよ」
阿弥陀警部がそういうや、大宮巡査は「昔はどれくらい吸ってたんですか？」と尋ねた。
「たしか……　一日に余裕で４箱くらいなくなってましたっけかね？」
それを聞くや、大宮巡査は呆れてものが言えなかった。
ヘビースモーカーと言われている人の平均本数は約２箱（４０本）前後と言われているため、その倍は吸っているということである。

それでよく肺癌にならないものだと大宮巡査は思った。

「よし、臭いが消えてますかね？」

阿弥陀警部は口元を両手で隠し、息を吐き臭いをかいた。自分の鼻ではわかりにくいため、大宮巡査にも確認を取った。

「ええ。ちょっと違う臭いがしましたけど、まぁ気にならない程度だと思いますよ」

大宮巡査にそう言われ、阿弥陀警部は門を潜り、屋敷の中へと入った。

主人の部屋に案内された二人は、死体に手を合わせた。

死体は白目を剥き出しており、息苦しくなったのか手を喉元に近付けている。

口は裂けるように大きく開かれており、舌が口から食み出ていた。

「奥さん。主人は何時頃から部屋に？」

阿弥陀警部がそう訊ねると、女性――斎藤千和（ちより）は少しばかり考えるや、

「確か昨日の夜9時くらいだったと思います。使用人の堀内さんと一緒に部屋で晩酌をするといって」

千和は視線を使用人の男性に向けた。

「ええ。だんな様が珍しい酒を手に入れたとおっしゃったので――」

ここで飲めばいいのにですか？と大宮巡査が千和に訊ねる。

「主人は珍しい酒を手に入れますと、自分の部屋に直すんです。そして気分がいいときに、私や使用人の方々と一緒になって飲むようにしていました」

「そして昨晩、晩酌の相手をしたのが堀内さん……あなただったと？」

阿弥陀警部がそう堀内に訊ねると、堀内は素直に頷いた。

「昨晩、私はだんな様の部屋で、晩酌を付き合っておりました。気分が良くなったので、薬を飲んでから寝ると言いまして――」

「薬？　どこか悪かったんですか？」

大宮巡査の問いかけに、持病の喘息持ちだったと千和は云った。

「一応担当医師に確認を取りますから、通院している病院の連絡先を教えてくれませんかね？」

阿弥陀警部がそうお願いすると、千和は視線を堀内に移すや、何も言わず、堀内はスッと部屋を出ていった。

「ほう、以心伝心ですかな？」

「いいえ、話の内容を聞けば、何を持ってくるかわかるはずですわ」

千和の言うとおり、戻ってきた堀内は小さな電話帳を持ってきた。その中に病院名が書かれており、それが被害者が通院していた病院だと阿弥陀警部らは教えられる。

「――あれ？」

大宮巡査が床の間に飾ってある掛け軸を見るや声を挙げた。

「どうかしたんですかな？」

「いや、狼ですかね？」

そう云われ、阿弥陀警部も掛け軸を見遣る。掛け軸には合計して八匹の狼が描かれていた。

「すみません、奥さん。この掛け軸は？」

「それは確か主人が購入したもので、有名な画家が描いたものらしいですわ」

千和はそう云うが、大宮巡査は釈然としない表情を浮かべた。

「この絵がどうかしたんですかな？」

「いや、何かどこかで見た感じがするんですよね？」

阿弥陀警部が「どこで？」と訊ねるが、大宮巡査は場所ではなく、雰囲気だと答えた。

床の間に飾ってある掛け軸には、七匹の狼が屯（たむろ）しており、見た感じには楽しそうな雰囲気があるが、その絵の奥に、一匹の狼が群れをジッと眺めているという構図である。

大宮巡査はその狼が『自分も仲間に入りたい』というよりも、『入りたくても入れない、いや入ってはいけない』といった、物悲しいものに見えていた。

「主人はこの絵をたいそう気に入ってまして、よく自慢話をしていたんですよ」

「ほう、一体どんな？」

阿弥陀警部が千和から掛け軸の話を聞いている中、大宮巡査はジッとひとりぽっちの狼を見ていた。

「どうかしたんですか？」

堀内に声をかけられ、大宮巡査はそちらに振り返った。

「いや……　どうして一緒にいるのかなって、普通狼は一匹で行動するのに」

「それはだんな様も仰っていましたが、どうもその認識は違うようですよ。狼は団体行動がほとんどらしいですからね」

何故、狼が一匹で行動するものだと言われているのかは諸説あるが、仲間に危険や狩りの開始を知らせるためにする遠吠えが、どこか物悲しそうに聞こえるからという説がある。

「仲間はずれになっている狼は見た目しっかりしてますけど、どこか表情が暗いでしょ？」

大宮巡査もそこに引っ掛かっていた。孤独な狼は群れをなしている狼たちとさほど変わらない。――が、ジッと遠くから、それこそ近くにいるはずなのに、まるで手が届きそうで届かないところにい

るような、そんな雰囲気があった。

「それじゃ、遺体はこのまま検死に回しますが？」

「ええ。主人がどうして死んでしまったのか、調べていただけないでしょうか？」

遺体は鑑識によって、警視庁へと運ばれていった。

「どうかしたんですか？」

屋敷から警視庁へと戻る道中、大宮巡査が運転する車の中で、阿弥陀警部は尋ねた。

「えっと？　何がですか？」

「いや、あの掛け軸を見てから、何か様子が可笑しいと思ったんでね？」

そう云われ、大宮巡査は少しばかり、遠くを眺めた。

「阿弥陀警部は……鳴狗信乃という、皐月ちゃんと同じくらいの子を知ってますか？」

「ええ。鳴狗というと、そこから見える鳴狗寺の事ですし、信乃さんはここらへんでも結構剣道の腕はいいことで有名ですからね。皐月さんと同じかそれ以上かと――　で、どうしてそう思ったんですか？」

阿弥陀警部が聞き返すや、大宮巡査は車を一時停止させた。ちょうど信号が赤に変わっていたからである。

「――似てたんですよね？　あの絵に描かれていた狼が、彼女に……」

阿弥陀警部は掛け軸を翼々見ていないのであまり覚えていないが、信乃が三姉妹と同様に執行人であることは知っており、三姉妹とは違うからかと訊くと、そうではないと大宮巡査は答えた。

「以前、瀧瀬晋平のコテージで彼女に会ったことがあるんです。そ

の時、瀧原希空の飼い犬が、危険を察知して、信乃さんに噛み付こうとしたんですけど、彼女はそれを振り払って、刀で切ろうとしたんです。でも――まるで拒んだかのように切らなかった」

「――大宮君は警察官になって、何年くらいになりますかね？」

話を変えるように、阿弥陀警部がそう尋ねる。

「えっ？　っと……　３年くらいになります」

それを聞くや、阿弥陀警部はため息をついた。

「これは、警視庁の中でも限られた人間、特に警視以上の人間しか知らないことなんですけどね。――４年前、この街で通り魔事件があったんですよ」

「通り魔？　でも、通り魔なんてありふれた事件じゃないですか？」

「いいえ、通り魔と言っても、すれ違いに包丁で相手を切ったり、暴行を与えたりする方じゃないんですよ」

釈然としない雰囲気の中、再び車は走り出した。

「――バラバラになってるんですよ。まるで食い荒らされたかのようにね――」

大宮巡査はその言葉に驚き、危うくブレーキをかけそうになった。

「しかもその殆どが住宅街の路地裏だった。人は襲われれば否応なしに悲鳴や抵抗をするでしょう。ですがまったくもって誰も気付かなかった。特に夕方なんて少なくとも、家に人がいても可笑しくない時間帯でしょ？　それなのに誰一人気付いた人間はいなかったし、目撃証言も殆どなかった。私たち警官は死体が発見されてから漸く事件を知るくらいなんですよ」

それが極秘とされ、恐怖となっていた。

「ただ４年前、ある日を堺にピタッとなくなったんですよ。犯人が捕まらずにね」

つまりは未解決なのだが、まったく犯人を示す証拠が何一つ見つ

からなかった。そのため現在捜査は凍結状態になっていると阿弥陀警部は話した。

肆・叫喚

事件発生から一両日経ったある日の午後。阿弥陀警部と大宮巡査は稲妻神社へとやってきていた。例によって、葉月に霊視をしてもらうためである。

――ただ、今回に限っては死因も既に分かっているし、持病による心臓発作だろうと考えていたのだが、どうも突然死というのが納得いかなかったのだ。

斎藤武の遺体を検死した結果では、死因は「急性心筋梗塞」として受理されたのだが、湖西主任はそれに関して納得がいっていないと、阿弥陀警部と大宮巡査は部下を通して聞いた。

つまり湖西主任本人から直接聞いていないのだ。

湖西主任はベテランの鑑識班主任である。その彼が納得していない死因ともなれば、さすがに訊くしかないと判断し、阿弥陀警部らは稲妻神社へとやって来たのだった。

「おや、葉月ちゃん……　また可愛らしいのを着てますね？」

居間へと通された阿弥陀警部が葉月を見るや、そう言った。

葉月が着ているのは法被（ハッピ）である。

「町内会長から、町の夏祭りに子供神輿をするからって、試しに着せてみたんじゃがな？」

拓蔵がそう云いながら、葉月に目をやる。

「いやぁ、凄く似合ってて、可愛いですよ」

大宮巡査がそう言うと、葉月は顔を背けた。

「あれ？　僕なんか失礼なこと云いましたっけ？」

ちょうど、軽く作った肴を持ってきた弥生にそう尋ねると、弥生は「それくらい自分で考えろ」と云わんばかりに小さく笑みを浮かべた。
それを見て、大宮巡査は首を傾げた。

「それじゃ、お願いしますね」
阿弥陀警部は斎藤武の遺体が写った写真を葉月に渡した。
葉月は写真を卓袱台の上に置き、1，2回深呼吸するや、ゆっくりと目を閉じ、写真に手を翳し、摩り始めた。

ゆっくりと時間が進む中、葉月の口元が微かに動いた。
「――犬……？」
葉月がそう云うや、阿弥陀警部と大宮巡査は互いを見遣った。
「えっと……　お酒を飲んでて、それから寝る前に薬を飲んで……」
葉月は写真からゆっくりと手を離す。それと同時にバタンと仰向けになって倒れた。

「葉月ちゃん？　犬ってどういうこと？」
大宮巡査が驚いた顔でそう訊ねる。
「――犬の鳴き声がした」
「確か、君の力は写真に写った死者が最後に聞いた音を聞けるんだったよね？　でも、殺された斎藤武の家に犬はいなかったよ？」
それを聞くや、葉月は驚いた表情を浮かべるが、霊視による披露の方意識よりもが勝っており、ゆっくりとまぶたを閉じながら眠りについた。

「犬がいなかったって？　でも、葉月が霊視で失敗するなんてこと……」
皐月がそう尋ねると、大宮巡査は慌てて弁明した。

「僕だって、君たちの力を間近に見てる立場だから信じているけど……　でも、本当に殺された斎藤武の家に犬はいなかったんだ」
「そういえば、前にも似たようなことなかった？」
弥生がそう尋ねると、皐月は少しばかり思い出すと、
「確か……　京本福介だっけ？　でも、あれはちゃんといたじゃないの？　遺体がだけど」
皐月と弥生は、猫の遺体が発見される前に家を飛び出ていたので、直接見てはいないが、後日、話として聞いていたのだ。

「犬……　そういえば少し気になるものがありましたね？」
「気になるもの？」
阿弥陀警部の言葉に拓蔵が問いかける。
「殺された斎藤武の部屋に狼が描かれた掛け軸が床の間に飾ってあったんですよ」
「確かに狼は犬種だけど……　でも、葉月が犬と狼の鳴き声を間違えるとは思えないし」
皐月はそう言いながら、卓袱台に置かれている被害者の写真を手にとった。

「あれ？　ねぇ、どうして被害者は舌を出してるの？」
皐月がそう訊ねると、
「それは私たちの方も訊きたいんですけど。検死結果では急性心筋梗塞と判断されたようです」
その言葉に拓蔵は少しばかり顔を歪めた。
「それは可笑しいじゃろ？　心筋梗塞というのは、云ってしまえば血管のどこかが何らかの形で塞がってしまい、血の流れが悪くなって、心臓が停止してしまうはずじゃが？」
「そうなんですよね。それだったら喉ではなく、心臓の方に手が行くはずですよね？」
阿弥陀警部もその部分に対して、納得が言っていなかった。

「湖西主任が判断ミスするとは思えんのじゃがな？」
拓蔵は現役時代のころから湖西主任の仕事っぷりを知っている。
「それなんですけど、私たちは直接本人から聞いたわけではないので、詳しくはわからないんですよ」
阿弥陀警部がそう説明する。

「被害者の遺体を発見したのは？」
「使用人の男性。堀内という人物です。朝、電話で起こそうとしたそうですが、すぐに反応がなく、心配になって部屋の前まで行って伺ったそうなんですが――」
「全く反応がなかった……と？」
弥生の質問に大宮巡査は答えるように頷いた。

「それで心配になって、鍵を開けようとしたそうなんですが、鍵は誰も持っていないんですよ」
「つまり、死んだ本人しかその鍵を持っていない……？」
「それから死亡推定時間は午後１１時か日付が変わる午前０時の間。その前の午後９時から使用人と一緒に晩酌をしていたそうです」
「――使用人が部屋を出ていったのは？」
「死亡推定の大凡一時間前。恐らく午後１０時前後かと……　まぁ、それを証明する人間はいませんでしたけどね」
阿弥陀警部は余りに証拠物件がないことを表情で語った。

「その使用人怪しいわね？」
「まぁ、最初私たちもそう思ったんですが、薬物反応はなかったそうなので、上はその線はないと判断したようですよ」
「――納得いっとらんじゃろ？」
拓蔵がそう訊ねると、阿弥陀警部は頷いた。
「ええ。まったくもって……　急性心筋梗塞は、何かしら前触れが

あるはずですし、持病もそれに伴ったものだと思ったんですけど……」

「心臓病ってことですか？」

皐月がそう訊くと、阿弥陀警部は否定するように頭を振った。

「いや、全く別の病気でした」

「殺された斎藤武は、幼い頃から喘息を患っていたそうなんです。先日、通院している病院で確認を取りました」

大宮巡査が説明する。

「今回の事件。警察側の判断はどうなんじゃ？」

「いやその部分は全く。殺人とも自殺とも断言できませんからね。心筋梗塞は前兆があるとはいえ、殆どが突然死に近いものですから」

つまりそうなると自他殺の判断が出来ないということになる。

「あれ？　皐月ちゃん、どうかしたのかい？」

先程からジッと写真とにらめっこしている皐月に、大宮巡査が声をかける。

「あ、いや……　なんか似たような妖怪がいたような気がして」

「やっぱり妖怪の仕業なのかい？」

「うぅーんっと……　人に取り憑いて殺す妖怪なんてごまんといるし――」

「なんでもいいです。何か気がついたことがあれば」

阿弥陀警部がそう急かすが、言われた早々に思い出せるものではない。

「もしかして、死んでから取り憑いたんじゃない？」

弥生がとんでもないことを言い出す。

「弥生姉さん。いくらなんでもそれは――――！」

皐月は何かに気付くや、ジッと遺体を、特に口元を重点的に見つめた。

「大宮巡査っ！　阿弥陀警部っ！　やっぱり葉月が云ったことは間違ってなんかない！」

その言葉に言われた二人はキョトンとする。

「それは一体どういうことですか？　だって現に犬はいなかったんですよ？」

「でも、もし犬じゃなかったら？」

言葉のいみがわからず、阿弥陀警部と大宮巡査は首を傾げる。

「そりゃそうですよ。だって犬の鳴き声をしたのは、殺された本人なんですから！」

「そりゃ一体どういう？」

拓蔵も皐月の言葉に理解できなかったが、写真を見るや、その理由に気付く。

「犬神（いぬがみ）……じゃな？」

「うん。心筋梗塞だと胸の痛みになるし、なにより鳴き声が聞こえたのは、それに取り憑かれたからだと思う」

拓蔵が云った『犬神』という妖怪は、狐の霊が取り憑く『狐憑き』と同様のものとされている。

取り憑かれた人間は、伝来されている場所によって異（こと）なるが、喜怒哀楽の激しい情緒不安定な人間に憑きやすい。

犬神に憑かれると、胸の痛み、足や手の痛みを訴え、急に肩をゆすったり、犬のように吠えたりすると言われている。

――が、そう説明された阿弥陀警部と大宮巡査は顔を歪めた。

「しかし、訊いた話だと、そのような胸の痛みを訴える症状は今の今まで見られなかったそうですよ？　それに、殺された斎藤武は情緒不安定ではなく、どちらかというと気丈な人物だったようです」

それが本当だとすれば、犬神に憑かれるというのは考えられにくい。

「阿弥陀警部？　今度皐月を現場に連れていってくれんかの？」
「ええ。別にそれは構いませんが……」
阿弥陀警部は拓蔵の申し立てを二つ返事で了解するが、
「どうかしたのか？」
余りにも早い決断に、拓蔵は違和感を感じ、それについて訊ねた。
「いや、実は先日、母方の伯父が亡くなってしまって、その通夜が今日の夜からなんですよ。で、色々と準備もあるので、夕方の便に乗らないと間に合わないんです」
それはいったいどこで？と弥生が尋ねると、熊本の方だと阿弥陀警部は答えた。

「東京から熊本となると、二時間前後か……」
壁に掛けられた時計を見やると、時刻は午後４時になろうとしている。
「ええ。それに有給を二日ほど頂いているので、観光も兼ねていこうかなと。そういうことですから、大宮くんと一緒に行ってくれますかね？」
皐月はそう云われ、了承するように頷いた。

「それじゃ、先方にはこちらから連絡しておきます。多分明日の朝、そちらに連絡しますから――」
「あ、でも明日学校……」
「それじゃ学校が終わったら、僕の携帯に連絡しておいて。すぐに行きたいだろうから、校門前にするかい？」
そう云われ、皐月は携帯の番号とメアドを交換した
「いや、学校の近くに小さな駄菓子屋があるから、そこで――」
皐月が場所の指定をする。大宮巡査はわかったと、なんの疑いも持たずに了解し、そのまま阿弥陀警部を羽田空港まで送っていった。

――送ったあと、大宮巡査が警視庁についたのは、ちょうど午後6時になろうとしていたころであった。

伍・容喙（前書き）

容喙（ようかい）：［名（スル）］くちばしを入れること。横から口出しをすること。差し出口。

伍・容喙

皐月が通っている福祠中学は、葉月が通っている福詞小学校と目と鼻の先くらいの場所にある。

福詞中学の正門から道路を挟んだところに小さな駄菓子屋がポツンと建てられている。

「おばあちゃん、これいくら？」

皐月は制服姿のまま、駄菓子屋へと入り、陣列されたお菓子から、まるく作られたカステラが３つほど串に刺さったお菓子を手に取り、店主の嫗（おうな）に見せた。

「あぁ、っとぉ……　３０円じゃよ？」

嫗にそう言われ、皐月は財布から云われた料金を渡した。

「――お茶はいるかい？」

「んっ？　いいよ。これから出かけるところだから……」

皐月は嫗が訊く前に、背中のうしろに置かれていたお茶一式が目に入っていた。

嫗は店の前で小学生たちが屯うため、駄菓子を買ってもらうお礼に、お茶を無償で飲ましてくれている。

今朝方、皐月のケータイに大宮巡査からのメールが入っており、斎藤武の屋敷に確認を取ったところ、了解を得たので、一緒に行けるという連絡を受けていた。

「ほうかい、これからデートかい？」

嫗は朗らかな笑みを浮かべながら尋ねる。

「ち、違うって！　ちょっと用事があるだけだって！」

真っ赤になりながら、皐月は否定するが、亀の甲より年の功と言わんばかりに、嫗はクスクスと笑を零した。

それを見て、皐月は店の中だというのに、購入したお菓子を一口

頬張った。
「んみゅぅ～～」と、皐月は普段なら決して口にしない綻んだ声を挙げた時だった。
　店の前に見慣れない車が停まるや、運転手が降り、店の中に入ってきた。

「あれ、皐月ちゃん？」
　声をかけられ、皐月はそちらを振り向いた。
「あ、大宮巡査？」
「確か、買い食いは禁止されてるはずだけど？」
「あれ？　なんでうちの校則知ってるの？」
「知ってるも何も、僕も同じ学校に通ってたからね。それに買い食いはどこの学校でも禁止にしてるでしょ？」
　そう云うや、大宮巡査は陣列されたお菓子を選び、それを嫗に見せた。

「ほう？　皐月ちゃんの待ち人はあんたじゃったか？」
「おばあちゃん、僕が最後に来た頃から全然変わってませんね？」
「当たり前じゃ？　お前さんがそこの学校を卒業してから、まだ十年も経っとらんじゃろうが？　歳をとるとなぁ、時間が止まったようなもんになるんじゃよ」
　大宮巡査と話している嫗は、まるで昔馴染がきたかのように、楽しそうに話をする。

「えっと……　確かおばあちゃんって、９０歳超えてるんじゃなかったっけ？」
「へ？　確か僕がこの店に来てた時も９０歳って……」
　互いにそう云うや、皐月と大宮巡査は嫗を見やった。
「ほぉ、ほほほっ！　老耄（おいぼれ）の年齢なんぞ、誰も興味はないじゃろうよ？」

実を言うと、この嫗の実年齢を知っている人間は少なく、また歳を出鱈目に云うため、それ以上ではないかと言われている。ハッキリとしない謎があるため、この駄菓子屋は子供たちのあいだでは『妖怪駄菓子屋』をもじって『妖菓子屋（ようかしや）』と云われていた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「いらっしゃいませ」

斎藤武の屋敷に着いた皐月と大宮巡査を、使用人である堀内が対応する。

「彼女が電話で云った、黒川皐月さんです」

大宮巡査にそう紹介され、皐月は堀内に頭を下げた。

「そうですか？　ささ、奥様がお待ちしております」

堀内が門を開けると、大宮巡査と皐月は屋敷の中へと入っていった。

「奥様？　大宮巡査とお連れの方がご到着しました」

堀内は大広間の扉を二、三度叩き、ゆっくりとドアノブを引いた。

広さは大凡１０畳ほどあり、ソファと背の低い大きなテーブルが設置されている。

「あはは」

その広さを見るや、皐月は呆気にとられたような声を挙げた。

「……四十九日の件ですが、うちの僧侶が仏の為にお教を読みます。遺族の方々はその後、会食という形となり――」

耳があまり聞こえないため、あまり会話の内容は聞こえなかったが、皐月は声の方へと振り向いた。

その声が余りに知っている人間の声だったからだ。

「し、信乃？　なんであんたがここにいるの？」
大声でそう云うや、千和と四十九日の事柄を決める段取りをしていた人物が気怠そうに皐月の方を見た。
「おじいちゃんが忙しいから、私が代わりに四十九日の段取りを訊きにきたの」
信乃の実家はお寺であるため、葬儀屋から依頼を受けることがある。が、鳴狗家自体がその事業をしており、鳴狗寺の和尚がそれを生業にしている。

皐月は大宮巡査を見やった。
「信乃と話してるのが、殺された被害者の妻でしたっけ？」
そう尋ねられ、大宮巡査は頷いた。
「そう。どうする？　事件当時のことを訊いてみるかい？」
聞き返されたが、皐月は首を横に振った。
「今は話を聞けなさそうだし……」
そう云うや、皐月は堀内を見やった。

ふと、皐月はあることを思い出した。
「あ、アルコール反応はなかったの？」
亡くなった時間が晩酌していた一時間後だとすれば、アルコールが残っていた可能性がある。
「それは種類にもよるんじゃないかな？　すみませんがご主人が最後に飲んだお酒は？」
「確かワインでした。グラスで2杯ほど――　だんな様はちびちびと飲まれますので」
堀内はそう答える。被害者と最後に会っているのは、他でもない彼だけである。

「確か被害者は図体がデカかったから、大きく見積もって８４キロくらいだから……　せいぜい2時間くらいでアルコールは抜けるん

じゃないかな？」
「被害者が発見されたのは朝方だから、アルコールはすでに抜けてるってこと？」
しかし被害者が亡くなった時間は、晩酌をしはじめてから2時間前後とされている。
その間、使用人である堀内が部屋を出ていったあとも、主人が酒を飲んでいた可能性だってあるのだ。

「一応アルコール反応はあったよ。でも微かに残っている程度で、殆どなくなりかけていたそうだ」
そうなるとやはり薬殺なのだろうかと、皐月は思い、それに関しても尋ねた。
「いやそれに関しては反応はなかったそうだよ。やっぱり死因は急性心筋梗塞なんじゃないかな？」
大宮巡査の言うとおり、確かに検死結果ではそう出ている。が、皐月はその部分がどうしても引っかかっていた。

「堀内さんが部屋を出ていったのは、確か亡くなった一時間前でしたよね？」
「ええ。明日も早く仕事をしなければいけませんので、お先に失礼しました」
「その時、ご主人はどのようなご様子だったんですか？」
「だんな様は部屋に飾られている掛け軸のことについて色々と酒の肴として話されておりました」
皐月はそれを聞くや、大宮巡査ではなく、信乃を見やった。

「信乃さんがどうかしたのかい？」
「いや、堀内さんは被害者を最後に見たとして、部屋を出たのを知ってる人はいないのかなって……」
「それでしたら、私たち使用人はそれぞれ二人ずつ部屋を設けられ

ていますから、同部屋のものに確認を取ってくださっても構いません」

それを聞いて、大宮巡査は誰なのかを訊ねに1、2分ほど確認を取りに一度広間を出ていった。

「堀内さんと同部屋の使用人の話だと、彼が部屋に戻ってきたのは午後10時――　あれ？」

報告に戻ってきた大宮巡査がそう云うや、首を傾げる。

「ちょっと待って？　確か昨日阿弥陀警部から聞いた話だと、証明する人はいなかったはずじゃ？」

困惑する二人を尻目に、束ねた紙をまとめるために、テーブルに落とす音が聞こえる。

信乃が千和との打ち合わせを終えていた。

「使えている人間の証言なんて、信用する価値はないと思いますよ？」

そう云われ、大宮巡査は信乃を見やった。

「それじゃ、私は一度祖父に連絡をしますから、一度席を外させていただきます」

信乃は千和にそう告げると、広間を出ていった。

「あ、そういえば、遺体が発見されたとき、扉の鍵は閉められていたんですよね？　ご主人は普段から？」

「ええ。主人は寝るときは部屋の鍵全てを閉めるんです。扉や窓の鍵はもちろん、机の引き出しや箪笥の引き出しやら……　とにかくなんでも」

そのマスターキーは主人だけしか持っていないことは、昨日、神社で聞いたとおりだったが、その多さを訊くや、皐月は呆れてものが言えなかった。

ドアだけでなく、部屋の窓、金庫、机や箪笥の引き出し、クローゼットと……

とにかく仕舞えるところすべて鍵をしめていたのだという。

「大宮巡査？　被害者が自殺したという可能性は？」

「いや、それに関してはまったくもってないんだよ？」

部屋の鍵は事実主人の部屋で見つかっているため、そう考えるのも仕方がないことだが、死因が心筋梗塞だとすれば、自他殺の判断は出来ない。

「あの？　失礼ですけど……　トイレは？」

皐月がそう尋ねると、堀内が廊下を出て、一つ先の曲がり角にあると告げるや、皐月は広間を出ていった。

「――信乃？」

廊下に出るや、皐月は廊下ですれ違った信乃に声をかけた。

「千和だっけ？　あのひと……　何かに取り憑かれてるわよ？」

「やっぱり、和尚さんが忙しいっていうのは妄言（ぼうげん）だったの？」

そう尋ねると、信乃は首を横に振った。

「おじいちゃんが忙しいのは本当のことよ。でもあんたの場合は依頼できたみたいだけどね？」

そう聞き返され、皐月は顔を歪める。

「信乃はこのあとどうするの？」

そう訊ねたが、信乃は答えず、大広間へと戻っていった。

陸・携帯

「あ、おかえりなさいませ、葉月お嬢様……」
縁側でボンヤリと足をばたつかせていた遊火が、学校から帰ってきた葉月に声を掛ける。
「ただいま、遊火。爺様は？」
そう尋ねられ、遊火は少し考える仕草をする。
「確か船が一斉にスタートして……」
「もしかして競艇？」
葉月にそう云われ、遊火は頷く。それを見るや葉月は呆れたように頭を抱えた。

「どうかしたんですか？」
「今日の夜あたりから強い雨が降るって、予報で云ってたでしょ？それで弥生お姉ちゃんが爺様に洗濯物を取り込んどいてっていってたんだけどなぁ」
そういえばそんな話を今朝方してたっけ？と遊火は思い出していた。

二人が会話をしている中、ポツポツと雨が降り始め、葉月は慌てて洗濯物を取り込んだ。
取り込み終えた後、ものの一時間もしないうちに豪雨と化していた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ボンヤリと外が暗くなり、大宮巡査は皐月に帰宅を促す。
「うん。証拠はこれ以上見つかってないんじゃ、ここにいてもしようがないか」

皐月は妖怪の気配を探していたが、てんで見つからないため、仕業なのかどうかもわからなくなっていたのが本音であった。

一応殺された斎藤武が持病である喘息の薬が、スプレー式であるということくらいである。

「確か鳴狗寺って、稲妻神社までの道のりにあったはずだから――信乃さんも一緒にどうかな？」

大宮巡査がそう声を掛けるが、信乃は全く見向きもしなかった時だった。

突然、パリーンと外で何かが割れた音が聞こえてきた。

「堀内さん？　何が割れたのか確認してきてくれませんか？」

千和にそう云われ、堀内は仕事の手を休めるや、確認をしに広間を出ていった。

「だいぶ風が強くなってきましたね？」

皐月は外の木々が揺れているのが見えていたため、そう大宮巡査に尋ねた。

「外で待機してる人たちもいるから、ちょっと確認してくるよ」

そういうや大宮巡査も広間を出ていった。

5分後、堀内と大宮巡査が一緒になって広間に戻ってきた。

「奥様、先程部屋の一室に石が入っておりました。恐らく強風に煽られて飛んできたんだと思います」

堀内は屋敷の中にいたというのに全身ずぶ濡れで、その手には赤ん坊の拳大くらいある石が握られていた。

「ダメだね。強風で外に出るなとの命令だ――」

大宮巡査のうしろには外で待機していた警官たちが、他の使用人からタオルを渡されており、大宮巡査の頭にもタオルが被せられている。

「帰れないってこと？」
「いや、帰れないわけじゃないけど、あまりにも風が強いからね。安全をとって、風が止むまでは待機という支持が出たんだ」
そう聞かされ、皐月は信乃を見た。信乃は微動だにせず、ジッと外を眺めている。

「信乃さんと皐月さんでしたっけ？　もしよろしければお泊まりになってはどうでしょう？」
「いいんですか？」
「ええ。もともと部屋の数は余るほどありますし」
千和からそう云われ、皐月は少しばかり考える。が、外が強風である以上、いつ止むのかわからない状況である。

「わかりました。お言葉に甘えて……　でもその前に家族に連絡してもいいですか？」
「ええ、よろしいですよ。ご家族の方々も心配してるでしょうし」
皐月は屋敷に厄介になることを連絡しようとケータイを取り出すや、
「あ、皐月様……　うちの周辺はケータイの電波が大変つながりにくくなっているんですよ」
堀内にそう言われ、皐月はケータイの液晶を見やった。
「ホントだ。圏外になってる」
「ですから、屋敷の電話機をご使用ください」
皐月は電話機が置かれている場所を教えてもらい、その電話を使用することにした。

皐月は自分のケータイに登録されている弥生の携帯番号を表示させ、それを見ながら、電話機のボタンを押した。

十回ほど呼び鈴を鳴らすと、漸く弥生が電話にでた。
（もしもし……）
「あ、弥生姉さん？　皐月だけど」
声を聞くや、弥生は驚いた声を挙げた。弥生のケータイには見知らぬ番号が表示されていたため、警戒していたのだ。
（どうしたのよ？　ケータイは？）
「それが……　こっちからだと圏外になるからって言われたから、屋敷の電話使わせてもらってる」
（そう。それでどうするの？　外すごく荒れてるわよ）
弥生の云うとおり、外は土砂降りになっており、屋敷の中でもその騒音はよほどのもので、耳が悪い皐月は不快な表情を浮かべた。
「うん。そのことなんだけど、被害者の奥さんが泊まっていけって誘われて」
（要するに、その厚意を受け止めたほうがいいかって？　別にこっちは構わないけど……）
弥生にそう云われ、皐月は屋敷に泊まっていくことに決めた。

電話を終え、広間に戻ろうとした時だった。なにか違和感を感じ、立ち止まった皐月は電話機を一瞥する。
そして電話の近くで仕事をしている使用人に声をかけた。
「あ、あの……　一時間くらい前に私と同じくらいの子がここに来ませんでした？」
そう訊ねられ、使用人は答えるように首を横に振った。

（どういうこと？　だって屋敷の周辺は電波が悪くて圏外になる）
皐月は信乃が鳴狗寺の和尚に電話をしたと本人から聞いている。
だからこそ、ケータイが通じるものだと思っていたのだ。

皐月は広間に戻るや、信乃を廊下に呼び出し、何時和尚に電話をしたのかと訊ねたが、信乃はどうしてそんなことを言わなければい

けないのかと逆に聞き返した。
その返答に困った皐月を尻目に、信乃は用意された部屋へと入っていった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

――その晩のことである。拓蔵が湖西主任個人の携帯に連絡を入れていた。
「はぁ？　知らんって……　お前さん、それはないじゃろうよ？」
電話越しに拓蔵は呆れた表情で云った。
（いや、全くもって知らんのじゃよ。事件があったのを聞いたのも今日出勤してからじゃからな）
話を聞くと、事件当時、湖西主任は他の事件で鑑識課を出払っていたという。
（一応連絡は受け取るが、死因は阿弥陀警部から聞いたとおり、急性心筋梗塞なんじゃろうよ？）
そう云うが、湖西主任がどうして自分の携帯に、拓蔵が連絡を入れたのか薄々わかっていた。

（心筋梗塞じゃないかもしれないってことじゃろ？）
「わしは専門ではないからな。詳しくはわからんが……　もしかしたら殺された斎藤武の死後に取り憑いた犬神は、何かを教えようとしてるんじゃないかと思ってな？」
（わしはそっちの知識はほとんどないからな。しかし考えれば考えるほど、心筋梗塞なら心の蔵を押さえるはずじゃよな？）
取り憑き殺すという意味でなら、生きているうちに取り憑かれるのだが、今回に至ってはその前兆が見当たらないと聞かされている。
犬神に取り憑かれた人間は、まるで犬のような仕草をすると伝えられているのだが、斎藤武にはそのようなものは一切なかった。

葉月が霊視で聞いた犬の鳴き声にしたって、被害者宅にいないのだから、本来ならば聞こえる訳がないのだ。

（もし葉月ちゃんがその声に気付かなかったら――）

「間違いなく、心筋梗塞による突然死として、処理されておったかもしれんな？」

そう聞くや、湖西主任は何かを思い出すように、声を挙げた。

（４年前の事件、覚えておるか？）

「一応あんたから聞いたから、うっすらとな……　それがどうかしたのか？」

（いや……　少しばかり噂になっておったんじゃよ。あの時最後に起きた事件の被害者である少女が未遂だったとはいえ、傷一つなかったのがな――）

４年前となると、拓蔵は既に警視庁公安部を自主的に辞めているため、ほとんど事件内容を知らない。だからこそ、事件の詳細自体は初めて聞く。

（殺された人間の残骸を調べるとな、奇妙なものが見つかったんじゃよ。それに関して、ある保健所にガザ入れが入ったんじゃよ……）

「死体の中に、何かがいたということか？」

（狂犬病を促す病原菌じゃよ。保健所では捨てられたり、捕まえられた野犬がいるからのう。その中の一匹が何らかの形で保健所から逃げだした。そして、それに感染した犬が人間を食らい殺した……）

なんともとってつけのない話である。

事件当時、保健所では殺処分をした犬の亡骸が突然なくなるという怪奇事件が起きていた。狂犬病による感染も相まって、その保健所にガザ入れがされたのだ。

（しかし、保健所は全くのシロ。そもそも狂犬病にかかった犬が、その保健所から逃げたのかという証拠すらなかったそうなんじゃよ）

「４年前の事件は、その犬による怨霊だったと？」

（それはわからんが……　危険を察し、攻撃をするのは生き物の防衛本能じゃろうよ？　そこに関してはわしは否定せんがな？）

湖西主任がそう言っている中、拓蔵は阿弥陀警部から見せてもらった被害者の遺体写真を思い出していた。

「心筋梗塞で首元に手はいかんよな？」

（あの写真のことか？　あんたの言うとおりいかんじゃろうな？　心筋梗塞は心臓の……）

湖西主任はハッとするように、慌てて机から遺体の写真を出した。

（拓蔵……　犬が舌を出すのは体温調整をするためとされているじゃろ？　今被害者の舌を見るとな、紫色に変色しておるんじゃよ）

「それがどうかしたのか？」

（そのサインとしてな、チアノーゼ。いうなれば心不全の疑いがあるサインなんじゃが、その中で肺に水が溜まって――）

湖西主任の言葉を待たずに、拓蔵は口を動かした。

『心筋梗塞ではなく、呼吸困難による殺人だとしたら？』

二人の声が一致する。

（確かに呼吸困難なら胸を押さえるかもしれんな？　息を吸えば、肺やお腹は膨れるからのう）

「だが、それでは心筋梗塞と間違えられる。だからこそ取り憑いた犬神は、あえて喉のほうに手をやった。息ができなかったら喉に触れるやもしれんと考えたんじゃろうな」

そうなると被害者を殺したのはやはり犬神ではなく、人間ということになってくる。

もしかすると、犬神はこのことを誰かに伝えようとしているのだろうかと拓蔵は考えた。

「被害者の家に皐月を行かせておるんじゃが、もしかしたら皐月に対してではないかもしれんな」

（そういえば、屋敷で捜索している警官から聞いたんじゃがな。鳴狗寺の娘が四十九日の打ち合わせに来てるそうなんじゃよ）

それを聞くや、拓蔵はうっすらとだったが、犬神の正体がぼんやりと見えた。

「確か、４年前を最後に、被害はピタリと止まったんじゃったよな？」

（ああ。警察内でも未解決事件とされているが、捜査をしようとする人間はいないそうだ）

いや、恐らく人間ができるものとは思えなくなり、一種の怪奇現象、いうなれば神隠しとして、不条理ではあるが、そう判断したのだろう。と拓蔵は考えた。

そして、脳裏で言葉を呟くや、ワナワナと手を震わせた。

（もしそうじゃとしたら――　今の信乃とその犬神を邂逅させるは、互いにとってあまりにも危険じゃぞ？）

陸・携帯（後書き）

チアノーゼ（ドイツ語：Ｚｙａｎｏｓｅ、英語：ｃｙａｎｏｓｉｓ）とは、皮膚や粘膜が青紫色である状態をいう。一般に、血液中の酸素濃度が低下した際に、爪床や口唇周囲に表れやすい。医学的には毛細血管血液中の還元ヘモグロビン（デオキシヘモグロビン）が５ｇ／ｄＬ以上で出現する状態を指す。貧血患者には発生しにくい（ヘモグロビンの絶対量が少ないために還元ヘモグロビンの量が５ｇ／ｄＬ以上になり難いため）。

漆・幼馴染

夜の十時を疾うに過ぎ、屋敷内ではシンとした空気が漂っている。
そんな中、皐月は部屋に常備されていた懐中電灯を照らしながら、トイレへと行こうとしていた。
「うぅわぁ、さむぅ」
肩を震わせながら歩いていくたびに、静寂とした周りで自分の足音がしているのかどうかもわからない。それはただたんに皐月の耳が悪いだけなのだが……

用を済ませると、どこからともなく犬の鳴き声が聞こえた。
皐月は嵐になっているというのに、どこその野良犬が吠えていると最初は思った。
――が、嵐の音が少し大きめな音量に聞こえている皐月が、犬の鳴き声に気付いたということは、その音が嵐よりも勝っているということになる。
そうなるとこの屋敷のどこかにいることになるのだが、大宮巡査から屋敷に犬はいないと聞いているため、皐月は不思議そうに首を傾げた。

もう一度犬の鳴き声が聞こえ、皐月は声がした方を見やる。
視線の先には、強風によって狂ったようにガタガタと鳴らしている窓があり、その奥でボンヤリとした青白い炎が見えるや、皐月は身を構えた。
――しかし、その光は霊体ともつかず、また殺気たったものとも、どちらでもない曖昧な雰囲気があった。
皐月は警戒しながらも、ゆっくりとその光に近づいていく。

皐月が近づいていくと同時に、光も皐月の方へとゆっくりと近づいていく。

窓まで行くと、青白い光はジッと皐月を見ているという感じである。

そして視線をゆっくりと動かし、信乃がいる部屋の窓を一瞥するや、スーッと消えた。

（――信乃？）

皐月は光が信乃の部屋を見ていた感じがし、そちらを見た。

一瞬だけ、光が視界から消えたとき、聞き覚えのある鈴の音が聞こえた。

それは信乃が持っている金切り声のような歪んだ音だった。

（――ユズ？）

皐月はもう一度光がいた方へと振り返ったが、そこには青白い光はなかった。

その荒れ狂う外を見ながら、皐月は信乃がどうして妖怪を毛嫌いしているのかを思い出していた。

理由はただ単純である。４年前、得体のしれない何かに殺されたユズの復讐をするためだけである。

皐月はその理由を知っているからこそ、信乃が自分と同じ執行人であることが嫌であった。

執行人はあくまで妖怪に取り憑かれたり、妖怪と化した人間に罪状を渡すのが仕事である。警察が犯人を逮捕するのに、たとえば犯人が自首してきたのならば、何もせず手錠をはめるのと同じであり、また抵抗したならば、それ相応の対応をするものである。

どちらも公私混同することは許されていない。

だからこそ、信乃が復讐を目的に執行人をしていることが歯痒か

った。

皐月は色々な人間や妖怪と関わっていくうちに、信乃がやっていることは間違っていると考えていた。

たとえユズを殺した得体のしれないものを滅したところで、ユズが戻ってくるわけがない。

だからこそ自分とは違い、キチンとした実力を持っている信乃には復讐を目的としたことをやめてほしかった。

ふと結婚式場で脱衣婆が云ったことを皐月は思い出した。

『退治したところで、あの子が変わるとは思っていないわ。むしろ今まで以上に見境なく妖怪を退治するでしょうね』

皐月もそのことが不安だった。

鳥はそのまま飛び続けているわけではない。必ずどこかで羽を休める場所を探しながら飛び続ける。

そして疲れたときにその木の枝なり、羽を休める場所でくつろぐ。

しかし、たとえば行く先々の周りが海しかなかったら、羽を休める場所なるどこにもない。

そして飛び続けて体力がなくなれば、海へと落ちていき、羽が濡れて重たくなり浮かび上がることはない。

皐月自身も怒りが先立つこともあるが、それでも罪人は罰せられなければいけないし、たとえ赦せないことでも、赦す余裕がなければいけないと瑠璃から教えられている。

――だからこそ、罪を言い渡し、それを悔い改めさせる猶予を与えている。

逆に信乃はあくまで復讐のためだけに執行しているとしかいえなかった。

皐月は光が信乃の部屋を見ていたことが気になり、そちらへと向

かった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

斎藤千和は屋敷内の戸締まり確認を終え、就寝しようと自室へと戻ろうとしていた。

彼女の部屋は殺された斎藤武の隣部屋で、その前を通ることになる。

ふと斎藤武の部屋から物音が聞こえ、千和は立ち止まった。

そしてゆっくりとドアを開け、部屋の電気をつけた。

「な、何をしているんですか？」

戦（おのの）くような声を挙げながら、千和は部屋の奥にいる影に声をかけた。

影は箪笥の中を探っており、声をかけられるや千和の方を見やった。

「し、信乃……さん？　い、一体何をしているんですか？」

千和にそう訊ねられた信乃だったが、その言葉を無視して、再び箪笥の中を探り出した。

「き、聞いているのですか？　一体何をやって……」

千和は信乃が箪笥の中を探していることには、声をかける以前に気付いていた。しかし、主以外の人間が鍵を持っているわけもなく、また信乃は部屋を荒らしているわけでもなかった。

ピンポイントにあるものが入れられた引き出ししか開けていないのだ。

「な、何を探してるんですか？」

「――薬……　あなたが殺された斎藤武に飲ませた毒薬が入ったやつをね」

その言葉を聞くや、千和は呆れた表情を浮かべる。

「な、何を馬鹿なことを？　それに……　私が何時どうやって薬を飲ませたと言うんですか？」

信乃は諦めたのか、引き出しを閉じる。

「別にあなたが直接殺したとは言ってないでしょ？」

「あのですね？　私がどうやって主人に薬を飲ませたと言うんですか？」

千和の言葉を遮るように、信乃は顔を千和の体に近づけ、鼻をひくつかせた。

「な、なにを――？」

千和は逃げるように、信乃から離れた。

「やっぱり……　最初にあった時からわかっていたけど――」

「一体何のこと……」

千和は言葉を止め、ゾッとした。

「ひとつ教えてあげましょうか？　人間には体臭というものがあって、汗や皮膚の汚れなどによって臭うもの。もちろんあなたは香水をつけているから、それをかき消している」

信乃は上目で千和を睨みつけるように言う。

「だけど臭いは別に体臭だけじゃない。薬の臭いや、血の臭いも混じっている場合だってある。――薬はとにかく……　自分以外の血の臭いがしているのは可笑しいわよね？」

そう云われ、千和は顔を引き攣らせながら笑った。

「な、なにをふさげたことを！　私はどこも怪我していませんし、薬なんて飲んでいません」

言葉を述べるが、千和は信乃からゆっくりと離れていく。

「それじゃ……　何も知らないのなら……　どうして汗なんてかいてるのかしらね？」

その言葉に、千和は自分が冷や汗をかいていることに気付く。

冷や汗は恐ろしいときや、緊張したときに発汗する汗のことである。もちろん今の状況では、信乃に恐怖を感じてのことだと説明はできる。

「私は別にあなたを貶めようなんて思っていない。ただたんに憶測を述べているだけ。それが間違っているのならば、汗をかくことなんてないと思うけど？」

「と、突然人殺しなんて云われて、気持ちのいい人間なんていません！」

信乃は千和が言った言葉を聞くや、少しばかり間を空けた。

「――ひっ？」

千和は自分の鼻先に突きつけられたものを見るや、小さな悲鳴を挙げた。

「私は別にあなた自身が殺したとは言ってないわよ？　あなたが飲ませたとしか云っていない」

「それでは矛盾しているでしょ？　私が飲ませたというのなら、私自身が主人に毒薬を……」

千和は信乃が発した言葉の意味を理解する。

“飲ませる”は被害者自らが飲むという意味であり、“飲まされた”のならば、被害者は何者かに無理矢理飲まされたということになる。

「あなたは被害者が殺された夜、古くなって中身がなくなった薬の

中に、毒薬を溶かした水を入れた。スプレー式の薬の中身なんて、そうそう見るものじゃないしね？　それに遺体の第一発見者が堀内とかいう、あんたの側近ならばもっと話は別になってくる」

「い、一体何が言いたいんですか？」

千和はゆっくりと後退りするが、背中に冷たい感触が走る。千和のうしろには壁しかなく逃げ場がない。

「ひとつ確認したいんだけど、薬は必ずその引き出しに仕舞われるのよね？」

信乃の問いかけに「ええ。そうよ」と千和は答える。

「それじゃ……　捨てた容器は誰が捨てるのかしら？」

「それは勿論主人が……」

千和は言葉の意味がわからなかった。

「当然、第一発見者の堀内でしょうね？　そもそも誰が、どうやって主人の部屋の鍵を開けたのか……　それはね、それを証言する人間は存在しないから」

信乃の言葉には信憑性がないように感じられるが、実は裏付けがキチンとある。

まず堀内が電話をしたのかという証言である。

これは同室の使用人によって、遺体を発見する数分前、主人の部屋に電話をしたという証言があるのだが、その使用人が直接電話を聞いたわけではない。

そもそも電話の内容は耳を受話器に近付けない以上、話を聞くことはできない。

また、主人の部屋に電話をしたのかということ自体にも違和感がある。

そして斎藤武の遺体が発見される直前、部屋の鍵をどうやって開けたのか……

――それはただ単純な話である。

妻である千和が隣部屋だからこそ出来ることであり、そして全ての人間が口裏を合わせれば済むだけの話である。

死亡推定時刻は昨晩の午後11時から日付が変わる午前0時の間とされている。もちろんこれに関しては偽りはない。――が、堀内が証言したとおりの時間に主人の部屋を出て、自室に戻った時の時間を偽っていたとしたら?

屋敷内の仕事はハードであり、疲れが重なって、心身ともに休みたくもなる。

それが深い眠りであろうと、レム睡眠(体は眠っているが脳は活性している)状態であればなおのことであり、同室の使用人は、堀内が部屋に戻ってきたということだけで、何時戻ってきたのかまではわかっていないのだ。

朝電話したとして、それは『どこに電話をしたのか』ということになる。

先程も云ったように、電話をかけた堀内以外誰も内容を知らない。違和感を感じた堀内が慌てて斎藤武の部屋へと駆け出しただけである。

そして部屋の鍵を誰が開けたのか……これは千和の証言によって証明される。

『主人は“寝るときは”部屋の鍵全てを閉めるんです』

そもそも鍵を閉めていたこと自体が事実ではなかったのだ。

「あ、あなたの推理はわかりました。ですから……その刀を好い加減収めて――」

千和はその言葉を云うや、カッと外が雷によって真っ白に光り、そして長刀を高々と上げた、信乃の表情が逆光をあびたのを見るや、

顔が青ざめた。
それはまるで獲物を見つけた殺人者のような表情だったからだ。
「――この刀は人間には決して見ることができないのよ！」
そういうや、信乃は刀を振り下ろした。
「――っ？」
途端信乃は顔を歪めた。
「は、放しなさい……　がぁはぁっ」
千和は片手で信乃の首を掴み、ギリギリと絞め上げていく。
その力は想像以上のもので、少女とはいえ、片手で持つのは難しいのに対して、千和はいとも容易く持ち上げている。
「一つ……　抜けてるところがあるわよ？　堀内さんがどうやって主人に薬を飲ませたか……　そもそも主人の死因は心筋梗塞。薬物の反応は何一つなかった」
「そ、それこそ詭弁……でしょ？　大体心筋梗塞の疑いがある人間が――酒を控えることはないのよ！」
信乃の言葉に千和は歪んでいた顔をより一層歪める。
酒は百薬の長という言葉があるように、アルコールを取ると血液が固まりにくくなるほか、血液中の善玉コレステロールを増やし、動脈硬化を予防する働きがある。
そのため、心筋梗塞、狭心症、不整脈、心不全といった心臓病、または全体の死亡率が減るという事が判明されている。
もちろんなんでもそうだが、効くからやりすぎるのは却って危険である。
「それに……　スプレー式のトリックは正直言って大嘘。酒を飲んでいる人間が薬と一緒に飲むなんてないしね――」

それを聞くや信乃の首を絞めている千和の手がより強くなった。
「薬が肝臓で溶け出すのが飲んでから約二時間、堀内が主人の部屋で酒を飲み始め、部屋を出るまでの一時間の間……　主人が酒を飲んだのかという証言自体がないでしょ？」
信乃はそう告げるや、千和を刺した。

「あがぁあああああああああっ？」
信乃が悲鳴を挙げるや、手から長刀が抜け落ちる。運悪く刀は千和の横っ腹を掠めただけだった。
「さぁて……　どうしましょうかね？」
千和がそう告げるや、部屋の扉が開いた。

「しのぉおおおおおおおおおっ！」
部屋に飛び込んできた皐月がそう叫ぶや、千和に体当たりをしようとしたが、先に気付いた千和が、片手で掴んでいた信乃を皐月にぶつけるように投げた。

「がぁはぁっ！」「げぇはぁっ！」
重なるように皐月と信乃は廊下の壁にぶつかった。
二人を見るや千和は、逃げるように窓から飛び降りた。

「まっ……　げぇほぉっ！」
息を整えようとする信乃が睨むように皐月を見た。
「大丈夫……？」
皐月がかそうとした手を信乃は振り払う。
「どうしてここがわかったの？」
その問い掛けに皐月は答えるべきなのだろうかと考えた。

「それより……　千和さんを追いかけましょ？　信乃……立てる？」
信乃はその言葉を遮るように立ち上がるや、

「……っ！」

信乃は何かを口走るが、余りにも小さかったため、皐月には聞こえなかった。

漆・幼馴染（後書き）

今回の推理は本当に億足でしかありません。そもそも信乃は誰一人の証言を信じてはいません。仲間内の庇い合いでしかないわけです。

捌・邪推（前書き）

邪推（じゃすい）：僻（ひが）みから、悪い方に推測すること。

窓から飛び降りた千和とそれを追う信乃の後を皐月は追っていた。
雨は夕方から降り始めた時よりも激しくなり、仄かにぼやけた部屋の明かりは何の頼りにもならない。
荒れ狂った空気がまるで皐月だけを二人に近付けさせようとしないかのようだった。

それでも皐月はあくまで執行人として、信乃が云っていた推理が正しければ、千和を誘導殺人の主犯として、罪状を言い渡さなければいけない。
それは信乃よりも先に言い渡さなければ、取り返しのつかないことになる。

「信乃っ！」
皐月は雨にかき消されることを覚悟の上で必死に叫んだ。
自分の声が小さく感じられるほどに雨音は大きく、それどころかより一層激しくなっていく。

視界の先に青白い炎が見え、皐月はその先に信乃がいると直感した。
いや、むしろ青白い炎が場所を教えているといったほうがいい。

「一刀……桜翼燕(おうよくのさかもり)っ！」
信乃がそう叫ぶや、飛び込むように長刀を千和目掛けて振り下ろした。
千和は肉を削ぎ落とされるが、致命傷とは言わず、一瞬のうちに信乃の懐に入り、腹部を殴り、信乃を吹き飛ばした。

「我流一刀……紅破（くれは）」
皐月がうしろから千和に襲いかかるが、切っ先は悠々と避けられ、皐月は千和に蹴り飛ばされる。
「げぇほっ！」
信乃は体勢を整え、千和との間合いを少しだけ離した。
ふと、皐月の気配が消えているのに気づくが、実際は信乃の視界にいたので、目で確認はできた。
皐月は二刀を構え、精神を集中させるや、
「二刀……焔鼠轍（えんそのわだち）っ！」
長刀を先に構え、その線に沿うように短刀を弓矢みたいに構え、千和に突っ込んだ。
長刀で相手の間合いを詰め、相手が刀を避ける一瞬に長刀を引き、その勢いで逆の短刀を相手に突き刺す……が、それすら避けられてしまう。
「一刀……戦風扇（そよかぜのおうぎ）」
皐月の切っ先を避けた千和に、すかさず信乃が片手で持った長刀を縦横無尽に切りつけた。――が千和は全て避け、二人との間合いを離した。

皐月と信乃、二人が次の攻撃をしようと構えた時だった。
一瞬のうちに千和は信乃の間合いに入り、爪で服を引き裂いた。

「――っ！」
信乃は体勢を崩し、裂けた服を覆うように身を屈めた。
「信乃っ？」
皐月がそう叫ぶや、千和は信乃を集中的に襲いかかった。
「あああああああああああああああっ！！」
ピチャピチャと体を引き裂かれた信乃は悲鳴を挙げる。
「信乃を放しなさい！」

皐月が間に入るが、千和は皐月を殴り飛ばした。

そして、信乃から離れるや、体勢を整えようとした皐月に飛びかかり、羽交い締めにする。

「は、放し……」

皐月がそう叫ぶや、千和は口を裂けるほどに大きく開けた。

その口は到底人間のものとは思えないもので、犬歯のような牙があった。

そして、皐月の腹部に噛み付き、裂いた。

「……」

声のない悲鳴を挙げ、皐月は意識を朦朧とさせる。

即死じゃないのは、彼女が摩訶迦羅（マハーカーラ）の加護を受けている以外にも理由があるが……　それでも瀕死の状態であることには変わりない。

「一刀……」

信乃がその空きをついて、千和に攻撃をしようとしたが、逆に再び襲いかかられた。

皐月は朦朧とする意識の中、信乃に襲いかかっている千和に取り憑いた犬神の様子にふと疑問を浮かばせていた。

皐月には致命傷になるほどのことをしているにも拘らず、信乃に対してはまるでそれを拒んでいるように見えたのだ。

そして……千和の形相を見たとき、皐月は自分の目を疑った。

（泣いてる……？）

降り頻る雨で濡れているのだと、最初は思った。

しかし、千和の表情は、徐々に恐れるように強（こわ）ばっていき、まるで攻撃すること自体を躊躇っているようにも感じられる。

（まさか……　だけど……　もしそうだったとしたら……）

皐月は千和に取り憑いている青白い炎に心当たりがあった。

が、どうしてそうなったのかがわからなかった。

そして、一瞬だけ聞こえた鈴の音で、皐月は確信した。

（信乃……！　その妖怪は……　その妖怪だけは――）

皐月がそう思った時だった。

千和の一瞬をつき、信乃が刀を降り下ろすや、千和に取り憑いていた青白い炎は逃げるように離れた。

「逃がすかぁあああああっ！」

信乃がその炎を切り裂こうとしたとき、金属がぶつかる音が響いた。

「なぁにやってんのぉおおおおおおお？　皐月ぃいいいいいいいい？」

突然のことで混乱しているのと、せっかく殺せると思った矢先に遮られてしまった信乃は怒りを露にする。

「はぁ……　はぁ……　はぁ……」

信乃の攻撃を受け止めている皐月は、立っているのがやっとといった感じだ。

「早く妖怪を殺さなければ……　取り返しのつかないことになるのよ？」

それは尤もなことだが、皐月はそれを頑なに拒んだ。

その行動がより信乃を苛立たせる。

「一体何だっていうのよ？」

「――殺しちゃダメ……　この子だけは……　殺しちゃ……」

「何言ってるの？　殺してはいけない妖怪なんて……」

「千和さんに取り憑いていた犬神は！　もしかしたら、あんたがずっと探していたユズかもしれないのよ？」

信乃がその言葉を押さえ込むように、皐月は叫んだ。

「な、何をふざけたことを云ってるのよ？　ユズが妖怪な訳がないでしょ？　だって……　だってあの時――――　……っ」

皐月の言葉を振り切るように、信乃は再び炎に切りかかろうとする。

「閻獄第十四条、人に取り憑き、執行人に事件のヒントを与えたものは、閻魔王が定めた猶予を与える！」

皐月がそう叫ぶや、どこからかおふだが現れ、青白い炎に貼り付いた。

――が、そのおふだは燃えてしまい、灰とかしてしまった。

そして、炎は逃げるように消えた。

捌・邪推（後書き）

はい。必殺技（通常技含む）のオンパレードでしたが、全て実際に読める文字です。熟語ではなく、一つに対してのと思ってください。

（二字熟語を改変したのもありますがｗ）燕（つばめ）とかいて燕（さかもり）と読めないこともないｗ

玖・慟哭

今までの嵐が嘘のように雲間が裂き、月明かりが照りはじめた。
「皐月ちゃん！　信乃さん！」
騒ぎを聞きつけた大宮巡査ら警官たちが、皐月と信乃のところへと駆け寄った。

「大丈……　っ！？」
その惨状を見るや、大宮巡査は口元を抑えた。
皐月の腹部は噛みちぎられており、そこから血が大量に流れ出している。

「だ、誰か……！　誰か救急車を――！」
大宮巡査がそう叫ぶと、皐月は大宮巡査の裾を握った。
「まって……　私より……　信乃を病院に――」
確かに二人とも重傷を負っている。しかし、傍から見れば、皐月の方が危険な状態である。
「な、何を云ってるんだい？　先に君を病院に……」
大宮巡査がそう云うと、皐月は歪んだ表情を浮かべた。その表情は自分よりも信乃の方を助けて欲しいといった感じであった。

「信乃……　あの子は必ずまたあなたのところに現れるかもしれない……　でも――」
皐月がそう信乃に云うが、信乃は皐月が先程やった不条理が赦せないといった感じである。
「――執行人が妖怪を逃がすのは、大罪じゃないの？」
「そ、それはわかってる！　でも、あの子は誰も殺してなんかいない！　それにあの犬神を殺したら……　信乃自身が後悔する！」

その言葉を聞くや、信乃は少しばかり皐月を見やる。

「後悔？　妖怪を殺すことに後悔なんてしない。それに……　さっきからなに詭弁を述べてるのよ？」

信乃は目の前にいた妖怪を滅せなかったことに、より苛立ちを感じていた。もちろんそれは皐月も重々感じている。

「それにね……　たとえユズだったとしても――私を傷つけるようなことはしない」

「信乃……　あんた前に私に云ったわよね？　妖怪には心がないって……　でも、あんたを攻撃していたとき、千和さんは泣いてたのよ？　妖怪に取り憑かれた人間は自意識を保てない。だったら――」

「っさい……！」

皐月の言葉を遮るように、信乃は言葉を述べた。

「さっきから、ユズ……　ユズ……　ユズ……って――　私があの子のことを聞けば、妖怪を殺すことをやめてくれると思ってるの？　それは無理よ……　あの子を殺した妖怪に復讐するまでは妖怪を殺し続ける。たとえあの子が妖怪だったとしても、その考えは変わらないわ」

「信乃……　わかってるの？　たとえ殺し続けても、それはあんたがあんたを殺し――」

皐月は信乃の表情を見るや、言葉を止めた。

その表情は目に輝きがなく、曇天の濁りがあった。

「人間でもないくせに……　人間でも、妖怪でもないくせに！　私の何がわかるっていうのよっ！」

そう言い放つや、信乃は傷ついた体を引きずるように屋敷を出て

いこうとする。

「し、信乃さん……」

大宮巡査が後を追いかけようとしたが、2、3歩歩くと足取りを止めた。

信乃の周りで様子を見ていた警官たちですら、信乃を呼び止める人間はいなかった。

それはまるで、信乃がそれを拒んでいて、誰一人それに手を貸そうとはしないといった状況だった。

「お、大宮巡査……　斎藤千和は――」

警官が大宮巡査に声をかけ、大宮巡査はハッとする。

「そうだ！　千和さんは？」

目の前で倒れている千和を見るや、大宮巡査は彼女に駆け寄った。

そしてその様子を見るや、言葉を失った。

皐月と信乃が一目見ただけでも重症だったにも拘らず、千和の体は雨で濡れ汚れているだけで、外傷は殆どなかったのだ。

「一体どういう……」

大宮巡査はそのことを訊ねようと、皐月を見やった。

しかし皐月の表情は、まるで心がここにはないといったように、目を大きく開き、口をワナワナと震わせている。

ずっと雨にさらされて、体が冷えているのかと、大宮巡査は最初そう思った。

「人間……じゃ……ない？　それって……　どういう……意味？」

皐月はそう呟くや、まるで操り人形の糸が一本ずつ切れるように、体を倒した。

「皐月ちゃんっ！？」

大宮巡査が皐月に駆け寄り、皐月を抱きかかえた。

ふと違和感を感じた大宮巡査は、皐月の腹部を見るや、ゾッとした。

さっきまで血が流れていた傷跡が徐々に痂(カサブタ)になろうとしている。

それも想像できないほどの速さで……

それを見ながら、大宮巡査は皐月に畏怖する。

――が、それでも病院に連れていこうとすると、

「大宮巡査……　皐月を神社までお願い――」

突然目の前に現れた脱衣婆を見るや、大宮巡査は驚いた。

「ど、どうして？　彼女は瀕死の状態なんだぞ？」

大宮巡査がその先を言おうとすると、脱衣婆がそれを止めた。

「お願い……　今は私の言うとおりにして――」

脱衣婆が寂しそうな表情を浮かべる。

「い、一体……　どういうことなんだい？　それだけは――」

質問に答えてもらおうと思ったが、大宮巡査はそれ以上何も云わなかった。

自分よりも脱衣婆が云ったことを優先したほうがいいと思ったからだ。

皐月を抱きかかえ、自分の車の後部座席に横たわらせる。そして、ついていくように脱衣婆は皐月の横に座った。

「一つ聞かせてくれませんか？　あなたは皐月ちゃんたちや信乃さんの監視をしているんでよねす？　それに――脱衣婆なんて固有名詞じゃなく、出来れば名前だけでも教えてくれませんか？」

「――海雪(みゆき)……　咲下海雪(さくしたみゆき)……」

意外にも素直に告げると、脱衣婆はスーと姿を消した。

大宮巡査は運転していたため、うしろを振り向けなかったが、バックミラーには横たわった皐月だけしかいなかった。

だが、その声は今まで聞いていた女性の声というよりかは、皐月や信乃と同じ年齢の少女といった感じであった。

車は稲妻神社の前で停まり、大宮巡査は携帯で連絡をし、拓蔵を呼び起こした。

電話受けた拓蔵は皐月の様子を見るや、皐月を抱え、急いで部屋へと運んでいった。

拾・撥無（前書き）

撥無（はつむ）：払いのけて信じないこと。否定すること。

拾・撥無

翌日、斎藤武を殺害した容疑として、使用人の堀内と、それを指示した斎藤千和両名を警視庁は書類送検した。

殺害方法はワインに仕込んだ睡眠薬を飲ませ、昏睡状態にさせる。一時的な擬死状態というわけだ。千和は睡眠薬を服薬していたと供述すれば、さほど危険視されないと考えていた。

次にチューブを喉から肺まで通し、そこに水を流し入れる。肺に水がたまると、肺呼吸である人間は生きられる訳がない。

その時、主人は既に亡くなっているため、何をしても反応はない。死んだ事を確認すると、今度は肺の中にたまっていた水を汲み取るために、もう一度チューブを通らせる。

あとは何食わぬ顔で堀内は使用人部屋に戻ればいい。

この時、部屋の鍵は閉められていたが、鍵を開け、死体を確認したとき、すきを見て、

遺体のポケットに忍ばせておけばいい。

――以上が後日行われた検死の結果と証言によって判明されたものである。

また死因は呼吸困難による心不全と改められた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

事件解決から一週間後。大宮巡査は皐月の見舞いに稲妻神社へとやってきていた。

自分の不注意で皐月に重症を負わせたことを悔やんで、毎日様子

を見には来ていたが、実際対面させてもらえるのはこの日が初めてだった。

「そんなに責任を感じなくてもいいですよ。自分でやった結果ですから」

弥生がそう云うが、大宮巡査は申し訳ない表情を浮かべる。

「それに――　もし、大宮巡査の責任だとしたら、真っ先に被害者である皐月が文句を言いますし、この一週間、皐月は信乃さんのことだけ心配してましたから」

「信乃さんの？」

大宮巡査がそのことに関して訊ねようとすると、弥生は皐月に訊いてほしいと断った。

「皐月？　大宮巡査が来たわよ！」

弥生は皐月の部屋の襖を開ける。居るか居ないかの確認もなしにだ……

「へっ？　ちょ、ちょっとまっ……」

皐月の慌てた声が聞こえ、大宮巡査は部屋を覗くと、皐月は着替え中で、パジャマの上下を脱ぎ終えたところだった。辛うじてショーツは履いていたが、ちょうどブラを外したばかりで、膨らんだ胸とその先が露になっている。

「きゃあああああああああああああっ！」

皐月は悲鳴を挙げるや、机の上にあった筆箱を大宮巡査の顔面目掛けて、投げつけた。

その衝撃で大宮巡査は廊下の壁に頭をぶつけた。

「ちょっと、せっかく来たのに、いきなりはひどいんじゃないの？」

「わかっててやったでしょ？　弥生姉さん！　絶対わかっててやったでしょ？」

皐月は屈み込み、胸元を隠しながら、弥生を睨んだ。
「人の部屋に入るときはノックするのが礼儀ってもんでしょうに！」
「はいはい。わかったわかった……　それじゃね」
そう云うや、弥生は逃げるように廊下の奥へと消えた。

――それから１０分ほど経ち、大宮巡査は気がついた。
「だ、大丈夫ですか？」
皐月が申し訳ない表情でそう尋ねる。
「いや、大丈夫……　ちょっと頭がズキズキするけど」
よく見ると大宮巡査の額には瘤が出来ており、皐月はそれに触れた。
「いっ……！」
「あ、ごめんなさい……」
大宮巡査の容態を見るや、皐月は部屋を出て、厨房から氷水が入ったビニール袋を持ってきた。それを大宮巡査の額につけた。

「あの絵……」
大宮巡査が部屋に飾られた一枚の絵に目をやった。

それは殺された斎藤武の部屋に飾られていた八匹の狼が描かれた掛け軸である。
金品目的だったとはいえ、遺品の貰い手が多かったが、この絵だけは誰ひとりもらうものがいなかったため、皐月がお願いして貰い受けた。

「そういえば、阿弥陀警部から聞きましたけど、この絵を最初見たとき、大宮巡査はどこかで見たことがあるって」
「うん。この絵自体を見たわけじゃないけど、雰囲気がね……似てたんだ、最初あった時の彼女に」

そう云われ、皐月はジッと絵を見た。

「私と信乃って、４年前まで友達だったんです。ううん、今だって私は友達だって思ってる」

その言葉に大宮巡査は驚いた。ずっと敵対している二人だったので、どちらも友達だなんて思っていようとは微塵も考えていなかったのだ。

「私は我流だし、竹刀の使い方だって未だにこなせてない。でも、あの子は天賦の才能があるし、何より剣道を心から楽しんでる」

皐月はそう云うや、一匹だけの狼を見つめた。

「でも、４年前に起きた事件以降、信乃は人が変わったように剣道を続けて、変成王（へんじょうおう）に力を与えられたんです……　私の力はこの神社に祭られている大黒天……ううん、摩訶迦羅（マハーカーラ）の力を使っているだけなんだけど――　私たちはあくまで阿弥陀警部や大宮巡査に頼まれて動くようなものですけど、信乃は妖怪だとわかれば、見境なく執行してる……」

「もし彼女が君たちと違うとすれば？　復讐のためだけに力を使っているということか？」

そう云われ、答えるように皐月は頷いた。

「変成王は別名『弥勒菩薩（みろくぼさつ）』と云われていて、私が宿している大黒天と同じ七福神の布袋は、その化身なんです」

布袋は唐末の明州（現在の中国浙江省寧波市）に実在したとされる伝説的な僧で、実を言うと鳴狗寺で崇められている。

七福神としては神として祀られるが、元々は僧侶なので、仏という立場になる。

「私も妖怪を懲らしめたいとは思ってる。――でも殺したいとは思っていない。罪を償うのは当たり前だし、脱衣婆や遊火だって妖怪だから……　全部が全部そうじゃないってわかってるけど……」

それは人間に置き換えても同じことである。いい人間も入れば悪い人間だっている。

「信乃は心の底では、きっと気づいてる。でもそれを止めてあげることが」

皐月の言葉を待たずに、大宮巡査は皐月を抱きしめた。

突然のことで、皐月は驚いた声を挙げるが、そのまま身を任せた。

「千和さんから聞いたんだ。あの時彼女は夢を見たと……　一匹の小さな犬が自分をジッと見つめていて、何をするわけでもなく、ただジッと悲しそうに吠えていたって……　それは彼女に取り憑いていたユズ《犬神》が信乃さんに犯人を教えていたんじゃないかな……　でも、彼女はそれに最後まで気付かなかった。いや気づいていたけどそれを信じてあげることが出来なかった」

「わたし……　信乃を助けてあげなきゃいけないのに……　友達として……　ううん、友達だから助けてあげなきゃいけないのに――」

皐月は力強く、大宮巡査の腕を握り締めた。

声は挙げなかったが、皐月は泣き崩れていた。

それは犬神と化したユズと、それに気付かず、ずっと妖怪を殺し続けようとしている信乃に対して、どちらとも助けることができなかったことに対しての謝罪の悲鳴であった。

その時、チリンという錆び付いた鈴の音が響いた。

――が、その音に気付いたものは誰一人いなかった。

【特別版】今までの罪状を纏めてみた【閻獄】

閻獄（地獄裁判においての判決表）

死者が生前犯した罪によって、その罪状はまちまちである。

【殺生】・【盗み】・【邪淫】・【飲酒】・【妄語】・【邪見】・【犯持戒人、父母殺害】・【阿羅漢（聖者）殺害】という8つの罪に加えて、その方法（例えば、人を騙し殺した）によって落とされる場所も違ってくる。

ただし例外として、殺生はしていないが、嘘と盗みを犯したものは、罪の重い方に落とされる。

殺生が一番低いのは、衆生皆平等という考えにあるからである。が、その中でも聖人（お坊さん）や自身の親を殺した場合は罪が重たいものでとされている。

閻獄は大きく分けて8つあり、罪状を言い渡すときはもっとも重い罪を優先する。

【第一条】等活地獄（殺生）
【第二条】黒縄地獄（盗み）
【第三条】衆合地獄（邪淫）
【第四条】叫喚地獄（飲酒）
【第五条】大叫喚地獄（妄語）
【第六条】焦熱地獄（邪見）
【第七条】大焦熱地獄（犯持戒人）

【第八条】　阿鼻(あび)地獄（父母殺害・阿羅漢（聖者）殺害）

その場所でも殺害相手や条件によって１６に場所が分けられた小地獄に連行される。

ただし例外も含まれており、「正法念処経」において一黒縄地獄は三つ、大叫喚地獄は十八つ存在していると言われている。

妖怪に向けての罪状であり、死者（既に死んでいるもの）や妖怪と化した人間にのみ与えられる。

妖怪ではなく、単に自身の犯行の場合は言い渡さない。

＊今まで出てきた罪状＊

第一話

『閻獄第一条！　自分の見勝手な行動で人を殺(あや)めた者は『等活(とうかつ)地獄・極苦処(ごくくしょ)』へと連行する』

【極苦処】

生前にちょっとした事で腹を立ててすぐに怒り、暴れ回り、物を壊し、勝手気ままに殺生をした者が落ちる。

あらゆる場所で常に鉄火に焼かれ、獄卒に生き返らされて断崖絶壁に突き落とされる。

＊最初の殺人は人間によるものなので、閻獄は受けない。

第二話

「閻獄(こくじょう)第二条。人のものを奪い、あまつさえ苦しめ殺したものは『黒縄地獄・畏鷲処(いじゅうしょ)』へと連行する」

【畏鷲処】

貪欲のために人を殺し、飲食物を奪って飢え渇かせた者が落ちる。鉄の棘が生えた地面を杖、火炎の鉄刀、弓矢などを持った獄卒に追い回され、休む間もなくいつまでも走らされる。転倒すると金棒で何度も殴られ、水をかけられる。

第三話

『閻獄第五条、己が力で人を騙した罪により、そのものら“３名”を大叫喚へと連行し』

【大叫喚地獄】

生前に殺生・盗み・邪淫・飲酒・妄言の罪を犯したものが落とされる場所。窮奇（かまいたち）は阿弥陀警部に気付いて欲しいとばかりに騙しているのみで、殺人は犯していない。

第四話

『閻獄第八条　父に取り憑き殺し、剰え自分の罪を被（かぶ）せたものは『阿鼻（あび）地獄』へと連行する』

【阿鼻地獄】

またの名を無間地獄という八大地獄の中でもっとも下にある場所。参考としている「正法念処経」において、父親を殺した場合の記述がなかったので、曖昧になっている。

第五話

『閻獄第二条、己が欲望で夫を殺し、その死体を隠し盗んだものは『黒縄地獄』へと連行する』

『閻獄第三条、自らの位を悪用し、男色をしたものは『衆合地獄・多苦悩処』へと連行し』

【多苦悩処】

男色者が落ちる。罪人が生前に愛した男（本人かどうかは不明）がいて、罪人がそれを抱くと相手の男から発する炎で焼き尽くされる。

しかし再び生き返り、同じことが繰り返される。

第六話

『閻獄第一条、人に取り憑き、その身で他人を刺殺したものは『等活地獄・刀輪処』へと連行する』

【刀輪処】

刀を使って殺生をした者が落ちる。１０由旬の鉄の壁に囲まれており、地上からは猛火、天井から熱鉄の雨が亡者を襲う。

また、樹木から刀の生えた刀林処があり、両刃の剣が雨のように降り注ぐ。

第七話

該当者なし（そもそも以津真天（瀧原俊平）は娘である滝原希空を守っていた方である）

第八話

該当者なし（犯人は人間であり、花子さんはそれを葉月に教えていた）

第九話

該当者なし（美咲（みさき）と花梅（あやめ）は樹里（いつき）を騙していたが実際は殺していない。また、閻魔王（瑠璃）が赦しているため、罪状は言い渡されていない）

第十話

該当者なし（犬神が信乃の飼い犬であったユズであると考え、逃がしている）

『閻獄第十四条、人に取り憑き、執行人に事件のヒントを与えたものは、閻魔王が定めた猶予を与える！』といっているが、実際は存在しないものである。

【特別版】今までの罪状を纏めてみた【闇獄】（後書き）

少しばかり整理してみました。

壱：夢魔

とある山の奥に木々に囲まれた長閑（のどか）なキャンプ場がある。
その周りにでは、夏の風物詩ともいえる蝉が忙（せわ）しく鳴き喚いていた。
それだけでも暑苦しいというのに、料理をしている遼子の肌には大粒の汗が流れているのだからたまったものではない。
その隣には小学六年の弥生が野菜を切ったりと手伝いをしていた。

「弥生、お父さんは？」
そう尋ねると「川原で皐月と葉月と三人でカンケリしてたよ？」と弥生は答えた。
遼子はそれを聞くや少しばかり考える。キャンプに来てまでカンケリなんてするものだろうか？と……
だが、健介がただのカンケリをするとは考えていなかった。

キャンプ場から少し下ったところに小さな川がある。水の中は透き通っており、そこには小さな魚が優雅に泳いでいた。
その近くで小学二年の皐月とまだ三つの葉月が父親である健介と一緒にカンケリをしていた。
「ほら、いったぞ！　皐月っ！」
健介にそう云われ、皐月は蹴り転がされた缶を足で止め、
「ほら、葉月、お父さんが思いっきり蹴っていいってっ！」
皐月はそう云いながら、まだ葉月が幼いことを考慮にいれ、さほど力を込めずに缶を葉月の方へとゆっくり蹴り転がした。
葉月は自分の方へと転がってきた缶を思いっきり蹴ろうとしたが、振り上げた足はからぶってしまい、体勢を崩すや、仰向けになって倒れた。
「ぅうぅ……」

愚図り出すと思った健介と皐月は、葉月を宥めようと近寄った。
「うえええええええええええええええええんっ！！」
案の定、葉月はワンワンと大泣きする。
「ああ、よしよし。痛かったなぁ」
健介が落ち着かせるように葉月の頭を触ると、後頭部にぶつけた痕（あと）があった。
瘤（コブ）にはなっていなかったが、健介はハンカチを皐月に渡すや、川の水で濡らしてきてくれとお願いする。
皐月は云われたとおり、急いでハンカチを濡らしては絞り、それを健介に渡す。
ハンカチを受け取った健介は、それを葉月の後頭部にそっと当てた。
葉月は冷たさと痛みから逃れようと体を窄める。
「ほぅら……　いたいのいたいのとんでいけ……」
なんとも子供騙しだなぁと皐月は思ったが、まだ幼く無垢な葉月にはそれだけでも充分効果があった。
子供にとって、まず一番の治療は安心させることであるからだ。

「よし、そろそろご飯が出来た頃だろうし、お母さんのところに戻るか？」
健介は足元に転がっていた缶を手に取り、葉月をおんぶする。
「お父さん、その缶、何なの？」
隣を歩く皐月がそう尋ねると、健介は少し笑みを浮かべながら、
「それはなぁ、あとのお楽しみだ」と言った。
その言葉に皐月は首を傾げた。

「どうしたんですか？」
戻ってきた健介の背中で泣き顔を浮かべている葉月が目に入った遼子は、健介に近寄りながら事の発端を尋ねた。

「ちょっとな……　カンケリをしてたら転倒したんだよ」
それを聞いた遼子は母親なりに慌てるかと思えばそうではなく、
「痛かったでしょ？　ほら、ご飯できたから、皐月ねーねと一緒に手を洗ってきなさい」
そう云われ、健介の背中から下ろされた葉月は皐月に手をひかれ、キャンプ場に設けられた手洗い場へと歩いていった。

遼子は健介が手に持っている缶を渡されるや、
「健介さん？　これ何が入ってるんですか？」
カンケリをしていたのだから、中身はないと思っていたが、意外にも重たかったので尋ねたが、健介は妻である遼子に対しても秘密にしていた。
「その缶をクールボックスに直しておいてくれ……　中身は食後のお楽しみだ」
そう言われ、遼子は首を傾げたが、特に気にも留めず、言われたとおり缶をクールボックスに直した。

食事を終えた遼子と三姉妹を見た健介は一言、「冷たいものでもほしくないか？」と尋ねる。
「お父さん、ジュースはありませんよ？」
――と遼子が言うと、健介はククッと笑みを浮かべ、クールボックスから先程まで皐月と葉月と一緒に川原で蹴り合っていた缶を取り出した。
「お母さんお皿とスプーンを出してくれないか？」
そう言われた遼子は何事かと思いながらも、言われたとおり、お皿とスプーンを健介に手渡した。
昨夜カレーを食べたときに使ったお皿とスプーンである。
目の前に出され、三姉妹は不思議そうにお皿を眺める。

缶は粉ミルクが入れられているような大きなもので、蓋を閉めるようにガムテープが巻かれている。
健介はポケットに忍ばせていたサバイバルナイフを取り出し、テープで巻かれた部分を切っていくと、閉じられていた缶の中身が見えてきた。

缶の中にはもう一つ、お茶の粉が入っているような小さな缶が入っていた。その小さな缶の周りには水が入れられており、氷が入っていたのか、まだ溶けきっていない氷がチラホラと見える。
もう一つの缶を取り出し、健介は缶を振ると笑みを浮かべ、小さな缶の蓋を開けると……

「アイスクリーム？」
皐月がそう健介に尋ねる。
「ああ。昨日テントを張ったとき、皐月や弥生と葉月が自分から手伝ってくれたからな……　神様がご褒美を用意してくれていたんだ」
健介がそう言いながら、アイスを人数分わけていく。

実際は朝早く山を下り、コンビニでかちわり氷と塩を購入し、大きな缶と小さな缶の間に細かく砕いた氷と塩を敷き詰める。
氷に塩を加えることで、化学反応が起こり温度が急激に下がる。
小さな缶には、生クリーム・牛乳・砂糖・少量のバニラエッセンスと、アイスの材料を入れ、それらを混ぜたら缶に蓋をする。そして大きな缶の中に入れ、蓋をする。

あとは料理ができる時間を見計らって、５分ほどカンケリをすれば、自ずとアイスが出来上がるというわけだ。
――が、筆者同様、詳しい科学知識が乏しい三姉妹からすれば、缶の中身がアイスだという不思議な現象に目をときめかせていた。

夏の日差しが眩しい太陽の下で食べるアイスはまた格別で、三姉妹は顔を綻ばせながら、アイスをたいらげた。

「よし、それを食べたら、片付けるぞ……」

健介にそう云われ、三姉妹は後片付けをする。

「来た時よりも綺麗に――それがキャンプに来た時の最低限なお礼だ」

そう言われ、弥生と葉月は遼子と一緒に食器の後片付けをし、皐月と健介は木々の間に張っていたロープなどを片付け始めた。

小一時間ほどし、全てを片付けると、ワゴン車に詰め込んでいく。

「よし……　楽しかったか？」

健介がそう尋ねると、三姉妹は満面の笑顔で、うんと答えた。

「それじゃ帰るぞ！」

そう言いながら、健介は運転席のドアを開ける。

皐月は助手席へと座り、弥生、葉月、遼子は中部座席に座った。

家族が乗り込んだワゴン車は、ゆっくりとキャンプ場から離れ、山を下っていく。

「くっつきむし、またやりたいね？」

葉月がそう云うと、弥生と皐月が同意する。

くっつきむしとはオナモミのことで、それを姉妹たちは投げ合って遊んでいた。

「ねぇねぇ、お父さん。またキラキラやって」

助手席に座っている皐月がそう云う。

キラキラとは、昨晩、晩飯を片付けていたとき、みかんの皮から飛び出した汁をコンロの火が燃やしていたのがそれなのだが、やはり科学知識のない皐月からすれば小難しい方法よりただ単純に綺麗だったという感想だったので、またやってほしいと思っていた。

「でもなぁ、あれお母さんに怒られるんだよなぁ」

健介は苦笑いを浮かべる。

「ねぇ、お母さんいいでしょ？」
「また来年……キャンプに来たらね」
そう言われ、皐月は笑みを浮かべながら前を向き直すと、視界に小さな看板が見えた。

皐月は「なんて書いてあるんだろう」と小さく呟くや、
「何かあるのか？」
「うん。ほら……　あそこに小さな看板が置いてある」
皐月は目の前にある小さな看板を指差しながら、健介に教えた。
「うーん。お父さんの目じゃ何が書いてあるかわからないな……皐月――わかるか？」
そう云われ、皐月は目を細めた。

「ば……」
『――ば？』
皐月の言葉を健介たちが繰り返す。

「『ばかをみる』」
皐月がその言葉を発した時だった――

「お、お父さん！　前っ！」
中部座席の真ん中に座っていた弥生が大声でそう叫んだ。
車の目の前には拳大ほどの石が道の真ん中に落ちている。
「心配するな！　あれくらいの石どうってこと……」
健介がその先を言おうとした時だった。

フラフラと蛇行運転する車が目の前で猛スピードで走ってきた。
「くっ！」
健介は咄嗟にハンドルを切るや、横に重力が流れた。
蛇行する車とガードレールの間が一瞬だけ空き、そこを突いて、

ワゴン車はすり抜けた。

「ふぅ……　んっ？」

健介はバックミラーに映った、先程蛇行運転をしていた車を見るやギョッとする。

（まっすぐ走ってる？）

蛇行運転が飲酒によるものだと考えれば、車が避けたあとも続いているものだが、それが何事もなかったかのように、車はまっすぐ左側を走っていた。

途端ガクンと重力が急激に重たくなる感覚を健介たちは体験するや、車のうしろから悲鳴を挙げるようにギャギャギャという引き摺った音が聞こえてきた。

「パンクッ？　どうして？　空気圧はきちんとしていたはずだ！」

健介は急ブレーキをかけようとするが……

「――くぅそぉっ！　みんなしっかり捕まっていろ！」

そう絶叫するや、ワゴン車はガードレールを突き破り、崖下へと転落していった。

うっすらと暗くなっていく外は涼しいだろうが、車の中はサウナのように熱かった。

「うぅ……　うぅ――ん……」

そんな中、皐月はうっすらと目を開けた。

「お、お父さん……　いやぁあああああああっ！！」

自分の体で下敷きになっていた健介を見るや、皐月は悲鳴を挙げた。

エアパックに埋もれた健介の顔半分が、割れた窓ガラスで切り刻まれており、それは見るに無残なものであった。

「さ、皐月……　お母さんは？　弥生おねえちゃんや葉月は――？」
健介にそう訊かれたが、皐月はそれどころではなかった。
気が動転し、体を震わせる。転落した衝撃で体のあちらこちらから痛みが走っていた。

「お母さん？　弥生おねえちゃん！　葉月ぃ！」
中部座席にいるはずの3人の姿が見えない。皐月はシートベルトを外そうとしたが、バックルが壊れてしまい、ストラップが外れない。
「さ、皐月……　お父さんのポケットにナイフがあるから、それで切りなさい」
そう云われ、皐月は健介のポケットからサバイバルナイフを取り出し、ストラップを切った。

皐月が中部座席へと身を乗り出すと、葉月と弥生は健介と同様、体をドアにぶつけており、遼子に至っては上半身を変な格好で後部座席へと乗り出していた。

「お母さん！　弥生おねえちゃん！　葉月ぃっ！」
皐月はもう一度三人に呼び掛けるが、まるで死んだように反応がなかった。
「皐月……　そっちのドアは開くか？」
そう云われ、皐月は確認する。重たいドアは辛うじて開いた。

「そ……　そこから外に出て、助けを呼ぶんだ」
「そんな……　お父さんは？」
オドオドと顔を震わせながら、皐月は健介に尋ねる。
「心配するな……　お父さんはお前が結婚するまで――　死にはしないさ」
健介は折れ曲がった手を伸ばし、感覚のないまま皐月の頭を撫で

た。

そしてグタッと崩れるように目を瞑った。

「お父さん……　お父さん！」

皐月が健介に声をかけた時だった。

ドスンと、横転した車体に誰かが乗った音と振動がし、皐月はそちらに振り向くや、ゆっくりと目蓋は閉じられ、崩れるように健介の上へと落ちた。

壱：夢魔（後書き）

大変長らくお待たせしました（待っててくれた人はいるんだろうか？）第十一話です。

弐・卒塔婆（前書き）

卒塔婆（そとば）：供養・追善のため、墓などに立てる細長い板

弐・卒塔婆

「神主はご在宅でしょうか？」
夏の照りつける太陽の下、稲妻神社の境内で掃除をしている職員の巫女に、スーツ姿の大宮巡査が尋ねる。
「え、ええ。いらっしゃいますが――」
巫女は大宮巡査が警察の人間だということは知っているので特に何も聞かず、社務所へと案内した。

「おや？　大宮巡査……　今日はまた何用で？」
社務所へと入ってきた拓蔵が、大宮巡査にそう尋ねた。
「神主……　実は今日来たのは、教えてもらいたいことがあってなんです」
拓蔵は案内していた巫女に茶の用意をと伝えた。

「それで――　訊きたいこととは？」
お茶を一口のみ、拓蔵が尋ねると、
「先日、皐月ちゃんを斎藤武の屋敷に連れていき、あのような失態をしてしまったことを」
「いやいや、そのことはもうイイんじゃよ。わしは別に強要していたわけじゃないしな」
拓蔵は笑って言うが、大宮巡査の真剣な表情を見るや、声のトーンを落としていく。
「その時、一緒に来ていた鳴狗信乃さんが去り際に云っていた言葉が気になって、色々と皐月ちゃんたちのことを調べたんです。それと神主さんのことも――」
それを聞くや、拓蔵は大宮巡査を睨みつけた。
大宮巡査は一瞬たじろぐが、すぐに姿勢を正しくし、ジッと拓蔵

の目を見やった。
「神主は六年前、ある事件をきっかけに自ら辞表を出して警察を辞めていらっしゃる。皐月ちゃんたちがこの稲妻神社に住み始めたのも、ちょうど同じ時期だった――」
誰に聞いた？と拓蔵が訊ねると、大宮巡査は佐々木刑事からと答えた。

「あの馬鹿が……　余計なことを言いおってからに――」
拓蔵は呆れたような、諦めたような複雑な表情を浮かべながら、頭をかいた。
「それで、聞きたいのはそのことについてか？　ならば、話すことなどひとつも」
「いいえ。その時に起きた転落事故――　どうして警察は詳しく捜査をしなかったんですか？　それに、公安部に所属していたとはいえ、一概の警視であったあなたが自ら警察をお辞めになっているのも、そのことに――」
「それだけじゃったら、帰れぇっ！」
拓蔵が大声を挙げ、コップをテーブルに叩きつけた。

「いえ――　僕が神主に聞きたいのは、事故のこともありますが、本当に聞きたいのは皐月ちゃんたちのことなんです。彼女たちは一体何者なんですか？」
大宮巡査の質問を聞くや、拓蔵は逃げるように視線を逸らした。
「何こともない、ただ普通の――」
「先日、皐月ちゃんが犬神に取り憑かれた斎藤千和に腹部を噛まれていました。僕は直接噛まれたのを見てはいませんが、相当深手だったんです。それなのに腹部の回復が異常なまでに早かった……今までだって殆ど数日で全快していた。それに鳴狗信乃さんが皐月ちゃんに向かって言った言葉も――」
拓蔵は信乃が何を言ったのかと尋ねる。

『人間でも、妖怪でもない』
その言葉が大宮巡査は引っかかっていたのだ。
「彼にだったら教えてもいいんじゃないの？」
大宮巡査はうしろから声が聞こえ、そちらに振り向くと、そこには脱衣婆と瑠璃が立っていた。
「だっ……　み、海雪（みゆき）さん？　それと瑠璃さん」
大宮巡査に名を言われた瑠璃は、まるで相手を哀れむような表情を浮かべる。それ以降余り大宮巡査を見ようとはしていなかった。
「拓蔵……　私は彼に、皐月と葉月が心を許している彼にだったら、全てを話してもいいと思っています」
「それは……皐月たちに命令している立場としてですか？」
「いいえ、私個人の――あなたがこの六年間、密かに調べていた事を知っている身としてです」
拓蔵は難しい表情を浮かべながら、少しばかり考え込むと――
「六年前……　確かに転落事故が起き、その被害者は健介くんたち家族じゃった……」
「それじゃ――」
「じゃが、健介君はプロのレーサーじゃったから、運転ミスもなければ、空気圧によるミスだったとも思えんかった。あの燃えるような太陽の下で、空気を入れすぎれば、タイヤの空気は熱によって膨らみ暴発する。そんな素人でもわかるような事はしなかったはずなんじゃ……　転落事故の原因は後輪のタイヤがパンクしたためと判断された……　わしはそのことに違和感を感じておったし、何より、横転した車の中には弥生たち三姉妹しかいなかったことが何より不思議でたまらんかったんじゃよ――」
「運転席側のドアは地面でふさがっていましたし、なにより助手席

に座っていた皐月のシートベルトが刃物で切られていました。そのことから、運転していた初瀬神健介が皐月を助けたと推測できるんです」

瑠璃の言葉に大宮巡査は少しばかり考えるや、

「ちょ、ちょっと待ってください？　瑠璃さん？　あなたは確か閻魔王でしたよね？　閻魔王って、この世の全てを知ることが出来るんじゃないんですか？　それなのに話を聞いてると、まるでわからないって言ってるのと同じじゃないですか？」

大宮巡査は先程瑠璃が云った『推測』という言葉に違和感があったからだ。

『推測』とはある事柄に基づいて、おしはかって考えることであり、云ってしまえば想像と同じ意味である。

この世の全てを知ることができる閻魔王でさえわからないことが、大宮巡査は理解できなかった。

「私もこの六年間……　彼女たちを執行人にしたという責任がありますから、初瀬神健介とその妻であり拓蔵の娘である遼子の行方を調べていましたが――未だに見つからないんです」

瑠璃は俯くように答えた。

「まるで――　誰かが意図的に二人の行方を曇らされているって感じがしますね？」

「やっぱり大宮巡査もそう思いますか？　本来ならば全ての事柄は浄玻璃鏡を通して知ることができます。でも二人の事柄についてはまったくと云っていいほどぼやけてしまう」

今までの口調とは違い、丁寧な話し方をする脱衣婆に、大宮巡査は目を点にする。

「それに、転落事故で彼女たちは一度死んでいるんです」

「一度死んだって――　人間は死ねば生き返らないのが自然の摂理

なんじゃ？」

「臨死状態という言葉を知ってますか？　本当に死んでいたのならば生き返らせることはしません。ですが、弥生たちは露世側にある賽の河原にいましたから、死んではいないことになるんです。だからこそ、私は彼女たちを生き返らせた。拓蔵にある一つを条件に」

「ある一つの条件？」

社務所にいる全員が拓蔵を見やる。

「執行人であることを条件に……　両親の記憶と、その原因となった事故の記憶全てをなかったことにすること」

「一種の記憶喪失ってことですか？」

「簡単にいえばそうですけど、でもいずれ時期が来れば彼女たち自らが思い出すかもしれないと思っていましたが……　姑獲鳥の時に皐月は自分の両親のことを拓蔵に訊ねていましたし、自分たち姉妹が健介と遼子と一緒に写っている写真を見てから、三姉妹は次第に違和感を持ち始めていた」

瑠璃の説明に大宮巡査は心当たりがあった。

「仮に瑠璃さんや海雪さんの云っていることが本当だとすれば――あ、いや……　二人が闇魔王と脱衣婆であることを前提に考えるとすると……　皐月ちゃんたちが持っている力は執行人だったからってことですか？」

「いえ……　葉月が姉妹の中で霊感が強いのは先天的なものですし、皐月の耳が若干悪いのも、事故に遭う前からだったそうです」

脱衣婆……海雪の話を聞きながら、大宮巡査はあることを考えていた。

そして大宮巡査は重たい口を開いた。

「皐月ちゃんと弥生さんは期末テストを終えたんでしょうか？」

「確か昨日か、一昨日に終わってるはずじゃが？　それがどうかし

たのか？」
　拓蔵がそう尋ねると、瑠璃と海雪は大宮巡査の考えがわかるや、表情を変えた。

「まさか、そのキャンプ場に彼女たちを連れていくっていうんじゃ？」
「何を馬鹿なことをほざいておる！　古傷を抉るようなものじゃないか！」
　拓蔵が睨みつけながら、大宮巡査の胸倉を掴みかかる。
「僕だって……　出来ればこんなことはしたくない。ただでさえ傷ついている彼女たちに……」
「それじゃ……　それじゃぁどうして？」
　海雪がそう訊ねると、大宮巡査はジッと海雪を見つめた。

「あなたたちが彼女たちのことを思って、両親のことや、事故のことを隠しているのなら、それもまた優しさなんだと思います。だけど！　さきほど瑠璃さんが云っていた、心の中にそういうモヤモヤがあるのなら！　それを晴らしてあげるのも、また優しさだと思います。どんなに残酷な現実だろうと、彼女たちはきっと受け取ってくれる！　僕はそう信じています」
「詭弁を論ずるな！　人間の心はそう簡単に強くはならんのじゃよ？　青二才！」
　拓蔵が睨みつけながら、暴言を吐く。
「何とでも言ってください。僕は彼女たちがどんな辛い思いをしてきたのか、想像することしかできない。だけど――隠すことが、隠されることがどれだけ辛いことか――」
　大宮巡査の言葉を聞くや、瑠璃は少しばかり表情を曇らせた。

「闇魔さま？」と海雪が声を掛ける。
「拓蔵。大宮巡査の言うとおり、皐月たちの都合が良ければ……

二週間後の週末、事故があったキャンプ場に連れていきましょう」
「え、閻魔さま？」
瑠璃の言葉に拓蔵は狼狽する。が一番驚いていたのは大宮巡査であった。
「大丈夫。その時は私と脱衣婆も同行しますから」
瑠璃は海雪を見ながら言う。海雪は答えるように無言で頷いた。

「……　ちっ――　わかりました……」
ひとつ舌打ちをするや、拓蔵は諦め、それを了承した。

社務所を出て、神社の鳥居を潜り、前に駐車場に停めていた車に乗り込もうとした大宮巡査を瑠璃が呼び止める。

「本当によろしいんですか？」
社務所にいたときとは打って変わって、神だというのに遠慮している口調である。
「――なにがですか？」
瑠璃の問いかけに、大宮巡査が聞き返す。
「今回は皐月たちの事を思ってのことでしょうが……　あなたのことでもあるんじゃないんですか？」
その言葉を聞くや、大宮巡査は少しばかり、瑠璃から目を逸らした。

「瑠璃さん……　謝罪しても……　数え切れないほど謝罪しても、罪が赦されないことだってあるんです」
「でも……　あれはまだあなたが――」
瑠璃がその先を言おうとしたとき、大宮巡査は車のクラクションを鳴らした。
その音に瑠璃はドキッとする。

「あなたが僕を赦してくれたとしても、僕自身が僕を赦すことは絶対にない！」

そう言うや、大宮巡査は車を発進させた。

通り去っていく車を見送るや、瑠璃はスーッと姿を消した。

――とあるお寺にある墓場。その一角に卒塔婆が立てられている場所がある。

そこには『大宮彩奈（さな）』と書かれた卒塔婆があった。

弐・卒塔婆（後書き）

瑠璃と大宮巡査の関係は今回（第十一話）では詳しく語られませんが、大宮巡査が三姉妹に会う前からの知り合いです。

参・弱虫

大宮巡査が稲妻神社にやってきた晩のことである。

「二週間後の週末？　それがどうかしたの？」

弥生が拓蔵にそう尋ねる。

「いやな。昼間大宮巡査が神社に来て、日頃の感謝にお前たち三人をキャンプに連れていきたいという申し出があってな。当日お前たちの都合が良ければなんじゃが？」

拓蔵はワンカップ酒を飲みながら説明する。

「別にこれといって予定もないけど……　でもねぇ？　キャンプっていったら泊まるってことでしょ？」

弥生がそう言いながら、皐月と葉月を見やった。

皐月は気にも止めずに食事を進めているが、葉月に至っては目を爛々と輝かせている。

「葉月……行きたいの？」

皐月がそう訊くと、葉月は頷いた。

「うーん。皐月はどうする？　葉月だけじゃ大宮巡査に失礼でしょ？」

どうしてそういうことになるのだろうか？と皐月は思ったが、お世話になっていることにはかわりないため、行くことにした。

「それで、弥生姉さんはどうするの？」

「大宮巡査って料理できるのかしらね？」

要するに弥生も理由付けて行きたいんじゃと考えながらも、皐月たちはキャンプに行くことにした。

三姉妹が呆気なく決めていくのを見ながら、拓蔵は不機嫌極まり

ない表情を浮かべながら、酒を飲み干した。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

それから二週間後のことである。その間事件はあったものの、大宮巡査と阿弥陀警部は皐月たちの力を借りずとも事件を解決していった。

稲妻神社の駐車場に黒の４ＷＤが停められており、リュックザックを背負った皐月と葉月がそれに見入っていた。

「でっかーい」

葉月は思ったことを素直に口に出した。皐月は口にこそ出さなかったが、葉月と同じ感想だった。

「忘れ物はないかな？」

大宮巡査が尋ねると、三姉妹は頷いた。

「それじゃ爺様……　くれぐれもお酒は控えてよね？」

「わかっておる。道中気を付けてな――　んっ？」

拓蔵が不思議そうに首を傾げる。

「あれ、皐月。昨日、助手席は葉月が乗るってことになったんじゃなかったっけ？」

弥生に言われ、既に助手席に乗っていた皐月がアッと声を挙げるや、車から降りようとする。

「別にいいよ。早い者勝ちだし」

葉月はそう言うが、如何せん納得のいかない表情を浮かべている。

「なんか……　前にも同じことなかったっけ？」

弥生がそう云うが、皐月と葉月は不思議そうに首を傾げる。

「ほら、三人とも、早くしないと一緒に行く人が怒るかもしれないよ」
大宮巡査がそう急き立てられ、三姉妹は車に乗り込んだ。
車はゆっくりと走り出した。

「大宮巡査、さっき一緒にって……　他にも誰か来るんですか？」
結局助手席に座ることになった皐月がそう尋ねる。
「ああ。今回のキャンプ、実は神主は反対していたんだ」
「どうして？」
弥生が最もな意見を言うが、三姉妹の記憶と両親に関わることだということは話すべきではないと大宮巡査はわかっていた。

「いや、やっぱり若い男に孫をあずけるのは忍びないって思ったんじゃないかな？」
「大丈夫ですよ。大宮巡査って見た目からして弱そうですから」
「はは、『男は狼なのよ』って歌のフレーズがあるくらいだからね。いい人だからって信用しちゃいけないんじゃないかな？」
大宮巡査は口遊びながら、話をする。
「すっかり忘れてたけど、大宮巡査もれっきとした男性なんですよね？」
「や、弥生さん。それはちょっと酷いんじゃないかな？」
苦笑いを浮かべる大宮巡査を見ながら、皐月と葉月は笑みを浮かべていた。

大宮巡査は皐月たちと最初出会ったとき、とっつきにくいものだと思っていた。
しかし彼女たちに会うたびに色々な顔が見えていたことも事実である。
捜査をお願いしている時の真剣な顔つきとは裏腹に、今こうして

車内でわけへだてなく会話をしているのを見ると、やっぱり普通の姉妹なんだなぁと大宮巡査は考えながら車を運転していた。

――車はちょうどキャンプ場がある山の麓の前を通っている道路の脇に車を一時停止させた。

葉月は窓を開け、あたりを見渡したが、走る車はあっても、歩いている人は人っ子一人いなかった。

「大宮巡査、誰もいませんよ？」

「可笑しいなぁ……　二人とも約束を破るとは思えないんだけど」

その言葉から大宮巡査と親しい人なのだろうかと弥生と皐月は思った。

「あ、あれじゃないかな？　――って……　えっ？」

顔を覗かせていた葉月が、道路の向こう側から走ってくる二つの影に目をやるや、声を挙げた。

「ちょ、ちょっと？　あれって瑠璃さんとおばあちゃん？」

皐月と弥生もその影に気付くや、声を荒らげた。

瑠璃はサマーセーターにジーンズ、小さなツバの麦藁帽子に赤色のスニーカーを履いており、海雪はカッターシャツにホットパンツ。肩の上に薄手のスカーフを撒いている。足には膝元までのニーソックスにブーツという姿である。

「す、すみません大宮巡査……　ちょっと準備に手間取ってしまって」

息を整えながら、瑠璃は大宮巡査に謝りを入れる。

「いや、いいですよ。僕たちの方がちょっと早く来ちゃったみたいですし」

そう云われ、瑠璃はホッと胸を撫で下ろした。

脱衣婆は中部座席のドアを開け、座椅子の背凭れを曲げると、自分たちの持ってきたバッグを乗せ始める。
「それじゃ、行きますか」
大宮巡査がそう云うや、再び車を発進させた。

「そういえば大宮巡査、彼(あれ)は用意してるんですか？」
弥生の横に座っている瑠璃がそう尋ねると、「ええ。ちゃんと用意しています」と大宮巡査は答える。
「なにかあるんですか？」
皐月がそう尋ねると、瑠璃と大宮巡査は少しばかり笑みを浮かべた。その表情に三姉妹は首を傾げていた。

車が山を登っていく最中、瑠璃と海雪は外の景色を警戒するように見ていた。
事故があった現場を通り過ぎるや、よりいっそう警戒心をむき出しにする。――が、目的のものはどこにもなかった。
六年前、車がキャンプ場から下っていた時、皐月が気になった看板を探していたのだが、数年経っている以上、まだあるとは二人とも思っていなかった。

ふぅ……と、瑠璃と海雪が息を吐いた時だった。
開けっ放しになっていた窓から、何時の間にか蜂が車内に入ってきていたのだ。
「う、うわ……！」
「ちょ、危な……！」
蜂一匹入ってきただけでこの騒ぎである。

「落ち着きなさい。蜂はこちらから何もしなければ、攻撃すること

はありません」
瑠璃が落ち着いた口調で言うや、全員があまり騒がないようにした。
三、四分ほどして、蜂が開けられた窓から出ていったのがわかると、すぐさま開けられていた窓全てを閉め切った。

「び、びっくりしたァ……」
「もう、心臓に悪い……」
弥生と葉月が息を整えている中、前の方でガタガタと震えている気配がした。
「さ、皐月ちゃん？　ちょっと離れてくれないかな？　運転しずらいんだけど――」
大宮巡査の言葉に、うしろに座っていた四人が前の方を覗き込むと、皐月が今にも泣きそうな表情を浮かべながら、大宮巡査の腕に抱きついていた。

「ちょっと、皐月？　あんた虫ってダメだったっけ？」
弥生が呆れた声でそう尋ねる。
「えっ？　っと……」
皐月は我にかえり顔を上げると、すぐ近くに大宮巡査の顔があったため、慌てて手を離し、体を正面に向けなおした。。

「しっかし、今のは面白かったわね。虫がダメって」
海雪がクスクスと笑をこぼす。
「べ、別に可笑しくないでしょ？　蜂に刺されたら死んじゃうかもしれないじゃない？」
「大丈夫、大丈夫。さっきのはミツバチみたいだから、刺されても膨れるだけで、死ぬほどじゃないと思うよ」
大宮巡査にそう云われ、皐月は一度大宮巡査を睨んだが、すぐさま顔を俯かせた。

「大宮巡査、皐月は一度ミツバチに刺されていることがあるんです。一度目ならまだしも、何度も刺されてしまっては命の危険性があります。何事も馬鹿にはできないんですよ」
瑠璃がうしろから注意する。
「そ、そうなんですか？　皐月ちゃんごめんね。知らなかったとはいえ酷いことといっちゃって」
大宮巡査は謝るが、皐月はキャンプ場につくまで、一言も会話には参加しなかった。

そんな皐月を瑠璃は物悲しそうに見ていた。それどころか自分自身が嘘を吐いてしまったことに対する罪悪感があった。

六年前、今と同じ状況の時、皐月は運転していた健介の腕にしがみついていた。
それは虫が怖かったというよりも、皐月が極度なまでの怖がりだったことにあった。
また皐月が蜂に刺されたことは一度たりともなかった。

「閻魔さま……　どうかしたんですか？」
違和感を感じた海雪が瑠璃に尋ねると、
「何事も起きなければ……　当初の目的以外、何事もなければいいんですけどね」
瑠璃がそう言うと、海雪は何も言わず頷いた。

参・弱虫（後書き）

私にファッションセンスなんてございません。

肆・？耳

皐月たちが連れてこられたキャンプ場は基本的には無料である。その代わりコテージなどはなく、各々でテントを張らなければいけないし、スペースもさほどない。

川から二十米（メートル）ほど離れた場所を、テントなどの設置場所に決めると、大宮巡査は駐車場に停めていた車から荷物を運び込み、テント張りの準備に取り掛かった。

「あ、手伝います」

そう言ったのは皐月と瑠璃である。

「それじゃ、先ずは石を退けないと――」

大宮巡査がそういう前に皐月が先にそれをやっていた。

「言われる前にやるなんて、今日の皐月どうかしてるわね？」

調理場の確保をしていた弥生にそう云われ、皐月はキョトンとする。

（もしかして、無意識にやっていたんでしょうかね？）

（かもしれませんね。皐月は俗に言うお父さんっ子でしたから）

大宮巡査と瑠璃が小声で会話しているとは知ってか知らずか、皐月は黙々と作業を進めていく。

石を取り除いた地面の上にブルーシートを二枚分広げ、その上にドーム型のテントをふたつ設置していく。

最初は大宮巡査がやっていたのだが、手際が悪く、見るに見かねた皐月が最終的にはほとんど済ませていた。

「あれ？　皐月、あんたテントとか張れたんだ？」

竈（かまど）や火の元の設置をし終えた弥生にそう云われ、皐月は首を傾げ

る。
「えっと……　ほら、説明書！　説明書読んでやったから」
皐月はそう言いながら、大宮巡査を一瞥する。
「いや、すごいね。すぐに理解したんだから」と大宮巡査は笑っていう。
それを見て弥生はあまり気に留めなかった。

「あれ？　そういえば葉月は――」
皐月が近くにいると思っていた葉月の姿がないことに気づき、誰彼構わずに尋ねる。
「あ、おばあさんと一緒に落ちている木の枝とかを拾いに行ってもらってる」
そう弥生が説明していると、近くから子供の焦った声が聞こえてきた。

「ちょっとおばあちゃんよけないでぇ！」
葉月が海雪に向かって何かを投げており、それを海雪は避けながら歩いている。
「葉月！　下手な鉄砲も数撃ちゃ当たるって、言葉知ってる？」
「知ってるけど、今それどころじゃない」
葉月が投げたものが弥生の服に当たり、それを手に取った。

「これって、オナモミ？」
「へぇ～、くっつきむしかぁ……　葉月ちゃん？　これどこにあったんだい？」
大宮巡査にそう訊かれ、葉月は川下にある茂みを指さした。

「おばあちゃん、意地悪なんだよ？　私が一生懸命木の枝を集めてるのに、うしろから投げるんだもの！」
葉月は履いているミニスカートをパタパタと扇ぎながら、引っ付

いていたオナモミを取ろうとする。下にジーンズを履いているとはいえ、傍から見ればみっともない。
「葉月ちゃん。オナモミははらっただけじゃ取れないんだよ」
そう云いながら、大宮巡査はひとつずつ、葉月のスカートに付いたオナモミを取っていく。

「ちょっとぉっ！　マジありえねぇんだけど？」
近くの方から男性のチャラけた声が聞こえ、皐月たちはそちらを見やった。
川岸の方で赤茶色の髪をした男とそれに二人の女性が引っ付いて、釣りをしている。

女性の一人は黒髪で長さは腰まであり、服装はお嬢様をイメージさせる白桃色のワンピースで、靴は紅梅色のハイヒールと、正直舐めてるのかと言いたくなる格好である。
もう一人はみつあみで、ジャンパーを着ており、靴は赤と白のスニーカーである。

「うぅわぁっ！　まぁたかよぉ！　つぅかこの糸ダメダメじゃねぇ？」
男はリールに絡まった糸を解(ほぐ)しては巻き取って元に戻し、リリースする。
――そして、数秒もしないうちに糸を巻き取っていく。
「健佑ぇ？　マジヤバじゃねぇ？　全然昼飯取れねぇんだけどぉ？」
彼らの会話を聞く限りでは、釣った川魚を昼食にしようとしていた。

「あんなに早く糸を巻いてたんじゃ、釣れるわけないでしょうに？」
海雪がそう云うや、三姉妹と瑠璃は同意するように頷く。

「ちょっとぉ？　あんたらなぁにぃ？　うちらのやり方にケチつけるわけ？」

釣りをしている男――健佑の横にいたみつあみの女性が皐月たちを睨みながら、文句をつける。

「いや、彼女たちの言い方が悪かったのなら、謝るよ。でも、釣りっていうのは時間をかけてやるものだと僕は思うけどね？」

大宮巡査が割って入って、弁論する。

「んな時間ねぇっつぅーの！　あたしらもうお腹ペコペコなのょ！」

「舌足らず……」と瑠璃が呟く。その言葉が聞こえ、女性は顔を真っ赤にする。

「はぁ？　マジありえねぇ？　年下のくせに、偉そうにしてんじゃねぇよぉ？」

「なら訊きますが？　あなた達はこの山に何しにきたんですか？」

そう訊かれ、女性は、

「はぁ、見てわかんねぇ？　キャンプに決まってんっしょ？」

女性は呆れながらそう答える。

「キャンプって……　テントも何も見当たらないけど？」

弥生がそう言うと、

「うちらぁ、若いしぃ。テント張るのマジ疲れるからぁ、健佑の車に泊まるのよぉ？」

「なるほど、だからテントがないのか――」

そう云うや、大宮巡査は皐月と葉月を手招きする。

「車の中に網があるんだ。それをちょっと取ってきてくれないかな？」

そう云うや、大宮巡査は車の鍵を皐月に渡す。

皐月と葉月は何のことだかわからないまま、言われたとおり車から網を持ってきた。

「へぇ、この川って、結構魚がいるんですね？」
大宮巡査はそう云いながら、川の中を覗き込む。水は透き通っており、大小様々な魚が優雅に泳いでいる。
「綺麗な水には、それだけ多くの生き物が住み着きますからね」
瑠璃がそう説明する。
「それでこの網をどうするの？」
「ああ、それじゃ皐月ちゃんと海雪さんとで網の両端を掴んで、川に沈めて。魚が逃げないように川を遮るようにね」
そう云われ、皐月と海雪は網の両端を持ち、海雪が川をわたっていく。
幸い川の水位はそれほど高くはなく、海雪の脹脛から下が濡れるだけだった。

「それじゃ、ちょっと濡れるかもしれないけど」
そう云いながら、大宮巡査は大きな岩を両手に担ぎ上げた。
「ちょ、ちょっと！」
皐月がそう言うより前に、岩は川へと投げ込まれ、水飛沫が高く上がった。
その余波は川岸にいた弥生・葉月・瑠璃、健佑、女性二人、大宮巡査に降り注いた。
網を持っていた皐月と海雪にも当然のように水飛沫が当たった。

「ちょ、ちょっと大宮巡査ぁ？」
葉月が目を細めながら、川の方を見ると、瞳孔を大きくし、驚いた声を挙げた。
ひぃ、ふぅ、みぃ、よぉ……と五匹の川魚がぷかりと水面に浮かび上がってきた。

「ふぅ、けっこううまくとれたなぁ」
「水面に石などで衝撃を与え、魚をショック死させる。皐月、脱衣婆。あなたたちの方にもびっくりして隠れていた魚が逃げ込んでるかもしませんよ」
瑠璃にそう云われ、皐月と海雪は川に仕掛けていた網の中を確認すると……
「えっと……　鮎（あゆ）に山女（やまめ）……　あ、鰻（うなぎ）も入ってる」
網の中には数匹もの淡水魚が多く捕まっていた。
「すんげぇ？　つぅーか、ありえねぇ？　俺がやってたのってなんなんだァ？」
健佑が悶えるように言う。
「あなたの場合は我慢が足りなかっただけでしょ？　あと川に対しての礼儀」
弥生がそういうと、
「川に礼儀なんていらないっしょ？　つぅかなぁに言ってるの？　頭おかしんじゃねぇ？」
（頭がおかしいのはあんたの方でしょ？）と弥生は思ったが、口に出すことはしなかった。

「さすがにうなぎは食べるにはもったいないから、逃がしてやろう。――どうする？　君たちが良ければ夕食に川魚を追加するけど？」
「そういえば、元々何を作ろうと思ってたんだっけ？」
「えっと、大宮巡査が料理出来ないだろうなって思ってたし、簡単なのでカレーの材料持ってきたんだけど？」
弥生がバッグから袋に入れたニンジンやら、じゃがいもやらを出してみせる。
「まぁ、定番といえば定番ですし、無難と言えば無難ですね？」
「それだったらさぁ？　シーフードにしたら？」
海雪の言葉に葉月が首を傾げる。
「あれ？　シーフードって海鮮って意味じゃなかった？」

「まぁ、細かいことは気にしないの」と海雪は笑って誤魔化した。

日が暮れ始め、弥生と瑠璃が調理をし始める。先程の水飛沫で服が濡れてしまったため、着替えており、二人ともTシャツにズボンというラフな格好である。

弥生が野菜や肉を切り、瑠璃は大宮巡査が用意していたアウトドア用のガスコンロで野菜を炒めていく。海雪はその横でとれた川魚を人数分焚き火で焼いていた。

「魚は殿様に焼かせろ、餅は貧乏な百姓に焼かせろってね」
「おばあちゃん、なにそれ？」
海雪の言葉に弥生が尋ねる。
「魚を焼くときは頻繁にひっくり返すと魚の表面が痛みダメになってしまうから、命令するだけであまり手を出さない殿様がいい。逆に餅は頻繁にひっくり返した方がいいから、もうできたかまだできないかと手を出す百姓がいいっていう意味」
「つまり、我慢強いかという意味です」
海雪の説明に瑠璃が付け足しをする。

串を口から刺された鮎や山女が背中から火に炙られ、脂が火の中に滴り落ちていく。その度に『ジュッ』という燃える音が聞こえ、火は勢いを増していった。

伍・心的外傷（前書き）

心的外傷（トラウマ）：外的内的要因による衝撃的な肉体的、精神的ショックを受けた事で、長い間心の傷となってしまうことを指す

伍・心的外傷

大宮巡査と皐月、葉月の三人は川の水を使って、米を洗い、それを飯盒に入れていく。
Y字になっている二本の木の枝に飯盒の弦に潜らせた棒を引っ掛け、火にかけていく。

ご飯を炊いている間、大宮巡査は皐月と葉月を草叢の方へと連れていき、あることをしていた。
「なにやってるの？」
葉月にそう訊かれた大宮巡査はナイフと先が細く削られた木の枝を持っていた。
「この枝を使って、そこに生えている葉っぱの裏に好きな言葉や絵をかいてみてごらん」
そう云われ、葉月と皐月は何のことかわからず、いわれたとおりに葉っぱの裏に各々好きなものをかいていく。
もちろん墨などついているわけもなく、一応何をかいたのかは本人しかわからないが、傍から見ればただ傷を付けているだけにしか見えない。

「これって何か意味あるの？」
文字を書きながら、皐月は大宮巡査に尋ねる。
「それは秘密さ。それにしてもこんなところにモチノキがあるなんて、佐々木刑事に感謝しないとなぁ」
「佐々木刑事？」
葉月が首を傾げ、そう尋ねる。
「先輩の刑事さんだよ」と大宮巡査は答えた。

「それで葉月ちゃんは何をかいたんだい？」

大宮巡査が尋ねると、葉月は皐月を一瞥する。
「えっと？　私がどうかしたの？」
「ううん。なんでもない」
そう云うや、葉月はそそくさと弥生たちのところへと戻っていった。

「変な子……」
「そういう皐月ちゃんは何をかいたんだい？」
「特に何も……」
そっけなく云うや、皐月も弥生たちのところへと行く。

（出来る限り、彼女たちにはいい思い出として覚えていて欲しいな……　あの事故を塗り替えれるとは思えないけど……）
大宮巡査が三姉妹をキャンプに連れてきた主旨は、六年前の事故に関する何かを、このキャンプを通して知ることにある。
しかし、楽しそうにしている三姉妹を見ていると、自分がやっていることは間違いではないだろうかと後悔している大宮巡査であった。

「あなたのやってることは間違いではありませんし、今回の主旨は六年前の事故で何があったのかを知ることにありますからね」
何時の間にか大宮巡査の横に立っていた瑠璃がそう話す。
「瑠璃さんも結構楽しんでるじゃないですか？」
大宮巡査は笑いながら云った。瑠璃は焼けた鮎を手にもっており、それを小さな口で頬張っている。
「それにしても、この鮎、結構脂がのってますね。脂がのっている魚は海川関係なしに美味ですよ」
「えっと闇魔さまって、料理とかに詳しい妖怪でしたっけ？」
大宮巡査が首を傾げる。

「結婚式場では皐月たちの目の前でしたから他人行儀みたいなことをしましたが、やはり警察官の道を選びましたか」
「ええ。妹が犬のおまわりさんを好きだったので」
「本当だったら、車関係の仕事をしていたでしょうに……　辛くないですか？」
瑠璃は申し訳なさそうな顔を浮かべる。

「妹は――元気にしてるんですか？」
「元気に――死んだ人間にその言葉は当てはまらないと思いますが、今も賽の河原で石積みをしていますよ」
「僕は地獄に落ちるんでしょうね」
「それは……　私が言えることは――今もその罪を背負って生きていくのなら、罪は多少軽くなると思います。あなたはその罪を償っているのですから」
「そう云ってもらえると、少し気が晴れました」
瑠璃と大宮巡査が会話している中、ゴトゴトと何かが音をしだす。

「そういえば、飯盒に火をかけていたんじゃないんですか？　そろそろ蒸したほうがいい頃合でしょう？」
瑠璃にそう云われ、大宮巡査は軍手をはめるや、飯盒を火から離し、裏返した。
飯盒にかけていた火に水をかけると蒸気が夕闇の空にのぼっていった。

「大宮巡査ぁっ！　ごはん炊けた？」
弥生が大声で呼びかける。
「少し待ってて、今蒸しているところだから」
「今、魚で小腹を満たしてるところだけど、早くしないと葉月怒りますよ！　この子結構食べますから」
「ちょ、ちょっと弥生おねえちゃん？」

葉月は顔を真っ赤にしながら、弥生にパタパタと殴る。
「い、痛っ！　ご、ごめん！　ごめんって……」
そんな二人を見ながら、皐月と海雪は魚をくわえながら、笑を零していた。

「今はただ純粋に、このキャンプが楽しめればいいんじゃないですかね？」
瑠璃はそう云うや、飯盒を手に取り、弥生たちのところへと持っていった。

晩食を終え、少しばかり焚き火をしていた時のことである。
大宮巡査はバッグからグレープフルーツの皮が入ったビニール袋を取り出す。
「見てて、今面白いことしてみるから」
大宮巡査がそう云うや、後片付けをしていた弥生と皐月、釜戸にしていた場所を綺麗にしている瑠璃と海雪、大宮巡査の隣に座っている葉月が、大宮巡査が手にもっているグレープフルーツの皮を見やった。

「今から花火が火の周りに上がるからね」
そう云うや、大宮巡査は皮に含まれている汁を火にめがけてかけた。
すると火の周りにパチパチっと音が鳴り、まるで花火のように見える。
「葉月ちゃんもやってみるかい？」
大宮巡査から皮を渡された葉月は、汁の出し方を教えてもらい、火に目掛けて、噴出させる。

「――キラキラ……」

皐月がそう呟くと、
「皐月、どうかした？」
「ねぇ？　私たちも前にあんなことしなかったっけ？」
「覚えてないけど、学校の実験とかでやったんじゃないの？」
弥生は首を傾げながら聞き返す。
「う、ううん。私たち一回アレやってる――　お父さんに教えてもらって……」
「皐月？　私たちのお父さんは……」
弥生が声を荒らげながら、その先を言おうとした時だった。

「ちょっとぉ、健佑ぇっ！　それってどういう意味？」
「るっせぇなぁ！　もういいだろ？」
「よくないわよ！　歩夢（あゆむ）とはもう終わったんじゃなかったの？」
喧嘩をしているのは昼間川釣りをしていた健佑とその連れの女性である。

「ったく、翔太もなんで急にドタキャンしてるんだよ」
「ちょっと、人のせいにしてんじゃないわよ！」
女性は健佑に何かを投げぶつけるや、駐車場の方へと去っていった。

「ったく、んっ？」
苛立った健佑が大宮巡査たちをみやった。
「あんたらぁ！　なぁに見てんだよ？」
と、イチャモンつけながらも、健佑は駐車場の方へと去っていった。

――皐月の威勢のいいハリのある声が山中に響きわたる。
長短二本の竹刀を手に持ち、一糸乱れぬその形は舞であると言え

よう。
「こんな時でも鍛錬は欠かさないんだね」
二つあるテントの内、ひとつは三姉妹用に、もうひとつを瑠璃と海雪のために設置しており、大宮巡査は駐車場に停めている車の中で寝ようとしていたのだが、瑠璃の提案で外で見張りをするようにと言われ、寝袋で寝ようと準備をしていた。

「えっと……　今何時ですか？」
皐月は手を休め、大宮巡査に尋ねた。
「んっとね……　十時を回ったくらいかな」
それを聞くや、皐月は自分が寝る予定のテントを見やった。
「葉月、今日のこと、すごく楽しみにしてたんですよ。あれしたいこれしたいって――　いつもは寝つきが悪いのに、すんなり寝ちゃって――」
「それだけ今日のことが楽しかったんだろうね」
大宮巡査は笑いながら話す。

「今日は本当にありがとうございました。また誘ってくれませんか？」
「別に構わないけど……」
大宮巡査はその先を言おうとしたが、少し躊躇う。
「どうかしたんですか？」
「い、いや……」
動揺を隠せていない大宮巡査の表情を見るや、皐月は顔を歪めた。

「いや……　妹も生きていたら、君と同じくらいだったのかなと思ってね」
「――妹？　大宮巡査って妹さんがいたんですか？」
「うん。いるというより、『いた』と言ったほうがいいね」
その言葉の意味に、皐月は少しばかり首を傾げた。『いた』とい

うのは過去形だからである。

大宮巡査はテーブルのそばに置いていた折りたたみの椅子を二つ手に持ち、川辺近くに並べる。そのひとつに自分が座り、もうひとつに皐月を座らせた。

「実は今日、このキャンプに君たちを誘ったのは、君たちのお父さんとお母さんの事故について何かわかるんじゃないかと思ってね」

「お、お父さんと……お母さんの？」

事の真意を聞くや、皐月は声を荒らげる。

「ああ。だから今回のキャンプ、神主は大反対していたんだ」

「爺様なら仕方ないと思いますけど……　でも――どうして大宮巡査がお父さんとお母さんのことを知ってるんですか？」

皐月がそう訊ねると、大宮巡査は空を仰いだ。

「君のお父さんである初瀬神健介は、有名なＦ１レーサーでね。僕が小さい頃、もっとも尊敬していたレーサーだったんだ。それが六年前のある日、つまり君たち三姉妹が転落事故に遭ってから、まるで『存在そのものがなくなっていた』んだ」

「――存在そのものが？」

「さっきも言ったとおり、君のお父さんは有名な選手でね、Ｆ１中継の番組で見ない日はないっていうくらいの人で、特に大きな大会にはほとんど出ていたんだ。そんな人が突然出場しないのは、誰だって不思議に思う。だけど、事故に遭ったという報道もなければ行方不明になった報道さえなかった――」

皐月は大宮巡査の話を聞きながら、自分の記憶を探っていた。

――が、まるでモヤがかかっているかのように、両親の記憶がほとんど思い出せないでいる。

「僕が思うに、君たちの記憶は二通りあると思っているんだ」

「二通り？」
「ひとつは外傷的記憶障害。転落のさいに頭をぶつけてしまい、脳に異常をもたらした場合による記憶障害。そしてもうひとつは内傷的記憶障害。これは外傷ではなく内傷……　つまり心に対しての障害による記憶障害……　云ってしまえばトラウマを消すことによって、なかったことにすることだ」
「でも、私たちはどこも……」
皐月は戸惑いを隠せず、ただアタフタとする。額には汗が流れている。

「皐月ちゃん……　君はあの事故があった瞬間。本当は犯人を見てるんじゃないのか？」
「わ、私が？　どうして？　どうやって？」
皐月は体を震わせながら、顔を俯かせる。
「事故があった車には君たち三姉妹しか乗っていなかった。最初は両親が助けを求めに麓の民家に行ったのだろうとされていたそうだけど、先ず両親の行方がわからなくなってしまった。一ヶ月ほど散策を続けたそうだけど、二人を示すものは何も見つからなかったそうだ……　そして、助手席に座っていた君を誰が助けたのかということも未だにわかっていない」
「わ、わたしが助手席に座っていたのを、誰かが知ってるんですか？」
「いや、それは僕の想像でしかないけど、恐らく今日、神社から出発するときに君がしたことで少しばかり確信できたんだ」
「私の行動？」
皐月はそう云うや、少しばかり考える。
「君たち三姉妹は先日、車のどこに座るのかを話していたそうだね？」
「えっ？　はい……　葉月は車に少し弱いから、前のほうがいいん

じゃないかって――あっ！」
皐月はハッとした表情で気付く。
「君は家族で出かける時、殆ど助手席に座っていたらしいね。だから六年前の事件の時も、お父さんの隣……助手席に座った」
大宮巡査にそう言われ、皐月は少しばかり、頭を揺り動かした。

「僕は無理に思い出さなくてもいいと思っている。だけど、一生このまま何も解決できないままなのは、いけないと思ってるんだ。今日ここに来た理由は君たちの記憶が……　お父さんとお母さんとの記憶がひとつでも思い出してくれたのならと思ったんだ――」
大宮巡査はスッと立ち上がり、テントの傍へと歩み寄る。

「迷惑なことしないでください！　なんの権利があって？　大宮巡査に何の権利があってそんなことするんですか？」
皐月は怒号を挙げ、大宮巡査をジッと睨みつけた。
「皐月ちゃん……　瑠璃さんから聞いたけど、君は姉妹の中でも一番の怖がりで……　本当は執行人なんてしたくないと思ってるんだろ？」
「思ってません。だってそれが私に課せられた……」
皐月はその先を言おうとした時だった。

突然、大宮巡査が振り向き、皐月をギュッと抱きしめたからである。
「ちょ、ちょっと離してください！」
「すまない。ただ……　このままにさせてくれ……」
「お、大宮巡査？」
皐月は無理矢理にでも、大宮巡査から離れようとしたが、次の言葉を聞くや、それが出来なくなっていた。

「ごめん……　ごめん彩奈……　僕があんなことしなかったら……

泳げない彩奈を沖に連れていこうなんてしなかったら　僕がお前を見殺しになんてしなかったら……」

大宮巡査は力強く皐月を抱き締める。いや、彼からすれば十年前、不慮の事故で亡くした、まだ四歳だった妹の彩奈を抱きしめているだけである。

皐月は複雑な表情を浮かべながらも、目の前で大人気(おとなげ)なく泣き崩れている大宮巡査に言葉をかけることが出来なかった。

陸・断罪（前書き）

断罪：罪をさばくこと。罪に対して判決を下すこと。

陸・断罪

「大宮巡査……」
物静かな口調だが、言われたものにとってはドスの効いた低い声が朝焼けの空に響きわたる。
「昨夜は皐月と話していましたが、一体何の話を？」
川の水で顔を洗っていた大宮巡査に瑠璃がうしろから声をかける。その手にはタオルがあり、それを大宮巡査に差し出す。
大宮巡査はそれを手に取り、顔を拭いた。

「聞いてたんですか？」
「すこしばかり……　しかし、これまでで二度も抱きしめているのは、皐月が彩奈（妹）に似ていたからですか？」
「冗談を――　彩奈は四歳（よっつ）の時に死んだんです。皐月ちゃんに聞かれたら、それこそ怒られますよ」
大宮巡査は微笑する。「そう思っていたからしたんでしょうに――」と瑠璃は言葉を述べる。

「あ、おはようございます」
三姉妹用のテントから、弥生と葉月が出てくるや、大宮巡査と瑠璃に挨拶をする。
「おはよう。弥生さん、葉月ちゃん――　皐月ちゃんは？」
大宮巡査にそう訊かれ、弥生は自分たちのテントを見やりながら、
「ああ、まだ寝てますよ。結構疲れてるんじゃないんですかね？」
弥生はそう云うや、川に近付き、顔を洗いに行った。そのうしろを葉月がついていく。

「朝食はどうします？　味噌汁の材料を持ってきてますけど？」
瑠璃がそう尋ねると、「それじゃ、僕はご飯の準備をします」と

大宮巡査はそう言って、飯盒を置いているところまで行こうとした時だった。

「のろし？」と川の水で顔を洗い、タオルで拭き取っていた葉月が言葉を発した。

「のろしって……　戦国時代じゃあるまいし――」

弥生は少しばかり笑いながら言ったが、葉月の指さす方を見るや、徐々に顔を強ばらせていく。

「大宮巡査！　火事！　火事っ！」

弥生の慌てた声で、大宮巡査は弥生の指差す方を向いた。

そこには黒に近い灰色の煙が、延々と空に昇っていくのが見えた。

「き、君たちはここにいて！　僕は管理の人と警察に連絡を入れるから」

そう言って、大宮巡査は急いで駐車場へと走っていった。

「皐月っ！　起きてっ！」

弥生は自分たちが寝ていたテントを覗きこみ、まだ寝ている皐月を起こす。

「んっ？　あ、弥生姉さん……　おはよう」

「おはようって、悠長なこと言ってられないのよ？　山火事！」

まだ覚醒していない皐月の頭に、弥生の言葉は理解できなかったが、次第のその意味を理解していく。

「か、火事って？　どこで？」

「どこでって、この山で！」

皐月は起き上がるや、テントから出る。

「あれ？　大宮巡査は？」

「今警察とこのキャンプ場の管理をしている人に連絡を入れるために、駐車場に行ってる。多分あそこなら電話があるから――あれ？」
弥生は言葉を止め、首を傾げる。
「どうかしたの？」
「いや、なんで駐車場の近くに電話なんてあるって思ったのかしら」
弥生の言葉に皐月は少しばかり、顔を歪める。

「歩夢（あゆむ）ぅっ！　歩夢どこだァ！」
上流の方から、男性の叫び声が聞こえてきた。
「あ、あなた昨日の……」
弥生がそう云うや、男――健佑はそちらに気づき、弥生たちに近寄る。
「あ、あんたら、歩夢知らねぇか？」
そう訊ねられるが、名前を言われたところで、誰なのか三姉妹は知りようがない。

「闇魔さま……ご存知ですか？」
「たしか――あなたの連れで、髪が長い方でしたね」
瑠璃は健佑にそう尋ねると、
「あ、ああ。そうだけど？　っーか、なんで知ってんの？　おたく、あいつの知り合い？」
健佑にそう云われ、瑠璃は少しばかり返答に困る。

「それで、その歩夢さんだっけ？　その人は何時からいなくなってたの？」
海雪に尋ねられると、健佑は少しばかり考える素振りを見せる。
「えっと、昨日の夜中……二時くらいかなぁ？　ちょっと涼子を山の近くまで連れていってたんだ……」
「そんな夜中に？　星を眺めるとは思えないけど？」
「あんたさぁ？　カマトトぶってる？　男と女が夜中にやることっ

ていったら……」
健介はそう云うや、人差し指と中指の間に親指を挟もうとすると、
「それ以上言ったら、未成年の婦女子に対する、猥褻行為として、あんたの首を切り落とすけど？」
何時の間にか海雪が健佑のうしろに立ち、大鎌の刃を首元に近づけていた。
しかし、見えるものにしか見えないその鎌を健佑が気づくはずもなかったが、海雪のドスの効いた低い声が効いたのか、健佑はアタフタと弥生たちから後退りしていく。

「わ、悪かったよ。でも、歩夢を見かけたら、教えてくれ……」
「ちょ、ちょっと待って？　確かあなたたちって、車で寝てるのよね？」
「あ、ああ。だけどその車もないんだよ――」
「車がない？　歩夢さんが運転してるんじゃないの？」
「いや、あいつは免許持ってねぇよ。それじゃ、何かあったら教えてくれ。俺と涼子は駐車場にいるから――」
健佑はそう言い残し、駐車場へと走っていった。

そのすれ違い様に大宮巡査が戻ってきた。
「やっぱり、あの煙は車が転落したさいによるものだとわかったよ。車が崖から落ちて、その周りで火が激しく燃えている。今、消防にも連絡を入れて、消化と救命活動をしてもらっている」
「――転落……？」
皐月はその報告を聴くや、その場に跪き、頭を抱え、体を震わせた。

「皐月おねえちゃん？　どうかしたの？」
葉月が皐月に声を掛けるが、微動だにしない。
最初は声が小さくて、聞こえなかったのだろうと、葉月は思って

いたが……

「いぃやぁ……　いやぁ……　おとうさん……　おとうさん……死んじゃ……ぁだぁ……　死んじゃやぁだぁ……」

譫言のように呟き、瞳孔を大きくする。

「皐月、どうかした？」

弥生もその様子に違和感を持ち、皐月に声を掛けるが、

「弥生、葉月……　あなた達は大宮巡査と一緒に火事の現場に行ってきてくれませんか？」

瑠璃にそう言われ、弥生と葉月は困惑した表情を浮かべる。

「で、でも――」

「皐月の事は私たちがなんとかします。葉月、霊がいたらその声を聞いてあげてください」

弥生と葉月は少しばかり躊躇うが、瑠璃から「仕事です」と言われ、渋々大宮巡査と共に転落事故のあった現場へと歩いていった。

「ぁ……　あぁ……　やだぁ……　おとうさん……　とうさぁ……」

「ほら皐月、水飲んで」

海雪が川の水をコップで汲み取り、それを皐月に飲ませる。

「落ち着きましたか」

瑠璃がそう尋ねるが、皐月は体を震わせ、唇を震わせる。

「闇魔さまぁ？　どうしてこんな事を許したんですか？」

「今さらそのことでもめても、こうなることはあなたもうすうすとわかっていたことでしょう？　それに今後のことも考えると、皐月には早く思い出して欲しかったんですよ。自分がしたことに対する事を……」

「皐月がしたこと？」

海雪がそう尋ねると、瑠璃は皐月を一瞥する。

「皐月……　あなたは転落事故があった時、車の中に入ってきた蜂にビックリして、健介にしがみつきましたね」
「ちょ、ちょっとまってください！　そりゃ、昨日、車の中に蜂が入ってきて、その時の皐月の様子を見ればそうなるかもしれませんけど……　それって偶然にも程がありませんか？」
　海雪が瑠璃に聞き返すと、
「偶然ではなく、必然だとすれば？　事故があったのはセミが鳴き喚くほどの夏日ですよ。そんな暑い日の車の中は四十度以上と言われています。帰る時だって、車内の温度を下げるために窓を開けていたかもしれない」
「それじゃ、その時に蜂が入り込んだってことですか？」
「いいえ、入り込んだというよりも、入れられたと云ったほうがいいでしょうね。自然に入ってきたのなら、再び出ていくでしょうし、もっとも蜂は暑い場所は苦手とする昆虫ですからね。だから、本来いるはずがないんです」
　瑠璃はそう云うや、皐月を見やった。

「私はその当時の事を知りませんし、知ることもできません……十王は死んだ人間しか罰せられませんから――」
　瑠璃はそう云うや、煙管と取り出し、それをくわえた。
　瑠璃の容姿は葉月と同年齢ほどの見た目なので、傍から見れば奇っ怪な光景である。
　頬を膨らませた瑠璃は、可細い口から紫煙（しえん）を吹き出した。

「煙々羅、大宮巡査たちのところに行き、状況確認を。それと車の状態と中を調べられたら、折入ってお願いします」
　瑠璃にそう云われた紫煙は、まるで意思があるかのように、いまだ灰色の煙が昇っている事故現場へと、スーッと風に乗るように流れていった。

「げぇほぉっ！　げはぁっ！　げほぉっ！」
瑠璃は激しく咳き込み、その場に座り込んだ。
「煙々羅も人間の姿で連れてくればよかったんじゃ？」
海雪が瑠璃の背中を摩りながら言った。

陸・断罪（後書き）

煙々羅（えんえんら）を現世に呼ぶ場合、煙管（キセル）を使って呼び出します。因みに瑠璃はタバコの煙が大嫌いです。

漆・些細

昨夜のことである。

大宮巡査と別れ、テントの中で眠っていた皐月は、大宮巡査から自分の父親である、初瀬神健介の話を聞いたことで、奥底に眠っていた記憶が夢という形で現れていた。

それは昔の――皐月がまだ小さい頃の秋頃であった。

秋の涼しい風が優しく吹いている中、そこだけはまさしく興奮の坩堝（るつぼ）と云わんばかりに熱気で満たされていた。

一定の間隔に空けられたスタートライン（グリッド）でエンジンを蒸かしているF1マシーンから伝わってくる振動と緊張感。エンジンによって熱せられたアスファルトからのぼってくる蜃気楼。そして何よりも、それを見守っている観客たちの興奮が、より一層、この固定された世界を際立たせていた。

スタートシグナルが赤に変わるや、ブレーキを押したまま、アクセルを踏み込んだかのように、先程とは打って変わって、エンジンの音が激しくなっていく。

ゆっくりと赤が増えていき、そしてランプが消えるや、マシーンは一斉にスタートした。

「お父さん、頑張れぇ！」

観客用スペースのフェンスをよじ登るかのように身を乗り出し、まだ小学校に上がったばかりの皐月が必死になって応援していた。

そのうしろでは弥生と葉月、そして母親である遼子が並んで椅子に座っている。遼子の隣が皐月の座る場所なのだが、終始興奮して

いたため、レース中は殆ど座っていなかった。

レースも終盤に差し掛かる最終周回（ファイナルラップ）。そのトップを走っているＦ１マシンが最終コーナーに差し掛かろうとしていた。そのうしろにはおよそ百米（メートル）離れて、二台のＦ１マシンが追尾しており、その一台が初瀬神健介の乗るＦ１マシンであった。

「さぁて、今日もこれで終わりかぁ……　ったく、初瀬神も期待させんなよなぁ、いっつも二位どまりじゃねぇかよ」

うしろで野次を飛ばす男性を皐月はキッと睨みつけた。

言葉の意味はわからなくとも、ただ単純に大好きな父親が馬鹿にされたことを幼心に感づいてのことだった。

「なんだぁ、このくぅそがきぃ」

先程野次を飛ばした男が皐月を睨みつけた。

――が、それを遼子が割って入って男性を宥め始める。

「うちの娘が失礼なことを云って申し訳ございません」

「あ、あんたの娘だったんかい？　誰の応援かは知らねぇけどよぉ？　少しは躾たほうがいいぜ？」

「ええ……　ですが、あなたみたいに他の方が応援している選手を馬鹿にする事をなんとも思わない子に育てた覚えはありませんよ」

遼子の声はそれこそ物静かな口調であったが、聞いた人間にとっては喧嘩を売っているとしか言いようのないものであった。

「くっ……」

男性はその言葉に少したじろいた時だった。

周りの歓声がそれこそレース中とは比べ物にならないほどの騒々しいものに変わったのだ。

「いっけぇっ！　お父さんっ！！」

皐月の応援する声が最高点に達した時だった。

健介のマシンが唸りを挙げるようにスピードをあげながらコーナーへと入ろうとしていた。

目の前は緩やかなカーブではあるが、それでもトップを走っているマシンが内側を攻めているため、感覚的にはスピードを落とさなければ、曲がるときに重力が掛かり、横に流されてしまう。

下手をすればコースから外れるが、運が良ければクッション代わりに積まれたタイヤの壁にぶつかってしまう。

そして運が悪ければそれは即死を意味する。まさに自殺行為である。

トップを走っているＦ１マシンがコーナーを曲がりきった時だった。そのマシンに乗るレーサーは突然背筋が凍るものを感じたのだ。

まるで自分のレースはその一瞬の奇跡への序章であり、そして噛ませ犬だったのかと……

うしろからまるで獣のような唸り声が聞こえ、それは一瞬に遠く前方へと消えていった。

チェッカーフラッグが激しく振られ、観客は最高潮の歓声を挙げた。

『わ、私たちは夢を見ているのでしょうか？　最終コーナーを本日最高速スピードで曲がりきった選手を……　私たちは目撃したのです』

実況アナウンスの声が興奮を抑えようとしている。

『た、ただいま入りました情報によりますと、初瀬神健介選手のマシンが、最終コーナー付近から入るまでのスピードは３８０キロ。そしてコーナーを曲がり切り、最後の直線では――３７０キロと…

…　殆どスピードを落とさずにコーナーを曲がりきっています』
アナウンスが終わるや、その結果を聞いた観客たちが歓声を挙げた。

レースが終わり、授賞式。一位の場所には健介の姿があった。
「それでは優勝の初瀬神選手。今日はすごいレースでしたね」
会場アナウンサーが健介にマイクを差し出す。
「ええ。もしいつものとおり、あのまま安全に運転していたら、いつもと同じよくても二位止まりだったかもしれません。でも、今日は家族が見に来てくれていましたし、何より娘の応援が聞こえていたんです」
アナウンスを聞いた皐月はキョトンとする。確かに応援はしていたが、この騒音の中聞こえていたとは思っていなかった。

勿論、実際に健介の耳に届いていたわけではない。
が届いていたのだ。皐月が必死になって応援しているその熱意が――
そしてそれがあの最終コーナーに置ける暴走を奇跡へと繋げたのだから……

『だから僕は勇気が出たんです』

ゆっくりと夢から現実へと意識が引き上げられていく。
大宮巡査から父親の話を聞いた皐月は、先程の夢が現実に起きたことであることだと気付いてはいなかった。しかし、まだ幼い皐月《自分》が必死に父親を応援していたことだけは、そして父親が最後に云った言葉だけは薄らと思い出していた。

その夢から覚め、起き上がろうとしたとき、弥生から山火事だと教えられ、それが車の転落事故であることを知り、皐月はトラウマに首を絞められるかのように、恐怖に戦(おのの)いていた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

皐月を心配しながらも、大宮巡査・弥生・葉月の三人は転落事故があった峠へと来ていた。

事故の事を聞きつけた他のキャンプ客がそれこそ野次馬のように群がっている。

「すみません。警察のものです。道を開けてください」

大宮巡査が警察手帳を取り出し、野次馬たちに見せる。

消防車と救急車が峠近くで停まっており、消化活動と救命活動を行なっていた。

車の周りは炎とかしており、それを消そうと消防車から放出される消化剤の含んだ水によって周りが蒸気で見えなくなっていく。

「あれ？　あの煙……」と葉月が大宮巡査の袖を引っ張って教える。

その先には紫色した煙が意思があるかのように、火の車に入っていった。

――それから数分後のことである。海雪から戻るようにと言われ、弥生と葉月は何事かと首を傾げながら、テントに戻った。

そこには瑠璃といまだに膝を抱え、ガタガタと震えている皐月の姿があった。

そして瑠璃の隣には紫色の長髪をした死装束を着た少女の姿があ

った。
その容姿は皐月よりも幼く、十一、十二ほどの印象があった。
「煙々羅？　それじゃさっきの煙って……」
葉月がそう言うと、煙々羅は小さく会釈し、瑠璃から頼まれた事を皆に報告した。
『車の中に女性の遺体がありました。恐らく昨日皆さんがお会いした朽田健佑とその連れである政所涼子と一緒にいた女性と考えて間違いないでしょ』
「車はその健佑のものと考えて間違いないでしょうね」
煙々羅と海雪の話を聞くや、
「それじゃ、被害者（歩夢さん）が自分で運転したってこと？　でも健佑さんの話だと免許持っていないって」
弥生はそう云うが、実際その証言を信じているわけではなかった。
『それとひとつ気になったことがありまして』
「気になること？」
『些細なことかもしれませんが……』と煙々羅は先を言うのを躊躇う。
「自分が気になったことは、どんな些細なことでも話しなさい。それが事件解決になる切っ掛けになるかもしれないのですから」
瑠璃にそう云われ、煙々羅は少し深呼吸をするような仕草をする。
『殺された被害者ですが、皆さんとお会いしたとき、ハイヒールを履いてましたよね？　いくらキャンプにハイヒールを履いてくる馬鹿だったとしても、まさか車を運転するというのに、躊躇いもなくハイヒールを履くものでしょうかね？』
煙々羅が顔を歪めながら言う。
「つまり、運転していたんじゃなくて、座らされていた。そして何

かしらの方法で車を崖から落としたということでしょうかね？」
瑠璃は葉月を見遣る。先程お願いした霊視が出来たのかと訊ねたかったのだ。
しかし葉月は何も感じなかったと説明する。

「若しかしたら、眠らされていた……と考えるのが自然じゃない？葉月の力は霊が最後に聞いた音を聞くことだから」
「だとしても、どうやって車を発進させるの？」と弥生が訊ねる。
「うーん。私あんまり詳しくないからね。まぁそういうのに一番詳しいのがあの状態だし」
海雪が隅っこで座っている皐月を見遣った。

皐月は皆の会話に参加せず、ただただ震えているだけだった。

捌・可能性

太陽が真上に上がろうとしていた頃、車の中で燻(くすぶ)っていた火が全て消え、漸く救命活動が行われた。

事故現場を見ていた野次馬の誰一人、車の中にいる人間が助かっているとは思っていなかった。

あれだけ長時間炎の中に閉じ込められていたのだ。助かっていたらそれこそ奇跡である。

当然その期待は裏切らなかった。救命士が車の扉をバールでこじ開け、中から出したのは、髪が燃えてなくなった頭皮を晒した焼け爛れた女性の遺体であった。そして今にも腐り落ちそうにボロボロになった足が晴天にさらされたのだ。

女性の遺体と直ぐに判明したのは、女性特有の大らかな胸のふくらみがあったからである。

「私、警視庁の大宮と言うものですが、少し遺体を見せてくれませんか？」

大宮巡査は遺体を運び込む救命士たちを呼び止め、死体の確認をさせてほしいとお願いする。

救命士も相手が警官という事で、躊躇なく遺体確認をさせた。

「被害者の持ち物は車の中に？」

「いえ、それはまだわかりません。なにせ今調べ始めたところですから」

救命士はそう云いながら、頻(しき)りに死体の足元を見ていた。

「どうかしたんですか？」と大宮巡査が尋ねると、

「いえ、私たちは交通事故の現場に出動することも度々あるのですが、ハイヒールを履いての運転は特に危険視されているはずなんで

す」
「まぁ、僕も車を運転しますから、危険性は知っていますが」
「ええ。本来は足全体を使って踏み込むんですが、ハイヒールの場合、踵のヒールによって支えられているとはいえ、実際は爪先立ちで、運転する場合も爪先に力が集中されるんです。それによって力が均等に入らず、ブレーキが踏まれていなかったと見解しているのですが」
救命士の言葉に大宮巡査は首を傾げた。
「ただ、車が走ったと思われる道はゆったりとした坂道でして、余程のスピードを出さない以上、ここまで飛ぶとは考えられないんです」
そう云われ、大宮巡査はうしろの崖を見上げた。その距離はおよそ十米（メートル）ほどであった。
ゆっくり落ちたのならば飛び越える力がなく、ましてやガードレールにぶつかり、その場で止まっていた可能性がある。
つまりここまで飛び出すには余程のスピードで降（くだ）らなければいけないのだ。
そしてそうするには踏み込みが必要となる。
「被害者が自殺したとは考え難いですね」
大宮巡査の言葉に救命士の二人は首を傾げるが、直ぐにその真意に気付く。
「ええ。確かに車を運転できる人なら、事故の危険性のあるハイヒールを履くとは考え難いですし、運転する際、履き替えるものなんですけどね」
車の中を探していた監察員が出てくるや、大宮巡査は何か見つかったのかと訊ねる。
「いえ、特に何も……　CDやカセットなどはありましたが、事故の原因になるものは何も」

発見されたものは全て車の中に入っていても可笑しくないものばかりであった。

「大宮巡査？」

「こらっ！　危ないじゃないか？　一般人が入ってきては」

うしろの方で大宮巡査を呼ぶ声が聞こえ、それを警備していた警官が止めている。

「あ、いいんです。その子は知り合いですから」

そう云うや、大宮巡査は警官に説明し、皐月を現場へと入れた。

「皐月ちゃん？　体の方は大丈夫なのかい？」

大宮巡査はそう尋ねると、皐月は今にも倒れそうなほどにフラフラであった。

「うん。ごめんなさい……　それでやっぱり自殺なんですか？」

「いや、僕は自殺ではなく他殺と見ている。先ず、車を運転しているからこそわかるんだけど、自分が事故に遇う原因を作るものは極力下げると思うんだ。女性の場合、ハイヒールなんか特にね。男性だとサンダルかな」

「要するに力が前進にいきわたらないのと、厚底ブーツの場合は引っ掛かってしまって、そのまま猛スピードになってしまうから……ですか？」

皐月の言葉に大宮巡査は少しばかり驚く。

「それって、お父さんから聞いたのかい？」

その問いに皐月は首を横に振る。実際は事件にもなっているのでニュースで知った程度である。

「車の中は調べたんですか？」

「僕はまだだけど、丁度今見ようと思っていたんだ」

それに同行させてほしいと皐月はお願いすると、大宮巡査は有無を云わずに了承した。

車の中は全て燃えており、あるのは鉄の残骸であった。
「これじゃ、証拠があっても見つからないかな」
大宮巡査は半ば諦めムードであった。
「大宮巡査？　被害者は車に乗せられて、あのゆったりとした坂をブレーキも踏まずに突っ込んだでいいんですよね？」
「えっ？　あ、うん。一応そう考えられるけど。何か気になる事があったのかい？」
皐月はその言葉に答えるように、運転席と助手席の間を指差した。
「サイドブレーキがかかってない」
「つまりブレーキ自体が掛かっていなかった。だけどそれだとスピードは出ても、ガードレールのところで止まっているはずだよ」
それは皐月も違和感を感じたときに気付いていた。しかし、気になっていたものはもうひとつあったのだ。
それは自身が体験しているからこそわかるものであった。
「被害者の体に異変はありましたか？」
「うーん。殺された女性の体に異変ねぇ……　特になかったけど」
「それじゃ、どうしてシートベルトがバックルに刺さっていないんですか？」
「それは……　確かにストラップがリトラクターに戻っているままだ。でも、自殺しようとしているのなら付けないんじゃ？」
「確かにそうかもしれませんけど……　でも、まだ可笑しいところはもうひとつあるんです」
それは何かと大宮巡査が訊ねようとしたが、己で気付いた。
「エアバッグが出ていない？　確かエアバックの仕組みは車がぶつかった衝撃で出てくるはずだけど」
「犯人は車の炎上に便乗して、被害者を身元不明にしようとしてい

た。だからこそ、車を炎上させるほどの距離を飛ばす必要があった」
「だったとしたら、ここまでの距離を飛ぶにはそうとうスピードを上げなければいけなくなる。サイドブレーキを元に戻した状態なら、坂道だから転げるかもしれないけど、ガードレールに引っ掛かるのがオチだ」
ガードレールは歩道を歩いている人を庇ったり、その先の崖などに落ちないようにするための役目がある。スピードが出ている車が突っ込むとガードレールがへこむということはあっても、突き破るというのは考え難い。

「それをした方法がわかればいいんですけど」
皐月はそう言いながら灰皿の方に目をやる。そこだけ妙に他の場所よりも燃えていた形跡があった。
「もしかすると、火事の原因はこれじゃないんですかね?」
そう言いながら、皐月は灰皿を取り出そうとするが、熱で変形してしまったのか引っ付いている。
「ちょっと退いてください。今パールで取り外しますので」
外で覗き込んでいた救命士の一人がそう言いながら、バールで取り外した。

「やっぱり衝突で火が燃えなかった時のために、あらかじめ潜ませていたんだ」
「でも、これだけじゃ他殺とはいえないんじゃないかな?」
大宮巡査の問い掛けに、皐月はどうしてと聞き返す。
「イヤだって、若しかしたら被害者が吸っていたかもしれないし、女性が煙草を吸うのは珍しいことじゃないしね」
そうなのだろうか……と皐月は思った。まだ皐月がテントで震えていた頃、煙々羅が瑠璃たちにしていた話では、被害者の女性は昨日川で釣りをしていた朽田健佑の連れの一人だと云っていた。

「大宮巡査。昨日馬鹿みたいな人が川釣りをしていたの覚えてますか？」
「っ？　あ、覚えてるよ。それがどうかしたのかい？」
「その人の連れが一人行方不明になっているんです」
「行方不明……　それじゃ、あの死体は」
「多分その行方不明者だと思うんですけど」
皐月はそう言いながら、車から降りた。

「身元を確認しようにも燃えてしまっているからね。犯人はそうするために車を燃やしたと考えるのが自然だね」
「後はどうやって、あのゆったりとした坂から、ここまで飛ばせるほどのスピードを出したのか……」
その方法としてアクセルを踏み続けたという考えは二人とも一緒だった。

「車の種類はＭＴ（マニュアル）だったけど……　これって最初っから殺すつもりで選んだんじゃ――」
川沿いにあるテントに戻ろうとしたとき、ふと皐月が言葉を漏らす。
「つまり車は所有物ではなく、レンタカーだったということかい？　まぁ、確かにＡＴ（オートマ）だったら、Ｐ（パーキング）にギアを入れておけば坂道を転がる事はないだろうし、そうなるとＭＴならギアを１にした状態でもアクセルを踏めば――　でも被害者は運転席で見つかったそうだよ」
「被害者自らが車のアクセルを踏んだ……　その方法が――」
その時、同じくキャンプに来ていた親子の声が聞こえた。

「アイスクリームおいしいぃ」
「ほら零さないの。それに日陰にいなさい。アイスが溶けちゃうでしょ……」

小さな男の子がソフトクリームを頬張りながら、母親らしき女性の手に引かれている。

「――アイス？」

「アイスがどうかしたのかい？」

大宮巡査がそう訊くや、皐月は大宮巡査にあるお願いをした。

「そ、そんな方法が？　でも、もしそれが可能だとすれば……」

「私、甘い物が大好きだからよくケーキ屋とか、アイスクリーム屋でみんなの分を買うときにそれをもらうんです。あれはお客が家に着くまでの時間を計算して入れている。もしそれをずっとクーラーボックスに入れていたら？」

「でも、相当な量だと思うよ」

「時間なんて適当に云ってしまえばいいんです。要はそれが必要なんですから」

「それじゃ被害者は焼け死んだのではなく……　それが溶け切った際に車内で満たされたそれで死んだということかい？」

大宮巡査は皐月の考えに少しばかり違和感があった。

「夏とはいえ、ここは山だから町よりも涼しいはずなんです。それにクーラーをかけていた可能性だってあるし、犯人が被害者を眠らせて、運転席に乗せた可能性だってある」

「そして犯人は降りるときにサイドブレーキをかけなかった。ＭＴだからこそ出来る方法と言うわけか……」

大宮巡査がそう云っている中、皐月は少しばかり頭を抱える。

大宮巡査はそれを見るや、近くにあったベンチに皐月を座らせた。

「大宮巡査からお父さんの話を聞いて、少しだけ思い出したんです。あの時……　みんなでキャンプに行ったときの帰り、目の前から蛇行運転している車が来て、その時はお父さんは難なく避けたんです

けど、今度はブレーキが効かなくなって――」
「それじゃ転落した理由って、ブレーキが効かなかったからなのかい？」
「車はＡＴだったから、多分そうだと思います。ＭＴならサイドブレーキをかければいいわけですし。だからこそお父さんは町に下って大災害を起こすよりも、崖の下に落ちる方を選んだ」
ギアをＰにしたとしても、ブレーキ自体が壊れていればそれは意味がないことになる。アクセルから踏み外していても、車は何処まで走り続けるかわかったものではない。健介の判断は何とも無鉄砲な話である。
「それが原因で、君たち三姉妹は半死の状態で生き返ったということか？」
「それを知ってるのは私だけなんです。あの時転落した車の中で気がついたのは私とお父さんだけでしたし……」
皐月がその先を言おうとしたときだった。
「――あの時、誰か車の上に乗ったような音が聞こえて……」
「誰かが車に気付いて、君たちを助けようとしたんじゃ？」
大宮巡査の質問に皐月はわからないと答える。
（それはないと思う。もし助けようとしていたのなら、私に睡眠薬みたいなものを吹きかけない。それに私や弥生姉さん、葉月を残して、お父さんとお母さんだけを車の中に出した理由も――）
皐月は心の中で呟いた。

玖・凍解

大宮巡査は湖西主任に連絡を入れ、皐月の考えは正しいのかを訊ねていた。

皐月は携帯の裏側に耳を近づける。

かすかではあるが電話の内容が聞こえていた。

『面白い発想じゃが、それは無理じゃな。ドライアイスは氷点下七八・九度の極低温物質でな。保存するにもそれ以上低いところでないと熱で溶けてしまうから保存できん。クーラーボックスどころか、一般家庭の冷凍庫にだって保存する事は先ず無理なんじゃよ』

それを聞くや、皐月は申し訳ない表情を浮かべた。

『じゃが、普通の氷はどうじゃ？　これくらい葉月ちゃんでもしっとると思うがね？』

「普通の氷？　あっ……！」

皐月は何かに気付き、自分の携帯を開いた。

「昨夜の気温――　夜中の気温は十六度だから、車の中はそれよりも下……　クーラーをかけていたとしたら、車の中の気温はそれよりも下になるんじゃ？」

皐月の言葉が聞こえたのか、湖西主任が『普通の氷ならクーラーボックスに入れることも、かちわりじゃったら、買いに行く事も可能じゃろうな』と伝える。

「後はそれをどう証明するかだけど……　さすがに僕の力じゃ」

犯人がどうやって殺害したのかと言うトリックがわかったとしても、それを照明するためのものを準備する事は難しいことである。

『わしもそれは無理じゃな。上の許可をもらわんといかんし、何よ

り犯人の目星はついても、証拠がなければ何も出来まいよ？』
皐月もそのことはわかっていた。
「でも、あの人たち、一泊で帰るだろうし、私たちも今日帰る予定だから」
それまでに犯人を捕まえたいと思っていた。

「でも、あの車が彼らの乗っていたものなのかという証明も出来ないし……　ナンバープレートも燃えて変色してしまっているからね」
レンタカーのみならず、ナンバープレートは所有者証明書という意味があるため、誰のものなのかというのは調べればわかる。
「一応車種はわかるんですよね？　ワゴン車くらいの大きさだったから」
「それはね。でもワゴン車といっても多種多様だから細かいところまでは。それにそれを半日で調べようと思うのも……」
大宮巡査はその先を口にしなかった。無理だとわかっているのは皐月だってわかっていると感じたからだ。

「皐月ちゃんの考えが証明できればいいんだよね？」
「えっ？　あ、はい。でもそれをするには」
皐月は躊躇う仕草をする。
「僕が借りて来た車は４ＷＤだけど、ＭＴなのは覚えてる？」
それを聞くや、皐月は小さく声を挙げると同時に……

「やめてっ！　下手すると死ぬかもしれないんですよ？」
皐月はこのトリックを実験するのは危険極まりない事だと言う事は想像できていた。もちろんそれは大宮巡査自身もわかっている事である。
しかし証明する方法はそれしかないのだ。
大宮巡査は皐月の頭を撫でながら、「大丈夫だよ」と一言いった。

「あんた、警察の人間だったんだな？」
ふと大宮巡査に声をかけてくる男性がおり、大宮巡査と皐月はそちらに振り向いた。
そこに立っていたのは朽田健佑と政所涼子であった。
「警察がこんなところで油売っててていいのかよ？　こっちは人捜してるっていうのに」
健祐が愚痴を零す。

「ああ。貴方たちにひとつ訊きたい事があったんです。昨夜不信な車が山を下っていったという目撃証言がありましてね。その車は貴方たちのものかもしれないというらしいんですが？」
大宮巡査がそう健祐と涼子に訊ねる。もちろんそんな証言はなかった。
「不信な？」と涼子が聞き返す。
「ええ。ワゴン車のようでしたので、所有されている各家庭に訊いて回っていたんです。そうしたら、貴方たちの車だけ駐車場にないことがわかったんですよ」
「不審な車は俺たちが乗ってきたやつだってのか？」
「ええ。まぁ、そうなりますね」
大宮巡査の言葉を聞くや、健祐は少しばかり考える。

「それって、さっきから騒いでる転落事故と関係あるのか？」
「いやそれはまだ。所有物でしたら、現場に連れていきますが――」
大宮巡査がそう尋ねると、健祐はお願いしますと答えた。

それから小一時間経っての事だった。大宮巡査は鑑識にお願いして、遺体の写真（ポラロイド）を一枚もらい、それを葉月に霊視してもらっていた。
葉月は何度も写真を手で摩り、死者の声を聞こうとするが――

「だめ……　全然聞こえない」
「聞こえないって……　そのままの意味？」
弥生がそう尋ねると、葉月は答えるように頷いた。

「つまり被害者は死ぬ直前、皐月ちゃんの考えと同じ状況だったってことかい？」
「皐月おねえちゃんの考えだと、被害者は眠らされた後、サイドブレーキをかけておらず、そのトリックを使えばって事になるからそうなのかもしれない」
葉月は何度も霊視をしながら、問答する。
「でも、もしそれが可能だとしたら、計画以外のなにものでもないわよね？」
「ええ。だからこそのＭＴだろうし、だからこその殺害方法なんだと思う。だって、素人じゃアクセルとブレーキの場所は知っていたとしても、対処は出来ないでしょ？」
皐月はそう云うや、煙々羅を見やった。

「煙々羅、被害者の周りに不信なものはなかったのよね？」
「ええ。まず被害者はシートベルトをしていなかった。首を絞められたり、刺された形跡もない。それに皐月さんの考えがあっていたとしても、それを証明するものは、文字通り蒸発してしまっている」
「打つ手はなしということですか？」と瑠璃が尋ねる。
「いえ、転落したさい、遺体が運転席から離れていなかった事が不自然なんです」
煙々羅の言葉を聞くや、皐月と大宮巡査は互いを見やった。
「それって、動かなかったんじゃなくて、動けなかったってことになるんじゃ？」
「眠っていた状態でも転落し、車が横転してしまえば、少なくとも動いているはずだろうし……　それじゃ、縄で縛っていたって事になるんじゃ？」

「でもそれだと縄の痕がつくんじゃ」と海雪が訊ねる。
「だからこその火事なのよ。死体は焼け爛れていて、皮がボロボロになってた。それって遺体の身元をわからなくする以上に、縄の痕を消すためでもあったんじゃない？」
「だったとしても、それをどうするかですね？　全部が燃えきらなかったら――　煙々羅。シートベルト以外、不信なものは何もなかったんですよね？」
瑠璃の問い掛けに煙々羅は頷く。

「若しかしたら……　でもそれだったら片方は気付くはず」
大宮巡査の小声が聞こえたのか、葉月がそれに対して問いかけた。
「いや、ちょっと思い出したんだけど――」
大宮巡査は考えを皐月たちに説明した。

「その方法なら可能じゃない？　転落したときはまだ被害者が眠っていた。そして車の中で火事が起きる。転落してドアは変形してしまって出る事が出来ない。車の中に煙が蔓延してそれを吸い込んでしまった」
「そして被害者を縛っていた縄にそれをしていたとしたら、なるほど、すべては燃えてしまうというわけですか？」
弥生と瑠璃が驚いた表情で納得する。
「でもこれは証明しようにも……　他のやつなら可能なんですけど――」
大宮巡査がその先を言おうとしたときだった。

「君かい？　大宮巡査というのは？」
駐車場のあるほうから老人がゆっくりと皐月たちの方へと近づいてくる。
「え、ええ。そうですが……　あなたは？」
「そうじゃね。名乗るには先ず自分の名前を言うのが先か……　わ

しの名は野中虚空（のなかこくう）というものなんじゃがな、ちょっと話を聞く限りじゃと、そのトリックを証明したくても出来んようじゃな？」

老人、野中虚空は少しばかり笑みを浮かべながらそう訊ねる。

「え、ええ。大まかな部分は出来るんですが……」

「どうじゃろうな？　その犯人と思われる人物には後で遺体確認をしてもらって、殺害方法を証明する実験は明日すると言うことで」

その言葉に大宮巡査はもちろん、皐月たちも驚いていた。

――が、ただ一人、瑠璃だけは怯えた表情で野中虚空を睨んでいた。

「どうしてそんな事が出来るんですか？」と皐月が訊ねると、「いやいや、ただの余生がない爺の暇つぶしじゃよ」と野中虚空は笑って答えた。

その後、朽田健佑と政所涼子は遺体確認のため警官らに遺体が置かれている死体安置室へと案内された。

そして遺体は行方不明となっていた曽根崎歩夢本人であることが判明された。

拾・塵界

その翌日の事である。大宮巡査と皐月はとある駐車場へと案内されていた。

そこには朽田健佑と政所涼子の姿があり、ふたりは一体何が起きるのかといった感じにそわそわしていた。

「あ、あんた……　俺たちに何か用があるのか？　おれ、今日会社だったんだぜ？」

「わ、私だって、大切な用があったのに」

健祐と涼子がそう大宮巡査に尋ねる。

「いえ、僕たちもある人から来るようにと云われましてね」と大宮巡査は答える。それに同意するように皐月は頷いた。

すると四人に近付くように一台のワゴン車が駐車場へとやってくる。そして、まるでアクション映画のようなセットが組まれていく。それは緩やかな坂となっており、それをワゴン車が上っていく。

皐月と大宮巡査はただただその光景を呆然と眺めていた。

が、健祐と涼子はまるで恐ろしいものを見んとばかりに体を震わせていた。

それもそのはずである。やってきたワゴン車は彼らが乗っていたワゴン車と同じ車種なのだから。

「ほう、集まっておるようじゃの？　それじゃさっさと実験しようかの」

昨日皐月たちの前に現れた老人である野中虚空が、あの時と同様に目を細めた優しそうな笑みを浮かべながら、ことを進めていった。

「それじゃ穣ちゃんや？　トリックの説明してくれんかの？」
野中虚空が皐月にそう云うや、皐月は首を傾げる。
「なんじゃ？　自分の考えに自信がないのか？　それとも生身の人間でないと証明することもできんというのか」
そう云われ、皐月は坂道で停まっている車に近付く。

「まず、これは事故ではなく計画的殺人である事を前提に聞いてください」
「さ、殺人？　歩夢は殺されたっていうのか？」
健祐が狼狽するように訊ねる。
「ええ。犯人はＭＴ車の落とし穴を知っていた可能性があるんです。ＭＴ車にあって、ＡＴ車にないもの――　それはサイドブレーキなんです。ＡＴ車はギアをＰにすれば車は停まります。ですがＭＴ車の場合はブレーキをかけたあと、サイドブレーキをかけないと自然と車は勝手に走り出してしまうんです」
大宮巡査が健祐と涼子に説明する。

「つまり犯人がＭＴ車にしたのは、車が勝手に動くようにするためだった。もちろん被害者が気付かないよう、車の中にいるときはサイドブレーキをかけた状態で」
「そのあと、睡眠薬か何かを飲ませ、被害者を眠らせる。そして被害者を運転席に座らせ、ある方法をした」
「ある方法？」と健祐が尋ねると、皐月が説明するので来てほしいと皆を車のところまで呼んだ。

車の中には被害者と同じくらいの大きな人形が運転席に座らされていた。
「犯人は被害者を運転席に座らせ、足をアクセルのところに乗せようとした。だけどそれだと発進してしまうから、その間に氷を挟んだ」

「氷？　そんなもので出来るのかよ？」と健祐は訊ねる。
「でもそれだと足の重みで溶け切る前に発進してしまう可能性がある。だから犯人はこうやって、被害者を縄で固定した」
皐月は人形の体にあるものを仕込んだ縄で縛った。
「ほう？　それなら被害者は転落しても運転席から動けんなぁ。しかし燃えたあと縄が見つからんかったはずじゃろ？」
「縄にガソリンを含んでおくんです。そうすれば証拠は残らないと思いますよ」と大宮巡査が説明する。
「でもその後はどうするの？　体は固定できても、犯人は急発進してふりとばされるんじゃない？」
涼子がそう訊ねる。

「同じように油を含んだ縄を足に結ぶんです。そしてそれを重みで壊れないほど太い氷柱に結びつけ、ハンドルに固定する」
皐月は説明するようにそれを行った。そしてエアコンをクーラーから、ヒーターに切り替える。
「こうすることで次第に氷が溶けて、足が落とされる。するとアクセルが踏まれた状態になるはずなんです」
皐月はちらりと野中虚空を見やった。野中虚空は横にいた男にエンジンをかけるようにと伝え、男は皐月をどかせるや、サイドブレーキを解除し、エンジンをかけた。

サイドブレーキが掛かっていない状態なので車は勝手に坂道を下っていく。そしてゆっくりと平地まで下ると、仕組んでいた氷が溶けるや、急に車は猛スピードで走り始めた。
目の前にはガードレールがあり、それを突き破る。そして崖に見立てたジャンプ台に差し掛かり、車は飛び出し横転するや、炎上した。

車全体が燃えたあと、消火活動が行われ、人形は丸焼けとなって

おり、縄は発見されなかった。

「あ、歩夢が殺された方法はわかった。だけど、犯人は一体誰なんだ？」

健祐がそう訊ねると

「確かお前さんたち、夜中逢引をしておったそうじゃな？」

野中虚空にそう訊かれ、健祐と涼子は躊躇いながらも答えるように頷いた。

「その時なぁ……　わしあんたらが茂みに入るのを見ておってな、穣ちゃんからガソリンの臭いがしたんじゃよ。あの臭いはなぁ簡単には取れんからなぁ」

野中虚空がそう云うや、涼子は健祐の腕にしがみついた。

「あ、あんた、涼子になんか恨みでもあるのか？」

「怨みなんぞない。人を殺した人間なんぞ人間と思っておらんからな。怨むというのは人に対しての言葉じゃろうが？」

ふと皐月は野中虚空を見やるや、背筋が凍りつく感覚に陥った。

何ら変わらない目を細めた優しそうな顔なのだが、それは目だけで口元は大きく歪んでいた。

そしてなによりも先ほどの言動である。

「皐月ちゃん、どうかしたのかい？」

「あ、いや何も……」

大宮巡査の問い掛けに、皐月は曖昧に返事をした。

「や、やめてっ！　離して！」

野中虚空の連れの男二人が、涼子を連れて行こうとする。

「おい、やめろ！　まだ涼子が犯人だって決まったわけじゃねぇだろ？」

健祐が必死になって涼子を助けようとするが、体格の差もあってか、それは無駄な事であった。

「証拠なんぞ後で見つかるじゃろうよ。今はこの塵芥虫（ゴミムシ）どもを厳重に閉じ込める事が先決じゃろう」

野中虚空はそう言いながら、皐月と大宮巡査を見やった。

「それじゃぁなぁ、お穣ちゃん。今度は失わんようにな」

そう云うや、野中虚空は車に乗り込んだ。その後に停まっていた車に涼子は無理矢理入れられ、健祐は共犯という形で、やはり同様に無理矢理連れて行かれた。

「皐月ちゃん？」

大宮巡査がそう皐月に声をかけた。

しかし、皐月はまるで幼子のように大宮巡査の腕を力強くギュッと握り締め、怯えるように体を震わせていた。

拾壱・逆鱗

事件解決から三日後の事であった。
身柄を拘束された政所涼子は曽根崎歩夢殺害の犯行を認めたと、三姉妹は大宮巡査から聞かされた。

元々は健祐と歩夢は付き合っており、涼子と本来くるはずであった翔太は、このキャンプに参加していたが、歩夢の度重なる我儘に嫌気が差し、とうとう堪忍袋の緒が切れたという。
涼子は歩夢に協力して欲しいと車の中で会話をし、睡眠薬の入ったジュースを飲ませた。
歩夢は眠りこけてしまい、涼子は犯行のために、皐月が説明したトリックを実行したと証言したと大宮巡査は説明した。
そんな事があったとは何も知らず、また証拠不十分となっていた健祐は、昨日釈放されたが、涼子に至っては死刑確実ではないかという事も説明した。

――その日の夕暮れ、弥生に買い物を頼まれた皐月は、駅前のスーパーで買い物を済ませ、帰ろうとしていた。

「皐月ちゃん！」という大きな声が聞こえ、皐月はそちらに振り返った。
「大宮巡査？」と皐月は首を傾げる。
話を聞くと、大宮巡査は最近はじめたランニングの途中だと言う。
理由は体力つくりだと大宮巡査は皐月に説明した。

「買い物かい？」
「はい。お肉とおしょうゆを。いいジャガイモが百姓の人からもら

えたから、今日は肉じゃがだって」
「へぇ――っ、僕もご馳走になってもいいかな？」
大宮巡査がそう尋ねると、皐月は少しばかり笑みを浮かべ、
「多いにこしたことはないですし、日頃お世話になってますから。大丈夫だと思いますよ」
「それじゃお邪魔しようかな」
大宮巡査はそう云うや、ジッと皐月を見つめた。

「どうかしたんですか？」
「いや、君が現場に来たとき吃驚したんだ。今回の事件、僕の力だけでやらなければいけないと思っていたから」
大宮巡査の言葉を聞くや、皐月は少しばかり視線を空へと向けた。

「瑠璃さんに怒られたんです。執行人である以上、自分のしたことにも目を背けてはいけない。私が弥生姉さんや葉月を巻き込んでしまったことを」
皐月はそう云うや、少し躊躇いながら、ゆっくりと大宮巡査を抱きしめた。

「あの時、大宮巡査に抱かれたとき、凄く懐かしかったんです。まるでお父さんに抱かれてるような気がして」
皐月は悪い夢や恐い事があると、すぐに父親に抱きついてしまうほどの恐がりであった。
『寄らば大樹の陰』という言葉と同じで、そうすることで気が落ち着き、安心出来るからである。
しかし、今皐月が抱きしめているのは父親ではなく、大宮巡査であることだけは皐月自身わかっていた。

そんな皐月の行動に、大宮巡査は戸惑いを隠せないでいた。いや、彼も皐月を同様に失った妹である彩奈に面影を重ねて抱きしめたの

だから……

「皐月ちゃ……　っ――――――？」

大宮巡査が声を止めた。不思議に思い、皐月は大宮巡査の顔を見やった。

大宮巡査は目がカッと大きく開いており、口はワナワナと震えている。

「お、大宮巡査？」

皐月は声をかけるが、大宮巡査は視線を皐月にではなく、自分のうしろに向けた。

「はぁ……　はぁ……　はぁ……」と荒い息が聞こえてきた。

「お、お前は……　朽――田……　健すぅけぇ……」

大宮巡査は震えた声で言った。

「ど、どうして？」

「あんた達が悪いんだ。せっかくせっかく殺して、あいつの持ってる金品を全部俺と涼子のものにしようと思ったのによぉ」

健祐は目を大きく開き、大宮巡査の背中に刺したナイフを引き抜いた。

血飛沫が飛び散り、健祐の顔は真っ赤に染まる。

「あんたらが悪いんだ。あんたらがあそこにいなけりゃ……」

「そんなの運が悪かったで済むんじゃないの？」

皐月がそう云うや、健祐は手に持ったナイフを高々と振り上げた。

「あいつがいないんじゃ、俺はこの世にいても意味ねぇんだよ」

健祐は振り上げたナイフを皐月目掛けて切りつけようとした。

皐月は避けようとしたが、それが出来なかった。

切り付けられようとした皐月の目の前で、大きな背中が現れていた。
「くぁあああああああああああああっ」
その声を聞くや、健祐はナイフを捨て、路地裏へと逃げていった。

「大宮巡査？　大宮巡査ぁ？」
皐月が大声でそう呼びかける。
「だ、大丈夫かい？　皐月ちゃん」
大宮巡査の体は痙攣しているにも拘らず、自分よりも皐月のことを心配していた。

「私は切られても、何日が経てば治るの知ってるんじゃないんですか？」
「ああ。だけど……　わかっていても守ってやらないといけないだろ？」
「そんな、そんな勝手な理由で！」
大宮巡査は皐月の頬を撫で、あふれ出している大粒の涙を指で拭った。
「僕は妹を守れなかったんだ。助けられたはずなのに僕は……」
大宮巡査はそう云うや、ガクンと体を落とした。

皐月は自分の中にあった忌々しい過去を思い出していた。
それは奇しくも六年前、転落した車の中で皐月が父親にされた時と全く同じものであったからだ。

「――――　大宮巡査？」
皐月は目の前で起きた事が理解できなかった。いや理解しようとしていた。
皐月の目の前には、大切な人の、真っ赤に染まった体が横たわっていた。

「いやぁあああああああああああああああああああああっ！！」

皐月は悲鳴を挙げ、大宮巡査の体にしがみつく。

「いやぁっ！　大宮巡査！　やだぁ！　死なないで！　死なないでぇ！」

皐月は半狂乱となっている。

皐月が顔を上げると、先ほどまで健祐が使っていたナイフが地面に捨てられていたのが視界に入った。

――――皐月本人の記憶はそこで途絶えた。

手を真っ赤に染めた健祐は逃げるように路地裏を走っていた。今はただ家に着くまで誰一人出くわしたくないからである。

「はぁ……　はぁ……　んっ？」

目の前に誰かが立っており、健祐はとっさに近くにあった電柱に隠れた。

息を殺し、気配が健祐に近付いているのを肌で感じる。

気配はスーッと消え、健祐はそれを確認し、一度深呼吸をして、その場から離れようとした時だった。

健祐は背後から誰かに押され、転倒する。

「な、なにしやがるっ？」

健祐が怒鳴るが、それは有無を言わさずに健祐の体を蹴り飛ばした。

「な、なんだよ？　なんだってんだよ？」

健祐は這い蹲りながら、ソレから逃げようとした。
しかし、逃げれるわけがないのだ。人間とソレとは格が違いすぎるのだから。

健祐を決して殺そうとはしない。ソレは痛めつけるために態と殺そうとしていなかった。
身勝手な理由で目の前で大切な人を傷つけられて――皐月が黙っているわけがなかった。

同じ事が以前あった。それは葉月が犯人に襲われようとしていたときである。
しかしこの時、皐月の瞳は殆どないといえた。
曇っていたのだ。まるで濁ったコンタクトレンズを入れたかのように――

「た、助けてくれ・・・　助けてくれぇっ！！」
健祐の悲鳴とともに、グチャリという鈍い音が闇夜に小さく響き渡った。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

皐月の帰りが余りにも遅く、心配になった弥生が遊火に様子を見に行くようにと命令し、遊火は神社からスーパーへの道のりを空から追っていた。

「あら、遊火じゃない？」
「エンちゃん？　どうかしたの？」
目の前に現れた煙々羅を遊火は親しく話をする。
「瑠璃様から大宮巡査は何をしているのかって、気配が消えたっていってたし」

「私は皐月さまの帰りが遅いから、弥生さまにお願いされて」
遊火がそう言った時だった。

ゾワッという、背筋が凍りつくほどの禍々しい気配を感じ、遊火と煙々羅は気配がしたほうを見やった。

「い、今のって……　妖怪？　ううん違う、この感じ瑠璃さまや浅葱さまに近いものがあった」
瑠璃は闇魔王であり、橋姫である浅葱は、『浅葱橋』に建てられた祠に祭られた神である。
「でも、こんなにいやな感じはしないはずだよ？」
遊火がそう言うや、煙々羅は急いで気配のしたほうへと流れていった。遊火もその後を追った。

煙々羅と遊火は気配がした場所へとやってくると、二人とも目を背ける仕草を見せた。

直視できないのだ。
朽田健祐の骸はボロボロになっており、顔の骨はグチャグチャに腫れており、腕と足はまるで別の生き物といわんばかりにありえない方向に曲げられている。

「あ、あああ……」
かすかに声が聞こえ、煙々羅と遊火は互いを見やった。
この状態で生きているとは思えなかったのだ。

「どうしてこいつがこんな目に？」
煙々羅が少しばかり考えるや、
「遊火っ！　急いで拓蔵さんたちに知らせて！　私は皐月さんを捜してみる」

そう云うや、煙々羅はスーッと姿を消した。
煙々羅は皐月が遊火を見ることが出来ない事を知っており、遊火を向かわせても意味がないと判断しての事だった。
遊火は困惑しながらも、拓蔵を現場へと呼び、その数分後には警察が現場へと駆けつけていた。

警察が健祐のところに着く少し前の事である。
「あ、いた。皐月さ……」
煙々羅が皐月を見つけ、近付くや、その異様な空気に唖然としていた。

そこには血塗れになって倒れている大宮巡査と、それを膝枕している皐月の姿があった。
「お、大宮巡査？　どうして？　一体誰が？」
煙々羅が血塗れになった大宮巡査に近付こうとすると、
「やぁ……　こないでぇ……　こないでぇ……」
大宮巡査を抱きしめていた皐月が譫言を言う。その光景は幼い少女がくるものを拒んでいるようなものであった。
皐月の左手はグチャグチャに潰れており、そこからも血が流れていた。

「さ、皐月さん。私ですっ！　煙々羅ですっ！」
そう声をかけると、皐月の瞳は徐々に光を取り戻していた。

「一体何があったんですか？」と訊ねたが、皐月はいま自分が置かれている状況がわかっていなかった。

そう……　朽田健祐を襲っていたときの記憶などもっていなかった。

これは彼女自身が都合よく記憶をなくしているのではない。

もうひとつの――――　皐月の体に宿っている神の仕業なのだから……

拾壱・逆鱗（後書き）

第十一話終了です。そしていい具合に最終回へと続きます。

壱・呪

夏特有というべきか、午前六時になる頃には、全国津々浦々、殆どの場所で雲に隠れていても、朝日が昇っているものである。

そんな中、朝のニュースで流れる天気予報を聞くたび、誰もが一度はその報道にぐったりとするはずである。

『今日のお昼頃から、気温は三十五度以上になると……』という天気予報士の言葉がテレビやラジオから流れるか、もしくは街頭の電子広告などで流れるように表示されるかのどちらかであろう。

――兎にも角にも、こういう時期は最高気温を聞いただけで、気持ちが億劫になる。

さらに云えば、湿気などで蒸し暑くなると余計にだ。

太陽が真上に昇り、いよいよ最高気温になろうとしていた昼頃、ある事件が起きた。

消防署に連絡が入り、消防車がやって来た現場は密集した住宅街である。

幸い発見が早く、小火（ぼや）程度で事は済んだが、その火災が奇怪なものであった。

それは家の周りに二米（メートル）ほどの高さがある塀があり、猫がその上を歩かないようにと、鉄骨が食み出ている。

さらに云えば、その家はセキュリティー会社と契約しており、不審者が入れば、自動的に通報されるという仕組みである。

にも関わらず、通報は煙を発見した一般人が、一一九に連絡しての事であった。センサーが作動していなかったのか、煙を感知しなかったのである。

「これ、どう思います？」
西戸崎刑事が一緒に来ていた佐々木刑事に尋ねる。
「うーん。小火が起きたと思われる時間、家には人間が一人もおらんかったんじゃろ？」
佐々木刑事が確認するように鑑識員に訊く。
「はい。主人であるＡは会社出勤。妻はお昼前からパートに出かけており、娘と息子はそれぞれ学校に出かけているので、小火が起きた時間、誰もいなかった事になります」
ガス栓の閉め忘れは？と西戸崎刑事が尋ねると、「確認しましたがしっかりと閉められていました」と、鑑識は説明した。
「小火が起きたのはリビングか。タバコの消し忘れによるものじゃないのか？」
リビングの設けられているテーブルの上が焦げており、そこから煙が出たものと考えられている。
「いえ、そのようなものはひとつもありませんでした。どうやら主人が禁煙をしているようです」
「つまりそれに関しても火事の原因にはなっておらんのか……」
西戸崎刑事、佐々木刑事の二人は小火があったリビングを眺めていた。

すると西戸崎刑事が窓際にある金魚鉢に目をやった。金魚鉢の中を和金や出目金が二、三匹泳いでいる。――しかし、特に気にも留めず、他の場所を見渡していた。
「うーん、子供の悪戯ってわけでもなさそうじゃしなぁ」
佐々木刑事はもう一度リビングを見渡したが、全くといっていいほど証拠になるものは『ひとつも見つからなかった』。

それから一時間後の事である。
別の場所でも同様に小火騒ぎがあり、またしても家には誰もいないときに起きていた。

今度は家の周りに井戸端会議をしていた奥様方が何人もいる状況でのことだ。

しかし家に不審な人物が入った様子はなかったと、その時近くにいた主婦が警察に話しをしている。

小火が起きた場所は一件目と同様にリビングだった。その家の主人が風水を趣味にしており、窓際に水晶玉を置いていたとの証言もあった。

さらにその十分後、今度は小火ではなく、部屋ひとつを焼くほどの火事が起きた。

火災が起きた場所は厨房で、今度は窓際に水の入ったペットボトルが置かれており、火災原因は残った油に引火したものだと判明されたが、引火原因は未だに判明されていなかった。

「阿弥陀警部、お疲れさまっす」

刑事捜査一課にあるソファに座っていた岡崎巡査が、部署に入ってきた阿弥陀警部を見つけ挨拶をする。

「あ、岡崎くん。首尾はどうですか？」

阿弥陀警部も西戸崎刑事や佐々木刑事と同様に、今日起きた連続火災事件に回されていた。

「誰もいないのに火事が起きるなんて不思議ですね」

「まったくですよ。連続して三件も……　冬じゃないんだから」

何か自動的に着火する仕組みでもあるんじゃないかと考えていたが、その様なものも見付からなかった。

「こりゃ、あの人たちに訊いたほうがいいんでしょうけど――」

阿弥陀警部は少しばかり考えるや頭を振り、逃げるように鑑識課へと向かった。

「っと、あれ？」

鑑識課の部署に入った阿弥陀警部は首を傾げた。

鑑識課は小火騒ぎどころか、他の事件でも出払っているため、科学研究などによる原因追求している班以外は殆ど部屋にいない。

阿弥陀警部は一連の火災事件のことを湖西主任に尋ねようと思い、やってきたのだが、その本人がいなかった。

阿弥陀警部は湖西主任が戻ってくるのを願いながら、少しばかり待つことにした。

すると携帯が鳴り、阿弥陀警部は電話に出た。

「はい。阿弥陀ですが……　えっ？　今度は全焼ですか？」

阿弥陀警部はふと、どうしてそのような報告を刑事部の自分が受けているのだろうか？と考える。

『それと……　現場から男性の焼死体が発見されました』

それを聞くや、阿弥陀警部は慌てて現場へと車を走らせた。

阿弥陀警部が現場に駆け付けた頃には既に遺体が運び込まれていた後で、火は消沈し、残ったのは木片のみであった。

火事があった家は、コンクリートで建てられた家が殆どの閑静な住宅街には珍しい木造一戸建てで、その後あった連絡には、その家の主である『阪野章（さかのあきら）』であるとわかった。

火災原因は遺体の近くにあり、発見された場所が寝室のベッドの上である事から、被害者は寝タバコをしていたのではないかという推測が出た。

――が、阪野章は肺ガンの疑いがあり、医師からタバコを止めるようにと云われていたため、ここ最近、被害者がタバコを買ったという目撃証言は得られなかった。

それらの事から、火事は何故起きたのかという疑問視が出てくる。
第一、焦げは『熱せられなければ、点く事はない』。
最初に発見された小火の原因となった、リビングのテーブルにあった焦げ。
二件目も最初と同様に、リビングに焦げが出来ていた。
三件目は全焼とはいかなかったが、厨房に置かれていた残り油に引火しての火事である。

これらに共通して、引火させる原因が見つからなかった。

翌日。阪野章に対する近辺の聞き込みが開始された。
警察は火事を寝タバコによるものと、何者かによる証拠隠滅のために起こしたものというふたつの考えがあった。

湖西主任ら鑑識課による検死結果によれば、死因は全身火傷によるものであったが、ひとつ奇怪なものがあった。
それは脹脛に焦げのようなものが発見されたのだが、それをつけるようなものは発見されなかった。

阿弥陀警部はその晩、稲妻神社へとやってきていた。例によって、葉月に霊視してもらおうと思ってのことである。

母屋の方に回ると、灯りが点いており、家に人がいることがわかる。
阿弥陀警部はチャイムを鳴らすと、一、二分ほどして応答があった。

『どちらさまでしょうか?』
応対したのは弥生であったが、声のトーンが低い。

「あ、阿弥陀です。いつもお世話になってます」
阿弥陀警部がそう返事をすると、少しばかり間が空いた。
『今日はどのような用件で？』
弥生の声に阿弥陀警部は少しばかり違和感を感じた。

「実は先日、火事が四件ほど起きましてね。その中の一件に焼死体が発見されたんですよ。火事が起きた原因もわからないので、出来れば葉月さんの――」

『その様なことでしたら、お帰りください』
そう云うや、弥生は乱暴にインターホンを切った。
その様子に、呆気に取られていた阿弥陀警部だったが、ただで帰るほど素直ではない。

何度もインターホンを鳴らし、誰かが応対に出るが、阿弥陀警部の声を聞くや直ぐに切られる。
そのようなことが二十分ほど繰り返された。

「こっちだってねぇ？　わかんない事があったら訊かないと、先に進め……」
阿弥陀警部が怒鳴ろうと、門の扉を開けようとしたときだった。
家の引き戸が開き、中から誰かが出てきた。
暗闇だったため、阿弥陀警部は少しばかり目を細くし、出てきたのが誰なのかを確認した。

するとギラッと何かが月光に当たり、暗闇に白く光った。
阿弥陀警部はそれが何なのかを知るために、身を乗り出すや、自分の顔の真下から、ビィンという矢が当たったような音が聞こえ、それを見るや、背筋が凍るのを感じた。

戸に矢が撃たれており、阿弥陀警部は辛うじて助かったが、もう一度弓を引く音が聞こえ、阿弥陀警部は咄嗟に「わ、わかりました。今日は虫の居所が悪いようですし、失礼します」といい、その場を立ち去った。

そして翌日。阿弥陀警部は再び稲妻神社へとやってきた。今度は夕刻である。

が、またしても門前払いを食らってしまい、途方にくれていた。

壱・呪（後書き）

第一期最終回です。というよりかは消化試合といった感じでしょうか。いつも通り、のんびりとお楽しみ下さい。

弐・鬼胎（前書き）

鬼胎（きたい）：心中ひそかに抱くおそれ。

弐・鬼胎

『今日の夕方、警視庁所属の刑事が、何者かによって襲撃に遭いました。犯人は朽田健祐（２５）。犯人は逃亡中、何者かに襲われ、現場に駆け付けた警察によりますと、朽田健祐は瀕死の状態でしたが、辛うじて息をしていたとの事です。』

時計の針が夜十一時を回り、テレビに映っているニュースでは、淡々と記事を読んでいくキャスターが映っている。

それを弥生と葉月は睨むように見詰めていた。

『襲われた刑事は重傷を負(お)っており、ただいま警察病院で治療中。回復次第詳しいことを訊……』

葉月はキャスターの言葉を聞き終える前にテレビの電源を切った。

「大丈夫だよね？　大宮巡査……」

葉月は今にも泣き出しそうな表情で弥生と拓蔵に訊ねる。

「湖西主任の話だと、大宮巡査が重症を負っているとは云っておったが、問題は何故襲った朽田健祐が『生きていた』かということじゃな」

拓蔵は朽田健祐を襲ったのが暴走した皐月であることに気がついていた。

「皐月さんが宿している摩訶迦羅(マハーカーラ)が、何かしらの理由で呪詛もなしに現れたということでしょうか？」

煙々羅が聞き返すように言う。

煙々羅は大宮巡査が発見される前に皐月を神社に帰していた。

それは彼女が犯人ではないかという疑いから逃がすためであると同時に、グチャグチャになった左手の治療をするため、神霊の力が強い本堂へと早く連れていきたかったためである。

「皐月おねえちゃん、大丈夫なの？」
「何とか骨の形状、細胞組織の再構成を終え、今は修復した体に馴染みはじめたといったところですが――」
葉月の問い掛けに、煙々羅は少しばかり俯いた。
「ただ、今回皐月さんは自分の意思で摩訶迦羅（マハーカーラ）の力を得ていないので、今後力を使おうとすれば、拒絶反応があるかもしれないんです」
その言葉に弥生と葉月は首を傾げた。

「その力が失っている危険性があるかもしれんということか？」
「今はご自身の部屋で安静されていますが、神霊の力はただ使うものの力が強ければいいというわけではありません。『心技体』という言葉があるように、今の皐月さんは大宮巡査が目の前で襲われ、自分のせいで重症を負ってしまったという恐怖心がありますから」
煙々羅はそう云うや、皐月の部屋がある方へと見やった。

「弥生。皐月が全快するまでは警察からの依頼を断ってくれんか？」
「わかってる。皐月はそうだけど、葉月も気持ちが揺らめいていて、とても霊視が出来る状態じゃないしね」
弥生はそっと葉月をうしろから抱きしめた。

「大丈夫よ。大宮巡査はあの時、他の刑事たちが逃げていく中、ひとりだけ残っていたんだから。ああいうのは神様に護られているか、ただの馬鹿かの両極端しかないんだから」
葉月は直接見ていないのでわからないが、舞頸（まいくび）と皐月が川で対峙していたときの事を弥生は話した。それに付け加えるように「本当だったら掠り傷で済むはずがない」とも云った。

そんな会話を知ってか知らずか、皐月は自分の部屋の隅で布団に丸まり、膝を抱えて震えていた。
その姿はもはや見れるものではなく、近くで見張っていた遊火は、

自身も泣き出しそうな表情を浮かべていた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「それじゃ、行ってくるね」

一両日経ち、皐月が家の玄関から学校へと出かけるのを弥生が呼び止める。

「皐月、怪我大丈夫なの？」

本当は怪我の事よりも精神を心配しての事であった。

「大丈夫よ。あれくらいの怪我、半日で治るから。それにあと少しで夏休みなんだから」

皐月は笑みを浮かべながら言うと、そのまま神社を後にした。

「――遊火」

弥生にそう呼ばれ、遊火は姿を現した。

「あの子が元に戻るまで見守っててくれる？　姉妹だからってわけじゃないけど、あなたも皐月が無理してるのわかるでしょ？」

そう云われ、遊火は頷き、無数の火の玉となって外へと出て行った。

皐月は力の弱い妖怪や幽霊を視野に入れることが出来ない。遊火なら偵察に出すには丁度いいと弥生は判断してのことであった。

その夕刻、何事もなく皐月は普段と変わらない様子で帰宅するや、誰もいない本堂で二天一流の稽古をし、夕食を終え、風呂に入り、自分の部屋で学校の宿題を終えていく。

――が、寝る時だけは部屋の隅でガタガタと震えている。

表情は虚ろで、唇は震え、譫言を呟いていた。

みんなの前では普段の自分を装っている皐月を見るに耐えない遊火は、大宮巡査が入院している警察病院へと消えた。

当然の事であるが夜中という事もあり、病室の電気はもちろん、窓も開いてはいなかった。

大宮巡査の病室が見える窓まできた遊火だったが、窓が開いていなければ中に入ることが出来なかった。

鬼火は霊とも云われており、それにより妖怪と幽霊の間に位置されていることが多い。

皐月の代わりに一目だけでも大宮巡査の容体を見たかった遊火は窓を睨みつけ、消えようとしたときだった。

「何をしてるんです？　遊火」

病室の方から聞きなれた声が聞こえ、遊火はそちらに振り返った。

何時の間にか病室の窓が開いており、遊火は恐る恐る病室を覗き込んだ。

「え、閻魔さま？」

月明かりに照らされた病室の中にはひとつのベッドしかなく、そこに大宮巡査が眠っている。

その傍らに丸椅子が置いてあり、瑠璃はそれに座っていた。

「皐月は……」と、瑠璃は皐月の様子を遊火に訊ねようとしたが、遊火の表情を見て、大丈夫ではない事を悟った。

「閻魔さまはどうしてここに？」

遊火は首を傾げながら、瑠璃に尋ねる。

「私は大宮巡査の監視をしているだけです」

「どういうことですか？」

遊火がそう云うや、瑠璃は掌を目の前に挙げた。すると何もない空間が裂け、そこから大きな鏡が現れた。

「浄玻璃鏡？」と遊火は呟く。

「あなたも知っての通り、この鏡は死者が生前に行った全てのことを見る事が出来ます。それと同時に地蔵を通して見ることも出来る」

浄玻璃鏡の役目を知ってはいるが、それが何なのだろうかと遊火は思った。

「先ほど私は大宮巡査の監視をしているといいましたよね？　それは不意の事故だったとはいえ、彼が妹を殺した事に変わりはないんです」

その言葉に遊火は大宮巡査を見やった。

「彼は溺れ沈んでいく妹を見殺しにし、それを見ていないという妄語を吐いた罪により、閻獄第五条『大叫喚地獄・唐希望処（とうきぼうしょ）』へ連行されることは決まっているんです」

瑠璃はその事を大宮巡査に話してはいないと言うが、彼が罪を償っていけば多少なりとも罪は軽くなるだろうと付け加えた。

「だから僕は妹が好きだったおまわりさんの道を選んだ」

その声を聞くや、瑠璃と遊火は大宮巡査を見やった。

「気がつきましたか？」と瑠璃は大宮巡査の意識を確認する。

「ええ。お陰さまで……　まぁ、好い加減起きないと妹に怒られそうだったので」

「えっ？　っと……」

遊火は言葉の意味がわからず、釈然としない表情で首を傾げる。

「夢に出てきたんですよ。妹が……　いつも世話焼きでね。起こすとき、よく僕のおなかの上で跳ねながら起こしていましたから」

「いい兄妹ですね。だからこそ彩奈（さな）はあなたを怨まなかった。本当

に大好きだったのと、あなたは潜水が苦手で、だから自分を助ける事が出来なかったというのがわかっているからでしょうね」と瑠璃は笑みを浮かべる。

地蔵菩薩とも言われている閻魔王は、地獄裁判のないときは六道へと足を運び、救われない衆生や、親より先に死んだ幼い子供の魂を救っている。

賽の河原で獄卒たちに虐められている子供の霊を守るという、最も弱い立場の人々を最優先で救済する菩薩と言われている。

結局衆生は何かしらの罪を背負いながら、転生していくのを知っているからこそ、瑠璃はどんな形であれ、子供を見守る事が何よりも好きだった。

だからこそ、大宮巡査が見ていた夢の内容を聞き、自然と笑みが零れていたのだ。

「大宮巡査、怪我の具合は大丈夫ですか？」

「ええ。まだあちこち痛いですけど、もしかしてあの時、閻魔さまが護ってくれたんですか？」

大宮巡査は朽田健祐に襲われたとき、死ぬかも知れないと思っていた。

「いいえ、私は何も……ですが、人の想いを宿したものには、不思議な力があるんですよ」

そう言いながら、瑠璃は視線を壁にかけられた上着へと向けた。

上着には財布が入っており、大宮巡査は体を起こし、それを出した。

「妹が助けてくれたんでしょうか？」

大宮巡査の問い掛けに、瑠璃はただ笑みを零すだけである。

大宮巡査の財布に一枚の写真が入っている。そこには楽しそうに笑っている兄妹の姿があった。

弐・鬼胎（後書き）

ＨＰとタイトルが違うのは、読み返して、当てはまらないと判断したからです。あと遊火が壁を通り抜けられないのはそういう力がないからです。ようするに風が壁の向こうにすり抜けられないのと一緒。

参・一途

大宮巡査が目を覚ました翌朝、警視庁に意識を取り戻したという連絡が入った。

それを聞いた刑事部の刑事たちは安堵の表情を浮かべていく。

「一応命は取り留めたということか。まったく運がいいやつじゃな」

佐々木刑事は淡々と云うが、

「佐々木刑事、お茶が零れてますよ?」

岡崎巡査にそう言われ、佐々木刑事はハッとするや、自分のズボンを見た。

湯飲みの縁(ふち)が唇に当たっておらず、ダラダラとお茶が下に零れて落ちている。

「これで後は朽田健祐を襲った犯人が捕まれば、この一軒は万事解決じゃな?」

西戸崎刑事は阿弥陀警部を見ながら言うと、阿弥陀警部は少しばかり考え、

「すみません。ちょっと出かけてきます」

そう云うや、阿弥陀警部は刑事部の部署を出て行った。

阿弥陀警部が向かった先は、稲妻神社や、大宮巡査が入院している警察病院ではなく、全焼した阪野章宅であった。

瓦礫は撤去され、残っているのは無残な空気しかない。

その土地を見渡しながら、阿弥陀警部はどうして全焼したのかを考えていた。

他の三件と比べて、この被害だけが明白(あからさま)に大きいのだ。

もちろん最初の二件における小火騒ぎも、下手をすれば家を全焼

させるほどの危険性があり、油に火が点いての被害に関しても、部屋がひとつ燃えただけという、はっきり云って『運がよすぎる』といっていいほどの被害なのだ。

『誰かが意図的にやっていたか』と阿弥陀警部は考える。

家に誰もいない時間帯。そしてその周りに人がいたというのに、誰一人放火犯を目撃していない。

阿弥陀警部はこれがただの火の不始末によるものだとは考えていなかった。が、これが火の不始末ではなく、放火によるものだとすれば立派な事件となるが、放火や万引き、痴漢と云った『突発的犯行』は、犯人が現行犯である以外逮捕する事は出来ないとされている。

もちろん事前にそのような疑いがあり、後日当人に話を聞いたとしても、職務質問とされ、逮捕状がなければ、当然逮捕する事は出来ない。

『はたして阪野章は事故死によるものなのか』という疑問が、阿弥陀警部の脳裏に引っ掛かっていた。

「おや?」と阿弥陀警部は阪野章の家に背を向けた時だった。

目の前から一人の老人が阿弥陀警部の方へと歩み寄ってくる。

「まったく……　タバコの不始末つぅんは、物騒なもんじゃなぁ……　肺ガンになる危険性があるのに、未だに吸い続けておるからこうなるんじゃよ」

「失礼ですが、あの家にいた方のお知り合いで?」

阿弥陀警部が老人にそう尋ねる。

「ああ。中毒者に止めろと言って、素直に止める人間もいれば、馬鹿みたいにやり続ける人間もおるからなぁ。隠れてやっていたなん

てのは日常茶飯事じゃろうよ」
老人はまるで事件の内容を知っているかのような口調である。
「一応皆さんに訊いたところ、ここ最近被害者がタバコを購入したという目撃証言はないんですけどねぇ？」
「あんたも刑事なら、人間の言い分なんぞ信用してはならんぞ――阿弥陀如来？」
老人がそう云うや、阿弥陀警部は咄嗟に老人から間合いを広めた。
「――何のことでしょうかね？」と阿弥陀警部は笑みを浮かべるが、その笑みはぎこちないものであった。
『阿弥陀如来……　久し振りに自分の名前を聞きましたけど、あの人以外、その事は知らないはずじゃ』
阿弥陀警部はそう考えながら、老人を見やるや、ゾッと悪寒を感じた。
突然老人の顔が眼前に現れ、阿弥陀警部は咄嗟に身をかわした。
「ほうほう。こっちに長くいたせいで、体が鈍（なま）っておるかと思うたが――」
老人が指を弾いた瞬間、阿弥陀警部は跪いてしまう。
「くぅっ？」
阿弥陀警部は体勢を整えようとするが、立ち上がることが出来なかった。
それは彼の左足が『存在していなかった』ためである。阿弥陀警部は傍にあった壁に、寄りかかるように立ち上がった。
「それで……　この前、朽田健祐を襲った犯人を、警察が捜しているというのを小耳に挟んでなぁ、あんた知らんか？」
「こちらもその犯人を探しているところなんですよ。あなたも何か知っていたら……」
阿弥陀警部が訊ねるや、老人は再び指を弾いた。

阿弥陀警部の両足が『存在しなくなり』、ゆっくりと倒れるどころか、無理矢理体を地面に叩きつけられるように倒される。

「あがぁっ！」

「好い加減、呆けるのは止めにせんか？　阿弥陀如来……」

「ご丁寧にどうも。あなたみたいな人が『こちらにいる』こと自体が可笑しいんじゃないんですか？」

阿弥陀警部がそう言うと、老人は三度指を弾く。

「げぇほぉっ！！」

突然阿弥陀警部は吐血し、目を虚ろにさせる。

「がはぁっ！　げぇっ！　ごほぉっ！！」

「『人間の姿に権化するには、それ同様の組織細胞と、それを維持するほどの力が必要』じゃろうが？　権化になっている状態では塵芥同然の存在じゃからな。五臓六腑のうちひとつでも意識から亡くしてしまっただけでその有様とはなぁ」

老人は笑みを浮かべながら説明する。その表情は禍々≪まがまが≫しく、見るものを不安にさせるものであった。

「さて、わしの質問に答えてくれんかなぁ。朽田健祐を襲った犯人は誰なんじゃ？」

「……　さっきも云ったとおり、私たち警察も犯人の行方を――」

「知っているから訊いておるんじゃろうが？　ガタガタ理屈吐いておると、身を滅ぼすぞ？」

老人が再び指を弾こうとした時だった。何者かが近付く気配を感じ、老人は舌打ちをする。

「今日はこの辺にしておこうかのぉ……　何を理由にしておるかは知らんが、『わしの片割れがやったことを見てみぬふりをし続ける』のは好くないと思うがなぁ？」

そう云うや、老人はスーと姿を消した。

「はぁ……　はぁ……」と阿弥陀警部は荒い息を整え、ゆっくりと深呼吸する。

『足は……　よかった。忘れてはいないようですね』

阿弥陀警部は自分の両足を見て、ホッと息を吐く。

「阿弥陀警部？」

少女が阿弥陀警部に駆け寄り、容体を確認する。

「おや、自分の役割はきちんとした方がいいんじゃないですかね？　まだ大宮くんは安静にしていなければいけないんでしょ？」

阿弥陀警部はそう言いながら、地面に座りなおし、壁に凭れかかった。

「一体何があったんですか？」

「虚空蔵菩薩が……　あなたの片割れがやってきて、訊ねたんですよ。朽田健祐を襲った犯人は誰なのかってね」

それを聞くや、少女――瑠璃は表情を強張らせた。

「虚空蔵菩薩が？　どうして今頃になって」

瑠璃はガタガタと肩を震わせる。

「先日のキャンプで、あの人と会っているとは思ってもいませんでしたが、もしかしたら大宮くんが襲われた本当の理由は……」

阿弥陀警部はそう言いながら、瑠璃を見やった。

「あの子達の精神を壊すため――？」

瑠璃がそう訊ねるや、阿弥陀警部は少しばかり考え、小さく頷いた。

「私はあなたが選んだことをとやかく言いませんし、死んでいない弥生さんたちが賽の河原にいたのを助けたのは、『家族ならば助けるのが道理』でしょうからね」

「わたしは――彼を愛していることだけは偽りを持っていませんが、そのせいであの子達を」
「あなたが六年前に起きた転落事故について全く調べられないのはやはり」
阿弥陀警部が尋ねるが、瑠璃は返答に困っていた。
「それはわかりませんが、おそらくそう考えてもいいでしょう」
瑠璃は手を握り締める。強く握り締めていたせいか、手の内から血が零れ落ちている。

「どうして……　罰を受けなければいけないのは私だけのはずです？　だからこそ、私は自分が人間に権化していた時の記憶を拓蔵だけにしか残さなかった！」
瑠璃の目からは大粒の涙が溢れ出している。
「虚空蔵菩薩はその事を赦さなかったんじゃないんでしょうかね？」
阿弥陀警部にそう云われ、瑠璃は表情を歪ませた。

「それで、どうします？　大宮くんが意識を取り戻したというのを報せに行こうと思っていたんですけどね」
「それは遊火にお願いしてます。ただ、それを聞いた皐月がどう反応するかわかりませんが、嫌な予感しかしませんね」
その言葉に阿弥陀警部は表情を曇らせた。

――瑠璃の心配は奇しくも的中する形となってしまった。

肆・視界

「それ、ほんと？」
寝巻きから制服に着替えていた弥生が驚いた表情を浮かべながら、遊火に聞き返す。
「それって、まだ葉月と皐月には云ってないんでしょ？」
「はい。閻魔さまから、弥生さまと拓蔵さまにだけ先に言うようにと云われましたから」
遊火はそう云うや、顔を俯かせる。
「本当だったら、皐月に云わなきゃいけないけど、あの子のことだから、無理して警察病院に行くでしょうね」
警察病院とはいえ、一般に開放されている病棟である。通院する事が出来、もちろん見舞いに行く事も出来る。しかし重要事件において、遺族が面接拒否をしている可能性だってあるのだ。

「皐月は朽田健祐を襲った事による重要参考人という形で目をつけられているでしょうしね」
「それを知っているのは――阿弥陀警部？」
遊火の問い掛けに「そうかもしれない」と弥生は云う。

「ただその事を知ってるのは警察関係だと湖西主任もだろうけど」
「信用出来るんですかね？」と遊火が云うや、
「大丈夫じゃよ。湖西主任は口が堅いしな。閻魔さまのことも知っておるし」
拓蔵が部屋に入り、弥生と遊火に言う。
「爺様。まだ着替え中なんだけど？」
弥生はそう云うが、既に制服のリボンを結び終え、殆ど出かけられる状態であった。

「閻魔さまを知ってるって、どういう？」
「まぁ、湖西主任とは数十年の付き合いじゃからな。昔の事も知っておるんじゃよ」
拓蔵はそう言いながら、遊火を見やった。
「遊火は――知らんようじゃがな」
その言葉に遊火は首を傾げた。

「さてと、早く朝食の用意しないと……　皐月はもう起きてるのよね？」
弥生は窓から本堂の方を見るや、威勢のいい皐月の声が聞こえてきた。
「もう大丈夫なんでしょうか？」と遊火が尋ねると、
「そう思うなら、後で皐月が切り落とした藁を確認してみることじゃな」
拓蔵はそう云うや、部屋を出て行く。それを見届けると、弥生と遊火は互いを見やった。

皐月が本堂からいなくなったのを見計らって、遊火は拓蔵に云われたとおり、切り落とされた藁を見やった。
床に散らばった藁は綺麗に切れているどころか、切れていなかったり、藁が折れ曲がっていたりと、まるで力任せに切って千切れたとしか考えられないものが殆どであった。

皐月の刀は摩訶迦羅（マハーカーラ）の力によって作られたもので、それは彼女の精神を写したものとなっている。
精神が揺らぐことなく確りとしているものであれば、その刀は名刀と言えるほどの代物である。逆に精神が不安定であればあるほど、鈍以下（なまくら）の代物でしかない。

皐月が日課にしているこの稽古を終えた後、拓蔵は確認するよう

に藁の切れ目を見ていたのだ。
　不安定だからこそ、皐月に大宮巡査が目を覚ましたということが話せないのだ。

　遊火がいなくなり、本堂には藁を掃除している拓蔵の姿があった。
「やはり、今日も安定していませんでしたか？」
　瑠璃は藁を一掴みし、掌に広げる。
「彼女に力を与えたのはいけなかったんでしょうか？」
「今更後悔しても始まらんじゃろ、瑠璃さんや。それに皐月は決して逃げはせんじゃろうよ」
　拓蔵の言葉を聞き、瑠璃は少しばかり表情を曇らせる。

「わしが田舎の交番から、警視庁へ異動になった時、そこで初めてあんたに逢うた。わしの一目惚れじゃったからな。あんたを好きになった事は一度たりとも後悔しておらんがな？」
「私だって、あなたを好きになった事……　愛している事に偽りはありませんし、後悔はしていません。ですが、そのことで娘やあの子達を不幸にさせてしまった」
　瑠璃はボロボロと涙を零す。

「わたしは十王が一人、闇魔王であり、地蔵菩薩でありながら、ただ一人の人間を愛してしまった」
　拓蔵は瑠璃をうしろから抱きしめる。その光景は老人が少女を抱きしめているというものであった。
「だからこそ、わしは遼子と弥生たちには、婆さんは『遼子を産んで直ぐ亡くなった』と偽っておる」
　瑠璃は拓蔵の腕をゆっくりと外そうとする。拓蔵は拒否せず、腕の力を緩めた。

「孫を見守るのは祖母として当たり前ですね。そして娘とその夫を

心配する事も」
「すまんな、大変な目に合わせてしもうて」
拓蔵が顎を摩りながら話すのを見るや、瑠璃は笑みを零した。
「本当に変わりませんね」
「人の癖はそう簡単には治らんもんじゃよ」
拓蔵は瑠璃を見やる。

「拓蔵、少しばかり身を屈めてくれませんか？」
瑠璃にそう云われ、拓蔵は云われたとおり身を屈めると……

本堂には二十歳ほどの女性が拓蔵の首に腕をまわし、唇を重ね合わせる姿があった。
それは一瞬の事であったが、二人にとっては永いものであった。

「はぁ……　やはり子供を愛する菩薩という立場でしょうかね？　権化でない以上、大人の姿になるのは力の使いようが極端に違う」
大人から少女の姿に戻り、瑠璃は溜め息を吐く。
「それでどうでしたか？　おおよそ七年ぶりに味わう唇の味は」
拓蔵が悪戯っぽく問いかける。
「それを聞いてどうするんですか？　昔みたいに、これ以上のことは出来ませんよ？」
瑠璃は照れくさそうに聞き返した。

「わしのわがままじゃがな。これからもあの子達を見守ってやってくれんかな？」
「云われずとも、私は子供や力の弱いものたちを見守る神仏ですよ」
瑠璃はそう云うや、スーと姿を消した。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

夕食の時、拓蔵が大事な話があると言い、三姉妹に箸を止めさせる。

「大事な話って何？」と葉月が尋ねるや、拓蔵は弥生を一瞥する。

拓蔵が何を云いたいのかがわかり、弥生は少しばかり顔を俯かせ、

「今日の未明。大宮巡査が目を覚ましたそうよ」

それを聞くや、葉月は表情を明るくする。

「それ、本当なの？」

葉月の反応とは対照的に、皐月の表情は暗いままである。

それもそうだろう。大宮巡査は二度も切られ、大量出血による瀕死であったことは、誰よりも皐月が一番わかっている。

発見が遅かった事もあり、危険な状態であったことも……

だからこそ、目を覚ました事が信じられないでいた。

「もう少し、嬉しい顔したら？」

「私のせいで……　私を守ったせいで、大宮巡査は」

皐月が慟哭するや、拓蔵は皐月の頬を引っ叩いた。

皐月は吹き飛ばされるように壁に背中を打ち、ズルズルと凭れ落ちていく。

「ちょ、爺様？」

「弥生の言う通りじゃ。もう少し助かった事を素直に喜べんのか、お前はぁっ？」

「爺様落ち着いて、人が助かって嬉しくない人なんていないでしょ？」

弥生と葉月が拓蔵を宥める。

「いいかっ！　警官はなぁ、本来市民を守るために作られた組織なんじゃよ。大宮くんは当然のことをしただけじゃろ？　それを自分のせいだと自惚れおってっ！」

拓蔵がそう怒鳴りつけ、皐月を見やる。――が、皐月は拓蔵から視線を逸らすように、顔を俯かせいる。

それを見るや、拓蔵は顔を歪め、

「葉月！　今日は皐月を見張っておれ！　わしはもう寝る」と怒鳴り散らした。

「ちょ、ちょっと！　爺様？」

弥生は呼び止めようとしたが、乱暴に開けられた障子が壁に当たる音に驚き、それ以上声をかけることが出来なかった。

「皐月おねえちゃん？」

葉月が心配そうに皐月に声をかける。

「爺様の言う通りよ。大宮巡査が皐月を守ろうとしたのは警官として当然の義務でしかないでしょ？」

「でも、あの時私が一緒にいなかったら」

「あんたが恐いのは！　力を暴走させ、無意識のうちに朽田健祐を襲った事でしょ？」

弥生が確認するように皐月に訊ねるや、皐月は完治した左手を見つめる。

「煙々羅から聞いたけど、あんたの左手は、まるでコンクリートに『自分から打ち付けたもの』だったって。襲われていた時、無抵抗だった朽田健祐に出来るものではなかったって……　それって、あんたは大宮巡査に逢う事が恐いんじゃなくて、また暴走するのが恐いからじゃないの？」

弥生がそう訊ねると、皐月は口をワナワナと震わせながら、

「違う……　そんな簡単な理由じゃない……　大宮巡査が私を守ろうとしたのは……　私を守ろうとしたんじゃない」

皐月の言葉に、弥生と葉月は互いを見やる。

大宮巡査は確かに拓蔵の云うとおり、警察官として皐月を守ろう

としただけである。
しかし、皐月からしてみれば、大宮巡査は自分ではなく、大宮巡査が重ねている彩奈（妹）を守っただけで自分ではないと思えてならない。それが彩奈に対する嫉妬心によるものかは、当の本人は気付いていなかった。

その晩のことである。葉月は拓蔵に言われたとおり、皐月の部屋にいた。
「葉月……　ごめんね」
「ううん、いいよ」
葉月は自分の部屋から持ってきた布団を床に敷いていた。皐月の布団は殆どその上で寝ていなかったため、綺麗な状態で敷かれたままになっている。

「わたしね。旧校舎でおねえちゃんに助けてもらったときと、今回の事って一緒じゃないかなって思ってるの」
「花子さんが出てきたときの話？」
皐月が聞き返すと、葉月は小さく頷いたが、「にてないわよ」と皐月は言い返した。
「あの時だって、私が犯人に襲われていたのを助けてくれた。大宮巡査が襲われた時だって、お姉ちゃんは助けようとしたんだよね？」
「それとこれとは違うでしょ？」
「一緒だよ？　遊火が云ってたもん！　朽田健祐が襲われたとき、瑠璃さんや浅葱さんと同じ感じがしたって。それ……わたしも学校で感じたことがあった」
葉月はそう云うや、皐月を真っ直ぐ見つめる。

「遊火、凄く心配してるんだよ。ずっと皐月おねえちゃんが辛い顔してるのが……　だって遊火、皐月おねえちゃんのこと大好きだもの。妖怪である自分を受け入れてくれている私たちが好きなんだか

ら」
そう言いながら、葉月は皐月の手を握る。
「知ってる？　力の弱い妖怪や幽霊は、『見る』んじゃなくて『視る』ことにあるんだって」
「……何それ？」
皐月が小さく口にする。
「瑠璃さんから聞いたことがあるの。そこにいると信じれば、必ずそのものは姿を見せてくれる」
皐月は薄らとある事を思い出す。

「私、遊火の声聞いたことがあって、だけどそれからずっと聞こえなくて」
「遊火はずっとおねえちゃんと一緒にいる――」
葉月はふと何かを思いつき、皐月の手を離すと、立ち上がり、窓を開けた。
日中の暑さとは比べ物にならないほど、冷たい風が部屋に吹き込んでくる。

「遊火、ちょっと来て……」
そう呼ばれ、無数の火の玉が部屋の中に入り、ひとつに集まるや、少女の姿へと変わっていく。しかし、それを確認出来たのは葉月だけである。
「遊火、大宮巡査が入院してる病院知ってるんだよね？　お姉ちゃんをそこに案内してあげられる？」
それを聞くや、皐月はもちろん、遊火も驚いた表情を浮かべた。

「そ、そんなことしたら、葉月が」
「爺様って、悪い事したら押し入れに閉じ込めなかった？」
皐月はハッとし、窓の方を見る。

「行きたいんでしょ？　だったらさっさとしないと」
「弥生姉さん？っと……」
皐月は部屋に入ってきた弥生に声をかけようとしたが、弥生に何かを投げられ、それを受け取る。それは皐月の靴であった。
「ほら、行かないで後悔するのと、行って後悔する。あんただったらどっちを選ぶ？」
皐月は少し考えるや、靴をその場で履き、窓から外へ出ようとするが、部屋は二階であり、少しばかり躊躇う。

「大丈夫でしょ？　いつもそれ以上の高さから降りたりしてるんだから」
「遊火。皐月おねえちゃんをよろしくね」
遊火は葉月にそう云われ、コクリと頷いた。

「ごめん二人とも！　今度絶対美味しいケーキがあるお店に行って、好きなの奢ってあげるから！」
そう云うや、皐月は窓から飛び降りた。

コンクリートの地面に足を叩きつけ、ふらりとするが、いつもそれくらいの高さを飛び降りていたため、外傷は殆どなかった。

（結局、私は幽霊や力の弱い妖怪が「見えない」っていう、それだけの理由で遊火も見えないんだって諦めていたんだ。あの子がそこにいるっていう、ただそれだけを信じればいいだけなのに、それが出来なかった。私が力の弱い妖怪や幽霊が見えないんじゃない。私がそれを拒絶していただけなんだ）

『そこにいると信じれば、必ずそのものは姿を見せてくれる』
皐月はさきほど葉月が云っていた言葉を頭の中で繰り返した。
そして遊火の気配を感じ、そちらを見やった。

――すると、ぼんやりと靄が見え、次第に人の形となっていく。

「遊火！　大宮巡査が入院している警察病院まで案内して。全速力でね！」

皐月は遊火を見ながら、そう告げる。

「は、はいっ！」

遊火は声を張り上げ、皐月を病院へと案内した。

そんな二人を、弥生と葉月は窓から眺めていた。

「これでやっと全部終わったのかな？」

「さぁね。元々私たちの記憶は、皐月の恐がりが原因で無くなってたんだし、その原因となった本人は自分のトラウマに勝てなかったから、こんな事になってしまった」

弥生は目の前にいる海雪に目をやった。

「二人ともごめんなさいね」

「別におばあさんが謝る事はないでしょ？　犯人が自分の罪を認めるのは当然でしょうが？　こっちだって、ずっとそれに合わせていかなきゃいけなかったんだから、そっちの方が大変だったわ」

弥生と葉月は既に六年前、転落事故に遭っていた事を思い出していた。

「でも、やっぱりお父さんとお母さんのことは思い出せないや」

葉月が愚痴を零すように呟く。

「それは闇魔さまが探してるから大丈夫でしょ？」

海雪はそう云うや、姿を消した。

「さてと、どうせ明日はお休みだから、皐月は友達のところに泊まるって事にしとこうかしらね？」

「でもそんなことしたら……」

葉月は自分が怒られると思い、涙顔になる。

「大丈夫よ。その時は私も一緒に怒られてあげるから」
弥生は葉月の頭を撫で、皐月の部屋で一緒に寝ることにした。

翌日、弥生と葉月は拓蔵に怒られると思っていたが、何事もなく挨拶され、呆気にとられていた。

伍・導

「はぁ……　はぁ……」

皐月が普段の状態で全速力で走ったとしても、風と火の妖怪である遊火に追いつくことは出来ない。

しかし韋駄天の力を使うことで、同等か、それ以上の速さで行動することが出来る。

だが、その力は十二分に発揮されておらず、皐月は力が途切れたように息を荒くしながら、警察病院へと案内する遊火を追いかけていた。

「大丈夫ですか？　皐月さま」

遊火は疲れを見せている皐月を気遣って、スピードを弱めようとしたが、

「私に構わないで！　全速力でお願いっ！！」

皐月は遊火にそう云う。逢いたいという気持ちが直に伝わると同時に、言っても効かないと感じた遊火は皐月に気を使うように、スピードを気付かれないよう緩めながら、警察病院へと案内した。

警察病院が見えてくるや、遊火は止まった。

「どうしたの？」

遊火は指で病院の門を指さした。

そこには警官二人が門の前に立っており、遊火が裏側の方を見に行くと、そちらの方も同様だと皐月に伝えた。

「気配は消せないんですか？」

「――ちょっとやってみる」

皐月は深呼吸し、精神を統一させる。ゆっくりと気配を消してい

き、病院の前を素通りしようとすると、
「ちょっと、君？　こんな時間に何をしてるんだい？」
門の前に立っていた警官に呼び止められ、皐月は驚いた表情で警官を見やった。

「えっと……　今から帰るところで」
「君、まだ中学生だろ？　こんな遅い時間に外で歩いてるなんて……」
警官が皐月に職務質問する。もう一人いた警官がトランシーバーを手に持ち、連絡を取ろうとした時だった。

皐月たちの前に一台の車が停まり、そこから見知った老人が姿を見せた。
「お勤めご苦労さん。ん、どうしたんじゃ？」
「佐々木のおじちゃん？」
皐月がそう云うや、佐々木刑事は皐月を見るや、驚きを隠せないでいる。
「皐月ちゃん？　どうしてこんなところに……」
佐々木刑事は少しばかり考えると、皐月が病院に来た理由を悟る。

「この子は私の知り合いの孫でな。多分ジョギングしておって道に迷ったんじゃろうよ。私が家まで案内するから、お前たちは引き続き警備の方よろしくな」
佐々木刑事はそう云うや、皐月の背中を押しながら、車へと乗り込ませる。
車は走り出し、病院から少し離れたところで一度停まった。

「あ、ありがとうございます。佐々木のおじちゃん」
皐月がそう礼を言うと、佐々木刑事は皐月をミラー越しに見る。
「それにしても久しぶりじゃな？　もう会わなくなって何年も経つ

というのに、私のことを覚えていてくれたんじゃな」
皐月は記憶を取り戻したことで、拓蔵が家に連れてきたことのある警官の事を思い出していた。佐々木刑事もそのうちの一人である。
「それで、病院に来た理由は大宮巡査のことじゃろ？」
そう云われ、皐月は答えるように頷いた。
「しかしこんな時間に来るとはな。もう面会時間は過ぎておるんじゃよ？」
佐々木刑事は車のデジタル時計を指さしながら言った。時間は午前一時になろうとしていた。
「先輩は皐月ちゃんが病院に来ている事は知らんと言った顔じゃが、黙って出てきたって感じじゃろ」
佐々木刑事は車の窓を開けるや、タバコを一本吹かした。
「朽田健祐を襲ったのは――皐月ちゃんじゃな？」
佐々木刑事がそう訊ねると、皐月は一瞬途惑ったが、「はい」と小さく答えた。
「まぁ、大宮君が襲われた事による逆上が理由ならば、正当防衛になるからなぁ。下手をすれば皐月ちゃんだってただじゃすまなかった状況じゃったろうし」
佐々木刑事は車に設置されている無線の電源を切る。
「皐月ちゃんが朽田健祐を襲ったというのは、阿弥陀と私、湖西主任以外は知らんのじゃがな」
「どういう事ですか？」
「私たち三人は皐月ちゃんがした事とわかっていても、それは神様の力が暴走してのことじゃろ？　そもそもあれだけボロボロになった朽田健祐が生きているはずがないんじゃよ。それは最後の最後で皐月ちゃんが暴走を食い止めたということになるんじゃが？」
そう云われ、皐月は自分の左手を見やった。

「朽田健祐が倒れておった場所にコンクリート塀があってな。その塀に拳くらいの大きさがある血の跡が発見されたんじゃよ」
それを聞くや、皐月はハッとする。それならば自分の血液がそこに付着しているため、すぐに感付いても可笑しくないんじゃと思ったのである。

「しかしなぁ。誰の悪戯か……　その跡は朽田健祐の血だったんじゃよ。まるで上塗りしたようにな」
「でも攪拌すればすぐわかることじゃ」
「湖西主任も当然そうしたんじゃがな、先日起きた連続放火事件の究明に回されておってな、そっちに手がいってないんじゃよ」
それなら部下に頼めばいいんじゃ？と皐月が尋ねると、
「皐月ちゃんの言うとおりなんじゃがな、まるで上自体が皐月ちゃんを庇っているとしか考えられんのじゃよ」
「それっていったい……」
皐月が考えるように俯くや、佐々木刑事は車を発進させる。

「野中虚空というのが上におってな、その人物がどうも焦臭（きなくさ）いんじゃよ」
その名を聞くや、皐月は肩を震わせた。その異常なまでの震えを見て、
「やはり皐月ちゃんと大宮君を酷い目に遭わせたのは、それが原因か……」
佐々木刑事は少しばかり考えると、皐月に一枚の紙を渡した。車の天井に備わっているライトを点けると、橙色の光が車内に広がった。

皐月は佐々木刑事から受け取った紙を見るや、顔を歪ませた。
『野中虚空　名前以外詳細不明』という文字のみが書かれているだけである。

「これって、いったい……」
「先輩のコネでな、公安部の一人にお願いして調べてもらったんじゃよ。そしたらな。そもそも野中虚空という名前以外、全くといっていいほど詳細が不明なんじゃ。むしろいるのかどうかもわからん」
佐々木刑事はゆっくりと車を警察病院の裏口に停めた。

「皐月ちゃんはちょっとそこで待っとれ、ちょっと話をしてくるだけじゃから」
そう云うや、佐々木刑事は車から降り、門の前で警備をしている警官二人に話をすると、警官二人はそそくさと正門の方へと駆けていった。

「よし。皐月ちゃん、降りてきてええよ」
佐々木刑事が車の窓を叩きながら言う。
「あの人たちは？」
「さっき皐月ちゃんが正門の方で職務質問されたじゃろ？　それをちぃと利用したんじゃよ」
それって言い返せば、私にとっては不利なことになるんじゃ？と皐月は思ったが、伽藍堂となった裏門は誰もいない。

「ここの警備員は田原先生の知り合いでな、事情を話せば入れてくれるじゃろうよ」
佐々木刑事はそう云うや、裏門を開けた。
「これ以上は私は見ておらんからな」
「ありがとうございます。佐々木刑事」
皐月は背筋を伸ばし、深々と頭を下げるや、急いで警備室まで走った。

「まったく。一体誰に似ておるんじゃろうか……　行動に関しては

爺さん譲りか、性格は婆さん譲りじゃろうな」
佐々木刑事はそう云うや、タバコを一本吹かした。
「佐々木刑事？　一体何があったんですか？　表に行ったら、そんなのいないって」
警備していた警官二人が戻ってくるや、佐々木刑事に訊ねる。
「おや、それじゃ見間違いですかね。正門の近くを通ったとき、体長２ｍはある大きな虎猫が道路を横切ったんですけどね」
佐々木刑事がそう云うや、警官二人は呆気に取られた顔を浮かべていた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

皐月は佐々木刑事から教えてもらった警備室を探していた。
「あ、皐月さま。あれじゃないですか？」
遊火が指で示しながら言う。そこには窓からぼんやりとした灯りが零れていた。
皐月は意を決して、その部屋へと近付いていく。

コンコンと窓を叩くや、警備員がそれに気付き、窓を開ける。
「あ、はい。ええ、今来たところです」
警備員は電話越しにそう話し、皐月を見やる。
「ちょっと待っててね。いまドアを開けるから」
そう云うや、警備員は警備室のドアを開け、皐月を中に入れた。
「いいんですか？　こんなことして」
「ははは……　伯母には敵わないからね」
そう言いながら、警備員は大宮巡査が入院している病棟への道順を教え、懐中電灯を渡そうとしたが、
「遊火……　灯りお願いできる？」
「はい。任せてください」と遊火はドンと胸を叩き、威張りだした。
「そう云うことですから、後は自分たちでどうにかします」

皐月はそう云うや、病棟へと走っていった。

遊火の力で、皐月の周りにぼんやりと明かりが点っている。
「えっと……　大宮……大宮っと――」
皐月は病室ひとつひとつ入院している患者の名が書かれているプレートを見ていく。

「大宮……　あった！」
皐月はその扉前に立ち止まり、深い深呼吸をする。
そしてドアを引き、中に入るや――――
『――あれ？』
皐月と遊火は部屋の中を見渡した。そこには冷たい風が吹いているだけで人の気配はしなかった。
ベッドの上は綺麗になっており、人が寝ていたという形跡が無くなっている。
引き出しやそれどころか、ベッドの金具にかけられている入院患者の情報を示したカードもない。

「大宮巡査？」
皐月がぼんやりと大宮巡査の名を言った時だった。
「だ、誰ですか？」
突然遊火以外の灯りに照らされ、皐月は目を細めた。

「ど、どうしてこんなところに女の子が？　け、警備員！　警備員！」
部屋に入ってきた看護士の女性が、皐月に警戒しながら近付いていく。
「ちょっと待って！　ひとつ訊きたいことがあるんですけど！」

皐月がそう云うや、看護士は何？と聞き返す。
「この部屋に大宮って言う男性が入院していたはずですが？」
「大宮さん？　大宮さんだったら――亡くなったわよ？　今朝、急にね」
看護士は淡々と説明する。

「……死んだ？」
皐月は看護士の言葉を聞くや、皐月はその場にへたれこむように跪いた。
「ちょ、ちょっと大丈夫？」
看護士が声をかけるようりも先に、皐月はスッと立ち上がり、部屋を出て行った。

「えっと？　ちょっと、待って……　あら？」
何かにハッとするや、看護士はぼんやりとその場に立ち尽くした。
「あれ……　どうしてこんなところにいるんだっけ？」
看護士は首を傾げながら、開けられた窓を閉め、部屋を出て行く。

そして廊下を歩くや、目の前に皐月がソファに座っていたのを、まるでそこに存在していないと言わんばかりに、看護士は素通りしていった。

陸・応

遊火がぼんやりとした光を皐月に照らす。その光は弱々しく、すぐにでも消えてしまいそうである。

「ごめんね、遊火……」

ソファに座っている皐月が、譫言を呟くように、遊火に謝った。

「いえ、私は……」

遊火はその先を言おうとしたが、今の皐月を見るとその先が云えなかった。

遊火は確かに目の前で、大宮巡査が目覚めたのを確認している。

それが急に亡くなったとなると、少しばかり違和感があった。

「皐月さま？　大宮巡査は確かに目を覚ましました」

「あんたが云ってるのは未明……夜中のことでしょ？　あの看護士は今朝亡くなったって云ってたじゃない！」

皐月は遊火に怒鳴りつけると。遊火が申し訳ないといわんばかりに顔を歪めたのを見るや、ハッとし、「ごめん。ちょっと言い過ぎた」と頭を下げ、そのまま項垂(うなだ)れる。

「やっぱり……　わたしのせいだ」

「皐月さまは悪くないです！」

「慰めなんていいわよ！　結局私が大宮巡査を殺したのと一緒じゃない？」

皐月が遊火を睨みつけた時だった。

「あれ、皐月ちゃん？」

ふと声をかけられ、皐月は声のした方へと目をやった。

それは見知った声で、この一両日、皐月が最も聞きたかった声で

ある。

――が皐月は、それが夢現（ゆめうつつ）のどちらによるものなのかが、頭の中ではっきりと出来ていなかった。

『えっ？』

皐月と遊火が同時に声を挙げる。

「ど、どうしたんだい？　こんな時間に。というかどうやって？」

男性がそう言いながら、皐月に近付く。

「う、嘘だ……　だって、さっき亡くなったって――」

皐月は立ち上がり、男性から離れていく。

目の前にいる男性が誰なのかわかっている。それでもさきほど云っていた看護士の言葉が脳裏に焼きついて離れないのだ。

「おいおい、酷いなぁ。そりゃ寝ていた間、お花畑が見えなかったわけじゃないけど」

男性はケラケラと哂う。

「さっきから皐月ちゃんの中じゃ、僕が死んでる事になってるみたいだけど、もしかして同じ苗字だったからかな？　今朝、大宮っていう『おじいちゃんが息を引き取った』って聞いたからね」

男性……大宮巡査は笑いながら説明する。

「お、同じ苗字？」

皐月は驚いた表情で大宮巡査に聞き返した。

「あれ？　もしかして僕に逢いに来たのはいいけど、下の名前知らなかったとかそういうオチかい？」

大宮巡査にそう云われ、皐月はゆっくりと遊火を見る。

「大宮巡査の下の名前って何だっけ？」

「皐月さま知らなかったんですか？」

「だって私、携帯に大宮巡査の番号登録してるけど、『大宮巡査』ってしか入れてないもん！」

「わ、私に怒鳴らないでくださいよ！」

皐月が上空を見ながら、慌てふためいているのを見て、大宮巡査は誰かと話しているのがわかった。

「それじゃ、皐月ちゃんの勘違いだったってことかい？」

そう訊かれ、皐月は顔を紅潮させる。

「まぁ、いきなり亡くなったって言われたら、僕が幽霊になって出てきても可笑しくないかな？」

大宮巡査はゆっくりと皐月に近付き、頭を撫でた。

「ごめんね。辛い思いさせてしまって。瑠璃さんやそれを通して遊火って妖怪の女の子から、皐月ちゃんがどんな風になっていたのか聞いていたんだ」

大宮巡査は皐月に謝ろうとしたが、その言葉を待たず、皐月は大宮巡査を抱きしめる。

「あいたたた。ちょっとは手加減してくれないかな？」

「あ、ごめんなさい」

抱きしめていた力が強かったこともあり、大宮巡査は疲れた表情を浮かべながら、ソファに座った。

「大宮巡査？　ちょっと目を閉じてくれません？」

「えっ？　どうして」

「いいですから」と強く言われ、大宮巡査は皐月に従った。

皐月はゆっくりと自分の顔を大宮巡査に近づけていく。もう少しで互いの唇が触れようとした時だった。

「あ、あの……　皐月さま？」

突然遊火が皐月に声をかける。全く空気が読めない……というわけではない。

「……な、なに？　これ結構勇気がいるんだけど？」
皐月は睨みつけるように遊火を見やった。
「抱きしめるのならばまだしも、接吻（くちづけ）をするのはどうかと思いますけどね？」
声が聞こえ、皐月と大宮巡査は声がしたほうを見るや、
「え、閻魔さま？」「る、瑠璃さん？」
皐月と大宮巡査は声の主を見るや絶句する。
そこには瑠璃が立っており、目を細めた笑みを浮かべていた。
「あなたが神社から逃げ出した理由がそれでしたら、厳罰を与えないといけませんね？　それに大宮巡査？　相手はまだ中学生ですよ？　誑（たぶら）かされたのならまだしも、自分から惚れさせた罪は重いでしょうねぇ？」
瑠璃が優しい口調で言うが、それはドスの効いた脅しにも聞こえる。
「い、以後気をつけます」
皐月と大宮巡査は瑠璃に向かって、深々と頭を下げた。
そんな二人を見ながら、瑠璃は溜め息ひとつ吐くと、
「さぁ、病室に戻りましょう。大丈夫、大宮巡査の病室は個室ですから、皐月が来ても誰も気付きませんよ」
瑠璃はそう云うや、大宮巡査に肩を貸そうとしたが、身長は葉月と然程変わらないため、殆ど貸せていなかった。
結局大宮巡査は皐月の肩を借りながら、ゆっくりと病室へと歩いていった。
「それじゃ命に別状はないんですね？」

皐月が確認するように大宮巡査に尋ねる。
「ああ、傷は深かったけど、命に別状はないって、主治医から云われてね。全治二ヶ月だそうだ。――ほんと、九死に一生を得た気分だよ」
ベッドに横たわっている大宮巡査が笑いながら説明する。
「でもどうして……」
皐月は大宮巡査が瀕死の状態であることは知っていた。それなのにたった二、三日で目を覚ますとは考えていなかったのだ。
「彩奈が守ってくれたんですよ。あなたを悲しませたくないと思ったんでしょうね。彼女は大宮巡査の守護霊でもありましたから」
そう話す瑠璃は、遊火の光を借りて、リンゴの皮をナイフで剥いている。その切り方は実に美しく、リンゴの蔕(へタ)からおしりまで、丸々ひとつ分の皮を切れる事無く剥き終えていく。

「そもそもあなたと弥生が舞頚を退治しようとしていたとき、大宮巡査はどんな行動をとりましたか？」
瑠璃の問い掛けに、皐月は首を傾げる。
「舞頚が旋風(つむじかぜ)を出した時、皐月は吹き飛ばされましたよね？　それなのに、大宮巡査は頬を掠めただけだった」
そう云われ、皐月は思い出すように頭を抑えた。

「あ、云われてみれば……」
「ただ、あなたみたいに特異体質ではないですからね。死ぬほどの苦しみがあれば、やはり死にますが、今回はそういう運命ではなかったということです」
瑠璃は八等分に切り終えたリンゴを皿に乗せるや、皐月に渡した。
「このリンゴ、結構美味しいですよ。皐月は甘いもの好きでしたよね？」
「そりゃ、甘いの好きですけど」と愚痴を零しながら、皐月はリン

ゴをひとつ摘み、口に頬張った。
シャクッというリンゴを噛んだ音が聞こえるや、
「んみゅぅ～～っ」と奇妙な声を出しながら、皐月は顔を綻ばせた。

「うん。やはり機嫌が悪いときの皐月には、甘いものを与えるのが一番ですね」
瑠璃は笑みをうかべながら、皐月を見やる。
「リンゴ貰った時から閻魔さまの策略はわかってたけど、それに従う私って……」
「そして甘いものを食べただけで機嫌がよくなる自分って……と思ったでしょ？」
瑠璃の言葉に、皐月は何も言い返せなかった。

「さて皐月、皆に心配させていた責任は重いですよ。今、阿弥陀警部ら警察が捜査している事件は普通のとは違いますからね」
「どういう事件なんですか？」
瑠璃の言葉に皐月は聞き返す。
「先日、連続して火災事件があって、そのうちの一軒で男性の焼死体が発見されたんだ。しかもその小火騒ぎは誰一人放火犯を目撃していない」
そういえば、大宮巡査が襲われた翌日から、阿弥陀警部が神社に訪ねに来てたっけ？と皐月はふと思い出す。
「放火だったら、誰もいないときにやるんじゃ？」
皐月が首を傾げながら尋ねる。
「それだったら阿弥陀警部だって苦労はしません。火災が起きたのは、家の中には誰もおらず、逆に外には人がいた状況だということなんです」
「それじゃ放火犯はいない？」
皐月はふと遊火を見た。遊火が驚いた表情を浮かべている。
「遊火、どうかした？」

皐月にそう尋ねられ、遊火はハッと気付くや、「いえ、なんでもないです」と首を横に振った。

瑠璃はそんな遊火を見るや、一瞬眉を潜めたが、

「拓蔵に黙って来たんでしょ？　今度はちゃんと決められた時間に訪ねなさい」

瑠璃はそういうや、病室の窓を開けた。

「ここは一階ですから、見つからないように」

もう少しいたかったが、一目見ただけでも満足しているので、皐月は帰ろうとしたが、少し気になることがあり、瑠璃にひとつ訊ねた。

それはキャンプのとき、六年前の転落事故を思い出し、震えて動けなかった自分に、声をかけた瑠璃の様子によるものである。

――しかし、返ってきた言葉は意外なものだった。

「それ……　誰から聞きました？」

瑠璃の問い掛けに、皐月は聞き返した。

「わたしはずっとこの六年間、皐月の両親の行方を捜しているんですよ？　それはつまり！　転落があったことや、動転した皐月が原因だったとしても、それは本人しか知りえない！　皐月がわたしにその事を話していない以上、その事を知る術はないんですよ？」

その言葉に皐月と大宮巡査は瑠璃を見た。

「それに、わたしはずっとテントの近くで、煙々羅の報告を待っていました。あなたが出ていったのには知っていましたが、話しかけてなんていませんよ？」

「それじゃ一体？」

大宮巡査がそういうや、瑠璃はハッとした表情を浮かべた。

それと同時に手を上に翳すや、何もない空間から裂け目が現れ、

そこから浄玻璃の鏡を取り出した。

浄玻璃鏡には、死者が生前でどのような生き方をしてきたのかを記した映像を映し出す役割を持っている。

瑠璃は神経を集中させ、皐月たちとキャンプに行ったさいの映像を映し出そうとしたが、鏡の表面には何も映ろうとしない。

「――してやられた！」

瑠璃はその場に跪き、悔しそうな表情を浮かべながら蹲った。

「一体どうしたんですか？」

皐月が瑠璃に近付こうとした時だった。

瑠璃は皐月を見やるや、何かを感じ取る。

『大黒天……　あなたは皐月の心が乱れた事により、その力を暴走させてしまった』

瑠璃はキッと表情を変えるや、皐月の額に自分の額をつけた。

「え、閻魔さま？」

「心を落ち着かせなさい。犯人の狙いはあなたたち姉妹でしょうから」

「――私を？」

戸惑っている皐月を無視するかのように、瑠璃は皐月の脳裏に話しかける。

「皐月……　もしも、あなたの力が及ばなくなった時『オン・カカカビ・サンマエイ・ソワカ』と心の中で呟きなさい」

そういうや、瑠璃はゆっくりと顔を離していく。

「この事件が無事に解決したら、美味しい料理をご馳走しますよ」

瑠璃はそういうや、皐月の背中を押した。

皐月は一度振り返ったが、大宮巡査が笑顔を見せると。頷き、神

社へと戻っていった。

「本来なら皐月の守護神である大黒天の真言（しんごん）は『オン・マカキャラヤ・ソワカ』なのですが、まだ彼女は未熟ですし、大黒天の力を十二分に発揮出来ないでしょうね」

瑠璃は大宮巡査にそう話す。

真言とは仏教の呪文を意味し、仏それぞれに異なったご利益を意味している。

皐月の守護神である大黒天にも真言はあるが、その力を十二分に発揮できないと判断し、瑠璃はあえて、自分の真言を教えた。

「少なくとも……　私の力は濃く享（う）けついてますけど」

瑠璃はそう言うや、もう一度浄玻璃鏡にキャンプをしていた時の映像を映し出そうとしたが、全くといっていいほどに何も映らなかった。

『虚空蔵菩薩が何を考えているのかはわかりませんが。私たち仏や神は、人々に畏怖されると同時に、崇められる存在であり続けなければいけない。なのに虚空蔵菩薩がやっていることはただ恐怖に陥れようとしているだけ』

瑠璃はそう考えながら、ゆっくりと深呼吸をした。

漆・絵（前書き）

タイトルの意味を説明したいですが、今後の展開におけるネタバレになりますので、伏せさせていただきます。

皐月と遊火が神社に戻った頃には、外は暁で輝いていた。時間は気付けば午前四時である。

「爺様怒ってるだろうなぁ。もしかしたら昨夜のビンタじゃすまないかも」

「大丈夫ですよ。弥生さまや葉月さまが何とかしてくださるでしょうし？」

遊火が励ますように言う。「そうだといいんだけどね」と皐月は苦笑いを浮かべた。

「ところで、闇魔さまから何を耳打ちされていたんですか？」

「んっ？　ああ……　なんか呪文みたいだったけど、私が妖怪と対峙して、敵（かな）わないと思ったときに使いなさいって。一種の切り札みたいなものじゃないの？」

皐月はそう言いながら、遊火を見た。

皐月は気持ちに余裕が出来た事もあり、遊火の姿がしっかりと見えていた。

その姿は十二、三の少女で、スラッと腰まで伸びた黒色の長髪。前髪は切り揃えており、頭にはリボンを施している。服装はフリルのついたミニ浴衣といったところである。

「それにしても、こうやって見ると、姉さんが遊火で遊んでたのがわかるわ」

その言葉に遊火は首を傾げる。

「弥生姉さんがゴスロリ趣味なのは知ってるでしょ？　あれ、原因は私と葉月なのよ。父さんと母さんがいなくなって、爺様が男手一つで育ててくれているけど、さすがに服だけはね。それでよく姉さ

んが服の綻びとかを裁縫で直してくれていたから、趣味はその延長線」
「あぁなるほど」と遊火は理解する。
それにしても、それがどうしてゴスロリに繋がったんだろうかと、二人にとってはそちらの方が不思議でしかたがなかった。
「そう云えば、皐月さまってスカート履かないんですよね？　学校の制服以外」
「布が引っ掛かって、動き難いのよ。まぁ退治の時は巫女装束着るけど」
そう話しながら、神社の前に来た時だった。
携帯が鳴り、皐月はそれに出る。
「もしもし……　あ、弥生姉さん？」
電話の相手は弥生であった。
『大宮巡査どうだった？』
「うん。何とか一命を取り留めたって」
皐月がそう言うや、電話越しから葉月の嬉しそうな声を出している気配を皐月は感じた。
耳が不自由なため、電話をしている相手の声しか聞き取れないが、大宮巡査が無事だという事がわかって嬉しそうな表情をしていたのが見えていなくても感じ取れたのだ。
『皐月、このまま本堂で稽古したら……　丁度いい相手もいるし』
「それって、誰？」
そう尋ねたが、弥生は着いてからのお楽しみと言って電話を切った。
一体何のことだろうと、皐月と遊火は互いの顔を見ながら、首を

傾げていた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

皐月と遊火が神社に戻り、拓蔵に見つからないよう本堂に入ると、そこには海雪が正座していた。その右側には大鎌が横たわっている。

「――おばあさん？」

皐月が小さく声をかける。

「皐月、さっさと竹刀を取って。これからあんたに稽古つけてあげるから」

海雪にそういわれるが、皐月は何のことだかさっぱりである。

「精神の乱れはそのまま力に反映される。精神を安定させる事はもっとも重要な事である」

突然海雪は鎌の長柄を左手に取り、鎌を振り払った。

すると、風の刃が皐月に向かっていく。

間一髪避けた皐月は体勢を整える。

「ちょ、ちょっといきなり！」

「凍雨（とうう）っ！」

皐月の体に当たるか当たらないかといった場所に重たいものが落ちた音が本堂に響き渡った。

皐月の両足の間に冷たい氷となった鎌の刃が床に沈んでいた。

「ちょっと、私はまだやるなんて！」

皐月がそう叫ぶや、海雪は凍りついた刃を振り払い、氷を割るが、氷は落ちるどころか、その場に留まっている。

「氷雨（ひさめ）っ！」

海雪が叫ぶと同時に砕け散った氷が本堂の天井に激しく浮かび上

がり、その場をグルグルと回転している。

「皐月さま？」

「遊火、あんたは弥生姉さんたちのところに戻って！　あの技出すってことは、遊びじゃないっていってるようなものだから」

皐月は竹刀を手に取るや、

「吾神殿に祭られし大黒の業よ！　今ばかり我に剛の許しを！」

そう叫ぶや、手に持った竹刀は真剣へと変貌する。

「我流一刀・雷電」

「不遺雨（やらずのあめ）っ！」

皐月は稲妻を解き放すと同時に海雪の上空で漂っていた氷の粒は一斉に降り注いだ。

そのふたつがぶつかり合い、激しい衝撃音と眩しい光が二人を包んだ。

「我流一刀・松風」

怯むことなく、皐月は刀を大きく振りかざし、風の刃を海雪に放った。

「えっ？」

「相手をよく見ること。目の前にいるからって、それが真実とは限らない」

うしろから海雪の声が聞こえ、皐月は振り返り、切りかかった。

――が何の反応もなく、暖簾に腕押しと同様の感触しかなかった。

「無闇矢鱈に刀を降り続けても駄目。一点に集中して！」

海雪は大鎌を皐月に向けて切りかかる。間一髪それを避けた皐月は、チャンスといわんばかりに海雪に切りかかった。

「っ……！　やっとあたった」

海雪の服が切れ、大らかな胸の谷間が露になる。

「これくらいで喜ばないでよ？」
海雪は大鎌の柄を片手に持ち、自分の上空で激しい音を鳴らしながら振り回しはじめた。
「本当はこっちも時間がないから、粗治療だけど……」
――オン　ソラソバティエイ　ソワカ――
海雪がそう呟くや、皐月は顔を歪めた。
「な、なに？　この感じ……　妖怪？　違う……」
皐月は片手で持っていた刀を両手に持ち直し、構える。
「うわあああああああああああああああああああっ！！」
皐月は声を張り上げ、海雪に切りかかったが、
「ａｄａｇｉｏ　ｔｒａｎｑｕｉｌｌｏ　ｓｔｅｐ　ｒｈｙｔｈｍ」
海雪は緩やかに皐月の切っ先を避ける。
「ｌｅｇｇｅｒｏ　ｐｉｚｚｉｃａｔｏ」
そう告げるや、海雪は回し蹴りをし、皐月を蹴り飛ばす。背中から壁にぶつかり、皐月はズルズルと凭れ倒れる。
「はぁ……　はぁ……」
「どうしたの？　神様の力を使ってその程度？　ほら、今が絶好のチャンスなのよ？　私は足しか使えないんだから……」
皐月はゆっくりと立ち上がり、体勢を整えながら、海雪をキッと睨みつけた。
「その割には全然余裕って感じがするんだけど？」
「そういう文句は勝ってから言いなさいよ？」
海雪はそういうや、周りの大気を自分の中心に集め始めた。
「ちょ、ちょっと！　そんなことしたら、本堂どころか、ここら一

帯ぶっ壊れるわよ？」
「だったら、それを食い止めなさい！　闇魔さまから新しい力もらったんでしょ？」
海雪がそういうや、皐月は瑠璃から教えてもらった言葉を思い出していた。

――オン・カカカビ・サンマエイ・ソワカ――

皐月はそう頭の中で呟くが何も起きなかった。
それどころか、大黒天の力が消え、手に持っていた刀は元の竹刀に戻っていた。
「ど、どういうこと？」
「真言はね？　その神の力やご利益を得るために使う呪文なの。生半可な願いじゃ、神仏は答えてはくれない」
海雪は冷たい表情でそう言い放った。
「今、私を倒さなければ、ここら一帯が瓦礫の町になるわよ？」
海雪がそう叫ぶと、皐月はキッと睨みつけると同時に、
「そんなことさせない！　それだけは絶対させない！」
皐月は姿勢を正し、竹刀を左手に持ち構えた。

――オン・カカカビ・サンマエイ・ソワカ――

皐月はそう叫ぶや、急に風が止まり、振り回していた鎌はゆっくりと止まりかけていく。
「くっ！　Ｐｉｕ　ｍｏｓｓｏ　Ｐｒｅｓｔｏ」
海雪は再び鎌を振り回すが、その速さは先ほどのものとは比べ物にならないほどであった。

（しまったっ！　皐月がまだ力のコントロールが未熟だから、何が出てくるのか、本人もわかってない。だけど私からしてみたら余計

なご利益が出てきたんだ）

海雪がそう脳裏で悟り、後悔する。

「もらったぁっ！」

皐月は竹刀のまま、海雪に切りかかる。

「くっ！　霧雨っ！」

海雪は姿を霞め、切っ先を避けた。しかし、何時の間にか皐月は海雪の頭上から切りかかる体勢をとっていた。

「Ｐｒｅｓｔｏ　ｓｔｅｐ　ｒｈｙｔｈｍ！！」

海雪は急速にうしろに退避するが、皐月はそのスピードに追いつき始める。

「はぁあああああああああああああああああっ！！」

皐月が声を張り上げ、竹刀を突いた。

轟音が本堂にて響き渡り、海雪は壁に凭れかかる。皐月の突いた竹刀の先は、本堂の壁に突き刺さっている。

それが海雪の顔をギリギリで逸れており、下手をすれば頭を粉々にされていたところである。

海雪はそれに気付くや、唖然とした表情でその場にへたれこむ。

それと同時に隣りで皐月が倒れたのがわかるや、海雪は少し深呼吸をした。

（閻魔さまが自分の真言を教えようとしてたのは知ってたけど、ご利益が多すぎるのよ）

海雪は溜息を吐いたように愚痴を零した。

真言とは、神仏の真名（まな）を意味し、密教成立以前から用（もち）いられており、古代インドから効能がある呪文として重視されてきた。

真言を唱えることで、発願を仏に直接働きかけることができると

されている。
先ほど海雪が唱えた真言は、弁才天のもので、弁才は芸能の神ともされていることから、海雪の技はその時だけ、音楽用語と同じものとなっている。

皐月が唱えた真言は地蔵菩薩のもので、そのご利益は二十八種利益と七種利益され、異常なまでにそのご利益は多い。
圧倒していた海雪を悪感させるほどの動きを見せたのは『増長本力』というご利益で、本来持っている力を増幅させるというものなのだが……
「力がコントロール出来てないって云った感じね。譬えるなら、三輪車にエンジンモーター付けたって感じかしら。本当にここぞという時にしか使えない諸刃の剣じゃない。体力の消耗も激しいみたいだし、ちょっと考え物かもしれないわね」
海雪は呟きながら、皐月を起こそうとした時だった。

「あぁがぁっ？」
海雪は突然『首を上から縄で吊るされる』ような苦しみを感じた。
「だ、誰？」
海雪が振り向き様そう叫ぶや、
「ほうほう？　その子かい？　どうしてこんなところでくたばってるんかねぇ？　もしかして、まだつかまっとらんとか？　いやいや、人を殺すほどのことをしたのが、のうのうと逃げれるとは思えんがなぁ」
老人は顎鬚を摩りながら、ニヤニヤと薄気味悪い笑みを浮かべながら言った。

「あんた、確かこの前のキャンプ場にいた」
海雪は唖然とし、思い出したと同時に、大鎌を構えなおした。
「いったい何の用？　返答次第ではたたっ切るわよ？」

「ほう？　わしに歯向かうか？　お前が従っている十王よりも上の存在であるわしに」
「上だろうが下だろうが！　理不尽な理由で人を殺しちゃいけないでしょうが！」
海雪は大鎌を振り上げ、老人に切りかかったが、
「やれやれ、なにも利益がないというに」
老人は指を弾いた。それと同時に鎌が落ちる音が響き渡った。

「あがぁあああああああっ！！」
床に倒れこんだ海雪は悲鳴を挙げながらのた打ち回っている。
大鎌を持っていた左手が存在しておらず、大鎌はその場に転がり落ちている。
「さてと、邪魔者はおらんし、さっさとこれを壊す事にしようかのう？」
老人が気を失っている皐月に近付こうとしたときだった。

「好い加減にしなさいよ。虚空蔵菩薩っ！」
冷たい空気が本堂に漂い、老人――虚空蔵菩薩は声のした方へと向くや、歪んだ笑みを浮かべた。
「閻魔さま？」
海雪は声をかけるや、その風貌にゾッとした。

瑠璃の容姿は普段、三姉妹たちの前に現れるときと同じ、葉月と同い年ほどの容姿であった。
しかし、その形相は禍々しく、般若のようであった。

「あなたの目的は、私への戒めではないのですか？」
瑠璃はゆっくりとした歩みで虚空蔵菩薩に近付く。
「ははははっ！　どうじゃろうねぇ？」
「私たち神仏は、時に畏怖され、崇められる存在でなければいけな

い。たとえあなたと私が対なるものだったとしても、どちらを信仰するかは人が決めること！　私たちがどうこうと決めることではない！」

瑠璃がそう言うや虚空蔵菩薩は指を弾いた。

「残念ながら、私は権化状態ではないので、あなたの持っている記憶を殺す力は意味がありませんよ」

瑠璃がそう告げると、虚空蔵菩薩は焦るどころか、想定済みといわんばかりに溜め息を吐いた。

「そうかい、そうかい。今回は諦めるがなぁ……」

虚空蔵菩薩はそういうや、海雪を見やった。

「あんた……『こっちにいたときも地獄』じゃったのに、どうしてあの二人の監視なんてしとるんじゃ？」

虚空菩薩は海雪にそう訊ねる。その海雪は表情を暗くしていた。

「特に誰にも必要とされておらず、ただの慰めものでしかなかったお前が、どうして人の心を持ったまま妖怪になってるんじゃ？」

虚空蔵菩薩は首を傾げながら質問を続けた。

「泣いてくれたからよ……！」

海雪はそう呟くや、右手で大鎌の柄を掴み、虚空像菩薩に切りかかった。

「くぅっ？」

突然の事で油断した虚空蔵菩薩は避け切れず、腹部を切った。そこからダラダラと何かが流れている。

「誰も……実の母親ですら、私をただの邪魔者だってしか思っていなかった！　何回も何回も父親をコロコロと変えて！　そのせいで私はその下衆共の慰みものにされてきた」

海雪の周りを漂っている大気が狂ったように荒れ、本堂の中で渦巻いている

「海雪っ！　それを思い出すのはやめなさい！」

瑠璃は海雪の話を止めようとしたが、あまりにも強い風で、近付く事が出来なかった。

「でも、何もそんなことなんて知らない皐月と信乃は、そんな私を友達として、人として一緒にいてくれた！　私が間違った事をしたとき、本気になって泣いてくれた！　私を思って！　二人は本気で泣いてくれた！」

そう叫ぶ海雪の目からは大粒の涙が溢れていた。

「だから私は、その恩返しに二人を見守っているの！　二人が幸せであっても、そうじゃなくても、私みたいに馬鹿としか言いようのない道を選んでほしくなんてないから」

海雪はそう告げるや、ゆっくりと跪いた。

彼女の周りで渦巻いていた大気は、次第に落ち着きを取り戻していく。

「――海雪？」

瑠璃が声をかけるが、海雪は反応しなかった。

「心配するでない。真言を使っておったからな。余計に力を使って、こっちで体を維持できる力を使い果たしただけじゃろうよ」

虚空蔵菩薩がそういうや、瑠璃は睨みつけた。

「わからんなぁ……　ちっともわからん。どうして皆こんな塵芥に手を貸そうとするのか」

「人も、神も、仏も、誰かが思うことで繋がりが出来る。人に思われなくなり、衰退していった神と仏は何の力を持たない。それは人とて同じ事」

「それがわからなんだ。自分の力のみで生きていける人間もおろう

に……」

虚空蔵菩薩がそう言うや、瑠璃はその小さな体からは想像できないほどの力で、虚空蔵菩薩を蹴り飛ばした。虚空蔵菩薩は壁に背を当て、ズルズルと崩れ落ちていく。

「何を目的にしているのかはわかりませんが、今日のところは引き下がった方がいいんじゃないですかね？」

瑠璃は地面にてのひらを乗せ、虚空蔵菩薩を睨みつけた。

「今日は厄日ですねぇ」

虚空蔵菩薩は笑みを浮かべるや、スーと姿を消した。

「皐月は直に目を覚ますでしょうけど、問題は海雪のほうね。思い出したくもないことを思い出させて」

瑠璃は顔を歪めたが、すぐに元の顔に戻し、海雪を抱えるや、姿を消した。

その日の昼頃、稲妻神社の境内を掃除していた巫女が、本堂の裏側にある庭園の掃除をしようと、そこを見るや悲鳴を挙げた。

その異常なまでに育った草が、あたり一面に蔓延（はびこ）っていた。

漆・綛（後書き）

海雪が真言を使った後に放っている技名は全て音楽関係になっています。
速度だけでも結構種類があるのです。

捌・煙草

弥生と葉月がアリバイを作ってくれたお陰で、皐月は拓蔵から折檻されることはなかった。

昼になるくらいの午前十一時、自分の部屋で横になっていた皐月は、ふと何かを思い出し、遊火を呼んだ。

「何のご用ですか？」と遊火が尋ねる。

「確か遊火って、爺様とは、ある事件で助けてもらったのよね？」

「えっ？　あ、はい。確かに私は七年前、拓蔵さまから助けてもらった礼がありますから」

遊火がそう言うや、皐月は体を起こし、

「そのときのこと話してくれない？　漠然としか思い出せないから」

そう云われ、遊火は説明した。

今から七年前、稲妻神社の近くに小さなお寺があった。

遊火はそのお寺近くによく浮遊しており、そこで一人の小坊主を見かけたという。

その小坊主、名を長谷部与一（はせべよいち）といい、大変優秀で、住職の命はよく聞くし、覚えもよかった。

遊火はそんな与一が墓場の掃除をしている時、よく話を聞いていたのだった。与一は遊火が妖怪である事には気付いていなかったという。

修行を積めば見えるという訳ではないが、与一はその資質があったのだと遊火は思ったと説明する。

そんな不思議な関係が続いた、ある冷たい冬の日であった。

与一が暮らしていたお寺で火災が置き、寺は全焼した。

火元の原因は台所にあり、火災があったと思われる時間、与一が台所で調理をしていたと、住職の妻――緋野重摩（ひのえま）が証言したという。

当然の事ながら、与一は無実だと訴えるが、誰一人、重摩が嘘をついていること事態に疑問を持たなかった。というよりかは、持とうとされしなかったのだ。

重摩は器量よく、気配りも出来て、与一を除いた誰一人、本当に彼女を疑う人間はいなかった。火災が起きた時間、疑われていた与一が買い物に出かけていたのを遊火は知っていたのだが、それを証言する術はない。

だからこそ、与一を励まし、必ず無実を証明してあげると約束したという。

拓蔵と初めて会ったのも、その事件がきっかけであった。

通報を受けた警察の中に拓蔵がおり、住職たちから事情聴取をし、現場を見るや、台所に焼死体が発見される。

調べたところ、火災の原因はガス爆発によるもので、その引き金となったのは、焼死体の男がその場でタバコを吸った事だとわかった。それとなにやら変な臭いがしたとも言っていたという。

住職たちは発見された死体が、寺で修行していた坊主である事を知り、驚きを隠せないでいたのと同時に、その坊主がタバコを吸っていたことを知らなかったという。

重摩からその事を尋ねると、坊主は台所でタバコを隠れて吸っていたことを知っていたと同時に、あろうことか重摩と不倫関係にあったという。

「つまり、遊火が見えていた与一は、よく厨房に出入りしていた。それを重摩が、アリバイ工作に利用したってこと？　でも、どうし

てそんなことする必要があるのよ？」

「後々拓蔵さまから聞きましたが、まず事件には目撃証言などがが必要になりますよね？　その証言に信憑性があればあるほど、その証言は有効になります。ですが、今回厨房を誰が出入りしていたのかではなく、それを誰が見ていたのかという点にあるんだそうです」

遊火の言葉に、皐月は首を傾げる。

「一緒じゃないの？」

「私も最初そう思いましたが、厨房の入口付近には誰もいなかったそうなんです。むしろ火災があった時間、確かに寺に人はいましたが、何人かは本堂で修行をしていたということらしいんですよ。妻はその時母屋にいたと説明してましたし、私が見えていた与一は買い物に行っていた」

「それって、言い返せば『亡くなった坊主以外、火を点けることはできない』ってことじゃない」

皐月はそういうが、少しばかり疑問が出来た。

「でも、火災があったとき、本堂で修行をしていたのよね？　それって自由参加？」

「私が見えていた与一は、買い物に行っていましたし、私もそれについていってましたから、詳しくは」

遊火は表情を曇らせる。

「いや、遊火が悪いわけじゃないのよ。ガス爆発ってことは、当然部屋の中にガスがもれていないと起きないでしょ？　だけど、タバコを吸っていたのなら、換気扇を回すはすじゃない。つまり、原因がガス爆発によるものだったとしても、一番大きく燃えているのは焼死体と換気扇付近だと思うんだけど？」

皐月がそう訊ねると、遊火は少しばかり思い出すように頭を抱えた。

「それにどうして与一を買い物に行かせたかよ。自分に得のあるア

リバイ工作なら、一緒に行動していたってのが最善じゃない？　だけど、買い物に行かせたってことは、その店か家に行っていたというアリバイが出来るじゃない？」

「言われてみれば確かに」と遊火は感心する。

「それにタバコなんて、隠れて吸うものでもないんだけどね」

皐月がそういうや、遊火はキョトンとした表情で聞き返した。

「ええ。信乃のお爺さんが住職なのに、凄いヘビースモーカーだったからね。四年前、ユズが襲われた事件が起きる前までは、よく遊びに行ってたから、今でも覚えてるのよ」

仏教では『不飲酒戒』という教えがあるが、信乃の祖父は仏教の人間でありながら、拓蔵に負けず劣らずの酒豪である。もちろん修行中は一切口にはしていない。

また仏教において、煙草は禁じられていない。

その理由として、お釈迦様が存在していたとされていた頃、インドには煙草という概念がなかったためという説がある。

――が、当然未成年による飲酒喫煙は法律で禁止されている。遊火の話では、亡くなった坊主は二十歳を過ぎており、法によって罰せられる事はまずない。

話を『不飲酒戒』に戻すが、この戒は、お酒だけではなく、麻薬など、人の精神を錯乱させるもの全般に適応されるという説がある。

この説でも、煙草にお酒や麻薬ほどの精神を錯乱させる効果があるのかといえば難しいところだが、結局のところ、酒も煙草も程度に楽しむものである。

「重摩が犯人。亡くなった坊主は煙草を吸うためにライターに火を点けた。それがきっかけとなって爆発が起きた……　そう爺様は考

えての推理だったんでしょうね」
「恐らくそうだと思います。ただ、その女性は本当に素敵な人だったので、最初、私もその人が犯人だとは思っていませんでしたけど」
「それって、どういうこと？」
話を思い出した皐月は、重摩を誰一人疑わなかったことは、その人物の人柄によるものだと思い始めた。

「爺様は重摩をただ殺人容疑として連行したんじゃなくて、何かをあぶりだそうとしていた。ガスの元栓は台所に入れる人間全員に出来ることだし、殺された坊主が隠れて煙草を吸っていたことなんて、知ってる人間がいても不思議じゃない」
皐月は自分の知識の奥底にある何かを頭の中で手探りする。

事件が起きた日、与一は買い物に行っていたが、その目撃証言があるため、アリバイはある。
そして連行された重摩には人徳というアリバイしかなかった。

「結局はガスが漏れての火災で、坊主を狙っての事なのかはわからないそうです」
「つまりそのことに関して、重摩は黙秘してるってこと？」
遊火は答えるように頷く。
「はい。焼死体には殺傷はなかったそうですから」
それじゃ何を理由に殺されたのかは結局闇の中である。

そもそも拓蔵は当時公安部に所属しており、事件は刑事部の仕事におけるため、それ以上は関わろうとはしなかった。

「それにしても、どうして昔の話なんて聞こうと思ったんですか？」
遊火がそう尋ねると、

「いや、遊火は爺さまに助けてもらったから私たちのところにいるのよね？　でも話を聞いてると」
「誰も見えなくなったんです。私のことが……」
「誰も？」
「皐月さまは私がそこにいると信じれば、必ず答えてくれると葉月さまから云われて、見えるようになったんですよね。その逆もまた然りなんです」
遊火はそれ以上そのことに関しては何も云わなかったが、皐月には痛いほどわかった。

与一が何らかの原因で、遊火が見えなくなり、遊火は居場所が無くなっていたのだ。
以前、沢口兄弟によって助けてもらっていた窮奇（かまいたち）に共通するものがあった。
どこにでもいける妖怪や幽霊は、逆に言えば、居場所を捜し求めているともいえる。

「ただ、拓蔵さまと一緒に女性がいたんですけど、それが誰なのか」
遊火は思い出すように云うが、それ以上は思い出せないでいた。

「皐月、起きてる？　昼飯出来たんだけど？」
弥生が襖越しから声をかける。気付けば午後十二時を過ぎていた。

――皐月と遊火は話を切り上げ、居間へと下りた。

捌・煙草（後書き）

この話は今回の話に重要な部分となります。

玖・眼鏡

拓蔵から連絡を受けた阿弥陀警部は、急ぎ稲妻神社へとやってきた。
そして居間へと案内され、今回の事件について説明した。

「事件の詳細は以上です。何か質問はありますか？」
「事件も何も、放火殺人じゃないんですか？」
弥生がそう尋ねると、阿弥陀警部は首を横に振った。
「そう断言できれば苦労はしないんですけどね。その発火した原因がわからんわけですよ」
阿弥陀警部は葉月を見やる。

「一応、遺体の写真は持ってきてますけど、どうします？」
「やらせてください」
葉月がはっきりとそう言うと、阿弥陀警部は少しばかり表情を歪ませたが、写真を葉月に見せた。

葉月は一、二度ほど深呼吸をし、写真に手を翳そうとした時だった。
「っ！？」
まるで静電気に当たったかのように、葉月は写真から指を外した。
その余りにも不可解な状況に、葉月は面食らった表情を浮かべる。
もう一度写真に手を翳したが、静電気を食らったように手を弾いてしまう。
「……っ？」
「葉月、どうしたの？」
皐月がそう尋ねると、葉月は皆を見ながら、

「写真に触れない……　これじゃ声が聴けない」
葉月は少し表情を曇らせる。

「逆に考えたら、葉月が触れないんじゃなく、触れられないように呪(まじな)いがかかっていると考えた方がいいかもしれんな。しかもかなり強力な――」
拓蔵がそう言うや、葉月はもう一度写真に触れようとしたが、
「っ！　あつっ！」
そう叫ぶや、写真が一瞬にして燃え、塵(チリ)ひとつなく消えた。

「二重に呪いをかけておったようじゃな」
「ごめんなさい」
「いやいや、葉月さんのせいじゃないですよ。むしろこれで犯人が妖怪だってことがわかったじゃないですか？」
阿弥陀警部がそう云うと、拓蔵は少しばかり怪訝な表情を浮かべる。

「いや、これは人の仕業と考えた方がいいかもしれんな。呪いを使えるということは、それだけ思考が高いという事じゃ。ただの妖怪がこのような業が使えると思えん」
拓蔵の言葉に三姉妹と阿弥陀警部は首を傾げる。
「ですが、今回の事件はまったく火元がわからんわけですよ。これを他殺と見るにはなんとも」
「情報不足ってことですか？」
皐月がそう尋ねると、阿弥陀警部は頷く。
「今回四件ほど火災事件がありましてね。先の二件はリビングが小火騒ぎになり、三件目は台所だけが全焼。そしてこの事件ですよ」
三件目の話を聞いていた時、皐月は遊火が話していた昔話を思い出す。

「しかもその三件、発火理由もまだわからん始末なわけですよ」
「一応説明してくれんかのう。何かわかるかもしれんし」
「ええ。一応共通して、窓際に何かを置いていた事なんですよね」
「――窓際？」
「一件目はリビングに金魚鉢。二件目は同じくリビングなんですが、こちらは水晶玉。これはどうやら家の主が風水をしていたそうなんですよ。そして三件目は水の入ったペットボトル」
「確かに物が置いてあったっていうだけなら共通点になるわね？」
弥生がそう云うと、皐月は何かを思い出したような表情を浮かべる。

「あの、事件があった日って、ここ最近だと一番暑かった日でしたよね？」
「ええ。まぁ、確か三十五度以上はあったと思いますよ」
阿弥陀警部が思い出すように言った。
「葉月、確かその日、学校から帰ってきて、境内で何かしてなかった？　ほら虫眼鏡出して」
そう云われ、葉月は少しばかり考える。
「うん。学校の実験で、太陽の光を虫眼鏡で……」
「太陽光を集めるってやつ？」
弥生がそう尋ねると、葉月は頷く。

「ありゃ？　なんか似たような事件を聞いたことがあるような――」
拓蔵は腕を組み、う～んと悩む。
「でも、それがどうかしたんですかな？」
阿弥陀警部が皐月に尋ねる。
「窓際に水晶玉。水の入った金魚鉢やペットボトルが置かれていたんですよね。それって火事になる危険があるって学校の先生に教えてもらって、確か光を吸収するから」
「あっ！！」

皐月が言い切るより先に、拓蔵が何かを思い出し、声を荒げた。

「爺様、どうかしたの？」

「思い出したわい。それ、七年前に起きた火事と似とるんじゃよ」

拓蔵がそう言うと、三姉妹と阿弥陀警部は首を傾げた。

「葉月、虫眼鏡は何レンズかわかるか？」

「えっと、確か凸レンズ。虫眼鏡が光を集めるのはそれが理由だって、先生から教えてもらった」

「水の入った金魚鉢やペットボトルはそれと同じになって、光を吸収しやすいんじゃよ。当てられた場所が熱を持って、煙が出る。いつしか火となっていくのを、収斂火災と言うんじゃよ。水晶玉は元から光を吸収しやすいからな」

＞ｉ２７７７５―３２４８＜

「つまり、火災はそれによるものだと？」

「まぁ、そうなるんじゃろうけど、収斂火災は暑い日というより、太陽が沈む夕暮れ時や、冬の寒い時期のほうが起きやすいんじゃがなぁ」

拓蔵は少しばかり顔を歪める。

「爺様、遊火が昔いたお寺で起きた事件と何か関係があるんじゃないの？」

「まぁ、あれは今考えれば、確かに同じ収斂火災だったとはいえ、ガス爆発じゃからなぁ、ただ、どうも運が悪すぎるんじゃよ」

その言葉に皐月は首を傾げる。

「ガス爆発はガスや、気化したガソリンがライターの火に引火するもんじゃろ？」

「うん。遊火の話だと、それが原因だって」

「それをどうして、あの小坊主が気付かんかったんじゃろうな？」
そう云われ、皐月とその上を浮遊していた遊火は驚いた表情を浮かべた。

「ガスとガソリンは無臭ではないからな。必ず違和感を持つはずじゃろ？　当然そんなところで煙草なんぞ吸うてみろ。ライターの火花だけでドカーンじゃろうが」
言われていれば確かにと皐月は思った。
「しかも、遊火が見えていた小坊主に話を聞けば、その寺なぁ、台所に水の入ったペットボトルを置いておったんじゃよ。花を一輪ほど入れたな」
「それじゃ火災の原因って……」
皐月は咄嗟に遊火を見やった。
「いや、花を置いたのは、他ならぬ住職の妻だったんじゃよ。しかも、燃え始めたとき、勝手口の鍵は閉まっておって、廊下から台所に入るには戸を開けないかんのじゃがな、閂が刺さっておった」
「それじゃ火事に見せかけた殺人ってこと？」
皐月がそう尋ねると、拓蔵は少し考えてから頷いた。

「でも、共通して窓に何かを置くって、風水か何かかしらね？」
「そう云えば、もうひとつ共通したものがあったんですよ。家の住人がある占い師から窓際に水がはいったものや水晶玉を置くと運気が上がるって云われたそうなんですよ」
それを聞くや、三姉妹と拓蔵は呆れた表情を浮かべる。
これは別に阿弥陀警部に対してのものではなく、被害者に対してである。

「要するに、素人を騙していたってことだけど、それを狙っていたとは考え難いですね」
「阿弥陀警部？　その占い師、少し事情聴取出来んかのう？」

「まぁ、やってみます。火災が起きた原因もわかったわけですが、やはり焼死体の原因もそれなんでしょうかね？」
阿弥陀警部がそう尋ねると、拓蔵は難しい顔を浮かべる。
「だといいんじゃがなぁ……」
その言葉に三姉妹と阿弥陀警部は首を傾げた。

――翌日、阿弥陀警部は拓蔵から云われたとおり、事件があった家の人間に助言を与えたという占い師のところに来ていた。
占い師の店は商売繁盛、結構有名のようで、祝日という事もあってか、行列が出来ている。

「これ、終わるのって何時くらいなんでしょうかね？」
阿弥陀警部が呆れたように、隣にいる佐々木刑事に尋ねる。
「わしは占いなんぞ信じんほうじゃからなぁ？　まったく人に左右されて何が面白いんだが、神様仏様なんぞ云っとるがなぁ、結局やるのは己の力じゃろうよ？」
佐々木刑事はそう言いながら、煙草を一本吹かした。

『ははは、その頼られる仏様がここにいるんですけど。まぁ、私たち神仏は何をするわけでもないんですよね。ただ頼るのは何かに縋りたいからでしょうけど』
阿弥陀警部……いや、阿弥陀如来は苦笑いする。

夕方くらいになると、人も疎らになり、そろそろ店仕舞いだと判断するや、阿弥陀警部と佐々木刑事は占い師の店の裏側に回った。
店のドアから占い師が出てくるや、阿弥陀警部と佐々木刑事はそれに近付く。

「すみません。私警視庁の阿弥陀と申しましてね。ちょっとお尋ねしたいことがあるんですよ」
阿弥陀警部が警察手帳を見せ、占い師に話しかける。
「警察の人が何の御用でしょうか？」
「実は、先日四件ほど火災事故が起きましてね。その原因が収斂火災によるものなんですよ。――で話を聞くと、被害にあった家はあなたから占いの結果で、窓に水の入ったペットボトルやら水晶玉を置くようにと云われたそうなんですよね？」
阿弥陀警部がそう質問すると、占い師は
「ええ、確かに私はそういいました。ただ……」
「――ただ？」
「それもまた運命でしょう。占いとは本来相手に助言することですから。あの方たちには水と光が足りませんでしたからね。光を集めるという意味でしたまでのこと」
占い師が微笑するや、阿弥陀警部を一瞥する。
「その結果として、今回の収斂火災ですが、それは見通せなかったってわけですか？」
「私の占いが原因で火災が起きたのなら謝りましょう。ですが、それを断言できるとは思えませんが？」
占い師はもう一度阿弥陀警部を見る。
その表情は先ほどの微笑とは違う、どこか禍々しいものがあった。

「取りあえず、署までご同行願えませんかね？　あなたには色々と訊きたいこともありますから――　特に七年前の事件に関してをね」
阿弥陀警部は佐々木刑事の車に占い師を乗せる。
阿弥陀警部と佐々木刑事は、占い師が抵抗すると思っていたが、占い師は素直に車に乗った。

拾・色香

「拓蔵？」

部屋で考え事をしていた拓蔵に、瑠璃が声をかける。

「瑠璃さん。七年前の事件、覚えておるかの？」

「あの事件ですか？　人間がしたことと考えると、火災が大きかったことからガス爆発によるものと考えていましたが、やはりそうなる以前の問題ですよね？」

瑠璃は当時の事件を警察側として知っているからこそ、拓蔵が何に疑問を持っているのかがわかった。

「やはりガス爆発は無理があるやなぁ？　大体臭いでガスが漏れていたり、ガソリンの臭いがしとるはすじゃろうからな」

「それに焼死体の形状も不可解でしたしね。あれだけ燃えていたのに、死体は黒焦げどころか、皮が焼け爛れただけだった」

寺と一緒に燃えていたのならば、死体は黒焦げになっているはずである。

しかし、発見された焼死体は、まるで熱にあてられたかのように、焼け爛れていたのである。

それが今回の焼死体と似ていた事が、拓蔵にとって不可解だった。

「それに死因は全身火傷によるもの。火傷で済むわけがないじゃろうよ」

「それではあの時も、そして今回の事件も――妖怪の仕業？」

「葉月が霊視しようとした時、写真に弾かれておったからな、そう考えてもいいじゃろ」

しかし拓蔵はそれで納得いっているわけではなかった。

「阿弥陀くんから話を聞いたんじゃがなぁ、占い師に鑑定してもらったのは、その家の主人だったんじゃよ。占い師は結構美人らしくてなぁ、まぁいい女に騙されるのは、男の性じゃろうて」

それを聞くや、瑠璃は頬を膨らませ、拓蔵を睨みつけた。容姿からして可愛らしく見えるが、拓蔵の妻だけあって、嫉妬の怨が感じられなくもない。

「あの事件、結局は証拠不十分で、緋野重摩は逮捕されなかったんでしたね」

「しかも誤認逮捕ってことで、結構娘たちには辛い思いさせてしまいましたしね」

拓蔵と瑠璃は表情を暗くし、はぁっと溜め息を吐いた。

「拓蔵は緋野重摩が妖怪だという事に気付いて、そのようなことをした」

「ですが、やはり彼女が殺せた証拠はなかったですからね。結局あの事件は藪の中」

「芥川龍之介の小説でしたっけ？　結局真相は誰も知らない藪の中」

瑠璃はゆっくりと天井を仰いだ。

芥川龍之介の短編小説である『藪の中』は、若い盗人に弓も馬も何もかも奪われたあげく、藪の中で木に縛られ、妻が手込めにされる様子をただ見ていただけの情けない男の話である。

語り部は妻の気丈さと若い盗人の男気を褒め称えて、話を締め括っている。

この情けない男を殺し、殺人事件に仕立てたのが『藪の中』である。

この作品では、藪の中で起こった殺人事件を七人の証言者が証言、告白するという形式でなりたっている。

捕らえられた盗人、清水寺で懺悔する男の妻、巫女の口を借りて現れた男の霊のそれぞれの当事者三人の証言は、藪の中で盗人が男を木に縛り付けて男の目の前で女を手込めにしたことは一致しており説得力はあるのだが、男の死因についてそれぞれ、「偶然」「他殺」「自殺」と見事に食い違っており、結局どれが真相なのか、誰が犯人だったのかは全て有耶無耶のままになっている。という作品である。

今なおこの作品の真相が研究されているが、真実に行き着いたものはいない。

そのことから、事が不十分や有耶無耶というはっきりとしない物事を表した言葉として使用されている。

「まぁ、わかっていることとすれば、緋野重摩……飛縁魔（ひのえんま）は坊主と不倫関係だったことと、その色香に惑わされて、住職は己の身を焦がしたということなんじゃがな」

飛縁魔は外見は菩薩のように美しい女性でありながら、夜叉のように恐ろしく、この姿に魅入った男の心を迷わせて身を滅ぼし、家を失わせ、ついには命を失うと伝えられている。

今回の火災事件も、結局はそれによるものであった。

「ただひとついえることは、今の皐月や信乃が、飛縁魔に勝てるとは思えないことですね」

瑠璃は溜め息を吐く。皐月に自分の真言を伝え、そのご利益による力を与えたとしても、今の皐月では諸刃の剣であると、海雪から報されていた。

飛縁魔の名称は『火の閻魔』という。即ち『火炎地獄の裁判官』を意味しており、同じ閻魔の別称を持っている地蔵菩薩だったことから、瑠璃はその力を知っての判断である。

「今回も証拠不十分。火災原因も占い師から助言を受けたことを実行してのことだったとしても、それを立証する事はできない。阿弥陀警部に逮捕ではなく、事情聴取にしたのは、自分が犯した過ちを味あわせたくなかったからですか？」

瑠璃がそう訊ねると、拓蔵は少しばかり考えるや、答えるように頷いた。

「結局、今回も逃がしてしまったということですか……　しかも今回は飛縁魔がひとりで考えての事とは思えない」

瑠璃が発した言葉の意味を拓蔵は問う。

「事件が起きたのは、皐月が目の前で大宮巡査が襲われたことで暴走し、精神が不安定になってから然程経っていない時に起きた。それって余りにも偶然過ぎませんか？　まるでタイミングを見計らったように事件が起きている」

「それを知っておるのは、わしや弥生に葉月、瑠璃さんと脱衣婆以外だと、阿弥陀警部、佐々木刑事、湖西主任くらいじゃな」

拓蔵が言い切ると、瑠璃は険しい表情を浮かべた。

「いえ、今回の事件、裏で引いているものがいたとすれば、虚空蔵菩薩でしょうね。皐月を追い込んだのは虚空蔵菩薩でしたから。それに奴は六年前に起きた転落事故が皐月に原因があると云っていた」

その言葉に拓蔵は戸惑うが、結局のところ、転落事故も薮の中である。

しかしあの時、車を運転していた健介が見た車は、本当に『実在していたのか』。それは誰も知らないのだ。

瑠璃はこの六年間、五七日における地獄裁判出席、六道や賽の河原で弱い魂を救済していた最中、あの転落事故の真相を調べていたが、靄が罹ったかのようにわからないのだ。

四日後、阿弥陀警部から占い師は証拠不十分という理由から釈放されたとの連絡が入った。

留置期間は警察は四十八時間、検察側が二十四時間の計七十二時間――三日間とされている。

この時、勾留請求が行われ、裁判所がそれを認めれば、後十日は留置されるのだが、それが認められなかったのである。

拾壱・殺気

阿弥陀警部から占い師が釈放されたという連絡を受けた翌日。三姉妹は大宮巡査のお見舞いにと、警察病院にきていた。
弥生と葉月は、大宮巡査が意外にも元気だったことに驚きを隠せないでいる。

彼が助かったのが、彼の守護霊である彩奈の想いによるものもあるが、その大半は瑠璃の力によるものであったのだから。
その事を知らない弥生と葉月が驚くのも無理はない。

「阿弥陀警部の話だと、事件は火災に巻き込まれてのことで、殺人との関係性は薄く思っているそうだよ」
そう大宮巡査は話すが、誰一人それに納得していなかった。――もちろん、話した大宮巡査自身もである。

「それで、どうするんだい？　またこの事件みたいに奇怪な事件が起きるかもしれない」
「心配しなくても、私たちは闇魔さまから命を助けてもらった恩義がありますし、何よりこの力を必要とされているのなら……　それが利用されていようといまいとね」
大宮巡査は、以前弥生が云っていた事を思い出す。

『力を利用するのと、助けてもらうのは違いますよ？』

「今でもそう思ってるのかい？」
大宮巡査は弥生に尋ねる。弥生は何事かと思い首を傾げるが、自分の云った言葉に覚えがあり、頷く。
「まぁ、それもまたいいかなと思ってます。結局私たちのしてるこ

とって、妖怪退治というより、助けているって感じもしますしね」
執行人は妖怪を退治することが目的ではなく、妖怪に罪を償わせることが本来の役割である。

警察だって一緒だ。逮捕は人生を終わらせることではない。犯人に罪を償ってもらうことにある。
それが冤罪ならば、その証拠を見つけ、被害者の無実を晴らしてやるのもまた、警察の仕事であり、執行人の仕事でもある。

「それじゃ、夏休みも入ったことだし、毎日来てもいい？」
葉月が大宮巡査に尋ねる。
「別に構わないけど」
大宮巡査がそう答えると、葉月は笑みを浮かべる。皐月と弥生も同様であった。

「そうだ。三人とも、これ……」
大宮巡査は一枚の写真を皐月に渡した。
「こ、これって――お父さん？」
弥生が驚いたのも無理はない。写真は表彰台の一位に立っていたのは、三姉妹の父親である健介がまだ幼い皐月を抱きかかえている写真であった。
「昨日、阿弥陀警部にお願いしてね。僕の部屋から、君たちのお父さんが優勝したレースの映像が録画されたビデオテープを持ってきてもらって、鑑識課にお願いして印刷してもらったんだ」
皐月は写真をギュッと胸に抱き、「ありがとうございます」と涙を流しながら、大宮巡査に礼を言う。その目からは大粒の涙が零れていた。

その帰り、三姉妹は約束していたケーキバイキングを堪能し、家

路に着いていた時だった。
「今月の小遣い、すっからかん」と、皐月は財布の中身を確認しながら愚痴を零す。
「援助はしないわよ？」
弥生が冷たい口調で言う。「わかってる。二人に心配させてたからね。それに遊火にも」
皐月は頭上で浮上している遊火を見るや笑みを浮かべる。それを見ている弥生と葉月も。自然と笑みを浮かべた。

――ふと、誰かの視線を感じ、三姉妹は視線の先を一瞥する。そこには阿弥陀警部が云っていた、占い師の店である。
夏休みに入ってることもあって、平日とはいえ行列が出来ている。

「占いは当たるも八景、当たらぬも八景ってね」
皐月がそう云うや、葉月は頷く。
「そうね。それに先の見える人生なんて、初見で攻略本読んでるようなもんじゃない。わかんないところがあったら読むけど、でも基本的にはないほうが……」
弥生が笑いながら云うが、次第に表情は硬くなっていく。

「さっ、早く帰りましょ」
まるで何かに取り憑かれたかのように弥生がそう云うや、皐月と葉月もそれに同意する。
遊火はそんな三姉妹を見るや首を傾げ、後を追いかけていく。

――三姉妹の足並みは早く、何時しかそれは走りになっていた。

稲妻神社の近くに差し掛かると、三姉妹は荒い息を整える。
「な、なに……　なんなの？　今の殺気」
弥生はガタガタと肩を震わせ、嗚咽する。

「あんなの、今まで感じたことない」
葉月に至っては、顔を歪め、大粒の涙を流している。
「はぁ……　はぁ……」
皐月は息を整えるので精一杯だった。

彼女たちの様子は、まる火事が起き、煙の中を彷徨いながらも、漸く外に出て、新鮮な空気を吸っているといった感じである。

「ど、どうかしたんですか？」
遊火がそう尋ねると、三姉妹は信じられないといった表情で遊火を見やった。
「あんた！　あれだけ強い殺気こもった視線を向けられていたのに、何も感じなかったの？」
弥生がそう怒鳴るように訊くや、遊火はビクッとし、肩を窄める。
「やめて、弥生姉さん。あの殺気、ただの人間が持ってる怨念がこもった殺気じゃなかった」
皐月がそう云う。弥生自身もわかっていたこととはいえ、怒鳴らずにはいられなかった。
「わからないけど、人とは違う……　これだけは絶対いえる。あの殺気は『殺す』って、それだけの感情しか感じられなかった」
葉月は三姉妹の中でも一番霊感がある。だからこそ、あの殺気が特殊であると感じたのだ。

自分たちですら知らない力を持ったなにかがいることを、三姉妹は心のそこに恐怖する。
ふと皐月は空を眺める。夕日が沈みかかっていた。
その赫々とした風景が、まるで燃え盛る炎のように見えた。

拾壱・殺気（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。と同時にお疲れ様でした。これにて姦、第一部を終了します。

まだまだ回収し切れていない複線がありますが、それは第二部にて回収できればいいなと思ってます。引き続き、当作品をよろしくお願いします。

「あつい、アツい。暑い！」と、皐月はTシャツ一枚に、短パンというラフな格好で、扇風機の前に鎮座しながら、文句を述べる。
「るっさいわねぇ。そんなに暑いんなら、水風呂にでも入ればいいでしょうが？」
壁に凭れながら、裁縫をしている弥生がそう云うや、「蒸し暑い。乾涸びる」と、皐月は聞く耳を持たない。それを聞いて、弥生は呆れた表情でため息を吐いた。
「はづきぃ～、氷ない？　かき氷」
皐月が厨房にいる葉月に声をかける。「あるわけないでしょ？この前買ってきたの、殆どあんたが食べてたじゃない」
弥生が呆れた表情でそう聞き返した。

弥生はだらしなく猫背になっている皐月を見ながら、縁側の方に目を遣ると、
「あ、猫……」と口走るや、皐月はビクッと体を動かし、居間の隅っこへと避難した。
その表情は恐怖に震えているといってもいい。
「あ、ほんとだ。どっから入ってきたんだろ？」
厨房から麦茶を飲みながら出てきた葉月がそう言う。彼女の目線の先には、開けられた雨戸があり、そこから本堂と、庭園が見える。

縁側に白猫が上がりこんでおり、ニャァ～ッと鳴いた。
葉月が近付くと、猫は逃げる素振りを見せるどころか、ゆっくりと葉月に近付いていく。
「飼い猫かしらね。だいぶ人に懐いてる」
葉月は床にコップを置くと、中腰になり、猫を抱きあげながら、

「猫さん、どこから来たの？」と尋ねたが、猫が答えるはずもない。
「な、何でもいいから、早くどこかにやって」と、皐月はへっぴり腰になりながら言う。
「別に恐くないでしょ？」
弥生がそう云うや、葉月も同意するように頷いた。
「だいたい、あんた自身は猫嫌いじゃなかったでしょ？　大黒の神使がネズミだからって、毛嫌いしすぎ」
弥生の言う通り、皐月自身が猫を嫌っているわけではない。
ネズミの天敵は猫である。ただそれだけの理由もあるが……
「それはそうなんだけど。猫アレルギーなの知ってるでしょ？」
皐月が涙目になりながら訴えると、玄関の方からチャイムの音が聞こえ、話は中断された。
「葉月ぃ、今、手が放せないから、かわりに出て」
弥生に言われ、葉月は猫を抱きしめていた手を放すや、縁側からスリッパを履き、玄関の方へと駆けていった。
「ちょ、ちょっと！　葉月ぃ！　ねこっ！」
皐月が叫ぶや、猫は居間へと入ってきた。
「ちょ、ちょっと待って。こないで……」
皐月の懇願も空しく、猫は皐月の足元まで歩み寄る。
「っ――――！」
皐月の意識はそこで途絶えた。

「お邪魔しまぁす。――って、あら？　皐月ちゃんどうかしたの？」
弥生の友人である片桐千夏が居間に入るや、気絶している皐月を見つけ、何事かと首を傾げる。
「気にしないで、そこにいる猫に気を失ってるだけだから」
弥生は裁縫の手を休めず、皐月を横目で見ながら、千夏に説明する。
皐月の近くには先ほどの白猫がおり、皐月の頬を舐めていた。

「――っと、葉月ぃ！　治ったわよ。ぬいぐるみ」
そう云うや、弥生は葉月に向かって、ウサギのぬいぐるみを放り投げた。
耳の付け根部部分に縫い合わせた跡がある。
「ありがとう。弥生おねえちゃん」と葉月は笑みを浮かべながらお礼を言う。
「もう少し大事にしなさいよね」
弥生にそう云われ、葉月は「うんっ！」と答えながら、ぬいぐるみをなおしに、自分の部屋へと戻っていった。

「で、千夏。頼んどいたやつ、出来上がった？」
弥生がそう尋ねると、千夏は自分のキャリーバッグから、服を取り出し、広げて見せた。
それはちょうど弥生が着れるサイズの、袖にフリルのついたドレスで、胸元には紐が交差され、色は黒が強調されている。
「しっかし、あの人のロリコン趣味も困ったものね？」と弥生は呆れながら言う。
「でも、こういう手芸趣味もあるから侮（あなど）れないわよ。あの人、そういうの有名だから、頼みに来るコスプレイヤーも多いんだって」
ドレスのベースは弥生が作ったものなのだが、テスト勉強で忙しかったせいもあり、フリルをつけるところまでは手が回らなかった。
千夏にお願いして、その人物――穐原翔（あきはらしょう）のもとへと送ってもらっていた。
「うし、これで今度のイベントでコスプレ出来る」
弥生はドレスをひろげるや、早速その場で着替える。
――そして五分後……

「ふふふ、怒っちゃ駄目、血圧上がっちゃうわよ。乳酸菌取ってるう？」
と、妖艶な笑みを浮かべながら、弥生は言葉を発した。

「あー、似てる似てる。腹黒いところとかあんたそっくりだわ」
千夏は両手をペチペチと叩きあわせながら、賛美する。が、その声は棒読みであった。
「それ、貶してない？」
弥生がキッと睨みつけると「別に……」と千夏は視線を逸らした。

「それじゃ、衣装合わせもしたし、今日は帰るわ」
「ありがとう。後は自分で調整するわ」
弥生と千夏が玄関で一、二度ほど会話をしていたときだった。千夏の携帯が鳴り出す。
「はい。千夏ですけど……　あ、穐原さん。お疲れ様です」
電話の相手は穐原翔である。
「え？　あ、はい。一応訊いてみます」
千夏は弥生を見やる。
「あのさ？　皐月ちゃんか葉月ちゃんのどっちかでいいから、今度の日曜日、暇じゃないか尋ねてくれない？」
そう云われ、弥生は家の中に入り、皐月と葉月を玄関へと連れてくる。
――その件（くだり）は単調なので省略。

「千夏さん。何？　用事って」
皐月がそう尋ねると、千夏は皐月の体を嘗め回すように見つめ、次に葉月の体全体を同様に見つめる。
「今度の日曜日、暇？」
そう訊かれ、皐月と葉月は互いの顔を見やる。
「別に特に用があるわけじゃないですけど」
皐月は、本当なら入院している大宮巡査のお見舞いに行きたいのだが、瑠璃から、後々の事があるのでと、学業に支障を齎（もた）してはいけないと、週に４回という決まりにしていた。

元々警察病院の面会時間は夕方になっているため、殆ど忘れている事が多いが。
それ以外は特に用事という用事もないため、皐月は暇だと答えた。
「葉月ちゃんは？」と千夏に尋ねられ、葉月も暇だと答える。

「二人大丈夫です。一人は中学二年生、もう一人は小学四年生です」
千夏が電話の相手、穐原に伝える。
「な、なんかあるの？」
皐月は少しばかり引き攣った表情を浮かべながら、弥生に尋ねるが、
「まぁ、大丈夫でしょ」と自己解決し、皐月の質問には答えなかった。

その当日、日曜日。
早朝から皐月と葉月は、弥生と千夏に連れて行かれるように、とある会場へと来ていた。
「えっと……　皐月おねえちゃん、今何時だっけ？」
葉月がその光景に後退りながら、皐月に時間を尋ねる。
「あっ……　っと、９時だけど」
皐月も皐月で、この状況が理解できていなかった。

二人はイベントが始まるのは午前１１時からと聞かされていたため、早く来たから、周りは伽藍堂になっていると思っていたのだが、会場前は長蛇の列で人が溢れている。
「甘いわね二人とも。私たちは手伝いで来てるのよ。サークル参加者はこの大イベントに参加する半年以上前から戦争なんだから」
弥生の力説に若干引きながらも、葉月はその事について尋ねる。
「まずはサークル参加における申し込み。この抽選に受かったサークルは、当日新刊を出す準備をする。いや、抽選する前から準備す

るサークルもいるわ。後はサークルでの売り子集め、大体知り合いが多いけどね。時間に余裕が出来たら、突発でコピー本を出すサークルもいるし、行列が出来る壁サークルは必然的に人の流れが激しく……」

「まぁ、要するに私たちは知り合いのサークルの手伝いをするって事」

「それと、私たちが呼ばれたのは関係あるの？」

皐月がそう尋ねると、

「あぁ、弥生さんに千夏さん。今日はよろしくお願いします」

皐月と葉月の背後から、男性が声をかける。

「ああ、穐原さん。今日はよろしくお願いします」

千夏と弥生が挨拶するので、皐月と葉月も挨拶しようと振り向くや――絶句した。

穐原翔の身形はぽっちゃりとしており、顔は脂汗をかいている。チェックのカッターシャツを着てはいるが、ボタンが開いているため、その下に着ているTシャツは、アニメキャラのデザイン柄であった。

――お世辞にもカッコいいとはいえない身形である。

「あ、紹介します。こっちが次女の皐月で、こっちが三女の葉月です」

弥生は穐原に皐月と葉月を紹介する。

「お、おはようございます」と皐月と葉月は躊躇いながら挨拶する。

「ああ。おはよう」と穐原は返事を返したので、見た目と違って、いい人なのかもしれないと皐月が思ったときだった。

「ところで葉月ちゃんっていくつ？」

穐原が葉月に尋ねる。「へっ？　九つ（ここの）ですけど？」

それを聞くや、穐原は興奮するように「幼女萌え～っ！」と叫ぶ。

「葉月ちゃんがいれば百人力。いや、あのコスプレをすればもっと

！」

「コスプレさせるたって、サイズ合うやつなんてないじゃないですか？」

千夏がそう云うと、弥生が不敵な笑みを浮かべた。

「こんな事もあろうかと、夜中こっそり部屋に忍び込んで、箪笥からこれをもってきました！」

弥生がキャリーバッグから衣服を取り出し、広げて見せると、千夏と穐原は絶叫した。

「ちょっ？　へっと？　はぁ？　まっ！」

葉月は悲鳴を挙げるように混乱する。というよりもこの状況が理解できないでいた。

弥生が見せたのは、葉月の体操服である。

「葉月の学校はデザイン服だからね。しかもパンツは短パンじゃなく、絶滅危惧されているブルマ！」

「おおっ！　なんという、なんという嗜好。弥生どの、おぬしも悪よのう」

「いえいえ、お代官様。これだけではありません」

弥生はキャリーバックからもう一枚取り出す。

「＊＊＊＊のコスプレ衣装なんてどうでしょうかねぇ？」

「おお。これはまた見事に……　確かにこのキャラはぴったりですなぁ」

弥生と穐原の会話を見ながら、皐月は葉月に尋ねる。

私たち、生きて帰れるのかしらね？……と。

壱・集（後書き）

第十三話です。そういえば弥生の趣味はゴスロリだったなぁと思い出して書きました。

弐・赤い靴

イベントが開始されるや、人込みが高波のように押し流されていく。

「危ないですから、走らないで下さい」という場内アナウンスも、ルールを守っていない人間には効果がない。

いち早く人気サークルの新刊を手に入れようと必死なのである。

既に先日出来上がったコスプレ衣装に着替えていた弥生と千夏は、サークルスペースからその様子を横目で見ていた。

「すみません。この本下さい」

女性が、飾り付けられたスペース（ひとつの机半分が1サークルのスペース）の上に積み重なった薄い本をひとつ手に取り、弥生に尋ねる。

「あ、はい。えっと……　三百円になります」

弥生がそう云うと、女性はバッグから財布を取り出し、料金分の小銭を渡した。

「あ、それとよければ、スケブもお願いします」

「あっ、と……　千夏、スケブ」

そう云われ、千夏は女性に声をかける。

「ありがとうございます。それで何にしましょうか？」

「えっと、＊＊＊＊をお願いします」

女性はそう言いながら、スケッチブックを千夏に渡す。

「わかりました。それじゃ１０分くらいあとに、一度スペースまで様子を見に来てください。そのときくらいには出来てると思いますので」

千夏がそう云うと、女性は頭を下げ、人込みの中に消えていった。

千夏はパイプ椅子に座り、膝の上に先ほど女性から受け取ったスケッチブックを捲っていく。
そして何も描かれていないページに、女性から言われたキャラクターの絵を描いていく。
弥生は客の対応をしながら、たまに千夏へのスケブ依頼を対応していく。
千夏はさすがに限られた時間内では多くをこなせないため、リクエストは開始1時間で締め切った。

「そういえば、皐月と葉月は？」
弥生はそう言いながら、辺りを見渡す。
弥生と千夏は、皐月と葉月と一緒に女子更衣室に入り、着替えていたが、弥生と千夏はサークルの手伝いがあるため、先に出ていた。
「ほんと、遅いわよね？　もう始まって30分経つけど」
千夏は時計を見ながら云う。イベントが始まったのは午前11時で、彼女たちは入場後、更衣室に行っている。
着替えが終わったのが午前11時10分。特別、皐月と葉月の衣装が複雑というわけではないのだが――

「あ、穐原さん」
スペースに戻ってきた穐原を見つけた千夏が声をかける。
穐原の手には紙袋がぶら下がっており、その中には何冊かの薄い本が入れられている。
「皐月と葉月見ませんでした？」と弥生が尋ねると、
「皐月ちゃんと葉月ちゃんだったら、さっき撮影されてたよ」
そう云われ、弥生は店番を穐原にお願いし、皐月と葉月を探し始めた。

コスプレ撮影はスペースが指定されているため、すぐに見つけたが、弥生は皐月と葉月の慌てぶりを遠くから見ながら噴出していた。

「すみません。ポーズお願いします」
カメラを持った女性が皐月にお願いするが、皐月は今自分がしているコスプレのキャラを知らない。
皐月の衣装はあるゲームの忍者衣装で、青の忍衣装に白のマフラー。それ以外は普段と変わらず、髪をうしろに束ねている。
「皐月、小道具にクナイあったでしょ？　それで忍者みたいなポーズすればいいのよ」
そう云われ、皐月はクナイを右手に持ち、ポーズをとった。それを見るや、周りのカメラを持った男女が写真を撮りはじめる。
「すみません、こっちに視線お願いします」
皐月は声をかけられたが、耳が若干悪い皐月はそれに気付かなかった。
それが引き金となったのか、男性は大声を出し、皐月は漸くそちらに振り返る。
「なんだよ。聞こえてるんだったら、さっさと反応しろよ」と呟く。
皐月はそのことを知る由もなかった。

（さてと、皐月はとにかく、葉月は――っと）
弥生は再び辺りを見渡すと、
「かぁわいい。こっちむいてぇ！」
女性の黄色い声が聞こえ、弥生はそちらを覗き込む。
そこには頭に赤の兜巾（ときん）を被（かぶ）り、白いもふもふとした首飾りをつけ、白のシャツに、巫女衣装の袖。黒と赤のスカート。そして犬耳を着けている葉月であった。
葉月は少しばかり照れながら、応対していく。
それがなんとも愛らしく見えるのか、カメラを構えているものたちが、頻（しき）りに悶絶していた。

弥生も弥生で、撮影スペースにいたせいか、写真を撮らせてほしいと頼まれる。

断るのは無粋だと思い、弥生もそれに応対する形となってしまった。

三人が解放されたのは、丁度十二時になるくらいであった。
「しっかし、何が面白くて、写真とか撮ってるのかしらね？」
皐月は襟元をパタパタとする。
「あのね。コスプレってのは、そのキャラになりきるってのが――」
「一応いっておくけど、姉さんの趣味に、私たちまで道連れにしないでよね？」
皐月はそう言いながら、背伸びをする。
「それで、穐原さんと千夏さんはどうしたの？」
葉月にそう尋ねられ、弥生は「スペースで客の応対してるから、私たちもそろそろ――」と、立ち上がった時だった。

人の気配とは全く違う、かといって、妖怪ともいえない不思議な気配を、三姉妹は感じた。
「な、なにこの気配？」
葉月は皐月にピタッとくっつく。
「あの人込みから感じるけど……」
弥生の視線の先には人集り（ひとだか）が出来ており、皐月は弥生に葉月をお願いし、その人集りの中に入っていく。

「うぉーっ、テラかわゆす！」
「ちょっと、なに、この子？　似合いすぎ」
という声が聞こえ、皐月は目の前にいる少女を見た。
少女は白と黒のゴスロリ衣装を着ており、頭に猫の耳、おしりに尻尾を着けている。
皐月はその少女に見覚えがあったが、少女が普段している衣装以前に、そもそもこんな場所にいるとは思えず、すぐには理解できな

かった。

「ってか？　なんで浅葱がここにいるのよ？」

皐月が声をかけると、少女――浅葱は皐月に気付く。

「なんじゃ？　皐月も面妖な服を着とるが、ここはそういう類の集まりか？」

浅葱は首を傾げながら、皐月に尋ねる。

「それは、弥生姉さんから知り合いの手伝いにって、一緒に……それよりも、どうして浅葱がここにいるの？」

「私はただの暇潰しじゃよ？」

そう云うや、浅葱は権化を解き、皐月以外には姿が見えないようにする。

突然目の前に人がいなくなったことでパニックが起きるかといえば――そうではなく、消える前に自分の姿を見ていた三姉妹以外の記憶から、浅葱は自分の記憶だけを消した。

当然、写真を撮っていたものたちは互いに写真を撮っているだけの姿が写った写真だけがデータに残っていた。

「はぁ――っ」と皐月はドッと疲れがでてしまい、溜め息を吐く。

イベントは無事終了し、その打ち上げにと、三姉妹と千夏、穐原の五人はレストランへと来ていた。

「どうかしたの？」と千夏が尋ねると、

「あ、すみません。ちょっと知り合いにあって」

皐月はそう言いながら、お水を飲む。

「それじゃ、今日は一日お疲れ様。皐月ちゃんと葉月ちゃんもありがとうね」

穐原はそう云うと、封筒を皐月と葉月に手渡す。

それを見て、皐月と葉月は封筒と穐原を交互に見た。

封筒の中身を見ると、それぞれの封筒に五千円札が1枚入っている。

「ちょ、いいですよ」と皐月と葉月は封筒を穐原に渡し返す。

「いやいや、今日はスペースに皐月ちゃんたちがいたお蔭で、いつもよりも売り上げがあったからね。新刊は完売したし」

そのお礼だと、穐原は皐月と葉月に言う。

「バイト代と思って受け取りなさい」と弥生に云われ、皐月と葉月は、穐原からの恩義に従う事にした。

「えっ？　あの時の人集りにいたのって、橋姫さまだったの？」

駅までの帰り道、皐月は弥生と葉月に、会場で浅葱に会ったことを話す。

「見間違いじゃないの？　浅葱さんがああいう場所にいるとは思えないし」

葉月が不思議そうに首を傾げる。そのことは皐月も同感であった。

「まぁ、またいつもの気紛れでしょうけどね」と、皐月は浅葱が会場にいた疑問を気に留めようとはしなかった。

駅の近辺に着くと、改札口の方に、小さな女の子がベンチに座っているのを、葉月が見つける。

女の子を見て、葉月は顔を顰める。

「どうかしたの？」と千夏が尋ねると、葉月は女の子を視線で示した。

千夏はその女の子を見るや、顔を歪めた。

髪は肩まで伸びており、赤い服を着ている、どこにでもいる女の子に見えるが、靴を履いておらず、足は泥塗れになっており、よくよく見てみれば、足の甲が赤くなっている。

「ねぇ？　どこかに靴を忘れたの？」

葉月がそう尋ねると、女の子はキョトンとした表情で葉月を見つめる。
そして首を横に振った。
その仕草を葉月は理解出来なかった。

少女は葉月の問い掛けに答えただけである。
そう、少女は“靴を忘れたのか”という問い掛けに答えただけだ。
首を横に振るという仕草は、“否定”を意味しているため、靴を忘れたという事にはならない。だからこそ、葉月は少女の仕草に理解出来なかった。

「ちょっと、李夢（リム）。こんなところにいたの？」
３０代くらいの女性が、怒鳴り声を挙げながら、女の子――李夢の手を引っ張る。
「あっ！」と葉月が声を挙げると、
「なに、あなた？」と女性は葉月を睨みつける。
葉月はそれ以上何も聞けなかった。

「ちょっと、あんたあの女の子の母親なんですか？」
穐原が女性に尋ねると、
「ええ、そうよ。だからそこを退いてくれないかしら？」
「李夢ちゃんでしたっけ？　どうして靴を履いてないんですか？」
「それはこの子が勝手に家から出て行って」
穐原は女性の言葉に違和感があった。果たしてそうなのだろうかと――

李夢の容姿は、葉月よりひとつほど下に見える。それくらいだったら、外を出るときは履物を履くというのを知っていなければいけない。それが勝手に出て行ったとしてもだ。
「さぁ、もういいでしょ？　そこを退いてくれない？」

女性は半ば強引に、穐原の横を通っていった。
穐原は李夢に靴を履かしてやらないのかと尋ねようとしたが、近くに車が停められており、母子（おやこ）はそれに乗り込んでいくのが見えた。

「葉月、気にする事じゃないわよ」と皐月が声をかけるが、葉月はどうしても李夢のことが気になっていた。
そしてそれは穐原も同じである。しかし気に留めるだけで何もしなかった。

――そう、事件が起きるまで……

参・定説

三姉妹が実家である稲妻神社に戻ったのは、ちょうど夜七時を回ったころだった。

玄関の引き戸を開けると、ほんのりとした甘い匂いがし、三姉妹は首を傾げる。

この神社の神主であり、三姉妹の祖父でもある拓蔵が、厨房で料理をしているのだろうと、一瞬思ったが、

「爺様って、確か料理駄目じゃなかった？」

皐月が生唾を飲み込み、そう言うと、弥生も生唾を飲み込むや、頷いた。

「葉月がヨダレ垂らすくらいだからね。ほら、拭きなさいな」

葉月がダラダラとヨダレを垂らしている。これは美味しい匂いがした時ならば、誰だって起こりうることなのだが、弥生と皐月も、葉月と同様、ヨダレの分泌量が半端ではなかった。

原因を確認するため、三姉妹は匂いがする居間の方に行くと、長方形の卓袱台の上に、酒の肴が置かれており、拓蔵が酒を飲んでいた。

その隅には徳利（とっくり）が二本置かれている。

「瑠璃さんや、もう一本作れんかの？」

拓蔵がそういうや、「少しはおさえたらどうです？　最近飲み過ぎだって、弥生が云ってましたよ」

厨房の方から、瑠璃の声が聞こえ、三姉妹は首を傾げると同時に、匂いの原因が何なのかを理解した。

皐月と葉月は、一度自分の部屋に戻り、残った弥生が厨房を覗くと、

「あら、お帰りなさい」

瑠璃にそう言われ、弥生は少し躊躇(ためら)い、会釈する。
「今日は一段と暑かったでしょ？　もうちょっとで肉じゃができますから」
（匂いの原因はそれか）と、弥生は思った。
小さな鍋の中には、大きく切られたジャガイモやニンジン、タマネギが入れられている。
甘い匂いは、醤油や酒、味醂、そして砂糖を混ぜているからだった。
瑠璃の姿を翌々見てみると、普段は髪をお団子に纏めたヘアスタイルなのだが、それをほどき、髪を頭のうしろに掻きあげ、髪留めで止めているため、髪がうしろに跳ねている。
さらには割烹着を着ているため、傍から見ると、小さな女の子が一生懸命料理をしている姿に他ならない。

「何か手伝いましょうか？」
弥生はそういうが、まな板の上や、シンクなどを見ると、タマネギの食べられない皮の部分や、ジャガイモの皮が三角コーナーに捨てられていることに違和感を感じる。
瑠璃にニンジンの皮は？と尋ねようとすると、二つあるガスコンロのもうひとつには、金平牛蒡が作られていることに気付く。
なるほど、ニンジンの皮はそっちに使ったのかと、弥生は理解する。
「そうですね。それじゃ、味見してもらいましょうか？　弥生は最近便通がよくないと聞きましたからね」
そう言うと、瑠璃は小皿に肉じゃがの汁を注ぎ、それを弥生に渡す。
鼻を近付けなくても、肉じゃがの甘い匂いがしてくる。
弥生は溜まらず、口の中に溜まった唾を飲み込んだ。
一口啜(すす)ると、作りたてだというのに、熱くなく、それでいて暖かく心地のいい味わいだ。

一瞬にして、その日の疲れが癒されていく。
「瑠璃さん。今度、私にも作り方教えてくださいよ」
弥生がそう言うと、瑠璃はどこかホッとしたような表情を浮かべた。

「瑠璃さんや、酒の肴はないんかな？」
居間のほうから拓蔵が催促するように呼びかける。
「それだったら、金平牛蒡ができたので、持ってきますね
瑠璃はそう拓蔵に云うや、背伸びをして、食器棚から小皿をひとつ取り出し、その皿の中に金平牛蒡を盛り付ける。
そのやりとりは、我侭な亭主に、呆れながらも、いやな顔ひとつ浮かべずに従っている妻のような感じであった。
それは瑠璃が、弥生に一瞬、困ったような表情を浮かべたと同時に、どこか幸せそうな表情でもあったからだ
実際、瑠璃と拓蔵は夫婦ではあるのだが、三姉妹はそのことを知らない。

「葉月、それは何ですか？」
夕食を食べ終え、デザートにと作っていたわらびもちを食べている時のことだ。
葉月が食後に読もうと思い、自分の部屋から持ってきた一冊の本を見るや、瑠璃が首を傾げている。
その本のタイトルは『あかいくつ』である。

「たしかそれって、歌がなかった？」
皐月がそう言うと、「『赤い靴　はいてた　女の子。異人さんにつれられて、行っちゃった』だっけ？」
と、歌いながら、弥生が聞き返す。
「赤い靴は、童謡と童話があり、童謡は日本が元になっていますね。

童話は『人魚姫』や『マッチ売りの少女』で有名なアンデルセンなんですよ」

瑠璃がそういうので、皐月は絵本の表示を見る。確かに原作者の名前に『ハンス・クリスチャン・アンデルセン』と書かれている。

「それにしても、またどうしてそんなのを？」

瑠璃が首を傾げ、葉月に尋ねると、「それが、今日の帰り、駅のベンチに女の子が座ってて――」

葉月が駅であったことを、拓蔵と瑠璃に説明した。

「なるほど、たしかに違和感があるな」

「靴を忘れたことに対して首を横に振った。それは素直に忘れていないと解釈していいでしょうね。ただ、やはり年齢を考えると」

拓蔵と瑠璃は二人して考え込む。

「その李夢でしたっけ？　どんな女の子でしたか？」

「えっと、身形（みなり）は葉月の年がひとつ下くらいかしらね？　ただ、なんか栄養がいきわたっていないのか、思った以上に小さかったけど」

「それになんか、母親の態度も可笑しかったわね」

皐月の言葉に疑問を持った瑠璃は、それを尋ねる。

「えっと、３０代くらいの女性で、李夢ちゃんを見つけたとたん、むりやり手を引っ張って連れ帰ってたんです」

「なんか、怒鳴り声を挙げてたけど、李夢ちゃんはなんともない顔してたわね」

皐月と弥生の言葉を聞くや、瑠璃は一瞬寂しそうな表情を浮かべた。

「それで、その『あかいくつ』って、どんな話だっけ？」

弥生がそう言うと、葉月は絵本を手に取り、皆に読み聞かせた。

――物語の概要を説明するとこうである。

少女は病気の母親と二人だけで貧しく暮らしていた。

ある日、靴を持っていない少女は、足に怪我をしたところを靴屋の女主人に助けられ、赤い靴を作ってもらう。

その直後、看病も虚しく母親は死んでしまい、少女は母親の葬儀に、赤い靴を履いて出席し、それを見咎めた老婦人が、少女の境遇に同情し、彼女を養女にした。

裕福な老婦人のもとで育てられた少女は、町一番の美しい娘へと成長したある日、靴屋の店先に綺麗な赤い靴を見つけた少女は、老婦人の目を盗んで買ってしまう。

戒律上、無彩色の服装で出席しなければならない教会にも、その赤い靴を履いて行き、老婦人に窘められる。

それでも少女は赤い靴を履いて、協会へといく。老婦人が死の床についているときにさえ、少女はその靴を履いて舞踏会に出かけていた。

すると、不思議なことに少女の足が勝手に踊り続け、靴を脱ぐことも出来なくなってしまった。

少女は死ぬまで踊り続ける呪いをかけられたのだった。

少女は昼夜関係なしに踊り続けなくてはならなくなったため、亡くなった老婦人の葬儀にも出席できず、身も心も疲弊してしまい、とうとう呪いを免れるため、首斬り役人に依頼して両足首を切断してもらう。

すると切り離された両足と赤い靴は少女を置いて、踊りながら遠くへ去ってしまった。

「心を入れ替えた少女は、両足を失った体で、教会のボランティアに励む毎日を送った。ある日、眼前に天使が顕現し、罪が赦されたことを知った少女は、法悦のうちに、天へ召されていった」

本を読み終えた葉月が本を閉じ、皆の顔を見ると首を傾げる。

皆の表情がただ呆然としていたからだ。

「な、なんか改めて聞くと、すごい話よね？　エクソシストだっけ？　そういうのには頼まなかったのかしら？」

弥生がそう言うと、拓蔵が一口酒を飲むや、

「この話で重要なのは、欲に塗れて、目の前の小さな幸せを蔑ろにしてはいけないという話なんじゃよ」

「絵本には残酷にみえて、実は哲学的なことも含まれていますからね」

瑠璃は拓蔵の横に坐り、お茶を飲んでいる。

「でもさ、童謡の赤い靴もそんな感じだっけ？」

「これから話すことは、童謡における定説での話に置き換えて、まず、童話と類似しているところがあるとすれば、主人公の少女が、童話と同じく母子家庭であったこと。童謡での少女の母親は再婚していますが、ある理由によって、少女を育てることが出来ず、両親は少女を米人《アメリカ人》に預けた。ですが、少女は結核を患ってしまい、渡米することが出来なかった。少女は孤児院に預けられ、九つで亡くなった。そのことを少女の両親は知らず、渡米したものとばかり思っていた」

「つまり、自分の子供が死んだことを知らなかったってことですか？」

皐月がそう尋ねると、瑠璃は答えるように頷いた。

瑠璃は懐から煙管を取り出し、口に咥えるや、紫煙を噴出した。

すると、その煙は見る見るうちに少女の姿へと代わっていく。

「お呼びでしょうか？　闇魔さま」

少女――煙々羅は、畳の上に正座をし、瑠璃の前で頭を下げる。

「先ほど、葉月が話していた家族を少し調べてくれませんか？」

そう言われ、煙々羅は「了解しました」といい、その言葉どおり、煙にまかれるように消えた。

「何か気になることでもあるんですか？」
葉月が心配そうな表情を浮かべる。
「いえ、私の思い過ごしであってくれればいいんですけどね」
瑠璃の言葉に三姉妹は首を傾げた。

参・定説（後書き）

制約によって、歌詞の掲載は禁止されていますが、童謡『赤い靴』は１９２２年（大正１１年）、野口雨情作詞・本居長世作曲で発表された童謡であり、著作権は切れています。

肆・辻

三姉妹が李夢と会った翌日の明朝、浅黄橋の河川敷で死体が発見された。

通報を受け、現場に駆けつけた、警視庁刑事部の阿弥陀警部と西戸崎刑事が、遺体の確認をする。

遺体は顔が青々と膨れ上がり、近くには鉄パイプが放置されていたことから、暴漢に襲われたものと考えられる。

「阿弥陀警部。被害者の身元がわかりました」

若い警官がそう言うと、「被害者の名前は？」と西戸崎刑事が尋ねた。

「被害者は【鈴崎司郎（すずざきしろう）】５８歳。浮浪者（ホームレス）のようです」

「ホームレス狩りですかね？」

阿弥陀警部がそう訊くと、「まだそう断言は出来んやろ？　財布の中身はどうなっとうとね？」

「財布が土手の方に捨てられていましたが――」

報告にきた若い警官の歯切れが悪い台詞に、阿弥陀警部と西戸崎刑事は首を傾げた。

「どうかしたんですかな？」

「それが、物取りでの犯行ではない気がするんです」

「物取りではない？　ちょっと見せてくれませんか？」

そう言われ、若い警官は、阿弥陀警部に財布を渡した。

ずぶ濡れになった財布は、ふたつ折りに出来るタイプのものである。

小銭入れには百円玉や十円玉が何枚か入ってはいたが、札入れ方にはレシートが入っているだけである。カード入れのほうには何も入れられていない。

「綺麗過ぎませんかね？」
若い警官に言われ、阿弥陀警部は少しばかり考える。
「確かに、妙に綺麗ですね。あまり使われていないし、札入れのほうも、水で濡れている以外、あまり汚れてませんし」
「浮浪者狩りをする人間が、物取りをするとは思えんがな？」
云われてみれば確かにそうだ。そもそも、金を持っていたら浮浪者とは云わない。
「浮浪者も好きで浮浪者になってはいませんよ。まぁ、それから思考の転換で、大企業の社長になった人がいますけどね」
阿弥陀警部がそう言うと、若い警官が誰のことかと尋ねる。
「ほら、リサイクルショップの……」
そう説明すると、若い警官と西戸崎刑事は納得した。

死体を司法解剖した後のことである。
死因は、鉄パイプで後頭部を数回殴られた脳挫傷によるものだと判明した。
発見された鉄パイプから発見された血は、鈴崎司郎のものと一致し、凶器は鉄パイプと考えられた。
「それがどうも気に食わんのですよ？」
阿弥陀警部が、鑑識課にある湖西主任の部屋で茶菓子を飲んでいる。
その表情はどこか不貞腐れているともいえ、湖西主任は呆れた表情で、
「何がそんなに気に食わんのじゃいな？　人間いつ転落するかわからんじゃろうよ？　阿弥陀如来」
深々と机の椅子に座り、お茶を啜りながら、湖西主任は尋ねた。
「いや、だってですよ？　鈴崎司郎という人物を調べたら、とても浮浪者になるとは、思えませんし」
「はたから浮浪者じゃなかったんじゃないのか？　普段は、キチン

とした服装を好まなかったのかも知れんぞ？」
阿弥陀警部が違和感を感じていたのは、鈴崎司郎の詳細であった。

鈴崎司郎という人物は、お役所勤めで、殺された三日前まで会社に来ていた。
三姉妹がイベントに参加したのは日曜日である。その翌日、つまり発見されたのは月曜日になる。
金曜日に仕事場に来ていた人間が、一両日で馘首される事はない。
「特に鈴崎司郎は、浅葱橋の近くにある公園を担当していたそうなんですよ」
「つまり、浮浪者による犯行……とでもいいたいんかな？」
湖西主任にそう言われ、阿弥陀警部は少しばかり考えると、
「いや、可能性としてはないとはいえませんが、あの人がそんなことを承諾するとは思えないんですよね」
阿弥陀警部がそう言うと、湖西主任は首を傾げた。
「いや、あの人だったら、公園一帯にいる浮浪者は言うこと聞くでしょうけど、もともとそういうのは嫌いな人ですからね」

◇◆◇◆◇◆◇◆

警察病院の一角に、病室がある。
そこには、阿弥陀警部や、西戸崎刑事と同様、警視庁刑事部に勤めている、大宮巡査が入院している。
彼は数日前、朽田健祐に襲われ、重傷を負ったが、彼を守護している妹、彩奈と、地蔵菩薩であり、彼を管理している瑠璃の治癒能力あってのことである。
しかし、大事をとって、一ヶ月ほどの入院を余儀なくされていた。
そんな大宮巡査が、ベッドの上で正座になり、病室にいる皐月に謝っていた。

事の発端は数分前に遡る。

見舞いに来た皐月が病室に入ると、大宮巡査はベッドで眠っていた。

起こさないようにしながら、皐月は大宮巡査に近づいたが、物に足をぶつけてしまい、物音を立ててしまった。――その音で大宮巡査は起き上がったのだが、

「だ、誰だ？」

ビックリして起き上がった大宮巡査が皐月を見やる。

「え？　えっと……」

慌てて皐月が謝ろうとすると、

「き、君は誰だ？」

その言葉に、皐月はカチンときたのであった。

普段、皐月は長い髪をうしろに束ねているのだが、今日に限っては、髪をほどき、頭にカチューシャを着けていた。

耳には小さなイヤリングをつけ、唇はうっすらとピンクの口紅をつけている。

「ごめん。まさか皐月ちゃんだとは思わなくって」

必死に謝っている大宮巡査を、皐月は冷たい目で睨みつける。

「いつも会ってるのに、酷くないですか？」

それにこの髪型は初めてではない。以前、三姉妹が知り合いの結婚式に出席した時、皐月はこの髪型をしている。

さらに云えば、そこで事件がおき、大宮巡査は彼女と会っているのだ。

――が、それよりも普段の髪型の方が印象が強かったので、大宮巡査は、最初、相手が皐月だと気付かなかったのだった。

「そりゃ、いつも髪は結んでますけど、私だって女の子ですから、お洒落には気を使って」

そう皐月はぶつくさと言うが、実はお洒落に無頓着のため、あま

り身形を気にしたことがなかった。
ただし、会う相手が大宮巡査である。意識してしまうのは当然だ。
はっきり云って、恋人とまでは云わないが、二人の関係はそんな感じで、平たく言えば、皐月は恋愛に対して初心であるし、大宮巡査に恋心を抱いていることを本人は自覚していない。
皐月は出かける時、普段以上の時間をかけてしてきたのだが
「前も同じ髪型してるんですけどね？」
――結構、根に持つタイプである。

「それで、体の調子はどうですか？　どこかわるいところは」
「いや、大丈夫だよ」
心配そうに見つめる皐月にドキッとした大宮巡査は、視線を逸らし、ギクシャクとした返事を返す。
普段とは違う髪型であったこともあり、皐月が妙に女性っぽく見えたのだ。

会話は特になかったが、二人にとってはそれだけでもよかった。
普段は警官と一般市民の二人あるが、一度（ひとたび）、人間の犯行とはいえない事件が発生すれば、大宮巡査は阿弥陀警部と一緒に神社へとやってきて、皐月たち三姉妹に事件の参考を尋ねに来る。
大宮巡査は刑事部に勤めているため、あまり時間が取れない。
なので、不謹慎だが、こういう時でしか、人目も気にせずゆっくりと出来ないのだった。

――そう、人目も気にせずに……
皐月は徐（おもむろ）に、顔を大宮巡査に近付けた。そして、ちょうど膝のところで、顔を埋める。
「どうかしたのかい？」
大宮巡査がそう尋ねると、「なんでもないです」
皐月はそう答えるが、その表情は安心していた。

本当はキスがしたかったのだ。だが、その勇気がない。
二人の関係がそれ以上進行することを、皐月は本心で望んではいるが、逆に壊したくないというのも本心であった。
（ゆっくりでいいんだ。ゆっくりで。焦らなくてもいいって、瑠璃さんが云ってたし）
皐月は目を瞑り、頭の中でそう自分に言い聞かせた。

外はすっかり日が落ちている。
警察病院の入口で、頭を振っていた皐月は、ボーとしていた。
顔を埋め、目を瞑ったあと、そのまま眠ってしまったのだ。
「んっ」
背筋を伸ばしながら、皐月は声を挙げる。そして、徐に携帯を取り出し、時間を確認した。
「うわ、八時……」
皐月は携帯の液晶に出ている時間表記を見て肩を落とした。
本当は六時前に警察病院をあとにしようと思っていたのだが、大宮巡査もそのあと眠ってしまったため、二人が起きたのは、見回りに来た看護士が部屋に入ってきてからである。

「あれ？」
皐月は髪を掻き揚げたとき、親指と人差し指の間が、耳たぶに当たった。
本来あるべきものがなく、もう片方の耳たぶに触れると、イヤリングが片方ないことに気付いた。
「顔を埋めたとき、ベッドの上に落としたのかな？」
皐月が着けていたイヤリングは、耳たぶなどに挟むタイプのものなので、ふとしたきっかけで落としてしまう場合がある。
皐月は警察病院を見やる。
（今度行ったときにでも尋ねてみよう）

そう考えながら、皐月は帰路に着いた。

路地裏を歩くと、皐月はふと足を止め、背後を見やった。
そして、気のせいかと思い、再び歩き出す。
――カランコロンと、地面に木製バットや木片を引きずった音がしていたのだが、耳が悪い皐月はその事に気付かなかった。
そして、鈍い音が聞こえたと同時に、皐月はその場に跪いた。
それが合図となり、数人の男が皐月の暴行を加えた。

皐月はうつ伏せとなり、頭から血を流している。
「はぁ、はぁ、これでどうだ？」
男の一人がそう言う。
「おい、さっさとずらかろうぜ？　ここまでやっとけば生きてねぇだろ？」
もう一人の男がそう言うと、「そうだな。さっさと――」
「おい、どうした？　早くずらか――」
首を傾げ、問おうとした男は、背筋が凍ったのを感じた。
それは他の人間も同様である。

「つぅ……」
ふらふらと皐月が起き上がったのだ。
「な、なんで？」
彼らが愕然とするのも当然である。本来の人間であれば、死んでいても可笑しくなかった。
しかし皐月、もとい三姉妹は“闇魔王である瑠璃の血を、四分の一ほど受けついている”ため、そう簡単には死なない。
――が、皐月は意識が朦朧としていて、状況を理解出来ないでいる。
「こ、この……」

男が皐月の頭をバットで殴ったが、受け止められ、押し返される。
その衝撃で、男は倒れそうになるが、皐月はバットを手から離していないため、男の背中が地面につくことはなかった。
皐月がバットから手を離して、ようやく倒れこんだ。

「こっ、こいつぅっ！」
もう一人の男が、皐月の背後から襲いかかるが、
「うぐぅっ」
体をくの字に曲げ、その場に蹲った。気配を感じた皐月が肘打ちをしたのである。
他の男たちも皐月に襲い掛かるが、不意打ちでないため、普通の人間が、皐月に勝てるわけがなかった。

「それじゃ、その“ロワ”って人から、私を襲うようにって命令されたわけ？」
頭にタオルを巻きながら、皐月は男たちに尋ねた。
男たちは正座させられており、皐月からぼこぼこに殴られたため、顔が腫れあがってしまっている。
「あ、はい。皐月さんに暴行を加えて、再起不能にしたら、一人頭五万円渡してくれると」
「ふーん。私の命ってそれくらいの価値なんだ」
皐月は小さく笑みを浮かべる。――男の一人は気がついたときには、額を地面につけていた。
「人の命はそんな安くないでしょ？」
皐月は左手で拳を作っている。ムカッときて、殴ったのだ。

街灯に照らされた男たちは、若くなく、４０から５０代に見える。
服装もどこか乱れており、無精（ぶしょう）ひげを生やしている。
「それで、その“ロワ”って人は外人なの？」

皐月がそう尋ねると、「いや、“ロワ”っていうのは、俺たち浮浪者を匿ってくれてる人の別称なんだけど、本名は知らないんだ。でも、日本人なのは間違いないよ」

そう言われ、皐月は首を傾げた。素性を知らない人間から命令されて、命を狙われた。

それで、「はい、そうですか」と赦せるわけがない。

「まぁ、もう今日は遅いし、明日会いに行ってみようかしら」

皐月はそういうや、携帯で男たちを撮影する。その行動に男たちは目を疑った。

「一応襲われた証拠にね。婦女暴行で訴えるわよ?」

もし、彼らが暴行を加えていないと、嘘を吐かないとは考えられないため、念のための保険である。

「いえ、もうやりません」

――男たちはそういう。その言葉は、恐怖で震えていた。

伍・王様

「お帰り――って、どうしたの？　その頭」
神社に帰ってきた皐月を見るや、弥生が驚いた声を挙げた。
皐月の顔は、浮浪者たちに襲われたときに比べて、すっかりと腫れが引いており、青痣（あおあざ）はあれど、普段と大差ないほどに回復している。だが、髪の毛についた血はこびりついており、赤くなっていた。
「んっ、ちょっと帰りに襲われた」
なんとも楽観的に説明するので、弥生は首を傾げる。
「シャワー出来る？」
「ええ、沸いてるけど」
そう言われ、皐月は靴を脱ぎ、一度自分の部屋に戻って、着替えを取りに行くや、風呂場へと行った。

それから数十分後、風呂から上がってきた皐月が居間へと顔を出す。
「皐月、ちょっと座りなさい」
拓蔵に声をかけられ、皐月は正座する。
「今までどこに行っていた？」
「お、大宮巡査のところ――です」
拓蔵の質問に、皐月は素直に答えた。
「知り合いとはいえ、未成年があまり夜回りしないほうがいいぞ。話を聞けば、帰りに襲われたそうじゃないか？」
拓蔵は怒ってはいたが、それ以上に、皐月が襲われたことが心配なのだ。
「うん。最初死ぬかと思ったけど、やり返した」
あっさりいう皐月に、拓蔵は持っていたお猪口を手から零した。
「それに、どうやら私を襲うようにって、命令されてたみたい」

「皐月？　あんた、なんか恨まれるようなことした？」
弥生にそう訊かれ、皐月は首を横に振った。
「相手はホームレスみたいで、顔も知らない人たちばかりだった。それに、その人たち、“ロワ”って人から命令されたって」
皐月の説明に、拓蔵と弥生は首を傾げる。

「“ロワ”？　なにそれ、外人？」
「ううん。なんかホームレスを匿ってる人みたいで、浅葱橋の近くに、ホームレスが集まってる公園あるでしょ？　明日にでも文句に言いに行こうかなって」
皐月はそう言うと、拓蔵は少し考え、
「“ロワ”……か。皐月、明日わしも一緒に行ってもいいか？」
そう言われ、皐月は首を傾げる。が、特に断る理由もないため、同意した。

数時間前、午後四時。三姉妹の住んでいる町から、５駅ほど離れた場所にあるデパートの玩具売り場に、弥生の知り合いである穐原の姿があった。
穐原は階段近くに設けられている休憩用の長椅子に座った。
フィギュアや、ガチャガチャの景品が入った紙袋を横に置き、背負っていたリュックを脱ぐや、それからペットボトルを取り出し、口にしたときだった。
「あれ？」と、穐原は目の前にいる女の子に目をやった。女の子は先日の日曜日、駅で見た、李夢である。
その李夢は誰かを探しているわけでもなく、ジッと少女向けの玩具を見ていた。

穐原は立ち上がり、李夢に近づくや、「李夢ちゃん、何してるの？」

そう声をかけるが、李夢は穐原を見るや、キョトンとした表情浮かべた。

それもそうである。穐原は知っていても、李夢本人は穐原のことを知らない。

しかも、傍から見れば、小さな女の子が見知らぬ大人から声をかけられている以外のなにものでもなかった。

「お母さんはどうしたの？」

穐原は腰を低くし、李夢と同じ視線になり、母親のことを尋ねた。

「……っ」

穐原の問いかけに、李夢は反応を見せない。

「どこかではぐれちゃったのかな？」

穐原はふと、李夢の足元を見た。黄色いサンダルが目に入り、ホッと息を吐く。

だが、手首のところを見ると、ちょうど裾の中が見え、顔を歪めた。明らかに“虐待”を受けたような傷跡があったのだ。

「李夢ちゃん？　のど渇いてない？　お兄さんがジュース買ってあげようか？」

そう誘うと、李夢は首を横に振った。

おそらく母親にきつく言われているのだろう。と、穐原は考える。そういうわけで、しつこく誘うのは逆効果である。

さっきから李夢はジッと展示されているアニメキャラの商品を見ている。

「李夢ちゃん、どのキャラクターが好きなんだい？」

穐原にそう言われ、李夢はゆっくりとそのキャラクターを指差した。

「それか、ちょっと待っててー―」

そう言うや、穐原は長椅子に戻り、置いていたリュックからスケッチブックと筆記道具を取り出す。――そして数分ほどして、李夢

が指差したキャラクターの絵を仕上げた。
その紙を破りとり、「李夢ちゃん、はいこれ」といって、李夢に渡した。
李夢は最初こそ、不思議そうに穐原とイラストを交互に見やっていたが、次第に笑みを浮かべていた。

「李夢っ！　何でこんなところにいるの？」
李夢の母親がのぼりのエレベーターから降りてくるや――
パンッと、李夢の頬を叩いた。
「まったく、人の目を盗んで、なんて悪い子なんでしょうね？　こっちはあんたを探してやる暇なんてないのよ？」
ヒステリックな声を挙げ、李夢の母親は、李夢の手を掴むや、その場から離れようとする。
「ちょっとあんた、今のはないんじゃないのか？　李夢ちゃん、ジッとここで待ってたんだぞ？」
穐原がそう言うと、「あなたね？　うちの李夢に変な事してたのは」
そう言われ、穐原は顔を歪めた。
「なにいって、俺は何もして」
「ほら、あんたみたいなオタクは、そうやって誰も弁護しない言い訳を言うのよ」
その言葉に穐原はカッとなるが、
「俺は、李夢ちゃんがあのアニメのキャラクターが好きなのかを尋ねてただけで」
と、感情を押し殺し、懸命に説明する。
「そんなの口百弁、いくらでもいえるでしょ？　だいたいねぇ？大の大人がアニメ好きとか、現実を見なさい」
李夢の母親は、手を繋いでいた李夢が持っている紙に気付く。
「どうしたの？　それ」
そう尋ねるが、李夢は答えない。

「もう二度と、近付かないでください」
李夢の母親は、無理やり絵を取るや、自動販売機の横にあるゴミ入れに棄てた。

「あっ」
李夢が小さく声を挙げた。が、それは誰にも聞こえず、母親の手に引っ張られ、エレベーターを下っていった。
穐原は呆然としながら、母娘を見る。そして、ハッと我にかえるや、ゴミ箱に棄てられた自分の絵よりも、李夢が気になっていた。

翌日、夏休みということもあり、平日ではあるが、浅葱橋には人が行き交っている。
その近くに『山間公園』という、小さいながらも緑豊かな公園がある。
皐月と拓蔵は、昨夜皐月を襲った“ロワ”という人物に会いにきていた。

「ここはかわらんなぁ」
拓蔵がそう言うと、「もしかして、知ってるの?」
皐月にそう訊かれ、拓蔵は頷いた。
「少しばっかりな――」
拓蔵が曖昧に返事をしたときである。公園の反対側から、三輪自転車が皐月たちのほうへとやってきた。
自転車は皐月たちの目の前で停まり、帽子を被った、初老の男性が自転車から降りて、二人を見るや、皐月よりも拓蔵を見て驚いていた。
「まだ生きとったのか?」
男性は拓蔵にそういうと、「そういうあんたこそ、こんなところに住んでてまだ生きとったんかね?」

二人の会話に皐月は首を傾げる。
そんな皐月に、老人は気付き、挨拶する。
「そうじゃ、王(わん)ちゃんや、この子は皐月といってな、わしの孫なんじゃよ」
「なんじゃ、久しぶりに会ったら、孫自慢か？」
老人がそう言うと、拓蔵は少し顔を険しくし、
「じつはな、あんたに聞きたいことがあってきたんじゃよ。昨夜、皐月は知り合いが入院している病院から帰っているとき、何者かに襲われたんじゃがな、どうもあんたが匿ってるホームレスと、襲った本人が言っておったそうなんじゃ」
そう言われ、老人は顔を歪める。
「それはいつだい？」
「えっと、病院から少しはなれたところですから、大体８時３０分くらいかと」
「それくらいの時間だと、みんな寝ていることが多いね。活発に動くとすれば十二時を回ったくらいだろうし」
その言葉に、皐月は再び首を傾げた。
「ホームレスはコンビニや、レストランから賞味期限などで出た残飯を目的にして、徘徊するからね。その時間だとまだお店は開いてるだろ？　それに、いつでもあるわけじゃないから、あまり早い時間から行動するってのもないんだよ」
そう言われ、なるほどと、皐月は理解する。
「しかし、あんたから金を出されてともいっておったそうなんじゃよ」
拓蔵がそういうや、老人はククと笑った。
「人にやる金があるくらいなら、こんな質素な生活はしとらんよ」
老人は笑いながら、皐月と拓蔵を見た。
「久しぶりに会ったんじゃ、ちょっとうちによっていかんか？」
老人にそう誘われ、皐月は拓蔵を見た。
「皐月、この老耄爺(おいぼれじじい)が、ただの浮浪者だと思わんほうがいいぞ。そ

れに、どうして皆から“ロワ”と呼ばれているかもわかるしな」
拓蔵にそう言われ、皐月は三度首を傾げた。

老人のダンボールハウスの中を覗いた皐月は、その光景に唖然としていた。
畳三畳ほどあるその広さに、敷布団がひとつ。その近くには携帯ラジカセと、小さなコタツテーブルが置かれている。
奥のほうを覗くと、小さな二段式冷蔵庫があった。
話を聞けば、それらすべて、老人が趣味で直したものだと、本人が説明した。
「そうじゃ、ちょっと酒持ってきたんじゃが、少しばかり肴を繕ってくれんかの？」
拓蔵にそう言われた老人は、ダンボールハウスの中に入り、冷蔵庫を漁る。
「うーん、チーかまがあるが、それでもいいか？」
「客にそのまま食わせるのか？　帝國ホテルでコック長をしとった人間が」
「帝国ホテル？」
皐月が老人に尋ねると、「昔ちょっと働いてたんじゃよ」と老人は答えた。
「皐月、ホテルの最高客室はなんと言うかしっとるか？」
そう訊かれ、皐月は少しばかり考えると、
「ロイヤルだっけ？」
「まぁ、場所々で言い方は違うが、元の語源はフランス語で王室という意味なんじゃよ」
老人が冷蔵庫から、チーかまと、細かく切られた野菜を、ガスコンロで炒めている。
「帝國ホテルで働いておったからな、それによく皆が持ってきた材料で、料理をしていることから、王様という意味の“ロワ”という

別称でいわれておるんじゃよ」
拓蔵は持参した酒を飲みながら、そう言うと、
「それじゃ、爺様はこの人の本名知ってるの？」
皐月はそういうが、拓蔵は首を横に振った。
「わしはこの爺さんの本名は知らんが、料理の腕は瑠璃さんに負けず劣らずじゃよ。なんせ、料理を教えたのはこの人なんじゃからな」
そうこう話しているうちに、料理が出来上がり、それを食べると、皐月と拓蔵は舌鼓を打った。

陸・ネグレクト

王様（ロワ）はダンボールハウスの屋根から深さの浅い籠を取り出した。
その籠の中には、植物の根っこが敷かれ、乾燥されている。
その根っこを包丁で細かく切り、さらに発電機に繋げたミキサーで細かく砕くと、それをフライパンで炒める。
ご飯のおこげみたいな匂いがしてきた。
炒った粉をコーヒーフィルターに入れ、コーヒーメーカーにセットすると、漢方薬のような、独特の匂いが漂ってくる。
そして、それをコーヒーカップに注ぎ込んだ。
「ほい、食後のコーヒーじゃ。口に合うかわからんがな」
王様（ロワ）からコーヒーを渡された皐月は、息を吹きかけて少し冷ますと、それを口にした。
「――あれ？」
皐月はコーヒーを口にしたが、作っている工程に違和感があった。
確かに味はコーヒーである。苦味の中にも、ほんのりと甘みがあり、甘党の皐月はあまり言わなかったが、砂糖が少しばかり欲しいと思っていた。
しかし、普通コーヒーは“豆”から作るものであるにも拘らず、王様（ロワ）は植物の根っこから作っている。
味以前に、それが不思議だった。

「皐月ちゃんが飲んでいるのは、“ダンデライオン”というコーヒーなんじゃよ」
王様（ロワ）がそう言うと、「職業柄気取りたいのはわかるがな、平たく言えばタンポポの根っこで作ったコーヒーじゃよ。タンポポは多年草じゃからな、浅葱橋の河川敷にも咲いておるじゃろ？」
拓蔵にそう言われ、皐月は驚いた。
「こういう生活をしとるとな、昔の人が野草を食べていたのかが重

々わかってくるよ。春の七草や、秋の七草、蓬に薇。生きていくにはそういう知識も必要になるからのう」

王様はなんとも楽しそうに説明する。それは自分が料理人であったこともあるが、なによりものを大切にするという気持ちを、ホームレスになって初めて知ったのだ。

忙しかった現役時代とは違い、のんびりとした時間の流れで得た知恵であった。

「そういえば、皐月、お前確か苦いものはだめじゃなかったか？」

拓蔵がそういうと、「砂糖がたしかあったはずじゃがな」と王様が冷蔵庫の中を探すが、皐月になかったと答えた。

「あ、大丈夫です。これくらいだったら飲めますから」

本当は飲めないのだが、コーヒーの正体を知った以上に、味が美味しいので、出来ればこのまま飲んでみたくなっていた。

「それで、さっきの話じゃが、皐月ちゃんを襲った犯人は、本当にわしが仕向けたといっておったんじゃな？」

王様にそう言われ、皐月は頷き、証拠として撮った画像を見せた。

「おやおや、えらくやり返されておるな。まぁ、自業自得じゃろうて」

王様は哀れむわけでもなく、ケラケラと笑う。

「しかし、わしは皐月ちゃんを襲うようになんて命令はしとらんよ。しかも、昨日河川敷で死体が発見されたそうじゃしな」

王様はそう言うと、拓蔵と皐月のうしろに立っている人物を見やった。

「あら、お気づきでしたか？」

阿弥陀警部が笑みを浮かべながら、会釈する。

「それで、先ほど皐月さんが襲われたと話してましたけど、詳しく聞かせてくれませんかね？」

「別に構いませんけど――」

そう言うと、皐月は昨夜の出来事を阿弥陀警部と王様に説明した。

「それでよくまぁケロッとしておるな？」
王様（ロワ）が驚いたような呆れたような表情を浮かべる。
「しかし、一人頭五万円ですか、なんとも安い依頼金ですな。私でしたら、五千万くらいは出しますよ」
阿弥陀警部がそう言うと、「ちょっと、物騒なこと言わないでくださいよ」
皐月がそう怒鳴りつける。
「いや、だって皐月さんを殺すくらいでしたら、それくらい出して、それこそ、その道のプロにお願いしないと殺せないでしょ？」
確かにそうだと拓蔵は笑った。それを見て、皐月は頬を膨らます。

「まぁ、昨日起きた浮浪者狩りも依頼があってやったのか」
「ああ、そういえば、昨日の夜、ニュースで言ってましたね。被害者の鈴崎司郎は浮浪者だから、襲われたとか何とか」
阿弥陀警部と皐月の話を聞きながら、王様（ロワ）は少しばかり顔を歪めた。そのことを拓蔵が尋ねる。
「いや、わしはこの公園で暮らしてるホームレスの顔と名前は知っておるつもりなんじゃがなぁ？」
「知らない人なんですか？」
皐月がそう王様（ロワ）に尋ねると、拓蔵が「写真は持ってきとらんのか？」と、阿弥陀警部に尋ねた。
「ええ。王様（ロワ）さんの話を聞いた後、神社に伺おうと思ってましたから」
そういいながら、阿弥陀警部はカッターシャツの胸ポケットから、写真を取り出した。

「どうですかな？　王様（ロワ）さん」
阿弥陀警部から写真を受け取り、王様（ロワ）は被害者を翌々見たが、
「いや、まったく知らんよ。そもそも、どうしてこの人がホームレ

スなんていう考えがでたんだい？」
　そういいながら、王様（ロワ）は写真を阿弥陀警部に返した。
「まぁ、こちらは詳しく調べないとわからないんですけど、所有していたものが質素だったんですよ。というより、無一文だったんですよね」
「無一文だから、ホームレスとな？　そりゃまた結滞な偏見じゃな？　よく空き缶を集めてるホームレスとかおるじゃろ？　あれをリサイクルしてくれる工場に売って、生計を立ててる人もおるんじゃよ」
　それは人から見れば、スズメの涙ほどだとしても、その日しのぎで生きているだけでもいいのだと王様（ロワ）は説明する。
　また、ホームレスが空き缶などの資源を集めていることで、自治体が黙って見過ごしてはいない。実際に京都市の条約で、回収業者以外のゴミの収集は禁止されている。

「まぁ、一応知らないということですな？」
「なんなら、この公園で住んでるほかのホームレスにも聞くか？」
　そう王様（ロワ）が尋ねると、「いや、結構です」と阿弥陀警部は首を横に振った。
「ただ、鉄パイプが発見されたので、それから指紋検出しようと思ったんですけど」
「手袋をはめていて、指紋が検出されなかったってことじゃないんですか？」
　皐月がそう尋ねると、「それよりも、この鈴崎司郎の素性ですよ」阿弥陀警部が珍しく怒っているので、皐月と拓蔵は首を傾げる。
「いやですね。鈴崎司郎は浮浪者でもなんでもないんですよ。ただの役所勤めだったんです」
「それじゃ、どうしてさっきは王様（ロワ）さんに、知らないかなんて訊ねたんですか？」
　皐月がそう尋ねると、「その鈴崎司郎は、地域課の人間で、ここ

らを調べていたそうなんですよ。それで調べたんですけど、ちょっと裏があるみたいなんです」

「――裏？」と王様（ロワ）が険しい表情で尋ねた。

「町長がマニフェストで、よりいい地域生活をするために、とか何とか言って、ここ最近、児童養護施設で暮らしてる子供たちを、親の元に返したりとか、ネカフェ難民でしたっけね？　そういう人たちを施設に送ったりとか」

「それって、横暴過ぎませんか？」

皐月がパンッとテーブルを叩く。

「だって、児童養護施設って、親がいなかったり、理由があって、親と暮らせない子供たちを、一時的に預かってる施設でしたよね？」

「皐月、少し落ち着きなさい」

拓蔵は皐月の肩をやさしく叩き、気持ちを宥める。

「ただ、奇麗事で済ませないのも、ひとつの理由ですね。犯罪者を匿っているという矯正施設もありますから」

「二度とそうさせないように、更生させるのが、その施設の役目でしょ？　それに住民を説得してじゃないと作れないんじゃないんですか？」

「たしかに、ただ“綺麗な町つくり”には、そういう場所は必要ないってことでしょうね」

阿弥陀警部がそう言うと、皐月は歯軋りを鳴らした。

「それじゃ、生きてる犯罪者は、法できちんと裁かれた犯人は、更生の余地なんてないって言ってるようなもんじゃないですか？　殺人を犯した犯人は、死ぬまで更生しない？　盗みをした犯人は？　大切な人を奪われて、人を殺さなければいけなかった人は？　あんたたち、警察だって！　市民を守るためとか何とかぬかして！　傍から見れば、犯罪に手を染めてるじゃない？」

「皐月、少し落ち着きなさい」

拓蔵はゆっくりと皐月に深呼吸をしなさいと促す。

「すまんな阿弥陀警部。今日はここでお暇するわ」
拓蔵は皐月に、帰るぞと耳打ちする。皐月は素直に立ち上がり、トボトボと拓蔵の後を追った。

「阿弥陀警部？　どうしてそんなことを？　あの子がどんな思いで、人ならぬものを罰しておるか知っておるじゃろ？」
王様（ロワ）がそう言うと、阿弥陀警部は少しばかり頭をかくや、
「人の世は、私たちが思ってる以上に奇麗事で済まされないんですよ。それに、鈴崎司郎がこの公園を調べていたのは本当のことですし、だからこそあなたに尋ねにきたんですよ」
「何度も言うが、わしはしらんよ」
王様（ロワ）はそういいながら、タンポポコーヒーを飲み干した。

「ほれ、アイス」
浅葱橋から少し離れた繁華街にあるコンビニの前で、皐月と拓蔵はベンチに座って、アイスを食べていた。
「どうじゃ？　機嫌は直ったか？」
「機嫌も何も、私は――」
「わかっておる。いろいろな犯罪者を見てきたお前じゃ。そう怒りたくもなるじゃろ？」
拓蔵がそう尋ねると、
「そうじゃないの。私たち姉妹も、爺様がいなかったら、養護施設に預けられてたんだろうなって――」
皐月や弥生、葉月の三姉妹は、６年前、不慮の事故で、両親が行方不明になっている。
そして三姉妹を、母方の祖父であった拓蔵が引き取ってくれている。
「それに、親がいても、虐待とかの理由で、施設に預けられてる子もいる。親が更生して、自分から引き取りにきたのなら、まだいい

よ。でも、あの話を聞いてると、何か全部、町長の私利私欲のためだけに、ムリヤリ親元にかえしてるって気がして」
皐月がそういった時だった。

「皐月さん、拓蔵さま」
そう声をかけられ、二人は声がしたほうを見やると、
「煙々羅？　どうかしたの？」
皐月が声をかけると、煙々羅は険しい表情を浮かべ、「浅葱橋の下に来てください」と伝え、皐月と拓蔵をその場まで案内した。

そこには瑠璃と浅葱の姿があった。
「閻魔さま？　それに浅葱も」
「皐月、怪我は大丈夫ですか？」
瑠璃がそう尋ねると、「え？　あ、大丈夫です」と皐月は答える。
それを聞いて、瑠璃はホッと胸を撫で下ろした。
「それで、神様二人がどうしたんじゃ？」
「この前、李夢のことを調べてもらったんですが、やな予感ほど、的中してしまいますね」
「い、嫌な予感って？」
皐月は瑠璃が見せた物悲しい表情に、言葉を発せなかったが、訊かないわけにもいかなかった。

「李夢は、イベントがあった二日前に、児童擁護施設から親元にかえされてるのよ」
浅葱がそう説明すると、
「それって、もしかして――」
「ええ。今阿弥陀警部が調べている一連の事件と何か関係があると考えていいでしょうね。ただそれだけだったら、何とかなるんですけど」
瑠璃がそう言うと、

「調べたところ、その母親は全くといっていいほど、李夢を育てていないんです」

それを聞くや、皐月と拓蔵はゴクリと、喉を鳴らした。

「それってつまり、育児放棄（ネグレクト）ってこと？」

「子を持った母親は、自分の子供を、無償の愛で育てなければいけません。それは、人間だけではなく、他の動物でも一緒です」

瑠璃は閻魔王ではあるが、別名地蔵菩薩といい、親より先に死んだ子供の霊を救う神と言われている。

「それじゃ、李夢ちゃんが怒られているときに何も反応しなかったのは」

「おそらく、感情が麻痺してしまったんでしょうね。子供は、大人のちょっとした反応でも、敏感ですから、泣いたら、親を困らせてしまうと思ったんでしょう」

瑠璃がそう説明すると「でも、それじゃどうしてあの時、李夢ちゃんは家から裸足で飛び出してるんですか？」と皐月が尋ねる。

「それはまだわかりませんが……」

煙々羅は申し訳なさそうに、顔を俯かせる。

「皐月、あなた、大禿（おおかぶろ）って知ってる？」

痺れを切らした浅葱がそう言うと、皐月は少しばかり考えるが、首を横に振った。

「大禿。その姿は小さな女の子のようであるが、齢幾百年も生きているといわれている妖怪。その姿はよく禿（かむろ）のように描かれている」

「あれ？　禿（かむろ）って……」

「ええ。今は橋姫として、この浅葱橋に祭られているけど……　生きてる時は、私も遊郭で暮らしていた禿（かむろ）だったからね」

昔、民宿街と繁華街を繋ぎ合わせるために、浅葱は、とある罪によって、人柱となり、橋を建設した。

「まぁ、それは別に自分が撒いた種だし、仕方ないって割り切ってるけど。今回の件はどうもね」

そういうや、浅葱はゆっくりと姿を変えた。

その姿は、遊郭の禿姿を思わせる和装というよりかは、最近の女子中学生が着るような、カジュアルな服装である。

「弥生の知り合いに、穐原という青年がいたでしょ？」

そう訊かれ、皐月は少し思い出し、頷いた。

「彼が昨日、デパートで李夢と接してるの」

偶然じゃないのかと、皐月は聞き返したが、

「その時の李夢、穐原に絵を描いてもらってたんだけどね。顔には出してなかったけど、楽しそうだった」

「先ほども云ったように、子供は大人が思っている以上に敏感ですが、また素直でもあるんですよ」

「それに、母親に描いてもらった絵を捨てられたとき、李夢はわずかにですが、感情を表に出していました」

それを聞くと、皐月は浅葱に何をするのかと尋ねる。

「瑠璃さんの話を聞いている以上、無視は出来ないでしょ？」

「それはそうだろうけど。でも、どうしたのよ？　やけに協力的じゃない？」

「私も孤児だったからね。姉女郎から色んなことを教えてもらってはいたけど、母親がいなかったから、何か母親から虐待を受けてるかもしれない李夢が他人みたいに思えなくなって」

皐月はそれ以上、何も聞けなかった。

陸・ネグレクト（後書き）

皆さんも試してみよう。タンポポコーヒー。私は飲んだことないですけどｗ

漆・女衒（前書き）

女衒（ぜげん）：主に若い女性を買い付け、遊郭などで性風俗関係の仕事を強制的にさせる人身売買の仲介業のこと。

漆・女衒

夕暮れの繁華街。風俗街の一角に、人気のない裏通りがある。
そこには夏だというのに、暑苦しいスーツ姿の男性二人組と、女性――李夢の母親である、赤口華蓮（せきぐちかれん）が会話している。

「それで話はどうなってるの？」
華蓮は責め立てるように、黒服の男たちに詰め寄る。
「それは先日、きちんと入れられたはずだ」
「ええ。あの李夢（餓鬼）を引き取って、町長の言ってるマニフェストに協力しろって話だったでしょ？」
華蓮はそういいながら、煙草を咥え、紫煙を噴出す。
「そのあとのことはどうだ？」
「あ？　あの子だったら、勝手にしてるんじゃないの？　こっちは瘤がいるだけで、男が近づきゃしないんだ。大体あの子だって、誰の子供なのかも知らないし」
華蓮が煙草の灰を落とすと、それが水溜りに落ち、ジュッと音が鳴る。
「それにね、あの子は私の子供でも、育てる義理はないんだ。あんたたち行政が、ああいうのを施設にぶち込んでくれればそれでいいんだよ。それをなんだい？　お金をやるから、引き取ってくれだぁ？　ふざけるんじゃないよ」
「しかしな、実の親が子供を引き取るのは、道理だと思うが？」
「さっきも云ったけど、私はあの子を育てる義理はないって云ってるでしょ？」
黒服の一人が、呆れた表情で頭をかく。
「それだったら、支払ったお金を、全額返してもらうが？」
そういうや、華蓮は慌て出し、
「ちょっと、それは困る。こっちは、男に騙されて、多額の借金を

抱えちまってるんだ。それに、もらったお金は全部そっちに回しちまったから、もう手元には」

それを聞くや、黒服の二人はため息をついた。

「それで、李夢さんは今、何をしているんです？　一応確認のために、家に行きたいのですけど」

黒服の一人がそう言うと、

「り、李夢は今昼寝中だよ。あの子が起きるくらいに家に着くだろうからね」

「そうですか？　それじゃ私たちも――」

「いや、ちょっと困るんだ。部屋は荒れてるし、それに人様が上がれるスペースなんてないし」

華蓮があまりにも慌てるので、黒服の一人が携帯で連絡を入れる。

「どこかに連絡してるのかい？」

「ええ。一応児童相談も兼ねているのでね。まぁ、こちらは“何かが起きなければ、動くことが出来ませんけど”」

黒服がそう云うや、華蓮はホッと胸を撫で下ろす。

「それじゃ、今日はこの辺で失礼します。近々、近況確認をしに、お宅まで伺いますので」

黒服の二人は頭を下げるや、華蓮とわかれた。

華蓮は歯軋りを鳴らすや、踵を返し、煙草の吸殻を捨てるや、家へと帰っていった。

「どう思います？　闇魔さま――」

黒服の一人が、店の裏側で見張っていた瑠璃にそう尋ねる。

「ええ。ほんと、嫌な予感ほど、当たってしまいますね」

瑠璃は残念そうに、そして哀れむような表情で、自分の足元で倒れている黒服の男を見つめた。――それは奇しくも、先ほど華蓮と

話していた黒服の男である。
「しかし、少しばかり遣り過ぎな気がしますね」
黒服の男――煙々羅は、少女の姿に戻り、瑠璃に話しかける。
「それは、私の遣り方がですか？」
瑠璃がそう尋ねると、煙々羅は首を横に振った。いや、本心では、瑠璃の遣り方に強引なところがあったが、それを云うのはやめたほうがいいと、煙々羅は感じていた。
「しかし、不当な方法で子供を親元に帰していたとは」
「信じられませんけど、赤口華蓮の銀行口座に、百万ほどお金が入れられていましたよ」
路地の奥から声が聞こえ、瑠璃と煙々羅はそちらを見やる。
「やはり、そちらが調べている鈴崎司郎も関係してましたね？」
瑠璃が尋ねると、阿弥陀警部は被っていた麦藁帽子を脱いだ。
「ええ。町長の命令かどうかはわかりませんが、李夢さんが預けられていた児童養護施設の園長に訊ねたところ、李夢さんを引き取ったのは母親の華蓮ではなく、鈴崎司郎でした」
「施設の人は疑わなかったんですか？」
煙々羅が阿弥陀警部に尋ねると「子供の引き取りには裁判とか、そういうのが必要になるんですけど、そこの園長は何も聞かされなかったそうなんですよ」
「それも不当な方法でってことでしょうね」
瑠璃は煙々羅に視線を送ると、「阿弥陀警部、子供は何のためにいるんでしょうね？」
その問いかけに、阿弥陀警部は答えられなかった。
――いや、何を答えても、すべてが正解ではないと思ったからである。
むしろ、何を云っても、瑠璃が納得するような答えは出てこなかったといったほうが正解である。
「ただ、今回の事件――　どうして、浅葱はあそこまで協力的なの

か、それに、まだ妖怪の仕業だと」
「ああ。それなんですけどね。ちょっと気になることが――」
阿弥陀警部がそう言うと、瑠璃と煙々羅に耳打ちをする。
話を聞いている瑠璃と煙々羅の表情は見る見るうちに険しくなっていく。
「もし、児童養護施設に預けられた原因がそれだったとしたら、また再発してるって可能性もあるじゃないですか？」
そしてそれが、李夢が感情を麻痺している理由だとすれば、取り返しのつかないことになると、阿弥陀警部は二人に伝えた。

◇◆◇◆◇◆◇◆

赤口華蓮と娘である李夢が暮らしているアパートの近くに、小さな公園がある。
敷地内には、砂場やブランコ、滑り台と、極めて一般的な遊具が置いてあり、李夢はそこのブランコでゆらゆらとこいでいた。

「李夢ちゃん」
誰かに声をかけられ、李夢はそちらに振り向くと、
「お兄ちゃんのこと覚えてる？　ほら、昨日デパートで会ったでしょ？」
話しかけた相手が穐原だとわかるや、李夢はブランコから降り、そそくさと砂場へと走っていく。
そして、周りを見渡し、何かを見つけたのか、それを取りにいく。
拾ったのは木の枝である。
李夢はそれを手に取り、穐原を手招きした。
穐原は首を傾げながらも、李夢のところへ駆け寄る。

「なに？　ここに何かあるのかい？」
穐原がそう尋ねると、李夢は枝で砂場に何かを描いていく。

「えっと？　何か描いてほしいの？」
李夢の描いたものはぐにゃぐにゃとしているが、何を描いてほしいのかはすぐに理解する。
「ちょっと待っててね。今お兄ちゃんスケッチブック持ってないんだ」
穐原はリュックを背負っていない。つまりは財布や携帯以外は、何も持っていないということになる。
それがわかるや、李夢は露骨に残念そうな表情を浮かべた。
「あ、ちょっと待って。李夢ちゃん、その枝貸してくれないかな？」
そう言われ、李夢は首を傾げたが、持っていた枝を穐原に渡した。

穐原は砂場の盛り上がった場所を靴で均し、描きやすくする。
「何を描いてほしいの？」
そう尋ねると、李夢は何かを描くような仕草をし、少し考えるや、ハッとした表情で、それを破り取る仕草をする。
そして、その紙を誰かに渡すというジェスチャーを見せた。
「えっと、もしかして、この前描いたやつ？」
そう言うと、李夢は激しく頷いた。
「そっか。それじゃ、ちょっと可笑しくなるけど」
穐原は枝を手に持ち、砂場に絵を描いた。
それはあの時、デパートで穐原が李夢に描いてあげた、アニメのキャラクターであった。

「これでいいかな？」
そう尋ねると、李夢は笑みを浮かべた時だった。
「李夢っ！　どこにいるの？」
アパートの方から、母親の声が聞こえてきた。
「李夢ちゃん、そろそろおうちに帰らないと」
穐原がそう言うと、李夢はポケットから手袋を取り出し、穐原に渡した。

「これは？」
穐原が尋ねようとするが、李夢は逃げるように、母親の元へと走っていった。
穐原は受け取った手袋を見つめ、それをポケットに入れたときだった。

手袋に膨らみがあり、その中身を見ると、白い粉が袋に入っていた。
穐原は首を傾げ、公園をあとにしようとした時である。
「その粉……　警察に届けたほうがいいわよ。それにその手袋もね」
少女がそう言うと、穐原は驚き、少女のほうを振り返ったが、すでに少女の姿はなかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆

ガラガラと、ものが雪崩落ちる音が、狭いアパートの中で響き渡った。
「ないっ！　ないっ！　ないっ！」
華蓮が、部屋の中をひっくり返すかのように、箪笥の中や、積み重ねたゴミの山を漁っている。
「どうして？　どうしてアレがないのよ？　アレがないとだめなのよ！」
半狂乱になりながら、華蓮はゴミを撒き散らしている。
「李夢っ！　あんた、白い粉知らない？　小さい袋に入ったやつ！」
そう尋ねるが、李夢は答えなかった。
「このゴミがぁっ！」
怒りで我に忘れた華蓮は、李夢のおなかを思いっきり蹴った。

「げぇ、ほぉっ！　げほ、ごほ」
李夢は横たわり、咳き込む。

「まったく、どこにいったのかしら？　手袋もなくなってるし」
華蓮はそういいながら、李夢を睨みつける。
「まさか、あんた――　私がいない間に」
華蓮はそう考えるや、思考するよりも前に、李夢に手を出していた。
「あんたはやっぱり疫病神よ！　あんたなんて死ねばいいんだ！　ええ。そうよ！　餓鬼はやっぱり餓鬼なのよ！」
その怒号を、もはや李夢の耳には聞こえていなかった。

『助けて――』
小さな悲鳴は、聞こえなくなった。

阿弥陀警部は稲妻神社に訪れ、先の被害者である鈴崎司郎の遺体が写された写真を、葉月に渡した。

葉月は写真を卓袱台の上におくや、深呼吸し、写真の上に手を翳し、ゆっくりと摩り始めた。

「――こども？」

葉月がそう言うと、その場にいた、皐月と弥生、拓蔵、阿弥陀警部の４人はキョトンとした表情を浮かべる。

「こどもの喚き声？　えっと――」

葉月は困惑した表情を浮かべたまま、瞑っていた両目を、より強く瞑った。――が、それ以上聞こえないのか、葉月はゆっくりと写真から手を離した。

「子供の喚き声って、どういうことですかね？」

遊火が皐月にそう尋ねるが、皐月も首を傾げている。

「鈴崎司郎が殺されるような感じはあったんですか？」

「地域開発で、公園に住んでるホームレスを撤退させる運動をやっていたみたいですから、逆にホームレスから襲われたという可能性も否定できませんね。でも、あの公園に住んでるホームレスは、王様さんが殆ど管理してますからね。王様に反旗を翻すのは、容易じゃないと思いますよ」

「私が襲われたことも、王様さんは知らないようだったし」

「にわかに信じられませんが、嘘を吐いていると思いますが――鈴崎司郎が殺された時間、あの人コンビニにいたそうですし、その時間の防犯カメラに写ってましたから、アリバイはありますね」

王様には完璧なアリバイがあると、警察は見ているようだ。

「皐月を襲った犯人の身元はわかったんですか？」
「一応ホームレスには変わりなかったんですけど、あの公園には住んでなくて、繁華街の地下通路に住んでいたんですよ。それに、王様さんの写真を見せたら、皆さん首を傾げてましたよ」
阿弥陀警部がそう言うと「それじゃ、依頼主を知らなかったってことですか？」
皐月がそう尋ねる。
「それに襲った後にお金をもらうことになっていたらしくて。まぁ、彼らにしてみたら、骨折り損の草臥れ儲けですよ」
阿弥陀警部はそういいながら、葉月を見やった。
「霊視は一日一回までじゃよ。それ以上したら、この子の精神がもたん」
「わかってますよ。でもやっぱり子供の泣き声ですか。いくらなんでも子供と一緒にいたときに殺すとは思えませんし、なにより、そんな時間に起きてるとは思えませんがね」
「正式な死亡推定時刻はどうなっとるんじゃ？」
「死亡推定時刻は夜中の2時～3時の間。近辺で暮らしているホームレスは殆ど寝てたそうですし」
「繁華街の人たちには訊かなかったんですか？」
「あの時間だと、盛り上がってて、誰がどこにいたとか、わかったもんじゃないですよ」
阿弥陀警部がそう言うと、彼の携帯が鳴った。

「あ、はい。阿弥陀ですけど？　どうしたんですか？」
『あ、警部？　ちょっと戻ってきてくれませんか？　ちょっとへんな人が本庁に来てまして』
電話の相手は岡崎巡査である。
「えっと、落ち着いて、順をおって話してくれませんか？」
『それが、穐原と名乗る人物から、手袋と粉が入った袋を渡された

んです』
「穐原さん？」
弥生がそう言うと、「お知り合いですか？」と阿弥陀警部に尋ねられ、「え、あ、はい」と弥生は答える。

「その穐原さんがどうして警視庁に？」
『今もってきたものを鑑識課に渡して調べてもらってるんですけどね。その、手袋は何なのかわかりませんが、白い粉はおそらく……』
電話の先にいる岡崎巡査が誰かと話している。
『ちょっと、電話変わるぞ。阿弥陀警部』
「――湖西主任？」
電話を変わったのは湖西主任である。
『今鑑識結果が出たんじゃけどな、白い粉は覚せい剤じゃったよ』
「なっ！？　覚せい剤？」
阿弥陀警部がそう叫ぶと、「どうして、穐原さんがそんなものをもってるんですか？」
弥生が電話の先にいる、湖西主任に尋ねる。
『いや、一応確認のために、その穐原という青年の血液を検査したがな、まったくの陰性じゃったから、安心せい。ただ、その手袋に付着していた血液なんじゃよ』
湖西主任がそう言うと、「なにかわかったんですか？」と阿弥陀警部が尋ねる。

「手袋にわずかじゃが、血が付着していておってな、それが鈴崎司郎を殺した凶器である鉄パイプについていた血痕が一致したんじゃよ」
「それじゃ、犯人は穐原さん？」
弥生はそういうや、崩れるように座り込む。
『阿弥陀警部、ちょっと弥生ちゃんに代わってくれんか？』
そう言われ、阿弥陀警部は携帯を弥生に渡す。

『弥生ちゃん？　なんか勘違いしとるようじゃから云っておくが、彼はある人から受け取ったと云っておるんじゃよ』
電話越しで湖西主任が、弁解する。
「ある人？」
『それに、早くしないと、取り返しのつかないことになるかもしれないとも云っておったな。一応参考人として、一日、二日はこっちの世話になってもらうがな』
湖西主任がそう伝えると、電話を切った。

「湖西主任はなんと？」
弥生から携帯を受け取った阿弥陀警部がそう尋ねると、
「穐原さん、早くしないと、取り返しがつかないかもしれないって」
「穐原さん、誰にもらったんだろう」
皐月がそう言うと、スーと、障子襖が開いた。
入ってきたのは瑠璃である。

「瑠璃さん、どうかしたんですか？」
皐月がそう尋ねると、瑠璃は阿弥陀警部を一瞥する。
「阿弥陀警部？　児童虐待の疑いがあった場合においても、現行犯じゃなければ連行することも出来ないんですよね？」
瑠璃がそう尋ねると、「ええ。それがどうかし」
「浅葱から報せがあって、李夢の家から、変な気配がすると」
「それだったら、どうして浅葱が調べないの？」
皐月がそう尋ねると、瑠璃は怪訝な表情を浮かべた。
「李夢さんには、虐待された形跡があったんです。それに母親である華蓮は、李夢の存在を疎ましく思っていました。そんな状態で、李夢さんはいったい何をしますか？」
阿弥陀警部にそう言われ、
「悲鳴を挙げることすら出来ない？」
弥生がそう言うと、「私もそう思ったけど、でも、穐原と接して

いた李夢は、心から喜んでいた。だからあの子は、穐原にすべてを託したのよ」

何時の間にいたのか、浅葱がそう言うと、

「では、借金とかは」

「多分、薬を買って出来たんでしょうね。それに、自分の体を売っていたこともわかったわ。李夢はその中で生まれた子供だってことも」

浅葱がそう言うと、阿弥陀警部は少し顔を歪め、

「町長は綺麗な町つくりとして、李夢さんを児童養護施設から母親の元に戻した。その母親は娘を疎んじている」

「なによ、それ？　それじゃ、李夢ちゃんがかわいそすぎるじゃない！」

皐月がそう云うや、「だから私は、李夢が穐原に助けを求めたのも理解出来――」

浅葱が言葉を発しているとき、阿弥陀警部の携帯がもう一度鳴った。

「あ、はい」

『阿弥陀警部？　至急現場まできてください』

「現場？　何か事件でもあったんですか？」

『はい、火事が起きてるんです。場所は浅葱橋の繁華街近くにある――』

場所を聞くや、阿弥陀警部は目を大きく開いた。

「皐月さん、急いでください！　現場は李夢さんの」

「って云われても、場所知りませんよ」

皐月がそう云うや、「煙々羅っ！　皐月を案内してあげてください！」

瑠璃がそう呼びかけると、煙々羅が姿を現し、皐月を案内する。

「皐月、これを！」

弥生が二本の竹刀を投げ渡すと、皐月はそれをもって走り出した。

「大禿（おおかぶろ）、あなたいったい何を考えているの？　あなただったらわかるでしょ？　同じことをされたあなたなら――」
浅葱は苦しむような歪んだ表情を浮かべていた。

現場に駆けつけた皐月と煙々羅は、その光景に絶句していた。
赤々と燃え盛るその炎は、今にもアパートを燃やし尽くそうとしている。
パトカーやら、消防車のサイレンが聞こえ、消火活動が行われようとしていた。
「煙々羅っ！　中に入って、人がいないか確認してきて。遊火もお願い」
皐月にそう言われ、遊火と煙々羅は炎の中へと消えていく。
「危ない、崩れるぞ！」と誰かが悲鳴に近い大声を挙げると、崩れるような音が聞こえ、さらに炎は勢いを増していく。

「遊火っ！　煙々羅っ！」
皐月がそう叫ぶと、「皐月さま！　こちらに来てください」
炎の中から遊火の声が聞こえ、皐月はそちらに行こうとするが、
「駄目じゃないか、君！　これいじょう近づいたら」
男性が皐月を食い止めようとする。
「今大事な仕事してるんですから、邪魔しないでくれません？」
煙と化した煙々羅が、男にまきつく。その間、皐月は逃れるように炎に近づいた。
「そういえば、煙の妖怪だっけ？」
皐月が感心するように言う。
「皐月さま、中に子供がいました。ただ、気を失っていて」
遊火がそう言うと、と皐月は遊火を後ろに下がられるや、
「吾神（わが）殿に祭られし大黒の業（ごう）よ！　今ばかり我に剛の許しを！」

皐月がそう天に叫ぶと……　両手に持っていた二本の竹刀が次第に刀へと変わっていく。

「二刀・赫破狩(もみじがり)っ！」

皐月は二本の刀を、水平にし、ドアに切りかかった。

ドゴンという爆発音とともに、皐月はドアごと吹き飛ばされた。

その一瞬の光景に、遊火は唖然としている。

「皐月さん？　何も考えないで、ドアを壊したら、バックドラフトが起きるくらい、学習してください」

煙々羅がそう皐月に声をかける。その皐月は、咳き込んでいる。

「そ、そういうのを先に言ってくれないかな？」

皐月は遊火を一瞥すると、遊火は申し訳ないように顔を俯かせている。

「そうだ！　李夢ちゃん」

皐月がそう言いながら、立ち上がった時だった。

ガラガラと大きな音を立てながら、アパートは崩れた。

玖・役割

翌朝のことである。
警視庁のソファに、弥生と拓蔵が座っていた。
「すまんな、朝早くから」
湖西主任が、コーヒーを片手に、弥生と拓蔵に声をかける。
「まったくじゃよ。それで母親の容態はどうなんじゃ？」
拓蔵がそう尋ねると「いまいち理解できんがな、火傷やらの外傷は多少あったが、命に別状はなかったよ。ただ、やはり薬をしていたことは間違いないようじゃな」
湖西主任の言葉に、弥生は首を傾げる。
「皐月ちゃんがドアを壊さなければ、二人ともあのままお陀仏じゃったろうな。まぁ、それがあの妖怪が伝えたかったことじゃろうし」
湖西主任はそう言いながら、向かい合わせにソファに座った。

「それと穐原といったかの？　彼が李夢さんから手袋と薬を受け取ったのを供述してくれたよ。全く、わしらを少しは信用してほしいもんじゃな？」
「穐原さん、なんて？」
「児童虐待が減らないのは、あんたら警察や、行政が被害にあってからじゃないと動かないから、減らないんだろう？ってな」
湖西主任がそう言うと
「わしが子供のころは、近所の人が当たり前に怒ったりしておったからな。今じゃそんなのがないじゃろ？」
「どんな形であれ、人は繋がっておったからな。今じゃ、隣の人は何する人ぞというより、家の人間は何する人ぞの時代じゃからな」
拓蔵と湖西主任の会話を聞きながら、弥生は背後に気配を感じた。

「あれ、弥生さん？」

声をかけたのはほかでもない、穐原である。その隣に阿弥陀警部が立っている。
「この度は、事件に協力していただき、ありがとうございました」
阿弥陀警部がそう云うや、穐原は思いつめた表情を浮かべた。
「どうかしたんですか？」
「あの、李夢ちゃんは、大丈夫なんでしょうか？」
穐原がそう尋ねると、「ええ。李夢さんは無事じゃったよ。ただ、精密検査なんかしないといけんから、すぐには会えんがな」
湖西主任がそう言うと、穐原はホッと胸を撫で下ろした。

「それで、実は皆さんに相談があって――」
穐原がそう言うと、その場にいた四人は驚いた声を挙げた。

◇◆◇◆◇◆◇◆

病室で眠っている李夢の頬を、瑠璃がやさしく撫でている。
「露世に漂いし、生命の魂よ。このものの傷を癒したまえ」
そう瑠璃が言うや、傷付いた李夢の傷は徐々に消えていく。

「これで、体の傷はなくなりましたが、心の傷はおそらく癒えないでしょうね」
瑠璃が病室にいる皐月と浅葱に声をかける。
「でも、どうしてあの時、アパートに、李夢ちゃんと、母親以外の人がいなかったのかしら？」
「多分、火事が起きたのを、誰かが教えたんでしょうね。だからみんな逃げ延びていた」
皐月の質問に、浅葱は答えながら、一辺を見据えた。
「そうでしょ？　大禿（おおかぶろ）」
浅葱の視線の先には、小さな女の子が立っていた。

その容姿は、十歳ほどの少女であり、服装は紅い木綿の着物である。

髪型はおかっぱ頭で、まるい印象がある。

「李夢の境遇が、自分と同じだったからほっとけなかったという、あなたの気持ちもわかるけどね？　下手をしたら、彼女を殺すところだったのよ」

浅葱はそう言いながら、大禿（おおかぶろ）に言い寄る。

「浅葱。そのへんにしたら、あんたと違って、彼女は人に姿を見せられないのよ？」

皐月がそう言うと、

「だったら、どうして頼ろうとしないのよ？　同じ遊女でしょ？　姉女郎に甘えたっていいじゃない？　そりゃすぐに赦せとはいわないけど」

浅葱がそう言うと、大禿は李夢に近づき、髪を撫でた。

「浅葱、大禿はどうして妖怪になったの？」

皐月がそう尋（ね）ねると、「大禿がまだ人間だったころ、姉女郎が鉄（か）漿、つまりお歯黒をしていたときに、うまくそれがつけられなくて、癇癪回（かんしゃくまわ）しの八つ当たりに、鉄漿（かね）を禿（かむろ）の口の中に入れたの。禿はその熱さに悶絶し、絶命した」

「つまり、李夢さんを庇った理由は」

瑠璃が大禿を見ながら言う。

「親の身勝手な虐待が、かつての自分の姿とダブったんでしょうね」

浅葱はそう云うや、

「やっぱり、李夢さんを火事から護ったのは」

「妖怪だからといって、人を護る妖怪もいます。ただ、大禿は李夢さんだけを護りたかったようですけどね」

瑠璃がそう言うと、皐月は首を傾げた。

「李夢にとって、もっとも危険な存在は何ですか？」

「えっと、母親……」
皐月は瑠璃の問いかけにハッとする。
「それじゃ、母親が助かったのって」
「子供にとって、どんな形であっても、母親は彼女だけだったということですね。これに懲りて、改心してくださると、地蔵菩薩としてはありがたいんですけどね」
瑠璃はそう言いながら、空を眺めた。

虐待によって死んだ子供の数は、厚生省の発表によれば、平成20年（二〇〇八年）において、64例67人の児童が虐待死しているとされている。
そのうち、最も多いのが、0歳児といわれている。また、加害者の多くは実の母親であり、望まない妊娠が多くを占めていた。

瑠璃は昔、自分はどうして拓蔵を好きになり、その間に、三姉妹の母親である遼子を産んだのだろうかと、後悔したことがある。
だが、地獄で地獄裁判の仕事をしながらも、その暇（いとま）、拓蔵と遼子が楽しそうに暮らし、遼子が健介と結婚し、三姉妹が生まれていく。
そんな幸せそうにしている姿が、強く印象に残っていた。
夫である拓蔵や自分と同じ十王、そしてそれを知るもの以外は、自分が皐月たち三姉妹の祖母であることは知らない。

「皐月、今回は閻獄を私に言い渡させてくれませんか？」
瑠璃はそう言うと、スッとお札を取り出した。
「閻獄第一条四項において、わが子を痛めつけ殺そうとし、剰（あまつさ）え、自分の利益のために利用した赤口華蓮を『等活地獄・多苦処（たくしょ）』へと連行する」
条例を言い渡すと、お札は消え、別の病院で眠っている華蓮の額に付くや、燃え尽きた。

皐月は条例を言っていた瑠璃の表情を見ながら、歯痒く感じていた。

等活地獄は八大地獄の中でもっとも軽い場所である。だからこそ、瑠璃にとっては、それ以上の無間地獄に落としたかったのだ。

子供を殺すことは、確かに大罪ある。

しかし、仏教における、最も重い罪とされる『五逆』において、子供を殺すことは入れられていない。瑠璃にとってもそれが歯痒かった。

神とはいえ、禁忌とされている人との繋がりである。

それだけでも大罪だが、瑠璃はそのことを後悔してはいない。

自分が苦しい思いをして産んだ子供を、簡単に殺せてしまう人間の思考が理解できない。

それが、彼女は歯痒かった。

拾・引き取り

バシャッと、何かが水にあたる音が、響き渡る。
「びっくりした」と葉月が声を挙げている。
彼女は薄着をしており、服の色が白いためか、濡れた服が肌につき、薄いピンク色の突起物が見えている。
「しかし、よくビニールプールなんてあるの覚えてたわね？」
ホースの先を摘み、水を飛ばしている弥生が、縁側で桶に水をはり、それに素足を入れている皐月に尋ねる。
「ちょっと思い出してね。ほら、よくお父さんが忙しくて、海とかにいけなかったでしょ？　それで私が駄々捏ねちゃって、買ってもらってたの思い出したの」
「あー、確かにそんなのあったわね。あんた、お父さん子だったから、よくお父さんと一緒に行くなんて言ってたっけ？」
皐月は真っ赤になるが、真実である以上、言い返せなかった。

「それで、穐原さんが言ってたことって実現できそうなのかな？」
「それはちょっと難しいわね。一度児童養護施設に預けられるけど――」
弥生はそう言いながら、あの時のことを思い出していた。

◇◆◇◆◇◆◇◆

「り、李夢さんを引き取る？」
弥生がそう云うや、穐原は頷いた。
「あんた、いくらなんでも」
「いえ、あの子があんな目に遭っていたなんて思ってませんでしたけど、どうして僕にＳＯＳを出したのか、彼女に何時の日か直接聞きたいんです。でも、あの母親の元に戻したら、あの子は」

穐原がそういうと、
「確かに、二度としないという保障はないな。ただ、李夢さんは、もう一度児童養護施設に入ることになるんじゃよ？」
湖西主任がそう尋ねる。
「わかってます。それに僕だって、すぐに彼女を引き取れるほどの経済力はないです。大学を卒業したら、働きます。いや、今からバイトを探して、地盤をしっかりしてからでも遅くないですよね？」
穐原がそう言うと、拓蔵が、
「あんたが本気でそう思っておるんじゃったら、立派な男になって、あの子を引き取ってやってくれんかの？　他人を護りたいと思う気持ちは、容易なことではないがな」
「はい。覚悟はしています」

◇◆◇◆◇◆◇◆

「後は児童養護施設との相談や、引取りにおける裁判云々、色々やらないといけないらしいわね」
弥生はそう言いながら、どこか楽しそうだった。
「どうかしたの？」と葉月が尋ねる。
「いや、李夢さんがどうして、あの日あの駅にいたんだろうって思ってね」
「そういえば、始めてあったとき、母親が家から抜け出したっていってたわね？」
「子供が裸足で、遠くに行くのはつらいのよ」
弥生がそう言うと、
「それじゃ、李夢ちゃんは最初から」
「ええ。多分だけど、大禿があそこまで案内したんでしょうね。李夢さんを護ってくれる人が来てくれるって」
それが穐原だったのかは定かではない。

誰かが役場内にある町長室のドアを蹴り破った。
「いったい何をしてるんですかね？」
中に入ったのは数人の警察である。その中に阿弥陀警部も含まれている。
「き、君たち！　い、いったい何者だ？」
慌てふためく町長が、震えた指で阿弥陀警部らを指した。
「見てわからないんですか？　警察ですよ。あなたを不当な方法を遣った疑いと、殺害を依頼したことに対してね」
「な、何を言っているんだ？　私は何も知らんぞ」
「そうですか？　それじゃ、この二人をみても？」
阿弥陀警部はそう云うや、黒服の男二人を目の前に投げ入れた。
彼らはあの時、華蓮と話をしていた黒服の男たちである。

「彼らから聞きましたよ。あなた、自分の条約を実行させるために、お金を使って、ある家族を利用してましたね。それを不審に思った鈴崎司郎を殺害させるためにも利用した」
「い、いったい何を言ってるんだ？　私はそんなこと知らんぞ？」
町長が慌てふためくと「好い加減にせんか？　自分の思い通りにならんから、人生は面白いんじゃろうが？」
そう言いながら、王様（ロワ）が町長室へと入っていく。
「お、お前はあの公園のゴミ虫ではないか？　こんなところに何のようだ？」
「人の名前を使って、少女を襲ったのもお前か？」
「い、いったい何のことだ？　いったい何の冗談だ？　私は町長じゃぞ？」
町長がそう言うと、阿弥陀警部と王様（ロワ）は顎を挙げた。

「あなたを最重要参考人として、連行します」

町長の周りに数人の警官が立ち、町長の腕を後ろに回す。
「や、やめろ！　お前たち、こんなことしてなんになると思ってるんだぁ」
町長は喚きながら、連れて行かれた。

「葉月さんの霊視は間違ってませんでしたね。手袋の裏に犯人の指紋が付いてましたよ」
葉月が霊視をしたときに聞こえたのは、母親を止めようとした李夢の泣き声であった。
ただ、声を知らなかったため、それに気付けなかったのである。
「しかし、犯人が手袋を捨てていなかったのは、まさに運だと思ったじゃろうな？」
王様（ロワ）はそう言いながら、阿弥陀警部を見たが、
「いや、おそらく李夢さんは、母親が遣ったことに違和感があったんでしょうね。だから、家が燃える前に、血の付いた手袋を、誰かに渡したかった」
いや、指紋がなくても、被害者と同じ血痕が付着していたのだ。
それだけでも十分証拠となった。

後日、町長は汚職と不当な方法で条約を果たそうとした罰によって、辞任し、刑務所に連行された。
鈴崎司郎殺害においては、町長に命令された華蓮が、実行犯であり、犯行を認めた。

しかし、皐月を襲わせたことに対しては、いまだに認めていない。

拾壱・子供

浅葱橋の手摺に、橋姫である浅葱が足をブラブラさせながら座っている。

彼女は、橋を行きかう恋人や家族を見ながら、彼らがこれから先も、幸せであってほしいと願った。

そうでなければ、自分が望んで人柱になったのか、わからなくなるのだ。

浅葱がこの橋を護る神となったのは、孤立していた遊郭にいる遊女たちが、見世物小屋にくる客以外の男と知り合い、あわよくば、結ばれてほしいと思った。

それはかつて自分が、民宿街の若旦那であった喜助を好きになったことに対しての答えである。

ただ、今は、数年後の李夢と穐原が幸せであってほしいと心から願っている。

そうでなければ、大禿の思いが無駄になってしまうからだ。

大禿はあの火事の時、李夢だけを助けようとしたが、李夢はそれを拒否した。

大禿はその行為に理解出来なかったのだ。

自分を痛めつけている母親を護ろうとする李夢に困惑しながらも、大禿は二人を護ったのである。

「人は変われる。変われなかったら、またあなたが李夢を助ければいいでしょ？」

浅葱はそう言いながら、ゆっくりと姿を消した。

空は快晴。雲ひとつない。
人の心も、そんな風になればいいのにと、浅葱は思っていた。

拾壱・子供（後書き）

はい。第十三話終了です。感想なんかありましたら、よろしくお願いします。

壱・序曲

「んっ」と、少女の淡い吐息が、男の耳元を掠める。
少女の顔は紅潮としており、口はだらしなく半開き。目はトロンとして、視点があっていない。
男はただ無我夢中に、少女を愛撫している。
少女は体をピクンッと硬直させるや、仰け反り、男性に巻きつかせていた腕をだらりと落とした。

男はベッドに腰を下ろすと、煙草を一本、口に咥え、紫煙をふかした。
月の光が窓から差し込み、部屋の中が滲んだように明るくなる。
余韻に浸るかのように、少女は肩で息をしながら、男性を見つめ、
「今度のアレ、手筈通り進めてくれるんですよね？」
少女がそう尋ねると、男は「大丈夫だ。それくらいでヘマを起こすわけがないだろう？」
男はそう言いながら、少女の上に寄りかかる。

「本当に、私を――」
少女は言葉を濁らした。
そして、徐に起き上がると、背中が男の顔に当たる。
男は覆い被さるように、少女に圧し掛かっていた。
「もう一回くらいいいだろ？　君は上玉だからな。わたしの云うとおりにすれば、いくらでも稼げる」
男はそう言いながら、少女の華奢な躯を嘗め回すように、触り始める。
少女は、先ほど絶頂した時よりも、深くどんよりとした虹彩を浮かべていた。

それは最早、希望を手に入れようとした『絶望感』に他ならなかった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

あるオフィス街の一角に、古びたビルがある。
その2階に『橋本芸能プロダクション』と書かれたプレートが貼られた部屋があった。
部屋の中は殺風景としていおり、あまり人が多くはなかった。

「はい。わかりました。それでは失礼します」
男性――河本秀隆（こうもとひでたか）が、携帯越しの相手に、頭を下げて応対する。
目の前に相手がいないのに、頭を下げてしまうのは、日本人の性根なのだろうか？
兎にも角にも、電話先の相手はイベント主催者で、結構大きいイベントのようだ。

「やったな、燈愛（ひめ）。今年の夏フェスに出れるぞ！」
秀隆は興奮気味に、ソファに座っている少女――燈愛に声をかける。
容姿は16歳といったところか、肩まで伸びた髪は、赤茶色でウェーブがかかっている。
幼い雰囲気がある以外は、どこにでもいる普通の高校生に見えるが、彼女はこの事務所に所属しているアイドルである。
「うん」と、燈愛は素っ気無い返事を返す。
「どうした？　あの夏フェスだぞ？　人気があるとはいえ、まだデビューして3年しか経っていないお前が、こうやって出れるんだ。もう少し喜んだらどうだ？」
秀隆はそう言うが、燈愛はどこか上の空である。

夏フェスというものは、季節ごとに開催されるロック・フェスティバルの俗称であり、夏に行われるものを言う。
ロックを中心とした音楽イベントであり、多数のアーティストが参加することから、集客数が多く、また、出演アーティストの人気のパロメーターを意味している。
ただし、ロック・フェスティバルと題しているので、ロックアーティストしか出ることは出来ない。
燈愛はアイドルであるゆえ、本来ならば出ることは出来ない。しかし、イベント主催者から、出演依頼がきてるのだ。
そのことから、秀隆はあまりにも大きなイベントであるがゆえの緊張感からきているのだろうと、それ以上のことは訊かず、今日の仕事についての打ち合わせを始めた。

「それじゃ、今日はＴＶの歌番組があるから、衣装と番組進行の打ち合わせ。それから少しばかり休憩してから、歌の練習」
秀隆が手帳を読みながら、燈愛を一瞥する。
その表情は真剣な表情で、話を聞いていたため、ホッとした。
「河本さん。どうかしたんですか？」
燈愛がそう訊くと、秀隆は、誤魔化すように、咳をした。
「今日の歌番組は、生放送だからな。失敗は許されないぞ」
「――はい」
「よし。それじゃ、出かけようか」
そう言うと、秀隆はかけていた上着を羽織り、ドアを開くと、そこには男性が立っていた。

「河本くん。これから仕事かい？」
男性がそう尋ねると、秀隆は頷いた。
「はい、社長。これからＴＶ局に」
「そうかい、そうかい。燈愛はうちの稼ぎ頭（がしら）だからね。存分に売れてもらわないと」

社長である橋本隆平（はしもとりゅうへい）は、燈愛を見た。
「今日もまた、一段と可愛いな。アイドルはやはり、癒しの対象でもあるからな」
「あ、はい。今日も頑張ってきます」
燈愛はそういうや、深々と頭を下げる。
俯いたとき、燈愛は誰にも聞こえないほどの声で『死んでしまえ』と呟いた。

壱・序曲（後書き）

はい。第十四話です。

弐・籤運

「当たった」――と、葉月が言った。
「食あたり？」と弥生が尋ねると、
「そりゃ、大好きなシチューだからって、おかわり三杯もしてりゃ、腹壊すでしょ？」
皐月がそう言うと、葉月は「違うよ」と頬を膨らませる。
「それじゃ、宝くじ」
「私、九つ（ここの）だから、買えないじゃなかった？」
実際には買えるのだが、未成年であるため、受け取りには保護者同伴が必要となる。

「そうじゃなくて、当たったの。鮎川（あいかわ）燈愛のライブチケットが！」
「当たったって、応募してたの？」
興奮しながら話す葉月とは裏腹に、弥生は冷静に聞き返す。
「うん、雑誌に載ってたから、試しにね。わたしと美耶（みや）ちゃんと――」
葉月は指折り数えながら、友達の名前を言っていく。
「要するに、友達と葉書を出し合って、当選するか試してたってわけ？」
それで当たったのが、葉月だけだというのを知ったのは、葉月が電話で友人たちに連絡を取り出してのことだった。

「それで一枚に付き、何人まで入れるの？」
弥生がそう尋ねると、「確か、三人までだったはずだよ」
葉月は何かを思い出すと、自分の部屋に戻るや、葉書を一枚持ってきた。
「ほら、これに書いてある」
皐月と弥生は、葉月から葉書を受け取り、内容を確認する。

「あ、確かに、応募者のほかに同伴者二名までいいって書いてある」
「その同伴者は、応募者が決めていいって」
葉月がそう言うと「それじゃ友達と行くの？」
皐月がそう尋ねると、葉月は首を横に振った。
「ううん。未成年の応募には、必ず保護者の同伴が必要だから、大人一人必要になるって」
弥生は、おそらく友人の母親と行こうと思っていたのだろう。と考えていたのだが、
「それでお願いがあるんだけど、お姉ちゃんたち、一緒に来てくれない？」
葉月がそうお願いすると、
「どうする？」
「まぁ、葉月のお願いだからね、行かないわけにもいかないでしょ？　それにまぁ、暇だし」
皐月は呆れた表情で言う。

「そうだ、今やってる歌番組に出てたんだ」
そう言うや否や、卓袱台の上に置かれたＴＶのリモコンを手に取り、ＴＶを点けた。
『それじゃ、今日のゲスト、鮎川燈愛さんです』
映し出された司会者がそう言うや、燈愛が画面に映された。ステージ衣装は赤色のドレスである。
そして、観客の黄色い声がスピーカー越しに聞こえてきた。
「えっと？　『あゆかわ……』　なんて読むの？」
皐月がそう葉月と弥生に尋ねるが、二人は「えっ？」と言わんばかりの表情を浮かべた。
画面下にテロップで大きく『鮎川燈愛』と出ている。
「あ、あんた知らないの？　鮎川燈愛（あいかわひめ）。今売れに売れてるアイドル歌手でしょ？」
そう言われても、皐月は殆どテレビを見ない。

見るとすれば、時代劇とF1レースの中継番組くらいである。
「そ、そんなに人気あるの？」
「あるのってもんじゃないわよ。デビュー当時から、出すCDは殆どトップテン入り。ルックスもいいし、うちのクラスの男子どころか、女子にもファンがいるくらいよ」
弥生はそう言いながら「それに、ステージ衣装も可愛いのもあれば、シックなものも」
そういえば、弥生姉さんって、ゴスロリ（コスプレ）趣味があったんだっけ？と、皐月は頭の中で呟いた。

歌が始まると、葉月がTVの前に座り、ジッと画面を見つめる。
弥生は卓袱台の上にある食器を片付け、厨房へと入っていく。
皐月はその場に座り、卓袱台に肘をつけるや、頬杖をする。

歌が終わり、葉月が「ねぇ、歌もいいし、可愛いでしょ？」と皐月のほうを見るが、
「どうかしたの？　そんなに面白くなかった？」と不安そうに訊いてしまった。
皐月の表情が険しく強張っていたからだ。
「ちょっと、さすがに面白くないわけないでしょ？　歌もうまいし、なにより可愛いじゃない」
弥生がそういうと、
「二人とも……　気付かなかったの？」
皐月がそう言うと、弥生と葉月は首を傾げる。

「テレビだから、作り笑いだってのはわかるよ。でも、あの子……目が可笑しかった」
どういうこと？と弥生と葉月はテレビに映る、燈愛を見る。
他にも出演者がいるため、あまり映されることはなかったが、それでも何度か、燈愛が画面に映ることはあった。

「別に可笑しなところはないわよ」
弥生がそう言うと、一緒に見ていた皐月も、勘違いかなといった感じに首を傾げた。

皐月は、燈愛の曲が、特別いい曲だとは思わなかったのだ。
芸能界に疎いとはいえ、いい曲だという判断は出来る。
しかしながら、燈愛の歌に、売れるほどの要素が見つからなかった。
売れる曲は、それだけ人を引きつけているのだから、売れる。だからこそ、皐月はそれが不思議だった。
燈愛の可愛らしさは認めるとして、そこがどうしてもわからなかった。
まるで『彼女自身は人を魅入らせていない』かのように――

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「それじゃお疲れ様でした」
番組スタッフがそう言うと、「おつかれさま」と出演者や、スタッフが互いに言い合う。
「あ、燈愛ちゃん。今日のステージ最高だったよ」
番組プロデューサーにそう言われ、燈愛は笑顔でかえす。
「それにしても、今度ある夏フェス、初めての出演だから大変でしょ？」
「はい。アイドルなのに、出させていただいて、すごくありがたいと思ってます」
「それで、どうするの？　燈愛ちゃんはソロだから、バックバンド必要じゃない？」
そう訊かれ、燈愛は少しばかり考え、
「それだったら、大丈夫だと思います。秀隆さんがいい人を紹介してくれるって」

「そうかい。それじゃ頑張るんだよ」
燈愛は別れ際、挨拶をし、楽屋へと戻った。

燈愛は「ふぅ」と溜息を付き、楽屋のドアを開ける。
汗で崩れたメイクを整えようと、部屋隅においていた鞄から、化粧ポーチを取り出し、そこから化粧類を探り出した。
「今日の仕事はこれでおしまい。帰ったら、新曲の練習しないと」
確認するように、燈愛は独り言を言う。
そして、鏡台の前に座ると、スーと、誰かがうしろに立つ気配を感じた。

「今日のステージはどうだった？」
燈愛は誰かに尋ねるように呟く。
「どうもなにも、全然つまらなかったわよ？　音程は外れてるし、踊りもミスが目立っていた」
燈愛しかいない楽屋の中に、まるで誰かがもう一人いるかのように、燈愛は会話している。
「辛辣だね」と燈愛は苦笑いを浮かべた。
「当たり前よ。芸能は今昔かわりなく、厳しいものなんだから」
そう言いながら、鏡に映る人影は笑った。

「あの男が言ってたことって、今度のイベントのことでしょ？」
「多分、そうだと思う」
燈愛は化粧を直しながらも、表情は徐々に曇っていく。
「自分の体を犠牲にしてまでやるなんて、そこまで執着する理由がわからないわ。『佳人薄命』って言葉知ってる？　人気なんて、それと一緒よ」
影は嘲笑するように、燈愛を貶す。
「わかってる。この世界が厳しいってことくらい。でも、自分で決めたことだから」

「たまたまルックスがよくて、たまたま応募したのがきっかけで芸能界入り。だけど、売れるどころかゴミ同然の扱いだったじゃない？」

「それを今の社長が拾ってくれた」

燈愛がそう言うと、影はケラケラと高笑いする。

「拾うも何も、あんたを金があるだけで買ったんでしょ？」

「でも、売れないと、約束を守ったことにはならない」

影はゆっくりと燈愛の体に触れる。

「だったら、あんたのその可愛らしい団栗眼（どんぐりまなこ）を潰して、瞽女（ごぜ）にでもしてやろうか？　あんたはわたしの力を借りて売れてるだけの小童（こわっぱ）でしかないのよ。人を引き付ける実力もない人間なんだから」

燈愛は影を睨むわけでもなく、黙々と鏡を見つめる。

『わかってる。私の力なんて、高が知れてる。結局は一般人と一緒なんだ』

燈愛はそう頭の中で呟いた。

弐・籤運（後書き）

瞽女（ごぜ）：「盲御前（めくらごぜん）」という敬称に由来する女性の盲人芸能者。近世までにはほぼ全国的に活躍し、２０世紀には新潟県を中心に北陸地方などを転々としながら三味線、ときには胡弓を弾き唄い、門付巡業を主として生業とした旅芸人である。

団栗眼（どんぐりまなこ）：どんぐりのように丸くてくりくりした目。また、まん丸く大きく開いた目。

参・警告

「警備ですか？」
——と、警視庁刑事部の部署で、阿弥陀警部が岡崎巡査に尋ねていた。
「はい。今度行われる夏フェスの会場を爆破するという、犯行予告がありまして、その警備に当たってほしいと」
「でも、それってうちらの仕事じゃないでしょ？」
爆破予告は、阿弥陀警部や大宮巡査、西戸崎刑事たちがいる刑事捜査一課の仕事ではなく、特殊犯捜査第3係の仕事である。
「上からの命令ですから、従うしかないですよ」
「でも、まだ予告でしょ？　脅迫されたわけでもあるまいし」
脅迫となれば、自分たちも動かないといけない。そのことを阿弥陀警部は尋ねる。
「いえ、犯人はスポンサー宛に爆破予告の手紙を出しているようなんです」
「——内容は？」と佐々木刑事が尋ねると、岡崎巡査は持ってきた資料をひろげ、
『今年のイベントを即刻中止しろ。そうしなければ、コウカイすることになる』
と、みなに告げた。

「後悔ねぇ……　そりゃ、イベント会場で爆破があったら、死者がどれくらい出るかわかりませんからね」
「しかし、犯行予告がスポンサーに直接とは、ネットの書き込みではないんだろ？」
佐々木刑事が岡崎巡査に尋ねる。
「はい。脅迫状は差出人不明できたようですし、文章はワープロで

書かれてます」
「愉快犯というわけではないようですね」
阿弥陀警部がそう言うや、「しかしなぁ、警備といっても、夏フェスじゃろ？　人を殺すとすればどこに爆弾を仕掛ける？」
佐々木刑事がそう尋ねる。
「そりゃ、観客席にでしょうね？」
阿弥陀警部がそう言うと、佐々木刑事は頭をかく。

「あのなぁ、ハウスやホールじゃないんじゃよ？　観客席というものはあるにはあるが、大体指定席じゃろ？」
そうは言われても、阿弥陀警部はそんなことを知らない。
「じゃが、ロック・フェスティバルは一日のもあれば、数日行われるものもある」
そう言いながら、佐々木刑事は岡崎巡査を見る。
「確かそのイベントは一日だけじゃったな」
「え、あ、はい。午前１０時から午後１０時までとなっています」
「おおよそ半日ということですな」
「警備も交代交代じゃろうし、爆弾を――」
佐々木刑事は言葉を止め、なにやら考え始める。
「どうかしたんですかな？」
「爆弾をいつ仕掛けるんじゃ？」
佐々木刑事がそう尋ねると、
「そりゃ、イベントがやってるときに――　可笑しいですよね？」
岡崎巡査も違和感に気付く。気付いてないのは阿弥陀警部だけだ。
「えっと、二人ともどうしたんですかな？」
阿弥陀警部が尋ねると、「爆破予告ということは、爆発させることを目的としておるじゃろ？」
「え？　ええ、そうでしょうな」
「じゃったら、その爆弾をどこに、どうやって仕掛けるのかということじゃよ。大規模なイベントじゃから、警備は厳しくなる。検査

されることは間違いないじゃろ?」
「それに、もしかしたら脅迫があったということを悟られないように、警備を薄くするでしょうね。一応あちらは警備会社にお願いしているでしょうから、私たちは警備というより、爆弾を探しながらということになるようです」
それならば、ますます自分たちの仕事ではないような気がしてきた阿弥陀警部であった。
「それがどうして私たちも合同の仕事になるんでしょうかね?」
阿弥陀警部はお茶を一口飲み、そう尋ねる。
「まぁ、警備と爆弾処理となると、わしらの仕事じゃないだろうし、上は何を考えておるんじゃ?」
そうこう話している中、西戸崎刑事が汗だくになって戻ってきた。

「ああ。お帰りなさい。愛(まな)ちゃん、西戸崎刑事にお茶」
そう言われ、机に座っていた吉塚愛が立ち上がり、給湯室へと入っていく。
1、2分して、冷たいお茶が入ったコップを持って、それを西戸崎刑事に渡す。
西戸崎刑事は、グビグビと音を鳴らしながら、お茶を飲み干した。
「それで、捜査は進んでますかな?」
「ああ、まぁな。一応は目処がついとっちゃけどね」
「ほう、そっちは佳境ということかな?」
佐々木刑事に言われ、西戸崎刑事は頷いた。

「しかし、もう犯人はわかってるんでしょ?」
「ああ、犯人は『若杉璃音(わかすぎりおん)』45歳。同業者を殺害後、行方をくらませている。今夜あたりから指名手配にするそうだ」
西戸崎刑事はそう言いながら、自分の手帳を見る。そこには若杉璃音に関する簡単な資料と、『マル暴』と書かれた印があった。
「うーん、そちらは組織犯罪対策部と合同の事件でしたね」

「あちらが絡んでいるからな、容易に捕まえられんとよね」
西戸崎刑事はそう言うや、給湯室へと入っていく。

「確か『市柿組』じゃたろ？　その事件に関わっとったのって」
給湯室で佐々木刑事が、西戸崎刑事に尋ねる。
「ええ。若杉璃音は会社の同僚である男に騙され、多額の借金を背負った。その借金を貸したのが『市柿組』だとわかりました」
「殺しの経緯は？」
「えっと、殺された男の名前は『篠塚伊知郎』３７歳。シングルマザーであった若杉璃音に声をかけ、次第に二人は付き合い始めたが、篠塚は彼女を騙していた」
「それに気付いた若杉が、男に詰め寄り、口論の末殺してしまったじゃったな。殺しとはいえ、彼女も怪我しておったじゃろ？」
そう言われ、西戸崎刑事は手帳を見る。
「ええ。確かに、殺された篠塚の血痕が付いたガラス製の灰皿以外に、テーブルの角に若杉の血痕が付着してました」
「頭を打ったのかね？」
「それはわかりませんが、そうでしたら、意識が朦朧とした中で殺しをしたということになりますね？」
西戸崎刑事がそう言うと、佐々木刑事は少し考え、
「まさか暴力団が匿ってる――わけがないわな？」
「そんなわけないでしょ？」
西戸崎刑事が笑いながらそう言うと、佐々木刑事も笑っていた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「ええ。手筈どおり、ことを運んでますよ」
電話先の相手にそう言いながら、橋本はワインを飲む。
『しかし、コネでもあったんですかいな？　まだデビューして間もないでしょ？』

「いやいや、人気があるうちが華。それは今も昔も変わらないことでしょ？　特にアイドルなんか鮮度が命ですからな、堕ちたアイドルが再度人気を得るには容易なことではない……」
橋本はそう言いながら、グラスにワインを注ぎ込む。
「特に鮎川燈愛は、稼ぎどころですからね。毟り取るだけですよ」
『それは訴えられんかね？』
電話先の男がそう尋ねると、
「いや、一応勤務時間は考慮してますからね。そのへんは大丈夫ですよ。それじゃ今度のイベント、必ず成功させますよ」
そう告げるや、橋本は電話を切った。

「今度のイベント、成功すればかなりのお金が入るな。確か数百万とか云ってたが……」
橋本は含み笑いを浮かべながら、部屋に置かれているＴＶを点けた。
『先週の金曜日未明に起きた殺人事件の犯人である、若杉璃音が行方をくらましており、警視庁は今夜、最重要人物として指名手配しました』
と、ニュースキャスターが原稿を読む。
「まったく物騒な世の中になったもんだな」
橋本はワインを一口飲み、シャワーを浴びようと立ち上がったときだった。
『なお、殺された篠塚伊知郎には、暴力団が関係しており……』
それを聞くや、橋本は少しばかり笑みを浮かべ、携帯を手に取った。

『――もしもし』
電話の相手は、眠そうな声で言う。
「ああ、寝ていたのか？　すまないな」
『社長？　どうしたんですか？　こんな時間に』

「実はな、ちょっと知らせておきたいことがあってな」
そう言われ、電話先の相手は『なんですか？』と尋ねる。
「ちょっとＴＶを点けてくれんか？」
橋本がそういうと、電話先からゴソゴソと何かを探す音がする。
そしてＴＶの音が聞こえだした。
それはちょうど、先ほど橋本の部屋に置かれたＴＶで流れたニュースであった。
ニュースというものは、番組が違っても、報道される内容に大差はない。

『えっ？』
「どうした？　何か気になることでもあったか？」
橋本は電話先の相手にそう尋ねる。その表情は不気味に歪んでいる。
『これ……　いつから……』
電話先にいる相手の声が震えている。
「そういえば、忙しくて、ほとんどテレビを見ておらんかったそうじゃったな。部屋に戻っても、倒れるように寝ておったと河本くんから聞いておるよ」
『それで、どうしろと？』
電話先の相手がそう尋ねると
「ちょっとうちに来てくれんかの？」
『そんな……　明日、新曲ＣＤのジャケットに使う写真を撮るから、朝早いんですよ？』
「そうか、今度のイベントで結構お金が入るんだがな？　確か五百万だったかな？　それがチャラになったら、返せるもんも返せんわな？」
『――わかりました。二十分くらいで行きます』
電話先の相手はそう言うと、電話を切った。

――30分後、橋本の部屋のドアを叩く音が聞こえる。
橋本はバスローブを羽織り、ドアを開けた。
「きたか？　遅刻はどこの世界でも厳禁だぞ？」
「すみません。急に呼ばれたので、身支度に手間取ってしまって」
「いっその事、裸のままコートを羽織ってきてもよかったんだぞ？　そうすれば、すぐに出来る」
そう言いながら、橋本は少女の顎を上げ、唇を合わせる。
「ベッドに行くのも面倒だ。ここでするぞ」
「でも、私……」
少女がそういうと、橋本は少女を廊下に倒した。

「わかっているのか？　お前みたいなやつなんぞ、いくらでもいるんだよ？　それにお前は私に口出し出来ないんじゃないのか？」
そう言いながら、橋本は少女の髪の毛を引っ張った。少女は悲痛な声を挙げる。
「それじゃ、今日はたっぷり遊んでやるからな――　お前の姉と同じようにな」
そう言うや、橋本はバスローブを脱ぎ、少女を甚振った。

『死んでしまえ――　死んでしまえ――　死んでしまえ――』
少女は心の中で、橋本に対する怨みを確認するかのように呟く。
そして、この状況下においても、快楽に堕ちてしまう自分に対しても――

参・警告（後書き）

【お詫び】手違いによって、参であったこのページが、陸になっていました。

肆・聾桟敷（前書き）

聾桟敷（つんぼさじき）：江戸時代の劇場で、正面2階桟敷の最後方の席。舞台に遠く、役者のせりふがよく通らないところからいう。それから転じて、関係者でありながら、情報や事情などを知らされないことをさす。

肆・聲桟敷

「それじゃ、今日は遅くなるから」
「おう、道中気をつけてな」
「お酒、控えてよね？」
弥生が釘を刺すと、
「わかっておる。まだ自己管理できんほどボケとらんわ」
拓蔵はグビリと酒を飲む。
「一応夕食は作ってあるから、レンジでチンして」
「弥生姉さん。そろそろいくよ」
玄関のほうから、葉月が叫ぶ。
「それじゃ、いってくるから」
「おう楽しんでこい」
拓蔵は今を出て行く弥生にそう告げる。

（さてと、弥生たちも出て行ったところだし）
拓蔵は厨房に入り、食器棚の下にある引き出しから、中身が入っていないビンを手に取り、勝手口を出るや、裏にある倉庫に入った。
そこは神社での奉納や、破魔矢などに使う道具が仕舞われている場所である。
拓蔵は扉の近くにかけてある懐中電灯を手に取り、部屋の中を照らす。
「えっと、確かここらへんに……」
拓蔵が取り出したのは、四角形のガラス瓶である。その中には桃が酒に漬けられている。
酒瓶の蓋を開け、中蓋を取ると、桃の香りが倉庫内に広がっていく。
酒さじを使い、空き瓶に注ぎ込んだ。

居間に戻った拓蔵は、先ほどの桃酒を湯飲みに注ぎ、氷やお湯を入れるわけでもなく、そのまま一口飲んだ。
桃の甘い香りが口の中から広がると同時に、酒特有の体を温める効果により、ほんのりとするが
「うーん、度数が低いんかのう？　あんまり酔いそうにないな」
などと云っているが、果実酒は焼酎で漬けるため、３５％のものを使っており、氷砂糖も使っているので、少なくともそれ以上となっている。
そのため、酔わないということはまずなく、そもそもストレートで飲めるものでもない。
そんなことが出来るのは、蟒蛇（うわばみ）である拓蔵くらいのものであった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ステージの裏側で、燈愛と秀隆が入念にチェックをしている。
「えっと、ロック中心のパフォーマンスになってるから、黒のパンク系衣装でいくかい？」
衣装の堀塚という女性が、燈愛に尋ねる。
「はい。今日は新曲発表も兼ねてますし、それもいこうかなと」
「バックバンドの皆さんはどうします？」
堀塚がそう尋ねると、
「ああ、僕はいいですよ」と、ギター（以降、Ｇｔと省略）担当の宮村一男（みやむらかずお）がそう言い放つ。
「私は燈愛ちゃんに合わせて、赤にしようかしらね？」
キーボード（以降、Ｋｂと省略）担当の国貴好（くにたかよしみ）が燈愛の肩を叩き、そう告げる。
「国貴さん、またカジノでスッたんだって？」
ベース（以降、Ｂａと省略）担当の銅石将夫（あかしまさお）が含み笑いを浮かべながら云う。
国貴は、銅石をキッっと睨みつける。

「おや、当たってましたか？」
「別に、黒に赤の衣装を着ても可笑しくないでしょ？」
「いや失敬。黒に対して赤（ルージュ）だったんでね、てっきりルーレットで大負けしたのかと思って」
銅石はそう言いながら、ベースのストラップを肩にかけ、楽譜を広げるや、確認を取り始めた。

「すみません。えらい遅れまして」
うしろの方から、声が聞こえ、燈愛たちはそちらを見た。
「ああ、菅原さん。遅かったじゃないですか？」
「ええ、ちょっと込んでましてね。お客さんはバスや電車できてるはずなんですけど、会場外にも行列が出来てましたよ」
そう言うや、ドラム（以降、Ｄｒと省略）担当の菅原康三（すがはらこうぞう）は、ペットボトルを口にしながら、皆に言う。

「こ、河本さん？」
燈愛は秀隆の裾を引っ張り、呼びかけた。
「こ、こんなすごい人たちをどうやって？　皆さんバックバンドじゃなく、メジャーな人ばかりじゃないですか？」
燈愛が驚いたのも無理はない。

まず、Ｇｔの宮村一男。
彼は元アイドルであったが、ギターの才能があり、そちらを専業としている。
数多くのアイドルのバックバンドを勤めており、今回のバックバンドではリーダーを頼まれている。

二人目にＢａの銅石将夫。
幼い頃から音楽に溶け込み、中学の頃からベースをしている。
編曲（アレンジ）を数多くこなしており、今回発表する新曲のアレンジを担当

していた。

三人目にＫｂの国貴好。

帰国子女である彼女は、むこうではあまり見られなかったアニメにはまってしまい、主にアニソンの作曲や編曲を担当することが多い。

またそれ以外にも、ロックや、ポップス、演歌、はては賛美歌（コラール）や、ブーガルー（１９６５年から７０年にかけて、ニューヨークで流行ったラテン音楽の一種）といったマニアックな音楽ジャンルを作曲するため、無国籍作家と言われている。

そして、先ほど遅れてきたのがＤｒの菅原康三。

幅広いジャンルを得意とし、日本だけに留まらず、海外アーティストからも高い信頼を得ている。先ほども他のアーティストとのリハーサルが長くなってしまい、遅れてしまった。

兎にも角にも、燈愛にとっては遠い存在である彼等（かれら）が、自分のバックバンドを担当してくれるとは思いもしなかったのだ。

「さぁて、後三時間後に出番だから、二時間くらい自由にしていいからね」

秀隆は燈愛にそう声をかける。

「それじゃあ私、会場の周りを散歩してますね。何かあったら携帯に連絡してください」

そう言うや、燈愛は自分の携帯を秀隆に見せ、スカートのポケットに仕舞った。

「会場には、すでにお客さんも入ってるから、少し変装しておきなさい」

秀隆がそう言うと、燈愛は「わかってます」と告げた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

三姉妹がイベント会場最寄の駅から、それからシャトルバスに乗り、イベント会場に行く間のことである。

電車の中も、バスの車内も、人で溢れており、三姉妹は強制的に立つこととなっていた。

望んでもないおしくらまんじゅうに……

「あー、熱い！」と皐月が愚痴を零していた。

「葉月！　あんた、少しは考えて葉書を出しなさいよ？」

弥生はうすうす感付いてはいたが、ここまでとは思っておらず、葉月を友達とその保護者と行かせなくてよかったと思っていた。

「ごめんなさい」と葉月は謝る。

が、周りは葉月よりも身長が高いため、最早どこにいるのかわかったものじゃなかった。

「降りたら、即行（そっこう）でコンビニによって、アイスかジュース買おう。鮎川燈愛が出る時間まで、まだ時間あるでしょ？」

「ええ。確か夕方くらいだから、結構早めに着ちゃったね」

弥生は腕時計を見ながら云う。

現時刻は午後2時を少し回ったところで、鮎川燈愛が出演する時間は午後5時頃からとなっている。

「それじゃ、それまで時間潰そう。知ってるアーティストいないし、それにあの葉書って、アーティストが出演する時間の３０分前までは入れないって書いてなかった？」

皐月がそう尋ねると、

「うーん、あんまり詳しくは見てないからなぁ、バスに降りたら、確認のために見ておこう」

そう話していたのが、つい十分ほど前のことであった。

会場近くにあるコンビには、ライブを見に来た人たちで溢れてお

り、店の中に入っていた皐月が、クタクタな表情を浮かべながら、弥生と葉月の元に戻ってきた。
「はい。ジュース。葉月はアイスでいいのよね？」
皐月はレジ袋を広げ、二人に中身を見せる。
「近くに公園があるから、そこで食べない？　こういうところって、色んなのが見えるから、あまり」
葉月がそう言うと、
「ああ、ここって海に近いから、霊も集まりやすいんだっけ？」
皐月がそう尋ねると、葉月は答えるように頷く。

「そういえば、そこの海って、自殺の名所らしいから、死にきれない地縛霊が引っ張ってるのかもね？」
弥生がそう言うや、葉月はビクッと体を窄めた。
「ど、どうかしたの？」
「や、弥生おねえちゃん？　冗談でもいって良いことと悪いことがあってね？」
葉月はうっすらと涙を浮かべながら、弥生を見る。
「さっきどう見ても、周りの人とは明らかに“濡れてる”人が、前を通り過ぎてたんだよ」
葉月は三姉妹の中でも一番霊感が強く、力の弱い浮幽霊でも、くっきりと見える。
そのため、たまに人間なのかと思ってしまうことがあるのだ。
しかし、炎天下というのに、濡れているということは――――

「ば、場所変えよう」
弥生がそう言うと、皐月と葉月は頷き、その場を後にした。

三姉妹は、コンビニ近くの公園にあるベンチに座り、レジ袋からおのおのの飲み物や食べ物を取り出す。

「皐月？　あんた、いくらなんでもそれはないんじゃないの？」
弥生が呆れながら云う。
「ほ《そ》う？　糖分は取った方がいいとおもうけど？」
皐月はチョコがコーティングされ、中に生クリームが入っている、コッペパンのようなものを口に頬張りながら喋る。
「いつも思うけど、どうしてあれだけ甘いもの食べて太らないのかしら？」
「運動してるから」
弥生の愚痴に、皐月は答える。
「私なんて、気をつけてるのに、１キロ太った」
弥生の愚痴を聞きながら、皐月は昨夜、風呂場に置いてある体重計に乗った時、前よりも数グラム痩せたのだが、そのことは云わないほうがいいなと、思った。

「それで、やっぱり、アーティストの出演時間から３０分前までは入れないことになってるの？」
話を変えようと、皐月は弥生に尋ねた。
葉月が応募して手に入れた当選葉書は、弥生の鞄の中である。
弥生は鞄から葉書を取り出し、内容を読み返した。
「ええ。確かに出演時間の３０分前からしか入れないみたい。しかもこれ、普通にチケットを買う人より、待遇いいみたいよ？」
「元々、ファッション誌に載ってたやつだからじゃないかな？　あまり待たせると、お肌に悪いとか何とか」
「葉月は化粧水を少しつけるくらいで、十分でしょ？」
弥生がそう言うと、葉月は首を傾げた。

すると、公園の方から誰かが歌ってる声が聞こえ、三姉妹はそちらを見やった。
噴水の近くに少女が立っており、「アーッ」と、確認するかのように歌っている。

その歌声は、はっきり言って拙い。
「合唱の練習？」
皐月が首を傾げる。
「一人で？　しかも彼女、サングラス着けてるわよ」
弥生がそういう。少女はティアドロップ型（タイプ）のサングラスをかけ、青色の帽子を被り、サマーセーターにデニムという姿である。

「でも、これって……」
葉月は「うーん」と考え出す。
「あ、思い出した。この曲、鮎川燈愛のだ」
葉月がそう叫ぶや、少女は歌うのを止めた。
「な、なに？　鮎川燈愛だって？」と、公園内にいた人々が騒ぎ始めた。
「そういえば、今日のイベント出るっていってたな」
騒ぎが大きくなり、三姉妹と少女は周りを見た。
そして、少女はゆっくりと三姉妹、特に葉月に近付く。

「ちょっと、あなた」
「な、なんですか？」
「ついてきて、あなたたちも」
そう言われ、三姉妹は警戒する。
「どうして、知らない人に命令されないといけないのよ？」
皐月がそう言うと、
「ごめんなさい。これだったらいいかしら」
そう言うや、少女はサングラスを少しだけはずした。
「あ、あい……」
葉月が名前を言おうとした時、少女が口を手で塞いだ。
「わかった？　静かなところに連れてくから、少し黙っててね」
そう言われ、葉月は頷いた。

少女に連れて行かれた場所は、トラックが数十台も停まっている駐車場である。
その中にはキャンピングカーもあり、三姉妹は少女に押されるように中に入った。
「ここなら見つからないわ」
そう言うや、少女は扉を閉めた。

「えっと、ごめんなさい。歌の練習してたのに、邪魔しちゃって」
「いえ、いいのよ」
少女はサングラスをはずし、帽子を脱ぐと、肩まで伸びた髪が揺れた。
「やっぱり、鮎川燈愛だ」
葉月は若干興奮気味に言う。それを見て、燈愛は困ったような表情だが、口元は笑みを浮かべている。
「でも、どうしてあんなところで歌の練習してたの？」
「ブースだと音が響くけどね、外だと響かないから、思いっきり歌えるの」
弥生の質問に、燈愛は答える。
「それに、今日は野外ライブだから、普段使ってるハウスとは違って、音が響かないから、遠くのお客さんに聞こえるか、声量は大丈夫か確認してたの」
燈愛はそう言うや、スーと深呼吸する。

――そして三姉妹に、その歌声を聞かせた。

「それって、聞いたことない」
葉月がそう言うと「もしかして、今のが新曲？」
弥生に言われ、燈愛は少しばかり照れくさそうに、
「ええ。今日発表しようと思ってる曲。私もお気に入りなんだ」

そんな話をしている中、皐月だけが険しい表情を浮かべていた。

「えっと、気に入らなかったのかな？」

燈愛が皐月にそう訊くと、「ああ、この前歌番組に出てましたよね？　それを見たときから、どうも変なんですよ」

弥生が燈愛に説明する。

「皐月、鮎川燈愛が可愛いし、歌もうまいからって、僻むような」

「二人とも、まだ気付かない？」

皐月がそう言うと、弥生と葉月は首を傾げた。

「気付かないの？って、なにが？」

葉月が尋ねると、

「あなたの実力が、どれくらいのものか、私は専門家じゃないから、はっきりいってわからない。でも、それは人を引き付けてるからでしょ？　可愛いし、歌もうまい。でもそれって、あ《、》なた自身の実力なの？」

皐月が燈愛に尋ねると、

「実力に決まってるでしょ？　じゃなかったら、売れてるわけないじゃない」

弥生がそう言うや、葉月も同意するかのように頷いた。

「二人とも、私が耳悪いの知ってるでしょ？」

「ええ、知ってるけど、それがどうかしたの？」

「聞こえないから、聴こうとして、余計に集中しちゃう癖があるの。だからあの時、ＴＶに映っていた鮎川燈愛に違和感を感じてたのよ」

そう云われても、弥生と葉月は、なにがなにやらさっぱりである。

「何が目的なのか知らないけど、彼女に取り憑いているなら、さっさと出てったほうがいいわよ」

皐月は眼光を鋭くし、燈愛を睨んだ。

「い、いったい何のこと？　私は実力で」

「それじゃ、どうして……　虹彩が黒く滲んでるの？」
そう言われ、弥生と葉月は燈愛の相貌を見やった。

普通、人の目は遺伝や、メラニン色素の濃度によって、虹彩の色が違ってくる。
アメリカ人に多く見られる淡褐色（ヘーゼル）や、ロシア人に多い灰色（グレー）。
そして日本人は濃褐色（ブラウン）と、虹彩にも様々な種類があるが、黒く滲むというものはない。
「目が黒いうちに～」という言葉があるが、これは日本人の虹彩の色が黒く見えることからだと伝えられている。

燈愛の相貌は黒く滲んでおり、輝きも何もない。
「どうして、私の力が通用しないの？」
燈愛は震えながらそう言うと、弥生と葉月は途惑い隠せない表情を浮かべた。
燈愛の声が先ほどまで聞いていたものとは、明らかに違ったのだ。
燈愛は椅子に座り、だらりと肩を落とし、俯いた。
「あなた、一体何者なの？　私の力は男女関係ないはずよ？」
「人を魅入らせることに関してはでしょ？　でも、私は元から興味なかったし」
皐月がそう言うと、「人を魅入らせるって――　まさか、川姫？」
弥生がそう言うと、皐月は「多分」と答える。

「でも、どうして鮎川燈愛に取り憑いてるの？　可愛いし、歌もうまいし」
「それくらいだったら、世の中にはごまんといるわよ。この子は、実力もなければ、運もないんだから」
燈愛に取り憑いた川姫はそう言いながら、ゆっくりと笑った。
「実力はとにかく、運はあるんじゃないの？　少なくとも芸能界にいるわけだし」

「売れなかったら運はないわよ。それに、私の力がなかったら、この子――」

川姫が言葉を止めた。その直後、キャンピングカーの扉が開く。

「すみません。ちょっと、衣装確認しますので、少し来てくれませんか？」

堀塚がそう言うと、「それじゃ、あなたたちが妖怪を罰する人とはいえ、私はこの子を苦しめていないし、彼女も私が苦しめていないとわかってるから、罰することは出来ないはずよ」

そう言うや、川姫――燈愛は堀塚と一緒に出かけていった。

「ねぇ？　思ったんだけど、私たちって留守番になるのかな？」

葉月がそう尋ねる。「えっと、キャンピングカーは最初から開いてたから、出てっても大丈夫なんじゃない？」

「いや、可笑しいでしょ？　いくら関係者しか周りにいないからって、無用心にもほどがあるし」

皐月がそう言うや、弥生と葉月は少し考え、

「それじゃ、戻ってくるまで待っとく？」

「ライブ始まるまで戻ってこなかったらどうするの？」

葉月に聞き返され、弥生は少しばかり悩みこむ。

「でも、さっき云ってたことってどういうことかな？」

「互いに必要としてるってことかしら？　鮎川燈愛が誰かを殺したり、何か罪をもってるってわけでもないし、執行人の仕事はないんじゃない？」

「わたし、今日は竹刀もってきてないわよ？　まぁ、川姫は人を魅入らせる妖怪だけど、それに関しては罪がないからね。、後で詳しく訊いてみましょ」

肆・謦桟敷（後書き）

バックバンドのメンバーは実在する方の名前を弄ってます。

伍・嬰音（前書き）

嬰音（えいおん）：全音階の幹音の高さを半音上げた音。たとえば嬰ヘ音（F♯2）など。

伍・嬰音

暗闇の中、女性が息を殺して、気配を探っていた。
「いたか？」
外で男が、仲間と会話する。
「いや、いないな。くそっ！　あの女、見つけたら、＊＊＊＊してやるっ！」
もう一人の男が、腹癒せに近くにあったドラム缶を蹴る。
ドラム缶は倒れ、ゴロゴロと音を立てながら、転がっていく。

彼等は『市柿組』の組員で、組長である市柿聡介から、若杉璃音の行方を捜すよう命じられていた。
警察が指名手配（犯人としてではなく、あくまで最重要参考人として）している以上、先に見つけたいというのが目的である。
「しかし、あの女、ボスに借りを作っておいて逃げるなんてな」
「ああ。そもそも騙された自分が悪いんだろ？　それを指摘されて殺人。逃亡までする始末だからな」
二人組は、廃ビルの中へと入っていく。

カツン、カツンという靴の音が聞こえ、女性――若杉璃音は生きた心地がしていなかった。
いや、ただでさえ頭を怪我しているため、意識が朦朧としている。気を抜いてしまえば、眠ってしまう。それこそ永遠に――
そして、緊迫した状況ゆえ、一睡もしていなかった。
怪我をしていなければ、どこかで休みたい。しかし、探している人間がいる以上、彼女は自由に行動できない。廃ビルの中に隠れたのも、時間稼ぎでしかない。
それが、よもや自分で自分の首を絞めてしまったのだから、璃音は心の中で呆れ果てて、笑ってしまった。

足音が大きくなっていく。二人組が璃音のいる部屋があるフロアまで来たのだ。
璃音はここまでかと思い、腹を括った。
幸いここは廃ビルだ。誰も使っていない。――つまり、誰も来ない。
二人組が璃音のいる部屋のドアを開けようとする。
「くそ、閉まってるな」
男の一人が、ガチャガチャとドアノブを回す。
「おいっ！　そこにいるんだろ！　出てこいっ！！」
そう云われて、出てくるほど馬鹿ではない。が、見つかるのも時間の問題であるため、璃音はどうしたものかと考える。

「くそっ！」
ドアノブを回す音が途切れ、二人組はドアを蹴り壊した。
「おいっ！　好い加減にしろっ！　こっちはそれどころじゃないんだ！」
男の一人がライターに火を点ける。ぼんやりとした光の中に、二人組の顔が浮かび上がった。
「そこにいるんだろ？　素直に出てきてくれ！　ボスがお呼びなんだ」
璃音はどうせ連れて行って、慰み者にしようと思ってるんだろうと、考えていた。
「もう逃げるのはやめてくれないか？　篠塚の部屋から睡眠薬が発見されたんだ」
つまりは、それを使って、篠塚は自分を眠らせようとしたのかと、璃音は推測する。

「出てこないのならいい。俺たちがボスに、見つからなかったと言ってやってもいい。だがな、ひとつ教えてくれないか？　ボスが篠

塚に渡した顧客名簿が見つからないんだ」
ライターの火で熱せられた本体が熱くなり、男の一人が小さく悲鳴を挙げると、パッと灯りが消えた。
「こっちはお前を探すよりも、そちらを最優先にしている。顧客名簿というものは、どこの会社でも重要なものだからな」
男はそう話すが、璃音には身に覚えがなかった。

「――っ」
男が仲間に耳打ちをし、一人が出て行く。そして、耳打ちした男はその場に座った。
「璃音。長い逃亡生活の中、碌に物を口にしていないだろう？　今、仲間にコンビニによってもらって、弁当か何かを買ってきてもらっている。私たちはお前を捕まえて、殺そうとは思っていない。篠塚がボスから盗んだ帳簿のありかを知りたいだけだ」
そんなことをいって、油断させ、殺すつもりだろうと璃音は考える。
――数分ほどして、仲間の一人がコンビニのレジ袋を持って、部屋へと戻ってきた。
その手には懐中電灯がある。
「買ってきたのか？」と尋ねると、男はコクリと頷く。
「これで、部屋の中が明るくなる。璃音も時機に見つかるさ」
そう言いながら、男は懐中電灯のスイッチを押すと、ぼんやりと明かりが点き、部屋の中をぐるりと見渡した。

「おい。好い加減に出てこい！　こっちはそれどころじゃないんだ」
さっきから一体何なのだろうか？
「おちつけ。一体何があった？」
もう一人の男が宥める。
「外に出たら、警察がいてな。近くでイベントがやってるだろ？その警備と思ったんだがな、私服警官も混じってやがった」

「イベント？　そういえば、橋本隆平がそんなことをいっていたな」
――橋本？　そう璃音が思い出そうとしたときだった。

どこから入ってきたのか、蜂が部屋の中に侵入する。
ミツバチほどの小ささだったため、扉近くにいる二人組は気付いていない。
璃音の耳元で蜂の羽音が聞こえる。璃音は息を殺すが、
「おい？　何か変な音がしないか？」
男の一人がそう言うと、もう一人が首を捻った。
「気のせいじゃないのか？」
「いや、この音は――　蜂だ！　この部屋、蜂の巣があるぞ！」
そう言うや、懐中電灯でどこにあるのかを探し始める。

部屋の天井隅に蜂の巣があり、その大きさは直径五十糎（センチ）は下らない。
それはミツバチというよりも、スズメバチが作るほどの大きさであった。
巣の周りにはウジャウジャと蜂が飛び交っている。
そんな部屋に、どうして璃音が無事にいられたのかというと、以前『朧車』のさいにも説明したとおり、人間が敵意を見せなければ、蜂は何もしてこない。
璃音は部屋に蜂の巣があることは知らなかったし、そもそも気配を消すのに精一杯で、周りに気が回らなかったのだ。

そして、暗い場所で灯りを点けたのだから、さて困ったものだ。
虫は『光に集まりやすい』という習性があり、蜂も例外ではない。
スズメバチが羽音を立てながら、二人組（というよりかは、光の根源である懐中電灯）に集まり始めた。
「う、うわぁっ！」
男の一人が悲鳴を挙げ、部屋を出て行く。

「くそっ！　おい！　弁当はここに置いておく。蜂に食われないうちに食べておけ！」

そう言うや、追いかけるように、もう一人も部屋を出て行った。

懐中電灯を手から離さないでいるため、スズメバチは彼等を追いかけ続けていく。

璃音は二人が出て行ったのを確認すると、部屋の中を飛び交っている蜂が落ち着くのを待った。

すると、遽(あわただ)しいほどに鳴り響いていた羽音が、まるでフェードアウトしていくかのように、消えていく。

そして、蜂の気配どころか、巣の存在すらなくなっていた。

璃音は狐に抓(つま)まれたような表情を浮かべ、部屋の中を見渡した。

誰かが部屋の中に入ってくる。先ほどの二人組が戻ってきたのだと思い、璃音は慌てて隠れようとしたが、

「大丈夫よ。隠れたって、私からは鮮明に見えてるから」

部屋に入ってきたのは、女性である。

「さて――と、警察が近くにいるから、さっさと見つかったほうがいいわよ」

そう言うや、女性は指先で『雀蜂呪殺(サイホウジュサツ)』と書いた。

さっきまで聞こえていなかったスズメバチの羽音が聞こえ始め、璃音は息を殺した。

しかし、その羽音は騒々(そうぞう)しい。

部屋を埋め尽くすかといわんばかりの夥しいスズメバチの大群が、狂ったように羽音を鳴らしていたからだ。

「あ、ああ――」

璃音が小さく悲鳴を挙げた。それをきっかけとし、無数のスズメバチが彼女目掛けて突っ込んできた。

璃音は蜂の大群に何も出来ずと同時に、その猛毒にやられ――絶命した。

二時間後、二人組が部屋に戻ってくる。外はすっかり夕暮れだ。
「おいっ！」と声をかけるが、部屋は異様なほどに静かである。
「もう逃げたんじゃないのか？」
男の一人がそう言うと、「懐中電灯を貸せ」といわれ、袋から取り出し、渡した。
懐中電灯のスイッチを押し、部屋の中を見渡すと、人影が見えた。
二人はそれが若杉璃音であると考え、近付く。

――そしてその惨状を見るや、口を塞いだ。

若杉璃音の死体は、まるで虫に刺されたかのように、体全体が膨れ上がっており、蕁麻疹（じんましん）のように唇は赤く腫れている。
それは皮膚だけではなく、開けられた眼球にも見られ、ましてや唇の中や、耳の穴、鼻の穴といった、ありとあらゆる穴という穴の中にも、その症状が見られる。

それは最早、人の死体ではなく、ただの肉塊（にっかい）に他ならなかった。

「さ、さっきのスズメバチか？」
男はハッとし、懐中電灯を手に取るや、ゆっくりと部屋の天井にある蜂の巣を照らそうとしたが、巣はどこにもなかった。
「ど、どういうことだ？　蜂の巣が急になくなるなんてこと」
二人は恐怖に戦（おのの）きながら、若杉璃音の死体を見た。

「異常なしです」

「こちら西側。今のところ異常なしです。観客のバッグや所持品をチェックしたところ、怪しいものはありません」
警備員や、警官たちが協力し合い、確認を取る。
イベントも残り6時間となり、出演アーティストも予定の半分を終えようとしている。
ステージでは興奮冷めやらぬ感じに賑わっている。

「観客に犯人はいるんですかね？　一応、念のためにペットボトルや、水筒の中身も確認してもらってるんでしょ？」
阿弥陀警部がそう尋ねると、岡崎巡査が頷いた。
「そうなると、爆破予告はデマだったんでしょうか？」
「それならそれでいいんですけどね」と、阿弥陀警部は言った。
「しかし、これだけ人が集まってると、一人死んだだけで、集団パニックは避けられないですね」
岡崎巡査がそういうと、
「だからこうやって調べとるんじゃろ？　出演者もそうじゃし、スタッフも念入りにチェックしておる。それこそ機材にいたってもな」
佐々木刑事が老体に鞭打ちながら、懸命に動いている。
「内部の人間ではないとすれば、一体――」
阿弥陀警部は爆破予告を送ってきた犯人が内部の人間ではないかと考えていた。
しかし、爆弾のばの字も見つからない以上、さてどうしたものか？と頭を抱えていた。

「あ、阿弥陀警部！」
岡崎がそう言うと、阿弥陀警部は彼を見る。
「どうかしたんですか？」
「どうかしたじゃなくて、蜂！　警部の近くに蜂が！」
そう言われ、阿弥陀警部は岡崎巡査が指差したほうを見た。
そこにはスズメバチが飛んでいるのだ。

「あのですね、蜂はこちらが何もしなければ――」
阿弥陀警部は言葉を止め、スズメバチを見た。

そして一瞬険しい表情を浮かべると、
「ほら、こちらからは何もしなければ、刺してきませんよ」
そう言うや、岡崎巡査の肩を押しながら、その場を後にした。

『今のは普通の蜂とは違って、すこしだけ神力(しんりき)があった。まさか田(た)心姫(ごりひめ)が近くにいるとでも？』
そう考えながら、阿弥陀警部は振り返るようにスズメバチを一瞥すると、スズメバチはまるで用事が済んだかのように、スーと姿を消えた。

伍・嬰音（後書き）

さて、この話、実は今後の物語に大きく関わります。

陸・神仙（前書き）

神仙（しんせん）：日本音楽の十二律の一。基音の壱越（いちこつ）より一〇律高い音で、中国の十二律の無射（ぶえき）、洋楽のハ音（C）にあたる。

陸・神仙

ステージ裏では、緊張した顔付きの燈愛が立っていた。
彼女はすでにステージ衣装である、ナチス親衛隊の黒服を着ている。
「大丈夫だ。いつもどおりにやればいい」
秀隆がそう言うと、燈愛は頷く。

「大丈夫だよ。僕たちもしっかりサポートするから」
Ｇｔの宮村がそう言うと、他のメンバーも答えるように頷いた。
「それじゃあ、まず――」
秀隆がステージに出る順番を最終確認する。
Ｄｒ、Ｂａ、Ｋｂ、Ｇｔ、そして最後に、ボーカル（以降Ｖｏと表記）である燈愛がステージに登場する。
「う、うまくいきますかね？」
燈愛がそう尋ねると、
「大丈夫よ。私たちが燈愛ちゃんを引っ張ってあげるから、あなたは思いっきり自分の仕事をすればいいの」
国貴は赤のドレスを身に纏っている。

これは燈愛の新曲である『嘆きの天使』という曲のイメージ衣装である。
燈愛は曲の主人公である軍隊に入った恋人をまつ少女。
国貴はその恋人が、軍隊の仲間に誘われて入ったキャバレー（今で言うスナックやホストクラブといったところか）で踊り子をしている女性の姿。
あとのメンバーは軍人をイメージした衣装を着ている。
国貴以外は軍服のため、皮製である。燈愛は日中の出演じゃなくてよかったと思った。

先日、新曲ジャケットの撮影のさいにも同じ服を着たのだが、それが暑くてたまらなかった。
撮影場所が外だったため、その暑さに倒れそうになったのだ。

「あ、河本さん。ちょっとトイレにいってきていいですか？」
「後３０分で出番だからな。急いで戻ってこい」
秀隆がそう言うや、燈愛は急ぎ、ステージを後にした。

燈愛は自分の控え室である、キャンピングカーの扉を開けた。
「ごめんなさい。あなたたちのこと忘れてたわ」
燈愛が謝りながら、中にいるはずの三姉妹に言った。
「っと、おかえりなさい」
テーブルに座っている葉月が返事をする。
「ごめんなさいね。忙しくて、あなたたちのこと忘れてた」
「それはまた殺生なことで」
皐月が皮肉っぽく言う。
「そろそろ私たちも観客席に行かないと、あなたのライブ見れないんだけどね？」
弥生がそう言うと「私の見にきてくれてたの？」
燈愛は驚いた表情で三姉妹に尋ねる。
「ええ、元々は葉月が葉書を応募して、それが当選したの」
「へぇ、聞いた話だと、１００名当選で、応募が５万だったらしいから、結構運がいいのかもね？」
燈愛とは違う声だったので、三姉妹は今の言葉を発したのは、川姫だとわかる。

「まぁ、葉月の場合、後先考えないで、遊び半分で応募してるから、運がいいか悪いかなんて、本人は思ってないだろうけど？」

「思ってるよ。私、結構籤運いいんだよ？　神社の御神籤（おみくじ）はいつも大吉だし」
「逆に大凶の人だって、言い換えれば運がいいっていえない？」
皐月がそう言うと、葉月は「どういうこと？」と首を傾げる。
「弥生姉さん、うちの神社の御神籤って、何種類あるんだっけ？」
そう尋ねられ、弥生は少しばかり考え込む。
「えっと、大吉・吉・中吉・小吉・半吉・末吉・末小吉・平（へい）・凶・小凶・半凶・末凶・大凶」
弥生は指折り数えながら、御神籤の種類を言っていく。
「ちょ、ちょっと待って、『平』ってなに？　『平』って」
燈愛がそう尋ねると、
「『平』っていうのは「物事が平らかになる日」って意味」
弥生がそう説明する。
「まぁ、少なくとも１３種類もあるうちの御神籤で、ずっと同じやつが出るのは運がいいって話」
皐月がそう言うと、燈愛はクスクスと笑った。
「確かに、同じ結果が出るのも運かもね」
葉月は笑われたことに苛立ち、頬を膨らませた。

「燈愛、そろそろ出番だ」
そう言いながら、秀隆がキャンピングカーの扉を開ける。
「おや、君たちは？」
三姉妹に気付き、秀隆は尋ねた。
「あれ？　河本さん、私トイレに行くって云ったんだけど？」
「君はこういった大きなイベントだと、トイレに行くとか言って、楽屋に戻るだろ？」
秀隆がそう言うや、燈愛は納得いった表情を浮かべた。
「ところで、君たちは？」
「え、えっと……」
葉月がしどろもどろに言葉を捜す。

「あ、私の知り合いで、招待したんです」
燈愛がそういうや、三姉妹は燈愛を見やった。
「それで、相談なんですけど、彼女たちをバックステージに招待できないかなって」
「うーん、迷惑にならないならいいが」
秀隆がそう言うと、「ありがとうございます」と燈愛は頭を下げる。

「いいんですか？」
皐月が秀隆にそう尋ねると、
「本当はだめなんだけどね。今から観客席に行っても、見られる場所がないだろ？」
「でも、私たちちゃんとチケット、というか当選葉書を持ってるから入れると思いますけど？」
「いいじゃない？　お言葉に甘えましょ？」
弥生がそう言うと、葉月は渋々それに従った。
本心では、葉書を持っているのだから、観客席から見るものだと思っている。
「それじゃ、私は先に行きますから」
そういうや、燈愛はステージのほうへとかけていった。

「それにしても君たち、どうして燈愛と一緒にいたんだい？　ここは関係者以外立ち入り禁止になってるはずなんだけどね？」
秀隆にそう聞かれ、葉月は公園で練習していた燈愛に声をかけてしまい、ばれそうになったので、ここまで連れてこられたと説明する。
「なるほど、まぁ緊張してしまうのは仕方ないことだし、公園で声出しの練習をしているのは、今に始まったことじゃないからね。それに、プロの人でもそうやって練習している人は多いんだよ」
「そういえば、うちの吹奏楽部も、音楽室じゃなくて、廊下とかで

練習してるわね」
「外では音が反響しないからね、肺活量を鍛えるにはもってこいの場所なんだよ」
「燈愛さんがいってましたけど、外だったら思いっきり歌えるって」
葉月がそう言うと、
「元々は僕が誘ったんだよ。燈愛は元々小心者で、緊張しちゃうから、デビュー前は公園で歌やダンスの練習をさせていたんだ。公園だと人に見られたりするから」
「それで人に見られることを慣れさせたってわけですね」
弥生の問いかけに、秀隆は答えるように頷いた。
「それじゃ、そろそろ時間だし、行こう」
秀隆にそう言われ、三姉妹は頷いた。

バックステージに案内された三姉妹は、その光景に驚く。
ステージは煌々と輝いているのに、ここはミキサーに橙色の光が照らされているだけだ。
「ミキサーは音の調整をするために必要だからね。手元が見えないといけないだろ？」
秀隆が説明すると、外の音が聞こえ始めた。

「みんな！　今日はきてくれてありがとう！　こんな大きなライブは初めてだけど、精一杯がんばりますから！　みんなも精一杯楽しんでいきましょ！！」
ステージ上の燈愛がそう言うや、観客たちは興奮する。
そして、ドラムのカウントから、曲は開始された。

「すごい」
葉月はただただ呆然と聞いている。
「あれ？　すぐ近くなのに、どうしてうるさくないんだろ？」

皐月が疑問に思い、呟く。耳が悪いとはいえ、聞こえないわけではない。

野外ライブなので、ステージ上の騒音は仕方ないと思っていたのだ。

「それはね。ミキサーが各場所に設置したスピーカーから発せられる音を調整しているからなんだ。それにここは防音設備もされているから、あまりうるさくないしね」

秀隆がそう言うと、

「アーティストの前にモニターがあって、演奏している人が聞こえやすい音量を出してるの。耳につけているイアフォンを通して、私たちスタッフが指示を出したりするのよ」

そう言うや、音響担当の円谷が「燈愛ちゃん、一瞬だけでいいから、バックステージの方を向いて、何かアクションをしてくれないかな？」

ヘッドマイクで指示を出すと、ステージ上の燈愛がバックステージの方に視線を送るや、ウインクした。

「ほんとだ。でも、他の人にも聞こえるんでしょ？」

「まぁね。こればかりは仕方ないけど、でもタイムスケジュールもあるから、調整するという意味もあるんだよ」

秀隆がそう説明していると、

「おや？　三人とも、どうしてこんなところに？」

うしろから知っている声が聞こえ、三姉妹はそちらに振り返った。

「阿弥陀警部？　それに佐々木刑事も」

「いやはや、また珍しいところで会いましたな？」

佐々木刑事がそう言うと、「お知り合いですか？」と秀隆が阿弥陀警部と三姉妹に尋ねた。

「ええ。まぁ、知り合いといえば知り合いですけど」

皐月が苦笑いを浮かべながら言う。

「しかし、どうして皆さんがここに？　関係者以外は立ち入り禁止なんですけど」
「あれ？　阿弥陀警部と佐々木刑事って、刑事部だから、こういう場所には呼ばれないと思うんですけど？」
弥生が首を傾げながら言った。
阿弥陀警部と佐々木刑事は私服とはいえ、警官である。
警備をしているわけではないだろうし、そもそも私事（プライベート）できたのなら、なんともかけ離れている。
「いやね？　ちょっとありまして、気になります？」
「まぁ、気にならないってわけじゃないけど」
皐月は葉月を見るが、楽しそうに興奮しているのを見て、水を差すのは忍びないと思ったのだろう。
「ここじゃアレですから、外でお話しましょう」
そう言われ、阿弥陀警部と佐々木刑事は頷き、弥生と皐月を外に連れて行った。

漆・遠吠（前書き）

遠吠（ハウリング）：音響再生の際、スピーカーから出た音をマイクが拾い、それをまたスピーカーが再生するということを繰り返し、大きな騒音が連続して発生する現象。

「爆弾？」

皐月が大声で、阿弥陀警部と佐々木刑事に聞き返した。

「ええ。このイベントに協賛しているスポンサー各位に、爆破予告の手紙が届いてましてね。私たちもその捜索に参加させられてるんですよ」

「それで、爆弾が置かれている場所の目処はついてるんですか？」

「いや、それがまったく。会場は設置前に協力してもらって、爆弾反応がないか確認しましたし、観客の持ち物検査も徹底的にしました。これは出演アーティストやスタッフにも同じことをしましたが、全くといっていいほど反応も、不審なものも見つかりませんでした」

「いたずらなんじゃないんですか？」

「そう思ったんですけどね？　どうも今回のイベント、裏があるんですよ」

「――うら？」

弥生と皐月が首をひねる。

「このイベントの主催は『橋本芸能プロダクション』。今歌っている鮎川燈愛さんが所属している芸能プロダクションなんです」

阿弥陀警部がそう言うと、「しかもちょっと噂があるんじゃよ」

佐々木刑事が手帳を広げ、「『社長である橋本隆平には、暴力団の影がある』という噂がな」

と言った。

「黒い噂ね」

弥生が呆れた表情で言った。

「それともうひとつ、これは違う事件なんですが――　先日、殺人容疑で指名手配された女性がいるんですよ。それがどうも、橋本が

絡んでいることと繋がってるわけでして」
そうは言われても、弥生と皐月は何のことかわからず、聞き返した。
「ある女性が男性に騙されましてね、その怨みでその男性を殺したんです。その男性ってのが『市柿組』の裏帳簿を持っていたらしいんですよ」
「らしいって、まだ確証があるわけじゃないんですね？」
皐月がそう言うと、
「まぁ、こちらも別件になりますし、そちらは西戸崎くんの仕事ですからね」
「でも、芸能事務所が暴力団とつながってるとはね。金銭的な繋がりかしら？」
弥生がそう尋ねる。
「まぁ、どこで借りるかはさておき、お金は必要となりますからね」
阿弥陀警部は呆れた表情で言った。

「今、夕方の五時ですから、ライブがあるのも残り五時間――　このまま何もなく終わってほしいですね」
阿弥陀警部がそう言うと、
「わしらは引き続き、爆弾の――」
突然ステージ上からハウリング（スピーカーから出た音をマイクがひろい、それがスピーカーよりも大きいとなる現象のこと）が起き、皐月たちは硬直する。
「ちょ、ビックリした」
弥生と皐月が両耳を塞ぎながら、ステージの方を見た。
「何か機材トラブルでもあったんでしょうかね？」
阿弥陀警部はそう言うや、バックステージへと走っていく。佐々木刑事と弥生たちも後を追う。

バックステージに入ると、騒然としていた。

阿弥陀警部はステージの方を見ると、誰かが倒れているのが見える。
「おいっ！　菅原さんが倒れてるぞ！　中断しろ！」
イベントスタッフが急いでステージに上がり、倒れている菅原を運び込む。
突然のことで観客席はどよめいている。
「ご来場の皆様、ただいま機材トラブルが起きたため、一時ステージを中断します。復旧されるまで、しばらくお待ちください」というアナウンスが聞こえ、ステージを照らしていたライトは消えた。
ステージ上の燈愛、宮村、銅石、国貴の四人も、バックステージに戻ってくる。

運びこまれた菅原を見るや、出演者たちが動揺を隠せないでいる。
「おい。菅原くん、しっかりしろ！」
宮村が声をかけるが、菅原は反応しない。
裏口から、救命スタッフがバックステージに入ってくる。
「動かさないように、ゆっくりと」
指示を出しながら、菅沼を担架に乗せ、別室に運び込んだ。

「葉月、一体何が起きたの？」
皐月がそう尋ねると、葉月は思い出すように
「それが、突然音がうるさくなって、みんなそれにビックリしたの。そしたらＤｒの人が倒れてて」
「ちょっと待って、それってステージの人も見たのよね？」
皐月はそう言いながら、燈愛たちを見る。

「ええ。確かに、どのスピーカーから出たのかはわからないけど、ハウリングを起こしたのは間違いないわ。菅沼くんが倒れたのはその後よ」
そう言いながら、国貴は円谷を一瞥する。

「彼女なら音を調整することは可能のはずよ」
「ちょっと待ってくれ。それじゃ彼女がハウリングを起こしたとでもいうのか？」
銅石がそう尋ねると、
「だってそうでしょ？　私たちからは音量を調整することは出来ない。リハーサルのときに、音の調整をしてもらってるけど、本番ではそれが出来ないのよ？」
「確かに、ギターとベースは手元で歪みを調整したり出来るが、音量は調整できないな」
宮村がそういうと、
「でも、確か調整表があったはずだ。これは各アーティストで違うから、調整するときに必要になるはずだぞ？」
銅石にそう言われ、円谷は急いでミキサーの上に置いてあるメモを手に取った。

「拝見してもよろしいですかな？」
阿弥陀警部がそう言うと、円谷からメモを受け取る。
「確かに、Ｖｏ＝２０。Ｇｔ＝１６。と書かれていますね。これは音の大きさですか？」
そう聞かれ、円谷は頷く。
「それを見て、音を調整するんです。人によって聞こえ方が違いますから」
「なるほど、これは皆さんされているんですね？」
「ええ。それにそれはステージ上だけではなく、演奏者の前にあるモニターからでる音の調整もありますからね」
「けっこう大変なんですね。ミキサーって」
弥生が近くにいた国貴に尋ねる。
「ええ。ミキサーがしっかりしてると、私たちもしっかり演奏できるのよ」
「それじゃ、そのミキサーってのが故障したんだろうかね？」

佐々木刑事がそう言うと、
「それはないと思います。ずっとここで聞いてましたけど、みんな楽しそうにやってたから」
葉月がそう言うと、
「でもね、興奮してくると聞こえなくなるなんて事あるからね」
「あれ？　でも音の調整はミキサーでしか出来ないんですよね？」
弥生にそう言われ、宮村は頷く。

「皆さん、そろそろ再開しないと」
スタッフがそう言うと、宮村たちは準備に取り掛かる。
「ちょっと待ってください。菅沼さんがいない状態でどうするんですか？」
燈愛がそう言うと、
「仕方ない。準備にかかろう。菅沼くんの容態も心配だが、今は仕事が先決だ」
宮村がそういうと、国貴と銅石も準備にかかる。
「燈愛、お前は見勝手なことをして、お客さんを困らせるのか？」
秀隆がそう言うと、燈愛は小さく頷いた。

「調整完了しました。いつでも再開出来ます」
円谷がそう言うと、宮村たちはステージに上がろうとする。
「ハウリングって、スピーカーから出た音をマイクが拾ってなる音よね？」
皐月がそう言うと、
「え、ええ。そうならないように調整するんだけど――」
円谷が首を傾げながら言った。

「それって、あなたも聞こえるんじゃないの？」
皐月は円谷を見ていった。
「えっと、どういうこと？」

「ライブが始まったとき、私たちに説明しましたよね？　モニターからは演奏者個人に適した音を出して、イヤホンからはヘッドマイクを通して指示を出してるって」
皐月がそう尋ねると、「ええ、そうよ。それがどうかしたの？」
「ハウリングはスピーカーから出た音をマイクが拾うってことは、その音がモニターを通して演奏者全員に直接聞こえるんじゃないんですか？」
「確かに、そうなるが」
「それにあなた言ってましたよね？　どのスピーカーから出たのかはわからないけど、ハウリングを起こしたのは間違いないって」
皐月は国貴を指差し言った。
「ええ。確かに聞こえたけど、モニターからは――」
国貴はハッとする。
「それじゃ、いったい誰のマイクから拾ったっていうの？　マイクの位置は、そうならないように十分配慮されてるはずよ？」
「たしかに、そうならないように十分注意しているから、聞こえないはずだ」
「それに、その子が云ってる通り、ハウリングを起こしたなら、モニターからも聞こえてるはずだ」
宮村、銅石、国貴の三人が円谷を見た。

「モニターだけを消すことは出来ないんですか？」
「モニターだけを？」
「モニターの音量を消せば、聞こえるのはイヤホンの音と、スピーカーの音だけですよね？」
「ああ、ミキサーでモニターの音を消すことも可能だけど」
「つまり、ステージにいる僕たちは、イヤホンの音とモニターから聞こえる音、そしてスピーカーから聞こえる音の3つというわけだね」
宮村がそう尋ねると、皐月は頷いた。

「スピーカーから聞こえたってことは、モニターからは聞こえなかったってことですよね？」
「そうなると、やっぱりミキサーでモニターの音を消したってことか？」
「ちょ、ちょっと待ってください！　私がどうしてそんなことをしないといけないんですか？」
円谷がそう言うと、救急スタッフが戻ってきた。

「菅沼くんの容態は？」
宮村がそう尋ねると、「今は安静していますが、眩暈がすると」
「――眩暈？」
「それと、最初私たちが声をかけていましたが、反応がなく、しばらく待つと反応がありました」
「気を失ってたんじゃないんですか？」
「いや、倒れたことや、宮村さんが声をかけていたことも知っていました」
「それじゃ、一時的に耳が聞こえなかったって事？」
「多分、イヤホンからスピーカーの音が聞こえたからでしょうね」
皐月はそう言うと、円谷を見た。

「な、なにを云ってるの？　イヤホンからスピーカーの音が聞こえるわけがないじゃない？」
「確かにそうだ。モニターやスピーカーにつかうケーブルのプラグは3．5ミリ。イヤホンは2．5ミリとサイズが違う」
銅石が近くにあったケーブルと、イヤホンを持ってきて見せた。
「銅石さんの言うとおり、サイズが違いますね」
「ほら見なさい。それでどうやって――」
円谷がホッとした表情を浮かべたときだった。

「変換プラグ」と国貴が言った。

「変換プラグ？」
葉月がそう尋ねると、
「一般的なヘッドホンのサイズは、イヤホンと同じく2．5ミリになってるの。だけど、キーボードの音をヘッドホンで聞くには、変換プラグを使って、3．5ミリにしないといけない場合があるのよ」
「そうか、それならイヤホンからスピーカーの音を聞こえさせるのも難しくはない」
「ちょっと待ってください。イヤホンからの音は電波に乗せて、みんなに」
「それを菅沼さんだけのイヤホンにしか聞こえないようにしたら？」
皐月がそう尋ねると、円谷は表情を変えた。

「菅沼くんだけのイヤホンにしか聞こえなくする？」
「燈愛さん、ちょっとイヤホンを貸してくれませんか？」
そう言われ、燈愛はイヤホンをはずし、上着からコードが繋がった小さな機械を取り出した。
「これは電波を通して使うやつですよね？」
「ええ。人によっては動き回る人もいるから、無線で飛ばせるやつだけど、今は殆どそれが主流になってるわ」
国貴がそう説明する。
「でも、今思ったんだが、イヤホンは無線で連絡を取るんだ。そもそもプラグを変えるなんてことは出来ないんじゃないかな？」
宮村にそう言われ、皐月はハッとする。
「ほら、それじゃ私がしたなんて証拠がないじゃない。それに変換プラグなんて演奏中に交換したら、接続したときに音が可笑しくなるはずよ」
円谷が勝ち誇った表情を浮かべた。

捌・約束

宮村と銅石、国貴がステージに上がる準備をしている。
「推理が外れましたな」
「いや、Ｄｒの人が倒れたのは、耳に大音量がながれたからだと思うんです」
皐月はジッと円谷を見る。円谷は黙々とミキサーの調整に入った。

「Ｄｒはどうする？　打ち込みにするか？」
銅石がそう言うと、宮村は「仕方ないだろう。代わりがいれば話は別だが」
「もうお客さんを待たせるのはいけないしね」
国貴も諦めた様子に言う。

燈愛はふと円谷の近くにいる葉月を見た。
「葉月ちゃん、どうかしたの？」
そう尋ねると、
「何であなたは平気なの？」
葉月が円谷に尋ねる。
「な、なにを云ってるの？　私はどこも悪くないわ」
「そうよ、それにＰＡの人はヘッドマイクを使って、私たちに指示を――」
葉月を円谷から話そうと燈愛はそう声をかけたときだった。

「宮村さん、ちょっとステージに上がって、時間稼ぎにギター演奏してくれませんか？」
そう言われ、宮村は首をひねった。
「別にかまわないが、どうかしたのかい？」
「ちょっと気になることがあって、円谷さん、ヘッドマイク借りま

す」
燈愛は円谷からヘッドマイクを取り、それを自分に着けた。
「宮村さん、お願いします」
そう言われ、宮村がステージに上がった。

ステージ上に上がったことで、観客が騒ぎ始める。
そして、証明が宮村を照らすや、観客が興奮し始めた。
宮村がギターソロを弾き始めたことで、さらに興奮していく。

「燈愛、いったいなにを」
秀隆がそう尋ねるが、燈愛はそれに答えず、ヘッドマイクを葉月の耳にかけた。
そしてそれを聞くや、葉月は驚いた表情を見せた。
「いったいなにが？」
「聞こえたんです。今、宮村さんが弾いているギターの音が」
その言葉に全員が首を傾げた。
「そりゃ聞こえるでしょ？　ＰＡは会場の音も把握しておかないといけないんだから」
国貴がそう言うと、
「それだったら、ハウリングが起きたとき、円谷さんだって、耳を悪くするんじゃないんですか？」
燈愛がそういうと、
「確かにそうですね。スピーカーの音が聞こえているということは、ハウリングが聞こえているはずですからね」
「でも、それじゃイヤホンにはどうやって」
弥生がそう言うと、
「たぶん、こうしたんじゃないかな？」
葉月はヘッドマイクを耳から離し、マイクとヘッドホンのスピーカーを近づけた。

「多分イヤホンから、音が聞こえるはずですよ」
「ほんとだ。宮村さんのギターが聞こえてきた」
国貴と銅石が驚いた表情を浮かべた。
「マイクを通して指示を出していたってことは、ヘッドホンから聞こえる音をマイクに近づければ、その音がイヤホンにも聞こえてくるんです」
葉月がそう言うと、
「それじゃあ、それを使って、ハウリングを菅原くんにだけ聞かせたというわけか」
「しかし、いったいどうして？」
国貴がそう言うと、円谷を見た。

「彼がいけないのよ。彼が私とのデートをすっぽかすから」
「付き合っていたんですか？」
「ええ、もう5年以上前からね。彼が人気スタジオミュージシャンだったのは知ってたけど、休日（オフ）の時はいつも一緒にいたわ。でも、最近は忙しいの一点張り。連絡を取ろうにも取れなかった」
「そりゃ、それだけ忙しかったんだろ？　それに、ライブの仕事があれば、ＰＡの君だって似たようなものじゃないか？」
「でも、私は彼にこう云われたのよ。わかれようって」
円谷の目からはうっすらと涙が浮かんでいる。
「それで彼を痛めて、ライブを滅茶苦茶にしようとした」
「そんな見勝手なことを」
「それだけじゃないわ。彼は立派なプロのドラマーなの！　それなのにいつも裏側にいる。スポットライトが当たるのは、うまくもないアイドルばかり。今日だって、こんなすぐにでも消えそうな小娘のバックバンドを、知り合いの頼みだからって」
燈愛はその言葉にハッとする。

「違うもん！　燈愛さんは絶対消えない！」

葉月が目に大粒の涙を浮かべながら訴える。
「違わないわ！　この業界に長くいるとね、売れるアイドルと売れないアイドルってのがすぐにわかるの。彼女にはその力がない」
「力があるから、アイドルをやってるんでしょ？　一生懸命やってるから」
「一生懸命やってもね！　敵わないものがたくさんあるの！　アイドルを目指す人はたくさんいるわ！　でも、それでも選ばれる人は、ほんのひとつまみの人間でしかないのよ！　彼女がどんなに頑張ったって売れやしない。今は夢の中で、現実を思い知ることだって必要なのよ！」
　円谷がそう言うと、
「私！　燈愛さんの曲大好きだから！　全部練習してみんなで歌うの大好きだから！」
「子供が！」
　円谷が葉月を叩こうと、手を振り上げた。

　そして劈く音が聞こえたが、倒れたのは葉月ではなく、燈愛であった。
「なっ」
「あんたは、あんたは燈愛のなにを知ってるのよ？」
　ゆっくりと起き上がった燈愛がそう呟く。
「な、なにを云って？」
「頑張っても、頑張っても、手に届かないものだってある。そんなの、当の本人が一番わかってるわよ」
　燈愛の低い声に全員が驚く。
「わ、わかってるなら、さっさとアイドルなんて辞めなさい！」
　円谷がそう言うと、燈愛はキッと円谷を睨んだ。
「やめるわけないでしょ？　小さい時からこの子が夢見てきたアイドルが！　やっと手にした夢を、自分から手を離すなんてことは絶対にしない！」

「だから！　あんたの実力じゃ売れるわけないでしょ？」
「売れるか、売れないかなんて、そんなの時の運でしょ？　この子はその運を手に入れた！　運は絶対に手放したりしてはいけないのよ！　がむしゃらに頑張って手に入れた夢を、この運を手放すことは絶対しない！」
　それはどちらが泣いているのだろうか、まるでオッドアイのように、片方は諦めたような暗い瞳をし、もうひとつはそれを庇おうと、懸命に相手を睨みつけている瞳であったが、そのどちらも泣いていた。

「円谷さん。すみませんが事情聴取してもいいですかね？」
　阿弥陀警部がそう言うと
「待ってください。まだライブが終わっていないんです。彼女をＰＡにしたのは僕ですし、今回の件は僕が責任を取ります」
　秀隆がそう言うと
「しかしですね？　仮にも彼女は人を傷つけていますし」
　阿弥陀警部が困った表情を浮かべる。
「僕からもお願いします。ライブが終わってからにしてください」
　宮村や銅石、国貴も阿弥陀警部にお願いする。
「あー、もう、わかりましたよ！　でも、ライブが終わったら、円谷さんを連れていきますからね！」
　阿弥陀警部がそう言うや、秀隆たちはホッとした表情を浮かべた。

「でも、やっぱりＤｒがいないのは」
　燈愛がそう言うと、
「それだったら僕がするよ。これでも昔はバンドでＤｒをやっていたし、燈愛の曲は新曲も含めて、全部頭の中に入ってるからね」
「あれ？　さっき円谷さんが云ってた、菅原さんの知り合いって」
　皐月が秀隆を見やる。

「さぁ、お客さんが痺れを切らしている。待たせた分、最高のステージにしようじゃないか！」
秀隆がそう言うと、全員が鬨を挙げた。
「そうだ、葉月ちゃん」
燈愛が葉月に耳打ちをする。
「この中で――」

暗闇に満ちたステージの上で、ゆっくりと足音が聞こえる。
周りから聞こえてくるのは観客の騒々しい音。

Ｄｒがカウントを取り始め、イントロが流れ始める。
ステージを証明が照らすと、燈愛の隣には葉月が立っていた。
「みんなぁっ！　突然中止しちゃってごめんなさい。ちょっとミキサーが不調で、修理に途惑ってたの。でも、もう大丈夫だから、最後まで楽しんでいって」
そう言うと、燈愛は歌い始めた。

『私は――　私は、この子の後押ししてあげてただけ』
「えっ？」
葉月は不思議そうに燈愛を見上げた。
燈愛は歌っているため、言葉を発するタイミングはほとんどない。
『小さい時から、馬鹿みたいに一生懸命に、一途にアイドルになろうって、本人だってなれっこないって思った時期もあった。でも、この子はそれでも諦めるなんてことはしなかった。売れなくてもいい、ただ自分の歌を、自分の存在を知ってほしかったの』
「――っ」
葉月は燈愛の表情を見る。それは本当に真剣で、それでいて楽しそうに歌っている姿が、輝いて見えたのだ。
『私はこの子が売れるようにって、人を魅入らせるようにしていた。

でも、歌も踊りも、この子の実力なの。これからもずっと……　私はこの子の背中を押してあげるだけ』

川姫が葉月の頭の中に話しかけていると、曲が終わった。

「それじゃ、今日、最後の曲です」

燈愛は一瞬だけ葉月を見た。その表情は吹っ切れたような、そして決意を固めたような表情である。

その直後、葉月は燈愛から川姫がいなくなったのを感じ取った。

「この曲は、私が小さいころ、一緒に歌手になろうって約束した友達がいて、でも、その友達は夢を終わらせてしまいました。だから、私は彼女の『鮎川媛乃（あゆかわひめの）』の分まで、一生懸命に足掻いて、みんなに私の歌を、この思いを届けたいと思います。天国にいる私の大切な友達のために――　聞いてください『嘆きの天使』」

燈愛の瞳には大粒の涙が零れ落ちていた。

葉月は自分の手を握っている燈愛がギュッと握っているのを、何も云わず、ただその曲をジッと聴いていた。

この曲は戦争に行った恋人を追って、戦地へとやってきた少女の歌。

だがこれは、夢半ばに死んでしまった、鮎川燈愛の友人である『鮎川媛乃』に送る贐（はなむけ）として作った曲でもあった。

曲が終わると、観客は歓声を挙げる。

「いいぞぉ！」「すてきぃ！」「燈愛ちゃん、さいこー！」

観客席から惜しみない拍手と黄色い声が聞こえ、燈愛はホッとした表情で葉月を見た。

そしてステージのライトは消えた。

「それじゃ、円谷さんを署まで連行しますね」
阿弥陀警部はそう言うや、円谷に声をかける。
「円谷さん、菅原くんは自分から進んでバックバンドの仕事を引き受けてくれたんだ。たしかに彼の実力ならメインになってもいいくらいだ。でも、仕事をきちんとこなすのがプロなんだよ」
秀隆がそう言うと、円谷は何も言わず、阿弥陀警部と一緒にバックステージを後にした。

「燈愛ちゃん、今日のステージ、すごくよかったよ」
「ええ。とてもいいステージに参加させてもらって、光栄に思ってるわ」
宮村と国貴が燈愛に握手を求める。
「あ、ありがとうございます」
燈愛は照れくさそうに、返事をする。

「よし、次の曲は俺が作るよ」
銅石がそう言うと、「いいえ、私が作るわ」
国貴が反発するように言う。
「あーもう、そういうのは他所でやりなさい」
宮村が二人を宥めに入った。

「燈愛、今日はよく頑張ったな。今までで一番いい舞台だったぞ」
秀隆が声をかけると、燈愛はようやく笑みを浮かべた。
「河本さん。私これからも頑張ります」
「え？　ああ、そうだな。僕も君のマネージャーとして、ついていくよ」
二人が会話をしているとき、葉月はジッと皐月と弥生の手を繋いでいた。

「どうかしたの？」
「川姫は、本当に悪い妖怪じゃなかった」
葉月がそう言うと、弥生と皐月は首をひねる。

「三人とも、私の控え室に来て、そこでお話します」
燈愛にそう言われ、三姉妹はそれに従った。

キャンピングカーに入ると、燈愛は冷蔵庫からジュースが入ったペットボトルを取り出し、それを紙コップに注いだ。
「あなたたちが言っていた川姫は、わたしがデビューする一年前に、事故で亡くなった友達なの」
「事故？」
「ええ。友達が事故にあった先日、局地的に激しい大雨があったの。それでダムの水が溜まってしまって、調整するために放流をした」
「それじゃ、その友達は」
「その時、川には彼女一人だけしかいなかった。一緒にいた友達は離れていて、難を逃れた」
それはなんとも皮肉な話である。
「それじゃ、燈愛さんに取り憑いていた理由は？」
弥生がそう尋ねると、燈愛は紙コップを口につけ、ジュースを一口飲む。

「アイドルになろうって、約束してたからじゃないかな？」
燈愛はそう言うと、天井を仰いだ。
「媛乃さん、燈愛さんのこと応援してた」
「そういってもらえるとうれしいな。私は媛乃には勝てないって思ってたから」
葉月の言葉に、燈愛は笑顔で答える。

「私は媛乃の分まで頑張るよ。そして絶対、アイドルの頂点に立つ！」

「それでは、円谷なおみを署まで連行します」
「はい。一応傷害事件ですから、それなりの処罰は受けてもらいますよ」
パトカーは警視庁へと走っていった。

「結局、爆弾は見つからなかったか」
阿弥陀警部は時計を見た。時間は午後十時を回っている。
イベントも終了し、結局爆破予告はデマだったとホッとしたときだった。
――彼の携帯が鳴り響く。
「っと、もしもし」
『あ、阿弥陀警部、お疲れ様です』
声の主は吉塚愛である。
「ああ、愛ちゃんお疲れ様です。どうかしたんですか？」
『今、通報がありまして、阿弥陀警部たちがいるイベント会場の近くに廃ビルがあるんです。そこに――』

月明かりのない闇世の中、その部屋には数名の警官と鑑識官が、部屋の捜索をしていた。
証明に照らされたその肉塊を見るや、湖西主任は顔をゆがめていた。
「湖西主任――　こ、これって、ひ、ひと……ですよね？」
鑑識官の一人がそう尋ねる。いや、彼自身、目の前にある肉塊が人であることは理解していた。
しかし、この凄惨なる状況が理解できなかったのだ。

「無数の膨れた後に、蕁麻疹……　スズメバチにでもやられたとみていいかもしれないな」
「ですが、いくら探しても、蜂の巣なんてありませんよ。こんな風になるには、少なくとも百匹以上は飛んでいないと駄目なんじゃないんですか？」
「いや、蜂の毒針はミツバチを除いて、いくらでもさせますからね。でも、これは確かに数匹でやったにしては数が多すぎる」
その膨れ方は異常で、まるで空気を入れたかのように膨れ上がっている。

「こ、湖西主任！　遺体の身元が判明しました」
震えた声で、鑑識官が遺体のポケットに入っていた財布を、湖西主任に渡した。
「『若杉璃音』？」
湖西主任が財布を見ていたときだった。誰かが階段を上がっていく音が聞こえてきた。

「皆さん、ご苦労様です」
「阿弥陀か？　そっちはどうじゃった？」
湖西主任がそう尋ねると、
「いや、こっちは無事にイベントが終わりましたよ。ところで遺体は」
「それより、西戸崎を呼んでくれんか？　ちょっと困ったことになってしまってな」
「どうかしたんですか？」
阿弥陀警部は首を傾げながら尋ねる。

「仏さんの身元がわかったんじゃよ。若杉璃音、西戸崎が追っていた事件の容疑者じゃ」

「誰かに殺されたんですか？」
阿弥陀警部がそう言うと、湖西主任は怪訝な表情を浮かべた。
「人間の仕業かどうかは、みればわかるよ」
そう言われ、阿弥陀警部は若杉璃音の遺体を見た。
「これは――　いったいどうやって？」
「検死に回さんと、詳しいことはわからんが、人がやったこととといえるか？　体中に虫刺されがあるから、蜂に刺されたと考えて、まず間違いないじゃろうが、それが何ヶ所とはいわんのじゃよ」
湖西主任がそう説明する中、阿弥陀警部は若杉璃音の遺体を調べる。
「こりゃ、一匹、二匹の仕業じゃないでしょうね。まるでスズメバチに群がったミツバチみたいじゃないですか？」
腫れた部分の隙間に、また指されたあとがあり、そこが膨れ上がっている。

「湖西主任。そろそろ検死に回したいのですが」
「わかった。わしもすぐに行く」
そう言うや、湖西主任は阿弥陀警部の肩を叩き、
「若杉璃音の遺体から、微かにじゃが、人とは違う気配があった。何を目的にしておるかはしらんが、用心しておけ」
湖西主任は一言残すと、部屋を出て行った。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「若杉璃音が――殺された？」
『市柿組』組長である市柿が、璃音を追っていた二人組に尋ねた。
「はい。廃ビルで発見しましたが、本人が出てこなかったので、一度ビルから離れたんです。それから二時間後、もう一度部屋に入りましたら……　無残に殺されていました」
「それは可笑しいだろ！　お前たちは誰かがビルに入ったのを見て

るのか？」
　そう言われたが、二人組は首を横に振った。
「いえ、いつビルから出てくるかわかりませんでしたから、入り口で見張っていましたが、誰かが出入りしたというのは見ていません」
「裏口からはどうだ？　窓からは？」
「窓はすべて閉鎖されていて、その上に板がはられていました。裏口のほうも見ましたが、人が通った形跡はありません」
　報告を聞きながら、市柿は頬杖をつく。

「それで見つかったのか？」
「篠塚の家を捜索しましたが、何も見つかりませんでした」
「あれがないと、橋本から金を毟り取れんのだがな」
　市柿は苛立ちを見せる。

「そうね？　でももうかえされる必要も、要求する必要もないわよ」
　扉の片隅に女性が立っている。
　女性の姿は３０代と言ったところか、肩まで伸びた黒髪に、黒のスーツを着ている。
「な、ど、どこから入ってきた？」
　市柿の側近や、二人組が女性に訊ねる。
「どこから？　そんなの答えるわけないでしょ？　今から死ぬ人間なんかにはね？」
　女性が指笛を吹くと、窓のほうから何かがガラスを叩く音がし始めた。
「いったいなんだ？」と二人組の一人が窓を開けると――
　ドサッと、男が倒れ、カラスが男の目を啄ばんでいる。
「た、たすけ――　たす――　た……」
　男が助けを求めるが、もう一羽のカラスが喉を啄ばみ、血飛沫が吹き上がった。
　そしてまるでえさを食べるかのように、無数のカラスが男を啄ば

んでいく。

「お、おい！　そ、外を見ろ」

市柿が窓のほうを指差した。

暗闇の中に無数の光る目が浮かんでいたのだ。

その光は部屋の中に入り込み、夥しい数のカラスが市柿たちに襲い掛かった。

「く、くそ！　おい！　窓を閉めろ！」

市柿にそう言われ、側近の男が開けられた窓を閉めた。

「い、いったい何なんだ？」

市柿は青褪めた表情で、女性を見る。

「人間が無駄なことを――」

その言葉に市柿は生唾を飲んだ。

女性の表情は歪んでおり、まるでこの世のものではないかといわんばかりに……

「い、市柿さま……　ま、窓に罅（ひび）が」

男がそう言うと、市柿は窓のほうを見た。

窓ガラスに罅が入っており、それをカラスたちが嘴（くちばし）で突付いて出来たものだとは、誰一人思いたくはなかった。

窓は銃で撃っても、傷ひとつつかないほどの特殊な強化ガラスである。

それが高々カラスの嘴で傷をつけられているのだ。

「いったい、どういうことだ？　お、俺は夢を見てるのか？」

震えた表情で市柿がその場に跪いた。

パリンというガラスが割れた音が聞こえ、その隙間からカラスが部屋の中に侵入する。

「くっ！」

側近の男が銃を取り出し、カラス目掛けて打ち込んだ。

しかし、外れてしまい、彼はカラスの群れに襲われ――絶命する。
市柿ともうひとりの男も、対抗するが、最早十匹、二十匹の問題ではなかった。
まるで町一帯のカラスが『市柿組』の事務所に入りこんでいた。
それは最早誰も助からない、地獄絵図そのものであった――

「く、くそっ……　たれ……」
市柿が虫の息で女性を睨みつける。
「さようなら……　金を毟り取ることしか出来ない能無し人間」
女性はどこから出したのか、刀を市柿の頭に突き刺し、振り上げた。
メキメキと骨が砕ける音が部屋中に響き渡る。

女性は市柿の頭から刀を抜くと、市柿の頭を蹴り飛ばす。
カラスに啄ばまれたその首は、もはや骨しか繋がっておらず、砕けた頭は壁にぶつかり、粉々になった。
「さぁて、もっと＊＊したい！　もっと！　もっと！　きゃはは……　きゃはははは……　きゃはははははははは――」
女性は身悶え、狂女と云わんばかりに、歪んだ嘲笑を挙げた。
その顔は快楽に身を委ねたように、だらしなく涎を垂らしている。

――彼女の背中には、黒い羽が生えていた。

拾・終止符（前書き）

終止符（ピリオド）：音楽で、曲の終わりを示す符号。

拾・終止符

ライブが終わった二日後のことである。
葉月の部屋からは、鮎川燈愛の曲が流れていた。
「葉月、もう少しボリューム下げなさい！」
隣部屋から弥生の声が聞こえ、葉月はＣＤラジカセの音量を下げた。
弥生は高校三年生であるため、受験勉強をしている最中であった。
「だけど、私たちはライブにきただけなのに、凄いのもらっちゃったわね？」
葉月の部屋にいる皐月が、葉月にそう言う。
「うん。これ、私の一生の宝物にする」
そういうや、机に座っている葉月は、ジッとＣＤジャケットを見つめている。
その表情はとても楽しく、見ていて微笑ましい。

それはライブが終了した後、燈愛からもらったＣＤであった。
ただし、一般的に発売されているＣＤではなく、量産するために作られるマスタリンクＣＤである。
しかも、まだ出ていない新曲ＣＤであるため、値打ちもあるのだが、それに燈愛のサインもついている。
「これで、鮎川燈愛が売れに売れまくったら、結構な価値になるでしょうね？」
「売らないよ。私絶対。だってこの曲、燈愛さんだけが歌ってるわけじゃないもの」
葉月が頬を膨らませる。
「この曲のＢメロ、本当は燈愛さん一人しか歌っていないのに、もう一人、誰かが一緒に歌ってる。たぶん媛乃さんが、一緒に歌ってるんだと思う」

それは葉月の持っているCDからしか聞こえず、後日発売されたCDには入っていなかった。

「しっかし、結局爆弾は何だったのかしら？」

皐月がベッドの上で寝転がると、「爆弾って？」

葉月は皐月のほうを見るや首を傾げる。

「ええ。阿弥陀警部と佐々木のおじいちゃんがイベント会場に来てたのよ。なんでも爆破予告があったとか何とか。でもイベントは一悶着あったけど、無事に終了したし、デマだったんじゃないかって、佐々木のおじいちゃんが言ってたわ」

皐月が説明すると、葉月はキョトンとした表情を浮かべた。

「結局、川姫が鮎川燈愛に取り憑いていた理由は、互いが夢見ていた芸能界において、どうすればいいのかを相談しあっていたってことだし、勝手に成仏してるから、閻獄も何もないわね」

皐月と葉月が話していると、玄関のほうからチャイムが鳴った。

「誰かきたのかな？」

「っ？　チャイムが鳴ったの？」

皐月は耳が悪いため、すぐには気付かなかった。

隣から襖を開ける音が聞こえる。弥生が応対に出たのだ。

「いや、こんにちわ。先日は大変でしたね」

阿弥陀警部が被っていた麦藁帽子を脱ぎ、弥生に会釈する。

「ええ。まぁ爆弾は発見されなかったようで、よかったじゃないですか？」

「はい。ところで皆さんはご在宅ですかな？」

「え？　あ、はい。皐月も葉月もいますけど――　ただ、爺様は寝てるんですよ」

弥生が呆れた表情で言った。

「おや？　またどうして」

「実はライブがあった日、倉庫に保存していた桃酒を飲んだみたい

で、限度も考えないで飲酒するから、二日酔いになってるんですよ」
それを聞くや、阿弥陀警部は含み笑いを浮かべた。

「葉月さんはお体の方、大丈夫ですかな？」
「葉月なら、興奮がまだ冷めてなくて、凄い元気ですけど？」
弥生は阿弥陀警部が神社に来た理由を悟る。
「何か事件があったんですか？」
そう尋ねると、阿弥陀警部はばつが悪そうな表情を浮かべた。

居間に通された阿弥陀警部が卓袱台の上に写真を二枚、裏返しにして乗せた。
「あの、霊視は一回しか」
「いや、この二枚のうち、一枚だけでいいんです」
それを聞くや、三姉妹は首をひねった。

葉月はそのうちの一枚を手に取り、写真を見ようとすると、
「いや、このまま裏返しの状態でやってください」
そう言われ、葉月は従い、自分の目の前に写真をおくと、一、二度ほど深く深呼吸をする。

そしてゆっくりと手を写真の上に翳し、摩るように動かし始めた。

「……っ！」
途端、葉月の表情が険しくなり、ガタガタと体を震わせる。
「い……ゃ……」
小さく声を挙げるや、カタカタと歯を鳴らし、大量の脂汗を垂らす。
「ちょ、ちょっと、やばいんじゃないの？」
「葉月！　写真から手を離しなさい！」

弥生と皐月が止めに入る。

「いやぁあああああああああああああああああああああっ！！」

葉月が甲高い悲鳴を挙げ、倒れた。

「葉月！　しっかりしなさい！　葉月っ！！」

弥生と皐月が声をかけるが、葉月はピクリとも動かなかった。

葉月はまるで目の前で何か恐ろしいものを見たかのように、顔が硬直し、相貌は見開き、白目を向いている。

「大丈夫、気を失ってるみたい」

「阿弥陀警部！　いったい葉月に何を霊視させたんですかぁっ！！」

皐月がそう訊ねると、阿弥陀警部は二枚の写真を二人に渡した。

弥生と皐月はその写真を見るや、体を震わせる。

「な、なによ……　これ……」

弥生は涙を浮かべ、顔を歪ませながら、誰彼構わずに尋ねる。

「そんなの、私のほうが訊きたいわよ？」

皐月は頭を抱え、髪を乱す。気丈な彼女でさえこの状況だ。

「あ、阿弥陀警部？　これって『人』なんですか？」

弥生がそう尋ねると、阿弥陀警部は頷いた。

「こんな、こんな肉の塊が！　めちゃくちゃに体をバラバラにされた死体が！　人の死体だって云うんですかぁっ？」

阿弥陀警部が持ってきた二枚の写真は、若杉璃音の死体が写った写真と、『市柿組』の事務所で殺された市柿、ほか三名の惨殺死体であった。

「バラバラ死体は人でもやろうと思えば出来ることでしょ？　でも、もう一枚のほうは人では絶対に出来ないことなんですよ。死因はスズメバチが持っている猛毒に犯されたことによるアレルギー性ショ

ック死とわかりました。ただされた数がわかっただけでも五十ヶ所もあるんですよ」

「確かに、人がやったにしては度が過ぎてますね？」

「しかも、肉塊と成り果てた若杉璃音の遺体が見つかったのは、イベント会場近くの廃ビルで、そのビルの中を隈なく探しましたが、蜂の巣ひとつも見つからなかったんですよ」

「ちょっとまって？　それじゃどうやって――」

皐月はハッとし、写真を見た。

「どちらも妖怪の仕業と私は見ています。しかも片方は、それ以上の力を持っている」

阿弥陀警部はそう言いながら、ゆっくりと立ち上がった。

「とりあえず用心していてください。この二件の殺人は、人間は一人も関わっていないのかもしれません」

「それっていったい、どういう」

皐月がそう尋ねるが、阿弥陀警部は振り返らず、神社を後にした。

弥生と皐月は肩で息をしていた。

彼女たちはいろいろな死体を見てきた。しかし、それはあくまで人間でも出来ることだったからだ。

しかし、二枚の写真はまるで人がやったこととは思えなかった。

外でカラスが鳴き喚いている。

「カラス？」

皐月はまるで導かれるように、境内へと出て行った。

境内に出るや、その光景に唖然とする。

電柱と電柱を繋ぐ電線。本堂や社務所の屋根の上。ありとあらゆる『とまれる』場所に、無数のカラスが止まっていたのだ。

その光景はなんとも奇怪で、境内のほうにもカラスが群れをなし

ている。

皐月はカラスを追い払おうと、境内につまれた小石をカラス目掛けて投げた。

カラスはそれに驚き、バサバサと羽音立てながら、空へと待っていく。

カラスが群がっていた場所を見るや、皐月は目を疑った。

そこには、小さな肉塊が捨ててあった。

「な、なによこれ？　どうしてこんなのがここにあるの？」

皐月は跪き、悲鳴を挙げた。

そこにあった肉塊はほかでもない。皐月が飼っているハムスターの死体であった。

「ちょ、なんなのよ？　このカラスは」

弥生が母屋の方から、境内へと走ってくる。

「弥生姉さん！　本堂から竹刀持ってきて！」

皐月にそう言われ、弥生は何がなんだかわからなかったが、皐月の表情が険しく、弥生は本堂へと靴のまま上がり、二本の竹刀を皐月に投げ付けた。

「遊火っ！　弥生姉さんを家の中に避難させて！」

そう叫ぶや、無数の火の玉が上空に集まり、少女の姿となった。

「さ、皐月さま？　これはいったい」

遊火は無数にとまっているカラスを見るや、怯えた表情で皐月に尋ねた。

「質問は後！　私が無事に生きてたらね！」

遊火は皐月の表情を見るや、

「わかりました。弥生さま！　ここは皐月さまにお任せしましょう！」

そう言うや、遊火は弥生を母屋のほうへと避難させた。

「へぇ？　随分と気前いいわね。自分だけ犠牲にするなんて」
鳥居の方から声が聞こえ、皐月はそちらに振り返った。
そして女性が座っている場所を見るや、皐月は大きく目を開く。
女性が座っている場所は笠木の上であり、本来ならば人が座ることは、出来ない。
「あなた、誰なの？」
皐月がそう訊ねると、女性は小さく笑みを浮かべる。
「質問に答えて！　あなたいったい何者なの？　人間じゃないでしょ！」
「ええそうね？　私がいようがいまいがどうでもいい人間なわけないでしょ？」
女性がそう言うや、突然突風が吹き荒れ、皐月は腕で顔を覆った。

「あっ……　がぁ……？」
女性は皐月の鳩尾に拳を減り込ませる。
「くきゅぅはぁあはははははははっ！！」
女性は甲高い哂い声を挙げながら、皐月を殴りこむ。
吹き飛ばされた皐月は、ふらふらと立ち上がる。
「へぇ？　さすが地蔵菩薩が罪を犯してまで作った人間の子供だけあって、普通の人間とは違うか」
「な、なんのこと」
「今から死ぬ人間に説明するわけないでしょ？」
女性はそう言うや、皐月を蹴り飛ばす。
「が、はぁっ！」
皐月はゆっくりと起き上がり、
「吾神（わが）殿に祭られし大黒の業（ごう）よ！　今ばかり我に剛の許しを！」
皐月がそう言うや、二本の竹刀は真剣へと変わっていく。

「一刀・羅刹っ！！」
皐月は女性目掛けて、刀を振り下ろした。その一刀は女性に当たった――はずである。
「えっ？　どういう？」
周りを見渡したが、女性の姿は見当たらない。
「あなた、剣の筋はいいけど、興奮して相手を見なさ過ぎるわね？」
上から声が聞こえ、皐月は空を仰いだ。

そこには黒い羽を広げた女性の姿があった。
「あ、あんた……　いったい何者なの？」
「そうね？　まぁ、強いて云うなら、鴉天狗（からすてんぐ）とでもいっておきましょうかね？」
女性――鴉天狗はそう言うや、羽を大きくバタつかせる。
それに伴って突風が吹き荒れ、皐月は耐え切れず吹き飛ばされる。
「まったくどうしてこうもまぁ、弱いのかしらね？」
女性はそう言うや、刀を振り下ろし、構えるや、「颶（つむじかぜ）」と口走った。

何が起きたのか、一瞬わからなかった。
皐月が我にかえった時には、彼女の体は無数の切り傷が刻まれており、そこから血が流れ落ちている。
「がはぁっ！」
皐月は吐血し、その場に倒れ、気を失った。力を失った刀は、元の竹刀へと戻っていく。

「さぁて――」
鴉天狗は地上に降り、皐月の目の前に立つ。
そして刀を振り上げ、皐月を切り殺そうとしたときだった。

「待ちなさい。地蔵菩薩の孫娘を殺すようにとは、命令されていな

いはずよ?」
どこから現れたのか、女性が鴉天狗を止める。
「どうせ殺すんだったら、さっさと殺したほうがいいんじゃないの?」
鴉天狗がそう尋ねると、女性はキッと鴉天狗を睨んだ。
「ちっ、わかったわよ」
鴉天狗は刀を納め、皐月目掛けて痰を飛ばした。

「さっさと帰るわよ。次の命令が下ったわ」
「私は人が殺せるなら、命令だろうがなんだっていいさ。人なんていようがいまいがどうでもいいんだからね」
鴉天狗は歪んだ笑みを浮かべた。
「そうね。私もよ。私も、人なんて死ぬためだけにいる存在としか思ってないから」
二人の狂った笑い声が、空高くまで響きわたる。
そして二つの羽音が周りから聞こえるや、二人の姿はどこにもなかった。

拾・終止符（後書き）

はい。なんかすごい終わり方ですが、川姫はこれでおしまいです。

壱・要石（前書き）

要石（かなめいし）：茨城県鹿嶋市の鹿島神宮と千葉県香取市の香取神宮にあり、地震を鎮めているとされる、大部分が地中に埋まった霊石。

壱・要石

「ふぅ……」

瑠璃は書類の束を机の上でトントンと整えながら、溜息を吐いていた。

彼女は死んだ人間や生き物が現世で犯した罪を裁き、地獄の行き先を決める十王の一人とされている閻魔王ごと地蔵菩薩であるのは、この作品を読んでいる人は存知の上であろう。

十王を簡単に説明すると現世で言う裁判長である。

先ほどまで行っていた裁判が終了し、次の裁判が行われるまでの休憩に入ったところであった。

休憩なのだから休めばいいのだが、彼女の生真面目すぎる性格が災いしてか、休むという考えが彼女の頭の中にはあまりなかった。

机の上には先ほど束ねた書類以外にも、机を埋め尽くすほどにあふれんばかりの書類が山のように積まれている。

それを獄卒たちが持ってきては運び、持ってきては運びと、同じ動作を延々繰り返していた。

「お勤めご苦労様です」

そう言うや、女性が瑠璃の隣に立つや、机の空いたスペースにお茶を差し出した。

身形は弥生と同じくらいの高校生に見える。

サラッとした艶のある長髪にレディーズスーツを羽織っている。

「大変ですね。昨今における殺人や、その障害事件。事故に自殺……人が死ぬ理由を数えたら限がない」

「まだ後何千人もの裁判が待っていますからね。その人に対する資料を調べないと、しっかりとした罰を与えられませんから、大変で

すよ」

瑠璃はそう言いながら、女性を見た。

「しかし、こうやって浄玻璃鏡で生前犯した罪を見せているというのに、それでも認めませんからね。あちらでいう何でしたっけね？ゆとりとか、ＤＱＮとか――ですかね？」

女性は呆れた表情で云うと、

「自分がやった罪を認めないのは、今も昔も変わらないことでしょ？」

女性の言葉に瑠璃は背伸びをしながら答える。

「生きている人たちが死んだ人を悲しみ、供養してくれるからこそ、私たちは早々に判決できるんです。あなたが私を悲しんでくれたのと同じように」

「もう何千、何万年も前の話じゃない。それに、家族だから泣くに決まってるでしょ？」

女性はまるで少女のように頬を膨らませた。

「あなたが私のことで悲しみ、何もしないから、他の神が夜を作り出した。それから幾日経って、あなたは漸く私のことで悲しまなくなった。人の悲しみも時間が癒してくれますからね」

「だからこそ、昼と夜が出来た。ずっと昼だったから、私はお姉ちゃんが死んだことを忘れられなかった」

女性――ヤミーは静かにそう云った。

地蔵菩薩、強いては閻魔王の別名である『ヤマ』の妹といわれているのが、『ヤミー』である。

仏教の逸話によれば、二人は双子でありながら、夫婦とされており、その二人の間に生まれた子供が始めての人間とされている。

これに関しては、ギリシャ神話におけるアダムとイブ。日本神話におけるイザナギとイザナミも同じものと考えられている。

とはいえ、この作品上での瑠璃（閻魔王）とヤミーは、双子の姉

妹というだけであるので悪しからず。

「閻魔どの！　閻魔どのは居られるか！」

部屋の扉をけたたましく開けながら、男性がズカズカと中に入ってきた。

「これはこれは、秦広王。普段は山のごとく微動だにしないあなたが、血相変えてどうしたんです？」

瑠璃がそう尋ねると

「鴉天狗が脱走したという報せは聞いているか？」

そう言われ、瑠璃とヤミーは互いを見合った。

「いいえ、聞いていませんが？」

瑠璃がそう答えると、秦広王はうしろを見る。

「よし、連れてこい」

そう命ずるや、うしろで待機していた獄卒がそそくさとどこかへ消えた。

一、二分ほどして、獄卒が一人の男を連れてきた。

先の事件で殺された市柿組組長の市柿聡介である。

「確か、彼はまだ初七日を迎えていないはずで、海雪と懸衣翁が罪の選別をしているはずですが？」

瑠璃が市柿を見ながら首を傾げる。

「懸衣翁からの伝達でな。この男と同時刻に亡くなった三人を含め、全員が衣類を着てはいなかったそうだ」

「どういうことですか？」

「亡者が服を着ていないということは、裸の状態で亡くなったと考えられるが、調べたところ奇妙なことがわかった」

そう言うや、秦広王は浄玻璃鏡を持ち出し、市柿の前に鏡を向けた。

「浄玻璃鏡よ。このものが見たすべてを映したまえ！」

秦広王がそう言うや、浄玻璃鏡の表面は、まるで水面に石を投げたかのように、いくつもの波紋が広がっていく
そしてゆっくりと何かが映り始めた。

「こ、これは――」
「な、なんて惨(むご)いことを」
瑠璃とヤミーが鏡に映し出された惨状を見るや顔を歪めた。
ヤミーに至っては、口を押さえながら映像を見つめている。

鏡に映し出されたのは、先日『市柿組』の事務所で起きた惨殺の瞬間である。
その状況はあまりに惨く、まるで彼女たちがいる地獄そのものであった。
しかし、それは人が人を殺してのことではない。
カラスが、まるで餌に群がるかのように、体のありとあらゆるところを啄(つい)ばんでいた。

「もういいです。このものが何者かに殺されたのはわかりましたから」
瑠璃がそう言うと、浄玻璃鏡は何も映さなくなった。
「まさか、鴉天狗がやったとでも？」
ヤミーがそう尋ねると、秦広王は「可能性はあるが、そもそも奴は過去に大罪を犯し、我々が無間地獄に禁固していたはずだ」
「それを何者かが開放した――ということですか？」
「それはまだわからないが、薬師如来が他の十王に話をつけ、自分の眷属(けんぞく)である十二神将たちに調べさせている」
それを聞くや、瑠璃は目を大きくした。

「ど、どうしてそんな大事なことを、私にはなんの通達も！」

瑠璃は机から乗り出すように、体を前に出す。
「宋帝王の使いである波夷羅から連絡が来てな、初江王の使いである毘羯羅の行方がわからん以上、お前にはまだ報せないほうがいいと思ったんだがな」
それを聞くや、ヤミーはハッとした表情で、
「ちょ、ちょっとまって……　確か毘羯羅って」
ヤミーはふと瑠璃を見やった。
瑠璃の表情は焦りを見せ、次第に禍々しいほどの憤怒に満ちた色へと変わっていく。
その表情を見るや、その場にいた全員が背筋を凍らせた。

「確かに、毘羯羅は皐月が大黒天の力を十分に使えるよう、神使として、一緒にいさせていました。皐月が呪文を唱えたとて、それは毘羯羅を通してのことでしかないし、まだ本来の力を使えるほど心技体がしっかりと出来上がっていない」
「毘羯羅が行方不明になったことと、鴉天狗が皐月を襲ったこと。何か繋がりがあると思うが」
秦広王がそういうと、「因達羅――」と、瑠璃は静かに呟いた。

「はっ」
部屋の片隅に、忍装束の少女が姿を現す。
「海雪に事の件を伝え、脱衣婆の仕事を一時休止、現世へと行き、拓蔵や三姉妹の護衛に当たるよう報せてください。因達羅、あなたもお願いします」
「承知しました」
少女――因達羅は主の命令に了解する。
「それと――　もし、鴉天狗に遭遇したら」
因達羅は顔を上げ、瑠璃を見遣った。

「その雁首だけでも、持って帰ってきなさい！　私の大切な家族を

傷つけた代償は、無間地獄よりも重たいってことを、地獄裁判において、思い知らせてやるわぁっ！！」

瑠璃は声を荒々しくし、因達羅に命じた。

それは最早、慈愛と平等のある地蔵菩薩としてではなく、孫を傷つけられた祖母としての怒りであった。

皐月が通っている福祠（ふくし）中学から数百米（メートル）ほど離れた場所に福祠北中学がある。

そこに信乃は通っており、制服姿で校門の前に佇んでいた。

皐月と信乃は同じ小学校だったのだが、学区が違ったため、中学は別々となっている。

「せやからなぁ？　あんさんも少しは警戒して」

信乃の横で、虎のような小さな耳を生やした生き物（？）が浮かんでは、ことの件を説明していた。

「それで？　あんたの主である五官王（ごかんおう）はなんていってるの？」

信乃は目を細め、不機嫌そうに尋ねる。

「五官王さまからの説明ではな、なんや無間地獄から、妖怪が脱走して、こっちにきとるらしいんや、かなりけったいな力をもっとるさかいに、執行人は警戒するようにとの通達やな」

小さな生き物――真達羅（しんだら）が説明すると、

「そんなの、あんたたちが勝手にやればいいでしょ？　私が執行人になったのは、ユズを殺した妖怪をただその妖怪を滅ぼすだけの力がほしかっただけ。あんたたちに協力してるなんて一度も思ったことないわ」

信乃は聞く耳を持たず、その場を立ち去った。

去っていく信乃の後姿（うしろすがた）を見ながら、真達羅は

「なんで変成王（へんじょうおう）はんは、信乃に力を与えたんやろか？　なんか考え

てのこと何やろうけど。それに、今の信乃に真言を教えるのは危険やで？　心と神力が反発して、駄目になってまう」

そう考えながら、真達羅はスーと姿を消した。

弐・魔女の一撃（前書き）

魔女（まじょ）の一撃（いちげき）；ぎっくり腰の別称。（独：Hexenschuss）

弐・魔女の一撃

巫女装束を纏った弥生は、稲妻神社の職員巫女たちと一緒に境内を掃除していた。

「ふぅ」と背筋を伸ばしながら、巫女の何人かが額の汗を拭っている。

「それじゃ、後は倉庫の整理するから、みんな来てください」

パンパンと柏手を打ちながら、巫女の総指揮を勤める棗芭翠がそう言うや、他の巫女たちが母屋の裏にある倉庫へと移動する。

倉庫の中には、神社の行事に使う道具や、破魔矢を作るための矢竹、矢羽を作るための鷹の羽根が保管されており、薄暗い小屋の中に四、五人入っては、道具が入れられた箱を外に出していく。

「弥生ちゃん、ちょっとこっちきて」

奥のほうから、職員巫女である瑚米香澄が弥生を呼びかける。

「なんですか？　香澄さん」

「ちょっと、この箱運びたいんだけど、そっち持ってくれない？」

そう言われ、弥生は香澄と向かい合わせになり、箱を持とうとすると、「うわ、重っ」と口に出した。

「それじゃ、いくよ。いっせーっ、の、が、せっ！」

掛け声とともに二人同時で箱を持ち上げると、ズシンと箱の重みが全身に圧し掛かった。

「これ、いったい何が入ってるんですかね？」

弥生がそう尋ねると「わからないけど、多分神楽太鼓とかじゃないかしら？」

香澄が苦しそうに答える。

それにしても重たい――と、弥生は愚痴を零した。

外に出ると、箱をゆっくりと地面に置いた。、

「箱の中はっと……　あ、やっぱり神楽太鼓だわ」
箱の中身を見るや、香澄は肩を落とした。
箱の中には大小様々な太鼓や、神楽鈴（かぐらすず）、扇が入れられている。
稲妻神社での神楽は、巫女神楽と云われるもので、この中に入っている道具以外に、榊（さかき）や笹（ささ）、幣（ぬさ）を使うのだが、先の二つは季節によって使う時期が違い、幣に関しては、神楽をする前日に巫女の手によって作られる。

「矢竹の分別と、道具の手入れ。来月には五穀豊穣（ごこくほうじょう）の願懸けにくる農家の人がくるから、間違いのないようにね」
翠（みどり）がそう言うと、箱の中から道具を取り出し、職員たちが道具の数を照らし合わせたり、神楽に使われる楽器の手入れを始めた。
「そういえば、この前、この神社にお参りに来たカップルがいたんですけど、一週間後にはわかれたそうですよ」
職員の一人が、そう話す。
もともとこの稲妻神社には、御神籤（おみくじ）をひく場所はあっても、お守りを売っている場所はない。
それでもこうやって職員を養っていけるのは、五穀豊穣や、神前結婚式などで臨時の収入が出来るからである。
祭っているのは、稲荷神である倉稲魂神（うかのみたまのかみ）であるが、もうひとつ祭っている大黒天には田の神としてではなく、元々印度神であった大黒が、日本に仏教の神としてきたとき、同じ読み方が出来る大国主（おおくにぬし）（大黒（だいこく）＝大国（だいこく）ということから）がもつ縁結びの力を得ているため、カップルがお参りに来ることが多い。
ただし、人の縁（えにし）には良し悪しがあり、そのカップルが分かれたのも、また縁ということである。
そんなことをしながら、朝１０時くらいから始めた神社の掃除が終わったのは、午後３時を過ぎた頃であった。

「弥生ちゃん、どうかしたの？」
職員巫女たちが社務所に戻ろうとしていたとき、軒下で腰をおろしている弥生に、香澄が声をかける。
「か、香澄さん、ちょっと手を貸してくれない？」
そう言われ、香澄は首を傾げた。
「ちょっと、久しぶりに体動かしたから、腰が……」
弥生は苦しそうな表情を浮かべながら、手を差し伸べる。
「少しは体動かしたほうがいいわよ。若いからって体を動かしてないと、やっぱりお婆さんみたいになるから」
そうは言うが、香澄は弥生よりも倍は生きている。
「あ、香澄さん、ちょっと、ゆっくり……」
弥生がそう言うや前に、香澄が力いっぱい弥生の手を引っ張ると――

ゴキッと、何かが折れる音が聞こえ、弥生は力なくうつ伏せに倒れた。

「あ、あぁ……」
「あ、ごめん」
香澄が謝りをいうが、あまりの痛みにそれどころではない弥生であった。

「で、それでぎっくり腰になっちゃったわけだ」
居間の卓袱台に頬杖をつきながら、皐月が呆れた表情で、うつ伏せになっている弥生に尋ねた。
福詞中学校が夏休み中の授業日だったため、皐月は制服のままであった。
「ごめんなさいね、私が急に引っ張っちゃったから」
香澄はそう言いながら、厨房の冷蔵庫に入っている湿布薬を持っ

てきた。
そして、うつ伏せになった弥生のシャツを捲り、腰のところに湿布薬を貼った。
「別に香澄さんのせいじゃないですよ。普段から運動しない姉さんが悪いんですから」
皐月がそう言うと、
「あんた、来月の小遣い減らすから」
弥生が呻き声を挙げながら、皐月に言った。

「それじゃ、私は帰るから」
香澄が部屋隅に置いていたバックを肩にかけ、居間を出ようとする。
「すみません、香澄さん。職務時間終わってるのに」
皐月がそう謝ると、香澄は笑いながら、
「いいのよ。そうだ」
何かを思い出したのか、香澄はバックからチケットを取り出し、皐月に手渡した。
「これ、私の知り合いからもらった温泉スパの無料招待チケット。そこに腰痛に効くお風呂もあるから、行ってみるといいわよ」
「まぁ、体が動けるようになったら行ってみます」
弥生がそう言うと、香澄はクスッと笑いながら、
「そうそう、そこにすごい腕のいいマッサージ師がいるらしいわよ」
そう告げると、香澄は神社を後にした。

「えーと、有効期限は今度の土曜日までかぁ」
皐月は受け取ったチケットを見ながら呟くと、鳩時計が五回鳴った——午後5時である。
「姉さん、夕食どうする？」
「あ、あんたねぇ……　この状態で料理作れとか酷なこといわないでよ？」

そう言いながら、こういうときに、瑠璃さん来てくれないかなぁと、弥生は思った。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

とある喫茶店の隅に置かれたテーブルに、拓蔵と瑠璃が向かい合わせに座っている。

拓蔵は険しい表情を浮かべながら、コーヒーを飲んでおり、瑠璃は怯えた表情を浮かべながら、一言口に出そうとすると、拓蔵の鋭い眼光に戦き、口を出せないでいた。

立場上、瑠璃のほうが上なのだが、瑠璃の幼い容姿は傍から見れば、厳格な祖父が孫に説教をしている状況に他ならない。

「別に、瑠璃さんの責任じゃないでしょ？」

「そ、そうですけど。でも、無間地獄から抜け出すこと自体が異例ですし、皐月が襲われたのだって」

皐月が鴉天狗に襲われてから、四日経っている。

「それにあの子の力になっているはずの毘羯羅が行方不明になって」

「まぁ、瑠璃さんがもつ治癒能力をあの子は血筋として持っていたから、大事には至らんたったがな……」

そう言いながら、拓蔵は険しい表情を浮かべた。

「しかし……　どうしてその鴉天狗は皐月を殺さなかったんじゃろうな？」

そう言われ、瑠璃は顔を俯かせる。

「アレだけ体中に切り傷を負わせておいて、致命傷になった傷はひとつもない」

「言われてみれば確かにそうですね。私の真言を教えているとはいえ、海雪の報告ではまったくもって扱えていないようですし、鴉天狗にとっては赤子の首を捻るも同然でしょう」

瑠璃の言葉に、拓蔵は考え込む。

「閻魔さま」

海雪が因達羅とともに、拓蔵と瑠璃の近くに歩み寄る。

「何かわかりましたか？」

「いえ、鴉天狗に関することは何も……　私の部下である夜叉も他の十二神将と一緒に探させてはいますけど」

因達羅が申し訳ないように言う。

「七千もの夜叉を使ってもわからんとなると、こちらにいるかどうかもわからんな」

「やはり、拓蔵さまもそう思われますか？」

「どういうことですか？　拓蔵」

瑠璃がそう訊くと、

「あんたたちが血眼になって探していて見つからないとすると、こっちにいるかどうかも怪しいだろ？」

「力を消すことも出来る。もしくは人間に成りすましているということですか？」

因達羅がそう尋ねると、拓蔵は頷いた。

「そうなると、かなり厄介ですね。力を察知されないほどに溶け込んでいたとしたら、こちらも迂闊には手を出すことが出来ない」

瑠璃は少しばかり考えると、

「因達羅、摩虎羅（まこら）に連絡を入れ、彼に調べてくれるようお願いできないか聞いてくれませんか？」

そう云われ、因達羅は少し戸惑った表情を浮かべたが、

「わかりました。すぐに二人を探し出し、協力してくれるか訊いてみます」

そう言うや、因達羅はスーッと姿を消した。

拓蔵は瑠璃と海雪をみながら、

「摩虎羅も大変じゃな。従者とはいえ、あんな男と一緒に、こっち

でずっと探偵業をやっとるんじゃから」
「彼にとっては、暇潰しなんでしょうけどね。それに、出来れば私は会いたくないんですけど。仕事ですから仕方ないですよ」
瑠璃は頬を膨らませながら、アイスコーヒーに角砂糖を４つ入れた。

「え、閻魔さま？　入れすぎじゃ」
海雪が驚いた表情でそう言うと、
「なぁに、大丈夫じゃよ。それに皐月の甘党もそうじゃが、遼子も同じじゃったな」
拓蔵が笑いながら言う。
「まぁ、一応似てるってことですか？」
海雪は呆れながら瑠璃を見る。
そして、何かを思い出すかのように目を細めた。
「海雪、どうかしましたか？」
瑠璃にそう尋ねられ、海雪はハッとした表情を浮かべると、頭を振った。

参・按摩師

着替えが入ったリュックサックを背負い、先日香澄からもらった温泉スパのチケットを財布の札入れの中に入れ、弥生は少しばかり腰を伸ばした。若干ではあるが、まだ痛みがある。

「ふぅ」とため息をつき、ゆっくりと電車に揺られていた。

三姉妹が暮らしている福祠町から二駅ほど離れた場所に、香澄が云っていた温泉スパがある。

駐車場は２０台ほど停まれるくらいの小さなところだ。

近くに立てられている看板には『橡温泉』と書かれている。

ロビーに入ると、駐車場同様、あまり広くはなく、周りを見ると、老夫婦や、土木関係と思われる体系のいい男性があたりを歩いている。

遠くから来るというよりかは、近所の人が、好んで来ているといった感じだ

弥生は受付に行き、受付嬢にチケットを渡すと、受付嬢からロッカーの鍵を渡され、女風呂がある場所を教えてもらった。

受付近くに二階へと上る階段があり、その近くに男女それぞれの扉がない入り口が見えた。

弥生は暖簾を潜り、曇りガラスのドアを開けると、温泉や銭湯特有の、ムアッとした空気が弥生の全身にあたった。

先ほど受け取った鍵に書かれたロッカーの番号を確認し、そのロッカーの前まで行くと、弥生は衣服と下着を脱ぎ、ロッカーの中に仕舞ってから鍵を閉める。

そして、タオルを手に持って、浴場の扉を開けた。

浴場内を見渡すと、おばあさんやおばさんといった、弥生よりも年が離れている客が多いと、彼女は思っていたのだが、意外にも年が近く、若い女性が多い。

少しばかり歩くと、湯船の近くに、効能が書かれた立て札が目に入った。

「えっと、腰痛に効く湯船はっと」

弥生はキョロキョロと、あたりを見渡す。

「あ、あった」

弥生はその湯船まで歩き、ゆっくりとタイルに膝をついた。

近くにおいてあった洗面器で湯船からお湯を汲み、最初に爪先(つまさき)から股、次に腹部、指先から腕、そして胸元へとお湯をかけていく。

そしてゆっくりと足の爪先を湯船に入れると、体の半分を湯船につけ、上半身が温まってくると、ゆっくりと肩まで浸(つか)るや、「はぁ～っ」と、吐息をたてた。

『しっかし、皐月のいう通りね。少しは運動しないと』

弥生はそう考えながら、腕を伸ばしたりと、軽くストレッチをする。

腰を伸ばすと、行くときに感じた腰の痛みが殆ど柔らいていた。

「さてと、体洗ったら、香澄さんが云ってたマッサージ師の所にいってみよ」

そう呟くと、弥生は湯船から出た。

弥生がロビーに戻ると、女性客が頬を紅潮とさせているのが目に入った。

温泉に入って、体が火照(ほて)っているのだろうかと、最初思ったが、そうではない。

奥のほうを見ると、２０人ほどの行列が出来ており、先頭の方でなにやら賑わっている。

「はい。ゆっくり深呼吸してください」
病院の診察室にあるようなベッドの上でうつ伏せになっている男性の腰を、サングラスをかけた、２０代ほどの若い女性が男性にマッサージをしていた。
「はぁ～、やっぱり瞳美（ひとみ）ちゃんがマッサージすると、体の疲れが全部取れるわ」
男性がそう言うと、
「いやですよ。そんなこと云ったら、温泉がおまけに聞こえるじゃないですか？」
「いやいや、謙遜せんでも、瞳美ちゃん目的でくる客のほうが多いじゃろよ」
そう言われ、瞳美と呼ばれているマッサージ師は、５分ほど男性の腰や肩をマッサージしていく。
「はい。終わりました。どうですか？」
「んっ！　だいぶ体のコリが取れた気がするわい」
そう言うや、男性は腕を回す。
「――それじゃ、次の人」
瞳美がそう言うと、先頭で順番待ちしている客がベッドに腰をかける。
弥生は行列の長さから、だいぶ時間かかるだろうなと思い、あきらめることにした。

自販機でジュースを買った弥生が、ロビーに備えられているソファに座り、缶を開けようとした時だった。
「すみませんお客様、刺青（イレズミ）をしている方の入浴は禁止になっておりまして」
受付嬢が男性に謝りを入れている。
「こっちは金出して入ろうとしてるんだ。それって人権差別じゃな

いのか？」
　身長は百九十はあるだろう、見るからにデカイ男性が、受付嬢を威嚇している。
　男性が着ているスーツの袖から、刺青が少しのぞきこんでいた。
「で、ですから、お客様が浴場などに入られますと、他のお客様が怖がりますし」
「こっちは風呂入りにきただけや、別に危害を加えようとはしねぇよ」
　もう一人の男性がそういうが、銭湯側は客商売であるため、客足に影響があることはしたくないのが本音である。
　受付嬢が何とか二人に帰ってもらおうと必死になるが、二人組も引かないため、１０分ほど堂々巡りが続いた。

「あんたなぁ、少しは空気をよんだほうがいいよ」
　さきほどマッサージをしていた瞳美が、男性にそう告げる。
「あぁ？　なんだ、この女。文句でもあるのか？」
　デカイほうの男がドスのきいた低い声を挙げる。
「話を聴いてると、あんたやーさんでしょ？　やーさんならもう少し謙虚でなければね」
　瞳美がクスっと微笑する。
「――っ！　こんのっ！」
　男が瞳美に殴りかかろうとすると、瞳美はゆっくりと、男の背後に回り込んだ。
　そして、どうしてか男が前のめりに倒れた。

「お、おい？　大丈夫か？」
　男が声をかけると、でかいほうがピクピクと体を痙攣させている。
「その人をさっさと帰してくれない？　こっちは穏便にしたいから」
　瞳美はゆっくりと二人組のほうを見る。
「く、くそっ！　お、覚えとけよ！」

男はそう言うと、デカイ男を引きずるように外に出て行った。

「ひ、瞳美ちゃん？　大丈夫？」

受付嬢がそう尋ねると、

「大丈夫。こんなの慣れてるから」

瞳美は笑みを浮かべると、折りたたまれた杖を伸ばし、受付嬢を見る。

「それじゃ、私は部屋で休んでるから」

そう言うと、杖を頼りに動かし、普通の人と同じか、少し早いスピードで歩き始めた。

階段の方に行くと、立ち止まり、手すりに手をかけ、ゆっくりと階段をあがっていった。

「今の瞳美ちゃんがしたんか？」

先ほどマッサージをしてもらっていた男性が受付嬢に尋ねる。

「あ、はい」

「あん子は目が悪いのに、まさに盲蛇（めくら）に怖じずじゃな」

意味としては【知識がなかったり、状況が判らないと無謀なことをする】というたとえなのだが、ヤクザ相手に物怖じしなかった瞳美はまさにそんな感じであった。

「あ、あの……　さっきの人、剣術か何かやってるんですか？」

弥生がそう尋ねると、

「いや、あん子は生まれつき目が悪いからな。剣道とかそんなんは習っとらんはずじゃよ？」

男性がそう言うと、受付嬢も答えるように頷いた。

弥生がどうしてそんなことを訊いたのかというと、瞳美がデカイ男の背後に回ろうとした一瞬、白杖（はくじょう）で、男の鳩尾を一突きしたからである。

弥生は身震いをし、湯冷めしたんだろうかと思うや、再び浴場へ

と足を運んでいた。

女風呂に入ろうとしたとき、男風呂がなにやら騒がしい。

「どうしました？　お客様？」

少し白髪が混じった初老の男性が、男風呂に入っていく。

「おいっ！　救急車呼べっ！」

漏れてくる声からして、ただごとではない。

――数分ほどして、救命士がストラクチャーを持って、男風呂に入っていく。

そして、裸の男性を運ばれていった。

「何かあったんですか？」

弥生が男風呂から出てきた初老の男に尋ねる。

「んっ？　あんた、さっきの人の知り合いかい？」

男は白髪交じりの虎刈りだったが、口調からして優しい雰囲気がある。

男に聞き返された弥生は首を横に振った。

「いえ、ちょっと気になったので」

弥生が謝ると、「いやいや、どうもサウナに入っていて、浴場に出てきたら倒れたそうなんだよ」

「長く入りすぎてたんですか？」

「いや、聞いた話だと、そんなに長くは入ってなかったそうだ。一緒に入っていた人の話だと、その人が入ってきてから１０分ほど経ってから出たそうだ。それくらいだったら、適度な時間なんだけどね」

そう話すと、初老の男性は階段を上がっていった。

弥生は少し考えると、

「遊火、ちょっと来て」

そう呼びかけると、弥生の目の前で無数の火の玉が集まり、ひと

つに集まるや、少女の姿に変わった。
「お呼びでしょうか？　弥生さま」
「あんた、ちょっと男風呂に入って、中を調べてきてくれない？　特にサウナをね」
そう言われ、遊火は露骨に嫌そうな顔を浮かべた。
「ど、どうしたのよ？」
「や、弥生さま？　お願いごととはいえ、お、男の人の裸を見るのは、少しばかり抵抗が」
遊火がそう抗議すると、
「あんたねぇ？　ちょっと事件があったから調べてもらおうと思って呼んだのよ？　それともなに？　私に男風呂に入れって云うの？　痴女じゃないんだから、そんなことできるわけないでしょ！！」
弥生は遊火を睨みつけると、
「わ、わかりました。行きます」
少しばかり涙目になりながら、遊火は男風呂の暖簾を潜っていった。

数分後、遊火が戻ってくると、弥生は女子トイレの個室に入った。
ここなら誰にも見付からずに、遊火と話せるからである。
「サウナの中の温度は９０度ほどで、あまりおかしなところはありませんでした。出入りしていた人が気分を害したり、倒れるようなこともありませんでしたね」
「それじゃ、男性が倒れたのは、他にも理由があったってことか」
「あ、でも少し気になることがあって、脱衣所で少しばかりアルコール臭がしたので、おそらく倒れた人はアルコールを摂取していたんだと思います」
遊火がそう言うと、弥生は呆れた表情を浮かべる。
「要するに、倒れた原因はそれでしょうね。アルコールが入った体で、急激に温度を上げたから、気分が悪くなった。そんなところでしょ」

弥生がそう言うと、遊火もそうだろうと頷いた。

肆・血の池

「お待たせしました」
十二神将の一人である因達羅が、稲妻神社の上空を寝転がって見下ろしていた海雪に声をかける。
「おつかれさま。それで、信乃はどうだったの？」
海雪は瞑っていた両目の片方だけを薄く開き、因達羅を見やる。
「信乃さんには真達羅を一緒にいさせていますが――　事情を説明した上で、信乃さんはこちらに協力的ではないようです」
因達羅が重い表情を浮かべる。
「信乃も馬鹿だからね。戦った本人が一番わかってるのに、ずっと探してるんでしょ？　ユズのこと……」
そう尋ねると、因達羅は頷いた。
「先日見つかった犬神ですが、十王による会議では、あの妖怪はユズの意志を持っていたという結論に達したそうです」
それを聞くや、海雪は斎藤千和（さいとうちより）に取り憑いていた犬神のことを思い出す。
あの晩、皐月は犬神の正体がユズであると、確証はなかったが、そう感じ取っていた。
だからこそ、信乃に攻撃を止めさせようとした。
「４年前か……　あの事件が起きた後の二人って、一緒にいる割には、ギクシャクしてたからなぁ」
海雪は感慨深く言った。
『だからこそ、瑠璃さんは、私を二人の監視役に抜擢（ばってき）したんだろうけど――』
海雪は首にかけている首輪と肌の間に指を入れる。
その時に触れた肌には、絞首痕のようなでこぼこがあった。

海雪は生前の記憶がある。いや、忘れたいといったほうがいい。
彼女にとって、それは最善の選択だっただろう。
しかし、その結果、彼女は死んだことを後悔することになってしまった。
「二人がそれぞれの真言を使いこなせるのが先か、今まで以上に凶悪な妖怪に殺されるのが先か、そうならないためにも、まずは皐月の力が戻るように毘羯羅（びから）の行方を捜さないとね」
海雪がそう言うと、因達羅は答えるように頷いた。
「私も、信乃も、皐月と一緒にいるほうが楽しかったからね」
海雪はそっと目を瞑った。
因達羅は声をかけようとしたが、海雪はすぐに眠り込んでしまっていた。

ふと、因達羅は下のほうから視線を感じ、地上を見下ろした。
そこには二人の男女が佇んでおり、一人は白に黒のリボンを巻いているパナマハットを被っており、黒い服を着ている。
もう一人は肌色に茶色のリボンを巻いたブレードという帽子を被り、薄い白のワンピースを着ている。
前者が男性で、後者が因達羅と同じような少女に見えたのは、二人が顔を上げたからである。

「――摩虎羅？」
因達羅がそう言うと、聞こえたのか、少女がクスリと笑った。
そして、因達羅を呼び寄せるように手招きをする。
因達羅は少し疑問に持ちながら、少女――摩虎羅のもとに降りた。

「最近ヤマちゃんから連絡なくてさぁ、若しかして、まじめに仕事してるとか？」
摩虎羅の隣にいる男性が、因達羅にそう尋ねる。
男の服装は先ほど説明したが、見た目は３，４０代といったとこ

ろか、顔はスラッとしているが、無精髭を生やしている。
その飄々《ひょうひょう》とした態度に、因達羅は少しばかりではなく、はっきりと呆れた表情を浮かべ、ため息を吐いた。
「いくら自身の力を少し使って現世にいるとはいえ、本人の目の前でそのようなことを申したら、どうなるかわかりませんよ？　大威徳明王（だいいとくみょうおう）」
因達羅は男性を見やる。
「まったく、ヤマちゃんの近くにいると感化されるのか、それとも元からの性格なのかねぇ？　そんなんじゃ異性にはもてないよ？帝釈天」
男性がそう言うと、因達羅は男性を睨みつける。
「おっと怖い怖い」
男性は笑いながら、両手を上に挙げた。

「信（まこと）さま、因達羅は重要な事件があってこちらに来ているんです。茶化すのはやめたほうがよろしいかと」
摩虎羅がそう言うと、大威徳明王は摩虎羅を見下ろしながら、苦笑いを浮かべる
「それで因達羅……　私たちに調べてほしいことは、毘羯羅の行方ですか？」
摩虎羅が尋ねると、因達羅は少し考えたが、首を横に振った。
「いえ、二人には皐月を襲った鴉天狗を探してほしいんです。出来れば、鴉天狗が無間地獄から脱獄した経緯、ならびにそれを手伝ったものも含んで」
「また随分と複雑な調査だな」
大威徳明王がそう言うと、摩虎羅は首を傾げる。
「出来ればひとつの仕事にさせてくれないか？」
そう言われ、因達羅は聞き返す。
「鴉天狗の行方は、お前たち十二神将の眷属である七千もの夜叉をつかっても、見つかっていない。となると、こちらにいるかいない

かのどちらかになる」
　それは拓蔵が云っていたことと同じである。
「なら、鴉天狗のことは、この際おいといてだ――　そいつが脱獄した経緯、そして少なくともそれを手伝っていたやつがいる。そちらを調べたほうが得策だろ」
　大威徳明王がそう言うと、因達羅はハッとする。
　あの時、瑠璃は皐月が襲われたことによる怒りで、妙策が思い浮かんでいなかった。
「ヤマちゃんは真面目すぎるからね、どうせ頭に血が上って、いい考えが思い浮かばなかったんだろ」
　あまりにも当たっていることなので、因達羅は何もいえなかった。
「お願いできますか？」
　因達羅がそう尋ねると、大威徳明王は二つ返事で了解した。

「それじゃ、因達羅は海雪さんと一緒に、毘羯羅の行方を捜すことに専念して。私たちはすぐに調べるから」
　摩虎羅がそう言うと、スーと姿を消そうとしたが、因達羅がそれを呼び止める。
「さっき、気になったことがあったんだけど、大威徳明王様はこちらではなんという名前で？」
「うーん、高山信（たかやまのぶこと）という名前でいるけど、まぁ、連絡があったら直接事務所に来て」
　そう言うと、摩虎羅は、今度こそスーと消えた。

　因達羅は少しばかり考えたが、その名前に意味することには気付いていなかった。

　大威徳明王は、梵名（ぼんめい）で【ヤマーンタカ】とされている。
『ヤマ』は閻魔のことを指しており、梵名を訳すと『閻魔王を殺すもの』という意味がある。

そのことから、閻魔王である瑠璃は、大威徳明王に会いたくなかったのである。

『高山』は『ヤマ』と『タカ』を掛け合わせ逆にしたもので、特に意味はない。

名前に関しても、適当につけただけのことであった。

ところ変わって、『橡温泉（つるばみ）』の施設二階。

ここには大広間があり、多くの客で賑わっている。

そこの料理が美味しいからと、出かける前、神社に来ていた香澄に言われ、弥生は昼食をとっていた。

『夕方には戻るから、あんたも大宮巡査にのぼせて、遅くならないようにね』と、皐月にメールする。

すぐさま携帯が鳴り、弥生はメールを確認するや、噴出した。

携帯の液晶には『るっさい！！』というたった一言のメールである。

弥生は皐月が大宮巡査のことを意識しているのは知っているし、瑠璃から注意を受けていることも知っている。

皐月はきちんと学業や執行人の仕事をしているので、女性陣はとやかく言わなかったが、大宮巡査が入院してからの一ヶ月、ほぼ毎日顔をあわせているわりには、ちっとも進展しない二人に呆れていたのも事実だった。

『そういえば、そろそろしたら、葉月の誕生日だっけ、ケーキとか作ってあげようかな』

そう考えると、弥生は再び携帯を弄り始めた。

葉月の誕生日である８月２４日に印が付けられている。

ケーキを作る以前に、プレゼントをどうしようかと悩む。弥生は皐月にメールで連絡を入れた。内容は葉月に渡すプレゼントについ

てだ。
すぐさま返事が返ってきた。
『ぬいぐるみとかは？』
この返事にすぐさま返答。
『ぬいぐるみだと新鮮味がないんじゃない？　一番は当の本人に訊いたほうがいいんだろうけど、あの子、変に遠慮しちゃうからね』
送信すると、数秒で返事が戻ってきた。
『それとなく探っておこうか？』
弥生は結構長いメールをするが、皐月のメールはあまりに短く、用件だけの返答である。
『ごめん、お願いするわ』
そうメールを打ち、弥生はため息を吐いた。

メールを打ちながらも、昼食をとっていた弥生は、食べ終わった後、少し申し訳なさそうな表情を浮かべた。
確かに香澄にいわれたとおり、料理は美味しく、申し分ない。しかし、それでも瑠璃が作った料理のほうが美味しいと感じたのも確かである。
小さい頃、母親である遼子が作ってくれたご飯のような、懐かしい感じがしていた。
どうしてそんな感じがするのか、弥生本人はわからないでいる。

「あら、杉山さん。どうしたんですか？」
厨房の方で女性従業員が男性に声をかけた。
杉山と呼ばれた初老の男性は砕けた氷が入った袋を持っている。
「いや、ちょっと、お客さんが大浴場で足を滑らせて捻挫したそうなんじゃよ。ちょっと氷を持っていこうと思ってな」
「そうですか？　お大事にといっておいてください」
女性従業員はそう言うと、自分の持ち場に戻った。
杉山はほっと胸を撫で下ろし、二階を降りていった。

男風呂の大浴場の奥に、外に出られる扉がある。
そこは露天風呂となっており、予約制の貸切となっている。
浴槽には一人の男性が入っていた。――さきほど、瞳美にやられた、大きな体をしたヤクザである。
「すみませんね。えらい対応をしてしまったようで」
そう言うや、浴槽側から男性が入ってきた。
「ああ、いいって、いいって、おれはマッサージしにきただけだからさ。声さえ出さなければ、あの子にはばれないんだろ？」
そう訊かれ、男性は頷いた。
「しかし、よかったのか？　従業員用の入り口からおれを入れさせて」
「大浴場以外から入れる道がありますからね。そちらからいけば大丈夫でしょう」
ヤクザの男が、湯船から上半身を出した。背中には刺青が入っている。

「そうそう、緒形さん。実はいい酒が手に入ったんですよ。どうですかな？　一杯ほど」
「いいね。それじゃ少しもらおうか」
そう言われ、男性は露天風呂から離れた。
「ふぅ……」と、緒形が息を吐き、顔を洗おうとした時だった。

ゴッという、鈍い音がしたと同時に、緒形は湯船に沈んだ。
後頭部はかち割られ、そこから、どくどくと血が流れ出していた
――――

伍・引っ掻き傷

「瞳美ちゃん！　瞳美ちゃん？」

受付嬢である野沢麻衣子が、按摩師（マッサージ）である石坂瞳美を探していた。

二階に上がるといっていたので、そちらを探しているのだが、まったく見つかる気配がしない。

麻衣子は立ち止まり、少しばかり考えた。――あの子が遠くにいけるとは思えない。

瞳美は全盲である。そのため自由に行動できると、麻衣子は思えなかった。

人に尋ねても、見かけなかったというし、入り口は受付前の自動ドアと従業員が出入りする勝手口くらいだ。

まず自動ドアは、麻衣子がずっといたので、出て行った形跡はない。

そして勝手口のほうは、近くに従業員が何人かはいたが、見かけてはいないという。

もうひとつ、露天風呂の壁を攀じ登って、外に出ることができなくもないが、瞳美は目が見えていない以上、そのような危険なことをするとは考えにくい。

そもそも、更衣室にあるロッカーに、瞳美の服があったし、玄関口には靴もあった。

靴は履き替えるようになっているため、従業員はそこで靴を上履き用の靴に履き替えるようになっている。

つまり、瞳美は外に出ていないことになるのだが、麻衣子は瞳美を彼是（かれこれ）３０分ほど探し歩いていた。

そろそろ夕方の仕事をして欲しいのだが、客を待たせるわけにもいかず、麻衣子の表情には焦りが見え始めていた。

橡温泉を出るや、弥生は背伸びをした。
結局、瞳美にマッサージをしてはもらえなかったが、温泉に入った効能によるお蔭(かげ)か、腰の痛みは殆どなくなっていた。
「さてと、少し買い物して帰ろうかしらね」
弥生はウエストバッグの中に入れていた携帯を取り出し、皐月に電話をかける。
――が、電源が入っていないか……という、オペレーターの音声が聞こえ、弥生はやや乱暴に通話終了ボタンを押し、電話を中断した。
皐月は今病院にいると考えてのことだ。
病院内では携帯の電源を切るのは常識であり、皐月は素直に電源を切っていることになる。
「そういえば、弥生さまが昼食をとられていた時は、メールできましたよね？」
遊火がそう言うと、
「多分、まだ病院に行ってなかったんじゃない？」
弥生にそう言われ、遊火は納得する。
大宮巡査が入院している警察病院の面会時間は、平日だと午後3時からになっている。
弥生が昼食をとっていたのは、午後1時を少し回った頃だったので、皐月がまだ神社か、どこか、携帯の電源が入れられる場所にいても可笑しくはなかった。
メール自体は電源が入っていなくても、サーバー上に保存されるため、あとからでも見ることが出来る。
すぐに返答が来ていたので、電源が入っていたことになる。
弥生は携帯をウエストバッグの中に仕舞い、歩き出そうとしたとき、うしろから気配を感じ、弥生は振り返った。
そこには誰もおらず、弥生は首を捻りながらも、気のせいかと自

己解決し、再び歩き出す。
「あれ？　パトカー……？」
遊火が橡温泉の駐車場に一台のパトカーが入っていくのを目にした。
「なんか事件でもあったんですかね？」
「遊火、ちょっと見てきてくれない？」
そう言われ、遊火は風に乗るように、スーと、橡温泉へと消えた。

数分後、弥生のもとに遊火が戻ってきた。
「現場を見ましたところ、露天風呂で、男性が水死体となって発見されたようです」
「水死体？　溺れたとか」
「いえ、頭を強打されての事のようです。ただ、その時間、露天風呂に被害者が入っていたことを、大浴場にいる人間、および従業員も知らなかったそうなんです」
「それじゃ、壁を攀じ登って無断で入った」
「仕切りは竹で出来ていまして、その天辺（てっぺん）には防犯用に先が尖っているんです。上（のぼ）れたとしても、重みで壁が壊れると思いますよ。大の大人だと」
遊火の報告を聞きながら、弥生は橡温泉を見やった。
「阿弥陀警部はいなかった？」
そう訊くと、遊火は首を横に振った。
いくら警視庁刑事一課とはいえ、そんな頻繁に会えるとは思えない。
弥生は遊火にもう一度見てきて欲しいとお願いし、遊火はそれに従う。
一分ほどで遊火は戻ってきた。
「私や弥生さまたちが見知った顔はいませんでした」
そうなると、西戸崎刑事や佐々木刑事もいないということになる。

「まぁ、妖怪の仕業じゃないだろうし、私たちはあくまで妖怪を罰する側だからね。人間は警察に任せて……」

弥生が橡温泉を見た時だった。

瞳美が信号の前で、白杖をもって立っている。

信号が青に変わると瞳美は弥生がいる向こう側まで歩き始めるが、十字路になっていたため、対向車線を走っている車が、急に曲がり始めた。

「危ないっ！！」

弥生がそう叫ぶよりも先に、瞳美は車に轢かれた――はずだった。

何かがぶつかった音は聞こえることなく、車は何こともなかったかのように、弥生の目の前を走り去っていった。

「ふぅ、大丈夫だったかい？」

そう言うや、むこう側の信号で、男性が瞳美を抱えて、跪いている。

見た目からして、弥生と同じくらいだが、髪は肩まで伸びた白い長髪で、赤のメッシュが入っている。

瞳美は何が起きているのかわからない表情で、首を動かしている。

今わかっていることといえば、自分の前で車が走っている気配がしなくなかったので、信号が青に変わったと思い、歩き始めた。そして、背後から突然引っ張られ、今に至る。ということである。

瞳美は目が見えないため、どうして引っ張られたのかがわかっていない。

「よかった。怪我はないようだね」

そう言うと、男性は立ち上がり、転がっていた白杖を手に取り、瞳美に渡した。

「ほら、私が手を繋いでいてあげるから、信号を渡ろう」

男性は瞳美の手を掴み、ゆっくりと歩き始めた。

瞳美は最初途惑ったが、信号を渡りたかったこともあり、何もいわず、信号を渡りきった。

「あ、ありがとうございます」
瞳美は男性がいる方向に頭を下げる。手を繋いでいたので、その方向に男性がいると思ってのことだ。
しかし、男性の姿はすでになかった。

「あ、遊火？　ちょっと私の頬、捻ってくれない？」
弥生は遊火を見上げながらお願いする。
「私、ものに触れられませんけど？」
「それじゃ、さっきの人はなに？」
そう訊ねられても、遊火が答えられるはずがない。そのことは弥生自身もわかっている。

「瞳美ちゃん！」
橡温泉のほうから、女性が走ってくる。信号に引っかかり、一度立ち止まったが、青に変わると、瞳美の方へと走ってきた。――受付嬢の野沢麻衣子である。
「野沢さん……　どうかしたの？」
瞳美は声がした方向に振り返り、麻衣子に尋ねた。
「どうしたのじゃないわよ！　勝手にいなくなって。それに今警察の人が来てて、従業員全員に事情聴取してて、あなたのことも話してたのよ」
捲し立てるように麻衣子がことの説明をする。
それを見てか、弥生は遊火を三度橡温泉へと向かわせる。

「どうかしたんですか？」
弥生は『なにごともなかったかのように』、瞳美と麻衣子に話しかけた。
「いえ、ちょっとありまして……　さ、瞳美ちゃん」
そう言うと、麻衣子は瞳美の手を引っ張っぱり、橡温泉へと戻っていった。

弥生は二人の背中を見ながら、壁に寄りかかった。
そして、目を瞑り、気配を探し始める。

弥生は自分を中心にして、半径五百米範囲なら、幽霊や妖怪が隠れていても、見つけることが出来る。が、それは力を消していないものに限る。
遊火が戻ってきたが、それに気付かず、弥生は気配を探ることに集中する。

ゆっくりと両目を開き、遊火を見やった。
「死体見てきた？」
そう言われ、遊火は一度首を捻った。
「死体がどうかしたんですか？」
「予期せぬ事故や殺人で亡くなった人間の霊は、その場に地縛霊となってとどまってるはずよ？」
「確かに、人以外は見かけていませんね。それに、被害者の背中に肩に刺青が入ってました」
それを聞くや、弥生は思い出す。
「刺青って、さっきの人がロビーのところで追い払ってた？」
遊火はその時いなかったため、そうなのかは答えられなかった。

男風呂側の露天風呂の床に、引き上げた死体が横たわっている。
一人の警官が被害者のものと思われる鞄から、財布を取り出し、中身を取り出す。
『被害者は緒形国光。５２歳。自営業者……』
財布から取り出した免許証を見ながら、警官は頭の中で整理する。
「おい、君！　このガイシャの身元と、ガイシャがどうやってここに入ってきたのかを聞き込みに行ってきたんだろ？」

そう言われ、警官が「はい。ですが、渡辺警視どの。被害者が露天風呂に入っていったところを目撃した人は一人もいないようです」と答える。

「それは可笑しくないか？　ここは大浴場からと、従業員側からの入り口がある。被害者が入ってきたのを見ていないのは可笑しいんじゃないか？」

「確かにそうですね。もう一度聞き込みに行ってきます」

そう言うや、警官は従業員側の扉から出て行った。

警官は再び緒形の死体を見るや、躯をうつ伏せにした。

そして、ある場所を見るや、笑みを浮かべる。

『なるほど、こいつは意外な掘り出し物だ――』

警官はゆっくりとその場から離れた。

緒形の背中には、まるで何かで引っかいたような傷痕があった――

陸・不吉

当然といえば当然なのだが、施設内で事件が起きた以上、入り口の前には警官が、不審な人物がいないか、警戒しながら見張りをしている。

弥生はこの中に阿弥陀警部がいれば、事情（亡くなった被害者の霊がいないこと）を説明し、あわよくば入れてもらえると思ったのだが、入り口に停まっているパトカーを見渡しても、阿弥陀警部の姿はない。

それどころか佐々木刑事の姿もなく、中にいるのだろうかと思ったが――

「遊火、あんたどこから入ってたの？」

そう訊かれ、遊火はキョトンとする。

「あんた、たしか入れる場所がないと、建物とかには入れなかったわよね？　今までどこから入ってたの？」

「えっと、露天風呂の方からですけど？」

それを聞くや、弥生は頭を抱えた。

「え？　っと……　何か拙（まず）いことでも云いました？」

遊火が慌てた表情で聞き返す。

「そりゃ、露天風呂に屋根なんてないわよね？　屋根（それ）がないから露天なんだし……」

弥生は自分が露天風呂から入れないことに苛立ちを覚える。

「どうします？　知り合いがいない以上、入れてもらえるとは思えませんし」

「警察の知り合いなんて、そうそういないし」

弥生がうーんと、考え込んだときである。

「あらぁ？　あんた確か拓蔵んとこの孫じゃないかい？」
そう言われ、弥生は声がしたほうに振り返る。
「あ、咲川のおじいちゃん」
弥生はそう言うや、目の前にいる老人は笑みを浮かべた。
この老人、名を『咲川源蔵』といい、先の事件で皐月がお世話になっている。
拓蔵の知り合いということもあり、よく神社にもくるので、弥生もこの老人とは顔なじみだ。
「おじいちゃんは、これから銭湯ですか？」
「おや、どうしてそう思ったんかね？」
そう尋ねられ、弥生は入り口を指差した。
そこには壁があり、車が入れる幅がある以外は、外から中が見えなくなっている。
つまり、この施設に用がない以上、駐車場にいる弥生には気付かない。
そもそも、弥生は外からでは見えない位置にいる。
――そう説明すると、咲川は納得するように頷いた。

「ところで、何か事件が遭ったようじゃが、弥生ちゃんは阿弥陀警部に呼ばれてきとるんか？」
そう訊かれたが、弥生は首を横に振った。
「いや、ちょっとこの前、神社の掃除をしてたら腰を痛めちゃって、その治療に」
「ああ、ここの按摩さんじゃろ？　彼女の腕はいいからな」
「それじゃ、おじいちゃんも？」
「まぁな、しかし何かあったんじゃろ……　遊火ちゃんや」
咲川は遊火がいるほうを見上げた。
子安神社の神職をしている咲川にとって、遊火を見ることは造作もない。

遊火はスーと、地上に降りる。
「施設にある露天風呂で、男性が水死体で発見されてます」
「ほう……　で、死因は？」
「警察の人たちが話していた内容によれば、死因は頭を強打しての大量出血だと思われています。ですが、凶器というか」
「なんか引っかかることでもあるの？」
弥生がそう尋ねると、
「人を殴り殺すほどの殺傷力があるものとしたら、思い浮かぶのは『硬いもの』ですよね？　露天風呂は湯船が岩で出来てますから、逆に酔っ払ってこけてしまい頭を打った……なんてことも考えられるんです。現に徳利（とっくり）とお猪口（ちょこ）が湯船の中に沈んでいたようですし、その二つを乗せていたと思われる小さな盥（たらい）が湯船に浮かんでいたそうです」
「確かに引っかかるわね。へべれけになるほど酒を飲んだとは思えないし」
弥生が考え込むと、咲川が口を開いた。
「温泉やお風呂で酒を飲んだ場合、温まった体にアルコールを摂取すると、酔いが早まるんじゃよ。ドラマとかで温泉に浸かりながらお酒を飲むなんてシーンがあるがな、あれははっきり云って危険な行為なんよ。昔はそういうシーンがあったが、今はあまり見ないじゃろ？」
「被害者がそのことを知っていたか。もしくは、誰かが酒を飲むことをを薦（すす）めたか」
「まぁ、その二つのうちのどれかじゃろうな。または別の方法があったか」
咲川は遊火を見る。
「遊火ちゃんや、岩に血痕はあったかえ？」
そう訊かれ、遊火は思い出すや、首を横に振った。
「つまり、凶器があるってこと？」

「でも、凶器になったものは見つかっていないようです」
遊火が慌てるように云う。
「消えた凶器か……　さて、どうするかね？」
「入ろうにも、阿弥陀警部や佐々木刑事がいない以上、中に入ることはできないんじゃ？」
咲川はジッと遊火を見やる。それに気付いた遊火は首を傾げた。
「あんたはさっきまで中を見てきたんじゃろ？　その中にいなかったんか？」
咲川がそう尋ねると、
「いや、阿弥陀警部だったら、私の姿が見えますから、中に入れたはずですよ？」
遊火が答える。確かにそうだ――と、弥生はため息をついた。
「電話で連絡はせんのか？」
咲川がそういうが、弥生は首を横に振った。
そもそも三姉妹は頼まれてから、執行の仕事をしているわけだから、警察からみれば協力という形になる。専ら探偵家業というわけでもない。
いや、探偵家業も、現場を自由に調べる権限はないが――
「物は試しじゃ。ちょっと連絡してみんか？　一応携帯の番号はしっとるんじゃろ？」
咲川にそういわれたが、弥生は表情を歪めながら、携帯の液晶を睨んだ。
番号登録には、確かに阿弥陀警部の携帯番号が登録されている。
しかし、これが厄介なもので、弥生の携帯に登録しているのは、私用のものであるため、仕事用ではない。
しかも、仕事中は私用の携帯は、電源を切っているため、繋がるかどうかもわからないのだ。
「弥生さま。かけてみては？」

遊火がそう催促すると、弥生はどうせ繋がらないだろうと思いながら、電話をかけてみた。

呼び出し音が聞こえだし、それが三回ほど続く。

そして、電話を取る音がしたが、弥生はあまり期待はしていなかった。

『おかげになった電話は電源が～』というアナウンスが聞こえると思ったが……

『はい。阿弥陀ですが？　どうしたんですかな、弥生さん』

「あ、阿弥陀警部？　いま、仕事中じゃないんですか？」

意外にも携帯に本人が出たので、弥生は驚きを隠せないでいる。

『え？　ええ。まだ仕事中ですけど……　ああ、確か弥生さんや皐月さんに伝えたのって、私用に使ってる携帯の番号でしたね。実は、現場に呼び出された時、ご飯を食べてたんですよ。それでちょっと仕事用の携帯とこっちを間違って持ってきちゃったというわけです。取りに戻ってもよかったんですけど、そういう余裕も出来なくなって、この携帯を使ってるというわけですよ』

それを聞くや、弥生は深くため息をついた。

事情がわからない阿弥陀警部は、どうしたのかと尋ねる。

「弥生ちゃん。ちょっと変わってくれんかな？」

咲川にそう言われ、弥生は携帯を渡す。

「あ、あ、もしもし、阿弥陀警部ですかな？」

『おや？　その声は咲川さんですか？　また奇妙な組み合わせだ』

阿弥陀警部が驚いた声を挙げる。

「ちょっと、橡温泉のところで、弥生ちゃんと会ってな。そこで事件が起きとるんじゃよ」

『事件？　ちょっと待ってください。今訊いてみますから』

そう言うと、阿弥陀警部は近くにいた警官に尋ねる。

『ああ。確かに橡温泉のところで事件が起きたという連絡があった

ようです。ただ、殺人事件ではなく、事故として処理されるらしいですし、そろそろ撤退するそうですよ』

「それはないじゃろ！　現に遊火ちゃんが現場を見てきて、頭を打ちそうな場所を見たが、血痕のひとつもなかったそうなんじゃよ」

咲川がそう言うと、『それは確かですか？』

話の内容がわかったのか、遊火はハッキリと頷いた。

そして、先の事情や状況を、弥生から聞き、咲川は電話越しにいる阿弥陀警部に説明した。

『わかりました。ちょっと入り口で待機してる警官がいると思うので、その人に携帯を渡してください』

そう言われ、弥生と咲川は入り口へと足を向けた。

入り口では二人の警官が警戒しており、そのうちの一人に咲川は声をかけた。

「なんですか、あなたたちは……　ここは今立ち入り禁止になって」

警官の一人が、止めにはいる。

「ちょっと、わしらの知り合いがあんたに用があるっていうんでな」

そう言うや、咲川は警官に携帯を渡す。

「知り合い？　いったい誰が……」

首を傾げながら、警官はダルそうな顔を浮かべながら、携帯に耳を傾けると

『ああ、ああ、警視庁刑事一課の阿弥陀政信（まさのぶ）警部というものですが……』

「あ、あああああ、阿弥陀警部どのでございますか？」

先ほどのダルさはなんなのかといいたくなるほどに、警官は背筋をビシッと伸ばす。

『ちょっとそこにいる三人……いや、二人を現場に案内してやってくれませんかね？』

「で、ですが、いくら警部どのの頼みとはいえ、一般人を現場に入

れるというのは」
　警備をしている彼は巡査であるため、警部である阿弥陀警部は階級が上だ。命令を聞くのは当然といえば当然。
　しかし、それだけで弥生や咲川を現場に通すというのは、どうにも職権乱用である。
『実はな、さっき電話で事故のことを話してたんじゃよ。あんたたちは事件を事故で処理するみたいじゃな？』
「え？　ええ……　被害者はお風呂に入りながら酒を飲み、酔っ払ったひょうしに倒れ、湯船となっている岩に頭を打った。現場にはお酒を飲んだと思われる形跡がありましたし、岩の表面にルミノール反応が出たので、事故によるものだと判断されたんです」
　それを聞くや、弥生は遊火を見る。
「それじゃ、岩についた血は、被害者が湯船に倒れたときに水飛沫が上がって、洗い流されたってことですか？」
「おそらくそうでしょうね。ですから私たちは事故で処理しようと」
　警官がそう言うと、
『最後に被害者を見たのは誰じゃ？　少なくとも施設の中にいる人間じゃろ？』
「えっと、確かこの温泉で働いている、杉山という使用人です」
　その人物に対して、弥生が尋ねる。

「確か、白髪交じりの虎刈りなんですけど、話を聞いていると優しそうな雰囲気が」
「あのおじいさんだ」
「弥生ちゃん、何か知っとるんか？」
「え、あ、はい。事件が起きるちょっと前に、男風呂のほうで、サウナに入っていた男性が救急車に運び込まれてたんです。その時、男風呂の入り口に、その人がいて」
　弥生がそう説明すると、
「ああ。そのことも聞いてます。運び込まれた人は病院で点滴を受

けているそうです」
「それでそれも事件と関係あるんかな？」
咲川にそう訊かれた弥生は、
「いや、遊火の話だと、脱衣所にアルコールの匂いがしてたらしいから、倒れた人は、サウナの熱に当てられて、酔いが回ったんじゃないかって」
「なるほどな。しかし、この事件とは関係なさそうじゃな」
云われてみれば、共通するのは酔っ払ったということだけで、事件とは関係ない。
そもそも先に運ばれた男性と、被害者である緒形の間には、全くつながりがなかった。

漆・氷塊（前書き）

氷塊（ひょうかい）：氷のかたまり

漆・氷塊

「渡辺警視どの。警視庁刑事一課の阿弥陀警部から連絡です」
橡温泉の二階にある食堂で、コーヒーを飲んでいた渡辺に、制服を着た警官が声をかけてきた。
「……警視庁から？」
不思議そうに首を傾げながら、渡辺は携帯を受け取る。
「もしもし……」
『ああ、これはこれは渡辺警視どの。警視庁の阿弥陀ですが』
「ああ、阿弥陀警部どのですか。これはまたどういったご用件で」
渡辺はコーヒーを一口飲む。
『いやぁ、折り入ってお願いがあるんですけど、私が担当したりしている事件解決を手伝ってくれてる人がそちらの入り口にいましてね。今回の事件、殺人ではないかと云ってるんですよ』
それを聞くや、渡辺は噴出す。
「それはないでしょ。まず被害者は露天風呂でお酒を飲んでいた。これは湯船に徳利やお猪口が発見されていますし、お湯にアルコール反応がでています。次に被害者にもアルコール反応がありましたよ。それから岩にルミノール反応があり、鑑識の結果、被害者のもので間違いないですね」
『よって事件は事故に処理するというわけですな』
「ええ。それに凶器は発見されていませんし、事件発覚後、施設から出て行ったのは受付嬢である野沢麻衣子ただ一人。その彼女も按摩師をしている石坂瞳美を探していたそうですからね」
渡辺は手帳を広げ、知らせる。
『その二人にアリバイは？』
「野沢麻衣子は事件が起きた頃、受付の仕事を中断。二階にいるは

ずだった石坂瞳美に軽くマッサージをしてもらおうと二階に上がった。しかし、石坂瞳美の姿はなく、1時間ほど探していたそうです。そのことは他の従業員や、客からの証言で確認を取っています」

『もう一人の石坂瞳美という人は？』

「彼女は完全に白ですね。そもそも彼女に人を殺すことは出来ない」

『おやまた、随分自信たっぷりに云いましたな』

阿弥陀警部にそう言われ、渡辺は踏ん反り返る。

「石坂瞳美は生まれながらの全盲で、殆ど見えていない。そんな彼女が被害者にばれないで近付くことは無理じゃないですかね？」

確かに周りが見えない瞳美が人を殺すことは不可能である。

『でもねぇ、一応現場だけでも見せてやってくれませんかね？　あちらさんは納得してくれれば勝手に帰るでしょうから』

「まぁ、見せるだけならいいですけど、でももう遺体は警察庁に運ばれてますよ」

『いやいや、被害者がどうやって亡くなったのかを知るのも、ひとつの勉強でしょうよ？』

「わかりました。おい、入り口で阿弥陀警部の知り合いがいるそうだ。ご丁寧に現場まで案内しろ」

そう言われ、近くにいた警官が敬礼し、食堂から出て行った。

渡辺は携帯の電話を切るや、笑みを浮かべた。

現場に案内された弥生と咲川は、露天風呂を見渡した。

「被害者は温泉でお酒を飲み、誤って岩に頭をぶつけたんじゅあな？」

咲川がそう尋ねると、警官の一人が頷いた。

「ええ、岩に血液反応がありましたし、足を滑らせたものと考えられます」

（遊火、何か感じる？）
弥生は遊火を見やり、小声で尋ねた。遊火は辺りをキョロキョロと見渡している。
「妖気は何も感じませんし、霊気も感じません。完全にいなくなってます――」
「被害者はどのような状態で発見されたんですか？」
「被害者は湯船にうつ伏せになって浮かんでいるのを、予約していた客が露天風呂に入ってきたとき発見したようです。後頭部が強打されていた」
うつ伏せ？と弥生は首を傾げる。
「どうかしたんかな？　弥生ちゃん」
咲川がそう尋ねると、弥生は少しばかり考え込む。
（うつ伏せかぁ……　遊火、あんた湯船に入って、被害者と同じことやってみせてよ？）
そう言われ、遊火はゾワッと身の毛を弥立（よだ）せた。
「い、いやですよ！　そんな痛いこと！」
遊火は涙目で訴える。というか、実体のない鬼火の一種なのに、物理的痛覚があるのかと、弥生は心の中で突っ込んだ。
（別に本気で倒れろなんていってないわよ。ゆっくりでいいからうしろに倒れろって言ってるの）
弥生は冷静に言う。
「でも、どうしたんですか？」
（可笑しいでしょ？　酔っ払って倒れた拍子に後頭部を強打した。それだったら、ずり落ちて、仰向けになって発見されるはずよ？）
弥生がそう言うと、咲川が、
「確かにそのほうが自然じゃな。それに後頭部ではなく、側面にした場合はどうじゃ？」
「それだったら、やっぱりうつ伏せになるんじゃないですか？」
弥生と咲川が話をしている中、警官が

「あの、そろそろいいですかね？　これ以上現場を荒らされるのは」
そう言われ、弥生は渡辺を見やった。

「すみませんね。いくら阿弥陀警部の頼みとはいえ、これ以上は」
「いえ、ありがとう……」
弥生が礼を言おうとしたとき、遊火がスーとどこかへと消えた。
それを見て、弥生は首を傾げるが、渡辺に言われた以上、露天風呂から出て行くしかなかった。

二階にある食堂と称した大広間で、弥生は咲川と向かい合わせに座っている。
弥生の目の前にはカキ氷が置いてあり、イチゴシロップがかけられている。
それをシャリシャリとスプーンで音を立てながら、弥生は食していた。
「やっぱり、殺人か？」
「だと思います。でもその凶器が発見されていない。もしかしたら誰かが殺人と思わせようと、仰向けだった被害者の体をうつ伏せにした……という考えもあるんですけど」
弥生は腑に落ちない表情で答える。
「どうしてそんなことをしたのか、それがわからんのじゃろ？」
「警察が事故として処理をしている。でもうつ伏せで発見されたとしたら、やっぱり殺人も視野に入るし……」
弥生はカキ氷をスプーンで削りながら、食している。
そのため下のほうはゆっくりと氷が解け始めていた。

「それにしても、遊火どこにいったのかしら」
弥生がそう呟くと、隣でボォッと淡い光が照った。
「遊火ちゃん？　どこにいっとったんじゃ？」

咲川にそう訊かれ、遊火は弥生と咲川に頭を下げる。
「あの、お二人にひとつ訊きたいことがあるんですけど」
そう言われ、弥生と咲川は首を捻った。
「訊きたいことって？」
そう尋ねると、遊火は人差し指を虚空にさした。

そこに無数の火の玉が集まり、ゆっくりと形を成していく。
その形は暖簾のようなものに、何か文字が描かれている。
「『氷』？」
弥生がそう呟くと、
「暖簾に氷の文字……　普通に考えると、コンビニとかで売ってるアイスのカキ氷のパッケージじゃな」
「遊火、それどこにあったの？」
そう尋ねると、
「露天風呂の仕切りになってる壁の隙間に挟まってました。ただ周りが焼けて、イラストのところしかわかりませんでしたけど」
「どうしてそんな場所に？　警察だって馬鹿じゃないんだから、すぐに見つかるんじゃ」
確かにそうだと、咲川は頷く。

「おばちゃん、カキ氷ちょうだい。氏金時（うじきんとき）のあんこ大盛りね」
調理場が見えるカウンターで、瞳美がそういう。
「おや、今日の仕事は終わりかい？」
「うん。なんか事件が起きたみたいで、後３０分で温泉の入り口閉めるって」
瞳美がそう言うと、
「それじゃ、開いてる席に座っときな。そうだね……」
食堂の女性従業員が食堂の中を見渡す。そして近くに誰も座っていないテーブルを見つけ、
「瞳美ちゃんがいる場所から、西の方角の二つ先にでも座っといて

おくれ」
そう言われ、瞳美は頷き、体を左……西の方向へと向ける。
そして、手短にあったテーブルに手を置いた。
そこは違うとわかるや、歩き始め、二つ目のテーブルに手をかけた。
誰もいないことを確認すると、椅子を探し出し、背凭(せもた)れに手をかけ、椅子を動かし、そこに座った。

それは奇しくも、弥生たちが座っているテーブルの右斜め後(うしろ)だった。

数分後、従業員が瞳美が座っているテーブルにカキ氷を運び込む。
「カキ氷は十二時の方角。スプーンは二時の方角だよ」
そう言われ、瞳美は右手でスプーンを持とうと、二時の方角（東北東）に手を差し伸べ、手探りする。
スプーンが手に当たり、今度はそれを持とうと手を頻りに動かした。
左手でカキ氷の器を探す。触れるものがカキ氷ということもあり、スプーンを探しているときよりかはゆっくりである。
器が手に当たり、左手で器を持ち上げる。
右手に持ったスプーンをゆっくりと口に近づける。
そしてゆっくりとカキ氷の器を探すように、スプーンを動かし、スプーンがカキ氷に当たった感触が伝わり、漸く食べ始めた。
カキ氷は殆ど顔に密着するかのように近づけているため、氷の冷気が顔にあたっている。

その仕草は拙(つたな)く、また氷が溶け始め、形が崩れだしたこともあってか、結構な量が零れ落ちている。
「瞳美ちゃん、今日も零れとるよ」
そう言われ、瞳美は口を止めた。

「ほんと？　ごめんおばちゃん。タオルある？」
「ああ、持ってきとるよ。しっかし瞳美ちゃんはほんとカキ氷食べるの好きだね？」
「そりゃそうだよ。温泉に入った人の体をマッサージするんだよ。私だって体が熱くなるよ」
そう言うや、瞳美はふたたびカキ氷を食べ始めた。
「でも、お昼の仕事が終わって、休憩に食べようと思って、食堂の冷蔵庫の中を探したんだけど、おばちゃん知らない？」
女性従業員が首を傾げる。瞳美が冷凍庫にカキ氷を入れることは従業員全員が知っており、そこから動かすことは絶対にしないようにしている。
「いや、知らないねぇ。従業員室にある冷蔵庫にはなかったのかい？」
「あそこにあるのって、冷蔵庫だけだよ？　カキ氷を入れたら溶けるじゃない？」
瞳美がそう言うと、女性従業員は確かにそうだと云った。

「ご馳走様でした」
弥生が両手を合わせて言った。
「お粗末さまでした」
咲川はそう言うと、椅子から立ち上がる。
「結局、お風呂に入れんかったな」
咲川が残念そうに愚痴を零した。それを見て、咲川のおじいちゃん、温泉に入りにきてたんだっけ……と、弥生は思い出す。
「これ以上ここにいるのも無理そうだし、今回は私たちは何も出来なかったわね」
弥生が遊火を見上げるように見た。
さきほどから真剣な表情で辺りを見渡している。
「どうかしたんかな？」

咲川がそう尋ねると、
「弥生さま……　千里眼使えますか？」
そう訊かれ、弥生は首を傾げる。

「近くに一瞬でしたけど、妖怪の気配がしたんです」
「妖怪が？」
咲川がそう言うと、弥生は目を瞑り、ゆっくりと深呼吸する。

「巳（み）の方角……」
弥生がそう言うと、遊火と咲川は自分たちの座っているテーブルから右斜め後を見た。
古方位での巳は、南南東を刺す。
そこには瞳美が座っており、ゆっくりとカキ氷を食べている。
「彼女が妖怪……ですか？」
遊火が首を傾げる。同じ妖怪なのだから感知できるはずであったが、弥生ほどのものではない。
「わからないけど、あんた以外に妖気を感じたのは彼女がいる方角だけよ？」
「しかし、彼女は目が見えんからな、被害者を襲うことは出来んのじゃないか？」
咲川がそう言うと、
「それじゃ、今回は妖怪の仕業じゃないって事ですか？」
遊火がそういう。
「遊火、彼女に近付いてみて。ばれないようにゆっくりとね」
そう言われ、遊火は姿を消し、ゆっくりと瞳美に近付いた。

「本当に妖怪だったら、すぐに遊火に気付くはず」
弥生は息を殺し、瞳美を見やった。
遊火が瞳美に近付いたが、瞳美は反応を示さない。
「あれ？」と弥生は首を傾げた。

「見当違いじゃったかな？」
咲川がそういう。遊火が姿を現しても、瞳美は首を動かすことはなかった。

「あいったー」
突然瞳美が呻き声を挙げた。
それを聞いて、遊火が体をピクッとさせる。
「ほら、ゆっくり食べないから、カキ氷が歯に当たったんじゃないかい？」
「ほ、ほうかもふぃれふぁい。ふぃたぁい」
瞳美は涙目になりながら、頬に手を差し出す。
何か違和感を感じたのか、瞳美は口の中で舌を頬りに動かした。
何がグラグラと動いている。
「おばちゃん、ティッシュある？　何か硬いの噛んだみたい」
そう言われ、女性従業員は自分のポケットからティッシュを取り出し、瞳美に渡した。
瞳美はティッシュを口元に近づけ、口の中から異物を吐き出す。

「おばちゃん？　何かわかる？」
目が見えない瞳美は、口から吐き出したものがなにかわからず、女性従業員に尋ねた。
「ひ、瞳美ちゃん。歯が欠けてるよ」
女性がそういうと、
「ほんと？　ちょっと口漱いていいかな？」
「あ、ああ。ちょっと待ってて、コップとボール持ってくるから」
そう言うや、女性従業員は、厨房に入り、水の入ったコップとボールをテーブルに持ってきた。

瞳美は女性従業員からコップを受け取り、水を口に含み、口を濯いだ。

そして、ボールに水を吐き出すと、水の中にジワッと血が混じっていた。

「こりゃ、歯医者行った方がいいかもしれないね。口の中を切ってるかもしれないよ」

それを聞くや、瞳美は露骨に嫌そうな顔をする。

「歯医者いや」

「いやじゃないでしょ？　悪くなってたらどうするんだい？」

女性従業員にそう言われ、瞳美は頬を膨らまそうとしたが、痛みが走り、膨らませることができなかった。

捌・微温湯

弥生と咲川のもとに戻った遊火が、瞳美が口の中を怪我したことを一部始終説明する。

ちょうどロビーから外に出ようとしたときである。

「さっきの嬢ちゃんが食べていたカキ氷の中にまだ硬い氷が入っていたということか？」

「それはないんじゃないですか？　カキ氷は氷を削ったものなんですよ？」

カキ氷を漢字で書くと『欠き氷』とあらわす。

氷を刃物で削ったものをそういうのだが、弥生の言うとおり、固まった氷がそのまま入っていることは先ずない。

小豆が十分に煮えておらず、硬いものが入っていたという考えもあるが、食堂であるため、作るのが大変であるあんこは作り置きされている。

「それと、あの按摩師……　食堂の冷凍庫に買ってきたカキ氷を入れていたそうで、それは従業員全員が知っていたようです」

「それじゃ、もしかして休憩時間だから、コンビニに買いに行こうとしてたってことじゃ」

弥生と遊火は横断歩道を渡ろうとしていた瞳美を思い出す。

「それにしても、やっぱり気になるわね」

弥生がうーんと唸る。それに関して遊火が尋ねた。

「あのマッサージ師から妖気を感じたのは置いといて、露天風呂で遊火が見つけたカキ氷の袋の破片よ。証拠隠滅にす……」

弥生は言葉を止め、自動ドアに映った自分を見やる。

そして、徐に舌を出した。

「な、何をやってるんですか？」

その奇妙な行動に遊火は途惑いながら尋ねた。
「遊火、この前、葉月が皐月のカキ氷を間違えて食べたのを注意されてたの覚えてる？」
そう言われ、遊火は思い出すような仕草をする。
「あ、はい。葉月さまがすぐに謝ったので、皐月さまはあまり怒りませんでしたけど――　でも、あの時葉月さまは自分の部屋で食べてて、ばれないように袋を皐月さまの部屋に捨てたはずですけど」
それを聞くや、弥生は呆れた表情を浮かべる。
葉月の隠し方がなんとも拙かったからである。自分だったら、家の中には捨てず、外に捨てるだろうと考えてのことだ。

「なんで皐月がすぐに葉月が食べたってわかったかわかる？」
「えっと、どうしてですか？」
「着色料よ。カキ氷のシロップには色を出すために着色料を入れてるの。メロンや抹茶だったら緑、ブルーハワイだと青。イチゴは赤といったふうにね。葉月がすぐにばれたのは舌にその着色料が付着していたから、舌の色が変わったというわけ」
そう説明すると、遊火は納得する。
「しかし、それがどうかしたのか？」
咲川がそう尋ねると、
「もし、凶器が氷だとしたらどうしますか？」
なんとも突拍子もない考えである。
「面白い考えじゃが、人を殺傷するほどの力はないじゃろ？　それに温泉の熱でぶつける前に溶けてしまうわ」
咲川は笑いながらいうが、弥生は遊火に何かをお願いすると、遊火はスーと姿を消した。

弥生は再び携帯で、阿弥陀警部に連絡を入れる。
そして、何かをお願いすると、電話を切った。

数分後、男風呂には、石坂瞳美・野沢麻衣子・使用人である杉山・ほか従業員数名。
そして渡辺警視が集まっていた。
「な、なんなんでしょうか」
杉山が渡辺警視に尋ねる。
「いや、私も同僚からもう少し現場にいてくれんかといわれまして、何があるのか」
渡辺警視がそう言うと、男風呂のドアが開いた。

「皆さん集まりましたね」
そこにいたのは阿弥陀警部と弥生であり、弥生は雨合羽を羽織っている。
「あ、阿弥陀警部どの？　どうしてこんなところに？」
渡辺警視が途惑った表情で、そう尋ねる。
「いや、あっちの事件がすぐに終わったんで、駆けつけたんですよ」
阿弥陀警部はそう言うや、隣にいる弥生を見やった。

「渡辺警視……　あなた、この事件を殺人を装った事故ということにしたようですな？」
「え？　ええ。そうですよ。被害者は酔っ払い、湯船の中で躓(つまず)いて岩に頭をぶつけた。そう考えられなくもないじゃないですか」
「じゃったら、どうして発見されたときはうつ伏せだったんじゃ？　それじゃったら仰向けの方があっとるし、仮に事故を装った殺人じゃったら、仰向けにするはずじゃろ？」
いわれてみればそうだと、周りがどよめく。
「ですが、もし殺人だとしたら、凶器はどうするんですか？　供述によれば、ハンマーなどの工具は倉庫の中。打撲によるものですから、包丁は使われていません」
渡辺警視がそう説明すると、弥生はポケットから破片を取り出した。

「これは事件現場で見つけたカキ氷の袋が燃やされてた破片です」
「そ、それがいったいなんだと……」
「杉山さんでしたっけ？　あなた本来刺青をしている人間を入れてはいけないのに、やーさんである被害者を露天風呂にいれたそうですな？」
　阿弥陀警部にそう聞かれた杉山は頷いた。
「こちらも客商売ですし、いざこざがあってはいけないので、予約がなかった露天風呂に入ってもらったんですよ」
「被害者にお酒を勧めたのもあなただと」
　そう訊ねられ、杉山は頷いた。
「しかし、被害者はすでに亡くなっており、警察に通報した」
「それじゃ、杉山さんが露天風呂を出て行ったとき、あのヤクザは殺されたってこと？」
　女性従業員の一人がそう尋ねると、
「おそらく、被害者は何者かに後頭部を殴られた。そして犯人はその凶器をある方法で存在そのものをなかったことにした」
　阿弥陀警部がそう言うと、渡辺警視が訝しげな表情で、
「ある方法？　それはいったい」
　そう言われ、阿弥陀警部は弥生を見やった。

「犯人が使った凶器は……　これです」
　弥生はビニール袋に入った氷を見せる。
「氷？　そんなもので人は殺せるんですか？」
　麻衣子が尋ねると、
「氷の破壊強度は色々な条件によって変わりますが、たとえばこの袋に入った氷の温度が０以下だった場合、－１０℃では強度は２倍になります。ですが、被害者が殺された場所が露天風呂ですから、氷は溶けてしまう」
「そりゃそうでしょ？　氷は温度で溶けるんですから」

「もしかして、氷を溶かさない仕掛けをした？」
瞳美がそう言うと、弥生は頷いた。

「溶けた氷は0℃ですが、この中に塩を入れると、温度が急激に下がって溶けやすくなるんです」
「ちょっと待って、それじゃ氷はなくなるんじゃない？」
「そうだ！　それにどうやって犯人は被害者をそれで殴るんだ？」
渡辺警視がそう言うと、
「氷は中に入ってたカキ氷をカチカチに凍らせた状態にするためだった……　そうですよね？　杉山さん？」
弥生がそう言うと、杉山はギョッとする。

「ど、どうして私が？」
「女性従業員から聞きましたよ？　あなた食堂から氷を拝借していたそうじゃないですか？」
「え、ええ。ですがあれは風呂の中で捻挫した人がいまして」
杉山はそう言うと、食堂で働いている女性従業員を見やる。
「あ、はい。杉山さんはそういって氷を持っていきました」
「可笑しいですね。温泉で事故にあったのはアルコールにやられてサウナで倒れた人くらいだと聞きましたが？」
阿弥陀警部がそう言うと、うぐぅと杉山は呻く。

「瞳美さん。確かあなたは自分で買ってきたカキ氷を厨房の冷蔵庫に入れていたそうですね」
弥生がそう訊ねると、瞳美は声がしたほうに頬りに首を動かす。
「え、あ、はい。温泉に入ったお客さまのマッサージをしてますから、次第にその熱気に当てられて体が火照るんです。それを沈めようと、自分で買ってきたカキ氷を食べてます」
「でも、先ほど食堂であなたを見たとき、食堂で注文してましたよね？」

「冷蔵庫に入れていたはずのカキ氷がなくなっていたので、コンビニに行って買おうとしたんですけど、入り口で野沢さんに声をかけられて」

瞳美はそう言うと、手をつないでいる野沢がいる方向に顔を動かす。

「それは私も見てましたし、野沢さんは瞳美さんを探していた。そのことは客や他の従業員も見ているので、犯人ではない」

「しかし、犯人はこのとき、誤った行動をとってしまった」

弥生はそう言うと、袋に入ったカキ氷の袋を取り出し、中身を湯船に入れる。そして、ビニール袋の氷もすべて湯船に沈めた。

「氷に塩を入れることで温度は急激に下がる。でも氷自体はその温度の急激な変化によって、普通に溶けるよりも早く、溶けてしまう。犯人はそのことを知らなかった」

正確に説明すると、真水で作る氷は0℃以下で凍り始める。そこに塩を入れると、本来凍り始めるはずの温度である0℃では凍らず、それよりも氷点下にならないと凍らなくなる。

つまり、氷が溶けた時の温度を塩が吸収し、温度が下がるという原理である。

「そして、ビニール袋は外に捨てることで証拠隠滅には出来るが、カキ氷の袋はどうしても中途半端にしなければいけなかった」

「まさか、犯人は瞳美ちゃんがやったことにしようと？」

「でも、彼女は目が見えないし、被害者が殺されたと思われる時間は食堂に行っていた。それが犯人の誤算だったんです」

「ちょっとまって？　杉山さんは瞳美ちゃんが重度の視覚障害者だってことを知ってるのよ？」

麻衣子がそう言うと、

「それがもし、そう思えなかったとしたら？」

弥生がそう言うと、麻衣子は首を傾げた。

「瞳美さんはマッサージの仕事をした後、自分の部屋に行く前に、食堂の冷凍庫に入れていたカキ氷をとってから自分の部屋で食べていた。でも今日に限って入れていたはずのカキ氷がなくなっていて、仕方なく買いにいった」

「それでどうして犯人は瞳美ちゃんが見えてるって思ったんだい？」

渡辺警視がそう尋ねる。

「犯人は犯行に使おうと、出来るだけ氷を掻き集めた。その時、カキ氷も一緒に入れた。これは犯人を瞳美さんにしようとしたから。でも瞳美さんはカキ氷の袋についているギザギザで判断していた。それで瞳美さんはカキ氷が中に入っているかいないかを判断していたそうですし、近くにあるコンビニの店員から話を聞くと、彼女はよくカキ氷を好んで買っていたそうですから、買いに来たとき、尋ねるそうですよ。お菓子類の袋は殆どが、開けやすいようにギザギザになってますからね」

「それと、食堂で働いている従業員からも聞きましたが、氷は製氷機で作ったものを使用していて、冷凍庫はカキ氷に使う大きい氷を入れるために使ってる。瞳美さんはそれを知っていて、そこにカキ氷を入れていた。そうですよね？」

阿弥陀警部がそう尋ねると、瞳美は声がしたほうに振り向き、頷いた。

「でも、ひとつ気になるんですよね？　どうして被害者の肩に石で引っかいたような傷痕があったのか」

「それはあれでしょ？　こけた時に頭をぶつけ、体が沈んだときに引っかいた」

渡辺警視はそう言うや、ハッとし、杉山を見やった。

「まさか、犯人は被害者を殺した後、事故に見せかけて体を岩に向けた」

杉山はガクンとその場に跪いた。

「どうして、こんなことを？」

「私はやつから借金していたんだ。借りたときは百万だったんだが、やつは一月（ひとつき）１５％の利子にしてくれるといってくれたが、それはやつの口八丁（くちはっちょう）だった。実際は三日に３％……一月（ひとつき）にしておよそ９０％だったんだ」

つまり、百万の３％であるため、利子は一日１万円となり、。返済金額は一月に百九十万の計算である。

「相手を信じ込ませる。そんなのあちらさんがよく使ってることじゃないですか」

「私はすぐにお金が必要だったんだ。すぐに百万が必要だったんだ」

杉山はそう言うと、瞳美を見た。

「すまないな、実は君を障害者ではないと疑問視し始めたのは、君が食堂で料理の練習をしていたからなんだ。目が見えないから料理なんて出来ないと思ってたからね」

そう言われ、瞳美は物悲しい表情を浮かべた。

「目が見えないから包丁は持たないし、料理なんて危なくて、するとは思っていなかった。そう固執していたから私は君を……」

「馬鹿にしないで――」

突然、麻衣子が怒りをあらわにする。

「瞳美ちゃんは目が見えなくても、一人で生きていけるように、みんな協力して教えてるのよ。この施設の中だって、何回も歩いて覚えた。それにあそこには元々横断歩道はなかったのよ。それをこの温泉を作るときに、不便だからって役所にお願いして信号を作ってもらった」

麻衣子はジッと杉山を睨みつけたが、杉山は俯きながら立ち上がり、渡辺警視と一緒に連れて行かれた。

玖・花崗岩（前書き）

花崗岩（かこうがん）：火成岩の一種。流紋岩に対応する成分の深成岩である。石材としては御影石（みかげいし）とも呼ばれる。

玖・花崗岩

警視庁鑑識課の一室で、湖西主任がジッと緒形の死体が映された二枚の写真を見ている。

一枚は正面から、もう一枚は傷が入れられている背中の写真である。

「どうなんですか？」

「やはり岩で引き摺ったにしては、変な方向に傷が入っておるな。というより、肩に傷が集中しておる」

阿弥陀警部の質問に、湖西主任は訝しげな表情で答えた。

「杉山は被害者を発見した後、湯船から引き摺りあげたと供述しています。となると、そのときに背中に傷が入っていないと可笑しいですよね？」

殺された緒形の図体はでかく、杉山一人の力では引き上げることは困難である。

そして湯船は岩で作られているため、挙げたときに岩肌に当たって、傷が入る。

「それと、遊火がわしに『カキ氷の袋が燃える時間はどれくらいか』と尋ねにきたんじゃよ」

「それで、どれくらいかかるんですか？」

「カキ氷の袋はビニールじゃし、急用じゃったからあまり答えられんかったがな」

湖西主任は結局燃える時間を教えはしなかった。

「しかし、弥生さんから聞きましたけど、まさか石妖（せきよう）があそこで働いていたとはね」

それを聞くや、湖西主任はキョトンとした表情を浮かべる。
「なんじゃ、お前知らんかったんか？　あそこの露天風呂で使われている岩を運んだときに、石妖も一緒についてきたようなものなんじゃよ。いってしまえばあの岩は石妖の依り代だったわけじゃよ」
そして、按摩師として働いていた瞳美に取り憑いていたことが後になってわかった。

石妖は石工の男たちに按摩し、眠ったところを殺す妖怪であり、按摩された男の背中には石で引っかいたような傷痕が残るといわれている。

「彼女は違うと、暗示してたんでしょうかね？」
「恐らくな、しかし、お前はどうして迷企羅（めきら）をあそこに向かわせたんじゃ？」
そう尋ねられ、阿弥陀警部は壁に凭れかかった。
「地蔵菩薩からのお願いで、温泉に行った弥生さんに迷企羅を監視させていたんですよ」
そう話していると、突然部屋の扉が開いた。

「た、大変です警部！」
「岡崎くん？　どうかしましたか……」
「今、警察庁から連絡があって、昨日逮捕された杉山と、それを取調室で聞いていた警官三名。そしてそれをマジックミラー越しに聞いていた警官数名が何者かに殺されたとの報せです」
それを聞くや、阿弥陀警部と湖西主任は顔を歪ませた。

「目撃証言は？」
「それが……　誰もいません」
「そんなわけがないじゃろ！　だれもいない？　いったいどんな風に殺されとったんじゃ！？」

「報告によれば、全員喉を切られた大量出欠によるショック死だそうです」
喉を？と阿弥陀警部は湖西主任を見た。

「それ以外に報告は？」
「今はまだこれくらいしか」
「そうですか、わかりました。まぁ警察庁からは追って連絡があるかもしれませんから、私たちは自分たちの仕事をしましょう」
「わかりました。では失礼します」
岡崎はそう言うと、部屋のドアを閉め、廊下を走っていった。

「迷企羅……」
阿弥陀警部がそう言うと、暗闇から男が現れた。
見た目は十八の青年で、肩まである長い白髪に、赤のメッシュが入っている。
「十二神将が一人、迷企羅ここに」
迷企羅は跪き、頭を下げた。

「急ぎ、警察庁で起きた事件現場に行き、状況を把握してきなさい」
阿弥陀警部がそう命ずると、
「――御意」
迷企羅はそう言うや、スーと姿を消した。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

時間を戻して、橡温泉のロビー受付横にある休憩室。
そこにあるベッドに弥生がうつ伏せに寝ている。
「それじゃ、深呼吸して、ゆっくり」
瞳美にそう言われ、弥生はゆっくりと深呼吸する。

瞳美は弥生の体に触れ、手に力を入れながら、マッサージしていく。

「あなた、遊火が私たちのそばにいたとき、気配を消したでしょ？」

そう尋ねられた瞳美は首を傾げたが、ゆっくりと表情を和らげた。

「どうしてそんなことがいえるんですか？」

「人は突然あったものがなくなると緊張する。それはそこにいたはずの人がいなくなるのと一緒。つまり、あなたが普通の人には感じない妖気を微かに出していても、私にはすぐにわかったし、消えたからこそ、あなたが妖怪だってこともわかった」

「正確に言うと、私はこの子に取り憑いているだけ、私と同じ按摩師として働いていたこの子にね」

「それで、あのヤクザを懲らしめたのもあんたの仕業？」

そう尋ねると、瞳美は首を横に振った。

「あれはあの子がしたことよ。護身用に杖術を習っていたし、あの男はよく杉山に借金の取立てに来てたから、覚えてたのよ」

「それじゃ、杉山があのヤクザを殺したのも」

「ううん、それ以上のことは私にはわからないし、しっていても答えない――　はいおしまい。腰の状態もよくなってるはずよ」

そう言われ、弥生は腰を上げると、痛みはなく、すっきりとした表情を浮かべた。

「妖怪でも、私みたいに人の役に立とうとしているのもいるのよ」

瞳美にそう言われ、弥生は何もいわず、頭を下げると、橡温泉を後にした。

玖・花崗岩（後書き）

お疲れ様でした。今回弥生メインでしたが如何だったでしょうか？

では、次回もよろしくお願いします。

壱・雨合羽

それは六月終わりの、少しばかりジメッとした昼下がりのことであった。

「葉月ちゃん、帰ったら一緒にあそぼ」

「いいよ。何して遊ぼっか?」

ランドセルを背負っている葉月は、友人である市宮(いちみや)というクラスメイトの女の子と一緒に歩いていた。

周りにもランドセルを背負っている小学生の姿がある。

学校の授業を終え、家に帰る途中であった。

「公園で縄跳びとか、わたし、三重跳び出来るようになったんだよ」

市宮がそう言うと、葉月は驚いた表情を浮かべ、

「それじゃ、公園で縄跳びってことにする?」

葉月がそう尋ねると、市宮は同意するように頷いた。

「じゃぁ、家にランドセル置いたら、縄跳びの縄を持って、葉月ちゃん家(ち)の神社に集合ってことに」

市宮がそう言ったときだった。

空からポツポツと雨が降り始め、終(しま)いには、土砂降りと化していた。

「ちょ、は、葉月ちゃん! ど、どこか雨宿りするところない?」

市宮がそう尋ねると、葉月は辺りを見渡した。

そして、信号の下で立っている白い男を見ると、男は人差し指で、公園のほうを指した。

確かにここから神社に帰るよりも、公園に行った方が雨宿りする場所はあるだろう。

そう考え、葉月は市宮の手を引っ張り、そこへ向かった。

葉月は男の前を通るや、「ありがとう」と礼を言った。
男はスーと、姿を消した。
後日わかったことだが、その男性は交通事故で亡くなった男性だった。

公園の敷地内に屋根のある休憩所がある。葉月と市宮はそこで雨宿りすることにした。
二人とも薄着だったこともあり、服が肌に引っ付いている。
雨の音は轟々(ごうごう)と鳴り響き、すぐにやんでくれる気配がない。
「葉月ちゃん、バスタオル使える？」
「使わないほうがいいかもしれない。ここで拭いても、雨でまた濡れるだろうし」
葉月がそう言うと、市宮は自分たちのプールバックを見るや、
「天気予報のうそつきぃ！」と、喚(わめ)く始末であった。

久しぶりのプールで、授業があった時間は肌寒かったが、雨が降るような気配はしなかった。
それもＴＶの天気予報で、降水確率は昼夜ともに２０％とあったため、まさか降るとは思っていなかったのだ。
この土砂降りが、局地的な大雨であったことを二人が知るのは、家に帰ってからであった。

「くぅーん」とどこかから犬の鳴き声が聞こえてきた。
葉月と市宮はその声に気付き、声がしたほうを見る。
視線の先には滑り台があり、その下に段ボール箱が置かれている。
葉月と市宮は互いの目を見やり、そこへと走った。

滑り台のちょうど階段の下に段ボール箱が置かれており、葉月と市宮はその中を覗き込むと、「くぅーん」と、小さな子犬が震えていた。

「捨て犬かな？　首輪がつけられてない」
「もしかしたら野良犬かもしれないよ」
二人が話していると、うしろに誰かが立っている気配がし、葉月と市宮はそちらに振り返ると――
カッと、雷が鳴り響き、逆光となった人影は、まるで黒い塊のようであった。

「きゃあああああああああっ」
葉月と市宮が悲鳴を挙げると、
「ご、ごめんなさい。驚かせちゃったみたいね」
女性が二人に謝る。葉月と市宮は女性を見やった。

女性は腰まで伸びた黒髪に、赤い一雨合羽（レインコート）を着ている。
そして二人が何よりも驚いたのは、女性が口につけている大きなマスクである。
顔の半分を埋め尽くすほどに大きく、女性の目がはっきりと見えなかった。
「お、お姉さん誰なの？」
市宮がそう言うと、
「わたし？　私はね、そこにアパートが見えるでしょ？　そこに住んでるの」
女性はそう言いながら、アパートを指差した。
声の感じから、見た目ほど怖くなく、どちらかというと優しいお姉さんといった印象だ。
「それじゃ、この子犬はおねえさんの？」
葉月がそう尋ねると、女性は首を横に振った。
「ううん、わたしはこの子が可愛そうだから、ミルクとかドックフードをあげてるだけ、この子が誰かに拾われたのなら、それは嬉しいことなのよ」

女性はそう言いながら、子犬を抱きかかえた。
子犬は震えながら、女性の頬を舐める。

「その子、お姉さんのこと大好きって云ってるんじゃないかな？」
葉月がそう言うと、女性は不思議そうに葉月を見た。
「あなた、この子の気持ちがわかるの？」
「わかるって云うか、姉の知り合いにすごく犬に詳しい人がいて、犬が人の顔を舐めるという仕草は、敵意がなかったり、好意を持っているって」
葉月が云っている知り合いとは、信乃のことである。
まだあの事件が起きる前までは、葉月も一緒に遊んでもらっていたため、信乃から犬に関することを色々と教えてもらっていた。

「それで、あなたたちはどうしてここに？」
女性が尋ねると、葉月と市宮は屋根のある休憩所を指差した。
「なるほど、突然雨が振り出したから、雨宿りしてたってわけだ」
そう言うと、女性は子犬を段ボール箱の中に戻す。
「ねぇ、どっちか、この子を引き取ること出来ないかな？」
そう訊かれ、葉月と市宮は互いを見やるが、
「うちは駄目なんです。お姉さんの部屋みたいにアパートだし、お父さんが犬嫌いで……　あ、葉月ちゃんの家はどう？　神社だから」
市宮がそう言うと、女性は首を傾げ、
「へぇ、あなたのお家って、神社なんだ」
「あ、でも、うちにはハムスターがいて、あまり大きな動物は飼えないんです」
葉月がそう言うと、女性は「そうか、残念ね」と言った。
「ごめんなさい。協力できなくて」
二人が女性に頭を下げると、
「いいのよ。この子が誰に拾われても、幸せならそれでいいんだから」

三人が話していると、雨の音が静かになっていき、雲間から太陽がのぞきこんできた。

「あ、雨やんだみたいね」

「ほんとだ、葉月ちゃん、帰ろう」

市宮にそう言われ、葉月は女性に頭を下げた。

女性は二人が見えなくなるまで、ずっと手を振っていた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

その翌日のことであった。

「葉月ちゃん、大山くんたちが運動場でドッジボールしようって」

市宮が、葉月を誘いに来る。

「うん。今日は負けないようにしよう」

葉月が両手で、ギュッと拳を作る。

「それじゃ、急ごう」

葉月と市宮が教室を出ようとした時だった。

「なぁ、聞いたか？　あの話」

葉月のクラスメイトたちがなにやら話をしている。

「俺見たんだよ。この前、変な女の人が公園の滑り台に立っててさ、段ボールの中見てんの」

「ああ、あの女の人だろ？　怖いよな？　雨が降ってないのに赤い雨合羽（あまかっぱ）着てて」

（――赤い……　雨合羽？）

葉月は立ち止まり、男子たちの話を聴きはじめた。

「そうそう、それに髪が長くて、口にはこんな大きなマスクしてんだぜ？　あれ絶対おばけだよな？」

男子が大袈裟な仕草をする。

「それでさ、おれ、昨日、塾の帰りに段ボールの中を見たんだよ。

そしたらさ……　子犬の死体が転がってたんだよ。あれ、絶対あの女の人が殺したに……」
「うそだぁっ！！」
突然、葉月がそう叫ぶや、騒がしかった教室内は静まりかえった。

「は、葉月ちゃん？」
隣にいた市宮は驚いた表情で、葉月を見た。
「ど、どうしたんだよ？　黒川、驚かすんじゃねぇよ」
男子の一人が葉月にそう尋ねる。
「お、お姉さんが、あの子犬を殺すわけないでしょ？」
「おまえ、あの女の人と知り合いなのか？」
そう尋ねられたが、葉月は首を横に振った。
「昨日初めて会っただけだけど、でも、あのお姉さんが、あの子犬を殺すわけない！」
葉月は、信乃から教えてもらったことを考慮に入れての反論であった。

犬が好意を持つということは、その相手を信頼しているということだ。
信頼しているからこそ、犬はその人に懐く。信頼心がなければ、たとえ飼い主であろうと、懐くことはない。
昨日、公園で会った女性がそんな残酷なことをすると、葉月は思えなかった。
確かに怖い印象はあったが、それは最初だけで、子犬を抱きかかえていたときや、自分たちに話しかけていたとき、葉月は優しそうな印象を女性に持っていた。

「そうよ。それに私も一緒にいたけど、全然怖くなかった」
市宮がそう言うと、
「おい、黒川、市宮……　早く来いって、大山きれそうだぞ」

廊下からクラスメイトの一人が呼びに来る。

「とにかく！　あのお姉さんが殺したなんて！　絶対信じないから！」

葉月はそう言うと、教室を出て行った。

壱・雨合羽（後書き）

お待たせしました。（ＨＰで読んでる方がいらっしゃるかもしれませんが）第十六話です。基本的に学校の怖い話関係は葉月メインでやっていきます。

弐・顔無

警視庁の一角に、小部屋がある。
そこでは、小さなテーブルを囲むように、阿弥陀警部と大宮巡査、佐々木刑事、西戸崎刑事の四人が卓を組んでいた。
「雨々ふれふれ、かあさんが、蛇の目でお迎え、嬉しいなっと」
そう歌いながら、佐々木刑事が『北(ペー)』を切る。
「そういえば、その傘を持ってる男の子って、結構金持ちらしいですよ」
大宮巡査はそう言いながら、『一満(イーワン)』を捨てる。
「へぇ、どんな歌詞でしたっけね？」
阿弥陀警部は『北』を切り、西戸崎刑事は『西(シャー)』を切った。
「あらあら、あのこはずぶぬれだ、やなぎのねかたでないている。だったと思います」
「しかし、蛇の目とは、また高いものをつけとるな」
佐々木刑事が『二萬(リャンワン)』を捨てる。大宮巡査は山から牌をとり、
「蛇の目は和傘ですから、結構なものだと思うんですよね。『立直(リーチ)』」
そう言うや、大宮巡査は、場に千点棒を出し、『九筒(キューピン)』を捨てた。
「しかし、これだけ雨が続いていると、酒が飲みたくなりますね。『立直(リーチ)』」
阿弥陀警部も追っかけるように、場に千点棒を出し、『一筒(イーピン)』を切るや、
「ロン、立直(リーチ)、一発、平和(ピンフ)、一盃口(イーペーコー)、ドラドラ……」
大宮巡査はぱたりと牌を倒した。
『一筒・一筒・二筒・二筒・三筒・三筒・七(チー)・八(パー)・九筒(キューピン)・二(リャン)・三(サン)・四索(スーソー)・一萬雀頭(ジャントウ)』
「跳満、１万２千点です」

大宮巡査がそう告げると、阿弥陀警部・佐々木刑事・西戸崎刑事は愕然とする。

「大宮くんの逆転勝ち……ですかね？」

阿弥陀警部が引きつった笑みを浮かべながらで言う。

「えっと、ビリは……振り込んだ阿弥陀じゃな。ってなわけで、全員の昼飯代は阿弥陀もちってことで」

佐々木刑事がそう言うと、西戸崎刑事は椅子の背凭れにかけていた上着を羽織った。

佐々木刑事と大宮巡査もスーツの上着を羽織る。

阿弥陀警部はそんな三人を見ると同時に、自分の財布の中身を確認していた。

――先日給料が入り、誰が昼飯を奢るか賭けての半荘麻雀であった。

葉月がクラスメイトと一悶着あった放課後、葉月は市宮と大山の三人で、例の公園へとやってきていた。

滑り台のところに行くと、段ボール箱はすでに撤去されている。

それどころか、子犬が惨殺されたという報せがあってか、公園の周りには大人が数人ほど見回りをしている。――警察の姿はどこにもなかった。

「なぁ黒川、本当にその女の人が犯人じゃないって思ってんのか？」

大山がそう尋ねると、葉月は力強く頷いた。

「でもなぁ、塾にいってるやつらが見たっていってんだよなぁ。その大きなマスクをした赤いレインコートの女の人が、犬の首をねじってたって」

それを聞くと、市宮が口を手で押さえた。

「本当にそうかな？」
葉月がそう言うと、大山と市宮の二人は首を傾げた。
「なんでそんなことがいえるんだよ？」
「だって、この公園……　灯（あか）りがひとつしかないんだよ？」
そう言われ、大山と市宮は周りを見渡した。
道路の方を見ると、街灯はあったが、公園の敷地内には街灯がひとつしかなく、あるのは屋根がある休憩所のところだけである。
「仮にだけど、その灯りが滑り台に届かなかったら、どうなる？」
「えっと、灯りが届かないってことは――見えないってことじゃない？」
市宮がそう言うと、葉月は頷いた。
「それに昨日は雨が降っていて、月が出ていなかった。あの女の人を見たって云ったって、本当にあの人かどうかもわからないし、マスクをつけている人なんて……」
葉月がその先を言おうとした時だった。

「あら？　こんにちわ」
「おねえさん？」
三人のうしろから声をかけたのは、昨日葉月と市宮が出会った女性であった。
昨日と同じく大きなマスクをしてはいるが、カジュアルな服装を着こなしている。
「こ、この人が噂になってる人か？　全然怖くねぇんだけど？」
大山が驚いた表情で言った。それを見て、「噂？」と女性は小首を傾げる。
「えっと、みんなが噂してるんです。この公園にはおばけが出るって」
市宮がそう言うと、
「ああ、口裂け女のこと？」

女性がそう言うと、市宮は葉月と大山を一瞥し、答えるように頷いた。

「そう……　それで、こんな大きなマスクをしているから、私が犯人にされたわけだ」

「されたって、どういうこと？」

「今日のお昼頃だったかしら、職場に警察の人が来てね、この公園で犬の死体が発見されたって。その犯人を見たっていう小学生の目撃証言から、私の容姿に似ていたから事情聴取を受けていたの」

女性がそう説明する。

「それで、お姉さんはその時間、なにをしてたんですか？」

市宮が控えめな声で尋ねた。

「確か午後十時くらいだったかしら、その時間だったら、コンビニに行っていたわ。確認してもらったら防犯カメラに映っていたから、アリバイはあるのよ」

それを聞くと、葉月はホッと胸を撫で下ろした。

それを見て、女性は「どうしたの？」と尋ねた。

「ああ、葉月ちゃん、お姉さんのこと心配してたんです。みんなが犯人はお姉さんじゃないかって云ってるから、カーとなって」

「だって、犬が心を許している人に悪い人はいないって」

葉月は頬を膨らませて言った。

「ありがとう。でも……残念だな、こんなことになるんだったら、隠してでも、アパートで飼えばよかった」

物悲しそうに俯く女性を見るや、

「だったら、その子犬を殺した犯人を探し出そうぜ！」

大山がそう言うと、葉月と市宮が「えっ？」とキョトンとする。

「だから、お姉さんの無実を証明するんだよ。お姉さんはこの公園にはよく来んのか？」

「え、ええ。部屋が近くだから、それにあのこの餌とかもやってたから」
「つまり、いつもここにいるから、みんなは犯人がお姉さんだと思ってしまったってこと？」
葉月がそう尋ねると、大山は頷く。
「考えられなくもないね。犬が殺されたって云われてる時間、ずっと雨が降ってたはずだから、お姉さんをしっかり見たとは思えない」
市宮がそういうが、女性は心が晴れていなかった。
それを葉月が指摘する。
「仮に私だったとして、どうやって犬が殺されるところを目撃するの？」
そう言われ、葉月はハッとする。

「犬が殺されたところを……離れた場所からじゃ見れない」
葉月がそう言うと、市宮と大宮も驚きを隠せない。
「ちょっと待てよ！　それがどうかしたのか？　さっき黒川が自分で云ったじゃないか。『公園の街灯はあそこにしかない』って」
大山が休憩所近くに設置されている街灯を指差しながら言った。
「それが可笑しいの。目撃したのが公園の中じゃないと犯人が犬を殺したところが見えない」
「えっと……」
市宮が何かを云おうとしたが、口を閉ざした。

何者かが犬を殺した。この事実は何一つ変わらない。
しかし、それを『どうやって目撃したか』に重視されるのだ。
葉月の言うとおり、公園内に設置された街灯は休憩所の近くにあるものしかない。
公園自体がさほど大きくはないのだ。
葉月の予想通り、この公園の街灯は滑り台まで光が届かない。
それどころか、逆光になって、遠くからでは見えない。

――にも拘らず、目撃者は何者かが犬を殺しているところを見ているとされており、それは少なくとも『犯行を滑り台の近くで見る以外方法がなかった』。

「ところで、さっきお姉さんが云ってた『口裂け女』ってなに？」

市宮がそう尋ねると、

「昔、流行ってた噂話。昨日の私みたいに赤いコートの大きなマスクをした女性が、突然声をかけるの『わたし……きれい？』って」

「それでどうなるの？」

「『きれい』っていえば、女性は大きなマスクを外して、素顔を見せるの。その素顔は、口が耳まで裂けている。そして答えた人は鎌で殺されてしまうの」

それを聞くや、市宮と大山が肩を窄めた。

「答えたのに理不尽だな」

「そうね。それに『ふつう』って言ったほうがいいみたいだし、たとえ本当に美人だったとしても、その人がきれいかどうかなんて、受け取る側が決めることでしょ？　逆に不細工が好きな人だっているわけだから」

「蓼食う虫も好き好きってこと？」

葉月がそう言うと、女性は驚いた表情を浮かべた。

「へぇー、あなた小学生なのに、難しい言葉知ってるのね？」

葉月が云った言葉の意味は、辛くて苦い蓼を好んで食べる虫がいるように、人の好みは多様性に富んでいるということ。という意味である。

「さぁ、最近、不審者も出ているらしいから、早くおうちに帰りなさい」

「お姉さんが不審者じゃねぇの？」

『大山くん！！』

葉月と市宮がキッと大山を睨みつける。

それを見て女性は否定するわけでもなく、ただクスクスと笑うだけだった。

参・危険物

阿弥陀警部……もとい阿弥陀如来は自分の権化を長くいさせ、人間の世界を監視している。それこそ様々な事件を刑事として見てきた。

しかしながら、はてさてどうしてと思うことが多々ある。

「どうかしたんですか？　阿弥陀警部」

大宮巡査に声をかけられ、阿弥陀警部はそちらに振り返る。

「いやぁ、何でこんなに安く手に入るのかなぁって」

阿弥陀警部はそう言いながら、ある商品を指差した。

「ああ、ここは百円均一ですから、安く手に入るのは仕方ないですし、そういうコンセプトですから」

大宮巡査はそういうが、阿弥陀警部は値段のことを訊いているのではない。

阿弥陀警部が指差していたのは『包丁』である。

「ああ、でもあまり切れないみたいですよ」

大宮巡査があっけらかんと答える。

「こういう危険物って、普通レジの近くに置きません？　ここってレジからじゃ死角になってますよ？」

確かに阿弥陀警部の言うとおり、二人がいる場所から、レジから数米（メートル）離れており、殆ど見渡しの悪い場所である。

「そういえば、大宮くんって一人暮らしでしたっけ？　官舎（かんしゃ）とかじゃなくて」

「ええ。都内で一人暮らしですけど、それがどうかしたんですか？」

そう訊かれ、阿弥陀警部は思い出すように、

「いや、この前あなたの部屋があるマンションの近くであなたを見かけたんですけどね、その時にきれいな女性が一緒にいたので、誰だろうなぁと思って」
「ああ、あれですか？　あれは……」
大宮巡査がその先を言おうとしたときだった。突然彼の携帯が鳴り響いた。

「もしもし、大宮ですが」
『ああ、大宮か、佐々木じゃけどな、至急……』
佐々木刑事から連絡を受け、大宮巡査は表情を険しくした。
「何か事件ですか？」
「そのようです。さっさと買い物を済ませましょう」
そう言われ、阿弥陀警部と大宮巡査は急いでレジへと走り、会計を済ませた。

「遅いぞ、二人とも」
先に現場に着いていた佐々木刑事にそう言われ、阿弥陀警部と大宮巡査は頭を下げた。
「それで遺体は？」
阿弥陀警部がそう言うと、
「部屋の中だ。あ、大宮、お前はちょっと覚悟しといたほうがいいぞ」
そう言われ、大宮巡査は首を傾げた。
「酷いんですか？」
「酷いってものじゃないな。人の構造を無視しとったわ」
佐々木刑事が顔を歪めた。

――佐々木刑事の言葉どおり、遺体は『酷い』で済ませられるものではなかった。

下着姿の女性がキッチンで仰向けになって倒れており、その顔は皮が剥がされ、筋肉が剥き出しになっている。。
円らな相貌は今にも千切れ落ちそうだった。
「確かに酷いですね」
阿弥陀警部がそう呟くと、答えるように大宮巡査は小さく頷いた。
「被害者の身元は？」
「三守怜子（みかみれいこ）、３２歳。ＭＳ社に勤務しているＯＬのようです」
警官の一人が被害者のものと思われる財布から免許書を取り出し、説明する。
「まぁ、顔が判別できない以上、鑑識に回さないといけませんし、いつ殺されたのかも」
阿弥陀警部は台所に目をやる。そして、徐にあたりを探し始めた。
「どうかしたんですか？」
「包丁はどこにいったんでしょうね？」
その言葉に大宮巡査は首を傾げる。
「犯人が犯行に使ったんじゃないんですかね？」
大宮巡査がそう言っている中、阿弥陀警部は戸棚を調べる。
――台所を隈なく探しても、包丁のほの字も見つからなかった。
「っかしいですね。包丁がひとつもない」
「阿弥陀警部、それがどうかしたんですか？」
「大宮くん。君、包丁どれくらい持ってます？」
そう訊かれ、大宮巡査は少しばかり思い出すように考える。
「えっと、大体2、3本ですかね。まぁ、一本って人もいるでしょうし、僕の場合は母がりんごとかを持ってきますから、果物ナイフもありますし」
「それにカッターやはさみもありませんでしたね。刃物という刃物全部がない」
包丁のみならず、カッターやはさみもない。
部屋が荒らされているのではなく、きれいになくなっている。

「犯人が犯行に使った……」
「そう考えるのが妥当でしょうけど、それって包丁だけの話でしょ？　被害者はＯＬだそうですから、事務用品としてはさみとカッターはもってると思うんですけどね」
「会社では使うけど、家では使わないんじゃないんですか？　この部屋結構綺麗……」
大宮巡査が言葉を止める。その仕草に阿弥陀警部は首を傾げた。

大宮巡査は徐に押入れの襖を開ける。
「――何も入ってない」
その言葉どおり、押入れの中は何も入っておらず、クローゼットや箪笥などの中身も、その言葉どおり蛻（もぬけ）の殻であった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「――あれ？」
台所で弥生がおたまを持ったまま、冷蔵庫の中を漁っている。
「あれぇ、どこにやったかなぁ……？」
首を傾げ、冷蔵庫の戸（ドア）を閉める。
彼女が探しているのは素麺（ソーメン）などを食べるときに使う素麺つゆである。
お吸い物に使おうと思っていたのだが、醤油を使うよりも使い勝手がよく失敗しにくい。
「葉月ぃっ！　ちょっとお願いしていい？」
弥生は居間を覗き込むや、ＴＶを見ながら寛いでいた葉月に声をかけた。
「お願いって何？」
葉月は首を台所のほうに向け、尋ねる
「ちょっとスーパーまで行って、つゆ買ってきてもらっていい？　あ、ストレートじゃなくて、二倍のやつね」

そう言いながら、弥生は財布から五百円玉を取り出し、葉月に渡した。

葉月は、防犯用ブザーを持って、神社を後にした。

――その道中、単調故(ゆえ)、省略。

買い物を済ませ、帰路についているときである。

子犬が殺されるという事件が遭った公園が見え、葉月はその横を通り、フェンス越しに滑り台のほうを見やった。

ちょうど夕暮れ時ということもあってか、公園の街灯が灯っていたが、滑り台のところまでは光が届いていなかった。

（やっぱり見えないんじゃないかな……）

そう考えると、葉月は徐に「遊火」と呼び寄せた。

葉月の目の前に無数の火の玉が集まり、ひとつにまとまるや、少女の姿に変わった。

「葉月さま、お呼びでしょうか？」

「遊火、ちょっとあの滑り台の下で子犬を抱えるような仕草してくれない？」

葉月がそうお願いするが、事情がわかっていない遊火は首を傾げた。

言われたとおり、遊火は公園の滑り台の下に立ち、虚空に指をさすと、そこに無数の火の玉を集め、子犬の形にするや、それを抱え込んだ。

（やっぱりここからじゃ何も見えないや）

遊火は鬼火の一種であるため、自(みずか)らが仄(ほの)かに光を放っている。

しかし子犬を殺したと思われる犯人はあくまで人間であり、体を発光させることは出来ない。

逆光になって、子犬は影になるのがオチである。

「葉月さま、どうかしたんですか？」

戻ってきた遊火が葉月に尋ねる。
「遊火、もし暗い場所でものを見るとしたらどうする？」
「ものを見るとしたらですか？　昔で考えると月明かりでも結構見えるものでしたが、今は目が光に慣れていて、突然の暗闇では目が慣れるのに結構時間がかかると思いますから」
「そうなんだよね。爺様から暗い場所では本を読むなって言われてるし、それって目が悪くなるからでしょ？」
「昔は蝋燭の灯で書物を読んでいましたが、目が悪くなったからといって、めがねを使うという概念はなかったようです。それに、どちらかというとお天道様の下で読むといったほうがいいですね。自然の光のほうが目によかったですし」
遊火が言う自然の光とは太陽の光である。

電球が世に広まって、百三十年以上経つが、そのあいだ電灯の明るさは、時代や要素によって変わっていった。
そして人の目が捕らえる光の濃度も、時代によって変わってきている。
『月夜に提灯』という諺がある。
これは月明かりがある夜道に、灯りである提灯は必要ないという意味から、不必要なことのたとえなのだが、どこもかしこも光に満ちており、月の光は必要ないのかもしれない。

「――っと、早く帰らないと、弥生おねえちゃん、料理作ってるんだった」
葉月は思い出すや、急いで自転車を走らせた。
そんな葉月を人影が物陰から見ていた。

肆・強請

「引越し前だった？」
阿弥陀警部と大宮巡査が、遺体が発見されたアパートの住民に聞き込みをしていた時である。
「ええ、今週の終わりくらいに引っ越すといってましたよ」
話しているのは被害者の隣部屋に住む、４０代の男性である。
「失礼ですが、被害者が殺された時間、あなたはどこに？」
「会社にいましたよ。残業がありましたからね。あ、アリバイですか？　アリバイは会社のタイムシートに記入されていると思いますし、私が働いているところって、ここからだと電車で３０分以上はかかるんですよ」
詳しく調べると、確かに男性は三守が殺された日は会社で残業しており、帰ってきたのは今日の午前様である。

被害者の身元は三守怜子に間違いなく、殺された時間は、午前１１時～１２時の間と判明した。
その時間内、アパートに住んでいる住民に聞き込みをしているのだが――

「睡眠薬ですかね？」
大宮巡査が車の運転中、そう話をする。
「でも、薬物反応は出ていなかったし、死因は胸を一刺しされた出血多量によるショック死と判明してるでしょ？」
遺体の顔の皮が剥がされているため、そちらに目が行ってしまうが、死因は胸を刃渡り十五糎（センチ）の包丁で一突きされていると考えられている。
「つまり、犯人は被害者を殺した後、顔の皮を剥いだってことです

か？」
なんともまぁ狂ったことをと大宮巡査は続けた。
「被害者は誰かに恨まれてたんですかね？」
「あんなことをするくらいですから、よほどでしょう」
ふと、助手席に座っていた阿弥陀警部は、目の前で歩道を歩いている人影に目をやった。

人影は腰まで伸びた黒髪に、赤い雨合羽（レインコート）を着ている。
こんな晴れた日に？と阿弥陀警部は首を傾げながら、
「大宮くん、ちょっと車をゆっくりにしてもらっていいですかね？」
そう言われ、大宮巡査は首を傾げたが、言われたとおり、車をゆっくりと走らせる。
車は人影と並行し、過ぎ去っていく。
そして、阿弥陀警部はカーミラーで人影を確認すると、
「大宮くん、ちょっと停めてください」
そう言われ、大宮巡査は車を停めた。

「すみません。ちょっといいですかな？」
阿弥陀警部は車窓を開けると、そこから顔を覗かせ、女性を呼び止める。
「えっと、なんでしょうか？」
女性は不安そうな表情を浮かべながら尋ねた。
「いやいや、決して怪しいものじゃないですよ。わたし、警視庁の阿弥陀と申しましてね。ちょっとあなたを見てたら気になったので」
阿弥陀警部が笑いながら警察手帳を取り出して言う。女性は「はぁ」と首を傾げる。
「失礼ですけど、お名前は？」
「宝静暦（ほうじょうよみ）ですけど――」
女性――宝静暦がそう言うと、阿弥陀警部は身分証明書を見せてくださいと言った。

宝静は自分のバッグから赤い手帳を取り出し、それを阿弥陀警部に渡すと、「拝借します」といって、阿弥陀警部はその手帳を見た。

『身体障害者手帳』と書かれた手帳の裏には女性の顔写真が貼られている。

その写真に写った宝静は、マスクをつけていなかったが、普通の人よりも明らかに何かが違っていた―。

阿弥陀警部は少しばかり躊躇いながらも、

「すみませんが、そのマスクを外してくれませんかね？」

そう言われ、宝静は少しばかり躊躇ったが、やがて覚悟し、耳にかけた紐に手をやると、ゆっくりとマスクを外した。

そして、曝された素顔を見て、阿弥陀警部と大宮巡査は絶句した。

「もういいですか？」

宝静がそういうと、阿弥陀警部は我にかえるや、

「え、ええ。すみません。無理なことをさせてしまって」

そう言うと、阿弥陀警部は宝静に手帳を返す。

「いえ、この前も同じことをされましたし、普段からこんなマスクをしてますので、よくおばけだってからかわれて、もう慣れてるんです。この前だって……」

宝静は少しばかり顔を俯かせたまま、マスクを付け直した。

そして阿弥陀警部と大宮巡査に会釈すると、そのまま歩き始めていった。

「あ、阿弥陀警部？」

「顔が半分まで隠れたマスクでしたから、一見では怪しいと思ったんですけど、ちょっと失礼なことをしてしまいましたね」

「ちょっとどころじゃないと思いますよ。でも、あの女性、いったいどうしてあんな風になったんでしょうか？」

大宮巡査がそう言うと、

「大宮くん。ちょっとあの女性について調べたほうがいいかもしれませんね」
そう言われ、大宮巡査は首を傾げる。
「すこし気になるんですよね」
阿弥陀警部はそれ以上何も言わなかった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「信乃やぁ、信乃ちゃんやぁい」
信乃の祖父である鳴狗寺（みょうこうじ）の和尚が、母屋の中を探し歩いている。
「おう、小坊主や、信乃はしらんかえ？」
厨房で食事の準備をしていた修行僧に和尚は信乃の行方を尋ねた。
「信乃ちゃんでしたら、自分の部屋にいるんじゃないんですか？」
「そう思ったんじゃがな、部屋におらんのじゃよ。どこかに行くとは思えんし、携帯にもでらんからなぁ」
和尚が呆れた表情を浮かべる。

「ああ、確か駅前の本屋で新刊が出たから、それを買いにいったんじゃないんですかね？」
台所に入ってきた別の修行僧がそう言うと、「新刊？」と和尚は尋ねた。
「ほら、最近ＴＶでドラマ化されたまんがの新刊ですよ」
そう言われ、和尚は首を傾げた。
「中学二年にもなって漫画か？　来年は受験生じゃぞ？」
「いやいや、和尚さま。最近のまんがは侮（あなど）れませんよ。私も読みましたけど、けっこういいものでしたよ」
そう言われ、和尚は少しばかり読んでみようかと思った。

――その信乃は修行僧の言うとおり、福祠駅の近くにある書店の前で、先ほど買ったマンガ本が入った紙袋を手に持って、家路に付

こうとしたときだった。

「やーい、化け物！！」

目の前から子供の声が聞こえ、信乃はそちらを見やった。

「やーい、口裂け女！　口裂け女っ！！」

小学生くらいの男子二人が、からかうように女性に声をかけている

女性は反論せず、無視していた。

「そのマスクの下って、口が耳まで裂けてるんだろ？　ほら、裂けてねぇんなら証拠見せろよ」

女性の表情は平穏であったが、体が震えている。

それに見かねてか、信乃は徐に口笛を吹いた。

すると、周りから犬の唸り声が聞こえ始め、二匹の大型犬が小学生の前に、ゆっくりと歩み寄ってくる。

「な、なんだよ。こ、こっち来るなよ」

小学生が後退りしていくと、

「ウワァオオオオオオオオオオオオオオンッ！！」

と、二匹の犬は大声で吠えた。

小学生二人組はその咆哮に驚き、涙を浮かべながら、一目散に逃げていった。

女性は獰猛な二匹の犬が近くにいても、あまり驚きはしなかった。

「口裂け女は犬が嫌いって云うけどね？」

信乃はそう言いながら、女性に近付く。

「あ、あなたは？」

女性――宝静がそう尋ねたが、信乃は大型犬の一匹に近づいた。

「あ、あなた、あぶないわよ」

宝静が止めにはいったが、

「大丈夫。この子達は怖くなんてないから」

そう言いながら、信乃はゆっくりと犬に手を差し伸べた。

「くぅーん」と力のない鳴き声が聞こえた。
その声を発しているのは、ほかでもない、さきほど唸り声を挙げた二匹の大型犬である。
その二匹は頻りに尻尾を振っている。
「ごめんなさいね。ほら、飼い主のところに帰りなさい」
そう言うと、信乃が口笛を吹くと、二匹の犬はまるで何こともなかったかのように、飼い主の元へと帰っていった。

「も、もしかしてあなた……　あの子達を操ったの？」
宝静がそう尋ねると、
「私きれい？とかいって、脅してしまえばいいのに……　黙ってると余計付け込むわよ、ああいう何も考えてないバカは」
と信乃は宝静に言った。
「もう慣れちゃったから、云うのも面倒になっちゃってね」
宝静は諦めた様子でそう言うと、信乃は少しばかり表情を曇らせた。
「どうかしたの？」
「あなた、ここ最近、子犬を失ってない？」
そう尋ねられ、宝静は少しばかり驚いたが、答えるように頷いた。

「そう。でも、その子、あなたのこと好きだったって云ってるわよ」
信乃はそう言うと、鳴狗寺へと帰っていった。
そんな信乃を宝静は驚いた表情で見送っていた。

伍・雨音

――子犬が殺された事件発生から三日ほど経っていた。

「もう信じない！　あの天気予報、もう信じない！」

――と、稲妻神社の母屋玄関先で、葉月は愚痴を零していた。

その日の朝、ＴＶの天気予報では『夕方から小雨が降るでしょう』と報じられている。

葉月が福祠小学校の校門を出るときはまだ降っていなかったのだが、半分くらいを歩いたとき、まるでバケツをひっくり返したかのような豪雨が降りはじめた。

そのため、足早に帰ってきた葉月の服は、シャツが肌に引っ付いて、下に来ている服が透けて見えるほどにびしょ濡れである。

『小雨』という予報から、傘を持っていかず、また学校から借りることもしなかった葉月はごらんの有様だった。

葉月は自分の部屋に戻る前、洗面所からバスタオルを取り、体を拭きながら部屋に戻った。

濡れた服を脱ぎ、裸になるや、もう一度体を拭き、洗濯籠の中に服とタオルを投げ捨て、箪笥から新しい着替えを取り出し着替える。

ランドセルの中身を見ると、案の定、ノートやら、教科書がびしょ濡れである。

明日までに乾くかなぁと考える以前に、宿題どうしようとそちらの方が心配で、葉月はため息を吐いた。

家の中を歩くとまだ誰も中にはいなかった。

弥生と皐月はまだ学校で、拓蔵は事務所で仕事をしている。

一応神主なのだから、神職をしているのだろう。こういう時は邪

魔してはいけないというのが、この家のルールであった。
また、社務所と母屋は渡り廊下で繋がっているのだが、昼食等の休憩以外は行き交い出来ないように、母屋側の扉が締め切られている。
あくまで母屋はプライペート空間であるからだ。
外は土砂降りで、遊びに行くことも出来ず、またノートやらが濡れているため宿題も出来ない。
葉月は一人、居間でＴＶを見ることにした。

小一時間くらいして、葉月がＴＶに没頭している中、どこかからガタッという音が鳴った。
葉月はビクッと肩を窄め、音がしたほうを見やる。
本堂と庭が見える縁側は雨戸が閉められており、それが風で揺れ、音が鳴った……と、葉月は最初そう思ったが、
ガタガタガタ……と明らかに風が揺らしているものではない音がこだまする。
「だ、誰？」
葉月は不安そうな声でそう尋ねるが、誰も返事をしない。
「誰、誰かいるの？」
葉月はゆっくりと立ち上がり、雨戸に近付く。
そして、雨戸を開けようとすると、開いた隙間から、小さな手がニュッと入ってきた。
「……！！」
葉月は絶句し、雨戸を無理矢理閉じようとする。

「いたいっ！　いたいって！　葉月ちゃん、いたい！」
少女の悲鳴が聞こえ、葉月は閉じるのをやめた。
そして、ゆっくりと雨戸を開けると、そこには葉月と同じくらいの、白い髪をリボンで横に束ねた女の子が、挟まっていた手に息を吹きかけながら、葉月を睨みつけていた。

その手は痛々しく腫れ上がっている。
「は、浜路ちゃん？」
葉月は驚いた表情で言うと、すぐに傷の手当てをと救急箱を取りに行った。

「ひぃどいよぉ、葉月ちゃん、せっかくお使いで来たのにぃ」
縁側に座った浜路が、涙目で訴える。
「お使い？」と葉月は首を傾げながら、聞き返す。
「うん。おじいちゃんから、お寺の庭で生ってる梅の実がいい具合に育ったから、梅干用にどうかって」
そう言いながら、浜路はビニール袋の中身を広げて見せた。
その中には青く熟した梅の実が溢れんばかりに入っている。
「梅干は、まだ去年のが残ってるんだけど、でも爺様だったら、梅干より梅酒を作りそうだけどね」
葉月がそう言うと、「そっちのほうがあってるんじゃない？」と浜路は笑いながら言った。

「あ、葉月ちゃん、昨日ちょっと気になることがあったんだけど」
居間で寛いでいる浜路が、麦茶を持ってきた葉月にそういう。
「気になること？」
「うん。ほら、この前公園で捨て犬の惨殺事件があったでしょ？あれ、犯人わかったんだって」
浜路がそう言うと、葉月は身を乗り出す。
「それ、ほんとう？」
「うん。犯人は三守怜子っていう女の人。なんか近所でも有名な犬嫌いだったみたいだよ」
そうだとしても、犬を殺す理由にはならない。
「でも、子犬を殺したとき、みんな目撃してるっていうしなぁ」
「塾帰りの子がでしょ？　でも昨日、買い物のとき、ちょうどその

公園の前を通ったから、遊火にお願いして、事件当時と同じことしてもらったけど、人影が見えるくらいで、何をしているのかまでは全然見えなかった」

葉月がそう言うと、浜路がゆっくりと深呼吸する。

「もしさぁ、目撃される以前から、子犬が死んでいたとしたらどうする？」

そう言われ、葉月は少しばかり考えたが、答えが出なかった。

その質問があまりにも残酷に聞こえたからだ。

一思いに殺すのだって、想像したくないが、その死体を再び殺す。

そんな人外なことを犯人はしたのだろうかと……

「それにお姉ちゃんが、変なこといってたんだよね」

「――信乃さんが？」

浜路の姉は信乃である。

信乃と皐月が仲違いしているため、信乃が神社に来ること自体ほとんどないが、和尚や浜路はよく神社に来ることが多い。

「うん、昨日本屋に行った帰り、大きなマスクをした女性が、小学生にからかわれてたんだって」

「大きなマスク？」

葉月は一瞬、公園であった女性――宝静暦のことを思い浮かべた。

浜路は麦茶を飲み干すと、コップを卓袱台の上に置き、縁側から出て行く。

長靴を履いたとき、ふと何かを思い出すや、葉月を見やった。

「皐月さんって、中学校では剣道やってるの？」

そう訊かれ、葉月は首を横に振った。

「そうか」と浜路は残念そうにいう。それがどうかしたのかと葉月が尋ねると、

「お姉ちゃんがね、皐月さんと神様の力とかそういうのなしで、勝

負がしたいって」
浜路がそう言うと、葉月は不思議そうに首を傾げた。

その晩のことである。
稲妻神社の母屋にある居間では、阿弥陀警部と大宮巡査が鎮座していた。
用件は例によって例のごとくである。
写真に写った遺体は、顔の皮が剥がされているため、筋肉が剥き出しになっている。
とてもじゃないが見せられないと、阿弥陀警部は写真を裏返して、葉月に渡した。
葉月はその写真を自分の目の前に置き、一、二度ほど深呼吸すると、目を瞑り、ゆっくりと写真を摩るように手を動かし始めた。

「どうですかね？」
阿弥陀警部が尋ねると、葉月はゆっくりと写真から手をはなした。
一、二度ほど深呼吸し、ゆっくりと目を開いた。
「声が聞こえた」
「それはどんな感じでした？　男性？　それとも女性ですか？」
「女性みたいだったけど、あまり聞き取れなかった」
葉月が不安そうに言う。

「殺された被害者の身元はわかってるんじゃろ？」
「え、ええ。被害者は三守怜子――」
被害者の名前が出るや、葉月はガタッと身を乗り出した。
「ちょ、ちょっとどうしたの？」
突然のことで隣にいた弥生が驚く。
「葉月、少し落ち着きなさい」
拓蔵にそう言われ、葉月はハッと我にかえるや、姿勢を正した。

「葉月？　あんた、被害者のこと知ってるの？」
皐月が尋ねると、葉月は夕方、浜路から聴いた話を皆に説明した。
「浜路ちゃんがね……」
皐月は複雑な表情を浮かべる。
「確かに、その浜路という女の子が言っていたとおり、殺された三守怜子は犬嫌いだったという証言を得ています。近所で犬の鳴き声が聞こえると、騒音を起こしていたそうですから、犬を飼っている近辺住民から嫌われていたそうですよ」
大宮巡査がそう説明すると、
「それじゃ、子犬を殺したのも？」
弥生がそう言うと、
「でも、子犬が殺された公園と被害者のアパートは結構離れていて、特に騒音で訴えられていたという接点はないんですよね」
阿弥陀警部がうーんと唸りながら考える。
「目撃者は塾帰りの小学生。しかもその殆どが赤いレインコートの大きなマスクをした女性」
「大きなマスクですか？」
大宮巡査がそう言うと、皐月はどうかしたんですか？と尋ねた。
「いや、昨日現場から警視庁に戻るとき、歩道で大きなマスクをした女性に職務質問したんですよ」
大宮巡査はそう言いながら、阿弥陀警部を見やる。
「あぁ、ちょっと見た感じ不審でしたし、時期的にもインフルエンザや、花粉が流行ってるわけでもなかったんでね。いますごく後悔してますけど」
その言葉に三姉妹と拓蔵は首を傾げた。
「その女性の人、何かあったんですか？」
「いやぁ、どう説明したらいいかなぁ」

阿弥陀警部はああでもない、こうでもないといろいろ考え込む。
「スッキリせんなぁ、いったい何を見とるんじゃ？」
拓蔵が苛立ちを見せる。

「えっと、皆さん、『口唇口蓋裂（こうしんこうがいれつ）』って知ってますか？」
そう訊かれたが、誰も頷かなかった。
「先天性の障害で、口に異常があるものなんですけど、鼻の下……つまり、上唇がくっついていない障害なんですよ」
「ただ、この障害は本人が生まれてから成長するにしたがって、手術するんですけど、小学生を最後に女性は手術をしていないんです」
その言葉に、葉月は「どうして？」聞き返した。
「引っ越してるんです。両親の離婚で」
「つまり、手術費が出せなくなったということか？」
拓蔵がそう訊くと、阿弥陀警部は頷いた。

「女性の上唇は歪んでいて、顎もあまり綺麗ではなかったですね。おそらくその顔を見せないように大きなマスクをしていたんでしょうな」
「先天性とはいえ、きちんと手術をすれば治る病気じゃろ？　それに国から保険金が下りるはずじゃろうが」
拓蔵がそう言うと、大宮巡査が首を横に振った。

「それが、女性を引き取った父親は保険を払っていなかったらしくて、保険証も何もなかったそうなんです。風邪とかになっても、市販されている風邪薬でやり過ごしていたそうですから」
保険証があるとなしでは、病院で簡単な診察をしてもらっただけでも、保険が降りないため、金を取られてしまう。その額は、雲泥の差ともいえる。
「あと、その人、宝静暦っていうんですけど、『身体障害者手帳』を持ってたんですね。まぁ、口唇口蓋裂とそれに伴った軽度の言語

障害をもっていたらしいですから、手帳を持っていても可笑しくないんですけどね」

「なんか納得してませんね？」

弥生がそう言うと、

「つまり、女性が成人し、働くようになるまで、形成手術をしていなかったということなんですよ」

「恐らく、その宝静暦がマスクをしていたのは、素顔を隠すのと同時に、コンプレックスを隠していたからではないかという見解です」

「それがいつしか、みんなから『口裂け女』ってからかわれるようになっていた……」

葉月は阿弥陀警部と大宮巡査の説明を聞きながら、ウトウトと頭を揺らす。

霊視をした疲れからか、いつしか葉月は弥生の膝枕で眠りこけていた。

「でも、口裂け女って、整形手術に失敗し、それを苦に自殺した女性の霊だって話でしょ？」

弥生が呆れたようにいう。

「確かに、今でも整形手術で体を壊した人は何人もいるそうですからね」

「お前たちはそんなことせんじゃろうな？」

拓蔵が鋭い目で睨みつける。

「し、しないって、ただ……私の場合は、耳が聞こえるようになるんだったら、話は別なんだろうけど」

皐月が不安そうに言った。

皐月の耳は、普通の人よりも若干衰えている。

そのことを知っている拓蔵や弥生、阿弥陀警部と大宮巡査は何もいえなかった。

皐月はこのまま成長しても、自分の身形に関しては後悔しないだ

ろう。

しかし、耳が聞こえないとなると、少なからず人に迷惑をかけてしまう。

そのことが皐月にとっては不安であり、それと同時に、いつしかすべての音が聞こえなくなるかもしれないという恐怖心があった。

外から聞こえてくる雨音が、皐月の心情をうたうかのように、なんとも寂しげだった。

陸・兎口（前書き）

兎口（みつくち）：（『うぐち』とも）口唇裂（上唇）の俗称。兎の口に見えることからそう云われている。

陸・兎口

葉月と浜路が通っている福祠小学校の中庭には小さなウサギ小屋がある。

昼休み返上で飼育委員会の何人かが小屋の中を掃除していた。

その中には葉月の姿もあり、彼女は小屋の中にいるウサギを外に置いてあるゲージの中に入れていた。

ウサギの習性から、小屋の隅（すみ）にはいくつかの穴が掘り起こされている。

その穴は言うなればウサギの巣穴なのだが、掃除をするさい、その穴の中も確認するのも忘れない。

餌を食べる以外はその巣の中にいることが多いため、下手をすると、そこで子を産んでいる可能性もあるからだ。

「静原（しずはら）さん。穴の中見てください」

高いところの掃除をしていた六年生の新藤（しんどう）が、五年生の静原にお願いする。

静原はいくつかの穴の中を、懐中電灯で照らしながら覗きこんでいく。その中にはまだ隠れているウサギが巣の中で眠っていた。

刺激を与えてウサギを起こし、餌を見せながら、地上へと誘導していく。

――そうしていくうちに、静原はある穴の中を懐中電灯で照らした。

この小屋一番の大きなウサギが巣の中で眠っているのだが、妙に体が小さく感じられる。

静原は音を鳴らして起こそうとしたが、ウサギはまったく反応を見せない。

「どうかしたんですか？」

葉月が静原に尋ねると「ああ、黒川さん。ちょっと先生呼んできてくれない？」
飼育委員の顧問は、葉月の担任である鶴見（うつみ）先生である。

数分後、葉月は鶴見をウサギ小屋まで連れてきた。
「静原さん、どうかしたんですか？」
鶴見は腰を屈（かが）め、静原に尋ねる。
「それが、穴の中にウサギが入ってるんですけど、全然反応しないんです」
そう言われ、鶴見は懐中電灯で照らしながら、穴の中を覗きこんだ。
そして徐に手を突っ込み、ウサギの背中に触れたときだった。
まるで、生きていると思える温もりは感じられなかった――
鶴見は懐中電灯を静原に渡し、もう片方の手を穴の中に入れ、ウサギを取り出し、眼下に曝した。
そして、小屋の中で絹を裂くような悲鳴が響き渡った。

ウサギの口はまるでペンチか何かで潰されており、お腹が裂かれ、五臓六腑が剥き出しになっている。
その死体を見るに耐え切れず、静原は外に出るや、激しく嘔吐した。
「せ、先生！　いったい何があったんですか？」
外に出ていた新藤は何が起きたのか理解できず、小屋の中に入ってきた。
「し、新藤くん、見てはいけません」
鶴見が止めにはいる。

生き物を育てることで、命の大切さや尊さを学ぶという学習目的

で、学校は生き物の飼育を子供たちにさせている。
しかし、葉月の目の前に曝されているウサギの死体は、自然に死んだものではなく、明らかに殺されたものだ。
葉月は口を押さえながら、ゆっくりと外を見たときだった。
体育館近くにある道路側のフェンス越しに、大きなマスクをした女性がウサギ小屋をまるで睨みつけるように見ていた。

葉月はゾクッと悪寒を感じ、一瞬視線を逸らした。
そして再びフェンスを見たときには女性の姿はなかった。

ウサギ小屋の鍵は職員室に管理されているため、少なくとも一人は職員室に待機しているものなのだが、朝に五年生の静原が餌やりに、用務員の湯川と一緒にウサギ小屋に入っている。
そのときは飼育しているウサギ全7匹の確認を取っている。
最後に鍵を開けたのは先ほどであるため、犯人は少なくとも、午前中に鍵を開け、ウサギを殺害している。
二時間目と三時間目の間に中休みがあり、その時は触れ合えるようにと、ウサギ小屋を開放しており、その時も全部のウサギが巣の中から出ていたのを、見ていた2年生の担任である吉原が証言している。
つまり、殺すとすれば、三，四時間目、そして給食の時間にしかないのだ。

「葉月ちゃん、どう？　何かわかった？」
放課後、廊下の窓からウサギ小屋を見下ろしていた葉月に浜路が声をかける。
葉月はジッとウサギ小屋を凝視していたが、霊の気配も何も感じられなかった。
「霊視は出来ないの？」

そう浜路が尋ねるが、葉月は首を横に振った。
確かに、葉月の能力である霊視は便利であるが、殺されたのは人間ではなく動物である。
そもそも動物の言葉がわかれば、苦労はしない。
葉月はため息を吐いた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「ウサギ……？」
警視庁鑑識課の一室で、机に座って書類を見ていた湖西主任が、キョトンとした表情を浮かべながら、電話越しの拓蔵と会話している。
『いやな、葉月の学校でウサギの死体が発見されたそうなんじゃよ』
「生きとるんじゃから、死ぬのは当たり前じゃろ？」
『うんにゃ、誰かに殺されたと葉月はいっとるんじゃよ』
それを聞くや、湖西主任は聞き返した。

「いつ殺されたのかわからんのか？」
『それがわかれば、葉月も、学校側も苦労はせんじゃろ？』
確かにそうだと湖西主任はため息を吐いた。
『それと外でマスクをした女を見たといっておったがな』
「マスク？　阿弥陀がいっとる、宝静暦のことか？」
『いや、それじゃったら、葉月がその本人にあっとるからすぐにわかるじゃろうし、見かけたマスクの女は違うっていっとったよ』
湖西主任は携帯に耳を傾けながら、書類を見た。

（三守怜子を殺した犯人もそうだが、そもそも三守怜子はどうして家から離れた公園に捨てられている子犬を殺したんじゃろうか？）
湖西主任は三守怜子の検死結果が書かれた書類を読み耽る。
そしてひとつの項目に目をやった。

「おい、『手の甲に噛まれた傷あり』と書かれておるが、現場で遺体を見たときはそんなもんなかったぞ？」

近くにいる鑑識官に尋ねると、

「あ、はい。発見されたとき、被害者は包帯をしていましたから、すぐにわからなかったんです。検死の時に身につけているものを外しますので、その時にわかったんですよ」

それを聞くや、湖西主任は少し考え、

「その傷痕、先に殺された子犬の牙と照合してみるか？」

湖西主任はそう呟くや、椅子から立ち上がり、部屋を出て行った。

暗い夜道を塾帰りの小学生の女の子が一人で歩いている。

塾が家からさほど離れていないのと、両親が共働きのため、女の子は一人で帰るはめになっていた。

周りは薄暗く、街灯の明かりも弱々しく心許ない。

女の子は周りを警戒しながら、防犯ベルをギュッと握り締め、足早に帰っていたときだった。

曲がり角を曲がったとき、スーッと、女の子の目の前に女性が現れた。

女性は雨が降ってみないのに、赤い雨合羽を着ており、顔に大きなマスクをしている。

女の子は驚きながらも、女性から逃げるようにその場から離れ、間をおくや、全速力で走り去った。

女性からだいぶ離れたと思い、女の子は立ち止まるや、肩で息をする。

ゆっくりとうしろを見て、女性が追ってきていないとわかるや、ホッとした。

そして、前を見るや――――

「ねぇ？　わたし……きれい？」

先ほどの女性が女の子を見下ろしていた。

「ひぃっ！」

女の子は浮ついた悲鳴を挙げた。

「ねぇ？　わたし……きれい？」

女性は執拗に尋ねる。

「わ、わからない……」

「そんなわけないでしょ？　答えるだけでいいのよ？　ねぇ……わたし……　きれい？」

女の子はまるで無理矢理開けられたかのように

『きれい』――と答えてしまった。

女性はそれを聞くや、クスっと笑ったような雰囲気を漂わせながら、ゆっくりとマスクを取り始める。

女の子はその場から逃げようとしたが、恐怖で足が動かず、その場にへたりこんだ。

そして、曝け出された女性の素顔を見るや、悲鳴を挙げたとき――

ドスという鈍い音と、ピチャッと何かが飛び散った音が、暗い路地に小さく響いた。

翌朝、顔の皮を剥がされた女の子の死体が、無造作に遺棄されているのが発見された。

漆・焼痕

駅のホームで電車を待っていた宝静がふぅとため息をついた。
周りからひそひそと陰口を云われている気配がするが、彼女は気にはしなかった。
宝静の障害は生まれつきである。そのことに関して離別した母親を憎んではいない。
もちろん、父親に対しても恨んではいなかったが、出来れば最後まで治療をしてほしかった。
時期はずれの大きなマスクをしているだけで、変人扱いを受ける。
ましてや雨合羽（レインコート）を着た日にゃ、それこそ『口裂け女』と云われても否定できない。
小学生の頃はそれをネタにからかわれたりしたが、素顔を見せたら、それはそれで蔑視（べっし）されていた。

電車の発射ベルが聞こえ、ボーっとしていた宝静は慌てて電車に乗り込むと、ちょうどドアが閉まり、ゆっくりと電車は走り出した。
座席に座り、バックの中からスケジュール表を取り出し広げた。
宝静の身≪、≫形からして、殆どが事務関係の仕事なのだが、偶（たま）に人と接することがある。
会社の同僚や上司は宝静の顔のことを知ってはいるが、外から来た人は彼女を一瞥するや、気味悪がったり、あまり目を合わせようとはしない。
たとえば自分の顔が綺麗な状態だったら、どれだけよかっただろうか。
その歪んだ口元が整っていたら、こんな大きなマスクをしなくてもすんだのにと、宝静は多々思うことがあった。
しかし、それを形成する勇気がなかった。今働いている会社は知り合いの紹介であり、彼女の障害を理解してくれてはいるが、果た

してそれもいつまで持つのか……

このご時世、いつ馘首（クビ）になるかわからないのだ。そして再び彼女を雇ってくれるかどうかもわからない。

目の前に座っている女子高生二人がペチャクチャと喋っている。股を大きく開き、人目も憚（はばか）らずに大きな声で話しており、見るからにみっともない姿である。

「なに？　うちらになんか用？」

振り向くや否や、女子高生の一人が苛立った口調で宝静に声をかけた。

宝静は咄嗟に視線を逸らす。

「なに、小母（おば）さん、わたしたちになんか用なの？」

もう一人も喧嘩腰に話しかける。

用も何も、目の前に座っていた彼女たちが視界に入っていたのだから、それでいちゃもんつけるのはなんとも図々《ずうずう》しい。

そもそも宝静はまだ２０代半ばであり、少なくとも他人から小母さんといわれる年でもない。

「あ、あたしは……」

「だいたい小母さん、なにそれ、すんごいマジうけるんですけど」

女子高生の一人が、宝静の顔を指差す。

宝静は最初理解できなかったが、

「きゃはは、ほんとだぁ、なにそれ、ちょう気持ち悪いんですけど」

もう一人もケラケラと嘲笑（ちょうしょう）する。

宝静がつけている大きなマスクを指差しながら哂っているのだ。

「小母さんさぁ、もしかして、ひとに見せられないくらいブスなんじゃない？」

「いえてる。うちらの視界に入らないでくれない？」

暴言に耐え切れず、宝静はゆっくりと立ち上がり、席を離れた。

さいわい、他にも座れる場所があったため、そこに座った。

「ねぇ、お母さん。あの人、大きなマスクしてるよ」
隣の座椅子に座っている子供がそう言うと、母親が「へ、変なことをいうんじゃありません」といい、宝静から子供が見えないようにする。
宝静は少しため息をつくと、バッグから折り紙を取り出し、テキパキと折り進めていく。
そして出来上がったのは『ウサギ』である。
それを先ほどの男の子がジッと宝静を見ていた。
「ほしいの？」
宝静がそう尋ねると、男の子は答えるように頷いた。
「だめですよ」と母親が止めにはいったが、
「いいんですよ。それに何回も作ってるから、家に何個も置いてあるんです」
そう言うと、宝静は先ほど作ったウサギを男の子に渡した。

「ねぇ、作り方教えて」
いつの間にか宝静の周りには子供が集まっていたが、『＊＊駅～っ！　＊＊駅～っ！』という車内アナウンスが聞こえるや、
「ごめんなさい。わたしここで降りなきゃいけないの」
宝静はバッグを肩にかけ、子供たちに頭を下げるや、電車を降りた。
子供たちは頬を膨らましながら、文句を言っているのが聞こえたが、電車が走り出すと、その声も次第にやんでいった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

昨日（さくじつ）、ウサギ小屋で事件があったこともあり、ウサギ小屋には飼育委員以外は入ることが出来なくなっていた。
中休みのあいだ、低学年の子供たちは教室からジッとウサギ小屋

を見たり、中には、朝早く学校に来て、飼育委員が餌やりに入るすきを盗んで、入ろうとした児童までいる始末であった。

昼休み、葉月はウサギ小屋で見たマスクを被った女がいたフェンスのところを、浜路と一緒にあたりを調べていた。

「ねぇ、なにかわかった？」

葉月が尋ねると、浜路は鼻をヒクヒクと頻りに動かす。

信乃同様、鳴狗家の血筋は生まれつき、鼻が利く。それは犬にも勝らないものであった。

「ちょっとまって、微(かす)かにだけど血の臭(にお)いがする」

浜路はそう言いながら、ゆっくりと体育館の裏側に回った。

日陰となっているそこは、梅雨時とはいえ、生暖かいこの時期でさえ、立っているだけで身震いがするほどに冷たく、薄着をしていた葉月は体を震わせた。

浜路はまるで警察犬のように鼻をヒクつかせ、体育館の下を見やるや、しゃがみこみ、手を突っ込むと、何かに当たった。

葉月に覗くようにと促し、葉月はしゃがみこんで中を見ると、そこには小さな鋏が捨てられていた。

浜路はそれを手に取ろうとすると、葉月がそれを止め、ポケットからハンカチを取り出し、それに包むように鋏を取った。

「浜路ちゃん、なにかわかる？」

葉月はそう尋ねながら、浜路に鋏を見せた。

浜路は鼻をピクつかせ、臭いを嗅ぐ。

「血の臭いがする。たぶん、この臭いだと思うよ」

「何の臭いかわかる？」

そう尋ねたが、浜路は首を横に振った。

「獣みたいな血の臭いだけど、さすがに特定はちょっとね」

「湖西のおじいちゃんに調べてもらおうかな？」

そう考えたが、殺人でない以上、刑事部が動くとは思えない。

「ちょ、ちょっとまって、その鋏……　なんか可笑しくない？」
浜路はそう言うや、鋏の刃を凝視する。
「これ、もしかしたら、前《、》にも使ってるかもしれない」
「そりゃ、鋏なんだから切ることに……」
葉月も何かに気付き、言葉を止めた。

鋏の刃の一部分が錆（さび）ている。
今は梅雨であるため、雨が頻繁に降ってはいるが、ウサギが殺された日からこの時間まで、雨が降ってはいなかった。
錆は空気や湿気などの作用で、金属表面に生じる酸化物や炭酸塩などの皮膜である。
ここは日陰で風通りがいい。いくらなんでも一日で錆（さ）びるとは思えなかった。

葉月はあたりを警戒する。
そして、徐に目を瞑り、うわごとを呟いた。
「何か云ってるの？」
浜路がそう尋ねると、
「誰かがここで鋏を慌てて捨てていったって」
葉月はそう言いながら、フェンスを指差した。
「警察に調べてもらったほうがいいんじゃない？　もしかしたら、ウサギ小屋で見た女の人って、逃げていくときのを見てたんだよ」
浜路はそういうが、葉月はそうなのだろうか？と考えていた。

逃げるとすれば、一目散に逃げるはずである。そもそも、どうやって人の目に触れずに入れたのか。
ウサギ小屋は中庭にあり、周りは校舎や体育館である。
そしてなにより、教室があるため、誰かが外を見ている可能性だってある。

しかしながら、学校内にいる全員に尋ねると、誰も不審な人を見ていないという。

葉月は鋏をハンカチに包み、ポケットの中に仕舞った。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

稲妻神社母屋の居間には、拓蔵と湖西主任の姿があった。

「珍しいな、あんたがうちに来るなんて」

拓蔵はワンカップ酒を飲みながら尋ねる。

「葉月ちゃんはおらんのかえ？」

「なんじゃ？　葉月に用があったんか？　生憎（あいにく）じゃが、まだ学校から帰ってきとらんよ」

拓蔵はそう言いながら、うしろにある掛け時計を親指で指した。

時刻は午後４時である。

「もうそろそろしたら帰ってくるじゃろ？　ところで、なんの用なんじゃ？」

「ちょっと葉月ちゃんに霊視してもらおうと思ったんじゃよ」

湖西主任はそう言いながら、被害者である三守怜子の遺体が写った写真を見せた。

「これは……　確か、阿弥陀警部がこの前持ってきた写真じゃないか？」

「ああ、そうなんじゃがな、もう一度霊視してもらおうと思ったんじゃよ」

湖西主任はそういうが、拓蔵は首を傾げ、写真を凝視する。

「実はな、昨日の晩、お前から葉月ちゃんが通ってる学校でウサギの事件があったという電話をもろうたとき、三守怜子の検死結果を見とったんじゃよ。それで気付いたんじゃが、手に噛まれた痕があるという診断結果だったんよ」

「噛まれた痕？」
拓蔵がそう尋ねると、湖西主任はトランクから、人間の手の模型と、犬のような牙がある歯型の模型を取り出した。

「これが先日殺された三守怜子と同じくらいの形をした手の模型」
そう言うや、湖西主任は手の模型を持ち、説明する。
その手の甲には“赤い点”が四ヶ所、線を四角く結ぶかのようにつけられている。
「そしてこれが葉月ちゃんが会ったという、宝静暦がいた公園に捨てられ、何者かに殺されていた子犬の歯型」
そう説明しながら、犬の歯型を使い、手の甲を噛み付かせるように挟んだ。

――すると、四つの赤い点が牙の先と綺麗に合わさった。

「これは……」
さすがの拓蔵も驚いた表情を浮かべる。
「偶然にしては出来すぎじゃろ？　このことで阿弥陀たちにお願いして、近隣住民に聞き込みをしてもらったんじゃがな、一致したんじゃよ。三守怜子が手に包帯した日と、子犬が殺された日が」
「それじゃ、子犬を殺した犯人は、浜路の云っていた通り三守怜子だったということか」
しかし、そのことは警察も知っていたはずである。
そのことを指摘すると、
「そもそも、あの公園でよく見かけられていたのは、マスクをした女という証言だけだった。それで最初は宝静暦が疑われて、彼女の事情聴取をしておったから、初動捜査が可笑しくなってたんじゃな」
「マスクを？　それじゃ、三守怜子も……」
「していたと推測してもいいじゃろうな。そして顔の皮が剥がされていた理由も……」

湖西主任が言葉を止めた。

――ちょうど神社の近くを取っていく小学生の声が居間まで聞こえてきたのだ。

「葉月ちゃんはもうそろそろ帰ってくるんじゃったな」

「そうなるな。別に習い事をさせているわけでもないし」

そう話しながら待てども、時計は午後五時を回った。

時計を見ていた湖西主任が苛立ちを見せる。

それを見ていた拓蔵が「少し、遅すぎるな」と、表情を曇らせた。

「そうか？　どうせ寄り道でもしとるんじゃないのか？」

「弥生や皐月ならそうかもしれんが、葉月は一度まっすぐ家に帰ってきて、宿題してから遊びに出かけるんじゃよ。寄り道は殆どしたことがない」

「居残りでもしとるんじゃないか？」

そうなのだろうかと拓蔵は思ったが、午後6時になっても帰ってこなかった。

捌・雨音

葉月は一人、殺された子犬がいた公園の滑り台の下で静かに目を瞑っていた。

そしてゆっくりと目を開き、公園一帯をぐるりと凝視する。

見えたのは子供やら、大人の男性やら、人ならぬものであったが、彼らからは殺意を感じられなかった。

葉月はポケットからハンカチを取り出し、包んでいた鋏を見る。

若干、鋏から怨念を感じ取っていたからだ。人の怨は、ものにも宿るといわれている。

これは付喪神（つくもがみ）とよばれるもので、基本的には長く使われた道具になんらかの不思議な力が宿ったものとされている。

大切に使われた道具はそのものに恩義を返すと云われ、逆に粗末に扱われた道具は禍（わざわい）を齎（もたら）すといわれている。

その後者による念を感じたが、その鋏はさほど古いものではなかった。

「あら？」

声が聞こえ、葉月が振り向くと、そこには宝静がいた。

「おねえさん？」

「どうしたの？　そんな怖い顔して」

宝静が尋ねると、葉月はふと確認するかのように鋏を見せた。

「この鋏がどうかしたの？」

「おねえさん、この鋏に見覚えある？」

葉月が尋ねると、宝静は首を小さく横に振った。

「でも、こんなに刃をボロボロにしたんじゃ、鋏がかわいそうじゃない？」

宝静は鋏の刃を指差しながら言った。鋏の刃がボロボロになっている。

葉月が手に持っているのは、小学校で使うような文房具としての鋏だ。

布を切る『洋裁バサミ』、枝を切る『枝切りバサミ』、金属を切る『金切りバサミ』と、要素によって様々な鋏がある。

それらは専用に作られているため、同じ鋏といえど、使えるものではなかった。

「こんな雑な使われ方してたら、ものがかわいそうでしょ？」

そういうと、宝静はバッグからペンケースを取り出し、ひろげて見せた。

「ほら、わたしの鋏、お気に入りだったから、小学生のときから使ってるの」

そういうや、ペンケースの中に入っていた鋏を見せた。

綺麗に仕舞われているため、錆一つなく、刃もボロボロにはなっていない。

「それ、葉月ちゃんの？」

宝静が尋ねると、葉月は首を横に振った。

それにこれを見せて、宝静に知らないかと尋ねているため、葉月のものではない。

「学校の体育館にあったんだ」

「なんでそんなところに？」

「多分だけど、犯人はその鋏を使って、おねえさんが可愛がっていた犬を殺したんだと思う」

それを聞くや、宝静はギョッとする。

「でも、犯人は捕まったって」

「……殺されたって」

葉月の言葉に、宝静は鸚鵡（オウム）返しする。

「それと昨日学校のウサギが誰かに殺されて、その鋏にその血液が付着してるかもしれない」
「錆付いているところがそれ……ってこと？」
葉月は答えるように頷く。
「でも、どうしてあの子は殺されなきゃいけなかったのかしら」
葉月もその事が気になっていた。
殺された三守怜子の手には、犬に噛まれた痕があり、それがこの公園で発見された子犬の歯形と一致している。
しかしながら、それなら殺さなくてもいいはずである。
――そもそもこの鋏がウサギを殺したものかどうかもわからないのだ……

葉月はふと空を見上げた。
どんよりとした雲が流れている。
そしてポツポツと雨が降り始めた。

「そろそろ帰らないと、お父さんとお母さんが心配するんじゃない？」
そう訊かれ、葉月は宝静を見上げた。ふと黒い影が二人の間にすり抜ける。
――いま、誰か通ったような……
葉月はそう思いながら、公園一帯を凝視する。
近くにいるのは宝静ただ一人である。それ以外の人の気配がするとは思えなかった。
「どうかしたの？」
宝静が尋ねる。
「おねえさん、この公園でなんか嫌なこととか聞いてない？」
「いやなこと？　べつに怖い話とかないわよ？」
それは葉月も公園にいる浮遊霊を見ていればわかる。
怖い感じがしないのだ。もっとも霊感に敏感な葉月であるため、

凝視すれば霊の善悪がわかる。

どこかで雷が落ち、ブレーカーがおちたのか、公園の街灯がフッと消えた。

あたりは薄暗く、気味が悪い。

「お、おねえさんいる？」

葉月がそう声をかけると――

水に濡れた足音が、葉月の背後（うしろ）から、ピチャリ、ピチャリと聞こえてきた。

「おねえさん？」と葉月が振り返った時だった。

雷が再び鳴り、その光が人影を映し出し、葉月は悲鳴を挙げた。

「あ、ああ……」

葉月は怯（おび）えた表情で後退りする。

目の前にいる女は宝静と同じく大きなマスクをしている。

しかし、隙間から覗き見える相貌は、とても『人』のように暖かい光は発していなかった。

「ねぇ？　わたし……きれい？」

女がそう尋ねると、

「わ、わからない」

葉月はおびえた表情で首を激しく横に振る。

「ただ答えるだけでいいのよ？　ねぇ、わたし……きれい？」

「わからない！　わたしはあなたがきれいだとか、そんなのわかんない！！」

葉月は目を瞑ろうとしたが、まるでこじ開けられているかのように、瞑ることが出来なかった。

そして体が思うように動かず、女は顔を近づける。

「ねぇ？　わたし……きれい？」

「だから！　わたしはあなたがきれいだとか、そんなのわかんない」
葉月がそういうと、女は葉月を掴みかかる。
「いいから言いなさい！　わたしがきれいだと」
「き……　れ……」
葉月は無理矢理口をひろげられる。

「わ、わたしは……　あなたがきれいだなんて絶対思わない！」
予想外の言葉に、女は目を疑った。
途端、葉月を縛り付けていた何かが解け、葉月はその場に跪き、激しく咳き込んだ。
そして、キッと女を睨みつけた。
「わたしはあなたみたいに、無理矢理人に言わせたきれいじゃ、きれいだなんて絶対思わない！」
「な、なにを？」
「人がきれいだって思うことは、その人が素直な気持ちで思うことなの！　他人から無理矢理言わされた言葉なんて本心じゃない！　ましてや人に言わせる言葉は、ほんとうにあなたがきれいだと思っていうことじゃない！」
葉月の言葉に、女はわなわなと体を震わせた。

「わたしは……　わたしは……」
女は震え、うわごとを発する。
「葉月ちゃんの言うとおり、人に無理やり言わせた言葉は本当の言葉なんかじゃない」
宝静が静かに葉月に歩み寄り、女を見やった。
「わたしもあなたみたいに大きなマスクをしてるし、きれいになりたいと思わなかったことはない。でも、人を脅してまでいわせたいと思ったことはない」
宝静がそういうと、
「あなたに……　何がわかるって言うのよ！　私と同じくせに！

わたしとぉ」
女は隠し持っていた鎌を振りかざし、宝静を切りつけた。
宝静の腕からは血が流れ落ちている。

「おねえさん？」
葉月がそう呼びかける。
「あなたも……　あなたたちもわたしと同じふうにしてあげるわ」
そういうや、女は再び鎌を振りかざし、葉月を切りつけようとしたときだった。

――金属が当たった音が、公園内に響き渡った。
「皐月おね……」
葉月は自分を庇ってくれたのが皐月だと思い、そう云おうとしたが、目の前にいるのは意外な人物だった。
「し、信乃さん？」
目の前にいたのは、女の鎌を長刀で受け止めていた信乃であった。
その信乃は女を睨みつけている。
「一刀・戦風扇（そよかぜのおうぎ）」
信乃は刀を縦横無尽に切りつけたが、女はそれを避け、間をあけた。

「信乃さん、どうして？」
「別にあんたを助ける義理はないけど、助けなかったら浜路がうるさいだろうし」
信乃はあまり葉月を見ようとはしなかった。
「あいつ？　学校で飼ってたウサギを殺した犯人って？」
「わ、わからない……　でも、わたしがウサギ小屋から外のフェンスを見たときに学校を見てたの、あの人だった」
葉月はそう言いながら、女を指差した。
「そこで倒れている人から、殺された子犬の念が感じられるけど、

すごく暖かい匂いがして、気持ちがいい」

そう言いながら、信乃は少しばかり目を細めた。

――が、次の瞬間、カッと目を見開き、女を見やった。

「……だけど、あいつからは嫌なにおいしかしない。殺された動物の怨念の臭いしか」

「何をわけわからないこと云ってるのよ？　ねぇ、あなた、わたし……きれい？」

女がそう訊くと、

「ええ……　きれいでしょうね？」

信乃がそう答えると、葉月は驚いた表情を浮かべ、女は勝ち誇ったような表情を浮かべた。

「そうでしょ？　わたしってきれいだからね？　あなた見る目があるわ！　そこのガキなんかわたしのことをきれいだとは思わなかったみたいだからね」

女はケラケラと高笑いする。

「吐き気がするくらい不細工すぎて、笑っちゃうくらいにきれいだわっ！！」

信乃がそう告げると、女は一度、戸惑いの表情を浮かべたが、その言葉を理解すると信乃を睨みつけた。

「いま……なんていったの？」

「あれ？　あんた皐月と一緒で聾なわけ？　それとも馬の耳に念仏？　まさか自分が本当にきれいだなんて、本気で思ってたわけ？」

信乃がクスリと笑みを浮かべる。

「あんたからは即席ラーメンやスナック菓子、チョコレートに炭酸飲料、お肉の臭いもするわね……　とてもじゃないけど、栄養バランスが悪すぎる」

信乃は女を指差しながら言い放った。

「それとあまり運動してないでしょ？　そんなんできれいだなんて、月とすっぽん、自惚れるのも甚だしいわっ！！」

「あ、あんたなんかに何がわかるのよぉっ！！」
女はそう言いながら、信乃を切りつける。
「本当のきれいっていうのはね、死ぬ気で努力するものじゃなく、その人にあった体系を維持することが最低限のきれいなのよ。無理なダイエットで体を狂わせ、卑怯な手を使った偽りのきれいなんて、わたしは心からきれいだなんて思わない！！」
信乃はそう言うや、鎌を避け、女を刀で切りつけた。
「閻獄第一条三項において、動物を殺めたものは『等活地獄・瓮熟処』へと連行する！」
信乃がそう告げるや、どこからかお札が現れ、女の額に貼り付けられた。
「い、いや……　いやぁあああああああああっ！！」
女の断末魔が聞こえ、女は地獄へと送られていった。
「は、葉月？」
心配になって探していた皐月が公園にいた葉月を見つけ駆け寄ってきた。
「皐月おねえちゃん？」
葉月も皐月に気付き、引き攣った笑みを零しながら尋ねる。
「その人が宝静暦？」
皐月は近くに倒れていた宝静を見ながら、葉月に尋ねた。
「それじゃ、この人が例の口裂け女……」
「違う、本物の口裂け女なら、さっき信乃さんが――」
葉月は信乃を指差しながら、説明する。
「――信乃が？」
皐月はどうして信乃がここにいるのか、まだ理解できていなかった。
「信乃さんが助けてくれなかったら、わたし殺されてたかもしれな

い」
「あ、あんた、また危険な……」
「ああ、もう！　助かったんだからいいでしょ？」
信乃がそう言うと、皐月と葉月は彼女を見やった。

「それに、ちゃんと礼状を言いつけて、地獄に送ったから、心配しなくてもいいわよ」
皐月は信乃が妖怪を恨んでいることを知っている。
だからこそ、礼状を言いつけ、きちんと執行人の仕事をしたことが不思議と信じられなかった。
「そうしないと、この子が後で嫌な思いをすると思っただけ」
信乃がそういうや、皐月は笑みを浮かべた。
「な、なによ？」
「いや、なんでもない。ありがとうね、信乃。葉月とこの人を助けてくれて」
皐月は気を失って倒れている宝静を見やる。

「別に頼まれたから助けたまでで……」
信乃は言葉を濁らせる。
皐月と葉月が信乃を凝視し、耐えられなくなった信乃は
「ああ、わたしもう帰るわ」
苛立った声を放ち、信乃がその場を去ろうとしたときだった。
「信乃さん……」
葉月が呼び止め、振り返った信乃は「なに？」と尋ねると、
「助けてくれて、ありがとう」
葉月は笑みを浮かべながら、お礼を言った。
「お礼だったら、わたしじゃなくって、浜路に言ってあげて」
信乃はそう言うと、凝視しないとわからないほどに小さく笑みを浮かべ、消えた。
信乃が去った公園には鈴の音が響き渡った。

「皐月おねえちゃん、どうかしたの？」
声をかけられた皐月は葉月を見下ろす。
「ううん、なんでもない。それじゃ、阿弥陀警部たちに連絡して、この人を神社に運んでもらおう。一応訊きたいこともあるらしいから」
そう言われ、葉月は首を傾げたが、了解するように頷いた。

『信乃……　あんたは何も変わってない。初めて会った六年前からずっとね』
皐月はそう頭の中で呟きながら、背筋を伸ばした。

玖・伝言

目を覚ました宝静の目に飛び込んできたのは、昇ってきた朝日がちょうど本堂の窓から差し込み、それが天井に描かれている稲穂が照らされている景色だった。

その景色はまるで大きく実った稲穂が茂る田園の中に、宝静は自分がいるかのような錯覚に陥る。

宝静は少しばかり目を細め、その景色を眺めていた。

本堂の扉が開き、宝静は音がしたほうに振り返った。

「気分はどうですか？」

部屋に入ってきた葉月が宝静に尋ねる。

「葉月……ちゃん？　それじゃここは」

宝静は頻りに首を動かし、再び本堂を見渡した。

「わたしのおうち。ほら、初めてあったとき――」

葉月は自分の家が神社であることを、宝静と初めて会った時に説明している。

「……っ！　そうだ！　あの女の人は？」

公園で襲われたことを思い出した宝静は、葉月に詰め寄った。

「心配しなくても、ちゃんと連《、》行されましたから大丈夫ですよ」

本堂に入ってきた阿弥陀警部が宝静に頭を下げる。

「あなたは……いつぞやの」

「おや、覚えてましたか？」

そう訊かれ、宝静は頷いた。

「でも、警察の人がどうしてここに？」

宝静は葉月と阿弥陀警部を交互に見やった。

「一応先に説明しときますね。殺された三守怜子が引っ越すはずだった部屋を調べてもらったんですよ。先に荷物だけ運び込んでいたみたいで――」

阿弥陀警部はそう言いながら、小さな袋に入った薬を見せた。

それには『プロスタンディン軟膏』と書かれているが、知識のない葉月と宝静には何に使う薬なのかさっぱりであった。

「これは火傷の薬みたいで、結構酷い症状の場合に使うものなんだそうです」

「つまり……　殺された三守怜子は火傷を負っていた？」

葉月が確認するように尋ねると、

「ええ。まぁ、それがどこなのか……犯人がしたことに意味してるわけですけどね」

「そんなことを訊いても、葉月はあの晩、写真を裏返しで見せられとるから、遺体自体は見とらんじゃろ？」

拓蔵と湖西主任が本堂に入ってくる。

「あんたが宝静暦さんかえ？」

湖西主任が尋ねると、宝静は頷いた。

「阿弥陀、この前発見された女の子おったじゃろ？　路地で通り魔に遭った」

湖西主任が阿弥陀警部にそう尋ねる。

「あれな？　三守怜子が殺された時に使われた凶器と刃渡りが一緒だったんじゃよ。それともうひとつ」

今度は葉月を見やり、

「ウサギを殺した凶器と思われる鋏から、人間のものとは違う血液反応が出た。しかもふたつな」

「ひとつは間違いなくウサギ……　もうひとつは公園であんたが世話をしていた子犬の血液だったんじゃよ。血液がなくとも、遺体からＤＮＡ採取できるからな」

拓蔵が説明すると、宝静は驚いた表情を浮かべた。ＤＮＡは別に血液からでなくても採取できる。

「しかし、ここでひとつおかしな点が出来るんですよね？」

阿弥陀警部がそう言うと、葉月と宝静は首を傾げた。

「子犬を殺したのは三守怜子。でも、その三守怜子は子犬を殺した翌日に死んでいる。それで発見された鋏ですけど……　一体誰がウサギを殺したんでしょうかね？」

「それは、その三守怜子っていう人を殺した犯人じゃ？」

宝静がそう尋ねると、

「部屋の中は蛻の殻で、事務用品すらなかったんですよ」

「……っ？　阿弥陀警部、子犬とウサギを殺したのが三守怜子……だったとして、それじゃ、その三守怜子を殺したのは？」

葉月は何かに気付き、怯えた表情で尋ねた。

「三守怜子の主治医に尋ねたところ――　彼女、重度の火傷を負っていたそうなんですよ。しかも顔半分」

「発見されたとき、三守怜子の遺体には顔の皮が剥がされていた。本当の死因は胸を一刺しされた出血多量によるショック死という診断なんじゃが……　それだけじゃったら、自分の顔を剥がさんでもいいと思うがな？」

宝静は湖西主任の言葉に耳を疑った。

「宝静さん……　あんたならわかるんじゃないのか？」

「わたしなら？　それはいったいどういう」

「同じ症状を持っておるあんたならな」

「おねえさんと同じって――　まさか、その人もおねえさんと同じ」

葉月は宝静を見やる。

宝静は静かにつけていたマスクを外した。

上唇に切れ目があり、顎は歪んでいる。

「殺された三守怜子も上唇が裂けておったよ」
「それに加えて重度の火傷。調べたところ、その火傷は子供のとき、両親の喧嘩で誤って薬缶（ヤカン）のお湯を顔中に当てられたそうなんですよ」
それを聞くや、宝静は少しばかり躊躇った表情で、
「それじゃ、あの公園にいた『口裂け女』って……」
宝静は最初あまりにも自分の考えが世迷言過ぎると思っていた。
それに昨晩のことも実は夢ではないのかという考えもあったが、
「でも、子供のときに火傷を負っていたとしたら――それじゃ、今までずっとマスクをしていたってこと？」
「そもそも――学校すら行ってなかったようですよ。一応、取り入れ先の小中学校に問い合わせてみましたけど、名前だけあって、一度も登校してなかったようです」
阿弥陀警部の話に、宝静は「一度も」と繰り返した。
「火傷を隠すために皮を剥いだのか、もしくは口唇裂（こうしんれつ）であったこと自体が彼女は醜（みにく）く思っていたんでしょうな」
「それとな、どうして被害者である三守があんたを陥れようとしたのか、そもそも接点すらなかったわけやろ？」
「え、ええ。でも、どうして彼女はわたしを？」
「あんた、羨むっていう意味答えられるか？」
「えっと、憧れるでしたよね？」
「もうひとつの意味で、妬むという意味合いもあるんじゃよ。つまり三守は自分と同じ大きなマスクをしているあんたが、羨ましかったというわけじゃな」
「意味がわからない」
湖西主任の説明を聞きながら、葉月は怪訝な表情を浮かべる。
「いや、葉月さん。ずっと閉じ篭ってる人からすれば、自分と同じはずなのに違うことが出来る人を羨むものなんですよ」
阿弥陀警部がそう言うと、

「わたしだって、ずっとこの病気がどれだけいやか、これのせいで何回いじめられてきたか……　でも、理解してくれる人がいたから私は外に出れたんです。――彼女にはそういう人はいなかったんですか？」

宝静がそう阿弥陀警部と湖西主任に尋ねる。

「あんたもうすうす気付いとるじゃろ？　口裂け女がどうして自分の顔の皮を剥いだのか」

「それは火傷した痕を見せたくなかったんじゃないの？」

「彼女が火傷を負ったのは子供のとき。きちんした治療をしておれば、子供の時期に治っておるはずじゃろ？　そしてその原因は両親の喧嘩……」

それを聴くや、宝静は心当りがあるかのように俯いた。

「口裂け女の起源は一九七九年にあった噂話からではなく、江戸時代からと言われておってな。たとえそれが本物じゃなかったにしても、時代が時代だけに、今よりも酷な扱いを受け取ったと思うぞ」

「名前はなくとも、先天的な病は昔からあるからな。ただやはり今よりも理解されなかったと考えたほうがいいかもしれん」

湖西主任はゆっくりと宝静の肩を叩いた。

「もう一度形成手術を受ける気はないか？　ずっと出来なかったんじゃろ？」

そう訊かれ、宝静は一瞬途惑った表情を見せた。

「もしかすると、三守がウサギを殺したのは、自分が宝静と同じだということを葉月に教えたかったのかも知れんな」

「口唇裂は別名『兎唇』とも言われておるからな」

だとしてもわざわざ兎を殺さなくてもと、葉月は言った。

「もしかしたらじゃが、女の子を殺したのは口裂け女で、ウサギを殺したのは本人の意思だった」

「彼女の手の甲についていた噛み傷が殺された子犬の歯型と一致し

たのも頷けられる。激情し、持っていた鋏で犬を殺した。そこを塾帰りの小学生に見られたが、背格好が宝静と一緒じゃったから、疑われなかったということじゃ」

それを聞くや、葉月はふと違和感を覚える。

「でも、それじゃ本人は誰に殺されたの？」

「凶器と思われるものは発見されていない。そして顔の皮が剥がされ遺体を身元不明のものにしようとした。しかし近隣住民からの証言で、部屋にいる人間の身元は割り出されている。殺し方が如何せん回りくどいように見えて、実はすぐに見つかるようにしていた」

「つまり犯人は『すぐに身元がわかるようにした』んじゃよ」

「い、言ってることがわからない」

「宝静と違い、人に会うことを嫌っていた三守が出て行くとすれば。人が出歩かない夜が殆どでしょうけど、殺された日。一度だけ朝の時間に隣人が挨拶を交わしていたらしいですよ。そして、その後に大きな物音がし、気になった隣人が部屋に入ると三守は殺されていた」

それを聞くや、葉月は目を大きく開いた。

「部屋中を調べたが、部屋は荒らされておらんかったし、玄関には隣人が近くにおったから、逃げるとしたら窓からじゃろ？　じゃが、窓のサッシには泥がついておらんかった」

「そして、人が逃げていくのを見た人もいない。通報を受け、わたしたち警察が現場に駆けつけ、捜索をしていた時も、警察以外誰一人出入りすることはなかった。つまりですよ？　殺された三守怜子が隣人と挨拶を交わし、部屋に入ってから、誰も部屋の出入りはしていないんですよ」

「もしかしたら、その隣人が嘘をついてるんじゃ？」

「わたしたちも最初そう思いましたけどね。凶器に使われた包丁が見つかっていませんし、死亡推定時刻は午前１１時。そしてわたし

たちが通報を受けたのがお昼頃、確か１２時を回ったくらいですかね？　その間に包丁を捨てることは可能でしょうけど、隣人はサンダルを履いてましたから、裸足なんですよ」

「それがなんなんですか？」

「わたしたち警察は殺人や強盗などが起きれば、指紋を採取するんですけど、その時被害者以外の指紋が検出されれば、その指紋を持った人物を捜索するんですよね。それが事件解決の糸口になるわけですから。でも、現場には被害者以外の指紋は取られていない。もちろん先ほど言ったとおり、三守怜子以外は部屋から出ていない……」

「殺されたとき、近くには隣人がいた。そしてすぐに部屋に入り、遺体を発見してる。もちろんこれは一人でなら指紋が採取されていない以上、証言にはならないし、その人が殺したという証拠にもならない。ですが他の住民にも訊きましたけど、その隣人が三守怜子と話しているのを見たという人もいましたし、部屋の電気がついたのを窓越しに見たという人もいるんですよ」

阿弥陀警部が説明すると、葉月は肩を震わせる。

「それじゃ誰も犯人を見た人はいない。つまり自殺ってこと？」

「じゃが死因は出血多量なんじゃろ？　それに大きな物音も気になるな」

「現場を隈なく調べたら、水浸しになってる場所がありました。恐らく被害者は料理をしているさい、何かに驚き、誤って水を零してしまった。被害者が下着だったのは濡れた服を脱いだからで、キッチンで発見されたのも理解できます」

「でも、それじゃ凶器は？」

葉月が尋ねると、湖西主任は呆れ果てた表情を浮かべるや、ため息ひとつ……

「それがわかれば苦労はせんよ。とにかく凶器すら見つかっていな

い」

結局この事件は警察は未解決事件として処理した。

この一件の事件。果たして人によるものなのか、はたまたアパート住民全員が嘯いていたのか……

わかったことがあるとすれば、三守怜子が地獄裁判全てを終える33年間の内、誰一人、彼女のために経を読まなかったことだけだった。

拾・不器用

「鶴の基本形にしたら……」

稲妻神社の母屋にある居間で、葉月と遊びに来ていた浜路が隣り合わせに折り紙を折っている。

二人の目の前には宝静が描いた手描きのメモが置いてあり、それには『雉』の折順が書かれている。

「えっと、下半分を折り線にあわせて、広げる……　これってどうやるの？」

浜路が自分の折った紙を見せながら、葉月に尋ねる。

「下半分を横の折線にあわせて、それを横二枚のうち、一枚を広げ折りするって書いてある」

折り紙は図形を見ながら作るが、手描きということもあってか、図形が歪んでいる。

四苦八苦しながらも、理解が早いためか、１０分くらいで二人とも完成させていた。

「それにしても、二人ともよく折れるわね？」

ＴＶを見ていた弥生が横目でチラリと覗き込む。

「弥生さんも折ってみます？」

「そうね。他には何か教えてもらったの？」

弥生は何種類かの折り方が書かれている紙の束を捲りながら、適当に選び、折っていく。

「浜路ちゃん、わたしたちもなんか折ろう？」

葉月がそう言うと、浜路は頷き、折り紙を折りはじめた。

「ただいま」

出かけていた皐月が居間を覗き込むと、浜路が遊びに来ていることに気付く。

「浜路ちゃん、こんにちわ」
「あ、皐月さん。こんにちわです」
浜路が笑顔で答えると、皐月は卓袱台で折り紙をしている三人に目をやった。
「それって、宝静暦から教えてもらったってやつ？」
そう尋ねると、葉月が頷いてみせた。しかし、顔は皐月のほうを向いておらず、折り紙に集中している。
「わたしも一枚折ってもいいかな？」
言うや、皐月は折り紙を一枚取り、弥生が折っているやつを見やる。

弥生が折っているのは『テーブル』というものである。
横目で折り順を見ながら、皐月は手順どおり、書かれているとおりに折っているのだが、なんとも不恰好なものになっていた。

「あ、あれ？」
皐月は手に持っているモノと弥生が折ったものを見比べた。
どちらも同じ『テーブル』であり、同じ折順で折っている。
「皐月……　あんた、本当に、これ見てやった？」
弥生は皐月に紙を見せながら、尋ねた。
「や、やったわよ」
皐月はそういうが、弥生と同様、葉月と浜路もどうしてそうなったのかが理解できなかった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「それで、葉月ちゃんと一緒にこれ折ってたわけか」
信乃は浜路が葉月と一緒に折っていた折り紙を見ながら尋ねる。
「うん。それでね、ちょっと面白いことあったんだ」
「面白いこと？」

浜路がなんとも楽しそうな笑みを浮かべるので、信乃は首を傾げた。

「弥生さんと皐月さんも一緒に折ってたんだけど、皐月さんの追ったやつがぐっちゃぐちゃになってて」

「まぁ……　皐月って、ああ見えて結構不器用なところがあるからね。小学校のとき、クラスが一緒になったことがあるんだけど、その時入院している子がいたから、みんなで千羽鶴を折ろうってことになったの」

「そうなんだ、それでどうなったの？」

「他のみんなはそれなりに出来てたんだけどね。皐月だけは何回やっても鶴のつの字もなかったわ」

昔話をしている信乃を見ながら、浜路は笑みを浮かべた。

「なに？」

「――なんでもない」

浜路はそういうが、顔はにやけたままである。

信乃はそれを見るや、頭を抱え、「宿題するから、部屋出ていって」といい、浜路を部屋から追い出した。

（まったく、変な事思い出させるんじゃないわよ）

信乃は机に頭を寝かせた。

（わたしが何回教えても、皐月ったらきれいに折れなくって、結局わたしが折ることになったんだよな）

信乃は昔のことを思い出しながら、不意に涙が出ていた。

――それは何を意味していたのか、彼女は知る由もなかった。

拾・不器用（後書き）

作中、参考にした折り紙が乗っているサイトです。簡単なものから難しいものまで、色々な作品が載っています。よかったらどうぞｗ

⇒サイト名『おりがみ屋さん』　ＵＲＬ＝ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｊｐ／ｒｉｖｅｒｖｉｌｌａｇｅｋｙｏ／”

壱・婆娑羅髪（前書き）

婆娑羅髪（ばさらがみ）：ばさばさに乱れた髪。

壱・婆娑羅髪

リズム感のある鋏（シザー）の音や、ドライヤーのモーター音。髪を洗うシャンプーの香りが見るからに古惚（ふるぼ）けた店内を彩（いろど）っていた。

七、八畳分ほどしかない店内には電動式の美容椅子が3台あり、それらの前に洗面台と鏡が設置されている。

カウンター近くには待合用のソファがあり、その横にはマガジンラックが置かれているが、入れられているのは数年前の雑誌くらいなものだ。

ソファには男性客の姿があった。

「はい。こんな感じでよろしいでしょうか？」

美容師の狩野唯（かりのゆい）が女性客に尋ねる。

「ええ、大丈夫よ」と満足そうに客は答えたので、狩野はホッとした表情を浮かべた。

狩野は前掛けにしていたシーツを客から取り外し、座高を上げていた座椅子を下げていく。

そして、ゆっくりと客を降ろし、狩野は頭を下げた。

先ほどの女性客がカウンターで会計を済ませ、ドアを開けると、カランコロンと鈴の音が聞こえた。

「狩野さん。掃除したら、次のお客さんお願いね」

店主の衣川に命じられ、狩野は棚から箒と塵取りを持って、床に散らばった髪の毛の掃除にかかった。

慣れた手つきでしているので、ものの一分もかからなかった。

「次のお客さん、どうぞ」

カウンターを任されている豊永がソファに座っていた男性に声をかける。

「あの、どのようなカットをご希望で」

豊永がそう尋ねると、男性は店内を見渡した。
「いや、ちょっと……」
なんとも不可解な物言いに豊永は首を傾げる。
「少し待っててくれませんかね？　自分は彼女と待ち合わせをしてるんですよ」
男性の言葉に、豊永は「はぁ」と答える。
「豊永さん、どうしたんですか？」
会話を見ていた衣川が二人に近付き、尋ねた。
「あ、店長。このお客さん、どうやら人を待っているみたいなんです」
「そうなんですか？　それでそのお連れさんはいつ来られるんです？」
衣川がそう尋ねると、男性は腕時計を見る。
「確か3時くらいにくると連絡があったんですよ。それとこちらに予約しているとも云っていました」
「豊永さん、ちょっと調べてくれませんか？」
衣川にそういわれ、豊永はレジカウンターの横に置いてあるメモ帳を手に取り、パラパラッと捲（めく）っていく。
「えっと……『国条小百合（こくじょうさゆり）さん　午後3時に予約』　確かに予約が入っていますが、この人で間違いないんですか？」
豊永が確認するように男性に尋ねると
「ええ、その人です」
男性が答えている間、衣川は時計を見やる。――針は午後3時を疾うに過ぎていた。
「あの、連絡は出来ないんでしょうか？」
「ああ、そうですね。ちょっとかけてみます」
そういうや、男性は携帯を弄り始めた。
そして、プップッと電子音が聞こえ、電話をとる音が聞こえた。

「もしもし、お前、今どこにいるんだよ?」
男性が電話越しにいる人物に尋ねたが、まったく反応がない。
「おい、どうした?」
再び尋ねたがやはり反応がない。

「どうかしたんですか?」
「いや、どうも電波が悪いところにいるみたいで、こっちの声が聞こえ……」
男性がその先を言おうとしたときだった。
電話の奥から車が急ブレーキをかけたような甲高く、耳を劈くような音が聞こえてきた。
そして、ドシャッという、何かが突き落とされた音も聞こえた。

「お、おい! どうした?」
男性が慌てた表情で電話越しの人間に訊ねる。
だが反応はなく、聞こえてきたのは事故を目撃し、現場に群がる野次馬の騒々(そうぞう)しい音であった。

近くのガードレールにトラックが突っ込んだ衝撃音で、現場となったスクランブル交差点の周りは慌しくなっている。
トラックはエンジンから煙を噴出しており、フロントガラスが大破している。
横断歩道のちょうど真ん中には女性が倒れており、首がありえない方向に向いていた。
それを見ている野次馬の何人かがその光景を固唾を呑んで見ていた。
「信(まこと)さま? どう思われます?」
肌色に茶色のリボンを巻いたブレードという帽子を被り、薄い白

のワンピースを着た少女が、白に黒のリボンを巻いているパナマハットを被った、黒い服の男に尋ねる。
　このふたり、男のほうは大威徳明王で、少女はその従者である十二神将のひとりに数えられる摩虎羅であった。
「信号を無視するくらいなら、ブレーキはかけんな」
　大威徳明王……もとい、高山信は道路に出来上がったブレーキ痕を指差した。
　自殺テロを装った通り魔とするならば、ブレーキをかけるとは考えにくいものだ。
　そして轢殺された女性はまるで「殺してください」と云わんばかりにタイミングよく十字路を斜めに行きかう横断歩道の真ん中で『立ち止まっている』。

「あの女性、誰かから電話がかかってきていましたね」
「つまり、電話に出たその一瞬に立ち止まってしまった」
　信がそういうと、摩虎羅は深刻な表情を浮かべ、
「偶然にしては、行き過ぎてませんか？」
「信号が赤になるにはまだ時間はあった。それにあのトラック、白線に停まっていたが、女性が立ち止まるや急に動き出していたな」
「あの女性を殺そうとしたんでしょうか？」
　摩虎羅がそう尋ねると、信は首を横に振った。

「いや、それこそタイミングがよすぎる。ここは昼間から夕方にかけて車通りが多いからな。ずっと停まっていたりなんかしてたら交通の邪魔だろ？」
　確かに……と、摩虎羅は頷く。
「さてと、まずは被害者の特定だな」
　云うや否や、信は摩虎羅の肩に手をかけた。

　すると摩虎羅の姿は蛇へと変わり、スーと流れるように大破した

トラックに近付くや、割れた窓から運転席へと入っていった。
摩虎羅を含んだ十二神将は子・丑・寅といった、所謂十二支を当て嵌めている。
基本的に摩虎羅は卯神としているが、資料によっては十二支の順番が逆になる場合もあり、また摩虎羅の別称である摩?羅伽のサンスクリット語名である「一マホーラガ」は「偉大なる蛇」を意味している。

摩虎羅は運転席で頭から血を流している男性に目をやった。
見た目からしてさほど老けてもいないが、若くもない。
軽く見積もって二十代後半から四十代くらいであろう。
ハンドルからはエアパックが出ており、それに埋もれるように男は顔を沈めていた。
助手席には缶チューハイが3本置かれており、飲酒運転によるものかと思い、摩虎羅は頭を男性の口元まで近づけたが、アルコールのような臭いはしなかった。
確認のために缶チューハイのアルコール度を見てみると、8度と表記されている。
しかし、缶はすべてなくなっており、アルコールの臭いがしないとすれば、少なくとも
運転する2，3時間前から飲んでいないことになる。

そして男性が運転していたのは運搬会社の車であるため、飲酒運転には十分気をつけているはずだ。
『飲酒運転……ではないとすれば、まるで誰かに操られたかのように轢き殺している?』
摩虎羅は他に何かないか探したが、パトカーのサイレンが近付く音が聞こえ、逃げるように運転席から出て行った。

「収穫は？」
現場からさほど離れていない近くの公園で、ベンチに座った信がそう尋ねると、人の姿に戻った摩虎羅は運転席で見たものを説明した。
「アルコールの臭いがしないとすれば、やはり飲酒運転という考えはないな」
「もしかしたら、真犯人は飲酒運転に見せかけようとしたんじゃないでしょうか？」
「身元の確認は出来たか？」
「トラックを運転していた男は『衣川太一』。フロントガラスに貼られていた身分証明書から察するに、ＯＡ運搬会社社員のようです」
摩虎羅が説明すると、信は辺りを見渡した。
その仕草に摩虎羅は首を傾げる。
「おや、こんなところに珍しい人が」
公園入り口から麦藁帽子を被った男性が信と摩虎羅に近付いてきた。
「――阿弥陀如来か？」
信がそういうと、男性――阿弥陀警部は帽子を脱ぐや、軽く会釈する。
それにつられてか、摩虎羅は立ち上がり、深々と頭を下げた。
「お前のとこの管轄だったか？」
「いえ、今日は非番なんですよ。それに事故だったら交通課の仕事ですしね。ただあの事故、交通事故として処理されそうですが？」
阿弥陀警部が物言いな言葉を発する。
「現場周辺にいた野次馬に聞きましたけど、車が急に走り出して、女性を轢いたみたいなんですよね」
「それだったら、私たちも見ています。それに運転席に缶チューハイの空き缶がありましたから、飲酒運転という可能性も考えられたんですが――」

「摩虎羅の話だと、被害者からはアルコールの臭いがしなかったようだからな。飲酒運転ともなれば、アルコールが能を刺激している状態だ。少なくとも、臭いがするはずだろ？」

「それはまだ調べないとわかりませんけどね」

阿弥陀警部はそう答えると、帽子を被りなおし、頭を下げ、その場から去っていった。

ふと摩虎羅は背中に違和感を覚え、背中に手を回した。

そして何かに触れ、それを引っ張り出して見るや、掌の上には数本の髪が乗せられていた。

摩虎羅は最初自分の髪と思ったが、縮(ちぢ)れたその髪からは微(かす)かに妖気のようなものが感じられた。

壱・婆娑羅髪（後書き）

はい。第十七話です。飽きっぽい性格の作者ですが、結構長くやってますね。今回はちょっとしたアクションを起こしていますので、そちらのほうもお楽しみください。

弐・規則

皐月のヘアスタイルは腰まで伸びた長い黒髪が特徴的であり、サラッとした髪を触れれば、しっとりとした質感を持っている。

よく友人らにどこのシャンプーを使っているのか、リンスは？トリートメントは何を使っているのかと尋ねられる事が多々あるが、皐月はシャンプーやリンスは特に拘りを持っているわけでもなく、ましてや節約のため安いのを使うことも度々である。

だが、トリートメントだけは決まってこう答えている。

『米のとぎ汁でチェンジリンスをしている』

チェンジリンスとはトリートメントとなる液体を髪に付けて、最初洗い流すとき、洗面器に流しおとしたものを再び髪にかける。これを何回か繰り返すことをチェンジリンスという。

米のとぎ汁ほど大黒天や倉稲魂神（うかのみたまのかみ）といった田の神を祭る稲妻神社にとって身近なものはないし、皐月だけではなく、弥生と葉月もやっている。

そもそもこれを教えたのは、彼女らの祖母である瑠璃であった。彼女は普段髪をお団子に纏めているが、解（ほど）くと胸までである。

他にもニンジンをすりおろしたものをすり込んだり、うどんの茹で汁で髪をすすいだりと、色々教えてもらったが、ニンジンはもったいないし、うどんはそのまま汁（つゆ）の材料として使うため、実用的なものは米のとぎ汁に収まったのだった。

「って云っても、結局誰も信じないんだよね？」

皐月は友人である飯塚萌音と一緒に登校しながら、愚痴を零していた。

現在８月も終わり頃。長い夏休みの間にある登校日である。

「しっかし、皐月の髪見てると、本当にいいやつ使ってるって思うわよ？　それで米のとぎ汁ったって、誰も信じないでしょ？」
　萌音は皐月の髪に触れる。皐月の髪は萌音の指と指の間を逃げるようにさらりとすり抜けていく。
「しっとりとした感じがいいのよ。後あまり脂っこくないし」
「そりゃ、一応女の子だから、それなりに気は使ってるけどね」
　皐月がそういうと、萌音は小さく笑みを浮かべる。
「彼氏が出来たから？」
　その言葉に皐月は最初理解できなかったが、次第にカーッと顔を真っ赤にする。
「萌音ぇえええええええええええっ！！」
　悲鳴にも似た咆哮を挙げながら、皐月は逃げる萌音を追いかけていた。

　皐月と萌音が教室に入ると、クラスメイトの様子が慌しい。
「なに、なんかあったの？」
　萌音が近くにいた女子生徒に尋ねると、
「ああ、ちょっと噂で抜き打ちの風紀検査をするって」
　そう告げられるや、萌音は皐月を見やる。
「皐月、あんた大丈夫？　たしかギリギリじゃなかったっけ？」
　萌音が訊いているのは皐月の後ろ髪のことである。
　校則では腰上十二糎（センチ）までは許されていることになっている。

　皐月は普段髪を束ねているため、あまり気にはしていなかったが、確かにここ最近色々あって（その殆どが大宮巡査の見舞いだが）髪を切った覚えがなかった。
「ちょ、ちょっと不安かも」
　皐月がそういうと、萌音は自分の身形が可笑しくないか確認していた。

教室の扉が開かれ、生徒指導の教師と眼鏡をかけた女生徒が入ってきた。
女生徒の胸につけられているプレートには【衣川（きぬかわ）】と書かれている。
衣川は教室を見渡すや、キッと皐月を睨んだ。
その視線に気付くや皐月は首を傾げた。
その衣川も皐月ほど髪は長くはないが、胸まで伸びている。
「黒川皐月サン」
名を呼ばれた皐月は教壇の前まで歩み寄る。
そして、衣川が執拗に身形をチェックしていく。
「髪が長いデスね。ちょっと……切りマスか？」
そういうや、衣川は懐から鋏を取り出した。

「校則では女子の髪は腰上１２センチマデ……　アナタの長さはそれを優に超（こ）していマス」
いうや、衣川は皐月の髪を掴み、鋏を入れようとする。
「――――っ？」
殺気を感じた皐月はとっさに教室のうしろに避（ひ）き、衣川は見つめた。
その額には冷や汗とも、脂汗とも取れる汗が出ている。
「なっ？　いきなりなにすんのよ？」
皐月がそういうと、衣川はゆっくりと振り返り、皐月を見る。
「校則違反する不良ハ、修正するのが風紀委員である私の務めデス」
「いきなり人の髪の毛切るのもどうかと思うわよ？」
「反発するその態度、大いに不良という……」
「あんなことされたら、誰だって逃げるわよっ！！」
皐月がそういうと、ほかの女子も同感といった感じに頷く。
「アナタ……タチ、タニンのことだと思って頷いてマスが、髪が長

いヒトで校則違反していれバ、切りマス」
衣川の言うとおり、校則を破っていた女生徒は髪をバッサリと胸元まで切られていた。

「2ミリほど長過ぎデス。切りマス」
衣川はそういいながら、手に持っている鋏を頻りに動かす。
「いや、だから、ちゃんと切るから……　新学期までには」
いくら何でも横暴すぎると皐月は衣川に告げた。
「そうデスか？　なら仕方ないデスね」
衣川がそういうと、皐月はホッと胸を撫で下ろす。
「ところで……　アナタのその髪、どこのトリートメントを使ってるんデスか？」
そう尋ねられ、皐月はいつもどおり『米のとぎ汁』と云おうとしたが、信じてもらえるとは思えず、引き攣った笑みを浮かべ誤魔化していた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

その日の晩、稲妻神社の母屋にある居間には阿弥陀警部の姿があった。
神社へと尋ねにきた用件は、例によって例の如くである。

「犯人がわからん？」
拓蔵がそう尋ねると、阿弥陀警部は答えるように頷いた。
「それじゃぁ、事故ってことですか？」
弥生がそう尋ねると、阿弥陀警部は拓蔵と三姉妹に事の件を説明する。

「確かにそれは可笑しいな。停まっていた車が急に動き出し、被害者を轢殺した。そして、逃げるどころかブレーキを踏んでガードレ

ールにぶつかり、運転手も事故で死んでいる」
「偶然じゃないんですか？」
「被害者が信号の真ん中で立ち止まったときに車が動き出したんですよ。これが偶然じゃないならなんなんでしょうね？」
阿弥陀警部はそういうと、懐から写真を取り出した。
「事故を起こしたトラックの運転手は『衣川太一』という……」
「――衣川？」
皐月がそういうと、阿弥陀警部は首を傾げた。
「何かご存知なんですか？」
「いや、私の学校の風紀委員で同じ苗字がいたので」
その生徒の事は？と尋ねたが、皐月は申し訳なさそうに首を横に振った。

「それじゃ、よろしくお願いします」
阿弥陀警部から写真を受け取った葉月はそれを卓袱台の上に置き、一、二度深呼吸すると、手を写真に翳し、ゆっくりと動かしていった。
――十秒ほどしてだろうか、突然葉月の表情が青褪めていく。
そして、「アガァ」と顔を天井に向け、口を挙げた。
その表情はまるで首を絞められていると云った感じである。
危険を察した弥生と皐月が葉月の手を写真から遠ざけた。

「げぇほぉ、げぇ、ほぉ……」
激しく咳き込んだ葉月は、落ち着きを取り戻すとゆっくりと深呼吸をする。
「……急に息が出来なくなって、その後のことはわからない」
「わからないって――それって、どういうこと？」
「息が出来なくなった。運転手は心臓を患っておったんかな？」
「いや、検視結果によると、頭を打っての即死でしたし、特別心臓が悪かったという報告も受けていません」

「それにトラックだから、運転しているヒトのうしろに人がいるなんて考えられないし、それにそうだったとして、誰が運転してたのかしら？」

弥生がそういうと、「車は信号で停まっていましたし、車から人が出たところは誰も見ていないそうなんですよ」と阿弥陀警部は説明した。

「それで、轢殺されたほうは身元わかっとるんか？」

「ええ、一応は……　国条小百合、２８歳。ＯＬです」

「運転手とその人の関係は？」

「繋がりがないとしかいえませんね。まだわからないことだらけですし」

「葉月が感じ取った、衣川太一を縊ろうとしたのも何者かわからんしな」

拓蔵がそういうと、阿弥陀警部は頷いた。

「それで、先ほどから気になっていたんですけど、皐月さんどうかしたんですか？」

阿弥陀警部に尋ねられた皐月は首を傾げた。

皐月は長い後ろ髪をみつあみにし、それを団子のようにして後頭部に纏めている。

「いや、なんかいつもと違うから、びっくりしただけですよ」

阿弥陀警部が笑ってそういうと、皐月は少しばかり納得のいかない表情で外方を向いた。

「に、似てませんか？」

阿弥陀警部が拓蔵に耳打ちする。

「何がじゃ？」

「いや、あなただったらすぐにわかるでしょ？」

「ぬぅん……　わしもあれには吃驚したわ。血が繋がっているとは

いえ、似過ぎなんじゃよなぁ、警視庁にいた時の瑠璃さんと……」

拓蔵は今から４０年ほど前、警視庁で出会った瑠璃に一目惚れしていた。

そのため、当時のことは今でも鮮明に覚えている。

そして阿弥陀警部は仏として、瑠璃――地蔵菩薩のことを知っている。

もちろん、それは大人に権化していた瑠璃の姿であった。

それが今の皐月と瓜二つだったのだ。

幼女の姿をしている瑠璃しか知らない三姉妹は、そのことに気付きはしなかった。

参・速度

阿弥陀警部が帰ってから数時間後のことである。
パジャマ姿の皐月は机の上に長方形の卓上鏡を置き、櫛で髪を梳かしながらジッと鏡を見ていた。
そして後ろ髪を肩にかけ、梳こうとしたときである。
衣川に切られたこともあり、少しばかり長さが違う髪を見つけるや、皐月は眉を顰めた。

皐月は別に長い髪を保ちたいというわけではない。
理由があるとすれば、父親である健介の存在が理由になろう。
閻魔王である瑠璃の話では、三姉妹の両親……健介と遼子はまだ死んでいないことになっている。
これは健介と遼子が三途の川に来ていないことにあり、強いては死んでいないことと同じなのである。
まだ生きているという可能性もあるため、皐月は髪を短く切るに切れなかった。

改めて考えると馬鹿みたいだと皐月は自分に対して嘲笑する。
いってしまえば、父親が大好きだった幼い自分がしたことだ。
皐月は以前大宮巡査から貰った、健介がレースで優勝し、自分と一緒に写った写真が入っている写真立てを見る。
その頃から腰まで伸びた髪だったんだなぁと皐月は呆れたような表情を浮かべた。

『お父さんが好きな髪型?』
モノクロな記憶の中で、健介が幼い皐月に聞き返している。
『うん。お父さんって、どんな髪型が好きなのかなぁって?』

『どうしてそんなことを訊くんだ？』
健介は遼子を見やり、尋ねる。
『皐月の髪が長くなったから、今度髪を切るって話してたら、お父さんはどんな髪型が好きなのかって話になって、直接お父さんに訊きなさいって云ったんですよ』
遼子がそう説明すると、なるほどと健介は納得する。
『ねぇ、お父さん？　どんな髪が好きなの？』
幼い皐月は椅子に座った健介の足に腕を乗せ、上目遣いで見つめる。
『そうだなぁ、お母さんみたいに髪が長い人かな？』
『――お母さんみたいな？』
云うや、皐月は遼子を見た。遼子の髪は腰まで伸びており、烏羽色をしている。
『お母さんと始めてあったときな、あの髪はもう見とれるくらい綺麗だったんだよ。風が吹くと、髪が靡くだろ？　それがまた綺麗でさぁ、一本一本がまるで生きてるように見えてたんだよ』
健介がそういうと、大袈裟ですよと遼子は笑みを浮かべる。
『それじゃ私もそれにする』
皐月がそういうと、遼子と健介は小さく笑った。
それを見て、皐月は小さく首を傾げた。
『皐月……　お母さんの髪はね、ずっと大事にしていたからこそ、綺麗な色をしているの――』

皐月は幼い自分の記憶をゆっくりとフェードアウトさせていく。
（お父さんが大好きだったから、そんな子供みたいな理由でずっと長い髪にしてたんだっけ？）
幼い頃のことなんて、云ってしまえば「お父さんのお嫁さんになる」とか「かっこいいヒーローになる」といった子供染みた夢でしかない。
歳を重ねるに従って、その想いは変わっていく。

そして皐月の意識は父親にではなく、大宮巡査へと移っていたことは皐月自身わかっていた。

（大宮巡査はどんな髪型が好きなんだろ……）

意識している相手がどんな髪型を好むのか、女性にとって、ただ一人の異性の為に髪型を変えるということはよほどの覚悟があってのことである。

昔、長髪だった人が突然短髪にするのは、失恋したからだという話があった。

決別という意味でも切られるらしいが、それほどまでに女性にとって髪は大事なものなのである。

とはいえ、今の世の中そんなこと考えずにファッションを理由に切る人もいるだろうが……

皐月は校則に違反していたことで髪を切るようにと衣川に云われている。

そして、まだ何日か猶予あるんだと、少しばかり考えるや、鏡を伏せ、邪魔にならないよう髪を後ろ手に束ね纏めると、部屋の電気を消し就寝した。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「気持ち悪いな」

足をテーブルの上に組みながら、深々とソファに座っている信は掌に乗せた数本の縮れた髪の毛を見ていた。

先日事故にあったトラックの中を調べていた摩虎羅が体につけてきた髪の毛である。

ここは『高山探偵事務所』。この男、高山信が現世で探偵業をするために作った事務所である。とはいえ、いるのは本人と従者である摩虎羅だけであった。

「女性の髪でしょうかね？　被害者の衣川は男で短髪でしたから」
「そう考える以前に、この髪は妖気を放っていたんだな？」
すでに妖気を感じられないその縮れた髪の毛は、まるで雀りとられたかのように痛んでいる。
「微かにですが、妖気らしきものを感じられました」
摩虎羅が答えると、信は顎に手をやり、唸るように考え始めた。
「髪には不思議な力があると昔から云われているからな」
「つまりその何かが運転手を殺したと？」
その問いかけに、信は少しばかり視線を髪の毛に移した。
「運転手の名前、衣川と言っていたな。身元の調査はしているのか？」
「はい。殺された衣川ですが、どうやら叔父の妻が美容院をやっているようです」
美容院という言葉に信は眉を顰めた。
「美容院……　なんか引っかかるな？」
「引っかかると言えば、轢殺された国条はその日、その美容院に予約を入れていたそうなんです。待っていた彼氏が連絡したときに、国条は事故に遭っている」
それを聞くや、信は国条が横断歩道を渡っているとき、携帯に出ていたことを思い出す。
「あのとき……か……」
「警察の調べでは彼氏が彼女の携帯に連絡を入れたのは、その日の午後3時を過ぎたころとされています」
「彼氏の名前は？」
そう尋ねられ、摩虎羅は書類を信に渡した。

「田村亮平、２８歳。国条と同じ会社に勤めている。いわば同僚ですね」
「社内恋愛か――」

「いえ、偶然そうなったといったほうがいいかと」
信の言葉に摩虎羅は割ってはいる。その言葉に信は首を傾げた。
「二人は直接会える部署ではなかったようなんです。云ってしまえば、匿名が当たり前の出会い系サイトで知り合った二人が、偶然同じ会社勤めだったというわけです」
「――なるほどな」
信は唸るような仕草を見せる。

「しかし、この事故が殺人とするならば、直接殺しているわけではないからな……　それに、トラックを運転していた衣川との接点も気になる」
「気になるとは？」
「その田村という男が衣川に依頼していたとすれば、男女の縺れによる殺人だと話はわかるが……　その衣川も死亡している」
「証拠隠滅に殺したんでしょうか？」
信はトラックがブレーキ痕を残していることを思い出したが、それも考えられにくかった。
ブレーキ痕はその長さと道路や場所の状況で、出していたスピードが変わってくる。
事故があった十字路は中心に二十米の横断歩道が×印に交差されている。
ブレーキ痕の長さは軽く見積もって十米あり、道路は車通りの激しい乾いたアスファルトである。
「ざっと見積もって、トラックは３９キロものスピードで走っていた」
信はそういうや、「そんなに早かったか？」と摩虎羅に尋ねた。
摩虎羅は答えるように首を横に振る。
車が発進してからスピードに乗るには、予めアクセルを踏んでいなければいけない。

「トラックからはエンジンの音もしていませんでしたし、なにより痕が残るほどのスピードは出していませんでした」
トラックが発進してから人を轢いたのは五秒もしていなかった。
その後轢いてしまったことに気付いたのなら……
「最初から国条を殺すつもりだった……」
信はそう呟くが……　彼は頭の中ではこう呟いていた。

それじゃ――
仮に衣川自身が国条を殺そうとしていたのなら、なぜ本人は自分を殺したんだ？
それに本当に殺すつもりだったとしたら、どうしてブレーキ痕なんて残している？

肆・擬態

稲妻神社の本堂で皐月の鬼気篭った声が響き渡る。
両手には長短の竹刀が握り締められており、足を踏みしめる音と、竹刀を振り下ろしたときに発する風の音がなんともこの状況を説明していた。

「ふりゃ皐月ぃ！　手元がお留守になっとるぞぉ！　ただの人間ではそれくらいの力量か？」
紫色した絹麻の着物を着た、十二、三歳ほどの少女が皐月を嘲笑している。
この少女……名を『黒塚美音』という。
竹刀を持っている皐月に対して、彼女が持っているのは扇子であった。
しかも鉄扇ではなく、ただの竹細工で出来た扇子だった。

「二刀……焔鼠轍っ！」
皐月は長刀を先に構え、その線に沿うように短刀を弓矢みたいに構えると、美音に突っ込んだ。
長刀で相手の間合いを詰め、相手が刀を避ける一瞬に長刀を引き、その勢いで逆の短刀を相手に突き刺すのがこの技なのだが、
「……あまい――」
美音は避ける仕草をせず、長刀の竹刀が自分を突き刺す寸手のところを扇子で弾き、その起動を外した。
だが、焔鼠轍は二段攻撃である。次の短刀で相手を攻撃するのが目撃である。
しかし、美音は皐月が左利きであることを知っている。
扇子を緩やかな軌道で、皐月の鳩尾を扇子で突いた。

「あ、がぁっ……」
皐月はその場に倒れ、悶え苦しむ。
「その技は一度発すると自らの力では動きを止めることは出来んからな。それを利用すれば微力なものでも主に勝てるわ」
美音は扇子を突き刺してはいない。むしろ皐月自らが突き刺されたと云ってもいい。
「これで主は殺された」
扇子を広げ、口元を覆いながら美音は微笑しながら告げた。

「いたた……」
皐月は呻き声を挙げながら壁に寄りかかった。
「だ、大丈夫ですか？」
可細い声で心配しているのは美音である。
先ほどとは打って変わっておどおどとした表情を浮かべている。
「あ、あんたのそれ、めんどくさくない？」
皐月がそう訊くと、美音は小さく苦笑いした。

美音は吉祥天（きっしょうてん）という福神（ふくじん）の権化である。そして黒闇天（こくあんてん）という禍神（まがつかみ）でもあった。
もともと吉祥天と黒闇天は姉妹とされており、常に二人で行動する天部の一尊である。
本来ならば黒闇天のみが現世で皐月の相手を任されていたのだが、前記にも記したとおり、黒闇天は禍神である。
禍（わざわい）を齎（もたら）す彼女が目的以外のことをしないよう、閻魔王である瑠璃が吉祥天とともに同一とした権化を送り込んでいた。
「瑠璃ったら酷いんじゃよ。妾（わらわ）はしっかりとひとりで任務を随行しようとしておるのに、よりによって姉者の力と一緒に権化にしたんじゃからな」
美音が口調を変える。先ほどの穏やかな声と違い、喧々とした口

調である。
「あなたを信頼しているからこそ、私と一緒にいさせているんですから、あまり僻まないでください」
今度は穏やかな口調である。
「あんたたち、そういうのは頭の中でやってくれない？　聞いてるほうは頭痛くなるから」
皐月は頭を抱えながら美音に言い放った。
◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆
「終わったデス」
みつあみにした髪を揺らしながら、衣川早百合は呟いた。
彼女が持っているお盆の上にはきれいに手入れされた鋏と剃刀、そして櫛などが並べられている。
「早百合、おつかれさま」
「こんなのいつものことデス。礼を云われる筋合いがないデス」
早百合はそう云いながら、お盆をカウンターの上に置いた。
そしてみつあみをほどくと、ウェーブのかかった髪が風で揺れた。
「もったいない」と母親である衣川早苗にいわれた早百合は首を傾げた。
「どうしてデス、邪魔になるから結んでいただけデスよ？」
「いやいや、早百合ちゃんはもう少しお洒落しないと……　髪の毛だって私じゃなくて、狩野さんに切ってもらってるじゃない？」
早苗は笑いながら云う。
「でしたら、早くその先端恐怖症を治してほしいデス」
早百合は呆れた表情で云うものだから、早苗はムッとした表情を浮かべた。

「そんなのがよく理髪店の店主なんてできマスね？」
「早百合は云っていいことと悪いことの区別つけないわけ？」
「事実に善悪はないデス。それにそれを感情的に感じるのは、それが事実と思っているからデス」
早百合の言葉に我慢できず、早苗は鋏を握ろうとしたが、
「――できないデスか？」
早百合はまるで蔑むような目で早苗を見やると、何事もなかったかのように店を出て行った。

早苗は早百合の去っていく姿を見て一瞬――
「あああああああああああああああああああっ！！」
まるで狂ったかのように、早苗はお盆の上に置かれた鋏と剃刀を床にぶちまけた。
鋏の先端が床に突き刺さり、ビィーンとした音を発している。
「はぁ、はぁ、はぁ……」
早苗は肩で息し、散らばった道具を睨み付ける。
「あの子……　殺してやろうかしら？　あの人の遺産相続――権利は私にあるんだから……　ガキになんてくれてやるもんですか」
早苗は不気味な笑みを浮かべながら、片付けもせず、ゆったりとした歩みで店を後にした。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

警視庁交通部の一角に阿弥陀警部と佐々木刑事の姿があった。
二人が見ているのは先日起きた事件においての資料である。

「死亡推定時刻は……午後2時前後？」
阿弥陀警部がトラックの運転手である衣川太一の死亡推定時刻を見て首を傾げていた。
佐々木刑事も納得いかないといった表情で眉を顰めている。

「事故があったのは？」
「轢殺された国条小百合さんの死亡推定時刻は事故があった午後３時頃。これは即死でしたし、目撃した人もいる」
阿弥陀警部はそこが納得いかなかった。
事故が起きたとき、トラックはガードレールにぶつかり大破している。
つまり、車を運転している人間がいなければ、ぶつかるどころか走ることすらできない。
だからこそ、両者の死亡推定時刻が明らかに食い違っているのが可笑しいのだ。

「ＤＮＡ型も血液型も一致している。これは二人とも同一人物と考えていいんじゃろうな」
「まぁ、そうなりますね。納得いきませんけど」
たとえに衣川太一の死亡推定時刻が本物だとして、それまで誰が運転していたのだろうか？
「葉月さんの様子からして、誰かがいたってことになるんですけど……」
「運転席から遺体を出そうとしたとき、ドアは壊れていたそうだからな、逃げることはできんな」
佐々木刑事は葉月が行った霊視の報告を受けている。
「遺体の首が絞められた形跡もない。あったらあったでパニックじゃろうがな？」
「妖怪の仕業と考えて間違いないでしょうね」
阿弥陀警部がそういうと、佐々木刑事は納得がいかないかのように唸った。
それを阿弥陀警部は指摘する。

「いや……　その衣川太一と国条小百合……　まったく接点がないじゃろ？　妖怪の仕業だったとしたら、誰かの憎悪が絡んでると思

うんじゃがな」
「ええ。何度調べても衣川太一やその家族に周りの人間と……　国条小百合に対する繋がりがまったくといっていいほどない」
　この事故が自殺紛いの殺人とするならば、通り魔事件として処理されるが
「轢き殺したのが国条小百合……ただ一人」
　佐々木刑事の言葉どおり、トラックが轢殺したのは無差別にではなく国条ただ一人を狙っている。
　これを通り魔でないとすれば、なんというべきか……

「もう一度葉月さんにお願いしますかね？」
　そういうと阿弥陀警部は立ち上がったときだった。
「あまりいい期待は出来そうにないと思うがな？」
　佐々木刑事の言葉に阿弥陀警部は振り向きざま、真意を尋ねた。
「葉月ちゃんに見てもらうのは、この死亡推定時刻を調べてからのほうがいいかも知れんぞ？　衣川太一がこの前後に生きていたかの確認をな……」

伍・久方（前書き）

久方（ひさかた）：天・空・月などのこと。

伍・久方

駅前の書店で皐月はガールズファッション誌を読んでいる。
そしてため息をつくや、それを元の場所に戻した。
「決まらないんですか？」
上空から見下ろしていた遊火がそう尋ねると、
「なにが似合うのかって、正直自分じゃわからないものよね？」
皐月は呆れた表情で言う。

今の今まで髪を伸ばした状態を維持していたため、皐月はそれ以外の自分の姿が優位に想像できないでいた。
遊火は首を傾げながら「現状維持じゃ駄目なんですか？」と聞き返す。
「それでいいなら、雑誌なんて読まないでしょ」
そう云いながら、皐月は自然とお菓子が掲載されている雑誌が置かれた棚に足を向けていた。
「皐月さまの場合は、花より団子ですね」
遊火がため息混じりに呟いた。
「遊火っ！　9月にコンビニで秋の新作カップスィーツ出るって。それから新作チョコとか……」
なんとも楽しそうに話す皐月を見ながら、覗き込むように遊火も雑誌を読んでいた。

その帰りである。
どこからか小さな犬の鳴き声がし、皐月と遊火はそちらを見た。
そしてその正体を見るや、皐月は首を傾げる。
「あれって……　トーマ？」
目の前で小さなボールに戯(じゃ)れている子犬は、以前事件があったコ

テージにいた「トイ・マンチェスター・テリア」という品種の子犬であった。
そのトーマがどうしてこんなところにいるのかと皐月は遊火を見たが、姿が見えない。
「遊火？」と辺りを見渡すと、「あぅ～っ」と泣き言を発しながら、遊火は怯えた表情で皐月のうしろに非難していた。
遊火は以前トーマに舐められそうになったことがある。
それ以前に犬自体が駄目というのもあるが。

「あれ？　皐月さん」
声をかけられた皐月はそちらに振り返る。
「あ、希空（のあ）さん」
皐月はやっぱりと云った表情でそういうと、目の前の少女――希空は笑顔で会釈した。

皐月は近くの公園で希空と一緒にベンチに座った。
「それじゃ、お父さんの墓参りに？」
「はい。お父さんから貰った遺産のこととか、私自身の心の整理とかで来るのが遅くなっちゃったんですけど」
希空はそう言いながら、膝に乗せているトーマの背中を撫でている。
「結局ほとんどの遺産はなくなってましたけど。でも……私はお父さんやお母さんに大事にしてもらってたんだって、実感出来たんです」
希空の言葉に皐月は首を傾げる。
「私が持っていた株券、電子化にしていなかったのと、名義がお父さんのままだったので紙切れ同然だったんです。その他通帳とかも本人の確認が取れない以上引き落とすことも出来ない。それがたとえ遺族でも」
まるで最初から遺産を与える気などなかった感じに聞こえてくる。

希空の父親である瀧原俊平はまさか自分が殺されるとは思っておらず、相続人を記してはいなかった。
しかし希空の表情はどこか晴れやかだ。

「私は別に遺産がほしいわけじゃない。あった方が先々助かるだろうけど……　でも、それだけで残された人は幸せですかね？」
そう訊かれ、皐月は返答に戸惑う。
「お金が目的で人を殺すのって、一番最低なことじゃないかなって」
残されたものとしての言葉だった。
「それじゃ、私は失礼します」
そういうと、希空はスッと立ち上がり、頭を下げた。
つられて皐月も頭を下げた。

去っていく希空を見ながら、
「そういえば――爺様って、どうやって弥生姉さんの受験料とか出したのかしら？」
「神社で貯めたお金からじゃないですか？」
遊火がそう訊くと、皐月は少しばかり唸る。
「いや、確か姉さんが通ってる高校って、結構お金かかってるはずよ？　確か初年だけでも百二十万はするって聞いたことあるし……」
それだけでなく、皐月と葉月の学費もあれば、家族の生活費もある。
それに加えて、神社の経営費や本堂など設備の修復費。
職員の給料などが含まれるため、どう考えても家計は火の車どころではない。

「もしかして、拓蔵さま、すごい金持ちだったりして」
遊火がそう言うと、
「まさか、それはないでしょ？」
皐月は呆れた表情で笑みを浮かべた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

警視庁近くの喫茶店に阿弥陀警部と佐々木刑事、そして拓蔵の姿があった。

「死亡推定時刻が合わない？」

拓蔵がそう尋ねると、阿弥陀警部と佐々木刑事が頷いた。

「日本の警察もそこまで零落（おちぶ）れたか？」

「いえ――検死の結果、トラックの運転手だった衣川太一の死亡推定時刻が午後2時。ですが事故があったのが午後3時前後。この時点で食い違ってるんですよ」

佐々木刑事がそう説明するが、拓蔵は納得いかない表情で聞いている。

「で、確認のためにその時間、被害者が何をしていたのかを調べたらですね、『午後3時前に会社に連絡をしてる』そうなんですよ。本人の携帯から」

阿弥陀警部がそう云うと、拓蔵はさらに不快な表情を浮かべた。

「どういうことじゃ？　死亡推定時刻は午後2時になっとるんじゃろ？　まさか死んだ人間が電話をした――わけがないじゃろうよ？」

「確認のために携帯が使われたと思われる基地局を調べたら、ちょうど事故があった場所なんですよ」

携帯の電波は使用した場所から近い基地局（アンテナ）を通じて通信されている。

たとえば東京都の場合、『ＳＨＩＢＵＹＡ１０９』がある渋谷区道玄坂二丁目での基地局は渋東シネタワーに設置されているもの。

そこから近い場所で円山町から使用すると、ホテルニューウェイに設置されている基地局からとなる。

同じ区域でも、使う場所によって発進される基地局は区々（まちまち）である。

そして、携帯は車の中で発見されており、本人の指紋以外は検出

されていない。

「先輩、どう思いますか？」

「鑑識が間違っとるとは思えんが――」

云うや、拓蔵は少しばかり考えると、阿弥陀警部と佐々木刑事を見遣った。

「今回の事件。殺人と事故処理どっちになったんじゃ？」

「それが――先ほど云ったとおり、死亡推定時刻が食い違ってますからね。どちらともいえないんですよ」

「中には死んだ人間が運転していたなんて根も葉もない噂が立つ始末で」

阿弥陀警部がそう云うと、拓蔵は唐突に笑い出した。

「死んだ人間がそんなことできるわけがないじゃろ？」

そうはいうが、拓蔵の眼は笑っていなかった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

福祠駅の前に笠を深々と被った托鉢僧（たくはつそう）が立っている。

手にはお椀があり、中には雀の涙ほどの小銭が入っていた。

その僧の前に腰の曲がったしわくちゃの翁（おきな）が手を合わせると、僧は小さく頭を下げる。

そして翁が蝦蟇口（がまぐち）財布から小銭を取り出し、それをお椀の中に入れた。

僧はお礼とばかりに、シャン、シャンと一、二度ほど金剛鈴（こんごうれい）を鳴らした。

去っていく翁を見送りながら、僧はひとこと呟いた。

『彼者（かのもの）の腰。若人（わこうど）が如く、軽（かろ）やか也（なり）』

すると、先ほどの翁は体をピクッと痙攣させるや、驚いた表情で飛び上がった。

その動きは軽やかで、年齢など最初からなかったかのようである。

「なんじゃ？　何が起きたんじゃ？　軽い！　軽いぞ！　体が軽い！　腰の痛みがまるでないわい！」

翁の腰はしっかりと立っており、そこらで腰曲がりに歩いている若者よりもピシッと胸が張られている。

翁は喜色満面（きしょくまんめん）の笑みを浮かべ、軽やかな足取りで人込みの中に消えていった。

「また人助け？」

スーツ姿の女が僧に話しかける。その眼は僧を蔑んでいた。

「手を合わせてくれただけになく、銭を貰えたのだ。これくらいのこと、せんといかんだろ？」

僧がそう答えると、

「ありもしないことをありとする。――それがアナタの力だっけ？」

「貴様のような妖怪を存在していないことにしてやったんだ。これ以上私に関わるな」

僧がそう云うと、女性――鴉天狗は小さく笑みを浮かべた。

「あなたに断る権利はないわ。それに……」

云うや鴉天狗は視線を駅の屋根に送った。

僧はそちらを見るや、息を飲み込んだ。

屋根には埋め尽くすかのように、夥しいほどのカラスが止まっていた。

その黒い身形に隠れた眼球は地上にいる人間を見下ろしている。

「私が一言命ずれば、そこらにいる塵虫どもを啄むことなんて容易いことなのよ？」

「卑怯だな……」

「なんとでも……　元より妖怪は人を脅かすものだからね」
　鴉天狗はそう云うと、僧は顔を顰めた。

「用件はなんだ？」
「衣川早苗という、理髪店を経営している女がいるの。その女、山のように積み重なった借金で首が回らなくなったから、自分の夫を事故と見せかけて殺し、遺産相続に名をあげるはずだった」
　その言葉に僧は眉を顰める。
「だけど、その男は遺産を後妻にではなく、娘に渡すよう遺言書を残していたのよ」
「用意周到だな。まるで殺されようとしていたのを知っていたかのようだ」
「妻が借金をしている。それくらいのことすぐにわかるし、金のためなら何をするかわからない」
　鴉天狗がそういうと、
「それで――　私に何をしろと？」
　そう尋ねると、鴉天狗はクスリと笑みを浮かべた。

「あの二人を親子っていう、つまらない繋がりをなかったことにしてほしいのよ」
「断る――と云ったら？」
　僧は視線を屋根上にいるカラスにやりながら尋ねた。
「さっきも云ったけど、あなたに断る権利はない。もちろん断れば、ここら一帯が血の海になるでしょうね？」
　僧は顔を顰めながら、
「わかった……　近いうちにしよう」
　その言葉を聞くや、鴉天狗は笑みを浮かべる。

　その笑みは不気味に歪んでいた。

陸・ちっぽけ

「お母さん？」

店内に戻った早百合はその現状に絶句していた。

散らばった鋏（シサー）や剃刀、櫛は彼女が手入れしたものだと気付くのに、さほど時間はかからなかったが、どうしてこのようなことになったのかがわからなかった。

あの時、そこにいたのは彼女と母親である早苗だけであった。

そうなると早百合は母親がしたんだろうと自然と理論をつなげていく。

事実とはいえ、言い過ぎていたことを後悔していたが、しかしその店主が先端恐怖症であっては不安というのも事実であった。

鋏を扱う人間がそれではとてもじゃないが任せられない。

早百合は腰を屈め、落ちている道具を拾い上げていく。

落ちた衝撃で刃毀（はこぼ）れしたものもあり、使い物にならない道具もあった。

「お父さんハ、お母さんを信じてイタから……　この店を任せたデス」

早苗が夫である衣川紀夫を事故に生じて殺したことを早百合は感付いていた。

しかしその証拠がない以上、警察はテコとして動かない。

また遺言書には遺産を後妻である早苗にではなく、娘の早百合にとされている。

そのことで早百合は早苗が自分を恨んでいることも知っていた。

「おはようございます」
カランコロンと店のドアに着けられている鈴が鳴り、従業員の狩野と豊永が店の中に入ってきた。
それを聞くや、慌てて早百合は散らばっている道具を掻き集める。
「――いっ？」
剃刀の葉に指が当たり、刺激が全身に走った。
指は切られ、血が流れている。
「だ、大丈夫？」
「だ、大丈夫デス。ちょっと整理しテタら、転んだだけデスから」
心配そうに眺める狩野と豊永を見上げながら、早百合は笑いながらそう云うと、
「そ、そう？　でも気をつけてね。早百合ちゃんにもしものことがあったら店長に顔向けできないから」
狩野の言葉に早百合は首を傾げる。
「お母さんにデスか？」
「うん。まぁお父さんの時からだけどね」
狩野がそう云うと、早百合は決意に満ちた表情で二人を見渡した。

「教えてくだサイ。お母サン……　たしか髪の毛を切ることが出来たはずデス。それがどうして突然鋏を持たなくなったデスか？」
早百合がそう尋ねると、狩野は豊永を見遣った。
「話したほうがいいんじゃない？」
豊永にそう言われ、狩野は深呼吸する。

「まだ店長が私と同じカット担当の店員だったころ、ある事件がおきたの」
「――事件？」
「店長はその時、ある子供のカットを任されてね。子供の髪の毛を切るのって、大人を切ることよりも難しいのよ」

「お父さんから切ってもらったことあるからわかるデス。子供は落ち着かないことがあるって」
「子供全般がそうとは限らないけど、でもその子供は少し違っていたのよ」
その言葉に早百合は首を傾げる。
「店長がカットした子供は多動癖があって、切っている最中も落ち着いていなかったの。私たちもあれやこれや落ち着かせることをしていたんだけど、他のお客さんのこともあったから手を出すに出せなかった」
「そして最悪の事件が起きた」
「――最悪の？」
狩野は自分の耳元をかきあげ、早百合に見せた。
「モミアゲ部分の整髪をしていた時、突然子供が動いたのよ。そして耳を切ってしまった」
「――耳を？」
「辛うじて、ちょっと傷が入る程度で済んだんだけど――」
早百合は豊永を見る。表情は不安に満ちていた。
「子供の名前は国条小百合……　当時議員をしていた国条昌樹の娘だったの」
「その国条が子供の耳を切り落としたという出任せを作ったのよ」
それを聞くや、早百合は全身の血の気が抜けていくのを感じた。
「お、お母さんが切り落とシタなんて……　そんなの」
「もちろん実際見ている私たちは抗議したけど、相手が相手だったからね。話を聞いてもらえなかったのよ――まぁ、聞いてもらえなかったほうがどれだけよかったでしょうね？」
狩野は下唇を噛み締める。
「その親、賠償金欲しさに――――自分の子供の耳を本当に切り落

としてたのよ！」
　それを聞くや、早百合は想像を絶する光景に吐き気を催し、洗面台に向かい、シンクの中に吐き出した。
「傷害事件として立証したかったんだろうけど、微かに切ったくらいじゃ金は取れないと思ったんでしょうね」
「店長はその頃、自分のミスで人を切ったというのが頭に一杯で冷静じゃなかった。だから借金をして賠償金を払ったのよ。たしか一千万ほどね」
　早百合は早苗が借金をした理由を知る。
　しかしその借金が一千万だと、返済できないという額でもなかった。
「さっきも言ったけど、店長はその時冷静じゃなかった。お金の期日もさほどなく、仕方なくヤミ金に手を出したのよ」
「どうシテ、どうしてお父さんに相談しなかったデスか？」
「あの人はプライドが高かったからね。お父さんに相談できなかったんじゃないかしら？　それにすぐに返せると思ってたんでしょ」
　それがまさか先端恐怖症になるとは夢にも思っていなかっただろう。
「私、お母さんに酷いコトいったデス。そんなことあったの知らないクセに、あんな酷いコト」
　気が動転した早百合は椅子に座り、ボロボロと涙を零した。
「私たちはお父さんに口止めされていたの。ちょうど二人が再婚しようとしていた頃だったし、あなたが早苗さんを軽蔑しないようにって」
「酷いのはその国条って人デス。お母さん何も悪いことしてないデス」
　早百合はそう云いながら、どうして早苗は父親を殺したのだろうと考えていた。
　それが理由だったとしても、殺す理由にはならない。

先ほども言ったが、早苗が一千万という金額を一生返せないというものではない。
しかし相手がヤミ金であったことが狂わせた。
その借金を返すために他から借りるという雪だるま式に膨れ上がってしまい、首が回らなくなった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

その日、早苗は一人部屋の中にいた。
店のことは豊永や狩野に任せ、休もうと考えていたからである。
精神安定剤を飲み、布団に潜り込む。
――数分ほどで眠りにつくはずだったが、耳元から鈴の音が聞こえ、早苗は起き上がった。

日の光が入った部屋は薄暗く、人の気配はしない。
気のせいだと思い、早苗は寝ようとしたがまた鈴の音が聞こえた。
「誰かいるの？」
そう云うと、窓から差し込んでいた日の光が急に明るくなり、早苗は腕で目を覆った。

『其者（そのもの）、大切な娘を、娘と不思（おもわず）』

声が聞こえると早苗はスクッと起き上がり、部屋を出ていった。

「これであの女は娘を殺すでしょうね？　娘を殺せば遺産は自分に転がるし、あの女は自分で望んでいることだからね」
鴉天狗がそう云うと、部屋の窓を見上げていた僧はキッと睨みつけた。
「貴様は人の繋がりを蔑視（べっし）しておるのか？」

「蔑視だなんて大それたこと思ってないわよ？」
鴉天狗は笑いながら僧を見下ろした。

「金が目的で実の子供や親を殺す人間なんてごまんといるのよ？」
「親を殺せば大罪である」
「相手は子供よ？　子供を殺して大罪になるという法律は地獄にない！　それにあの二人は血が繋がっていないし、他人を殺したところで罪は変わらないでしょ？」
僧は睨みつけるが、その瞳は鴉天狗を哀れんでいるようにも見えた。
そのことに気付いた鴉天狗は顔を顰める。
「私は自分を守るために大罪を犯したのよ。後悔なんて最初からしていない」
そう云うと、鴉天狗は羽を広げ、空高く飛び去っていった。

僧は鴉天狗が去っていくのをジッと見送ると、一点を見遣った。
そしてそれを素早く掴み潰すと、掌に乗った潰れた蜂を睨みつける。
「田心姫（たごりひめ）に伝えておけ。鴉天狗をこれ以上束縛するなと――な」
そう云うと、掌の蜂はボッと燃え散った。

漆・天牛（前書き）

天牛（てんぎゅう）：カミキリムシの別称。妖怪髪切りの正体とも言われている昆虫。髪切虫と書かれるが、丈夫な歯や発展した顎によって植物の丈夫な繊維や木部組織を齧るほどである。そのことから名前は『噛み切り虫』からきているともされている。

「さてと……」
皐月は財布に入った三千円を見やる。さきほど預金からおろしてきたものだ。
「これで足りるかしらね？」
そう云いながら、遊火を見た。
「足りるんじゃないですかね？」と遊火は首を傾げながら云った。

皐月は財布を上着のポケットに仕舞うと、携帯を少し弄り、キョロキョロと辺りを見渡した。
携帯の液晶には地図が表示されており、赤いマークが点滅している。
「えっと、理髪店はっと」
目的地の理髪店が住宅街のところにあり、入り組んで解り難い。
「あ、ここだ」
店に着いたのも予定より遅かった。

カランコロンとドアに付いた鈴の音が店内に響き渡った。
「いらっしゃいませ」
衣川早苗がそう云うと、皐月は店内を見渡した。
客は一人もおらず一、店員も早苗だけである。
「今日はどのようなご用件で？」
「あ、ちょっと髪を揃えてもらおうと思って」
そう云うと、「どのくらいまで？」と早苗は聞き返す。
「えっと……」
皐月は考えながらも、店内の違和感に薄々感付いていた。

『遊火、ちょっとこの店の中を調べてくれない？』
皐月は頭の中でそう云いながら遊火を一瞥する。
遊火は頷くや、無数の火の玉となって飛び散った。
「どうかしましたか？」
早苗がそう尋ねると、皐月は苦笑いを浮かべる。
「それでどれくらいに？」
「えっと、髪を揃えるくらいでお願いします」
そう言うと、早苗は椅子に座るよう、皐月に促した。

「結構伸びてますね。それに髪の長さにバラつきもあるようですし」
早苗は櫛で皐月の髪を梳かしながら尋ねる。
皐月は鏡に映った店内を見渡す。――至って普通だった。
「そういえば、この店ってお一人でやってるんですか？」
皐月がそう尋ねると、早苗は一瞬手を止めたが、再び髪を梳かし始めた。
「どうしてそう思うんですか？」
「いや、椅子が三つあるから、もし満席だと一人じゃ無理だろうし」
皐月は慌てて正面を向きなおした。
一瞬振り返ったとき、早苗の目が据わっていたのだ。

――その頃遊火は店の奥に入っていた。
辺りにはどんよりとした空気が漂っている。
人の気配がしないのも気になるが、それだけならどれだけいいだろうかと、妖怪なのに臆病な性格の遊火は思っていた。

ガタッという音が聞こえ、驚いた遊火は身を窄める。
そして音が聞こえたほうにゆっくりと目をやると、そこだけドアが開いていた。
息を飲み込み、遊火は音を立てず（そもそも浮いているので足音

も何もないが）ドアに近づくと、少しだけ開いたドアが突然全開になり、何かが倒れこんできた。

「……っ！！」

それを見るや、遊火は悲鳴を挙げた。

倒れ込んできたのは女性の遺体であった。

髪は切り刻まれ、顔面は傷だらけになっている。

首の動脈を切っているのか、衣服は真っ赤に染まっていた。

遊火は息を整えながら、部屋の中を調べると、言葉を失った。

そこにも遺体が転がっており、先ほどの遺体と同じ形状であった。

よく見ると胸ポケットに社員証が着けられており、『豊永美奈』と書かれている。

確認のため、もうひとつのほうを見ると。同様に胸ポケットには社員証がある。

名前は『狩野唯』と書かれていた。

そして共通して、この店の店員であることに遊火は違和感を感じた。

「どうしてこんなところに？」

部屋は薄暗く最初は気付かなかったが、発光している自分の体で部屋はぼんやりと明るくなっていることに遊火は気付いた。

そして見えなかった床の前面がわかるや、涙を浮かべた。

床には細かく切り刻まれた髪の毛が無数に散らばっており、真っ赤に染まっていた。

「どれくらいの長さで切ります？」

早苗がそう尋ねると、皐月は平常心を保ちながら、

「そうですね。それじゃ胸のところまでバサリと切ってください」
そういわれ、早苗は櫛で頭の上からゆっくりと下ろしていく。
そして胸のところまでやると、「これくらいでしょうか？」と尋ねた。
「あ、はい。それくらいで……」
皐月の了解を得るや、鋏をゆっくりと入れ、髪を切った。

ジョリという寒気が弥立つような音が耳鳴りのように皐月の耳に響いた。
いくら皐月の耳が悪いからといって、耳元で聞こえればすぐに気付く。
そしてまるで髪を引っ張られる痛みを同時に感じとった。
「ちょ、ちょっとまって」
「どうしました？」
早苗は何事もないかのような顔をしている。
「そ、その鋏……　大丈夫なんですか？」
そういわれ、早苗は手に持った鋏を見やった。
鋏の刃はボロボロに錆び付いている。

「すみません。お客様……」
そう云うと、早苗は鋏を床に捨てた。
そして、皐月の髪の毛を乱暴に引っ張る。
「あがあああああああああああっ！！」
椅子から落とされた皐月は全身に痛みを走らせた。

「は、はなして」
「お静かにお客様……　髪の毛が切れないじゃないですか？」
そう云いながら、早苗は皐月の髪を口の中に含んだ。
「な、何を？」
「見てわかりませんか？　切ってるんですよ？」

その言葉に皐月は戸惑う。
逃げようとすると、髪を引っ張られ、動けずにいた。
「お客様落ち着いてください」
言うや、早苗の髪が伸び、縄となって皐月の体を縛り上げる。
その拘束は力強く、皐月は解こうとするがまるで歯が立たない。

「吾神殿に祭られし大黒の業よ！　今ばかり我に剛の許しを！」
そう念じ叫ぶと、皐月の全身が光り、縛り上げていた髪が溶けた。
しかし、早苗が皐月の髪を口に銜えている以上、解放されているとは言い難い。
「お客様……　ジッとしてくれないと髪が切れないじゃないですか？」
「それのどこが髪を切ってるっていうのよ？」
どちらかというと噛み千切られている。

「皐月さまぁ！！」
戻ってきた遊火はこの現状に驚き、戸惑いながら
「あ、あの人なんで皐月さまの髪の毛食べてるんですか？　そういう嗜好なんですかね？」
「そんなわけないでしょ？」
皐月は叫びながらツッコミを入れる。
早苗を蹴りながら、口から髪の毛を取ろうとするが、髪の毛が足に絡まり動けないでいた。
「竹刀がないから、刀にすることも出来ないし」
そう考えていると、突然カランコロンという音が聞こえ、そちらを見ると……

「お母サン……」
店に入ってきた早百合が息を飲み込んだ。
「衣川さん？」

皐月がそう云うと、
「ク、黒川サン？　どうしてココに……？」
早百合は驚きながら母親を見ると、悲鳴を挙げた。

その身形は禍々しく、伸びた髪が全身を覆っている。
皐月の足に髪を巻き込ませ、締め上げると、皐月は悲鳴を挙げた。
「お、お母サン！　どうしたデスか？」
「お母さんって……」
皐月がそう言うと、早苗は視線を皐月から早百合に向けた。
早百合は恐怖に満ちた表情を浮かべ、その場から動けずにいる。
「衣川さん！　逃げてっ！！」
皐月は早苗の髪の毛から逃げても、自分の髪をどうしようかと悩んでいた。
ふと先ほど早苗が落とした鋏が目に入り、それを取ろうとすると、気付いた早苗は髪を伸ばし、腕を縛り上げた。

「お母サン！　何してるデスか？」
早百合がそう叫ぶと、早苗は髪の毛を伸ばし、早百合を縛った。
首に絡んだ髪で絞め、喋れないようにする。
一瞬だけ緩んだ腕の締め上げに気付くと、皐月は一瞬のうちに鋏を手に取った。
そして一気に腕をすり抜けさせる。
気付いた早苗は再び皐月の腕を絞めようとしたが、鋏の刃は早苗の髪にではなく、皐月の髪を切ろうとしていた。

そしてバサリと髪が切られると、今まで引っ張っていた反動で二人は体を弾き飛ばされた。
「お母サン？」
「皐月さま？」
遊火と早百合がそう言うと、皐月はゆっくりと立ち上がり、

――オン・カカカビ・サンマエイ・ソワカ――

地蔵菩薩の真言を叫ぶと、突然遊火の体が光りだし、無数の火の玉となるや皐月の周りに飛び交う。

そして皐月や早百合の体を拘束していた早苗の髪の毛を燃やした。

地蔵菩薩の真言における功徳は多数あり、これは『神鬼助持（じんきじょじ）』という功徳である。

意味は『神霊が助けてくれる』というものであった。

それが遊火であったのだが、人の姿に戻った遊火は呆然としている。

「げぇほ……」

早百合がゆっくりと立ち上がろうとすると、早苗は髪を伸ばし、再び縛り上げた。

「衣川さん！」

皐月は持っていた鋏を掴み取り、早苗の髪の毛を切った。

しかし、髪が伸び続けている以上、埒が明かない。

「お母サン……　やめて……」

早百合は大粒の涙を浮かべながら、抵抗するが、締め上げている力は弱まることがなかった。

「遊火？　さっきみたいなこと出来ないの？」

皐月は先ほど見せた遊火を自分が呟いた真言によるものだと気付かず、そう尋ねた。

「で、出来ませんよ」

遊火は涙目で訴える。

「お、お母サン……　どうしてこんなことするデスか？」

早百合は必死に足掻きながらも、目の前にいる母親に問い掛ける。

「無駄よ？　その女はあなたを殺したいって言ってるんだから」
突然声が聞こえ、皐月はそちらを見るや、憤怒の表情をみせた。
「鴉天狗っ……！？」
「あら怖い怖い。でも事実よ。その女は娘を殺したいって願ってるわ。っていっても、実際血が繋がってるわけじゃないから、娘っていうのは可笑しな話よね？」
鴉天狗はクスクスと嘲笑しながら、早百合を見た。

「どう？　殺される気分は――怖いでしょ？」
「あなたガ……　あなたがお母さんをこんな風にしたデスか？」
早百合が鴉天狗にそう尋ねると、
「ええそうよ。本当なら妻である自分に遺産が転がるはずだったのに、娘のあんたに取られたんだもの。怨まないほうが可笑しいでしょ？」
そう言うが、鴉天狗は哀れむどころからケラケラと高笑いする。
「何が可笑しいデスか？」
「だって、ねぇ？　遺産っていうのは遺言書に記されていない以上、本妻が貰えるもんでしょ？　その次は血が繋がった自分の子供や親兄弟。後妻である自分がもらえるなんて思っていたこいつが哀れで、哀れで」
鴉天狗はそう云いながら、早苗を見た。
一瞬だけ早苗の動きが鈍くなる。

「さぁて、さっさと殺しなさい！」
「お母サン……」
早百合がそう叫ぶと、早苗は髪の毛を締め上げる。

「っ！？」
皐月は早苗の表情が一瞬強張っているのが見え、その瞳にうっす

らと涙が零れていたのに気付く。
「閻獄第五条十八項において、『大叫喚地獄・十一炎処（じゅういちえんしょ）』へと連行する！！」
そう叫ぶと、お札が現れ、早苗の額に付着した。
「ぎゃぁあああああああああああっ！！」
断末魔とも思える早苗の悲鳴が店内に響き渡った。
「お母サン？」
早百合がそう叫ぶと、蔓延っていた髪が燃えちり、早苗の髪は元の長さに戻っていく。
「きゃははははっ！　どうしたの？　妖怪と化した人間は罰せなければいけないのがあんたの仕事でしょ？」
晒いながらそう云うと、鴉天狗は皐月を見やる。
その皐月は早苗に駆け寄り、声をかける早百合を見ていた。
「お母サン？　大丈夫デスか？　お母サン？」
「んっ……　あっ……」
息を吹き返した早苗がゆっくりと目を広げる。
「さ、早百合……ちゃん？」
そう声を挙げると、早百合は顔を歪ませ、大粒の涙を零した。
「よかたデス……　よかた」
早百合は早苗の体をギュッと抱き締める。
早苗は何ことかわからず、戸惑ったが、ゆっくりと早百合を抱き締めていた。
「な、なによ、これ？　どうしてこうなるのよ？　怨みあってるんでしょ？　だったら殺しなさいよ！　殺し合いなさいよ！」
状況が把握できていない鴉天狗は狼狽する。
「だってそいつを殺せばあんたに金が入るのよ？　そのために殺したいって思ったんでしょ？」

「……っ」
皐月が小さく呟く。
「なによ？　何が云いたいのよ？」
何を云ったのかわからず、戸惑う鴉天狗が聞き返すと――――
「黙れって云ったのよ。この鳥畜生ぉっ！！」
皐月は禍々しいほどに低い声を挙げながら、鴉天狗を睨みつけた。
その相貌に光はなく、一目では何処を見ているのかわからない。
しかし、鴉天狗は直感したのだ。
皐月が睨んでいるのは自分なのだと――
鴉天狗は逃げるようにその場から飛び去った。

「皐月さま……」
遊火がそう声をかける。その声はどこか細々としていたので、皐月はどうしたのかと聞き返した。
「家の中を調べていたら、中に遺体が二つありました。おそらくこの店で働いている従業員だと思います」
遊火は部屋で見た現状を説明する。それは奇しくも現在の店内と同じ状況であった。
「殺したのは多分、あの人でしょうね」
皐月はゆっくりと早苗と早百合を見た。
「今は云わないほうがいいかもしれない――残酷すぎるもの」
皐月がそう呟くと、遊火も同じ考えだと頷いてみせる。
早苗を抱き締めている早百合の表情は安堵に満ちていた。

捌・香

リズム感のある鋏（シサー）の音が店内に響き渡っている。
椅子に座っている皐月は目を瞑り、ジッと動かないでいた。
髪を櫛で梳かしながら、揃えるように髪を切っている早苗はその髪に惚（ほう）けている。
何百人といわんばかりに女性の髪を見てきた彼女でさえ、皐月の髪は美しいとため息を吐くくらいであった。

「どうしたら、こんな髪になるのかしらね？」
早苗がそう尋ねたが皐月は答えない。
「学校で風紀検査したときもそうでシタ。黒川サン、答えてくれなかたデス」
隣で手伝いをしている早百合も皐月の髪に惚けていた。
「答えられないんじゃなくて、誰も信じないから答えないだけです」
皐月はチラリと二人を見やった。
「どんな方法でやってるのかしら？　手入れが行き届いているもの」
「シャンプーとかリンスはどこでも売ってるような安物なんですよ。ただちょっとトリートメントが違うだけで」
そう云うと、皐月は薄目で鏡を覗（のぞ）いた。
自分の髪を切っている早苗とそれを手伝っている早百合が本当の姿じゃないのかと思えてならず、先ほどまでの惨劇が嘘のようであった。
早苗の手元が震えながらも、早百合がやさしく声かけしているお陰で、今のところ失敗なく進んでいる。

「――トリートメントに？」
「私の家、大黒さまとかお稲荷さんを祭っている神社なんです。だ

からよく百姓の人から豊作のお礼にお米なんかを貰ったりしてて、それで米のとぎ汁でチェンジリンスやってるんですけど」

「そう。道理で薬品臭くないと思ったわ」

早苗がそう云うと、髪を櫛で梳かし、整髪していく。

「昔の人はそうやって身近なものを代用して、自分の体を綺麗にしていたの。そもそも髪を洗うというのは、紀元前エジプトにおいて、神様への祈りを捧げる禊(みそ)ぎからと云われていた。最初は水だったんだけど、徐々に泥へと変わっていった」

「泥にデスか？」

早百合がそう尋ねると、早苗は頷く。

「泥には炭酸ソーダやケイ酸アルミといった、アミノ酸系の洗浄成分が含まれていたみたい。それがシャンプーの起源と云われているわ」

「日本はどのくらいから始めたデスか？」

「日本でシャンプーが使われた歴史自体が浅くてね。それよりも前の話になると、稲や麦の茎を粉末にしたものを髪にふりかけて梳かしていたのが始まりだといわれてるの。そもそもそれまでお風呂に入るという概念がなかったらしくて、体の臭いを香の匂いで誤魔化していたそうだからね」

「汚いデスね」

「髪を水で洗うというのが広まったのは江戸時代末期。でも宮中の女官であっても一ヶ月に一回しか髪を洗わなかった。この時代、シャンプーの役目を果たしたのは布海苔(ふのり)、饂飩粉(うどんこ)、粘土、卵の白身、椿油(つばきあぶら)の搾りかすとされているわ」

そう説明していると、早百合は棚に置かれているシャンプーを見やった。

そこには椿オイルが含まれたシャンプーがあるからだ。

「昔は自然にあったものを代用していた。髪を石鹸で洗うのは明治

中期からと云われていて、それでも体と一緒に洗うというのが多かった。シャンプーを使うようになったのは昭和初期からとされているのよ――はい終わった」

早苗はそう云うと、皐月の肩を叩いた。

皐月はゆっくりと鏡に映った自分の姿を見るや呆気に取られていた。

今までは腰まであった自分の髪が今では肩までしかなく、内側に巻き込んだ形になっている。

前髪は目に入らない程度に少しだけ遊びが入っていた。

「あまり髪の毛は弄ってないわ。ううん、弄れなかったっていったほうがいいかもしれない。それだけ綺麗に保っていたんだもの、美容師として……本当にいい髪を切らせてもらったわ」

早苗はそう云うと、皐月の体に付着した髪をブラシで払い除け、前掛けのシーツを取ると、ゆっくりと椅子の高さを下ろした。

「すごく似合ってるデス。それなら校則違反にならないデス」

「へ、変じゃないですかね？　今まで長かったから、なんか首のところがスースーして」

皐月は笑いながら項（うなじ）に触れると、上空を一瞥した。

大人しく見ていた遊火は驚いた表情を見せている。

「大丈夫。長髪だった人が短くすると、最初そんな感じなのよ。でもあなたの場合は髪の毛が短いのも混じっていたし、いっその事、肩までにしたほうが見栄えがよくなるしね」

早苗はそう云うと、もう一度皐月の髪を丁寧に梳かしていた。

「いいんですか？」

カウンターで料金を払おうとした皐月が驚いた表情で尋ねた。

「早百合ちゃんやあなたに迷惑をかけてしまったからね。それにもしあなたが来てくれなかったら、私……」
早苗はそう云うと、涙を零した。
「お母サン」
早百合がゆっくりと早苗に寄り添う。
「早百合ちゃん。こんな……こんな私でもお母さんって」
「早苗さんはわたしのお母さんデス。お父さんが大切にしていた人を私も大事にしたいデス」
早百合がそう云うと、早苗はゆっくりと皐月を見た。

「私は地獄に落ちるんでしょ？」
そう尋ねられ、皐月は顔を俯かせる。
「どんな人でも必ず地獄に落ちます。すぐに天国にいけるはずがない。地獄で罪を償って、初めて衆生は天道にいける。でもそれは考えることすら馬鹿々しいくらいの年月を費やしますけど」
「それでもかまわない。私はもう一度この子の母親として……」
早苗がその先を言う前に、皐月は店を出て行った。

店の前から数百米ほど離れると、皐月は徐に携帯を取り出した。
その指は震えている。
「皐月さま？」
遊火が心配そうに声をかける。
「わかってる……　家の中で死体が発見されている以上、通報しないといけないでしょ？」
冷静を保ちながらも、皐月の表情は強張っていた。

『もしもし……　阿弥陀警部ですか？　その……』
皐月は電話先の阿弥陀警部にことの件を説明する。
説明を聞いている阿弥陀警部は信じられないといったばかりに驚いていたが、皐月の話に耳を傾け、至急パトカーを向かわせると云

った。

――電話を終えると、皐月はその場に跪き、慟哭した。

早苗と早百合が和解したというのに、どうして引き裂かなければいけないのか。

もっとあの二人を一緒にいさせてあげてもよかったのではないか。

だけれど、罪を見過ごすことはできないし、どうせすぐにわかることである。

ならばいっその事、早く通報したほうがいいのではないか。

そう考えていると頭の中がグチャグチャになり、神社に帰るまで皐月は抜け殻のようになっていた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「なるほど。それなら合点がいきますね」

その日の晩、衣川早苗を連行したことを説明にきた阿弥陀警部が納得した表情を浮かべていた。

「その早苗という女性は、ある事件で国条小百合を憎んでいた。そしてそれを夫の甥である衣川太一に轢き殺してほしいとお願いした」

そう話しながら、阿弥陀警部は皐月を一瞥する。

髪を切った皐月の容姿に戸惑っているのではなく、その表情が晴れやかではないからだ。

「死亡推定時刻が合わないのは納得いかんがな?」

拓蔵がそう云うと、

「ええ。おそらく店の中で見たという鴉天狗がなにかしら絡んでいると見て間違いないでしょ?」

そう話していると、どこからか声が聞こえ、拓蔵と阿弥陀警部はそちらに見やった。

その表情は驚きと警戒に満ちている。

「爺様、どうかしたの？」
葉月がそう尋ねると、拓蔵は少しだけ笑うと、
「いや、ちょっとトイレにな」
そう云いながら、拓蔵は席をはずすと居間を出ていった。
「あ、私はちょっと外でタバコを吸ってきますね」
云うや、阿弥陀警部も居間から出ていった。
その行動に弥生と葉月は首を傾げ、皐月は俯いた顔を少し上げ、一瞥していた。

肩を震わせた拓蔵と阿弥陀警部は境内に足を踏み入れていた。夏とはいえ、夜は冷える。
「久しいな。ヤマちゃんの旦那さま」
人影がそう話しかけると、拓蔵は怪訝な表情を浮かべる。
「何の用じゃ？」
月明かりが人影を照らすと、拓蔵と阿弥陀警部は真剣な表情になった。
人影の正体は高山信こと大威徳明王であった。
「いや、ちょっとね。この度の一連。犯人が捕まったようだな」
「ええ。意外な結末でしたが、でもまだ全体的に解決したとは思っていませんよ」
阿弥陀警部がそう云うと、大威徳明王は頷いてみせる。

「そのことなんだがな、事故現場で摩虎羅が体につけてきた髪の毛。これを調べたら捕まった衣川早苗のものだとわかった。おそらく彼女は髪鬼となっていたんだろう」
そう聞かされると、拓蔵は納得する。
髪鬼は怨念や嫉妬心が自分の髪に宿ったものとされている。
その髪は延々伸び続け、切っても埒が明かない。

「しかし、死亡推定時刻が噛み合わないし、そもそもその時間、衣川早苗は店の中にいた」
阿弥陀警部がそう説明すると、
「もし例えばだが――人が死んだことをなかったことに出来たらどうする？」
そう言われ、拓蔵と阿弥陀警部は首を傾げる。
「そんなこと出来るわけないでしょ？」
阿弥陀警部がそう言うと、大威徳明王は顔を俯かせる。

「そんなことが可能だというのか？」
「やつの力なら可能かもしれんな。いや、やつでなければ出来んことだろうが」
大威徳明王がそう云うと、拓蔵と阿弥陀警部は互いを見やった。
「言霊使い（ことだまづか）……　名前くらいは知っとるだろ？」
「ありもしないことをありとする。不思議な力を持った者のことじゃな」
「すべてのものには名前があり、その名前には魂が宿る。それを自在に操る術士でしたかね？」
「そう。首を絞められ瀕死状態だった衣川太一に『お前はまだ生きている』といえば、まだそいつは生きていたことになる。しかし、その魂は生きていても、媒体となる体自体はすでに死んでいるから、死亡推定時間が曖昧になってしまったという考えなんだがな」
そう説明すると大威徳明王は少しばかり頭を掻いた。

「なにか納得していませんね」
「今回の一連、言霊使いになんの利益があるのかということじゃな？」
「ご名答。衣川早苗は義理の娘である早百合を妬んでいた。それを言霊使いが心の隙間に入り込み、唆（そそのか）した――だが、それを言霊使い

自らがしたとは思えん」
「誰かに命じられたということか？」
「恐らくな……」
大威徳明王はそう云うと、阿弥陀警部を見た。

「他の十王から何か連絡はないのか？」
「今のところは、鴉天狗の行方は十二神将に任せているようで、地獄裁判も休みなしだそうですからね」
「お前は気楽でいいな。云ってしまえばお前だって十王であろう？　阿弥陀如来」
大威徳明王にそういわれ、阿弥陀警部は苦笑いを浮かべた。
「私は最後のほうですからね。それに四九日を過ぎると、殆どの人があまりしなくなるでしょ？」
阿弥陀如来――五道転輪王（ごどうてんりんおう）は没後二年目を意味する三回忌に行われる裁判長である。
あまり仏教に詳しくない人は四十九日を終えると何もしなくていいと思っているのかもしれない。
四九日に亡者が来世が決まるとされているが、実際仏になるのは十三王までの裁判を終える没３２年目の三十三回忌とされている。
「とにかく、俺はもう少し鴉天狗について調べるよ」
そう云うと、大威徳明王はスーと姿を消した。

「どうしたんですか？」
阿弥陀警部が拓蔵に声をかける。
「いや、なんでもない。しかし外は寒いな。早く部屋に戻って、弥生に熱燗の準備でもしてもらうか」
そう云いながら、拓蔵は足早に戻っていった。

拓蔵は戻る間、頭の中でこう呟いていた。
『ありもしないことをありとする……　それはあることをないとす

ることも可能。――まさかと思うが、遼子や健介さんの存在をなかったことにしているとすれば、三途の川に来ていないというのも合点がいくかもしれんな』

しかしその考えはどうだろうかと、拓蔵は自問していた。

玖・変化

『大宮忠治っと……』

緊迫した表情を浮かべながら、皐月は警察病院の受付で面会書の記入をしていた。

面会書に面会する患者の名前と、自分の名前を記入していく。

それを看護師に見せると、

「あら？　皐月ちゃん、髪切ったの？」

そう尋ねられ、皐月は首を傾げる。

今まで何度もお見舞いに来てはいたが、自分から名乗った覚えがない。

「夏休み中、殆ど来てたんだもの。知らないほうが可笑しいわよ」

からかうように笑う看護師を見るや、皐月は恥ずかしそうに視線を逸らした。

「大丈夫ですよ。似合ってますって」

病室へと渡る廊下で、遊火が声をかける。

「あのね？　前に一回髪をほどいて、前髪をあげただけの格好でここにきた時、大宮巡査に誰って訊かれたことがあるんだけど？」

上空で浮かんでいる遊火にそう言うと、皐月は大宮巡査が入院している個室の前に差し掛かる。

そして一、二度ほど深呼吸すると、ドアをそっと開いた。

「大宮巡査――　起きてます？」

そう尋ねながら、部屋の中を覗き込むと、

「ちょ、やめろって」

大宮巡査の声が聞こえ、皐月は起きているんだなと認識する。

が、どうも様子が可笑しい。
病室は事情によって個室であるため、当然のことながらベッドはひとつしかない。
そのベッドの近くに、胸まで伸びた赤茶色した髪の女性が丸椅子に座りながら、大宮巡査に桃を食べさせようとしていた。

見た目は若く、２０代と云ったところか。
皐月が部屋に入ってきたことに気付くと、女性は皐月の方を見遣ると軽く会釈した。
「あら？　忠治くんの知り合い？」
そう尋ねられ、皐月は小さく頷く。その表情は少しばかり苛立ちを見せていた。
女性の容姿は若々しく、綺麗とも見えるし、可愛らしくも見える曖昧さがある。
そんな女性（ひと）が大宮巡査を名前で呼ぶということは、知り合いにほかならない。
しかも結構馴れ馴れしい態度をとっている。
「ほら、忠治くん。はい、アーンして……」
女性が桃をフォークで刺し、それを大宮巡査の口元に近づける。
「だから、一人で食べれるって」
抵抗している大宮巡査だが、その表情は苦笑いである。
「なんかお邪魔のようですから、私は失礼します」
そう云うと、皐月は頭を下げ部屋を出て行くと、ドアを乱暴に閉めた。

「あらあら、私なんか悪いことしちゃったかしら？」
女性はそう云いながら、首を傾げる。
「ああ、もう！　なんでそういうのに疎いかなぁ？　誰のせいで彼女出来ないと思ってるんだよ？」
大宮巡査が普段見せないほどの苛立ちを女性に見せた。

「だって、私綺麗にしてないと、詐欺って言われるしぃ～」
女性は少しばかり涙目になる。
「だからって、年齢を半分以上もサバが読めるくらいに綺麗にならなくてもいいだろ？」
大宮巡査はそう云いながら、ベッドの片隅にかけていた松葉杖を手に取り、ゆっくりとした足取りで、病室を出ていった。

「皐月ちゃん、ちょっと待って……」
うしろから大宮巡査が声をかけるが、皐月はズカズカと廊下を歩いている。
「ちょっと待って……」
「大宮さん、廊下で騒がないでくれませんか？」
看護師にそう言われ、大宮巡査はゆっくりと廊下を歩き始めた。
そうなると、当然のことながら、皐月の姿を見失うのだった。

「信じらんない！」
と、憤り（いきどおり）を露（あわら）に皐月は病院の表に出ていた。
「あんな綺麗な彼女がいるくせに、ずっと私のこと思ってたなんて考えてた自分が馬鹿に思ってきた」
「別に皐月さまがそう思ってただけかもしれませんよ？　そもそもそれ以上の付き合いでもなかったんですし」
遊火がそう云うと、皐月はキッと睨みつけた。

「皐月ちゃん、ちょっと待って」
病院の方から先ほど病室にいた女性が皐月に声をかける。
「なんですか？」
皐月は苛立った表情で、女性を見遣るが、女性の容姿に内心見惚れていた。
「た、忠治くんのお見舞いにきたんでしょ？」
肩で息をしながら、女性はそう尋ねる。

「そうですけど、でもお二人の邪魔しちゃいけませんし」
「邪魔なんてとんでもないわ。どっちかって言うと『小母さん』のほうが邪魔者でしょ？」
「そんなこと」と皐月は云おうとしたが、言うが前に携帯が鳴り響いた。

携帯の液晶を見ると、相手は大宮巡査であった。
皐月はムッとしながらも、電話に出る。
「もしもし？」
『あ、皐月ちゃん。その……さっきはごめん』
どうして謝るんですか？と皐月は尋ねる。その声は苛立っているのが明らかなほどに低い。
『その、よかったら病室に戻ってきてくれないか？　話したいこともあるし、それに誤解されたままだと僕も嫌だしさ』
皐月は女性を見遣る。
「忠治くんの言うとおりにしてあげて」
苦笑いを浮かべながらそう云うと、女性は病院へと入っていった。
「わかりました……　きっちり話してもらいますから」
そう云うと、皐月は乱暴に電話を切った。

――というのが、今から十分ほど前までの遣り取りであった。

「っへ？」
そして現在。皐月はベッドの上に腰を下ろしながら、大宮巡査と女性を交互に見渡していた。
その表情は先ほどまで見せていた苛立った表情よりかは焦った表情といったほうがいい。
それもそうであろう。この状況をどう理解しろというのか。
「だから、母さんはもう少し年相応に老いてくれないか？」

皐月の隣に座っている大宮巡査は頭を抱えていた。
「だってお母さん、化粧会社の社長だから綺麗にしとかなきゃいけないじゃない？」
女性は涙目で訴える。
「わかってる、わかってるけどさ。どこからどう見ても、五十路間近の容姿じゃないだろ？」
そう言いながら、大宮巡査は女性を指差した。
「え～、皺が見えないように厚化粧してるけど、ぜんぜん厚化粧に見えないファンデーションとか、若くて瑞々しい唇を保つリップクリームとか、色々開発してるから」
「そういう問題じゃない！　僕が云ってるのはどうして素顔（すっぴん）でも僕と同じくらいの年齢に見えるのかって話だよ！」
という話を皐月は横で聞いているのだが、まったくもって理解できなかった。

「あ、あのぉ～、要するに私の勘違いだったと？」
皐月は手に持った名刺を見ながら、二人に尋ねた。
名刺には女性の写真が貼られており、『大宮葵』と書かれており、一緒に誕生日もある。　昭和ＸＸ年４９歳と記されていた。

「そ、今まで付き合ってきた彼女も殆ど母さんのせいで、一方的にふられてたんだよ」
大宮巡査は苦笑いを浮かべながら、皐月に話しかける。
「で、でもどうして今まで会わなかったんですか？　私夏休み中ほとんど来てましたけど」
皐月がそう尋ねると、女性――葵は苦笑いを浮かべる。
「海外に出張することもあって忙しかったからね。帰ってきたのも最近だったし、でも忠治くんからあなたのことはよく聞いてたのよ」
そう云うと、葵は皐月を翼々見つめる。

「うん。若いっていいわね。ハリのある瑞々しい肌をしてる。ううん、極力化粧品に頼っていないっていったほうがいいかもね。血行もいいし、顔色も合格。よく運動して、よく食べ、よく睡眠をとってる」

「そ、そんな簡単なことで？」

皐月は生活態度を普段から拓蔵に厳しく云われているので、この行動が極当たり前のことだと思っている。

「あら？　それが一番いい美容方法なのよ。よく食べることで栄養が体に行き渡る。そして運動することによって、余分なカロリーが消化される。そしていい睡眠時間をとることで体はきちんと休むんだから。体が悪いとお肌に影響が出て、終いには皺だらけのおばあさんになっちゃうんだから」

さすがは化粧品会社の社長である。説得力があるにはあるのだが、

「母さんがそういっても、説得力がないだろ？」

大宮巡査にそういわれ、葵は苦笑いを浮かべた。

たしかに年相応の容姿ならば説得力はあっただろうが、見た目は大宮巡査と変わらない２０代だ。いかんせん説得力に欠けていた。

「それじゃ、お母さんお仕事だから」

病院の入り口に黒塗りのベンツが停まっている。

その後部座席の窓を開け、葵が顔を覗かせていた。

「ああ。社員の人たちにもよろしく云っといて」

大宮巡査がそう云うと、葵は笑いながら頷いた。

そして皐月のほうを見ると、優しく微笑んだ。

「皐月ちゃんも、忠治くんのこと、これからも大事に思ってあげて。この子彼女いるとか云ってたけど、実際いたのかどうかもわからないし、若しかしたらキスもしてないかもしれないわよ」

「――母さん！」

大宮巡査が怒鳴ると、葵はクスクスと笑みを浮かべながら、車の

窓を閉めた。
「今日は楽しかったわ。それじゃまたね」
ベンツはゆっくりと病院を後にした。

「まったく人騒がせな人だ」
大宮巡査は頭を抱えながら、病院の中に入ろうとするが、
「あれ？　皐月ちゃん」
呆然と立ち竦んでいる皐月に声をかける。
「あ、な……なんですか？」
ハッと気付き、皐月はあたふたとした表情で聞き返す。
「ビックリした？」
「ビックリしたっていうか、まだなんか信じられなくて」
皐月は照れくさそうに顔を俯かせている。

「ははははっ……　まぁ、学校の友達からも言われたことあるよ。お前の母さん本当は何歳なんだよって、それくらい変わらないからなぁあの人は」
苦笑いを浮かべながら、大宮巡査は皐月の手をとった。
「ほら、色々聞きたいこともあるし、それに髪切ったんだね」
そう尋ねられ、皐月は申し訳ないような表情を浮かべた。
その態度が心配になり、大宮巡査は――

「大丈夫。すごく似合ってて、可愛いよ」

たった一言である。
皐月が髪を切り、印象を大きく変えたことで大宮巡査に嫌われないかと心配していると察しての言葉であった。
それを聞くと、皐月は自然と笑みを浮かべていた。

拾・心機一転

「そういうわけデスので、黒川さんが気にすることじゃないデス」
早百合はそう云いながら、ゆっくりとした足取りで歩いていた。
その一歩うしろを皐月は歩いていた。二人とも学校の制服を着ている。
長かった夏休みも終わり、今日から二学期であった。

「それにあの刑事さんが、お母さんは妖怪に取り憑かれたせいであなったって云ってまシタし、今までのこともありマスから、少し頭を冷やす機会ができてよかたデス」
「衣川さんは……強いんだね」
皐月はとても目の前で肉親が逮捕されることが想像できなかった。
――いや、したくなかった。
「強くなんてないデス。わたしお母さん助けられませんでシタから」
皐月は少しばかり早足になる。それでも早百合との距離が縮まらなかった。

執行人としてではなく、死体を発見したという理由で通報しなければいけない。
もう少しだけ一緒にいさせてあげてもよかったんじゃないかと考えても、答えは出なかった。
結局、皐月が後悔しても始まらないだけである。
それに比べて、早百合の表情は穏やかであった。
どこか吹っ切れたというべきか……

「お母サン、先端恐怖症だったデス。でもちゃんと切れまシタ」
そう云われ、皐月は自分の髪に触れる。

今ではすっかり肩まで伸びた髪にも慣れ、皐月はこの髪もいいかなと思っていた。
「それにシテも、やっぱり黒川さんの髪、綺麗デス」
早百合はそう言いながら、皐月の髪を見つめながら、
「羨ましいデス。でも大事にしないとすぐに悪くなりマス」
ビシッと指を突き立て、皐月に注意する。
「気をつけます」
皐月がそう云うと、早百合は笑みを浮かべた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「娘をよろしくお願いします」
深々と頭を下げ、早苗は阿弥陀警部と佐々木刑事に云った。
事件から三日後。現場検証のため、一時的に早苗は早百合と再会していたが、会話もなく状況説明のみに終わっていた。

「お母サン……」
早百合はパトカーに乗り込んだ早苗に声をかける。
「ごめんなさい、早百合ちゃん……」
早苗はそれ以上何も云わず、無常にもパトカーは走り去っていった。

「取り敢えず、ご親戚に連絡をっと云いたいんですけど、ちょっと訊きたいことがあるんですが、いいですかね？」
阿弥陀警部はゆっくりと早百合を見る。
「なんデスか？」
「あなたのお父さん、衣川憲輔さんの甥である衣川太一さんが先日事故で亡くなってるのはご存知で？」
そう訊ねると、早百合は答えるように頷いて見せた。
「その、お母さんとその人が会っていたというのは？」

「おじさんは親戚ですからお盆とかよく会いマス」
「頻繁に会ってはいないんですか？」
「おじさん、配達で忙しくって、盆正月以外は殆ど会える人じゃないです。全国回ってるようなものデスから」
早百合がそう説明すると、阿弥陀警部は表情を険しくした。

「それじゃ事故が遭った日、おじさんから連絡は？　それとお母さんは何処に？」
「連絡があったのは知らないデス。でもお母さんは開店からずっとお店にいたデスよ」
「一度家に戻ったとか……」
「お昼の休憩時間に一度家に戻ってきてます。でもご飯を食べるくらいで、３０分もいなかったデス」
「それは何時くらいなんじゃ？」
「休憩時間は大体お昼の一時くらいからです」
阿弥陀警部は頭を振る。整理が追いつかない。
「衣川太一が亡くなったのは事故が起きた日の午後二時前後。ですが事故が起きたのは午後三時前後……　つまりこの空白、お母さんは店の中にいたんですよね？」
そう訊かれ、早百合は頷いた。

「交通部の鑑識課にもう一度確認をしてみるか？」
佐々木刑事がそう云うと、
「――ですね。どう考えても早苗さんは犯人ではない。事故があった繁華街まで車で走っても、渋滞に引っかかって時間の計算が狂ってしまうのがオチでしょうし、それに休憩時間が一時間としたら、３０分で往復しないといけないってことですよ？」
阿弥陀警部はそう云いながら、早百合を見やった。
家族のアリバイ証言は証言とはみなされない。
そもそも早苗のアリバイは早百合や今は亡き従業員の二人だけで

はない。
あの日、あの時間、お店の中に早苗がいた事を来客した全員が証言している。
つまりあの日、早苗が午後二時前後に衣川太一に会うことは無理であった。

突然、阿弥陀警部の携帯が鳴った。
「もしもし……　阿弥陀ですが？」
『阿弥陀か？　ちょっとな交通部の鑑識にお願いして遺体の写真を見せてもらったんじゃがなぁ』
電話の相手は湖西主任であった。
「あ、私たちもこれからそちらに伺うつもりだったんですよ」
阿弥陀警部がそう云うと、
『まぁ、ちょっとこっちに来る前に……　葉月ちゃんが霊視で被害者は首を絞められたようなことをいっとたわけじゃな？』
「ええ。でも実際には絞殺された痕はなかったようですけどね」
そう話すと、湖西主任は一瞬間を置いた。

『人はどうして首を絞めたときに窒息すると思う？』
「え？　そりゃ首を絞められたからじゃないですかね？」
『頸部（けいぶ）が圧迫されることで気道が塞がってしまい、酸素を補給できなくなってしまう。それによって窒息してしまうんじゃがな……それじゃと事故に遭った被害以外に異変があるはずじゃろ？』
「ええ。まぁそうですね……」
阿弥陀頸部は湖西主任は何を言いたいのか、わからずにいた。
『窒息にはさっき説明した気道閉塞ともう二つ、動脈閉塞と静脈閉塞（へいそく）というのがあってな、そっちの方も調べてみたんじゃが……』
「何かわかったんですか？」
『虫刺されじゃよ……　ちょうど首の動脈に蜂の針が刺さっておった』

阿弥陀警部は一瞬戸惑った。そしてもう一度確かめるように訊ねる。

『それをふまえて、どうしてあの車に衣川早苗の髪の毛があったんじゃろうな？』

阿弥陀警部は一度携帯に手を添え、湖西主任にこちらの会話が聞こえないようにした。

「すみません。早百合さん……　お母さんがおじさんの車に乗ったことは？」

「一度もないデス。自家用車じゃないデスから、仕事の人以外は乗せられないって言ってました」

早百合が答えると、阿弥陀警部は湖西主任に説明した。

「――だそうです。それと発見された髪は早苗さんので間違いないんですよね？」

『大威徳が言うとおり、ＤＮＡ鑑定をした以上、車に早苗本人が乗っていたと思えるんじゃが、どうも可笑しいんじゃよ』

「可笑しいとは？」

『地蔵菩薩のもつ浄玻璃鏡を通じて、現世の監視が出来るはずなんじゃが、何回やってもぼやけてしまっとるんじゃ』

「つまり……　人間でもなければ、妖怪の仕業ではない……と」

『こんなことが出来るのは妖怪以上の力を持っているかじゃろ？』

阿弥陀警部は少し考える。

遺体に刺さっていた蜂。そして浄玻璃鏡が映し出せない理由。

それらを組み合わせて、それをした人物を思い浮かべたが……

「何を持って、あの人はそんなことするんですかね？」

そう尋ねたが、湖西主任は答えられなかった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「さ、皐月？　どうしたの、それ」
教室に入ってきた皐月を見るや、クラスの女子が絶句する。
逆に男子は歓喜のような声を挙げていた。
「え？　ちょ、なに？」
突然大声を挙げられ、さらには詰め寄られる形になっているため、皐月は戸惑う。
「あんた、髪短く切ったわけ？」
「き、切ったけど？　それがどうかしたの？」
そう尋ねると、
「黒川さんの髪、サラッとしてて、綺麗だったのにぃ」
「あのキューティクルで、ビューティフルな黒髪が拝めないなんて」
女子の何人かが残念そうに言う。
皐月はもう見慣れているし、今まで長髪だった分、髪を洗うのが何かと楽になっている。
それで残念といわれると、ちょっと心外であった。

「あんたたち、違うわ。皐月は重大な決意があって髪を切ったのよ」
萌音がそう云うと、クラスメイトはごくりと喉を鳴らした。
「じゅ、重大な決意って？」
当の皐月はなんのことやらわからなくなっている。
「ふふふっ、私にはわかるわ。皐月には彼氏がいる！」
そう云うと、クラス全員が驚いた声を挙げた。
「そしてそんな皐月が髪を短く切るということは……」
「ふられたからとか云わないでよ？　そんな理由で髪を短くしたわけじゃないし、そもそもふられる理由なんて今のところないんだから」
キッパリと皐月は言った。

「え？　違うの？　だって腰まであったのが肩までしかないって、結構切ってるってことよ？」

目を点にしながら、萌音は尋ねる。
「ちょっと短くしたいなって思っただけ……」
皐月はそう云いながら、ふとうしろを一瞥すると、廊下で早百合が歩いてるのが見えた。
早百合はゆっくりと皐月がいる教室のドアまで歩いてきている。
――案の定、早百合は教室のドアを開けた。

「風紀検査をやるデス。夏休み中、ふしだらな行動をしていなかったか、髪はちゃんとしてイルか、じっくり調べさせてもらうデス」
教壇に立った早百合がそう告げると、皐月以外のクラス全員が悲鳴にも似た声を挙げた。

九月上旬、窓際の席から見える外の風景は、秋の訪れを知らせていた。

拾・心機一転（後書き）

第十七話終了です。

壱・夢寐（前書き）

夢寐（むび）：眠って夢を見ること。また、その間。

壱・夢寐

見慣れた景色に違いない。――そう信乃は思いたかった。
これが夢なのだと自覚しているし、何よりも忘れたくても忘れられない景色だった。
――ここを曲がったら……
信乃は考えるのを躊躇った。

どうして、ずっとこの夢を見るんだろう？
この先を曲がると、見えてくる景色は彼女が一番見たくない景色だった。
一番大好きな『ユズ』という飼い犬が、得体の知れないナニカに貪られるように喰い殺された現場。
彼女が人ならぬものを罰する力を得ようと思ったのは、ユズを殺したナニカを殺すため。
それ以上に理由はなかった。

信乃の足は身勝手に、まるで引っ張られているかのように進んでいく。
そして、視界にソレが映し出された。

耳障りな音とともに、得体の知れないナニカがユズを食べていた。
食べ零された皮や骨、臓器が信乃の目の前に転がり落ちていく。
そして、一際大きな音がし、信乃はそれを見た。

「……っ」
信乃はそれを見たくなかった。しかしそれを拒むかのように顔は微動だにせず、目を大きく開き、それを見せようにする。

――骨と脳髄を剥き出しにしたユズの頭部が、ジッと信乃を睨みつけていた……

ガバッと布団から飛び起き、信乃は漸く夢から覚めた。
その表情は強張っており、全身には脂汗が出ている。
ゼェゼェと息が整ってはいなかった。
一度生唾を飲み、ゆっくりと深呼吸をする。
そしてふと時計を見た。――針は四時を刺していた。

信乃はゆっくりと布団から出ると、カーディガンを肩に羽織り、階段を下りた。
居間の方を見ると、朝早くから小坊主たちが忙しく動き回っている。
彼らの朝は早く、朝四時くらいになると、信乃と浜路以外は殆ど起きており、住職である鳴狗実義（さねよし）は、居間でゆっくりとお茶を飲んでいた。

信乃が起きてきたのに気付いた実義は、そちらに見向きもしないまま、「気が乱れておるな。またあの夢か」と尋ねる。
その言葉に、信乃は黙り込む。
「お前がその夢を毎夜見ることになったのは、あの事件が起きてからじゃったな」
実義がそう云うと、信乃は実義の右隣に座った。

「聞けば、犬神と対峙していたお前と皐月ちゃんは、お前よりも皐月ちゃんのほうが深手を負っていたそうじゃ……　いや、むしろお前だったから犬神は殺せなかったんじゃろう」
「わかったような言い方しないで」
信乃は実義の目が見れなかった。彼女自身あの犬神がユズではな

いかと考えてはいる。
しかし、それを認めると信乃はユズを殺そうとしていた。
そしてそれが仇となり、今度は殺されるのではないかと恐れていた。
――あの悪夢はそれを暗示しているんじゃないだろうかと、信乃は身を震わせる。

「お前が妖怪を怨むのはわかる。ユズを殺したナニカを殺したい……しかしな、怨みは何も生まんし、なんの解決にもならんよ」
「それじゃ……　それじゃ、おじいちゃんはユズを殺したソイツを見逃せっていうの？」
信乃は大声を張り上げるように言い返した。
「見逃せとは云っておらん、妖怪を殺すことをやめろといっておるんじゃ」
実義の表情は微動だにしていない。
「ユズを殺したのは妖怪でしょ？　だったら、妖怪全部を怨んで、殺して、殺して……」
信乃はそれ以上何も言えず、耐え切れなくなり、居間を出ていった。

ユズを殺したナニカを殺して……　それじゃソイツを殺したら、何が残る？
そんなの決まってる、空虚しか残りはしない。
死んだ生き物が生き返るわけがない。信乃も馬鹿ではないのだからわかりきっていた。
だが、ナニカの正体がわからない以上、妖怪を無造作に殺さなければいけない。
何の手掛かりもないのだ。そのナニカに関するものがなにひとつ……

実義は信乃が居間を出て行き、漸く廊下側の襖を一瞥する。
「真達羅どの」
そう呟くと、スーと、十二神将の一人である真達羅が姿を現した。
その身形は小さな虎であった。
「あの子に力を与えるのは無理でしょうな？」
「わいはあの子を信じとる。必ず自分の負の感情に勝てることも、そして妖怪を本当の意味で罰せることもな……」
真達羅がそう云うと、実義は小さく笑みを浮かべた。

「そうやなかったら、変成王（へんじょうおう）はんが信乃に執行人としての力を与えやせん」
真達羅は胸を張ってそう言うと。
「それにあの人の未来予知は何度やっても、皐月はんと信乃はんが一緒に笑ってる姿しか見えんそうや」
「じゃといいんじゃがな」
実義はゆっくりと虚空を見つめた。

「人の怨念は簡単に休まりはせんよ。どこかで歯止めをかけんと……」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「はい、そうです。地震が起きる夢を見て……　ええ、すごくリアルでした。本当に地震が起きてるんじゃないかって……　――そしたら、一年後にあの大地震が起きたんです。他にも自分の周りが火の海になっていて、一週間後に家で火事が起きたんですよ。ストーブの近くに服がかけてあって、それが落ちて燃えてしまっていたんです」
ＴＶから女性の体験談が淡々と流されている。
「予知夢ねぇ……」

ＴＶを見ながら、チョコスティックを食べている皐月が呟く。
その表情は狐に摘まれたかのように眉を顰めていた。
はっきり言って、皐月はこういう眉唾物（まゆつばもの）は嫌いである。
そもそも彼女だけになく、三姉妹自身、妖怪やら幽霊やらの相手をしているのだから、そちらの方も非現実と云えるのだが、彼女たちにしてみれば現実なのだから、仕方がない。
しかし、夢となると非現実に相違なかった。

「だいたいストーブの近くに物置かないのは当たり前でしょ？」
「皐月おねえちゃんが言うと説得力あるよね？　去年だっけ？　低温火傷したのって」
葉月が思い出すように尋ねる。
低温火傷はその言葉どおり、ストーブが低温状態の時、その近くに長時間いると火傷を負ってしまう外傷である。
「あれは皐月がストーブを点けっ放しにしたまま、足を向けて昼寝していたのがいけなかったんでしょ」
弥生はそう云いながら、皐月が食べているチョコスティックを袋から一本取り出し、それを口に運んだ。
「わたしタイマーつけてたはずだったんだけどなぁ」
皐月は首を傾げながら言った。

「それにしても、夢なんて何が起きるかわからないでしょ？」
「そうじゃがな、死んだ人が何かを告げることを『夢枕に立つ』というぞ？　若しかしたら、予知夢もそれに似たものかもしれん」
「死んだ人か……　爺様は生きてるし、お父さんとお母さんは閻魔さまの話だと死んでいないことになってる」
皐月がそう云うと、弥生と葉月も頷く。
「そうなると、私たちの夢枕に立つのっておばあちゃんくらい？」
弥生がそう云うと、拓蔵は弥生を見やった。
「どっちの？」

葉月がそう尋ねると、弥生は少し考える仕草をする。

「どっちかなぁ……　正直お父さん側は事故が遭ってからの6年間、ちっとも連絡してきていないしね――訃報がないから生きてるんだろうけど」

「それじゃ、お母さん側のおばあちゃんってこと？」

皐月は拓蔵を見ながら尋ねると、弥生は先ほどと同じように考える仕草をした。

「っても、お母さんが生まれてすぐに死んだって、お母さんや爺様に聞いたことあるからなぁ……」

「夢枕は別に身内だけではないぞ、若しかしたらずっと昔のご先祖さまかもしれん」

拓蔵がそう云うや、「まさかぁ」と、三姉妹は笑みを零した。

壱・夢寐（後書き）

第十八話です。今回から小説家になろうのみの連載になります。

弐・幽玄

阿弥陀警部、ならびに佐々木刑事が現場である二階建ての一軒家に訪れたのは、まだ薄暗い明朝４時のことであった。

大きな悲鳴と物音が被害者の部屋から聞こえ、それに驚いた母親が部屋を覗いたが、何事もないように被害者はベッドで眠っていたという。

母親は被害者に何が起きたのかを尋ねようと、被害者を起こそうとしたが、一向に起きないという。

その違和感で、母親は警察に連絡したという。

「あの子はすぐに起きるんですけど、まるで死んだみたいに眠っているんです」

母親の証言を聞きながら、阿弥陀警部と佐々木刑事は被害者である『近藤武蔵』を見ていた。

彼らも一、二度ほど武蔵を起こそうとしたが、まったく反応がなかった。

「被害者が就寝した時間は？」

「息子は今年受験で、その勉強していましたから、詳しくは……ただ何かを探しているような、微かな物音はしていたので、本棚から参考書を出していたんだと」

母親の説明通り、机には勉強道具一式が出され、本棚には、本が抜かれた形跡を示すように、本の間に隙間が出来ている。

「佐々木刑事、何かわかりました？」

「まぁ、素直に寝ていると思って間違いないじゃろうが、胸も動いておるしな」

佐々木刑事の言う通り、武蔵の胸は上下に動いている。

肺呼吸をしているのだから、動くのは当然で、そもそも死んでいたとすれば呼吸などできるはずもない。

ふと阿弥陀警部は武蔵の相貌が一瞬動いたのに気付き、片目を指で抉じ開けた。
そしてよく見えるように、ペンライトで瞳を照らした。
「――瞳孔が動いてる？」
瞳孔とは、眼球に光が入るようになっている部分で、カメラで言うレンズの役割を持っており、人や動物が物を見るさい、その光を通して脳に、景色や形といった情報を伝達している。
「生きてるって証拠かね？」
「いや、瞳孔が動いてるって事は、何かを見てるって事ですよね？」
阿弥陀警部がそう云うと、佐々木刑事は少しばかり顔を歪ませる。
「何かを見ているとすれば――夢ってことか？」
「そうなりますね」
ここまでして起きないのだ。深い眠りでなければ――
「深い眠りの状態で夢なんて見るんですかね？」
夢を見るというのは殆どがレム睡眠状態といった、浅い眠り状態といわれている。
どうしてそう云われているのかというと、夢というのは脳が活動していなければ見ることが出来ない。
つまり体が眠った状態で脳が覚醒している浅い眠りほど、夢を見るとされている。
しかしながら、そういうことがある以上、やはり起きないというのは如何せん可笑しい。
突然、武蔵が上半身を起こし、目をカッと開いた。
「武蔵くん？」
母親が声をかけるが、武蔵は何も反応を示そうとしない。
「あの、起きてますか？」
阿弥陀警部が尋ねると、武蔵は体を起こし、ゆらゆらとした足取

りで、部屋の窓に近づき、窓を開けるや、そこから飛び降りようとする。

「ちょ、何やってるんですか？」

阿弥陀警部と佐々木刑事が止めにはいるが、武蔵はそこから動こうとはしない。

「む、武蔵くん、やめてっ！！」

母親も止めに入ったが、武蔵はそれを振り払い、窓に足をかける。

「っ！　迷企羅っ！」

阿弥陀警部が十二神将の一人である酉神の迷企羅を呼び出すと、窓の外には白髪に赤のメッシュが入った青年が上空に姿を現した。

「武蔵くんっ！」

母親の悲鳴と同時に、武蔵は体を外に放り込んだ。が、その空中には既に迷企羅が受け止められる体制でスタンバイしていた。

阿弥陀警部はホッとした表情で下を見下ろす。迷企羅も同様であった――

武蔵は迷企羅を見るや、ニヤッと大きく顔を歪ませ、体を捻り、迷企羅の腕をすり抜けた。

迷企羅はハッとし、腕を伸ばしたが、間に合わず、グチャっという何かが潰れた音と、母親の絹を裂くほどの慟哭が朝の訪れを知らせていた。

遺体となった武蔵が運び込まれたのはそれから間もない頃であった。

阿弥陀警部と佐々木刑事は、武蔵が落ちた場所から部屋の窓を見上げている。

二人の額には脂汗が出ていた。

「落ちる途中から体がずれる事なんてあるんですかね？」

阿弥陀警部はまだ乾ききっていない血溜まりを見るや、佐々木刑事に尋ねる。

窓から垂直に飛び降りたとすれば、多少のズレはあっても、肩幅くらいのズレが起きることはあまりない。

「強風に煽られてならわかるが、そんなものはなかったしな」

佐々木刑事はそう言いながら、母親のところへと戻った。

「阿弥陀如来さま」

すれ違いに迷企羅が姿を現す。その表情には焦りがあった。

「どうしたんですか？　あれくらいの高さだったら、楽に受け止められたでしょ？」

阿弥陀警部は表情を和らげながらそう言うが、相貌に余裕が見えない。

「あの者……　私のことが見えておりました」

迷企羅がそう報告すると、阿弥陀警部は首を傾げた。

迷企羅は十二神将の一人であり、ただの人間が容易く見ることなどできない。

阿弥陀警部や湖西主任は人の姿に権化しているため、普通の人でも見る事ができる。

しかし元々が本家となる菩薩や如来、明王の化身である彼らの姿は本人が見せようとしない以上、人が見る事は不可能であった。

「あなたのことが見え、体を捻ったと？」

「そうとしか……　ただあの者、落ちる瞬間、私を見るや顔を歪ませ」

「顔を――ですか……」

阿弥陀警部はそう呟くと、母親のほうを一瞥した。

母親は跪き、荒々しい声を挙げていた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「夢遊病ですか――」

警視庁刑事部鑑識課の一室で、阿弥陀警部と佐々木刑事は、湖西主任から遺体の検死結果を聞いていた。

死因は脳挫傷によるショック死とされたが、湖西主任は阿弥陀警部と佐々木刑事の報告から、その原因を夢遊病と言い返した。

「一昔前に、インフルエンザに罹った10代が、その薬を飲んで、異常行動や転落事故があったという報告があったじゃろ？」

「ええ。聞いたことありますけど、でも今回はそういったのは母親から聞いてませんよ」

「血液にもインフルエンザ反応はなかった。というより、時期的にも罹るとは思えんしな」

「そうなると、やはり先ほど云ったとおり、夢遊病といった感じなんかね？」

佐々木刑事がそう訊くと、湖西主任は顔を俯けながら椅子に座った。

「それなんじゃがな、夢遊病――正確に言えば睡眠時遊行症（すいみんじゆうこうしょう）というんじゃが、これはノンレム睡眠状態に多く見られると云われていてな、眼球運動をしているレム睡眠とは対照的に、ノンレム睡眠は眼球運動を伴わないんじゃよ」

阿弥陀警部は自分たちが武蔵の目を見た時、頻りに動いていたことを思い出す。

つまりその状態はレム睡眠であったという説明がつくが、

「入眠時、最初に起きるのがノンレム睡眠。続いて約1、2時間ほどでレム睡眠になる。それから交互に起きるとされてるんじゃよ」

「わしらが来たときは目が動いておったから、レム睡眠状態――つ

まり浅い眠り」
「でも、夢遊病はそれとは別のノンレム睡眠状態に起きる」
阿弥陀警部と佐々木刑事がそういうと、湖西主任はもうひとつの可能性を話した。

レム睡眠行動障害というものは、本来体を動かせる状態ではないレム睡眠では見られない体を動かすという症状である。
簡略に説明すると、寝言や異常行動がそれにあたる。
これと似た症状である夢遊病と違うのは、本人は夢が見れる状態――レム睡眠状態は脳が覚醒している可能性があるため、本人が内容を覚えている場合があるが、ノンレム睡眠は脳が覚醒していないため、記憶にないことがほとんどである。
湖西主任はそれも考えられるのではないかと二人に説明した。

参・囁

「えっと……？」

福祠駅の近くにある書店内で、漫画雑誌の陣列棚を見渡しながら、信乃は首を傾げていた。

目的の品が売り切れているわけではないのだが、どうも釈然としない表情を浮かべている。

彼女が納得していないのは、今日最新号が発売であるにも拘らず、あるものが封入されていないことにあった。

「すみません」と信乃は近くにいる店員に声をかける。

店員は仕事の手を休め、信乃のところに駆け寄り、どうしたのかと尋ねられ、信乃は目的の雑誌を店員に見せた。

「たしか、特大ポスターが付録についてるはずなんですけど」

信乃がそういうと、店員は確認のために、雑誌を見る。表紙には『特大Ａ２ポスター』と大々的に記載されていた。

Ａ２ポスターはＡ３サイズの紙が縦に二枚並んだサイズであり、本のサイズはよく見る雑誌のサイズなので、折り畳まれた状態で本に挟まれるのが殆どである。

挟んだ分、雑誌が膨らんでいないといけないのだが、そのような膨らみはなかった。

店員が店の奥に入ると、数分ほどで戻ってきた。

その表情は申し訳ないような表情を浮かべている。

「すみません。どうやら紛失してしまっているようで」

そう云われ、信乃は文句を言ってやろうと思ったが、

「いや大丈夫です。他の本屋で探してみますから」

そういって、頭を下げると店を出た。

――そして、店を出るや、大きくため息を吐いた。

彼女が目的の本が買えなかったというのではなく、色々と本屋を回っていたのだが、殆どが売り切れという結果であり、漸く見付けたのが先ほどの本であったのだが、本があっても、目的のポスターがないのでは価値観に雲泥の差であった。

『ネット予約しとけばよかったかなぁ』

そう呟きながら、途方に暮れる信乃であった。

『いっその事、オークションでポスターだけ落とすって手も……』

そう考えたが、想像以上に高かったらどうしようかと気が重たくなっていた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「夢ですか？」

稲妻神社の母屋の一階にある居間で、皐月と弥生が首を傾げながら、阿弥陀警部と佐々木刑事の質問を聞き返していた。

警察の二人が尋ねに来た目的は例によって例なので、省略する。

――というのも、既に葉月の霊視も終了しており、今は部屋隅で毛布に包まって眠っていた。

「ええ。近藤武蔵は自殺する前、何かしらの夢を見ていた。そして夢遊病状態で窓から飛び降りたんですよ」

「なんか飛ぶ夢でも見てたんじゃないですか？」

皐月がそう尋ねると、佐々木刑事は少しばかり頷く。

「皐月ちゃんのいうとおり、そう考えられんわけでもないんじゃが……　母親の話だと、通報前に部屋から大きな物音がしたらしんだが、特に荒らされた後もなかったんじゃよな」

「鑑識の話でも、特に不審なものや第三者の指紋は発見されていませんしね」

阿弥陀警部がそう云うと、葉月を一瞥する。

「納得しとらんようじゃな？」

拓蔵が尋ねると、阿弥陀警部は頭を振った。

「いや、葉月さんの霊視は間違っていないと思いますよ。何も聞こえなかったみたいですからね。それに私たちは自殺するところを目撃している」

「薬物をやっていたという検死結果もなし。完全に夢遊病によるもの――　おそらく窓から空に飛び出す夢でも見ていたんでしょうな」

佐々木刑事がそういうと、

「でも、起きないって云うのが可笑しくないですか？」

皐月がそういうと、阿弥陀警部と佐々木刑事は答えるように頷いた。

「確かにそうよね？　夢を見ていたってことは本人が生きていた証拠なんだし、夢遊病だって、死んでたんじゃ出来ないでしょ？」

弥生もその違和感に気付いていた。

「兎にも角にも、起きなかったことに違和感があるんですよ。まるで夢の中で亡くなったみたいな」

阿弥陀警部がそういうと、皐月と弥生は目を点にした。

「ど、どうかしたんですか？　鳩が豆鉄砲食らったような顔をして」

阿弥陀警部は首を傾げ、そう二人に尋ねる。

「いや、だって、目が動いていたってことは、夢を見てたってことになるんですよね？　それに、死亡推定時刻は自殺した午前４時３０分くらいだって、阿弥陀警部が言ってたじゃないですか？」

弥生がそう聞き返すと、阿弥陀警部は「そうですけど？」と答える。

「さっきの言葉じゃ、まるで夢の中で死んだ人間が現実でも死んだって云ってるようなものじゃないですか？」

そう云われ、阿弥陀警部は

「確かに夢の中で人を殺すなんてことできる訳がないですからね」
三人が話している中、拓蔵は眉を顰めながら、考えことをしていた。

「どうかしたんですか？　先輩」
「阿弥陀警部の言葉も、強ち間違いではない気もするんじゃよな」
拓蔵がそういうと、阿弥陀警部は首を傾げた。
「――と、云いますと？」
「いや、これはわしの思い過ごしかもしれんがな？　生きている人間がまったく反応しなかったということは、一時的な植物人間だったという考えも出来るんじゃないかと思ったんじゃが」
「確か、脳に異常が起きてしまい、体が動かすことが出来なくなってしまう不治の病でしたね」
佐々木刑事がそういうと、皐月はどういうものなのかと尋ねた。
「正式名は遷延性意識障害といって、重度の昏睡状態を指した病名なんじゃよ。脳死というものは皐月ちゃんたちも知っておるじゃろ？」
「心臓や肺が動いているにも拘らず、脳が死んでいることでしたよね？　確か医者でも判断するのが難しいって」
「遷延性意識障害もそれに近いもので、生きとるが、殆ど反応を示さないものなんじゃよ」
「それに目が動いていたってことは、そうとは限らないんじゃ？」
「いや、眼球が動いていても、認識することは出来ないとも云われておるんじゃよ。つまり阿弥陀警部や佐々木刑事の言葉を纏めると、まったく反応していなかったにも拘らず、眼球が動いていた」
「それじゃ、爺様は自殺した近藤武蔵が、一時的な植物人間だったかもしれないって考えてるの？」
皐月がそう尋ねると、拓蔵は腕を組むや、少しばかり唸った。
「まぁ、思い過ごしかもしれんし、当てになるものでもないんじゃ

がなぁ」
「でもレム睡眠状態でしか見れないはずの夢を見ていたとすれば、私たちの呼びかけに反応しなかったのも、考えられますね」
阿弥陀警部がそういうが、拓蔵は難しい表情を浮かべるだけで、答えはしなかった。

――その夜分のことである。
窓から差し込む月明かりに照らされた薄暗い部屋の隅に、スタンドライトの淡いオレンジの色だけが点されている。
そんな中、「おわったぁ」と、信乃は腕を伸ばしていた。
机の上には勉強道具一式が広がっており、信乃は一息つくと、それらを鞄の中に仕舞い込んだ。
「赤点取ったのだって、部活で忙しかったし、夏休み明けの抜き打ちテストって、鬼かっての」
信乃が愚痴を零しているが、勉強が足りなかったのも事実なので、それ以上そのことには触れようともしなかった。
先ほど終えたのも、本来の宿題とは別の、抜き打ちテストで出された問題の答え合わせみたいなものであった。

「さてと、そろそろしたら始まるかな……」
云うや、信乃はＴＶの電源を入れた。
音を極力聞こえるまでに下げ、ＤＶＤレコーダーの予約確認をする。
「明日も早いから、リアルタイムで見れないのが辛いんだよなぁ」
そう云いながら、ＴＶの電源を切り、机の上にあるスタンドライトの明かりも消した。

『今日こそ、何もありませんように』
そう願いながら、信乃は目を瞑り、眠りに就いた。

――翌朝になっても、信乃が起きてくることはなかった。

肆・見得

福祠中学校にある剣道や柔道などに使われる特別教室で、当校の女子剣道部と福祠北中の女子剣道部の練習試合が行われようとしていた。

試合観戦をしている生徒たちの中、一人だけ不思議そうな表情を浮かべていた。

「あれ、信乃は？」

福祠北中剣道部の中に、信乃の姿が見えないことに皐月は首を傾げていた。

「なんか今日は学校休んでるって」

試合に出ない福祠中剣道部の部員がそういうや「あの信乃が？」と皐月は驚いた表情を浮かべた。

「あの信乃がねぇ……」

そう考えながら、皐月は試合の結果を見る。

本来剣道の試合にて、団体戦は先鋒の勝敗で流れが大きく異なっていく。

以前練習試合をした時は、信乃が福祠中剣道部員らを言い包めての勝ち抜きであったため、福祠中剣道部員は信乃に手も足も出せなかった。

しかし、今回は勝者数での勝敗となっている。

まじめに練習している福祠中とは違い、殆ど信乃に任せっきりだった福祠北中はボロ負けの結果で試合は終了した。

「ったく、鳴狗のやつが学校休んだのがいけねぇんだよ」

福祠北中の生徒がそう愚痴を零す。
「そうそう、うちらかったるいんだよねぇ。本気でやるなんてどうかしてるわ」
ひとり、またひとりと信乃に対しての愚痴を零していた。
「それにさぁ、剣道が強くなってどうするっての？」
「こんままばっくれない？」
そう云うや、「お、いいね」と他の部員たちも同意していく。

「弱い犬ほどよく吠える……」
皐月がそう呟くと、福祠北中剣道部員がそちらを見やった。
「はぁ、なんだよ？　あんたうちらに文句があるわけ？」
云うや、一人が皐月に詰め寄る。
「やめときなよ。そいつ前に信乃と勝負した時、ズルして勝ったやつなんだから」
部員の一人が笑いながらそういうと、
「ああ、そうだそうだ。ズルしたやつにいわれたくないわね」
皐月を突き飛ばし、部員たちは笑いながら教室を出て行くと――

「だったら、あんたたち全員でかかってきなさいよっ！！」

皐月が吼えるや、その場が一瞬でシンとした静寂が訪れた。
「いま、なんていった？」
福祠北中剣道部員全員が皐月を睨みつける。
「わたしはズルなんてしてないし、ズルができるほど器用貧乏じゃない」
「はぁ？　何いってんの？　あんたなんかが信乃に勝てるわけないでしょ？」
「だったら、あんたたちは信乃の本気を知ってるわけ？」
「し、知ってるに決まってるでしょ？　だって部員なのよ？」
部員の一人が戸惑いながらそう云うと、皐月は小さく笑みを浮か

べる。

「あんたたちみたいな真面目にやらない人間が束になったって、信乃はおろか、私にさえ一本も取れりゃしないわよ」

「あああああああああああああああっ！！」

皐月の言葉にプチ切れた部員の一人が竹刀を手に取り、それを大きく振り下ろした。

床に竹刀が叩かれ、劈くような音が教室内に響き渡った。

「ほら、これで大人しく……」

笑みを浮かべながら、部員は顔を挙げるや、そこには皐月の姿はなく、二歩ほど下がった場所で、皐月は片目を薄く開きながら余裕綽々と云った笑みを浮かべていた。

「そんなのが、信乃に文句云ってるわけ？」

「こんの！　くぅそあまぁあああああああああああ！！」

もはや感情に任せ、我武者羅（がむしゃら）に竹刀を振り回すが、皐月は既（すんで）の所でかわしていく。

「ぜぇ、ぜぇ」と部員はまだ一分も振り回していないのに、肩で息をしていた。

「基礎体力が出来てない。それじゃぁ少なくとも先鋒の人にだって負けるわよ」

「やぁかぁまぁしゃぁあああああああああ」

叫ぶと、大きく竹刀を振り下ろし、皐月の頭を叩きのめした。

部員の足元で皐月がうつ伏せになって倒れており、頭から血を流している。

よく見ると、竹刀は折られ、先が尖っていた。おそらく振り回しているうちに折れてしまったのだろう。

「はっ！？　云うだけ云って、負けたんじゃ――」

部員が引き攣った表情で笑いながら、皐月を見下ろした。

そして徐々にその表情は青褪めていく――

「さてと……　私は全員でかかってきなさいって云ったわよね？」
　ムクリと起き上がった皐月が上目遣いで福祠北中剣道部員全員を睨みつける。
　その相貌は禍々しく、その場にいた全員が皐月に戦慄いていた。
　皐月に竹刀で叩きつけた女子部員はガタガタと歯を震わせている。
「どうしたの？　私は全員でこいって云ったのよ？　そんなことすら出来ないやつが！　私の目の前で、信乃の！　友達の悪口言ってんじゃないわよぉっ！！」
　皐月がそう叫ぶと、福祠北中剣道部員全員が腰を抜かし、その場にへたれ込んだ。
　中には失禁したものさえいる。

「――すまない」
　云うや、福祠北中剣道部顧問である布袋智輔が皐月に対して、深々と頭を下げる。
「鳴狗さんに対して、数々の無礼。彼女たちの代わりに詫びよう」
　布袋がそう云うと、皐月はゆっくりと布袋を見やる。
「なんで先生が謝るんですか？　悪いのはそいつらでしょ？　詫びなきゃいけないのはこいつらでしょ？　お門違いなことしないでください」
　皐月の表情は震えており、両目からは大粒の涙が零れ落ちていた。
「だが、彼女たちの練習を疎かにさせていたのは私の責任だ。――すまない」
　布袋はその場で土下座する。
「だから……　やめて……　私は……」
　皐月は震えた声で布袋に声をかける。
「お願いですから、顔を上げてください」
　皐月がそう云うと、布袋はゆっくりと顔を上げた。
「許してくれるのか？」

布袋がそう尋ねると、皐月は小さく頷いた。

皐月は布袋が謝ることに憤りを感じてはいた。悪いのは信乃の悪口を云った福祠北中剣道部員であり、顧問である布袋ではない。

それが頭の中で理解出来ているから、生徒を庇う行動も理解は出来ている。

だからこそ、皐月は頭の中がごちゃごちゃになって、今自分がどういう表情を浮かべているのか、あまりわかってはいなかった。

ただわかったことは、福祠北中の生徒が教室を出て行くまで、ジッと睨んでいたことだった。

「今日は、その……　すみませんでした」

福祠中の校門の前で、バスに乗り込もうとしている布袋に、福祠中剣道部の顧問である国崎が頭を下げる。

「いや、彼女の云うとおりですよ。鳴狗さんは本当にいい友達を持っている。友達のために感情的になれることはそうそうない」

そういうと、布袋はバスに乗り込み、ドアがゆっくりと閉められ、バスは走り去っていった。

そのバス車内のことである。

「なによ？　あの子……」

未だ震えが止まらないでいる女子部員が漸く口を開いた。

「大体さ？　本当のことを云っただけでしょ？」

皐月に対して一人一人が愚痴を零していく。

「好い加減にしないか！」

布袋がそう叱り付けるや、部員全員が布袋を見やる。

「黒川さんは君たちを叱ったんだ。もし君たちが本気でやっていたら、彼女は君たちに文句は云わなかったはずだ」

「ってもさぁ？　鳴狗が休んでいるのが」
「人のせいにするな！」
布袋は言葉を遮る。
「それにもし彼女が本気を出していたら、君たちは彼女の云うとおり、束になっても勝てはしなかった」
「な、何を云ってるんですか？　私たちは一応形だけでも剣道部の一員なんですよ？　あんな素人同然のやつに負けるわけないじゃないですか？」
「そもそも、今日の試合は何だ？　自分たちのことを棚に上げるんじゃない」
そう言われ、部員全員がぐうの音も出なかった。

「戻ったら、練習だ。バックれようなんて思うな」
布袋はそう言うや、運転席のほうへと向きなおす。
そんな布袋を見ながら、部員たちはその形相に身を震わせていた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「大丈夫？」
福祠中剣道部部長がそう皐月に声をかける。
「すみません。ついカッとなって」
「いいのよ。それに私だって、彼女たちの行いには甚だ頭にきてたからね。まるで馬鹿にしてるって感じで」
部長は皐月の頭を見やる。
「本当に大丈夫？　血は止まってるけど」
「大丈夫です。こんなの信乃に比べたら」
皐月はゆっくりと立ち上がる。
「ねぇ？　出来れば鳴狗さんのこと教えてくれない？　私も彼女と試合してわかったことがあるけど、彼女は口が悪いだけで私たちと真剣に勝負していた」

部長はそういうが、皐月は不服そうな表情を浮かべる。

「信乃はいつだって一生懸命で、ただそれが空回りするんです」
「空回りか……　でも、あなたはどうして友達のためにあんなことできたの？　もし布袋先生が止めなかったら」
「その時はその時ですから」
皐月がそう言うと、
「ねぇ、あなたうちに入る気はないの？」
「何度も言いますけど、私は剣道自体には――」
そう言おうとしたが、皐月が言うより前に部長が立ち上がり、奥の個室へと引っ込んでいった。
そして、三本の竹刀を手に持ち、長、短刀の二本を皐月に渡した。

「ちょっと軽くでいいから、私と付き合って」
そう言われ、皐月は戸惑いを隠せないでいる。
当の皐月は血が止まっているとはいえ、怪我をしている。正直病院に行ったほうがいいのだが、まるでいかなくても大丈夫といわんばかりの言い回しである。

皐月は観念し、ゆっくりと左手に短刀を、右手に長刀をそれぞれ手に持ち、静かに構えた。
本来の正二刀や逆二刀と違い、体の向きを横にし、長刀を相手に向け、短刀を下段に構えている。
「構えから教えたほうがいいかもね」
言うや、部長――金門刹那（かなとせつな）は右片手上段の構えを取る。
皐月はゆっくりと右、左と送り足をし、金門との間合いを詰めていくが、ちょうど長刀が届くほどの間合いで歩みを止めた。

「どうしたの？　もしかして怖気づいた？」
金門がそう尋ねるや、皐月が背中にゾワッと弥立つものを感じた

時だった。
「罪を罰するものは、たとえ友人であろうとその罪を償わせるべきである」
――金門は竹刀を振り下ろした。

「そうですか……　信乃は二日ほど前から目を覚まさないと」
金門の周りには、いくつかの霊魂が漂っている。
「彼女の件は真達羅から聞いてはいましたが、近藤武蔵の件と何か繋がりがあるかもしれません」
そう言うや、金門は少しばかり考え込み、
「もし阿弥陀如来さまが考えているとおり、近藤武蔵が夢の中で殺されていたとしたら、自分の力で解決する以外、外にいるものは手も足も出ないことになる」
そして、ゆっくりと床で気を失っている皐月を見遣るや、溜息を吐いた。
「さすがにちょっと遣り過ぎましたね。相手が地蔵菩薩さまの力を４分の１ほど持っているとはいえ、人と大差ない」
そう考えながら、金門は皐月を保健室へと運び込んだ。

保健室に運んでいる途中、金門はふと頭にある妖怪の姿が浮かび上がった。
（まさか……　いや、そうだったとしても、本来は悪夢を滅する妖怪のはず）
そう考えながら、金門は納得のいかない表情を浮かべていた。

伍・不帰（前書き）

不帰（ふき）：二度と帰ってこないこと。転じて、死ぬこと。

伍・不帰

教室の扉が音を立てて開き、そこから葉月が姿を現した。
それとほぼ同時に、浜路が隣の教室から姿を見せる。
それぞれが立てた音に気付き、そちらを見やると、
「葉月ちゃん、今帰り？」
浜時にそう尋ねられ、葉月は頷く。
「――市宮さんは？」
「美耶ちゃんは今日塾があるからって、先に帰ってったけど？」
葉月にそう言われ、浜路は少し考えると
「今日さ、弥生さんって遅い？」
そう訊かれ、葉月は首を傾げる。

「弥生おねえちゃんに何か用があるの？」
「信乃おねえちゃんのことでちょっと相談があるの」
「皐月おねえちゃんじゃ駄目なの？」
「皐月さんだと、信乃おねえちゃんとちょっとあるっていうか」
確かに信乃のことで皐月に相談するのは、少しばかり都合が悪い。
「多分夕方くらいには帰ってくると思うけど、でも信乃さんがどうかしたの？」
そう尋ねると、突然浜路が肩を震わせる。

「起きないの。一昨日からずっと……」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

弥生が家に戻ってきたのは、丁度夕方６時になろうとしていた時だった。
「あ、弥生おねえちゃん、お帰り」

居間にいた葉月がそういうと、弥生はただいまと返事を返した。
「あれ、浜路ちゃん？　もう帰らないと怒られるんじゃないの？」
葉月の隣に浜路が座っているのに気付いた弥生は、そう尋ねた。
「いや、今日は弥生に話があるといってな、話が済んだら送っていくつもりだ」
拓蔵がそう言うと、弥生は肩にかけていた鞄を床に置き、卓袱台の前に正座した。

「それで、私に訊きたいことって？」
「弥生さんって、隠れてる幽霊とか妖怪の気配がわかるんですよね？」
「まぁ、出来なくはないけど、それがどうかしたの？」
「信乃おねえちゃんの周りにそういうのいないかなって調べてほしいんです」
そうお願いされ、弥生は葉月を見やった。浜路の表情は真剣で、冗談を言ってるとは思えなかったからである。
「でも、信乃さんだったら、自分でどうにかできるんじゃないの？」
「それだったら、お願いには来ませんし、したらおねえちゃんに怒られるのわかってるけど……　でも、おねえちゃん、一昨日から目を覚まさないんです」
「――どういうこと？」
そう聞き返すと、浜路は事の件を説明した。

「爺様、この前阿弥陀警部たちが尋ねてきたことと似てない？」
「じゃが、信乃が起きた様子はないんじゃろ？」
そう言われ、浜路は頷いた。
「でも、何か呻き声みたいなのが部屋から聞こえてきて、心配になって部屋を覗いだら、今度は笑い声が聞こえて」
「何か夢を見てるって事？」
葉月にそう訊かれ、浜路は答えるように頷いた。

「しかし、それだけじゃなぁ」
拓蔵がそう言うと、葉月が拓蔵のほうを見るや、悲鳴を挙げた。
拓蔵の頭の上に小さな動物がいたからである。

「なんじゃ、誰かと思えば真達羅か？」
冷静にそう言うと、小さな動物――真達羅は呆れた表情を浮かべた。
「なんや、もう少しリアクションとってほしかったわなぁ、そんなんじゃお笑い界の一番星にはなれへんで？」
真達羅がそう言うと、
「地獄にお笑いとか必要なのか？」
「そりゃ必要やで、毎日しんどいからなぁ心のゆとりくらいあってもええやろ」
真達羅がそう言うと、拓蔵は呆れた表情で死んだらを見やった。
居た堪れなくなった真達羅は、一度咳払いをする。

「ほんで本題やけど、浜路ちゃんが言うてたとおり、信乃はんがここ何日か目を覚まさへんねん」
「でも若しかしたら、知らない間に起きてるってことも」
「わいがずっと見とったんや、それだけはない」
真達羅が自身満面に言う。
「でも真達羅って、確か薬師如来眷属の十二神将のひとつじゃ？」
「正確に言うとな、薬師如来はんの十二ある大願に応じて生まれた天部の神やな。因みにワイの本地は普賢菩薩ちゅう神様や」
「そんなことより、信乃さんが目を覚まさないのは本当のようね」
弥生がそう言うと、浜路は暗い表情を浮かべた。

「真達羅は弥勒菩薩に頼まれて信乃を監視しておったんじゃろ？
信乃に不審な行動はなかったのか？」
「いんや、いつもどおりビデオの予約してから寝たんやけど、それ

から起きんくなっとるんや」
「ビデオ？　何か予約してたの？」
「ああ、いつも夜中にやっとる番組なんやけど」
「夜中にねぇ――」
弥生がそう呟くと、突然廊下から誰かがクシャミする音が聞こえ、全員がそちらを見やった。

「皐月おねえちゃん」
浜路がそう言うと、帰ってきた皐月が居間に顔を覗かせる。
その途端――
「べぇっくしょん！　ふぇ、ふぁく……」
二度、三度と連続してクシャミをし、まるで花粉症患者が見せるような表情を浮かべていた。
「ちょ、ちょっと！　葉月ぃっ！　まさか家の中に猫入れてない？」
皐月が涙目でそう尋ねると、葉月は首を横に振った。
「嘘言わないでよ！　私がアレルギーなの知ってるでしょ？　ふぇっくしょん」
言葉の途中でクシャミをする。見れば顔には蕁麻疹（じんましん）が浮かび上がっていた。
「あれ？」と弥生が首を傾げる。
以前、拓蔵の知り合いである京本福介の家に行ったさい、その娘である雨音が隠れて猫を飼っていたことを思い出したが、自分たちが来たときにはすでに猫は死んでいたので、アレルギーが出るとは思えなかった。

「多分、真達羅のせいじゃろうなぁ」
拓蔵が頭上にいる真達羅を見やる。
「ってか、なにそれ？」
皐月がそう尋ねると、真達羅は拓蔵の頭上からヒョイと飛び降りるや、卓袱台の上に着地した。

「ワイの名は真達羅。薬師如来はんが作った地獄裁判をする際、亡者が現世で犯した罪を隈なく調べるのがワイら十二神将の仕事や」
「その十二神将がどうしてこんな……ふぇぇくしょん」
皐月は言葉の途中でクシャミをする。
「アンサンなぁ、人が話しとるときにクシャミやなんて、酷いやないん？」
「その原因はお前にあるんだがな？」
拓蔵がそう言うと、真達羅は首を傾げたような仕草をする。
「真達羅……　おぬし、十二支に譬えると何になる？」
「えっと、寅やけど？」
真達羅がそう言うと、弥生と葉月、そして浜路がハッとした表情を浮かべる。
「あ、もしかして……」
「な、なんや？　なんやの？　ゆうてぇなぁ」
真達羅がキョロキョロと周りを見る。その表情は焦っていた。
「トラはネコ化ヒョウ属に分類される肉食動物なんじゃよ」
拓蔵にそう言われ、真達羅は呆気に取られた表情を浮かべた。
つまり、ネコアレルギーである皐月がクシャミや蕁麻疹を出していたのは、真達羅が原因であり、皐月から2米ほど離れると、アレルギー症状は柔らいでいた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

信乃が目を覚まさないという件は、同じく十二神将の一人である因達羅の口を通して、海雪の耳にも届いていた。
「信乃さんが通っている学校の剣道部顧問をしている布袋智輔――弥勒菩薩さまからの報せによると、信乃さんが目を覚まさなくなったのは二日前。丁度、阿弥陀如来さまや佐々木刑事が神社に訪問した晩のようです」

「真達羅からの報告だと、霊気もなければ妖気もなかった」
「それと、同じく十二神将である伐折羅（ばさら）が今回の件、獏（ばく）という妖（あやかし）によるものという考えがあったそうなんですが」
因達羅が言葉を途中で止めたため、海雪はどうしたのかと尋ねた。
「よく獏は悪夢を見せる妖怪と云われていますが、実際はその逆で、悪夢を食べてくれる妖怪なんです」
それを聞くと、海雪は少しばかり考える仕草をし、
「確かに近藤武蔵が夢の中で殺されたことを考えると、信乃の件もそれに近いわけだし、そう考えられないわけじゃないわね。でも、そういう妖怪だったら、悪夢を見せるとは思え――」
海雪は言葉を止め、険しい表情を浮かべ、気配を探った。

そして、徐に虚空から大きな鎌を取り出し、それを手にもつや、
「凍雨（とうう）っ！」
云うや、鎌の刃が凍り、それが横一文字に振り回されると、ビュンという風の音が当たりに響き渡った。

「よくわかったわね？」
暗闇からスーと人が姿を表す。
その姿は黒のスーツを羽織った女性で、目だけが赤く光っていた。
「それだけ痛々しいほどの邪気を発してたんじゃ、いやでも気付くでしょ？」
「そう？　そこにいる雑魚は気付かなかったようだけど」
云うや女性――鴉天狗は因達羅を見やり、笑みを浮かべた。
その因達羅は額に汗を浮かばせながらも、小刀を手に持ち、構えを取っている。
「閻魔さまからの命令で、あんたを殺してでも地獄に連れ戻しなさいって言われてるんだけど」
海雪は鎌を振り回し、構え直す。
「いったいどんな大罪を犯したのか知らないけど、素直にお縄を頂

戴しなさい！」

云うや、鎌を大きく振り翳し、鴉天狗目掛けて振り下ろした。

『諷詠・馬耳東風』『諷喩・風樹の嘆』

海雪の放った一刀の先には何もなく、代わりに海雪と因達羅の周りには無数の羽根が二人を囲っていた。

それは四方八方天地と逃げ場はない。

「一歩でも動いたら、羽根があなたたちの体を突き破るわよ？」

鴉天狗が笑みを浮かべながら云う。

海雪はスッと鎌をダラリと下ろし、

「不遣雨……」

海雪がそう告げると、大粒の雨が降りはじめ、周りの羽根を濡らしていく。

「そんなことをしてもムダァ、殺されたいようだから、さっさと……」

鴉天狗が焦った表情を浮かべ、指示を示すかのように指を動かしている。

「な、なんでよぉ？　どうして云うことを聞かないの？」

どこからともなく、月明かりが差込み、海雪と因達羅の周りを照らした。

そこには確かに鴉天狗の放った無数の羽根があった。――が、そのすべてが凍りついていた。

「あんた、氷雨って知ってる？　その言葉どおり、空から降ってくる氷の粒のこと。一般的には霰や雹のことを云うんだけど、冬に降る冷たい雨も氷雨って云うの。だから氷雨は夏と冬の季語でもあるのよ」

そう云うや、海雪は鎌を構え直し、辺りに舞った凍り付いた羽根を一瞬のうちに砕いた。

その氷の破片が海雪や因達羅の周りに飛び散る。
その景色はまるで氷雨のようであった。

「いったいどうやって？」
「簡単よ。地上の気温と空の気温は６０度も違って、ちょっとした水でもすぐに凍りつく」
「それはあんたたちも一緒でしょ？」
鴉天狗がそう言うと、
「私たちは元から存在しないから――」
答えるように因達羅がそう言うと、持っていた小刀を鴉天狗の首目掛けて切りかかった。
「っ！　飜（ひるがえる）」
鴉天狗の背中から羽が生え、身を覆うように羽が閉じる。
その羽は硬く、因達羅の小刀を弾き飛ばした。

――オン　ソラソバティエイ　ソワカ――

その言葉を聞くや、鴉天狗は羽を少し広げ、その隙間から海雪を見やる。
海雪は鎌を縦横無尽に振り回し、視線を鴉天狗一点に集中させていた。
そして鎌の動きが止まるや――そこに海雪の姿はなく、まるで大きな力で自分の体を突き落とされる感覚を鴉天狗が感じた刹那、背中から衝撃を与えられた痛みと同時に、口から大量の血が包まった羽の中で飛び散った。
その一滴、一滴が彼女の顔に飛び散る。
「あ、がぁ、あがぁが」
ゆっくりと羽が広げられ、鴉天狗は顔についた自分の血を掃（はら）ったときである。

――ナウマク　サマンダボダナン　インダラヤ　ソワカ――

因達羅がそう呟き、小刀を構えなおす。

「ちょ、ちょっと……　それって帝釈天の真言じゃ……」

鴉天狗がそう訊くと、

「元より私の別称は『帝釈天』」

因達羅は小刀を振り翳し、鴉天狗目掛けて投げ付けた。

鴉天狗はもう一度羽を丸め、身を守ろうとしたが、小刀は鴉天狗の体ではなく、羽に突き刺さり、一瞬にして、灰と化した。

「金剛杵（こんごうしょ）があなたを纏った邪気を滅ぼす」

そう云うや、地面に突き刺さった小刀が自分から抜け、因達羅の手元に戻り、もう一方の羽に突き刺さり、灰と化していく。

「地獄から脱獄したものは、今まで以上の罰を受けなければいけない」

因達羅が鴉天狗を蔑視する。

「元より、あんなところにいたときよりも、地獄にいたほうが、私にとっては天国だから、どんな罰を与えられようが、耐えられる！」

鴉天狗はふらふらとしながらも立ち上がり、刀を構えた。

「……颶風（つむじかぜ）ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」

「Ｐｒｅｓｔｏ　ｃｏｎ　ｆｕｏｃｏ」

海雪が鎌を大きく振り翳すと、刃は真っ赤に染まり、炎を纏った。

「炎が風に勝てるとでも思う？」

鴉天狗が咆哮を挙げ、海雪を切り刻む。

「ｐｅｒｄｅｎｄｏｓｉ」

海雪がそう呟くと、刃が纏った炎は鎮火する。それはちょうど鴉天狗の放った風が炎を消し飛ばそうとしたときであった。

「ｐｅｓａｎｔｅ」

刃が鴉天狗の体に突き刺さり、海雪が鎌の柄から手を離すと、鴉天狗の体が突き落とされる。

再び地面に叩きつけられた鴉天狗はジタバタと、体に突き刺さった鎌を外そうとしたが、
「な、なによぉ、これぇ……？　なんでこんなに重たっ！　げぇほぉっ」
地面にはりつけられた鴉天狗を、上空から海雪と因達羅が見下ろす。

「閻獄第八条――」
海雪が礼状を云おうとしたとき、一瞬彼女は焦りとも同情とも取れる曖昧な表情を浮かべた。
そして徐に突き刺さっていた鎌を自分の元に戻した。
その行動に因達羅はおろか、鴉天狗も理解できないといった表情を浮かべている。

「み、海雪さん？」
因達羅が尋ねるが、海雪は彼女にではなく、鴉天狗に視線を送っていた。
「……っ」
鴉天狗は逃げるようにスーと姿をくらます。
「まっ、待ちな――」
因達羅が後を追おうとしたが、海雪がそれを制す。
「み、海雪さん。いったいどうしたんですか？」
「ひとつ教えて。鴉天狗がまだ生きていたとき、彼女が犯した罪はなんだったの？」
海雪がそう尋ねると、因達羅は少しばかり躊躇った表情を浮かべたが、やがて口を広げ、海雪に教えた。
そして、海雪は鴉天狗が現世で犯した大罪を悔やみ、同情した。

それはまるで自分のことのように――――

陸・転（前書き）

転（うたて）：自分の心情とは関係なく、事態がどんどん進んでいくさま。

陸・転

セピア調の景色の中、一人の少女を『秋桜（コスモス）』柄の首輪をはめたダックスフンドが追いかけている。
「ほら、ユズっ！　こっち」
少女がそう言うと、ユズは小さな尻尾を振りながら、少女の後を追っている。
ユズが少女の足元に辿り着き、そこをグルグルと駆け回る。
「ユズ、落ち着いて」
少女は膝を曲げ、ユズを抱えあげる。
ユズは舌を出し、少女の頬を舐める。
「ちょ、ちょっとユズ、くすぐったいよ」
少女は微笑を挙げ、首輪に紐をつけようとしたときだった。

グワンと景色が歪み、赫々とした景色が広がっていく。
そして少女の手が濡れ始め、少女はそちらを見やると、
「いやぁあああああああああああああっ！！」
悲鳴を挙げ、手に持っていたユズを地面に落とした。
ユズの身体は爛れ、骨を露にしている。
少女の手は赤く染まっており、それがユズの血であることは、少女は理解できた。
「い、いやぁ……　ユズゥ　ユズゥ」
少女は震えた声で反応するはずもない死体に声をかける。

「もし……　もし自分があの時紐を外さなかったら、ユズはこんな目に遭わなかったんじゃないか」
うしろから声が聞こえ、少女――信乃はそちらを見やった。
そこには体は熊、鼻は象、目は犀、尾は牛、脚は虎といった奇妙

な姿をした動物が信乃を見つめていた。
「あんた……　なんなの？」
信乃がそう尋ねると、
「人は過去を変えることはできない。いや、できるはずがない。束縛された過去ほど人を狂わせる」
「何わかったようなこといってんのよ？　まさか……　ユズを殺したのって」
そう言うや、信乃は近くにあった棒切れを手に持ち、構えた。

「ユズの仇ぃいいいいいいいいいいいいいっ！！」
信乃が咆哮を挙げ、得体の知れない化け物に一刀を加える。
「うしっ」
手応えありといわんばかりに、信乃は笑みを零したが、目の前の化け物が雲が途切れるかのようにスーと消えた。
「どうした？　おまえの実力はその程度か？」
化け物はゆっくりと信乃に問いかける。
「っざけるなぁあああああああっ！」
信乃はもう一度一刀を放とうとしたが、ボロボロと棒切れは腐食する。
それどころか、その腐敗が信乃の腕にまで侵食していく。
「っ！？」
その場に跪いた信乃は、腐り落ちる自分の右腕に恐怖し、絶叫する。

「さぁ、おまえもあの犬畜生と一緒に喰らってやろうか？」
化け物は大きく口を開ける。信乃の身体など悠々と喰らいつけられるほどに大きい。
信乃の目の前は真っ暗になり、辺りには何もない。
そして――骨が砕ける音が信乃の耳元で響き渡った。

「……っ！」
信乃が目を覚ますと、再び景色はセピア色に染まっている。
信乃は起き上がり、辺りを見渡すと、どこからともなく犬の鳴き声が聞こえてきた。
「ユズ？」
信乃がそう言うと、ユズは信乃の近くで尻尾を振りながら、信乃を見上げた。
信乃は戸惑いながらも膝を曲げ、ユズを抱える。
「ユズ。もう帰ろう」
信乃がそう言うと、ユズの口が大きく裂け、信乃の首元を喰らいつく。
突然のことで気が動転した信乃は仰向けになって倒れると、ユズは容赦なく音を立てるように信乃の首を喰らい千切った。

「……っ？」
再び信乃が目を覚ます。大きく見開いた目は焦点があっておらず、恐怖に震えあがっている。
そして、どこからか犬の鳴き声が聞こえてきた。――ユズである。
「いぃやぁ……　いやぁ……　もう――　もうやめて」
腰を抜かした信乃は自分に近寄ってくるユズを拒んだ。
ユズは何も変わらず、小さな尻尾を振っている。
信乃は逃げるように後退りすると、背中に何かが当たった。
信乃がゆっくりとそちらを一瞥すると――
そこには人でもなく、動物でもない。はっきりいってどう説明すればいいのかわからない無数の肉塊（にっかい）が信乃をおどろおどろしい視線で見下ろしている。
「あああああああああああああああっ！！」
信乃は悲鳴を挙げ、死に物狂いでその場から逃げようとしたが肉塊に身体を覆われ、骨が軋み、肉が引き裂かれる音が彼女の耳元で響きわたっていく。

「っ……」

三度（みたび）、信乃は目を覚まし、辺りを警戒する。

そして再びユズの鳴き声が聞こえ、信乃は悲鳴を挙げていく。

彼女の周りには狂うほどに歪んだ口と目があることに、彼女は気付けずにいた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「仮に伐折羅が思ったことが本当だったとしたら、近藤武蔵が自殺したことが妖怪による仕業となるな」

十王の一人である平等王（びょうどうおう）が頬杖をつきながら、目の前で跪いている因達羅を見やる。

「薬師如来が行った検死結果では、被害者が薬物を遣ったという形跡はなく、阿弥陀如来が調べたことには自殺をするような雰囲気はなかった」

「学校では優秀だったようで、人に頼まれてはいましたが、いじめという可能性は低かったようです」

「つまり、それを苦に自殺をするというのはなかった」

地蔵菩薩――瑠璃がそう言うと、平等王――観音菩薩は少しばかり唸り声を挙げた。

「それに母親に不審な行動はなかったのかという問いに対して、特に何もなかったようです」

「そうなると、阿弥陀如来や伐折羅が考えていることが、いよいよ視野に入れられていくな」

観音菩薩がそう言うと、瑠璃は少しばかり戸惑った表情を浮かべる。それに対して観音菩薩が尋ねると――

「獏は元々中国から伝えられた妖怪で、現地での言い伝えによれば、獏の毛皮を座布団や布団に用いると厄病や悪気を追い払い、獏の絵

を守りにすると邪気を祓ってくれるという伝えがありましたが、悪夢を食らうというのは日本に伝来してからとされています」

瑠璃がそう説明すると、観音菩薩は少しばかり笑みを浮かべる。

それに対して瑠璃は不満そうな表情を浮かべた。

「それはあの身分知らずから教えてもらった雑学か？」

「確かに身分違いですが、拓蔵をそのような風に云うと、たとえあなたでも許しませんよ」

そう言うと、観音菩薩はクククと笑みを零した。

「いやいや、旦那のことを馬鹿にされて腹を立てない妻は既に終わっている」

そう云うや、観音菩薩は部屋の周りを見渡した。

「して、因達羅？　一緒にいるはずである脱衣婆の姿がありませんが？」

観音菩薩がそう尋ねると、因達羅は戸惑った表情を浮かべた。

「彼女には反省してもらっています。一時的な感情とはいえ、鴉天狗を見過ごしていますからね」

瑠璃がそう言うと、観音菩薩は首を傾げた。

「彼女のことを考えたら、見過ごしても仕方のないことではないのか？」

「公私混同はご法度ではありませんか？」

そう聞き返され、観音菩薩は溜息を吐いた。

「鴉天狗が犯した罪と海雪が犯した罪は確かに同等です。しかしだからといって、見過ごしていいという理由にはならない」

瑠璃は二の腕を掴み、視線を落とす。

「違いがあるとすれば、死を悔やんでくれた人がいること……じゃな？」

そう尋ねると、瑠璃は小さく頷いた。

「もし彼女にもそのような人がいたとしたら、このようなことはし

なかったのではないかとも思っておろう」
「私は子を思わない親が嫌いなだけです。身が引き裂かれるほどの苦痛に耐えて生んだはずの子供なのに、なぜそのような事ができるのか――　彼女がしたことは同感さえしますし、仕方のないことだとも理解できます」
瑠璃の声は徐々にトーンを低くしていく。
「彼女の死体は今思い出しても吐き気がします。もし私が神ではなく人だったら、ぶん殴ってますよ。あの母親を！」
瑠璃はそういい捨てると、部屋を出て行った。

因達羅は立ち上がり、部屋のドアと観音菩薩を交互に見渡す。
「瑠璃が荒れるのは納得がいくな。それにどうして海雪を皐月と信乃の監視にしたのかは……　いや、今となっては彼女が命じた事ではない」
観音菩薩はゆっくりと席を外し、因達羅の肩に手を置いた。
「引き続き、海雪とともに行動してやってくれ。鴉天狗の件は大威徳やその従者である摩虎羅、それに他の十二神将たちも調べておるから心配するな」
観音菩薩はそう言うと、部屋を出て行った。

地獄裁判を行う裁判所へと向かう際、観音菩薩は小さな人魂に声をかける。
「虚空蔵菩薩の件、どうなっている？」
「今のところ妙な動きはなく、法界王（ほうかいおう）として三十三回忌の裁判を執り行っております。従者である珊底羅（さんちら）も同様に目立った動きはありません」
「彼が何を考えているのかは知りませんが、こちらに被害がなければいいのですけどね」
観音菩薩は虚空蔵菩薩の監視を従者であり、十二神将の一人である安底羅（あんちら）に引き続き監視をするよう命じた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0221r/

姦～霊能三姉妹の怪奇事件簿～

2011年12月29日02時54分発行